

# 金色夜叉

尾崎紅葉

青空文庫



## 前編

## 第一章

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、真直に長く東より  
 西に横はれる大道は掃きたるやうに物の影を留めず、いと寂く  
 も往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輶は、或は忙かりし、  
 或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠

響<sup>き</sup>は、はや今日に尽きぬる三箇<sup>さん</sup>日を惜むが如く、その哀切<sup>あはれき</sup>に小<sup>ち</sup>き腸<sup>ひはら</sup>は断<sup>わ</sup>れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌<sup>しる</sup>されたる日記を流<sup>け</sup>して、この黄<sup>た</sup>昏<sup>そ</sup>より夙<sup>こ</sup>は戦<sup>そ</sup>出<sup>よ</sup>でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と

優<sup>き</sup>き声<sup>な</sup>の宥<sup>な</sup>むる者無きより、憤<sup>い</sup>をも増したるやうに飾<sup>か</sup>竹<sup>ざり</sup>を吹<sup>ふ</sup>

靡<sup>きな</sup>けつつ、乾<sup>か</sup>びたる葉<sup>は</sup>を粗<sup>は</sup>なげに鳴して、吼<sup>ほ</sup>えては走<sup>は</sup>行<sup>し</sup>き、

狂<sup>きやう</sup>ひては引返し、揉<sup>も</sup>みに揉<sup>も</sup>んで独<sup>ひと</sup>り散<sup>さん</sup>々に騒<sup>さわ</sup>げり。微<sup>ほ</sup>曇<sup>の</sup>りし空<sup>くう</sup>

はこれ<sup>あ</sup>が為<sup>ら</sup>に眠<sup>ね</sup>を覚<sup>さ</sup>されたる気<sup>け</sup>色<sup>しき</sup>にて、銀<sup>ぎん</sup>梨<sup>なし</sup>子<sup>ち</sup>地<sup>ち</sup>の如<sup>ごと</sup>く無<sup>む</sup>数<sup>すう</sup>の星<sup>せい</sup>

を顕<sup>あら</sup>して、鋭<sup>さ</sup>く冴<sup>さ</sup>えたる光<sup>ひかり</sup>は寒<sup>かん</sup>氣<sup>き</sup>を発<sup>は</sup>つかと想<sup>おも</sup>はしむるまでに、

その薄<sup>うす</sup>明<sup>あかり</sup>に曝<sup>さら</sup>さるる夜<sup>よ</sup>の街<sup>まち</sup>は殆<sup>ち</sup>ど氷<sup>こ</sup>らんとすなり。

人<sup>うち</sup>この裏<sup>うら</sup>に立ちて寥<sup>り</sup>々<sup>よう</sup>冥<sup>めい</sup>々<sup>めい</sup>たる四<sup>し</sup>望<sup>ぼう</sup>の間に、争<sup>いか</sup>か那<sup>な</sup>

の世間あり、社会あり、都あり、町あることを想得べき、  
九 きゆううち

重ようの天、八はつ際さいの地、始めて混こん沌とんの境さかひを出いでたりといへども、

万物未だ尽く化生せず、風は試こころみに吹き、星は新に輝ける一大荒原

の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯ただみだり濫ひろに邈よこたく横は

れるに過ぎざる哉かな。日うちの中は宛さながら然沸くが如く楽み、謳うたひ、酔よひ、

戯たはむれ、飲よろこび、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚はかなくも夏果てし

子ぼうふり子の形を斂をさめて、今いまはたいづく将何処いかに如何いかにして在るかを疑はざら

んとするも難かたからずや。多しばらく時静なりし後のち、遙に拍子木の音は聞

えぬ。その響の消ゆる頃忽ち一点の燈火ともしびは見え初めしが、揺ゆらゆ

々と町の尽頭はづれを横截よこぎりて失せぬ。再び寒き風さびしは寂き星月夜ほしいままを擅

に吹くのみなりけり。唯とあ有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂ひあはひ間

の下水口より噴出<sup>ふきい</sup>づる湯気は一団の白き雲を舞立てて、心地悪<sup>ぬくもり</sup>き微温<sup>あふ</sup>の四方に溢るとともに、垢臭<sup>あかくさ</sup>き悪<sup>さか</sup>氣の盛<sup>ぼし</sup>に迸<sup>あ</sup>るに遭へる綱引の車あり。勢<sup>かど</sup>ひで角より曲り来にければ、避くべき<sup>いとまな</sup>違<sup>な</sup>無<sup>な</sup>くてその中を駈<sup>かけぬ</sup>抜<sup>ぬ</sup>けたり。

「うむ、臭い」

車の上に声して行過ぎし跡には、葉卷の吸殻の捨てたるが赤く見えて煙れり。

「もう湯は抜けるのかな」

「へい、松の内は早仕舞でございます」

車夫のかく答へし後は語絶<sup>ことば</sup>えて、車は驀<sup>ましぐら</sup>直に走れり、紳士は二重<sup>にじゅうがいとう</sup>外套<sup>そで</sup>の袖を袴<sup>ひし</sup>と掻<sup>かき</sup>合<sup>あ</sup>せて、獺<sup>かはうそ</sup>の衿<sup>えり</sup>皮<sup>かは</sup>の内に耳より深

おもてうづ  
く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横  
縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花  
文字を二個組合せたるなり。行き行きて車はこの小路の尽頭を北  
に折れ、稍広き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、その南側  
の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、剡竹を飾れる門  
構の内に挽入れたり。玄関の障子に燈影の映しながら、格子  
は鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「頼む、頼む」

奥の方なる響動の劇きに紛れて、取合はんともせざりければ、  
二人の車夫は声を合せて訪ひつつ、格子戸を連打にすれば、  
やがて急足の音立てて人は出で来ぬ。

まるわけ 円 鬚に結びたる四十ばかりのちひさや小く瘦せて色白き女の、茶ちや微みじ塵じんの糸織こそでの小袖に黒の奉書ほうしよつむぎ紬の紋付の羽織着たるは、この家の内儀ないぎなるべし。彼の忙せはしげに格子をあく啓るを待ちて、紳士は優然と内に入らんとせしが、土間の一面に充満みちみちたる履物はきものの杖つゑを立つべき地さへあらざるに遅ためらへるを、彼は虚すかさず勤篤まめやかに下立おりたちて、この敬ふべき賓まらうどの為に辛からくも一条の道を開けり。かくて紳士の脱捨こまげたてし駒下駄ひとのみは独り障子の内に入られたり。

## (一) の二

箕輪みのわの奥は十畳の客間と八畳の中の間まとを打抜きて、広間の十じ



つかしよ  
 個処に真鍮の燭台を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁  
 さりび  
 火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空気ラムプを  
 とも  
 点したれば、四辺は真昼より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。  
 あたり  
 三十人に余んぬる若き男女は一分に輪作りて、今を盛と歌  
 るたあそびす  
 留多遊を為るなりけり。蠟燭の焰と炭火の熱と多人数の熱蒸と  
 うんき  
 混じたる一種の温気は殆ど凝りて動かざる一間の内を、莚の煙と  
 ともしび  
 燈火の油煙とは更に纏れて渦巻きつつ立迷へり。込合へる人々  
 おもて  
 の面は皆赤うなりて、白粉の薄剥げたるあり、髪は解れたるあ  
 きぬ  
 り、衣の乱次く着顔れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取乱した  
 こと  
 るが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで  
 ちよつき  
 胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帯の解けたる尻を突出

すもあり、十の指をば四<sup>よつ</sup>まで紙にて結<sup>ゆ</sup>ひたるもあり。さしも息苦<sup>うんき</sup>き温<sup>むせ</sup>氣も、咽<sup>ののし</sup>ばさるる煙<sup>けふり</sup>の渦も、皆狂して知らざる如く、寧<sup>むし</sup>ろ喜<sup>む</sup>びて罵<sup>ののし</sup>り喚<sup>わめ</sup>く声、笑<sup>わらひくづ</sup>顔<sup>ねちあ</sup>る声、振<sup>ふみしだ</sup>合<sup>ひしめ</sup>ひ、踏<sup>たはむ</sup>破<sup>む</sup>く袴<sup>はかま</sup>き、一<sup>いち</sup>齊<sup>せい</sup>に揚<sup>どよみ</sup>ぐる響<sup>う</sup>動<sup>どう</sup>など、絶<sup>うち</sup>間<sup>ま</sup>無<sup>む</sup>き騷<sup>さう</sup>動<sup>どう</sup>の中に狼<sup>ろう</sup>藉<sup>ぜき</sup>として戯<sup>たはむ</sup>れ遊<sup>あそ</sup>ぶ為<sup>ため</sup>いたらく<sup>いたらく</sup>体<sup>てい</sup>は三<sup>さん</sup>綱<sup>こう</sup>五<sup>ご</sup>常<sup>じょう</sup>も糸<sup>へちま</sup>瓜<sup>うり</sup>の皮<sup>かわ</sup>と地<sup>ち</sup>に塗<sup>ま</sup>びて、唯<sup>ただ</sup>これ修<sup>しゆ</sup>羅<sup>ら</sup>道<sup>どう</sup>を打<sup>ぶ</sup>覆<sup>つくりかへ</sup>したるばかりなり。

海上風波の難<sup>あ</sup>に遭<sup>あ</sup>へる時、若<sup>そく</sup>干<sup>ばく</sup>の油を取りて航路に澆<sup>そそ</sup>げば、浪<sup>なみ</sup>は奇<sup>く</sup>くも忽<sup>たちましづま</sup>ち鎮<sup>しん</sup>りて、船は九死を出<sup>い</sup>づべしとよ。今この如何<sup>いかに</sup>とすも為<sup>す</sup>べからざる乱脈の座中をば、その油の勢力をもて支配<sup>し</sup>せる女<sup>に</sup>王<sup>よう</sup>あり。猛<sup>たけ</sup>びに猛<sup>たけ</sup>ぶ男<sup>お</sup>たちの心もその人の前<sup>まへ</sup>には和<sup>やはら</sup>ぎて、終<sup>つひ</sup>に崇拜<sup>そね</sup>せざるはあらず。女<sup>おそれ</sup>たちは皆猜<sup>そね</sup>みつつも畏<sup>おそれ</sup>を懷<sup>いだ</sup>けり。中<sup>ちゆう</sup>の間

なる団欒まじゐの柱はしら側わきに座を占めて、重おもげに戴いたける夜会結やかいむすびに淡うすむ  
らさき紫むらさきのりボン飾かざりして、小豆鼠あづきねずみの縮緬ちりめんの羽織を着たるが、人の  
 打騒うちさわぐを興あるやうに涼き目を睜みはりて、躬みづかは淑しとやかに引ひき繕つくろへる  
 娘あり。粧飾つくりより相かほ貌だちまで水際立みづぎはたちて、凡ただならず媚こびを含める  
 は、色を売るものの仮の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見  
 るものは皆疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普あまねく  
 知られぬ。娘も数多居あまたたり。醜みにくきは、子守の借着したるか、茶番  
 の姫君の戸惑とまどひせるかと覚おぼきもあれど、中には二十人並、五十人  
 並優れたるもありき。服装みなりは宮より数等立派すとうなるは数多あまたあり。彼  
 はその点にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛まなむすめ娘むすめとて、最  
 も不器量ふきりようを極きはめて遺憾いかんなしと見えたるが、最も綺羅きらを飾りて、

その起いかりがた肩かたに紋御召もんおめしの三枚襲さんまいがさねを被かつぎて、帯しこんは紫根しちんの七糸しちんに百合ゆりの折枝をりえだを縫よりきん金の盛上もりあげにしたる、人々これが為ために目も眩くられ、心も消えて眉まゆを皺しわめぬ。この外種さまざま々色々の絢爛きらびやかなる中に立交たちまじらひては、宮よそほひづかの装は纔さうに暁の星の光を保たもつに過ぎざれども、彼の色の白さは如何いかなる美うつくしき染色そめいろをも奪うばひて、彼の整ととのへる面おもては如何うるはしなる麗うつくしき織物おりものよりも文章あやありて、醜みにくき人たちは如何いかに着飾きざらんとその醜みにくきを蔽おほふ能あたはざるが如く、彼は如何いかに飾からざるもその美うつくしきを害がせざるなり。

袋ふくろ棚だなと障子かたすみとの片隅てあぶりに手炉みかんを囲むみて、蜜柑みつを剥むきつつ語かたふ男ひとの一個ひとりは、彼の横顔ほれぼれを恍惚はるかと遙とほに見入みいりたりしが、遂つひに思おも堪ひたへざらんやうに呻うめき出いだせり。

「好い、好い、全く好い！ 馬士まごにも衣裳いしやうと謂いふけれど、美うつくしいのは衣裳には及ばんね。物それ自みづからが美しいのだもの、着物などはどうしても可いい、実は何も着てをらんでも可いい」

「裸体なほなら猶結構だ！」

この強つなひきき合あひづち槌撃ちづちつは、美術学校の学生なり。

綱つなひき曳えにて駈着かけつけし紳士は姑しばらく休息の後内儀あるじに導みかれて入来いりきた

りつ。その後うしろには、今まで居間に潜ひそみたりし主あるじの箕輪みのわり亮よう輔すけも

附添つけぞえひたり。席上は入乱れて、ここを先途せんどと激はげしき勝負の最中なれ

ば、彼等の来きたれるに心着こころきしは稀まれなりけれど、片隅に物語れる二

人は逸いちはや早はやく目を側そばめて紳士の風采ふうさいを視みたり。

広間の燈影ひかげは入口に立てる三人の姿を鮮あざやかに照せり。色白ちひさの小

き内儀の口は疳かんの為に引歪ひきゆがみて、その夫の額ひたひぎは際あかはより赭あかは禿はげたる頭つむり顱なめらは滑かに光れり。妻は尋常ひとなみより小きに、夫は勝すぐれたる大兵だいひよう肥満にて、彼の常に心遣こころづかひありげの面色なるに引替へて、生きながら布袋ほといを見る如き福相したり。

紳士は年としのころ齒二十六七なるべく、長たけたか高く、好き程に肥えて、

色は玉のやうなるに頬ほほの辺には薄紅うすくれなるを帯びて、額厚く、口大

きく、腮あぎとは左右に蔓はびこりて、面積の広き顔やは稍正方形を成なせり。緩ゆる

く波打てる髪を左の小鬢こびんより一文字に撫付けて、少しは油を塗り

たり。濃こからぬ口髭くちひげを生はやして、小からぬ鼻に金縁きんぐちの目鏡めがねを挟はさ

み、五紋いつつもんの黒塩瀬くろしほぜの羽織かもんおりに華紋織こそでの小袖すそながを裾長きなに着き做

したるが、六寸の七糸帶しちんおびに金鏈子きんぐさりを垂れつつ、大様おほやうに面おもてを

挙げて座中を睥みまはしたる容は、実に光を発はなつらんやうに四辺あたりを払ひいて見えぬ。この団欒まどろみの中に彼の如く色白く、身奇麗に、しかも美び々びしく装よそはひたるはあらざるなり。

「何だ、あれは？」

例の二人の一個ひとりはさも憎にくさげに眩くらけり。

「可い厭やな奴！」

唾吐つばくやうに言ひて学生はわざと面おもてを背そむけつ。

「お俊しゅんや、一寸ちよいと」と内儀くんじゆは群集の中よりその娘を手招きぬ。

お俊は両親の紳士を伴へるを見るより、慌あわ忙ただしく起きたちて来きるが、顔好くはあらねど愛あい嬌きよう深く、いと善く父に肖にたり。高

島田に結ゆひて、肉色縮緬にくいろちりめんの羽織つまに撮つまみたるほどの肩揚したり。

顔を赧めつつ紳士の前に跪きて、  
 小腰を屈めしのみ。  
 彼は纔に

「どうぞ此方へ」

娘は案内せんと待構へけれど、紳士はさして好ましからぬやうに頷けり。母は歪める口を怪しげに動して、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ」

お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目礼せり。

「さあ、まあ、いらつしやいまし」

あるじ  
 主の勧むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内して、  
 客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其処まで介添に  
 附きたり。二人は家内の紳士を遇ふことの極めて鄭重なるを



訝りて、彼の行くより坐るまで一挙一動も見脱さざりけり。その行く時彼の姿はあたかも左の半面を見せて、団欒の間を過ぎたりしが、無名指に輝ける物の凡ならず強き光は燈火に照添ひて、殆ど正く見る能はざるまでに眼を射られたるに呆れ惑へり。天上の最も明なる星は我手に在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黄金の指環を穿めたるなり。

お俊は骨牌の席に復ると倅く、密に隣の娘の膝を衝きて口早に呟きぬ。彼は忙々く顔を擡げて紳士の方を見たりしが、その人よりはその指に耀く物の異常なるに駭かされたる体にて、

「まあ、あの指環は！一寸、金剛石？」

「さうよ」

「大きいのねえ」

「三百円だつて」

お俊の説明を聞きて彼は漫に身毛の弥立つを覚えつつ、

「まあ！ 好いのねえ」

ごまめ

鰯の目ほどの真珠を附けたる指環をだに、この幾歳か念懸く

れども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮べて攻

めつづみ

鼓の如く轟けり。彼は惘然として殆ど我を失へる間に、電

とどろ

ぼうぜん

ま

光の如く隣より伸来れる猿臂は鼻の前なる一枚の骨牌を引攪

のびきた

えんぴ

さき

かるた

ひきさら

へば、

「あら、貴女どうしたのよ」

あなた

お俊は苛立ちて彼の横膝よこひざを続けさまに拊はたきぬ。

「可よくつてよ、可よくつてよ、以これから来もう可よくつてよ」

彼は始めて空想の夢を覚さまして、及ばざる身みの分ぶんを諦あきらめたりけれ

ダイヤモンド

ども、一旦金剛石の強き光に焼かれたる心は幾分の知覚を失ひ

めざまし

けんやうにて、さしも目覚めざましかりける手腕てなみの程も見見る漸やうやく四

どろ

途乱どろになりて、彼は敢あへ無くもこの時よりお俊の為に頼がたみ難なき味方

となれり。

かくしてかれよりこれに伝へ、甲より乙に通じて、

ダイヤモンド

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ」

「金剛石」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ」

「あれが金剛石？」

「見給へ、金剛石」

「あら、まあ金剛石」

「可すばらし感おそろしい金剛石」

「可おそろし恐おそろしい光るのね、金剛石」

「三百円の金剛石」

瞬またたく間に三十余人は相呼び相応じて紳士の富を謳うたへり。

彼は人々の更かたみ互がはりにおのれの方かたを眺ながむるを見て、その手に形

好シガアく葉卷シガアを持たせて、右め手を袖そで口ぐちに差入れ、少し懈たゆげに床柱に

靠もたれて、目鏡の下より下界を見遍みわたすらんやうに目配めくばりしてゐたり。

かかる目印ある人の名は誰たれしも問はであるべきにあらず、洩もれ

しはお俊の口よりなるべし。彼は富山とみやまただつぐ唯繼とて、一代分限ぶげんな

がら下谷区したやに聞ゆる資産家の家督なり。同じ区なる富山銀行はそ

の父の私設する所にして、市會議員の中うちにも富山重平じゅうへいの名は

見出みいださるべし。

宮の名の男かたの方に持もて離はさるる如く、富山と知れたる彼の名は

直ただちに女の口々に誦ずんぜられぬ。あはれ一ひと度たびはこの紳士と組みて、

世めでに愛めたき宝石に咫尺しせきするの榮を得ばや、と彼等の心こころ々ごころに冀ひねが

はざるは希まれなりき。人も若し彼に咫尺するの榮を得ば、啻ただにその目

の類たぐひ無なく樂たのさるるのみならず、その鼻までも堇ヴァイオレット花の多く

鯨ぐべからざる異香いきように薰ぜらるるの幸さいはひを受くべきなり。

男たちは自おのづから荒められて、女こぞの挙りて金剛石ダイヤモンドに心こころひか牽さ

る気色けしきなるを、或あるひは妬ねたく、或は浅ましく、多少の興さまを冷さざる

はあらざりけり。独り宮ひとのみは騒ていげる体も無くて、その清すずしき眼まなざ

色しはさしもの金剛石と光を争はんやうに、用意たしなみふか深く、心こころざま様

も幽ゆかしく振舞へるを、崇拜者ようごは益々よく懼こびて、我等の慕こひ参らする

効かひはあるよ、偏ひとへにこの君を奉じて孤忠こちゆうを全うし、美と富との勝

負を唯一戦に決して、紳士の憎つらき面の皮ひきむを引剥かん、と手薬てぐすね煉引

いて待ちかけたり。されば宮と富山との勢いきほひはあたかも日月じつげつを並な

懸らべかけたるやうなり。宮たれは誰と組み、富山は誰と組むらんとは、

人々の最も懸念けねんするところなりけるが、鬪くじの結果は驚くべき予想

外にて、目指されし紳士と美人とは他の三人みたりとともに一組になりぬ。始め二つに輪作りし人数にんずはこの時合併して一の大なる団まどろに成されたるなり。しかも富山と宮とは隣となりあひ合に坐りければ、夜と昼との一時いちじに来にけんやうに皆狼うろたへ狼うろたへ騒ぎて、忽ちその隣に自ら社会党と称となふる一組を出いだせり。彼等の主義は不平にして、その目的は破壊なり。則ち彼等は専ら腕力もつぱを用ゐて或組の果報と安寧いとを妨害せんと為るなり。又その前面むかひには一人の女に内を守らしめて、屈強の男四人左右に遠征軍を組織し、左翼を狼藉組ろうぜきぐみと称し、右翼を蹂躪隊じゅうりんだいと称するも、実は金剛石の鼻柱を挫くじかんと大童おほわらはになれるに外ほかならざるなり。果せる哉かなくだん、件の組はこはなしろの勝負に蓬きたなき大敗を取りて、人も無げなる紳士もさすがに鼻白

み、美き人は顔を赧<sup>あか</sup>めて、座にも堪<sup>た</sup>ふべからざるばかりの面皮<sup>めんび</sup>を欠<sup>か</sup>されたり。この一番にて紳士の姿は不知見<sup>いつか</sup>えずなりぬ。男たちは万歳を唱へけれども、女の中には掌<sup>たなぞこ</sup>の玉を失へる心地<sup>こころち</sup>したるも多かりき。散々に破壊され、狼藉<sup>おそれ</sup>され、蹂躪<sup>ひそかあるじ</sup>されし富山は、余りにこの文明的ならざる遊戯<sup>おそれ</sup>に怖<sup>おそれ</sup>をなして、密に主の居間に逃帰れるなりけり。

鬘<sup>かつら</sup>を被<sup>き</sup>たるやうに梳<sup>くしけづ</sup>りたりし彼の髪は棕櫚<sup>しゅろぼうき</sup>箒<sup>しゅろぼうき</sup>の如く乱れて、環<sup>かんかたかた</sup>の隻腕<sup>ひも</sup>げたる羽織の紐<sup>てながざる</sup>は、手長猿<sup>とら</sup>の月を捉<sup>とら</sup>へんとする状<sup>かたち</sup>して揺曳<sup>ぶらぶら</sup>と垂<sup>さが</sup>れり。主は見るよりさも慌<sup>あわ</sup>てたる顔して、

「どう遊ばしました。おお、お手から血が出てをります」

彼はやにはに煙管<sup>きせる</sup>を捨てて、忽<sup>ゆるがせ</sup>にすべからざらんやうに急遽<sup>とつかは</sup>



と身を起せり。

「ああ、酷い目に遭つた。どうもああ乱暴ぢや為様が無い。火事装束でも出掛けなくつちやとても立切れないよ。馬鹿にしてゐる！ 頭を二つばかり撲れた」

手の甲の血を吮ひつつ富山は不快なる面色して設の席に着きぬ。予て用意したれば、海老茶の紋縮緬の傍に七宝焼の小判形の大手炉を置いて、蒔絵の吸物膳をさへ据ゑたるなり。主は手を打鳴して婢を呼び、大急に銚子と料理とを誂へて、

「それはどうも飛でもない事を。外に何処もお怪我はございませんでしたか」

「そんなに有られて耐<sup>たま</sup>るものかね」

為<sup>せ</sup>う事無さに主も 苦<sup>にが</sup>笑<sup>わら</sup>せり。

「唯<sup>ただいまばんそうこう</sup>今絆創膏を差上げます。何しろ皆書生でございますから

随分乱暴でございませう。故<sup>わざわざ</sup>々御招<sup>おまねき</sup>申しまして甚<sup>はなは</sup>だ恐入<sup>おそ</sup>りま

した。もう彼地<sup>あつち</sup>へは御出陣にならんが宜<sup>よろ</sup>うございます。何もござ

いませんがここで何卒御寛<sup>どうぞごゆる</sup>り」

「ところがもう一遍行つて見やうかとも思ふの」

「へえ、又いらつしやいますか」

物は言<sup>うち</sup>はで打笑<sup>うちゑ</sup>める富山の腮<sup>あぎと</sup>は愈<sup>よひ</sup>展<sup>あ</sup>れり。早くもその意を得て

や破<sup>は</sup>顔<sup>がん</sup>せる主<sup>ある</sup>の目<sup>め</sup>は、薄<sup>すす</sup>の切<sup>き</sup>疵<sup>きず</sup>の如<sup>ごと</sup>くほとほと有<sup>あ</sup>か無<sup>な</sup>きかにな

りぬ。

「では御意ぎよゐに召したのが、へえ？」

富山ますまきは益笑ただを湛たへたり。

「ございましたらう、さうでございませうとも」

「何故なぜな」

「何故も無いものでございます。十目じゅうもくの見たところぢやござ

いませんか」

富山うなづは頷きつつ、

「さうだらうね」

「あれは宜よろうございませう」

「一寸ちよいと好いね」

「まづその御意おつもりでお熱いところをお一盞ひとつ。

不むづかし満家の貴方あなたが一寸

好いと有仰る位では、余程尤物と思はなければなりません。

全く寡うございます」

倉皇入来れる内儀は思ひも懸けず富山を見て、

「おや、此方にお在あそばしたのでございますか」

彼は先の程より台所に詰きりて、中入の食物の指図などして

ゐたるなりき。

「酷く負けて逃げて来ました」

「それは好く逃げていらつしやいました」

例の歪める口を窄めて内儀は空々しく笑ひしが、忽ち彼の羽

織の紐の偏断れたるを見尤めて、環の失せたりと知るより、慌て

驚きて起たんとせり、如何にとなればその環は純金製のものなれ

ばなり。富山は事も無げに、

「なあに、よろし宜い」

「宜いではございません。純金きんでは大変でございます」

「なあに、可いいと言ふのに」と聞きも訖をはらで彼は広間の方かたへ出いで行けり。

「時にあれの身分はどうかね」

「さやう、悪い事はございませんが……」

「が、どうしたのさ」

「が、大たいした事はございませんです」

「それはさうだらう。然しかし凡およそどんなものかね」

「旧もとは農商務省に勤めてをりましたが、唯ただいま今では地所や家作かさくな

どで暮してゐるやうでございます。どうか小金も有るやうな話で、  
 鳴沢隆三と申して、直隣町に居りますが、極手堅く小  
 体に遣つてをるのでございます」

「はあ、知れたもんだね」

われは顔に頤を搔撫づれば、例の金剛石は燦然と光れり。

「それでも可いさ。然し嫁れやうか、嗣子ぢやないかい」

「さやう、一人娘のやうに思ひましたが」

「それぢや窮るぢやないか」

「私は悉い事は存じませんから、一つ聞いて見ませうで」

程無く内儀は環を搜得て帰来にけるが、誰が悪戯とも知ら

で耳搔の如く引展されたり。主は彼に向ひて宮の家内の様子

を訊ねけるに、知れる一ひとつ遍は語りけれど、娘は猶能く知るら  
 ンを、後のちに招きて聴くべしとて、夫婦は頻しきりに觴さかづきを侑めけり。

富山唯繼の今宵きたここに来りしは、年賀にあらず、骨牌遊かるたあそびにあ  
 らず、娘の多く聚れるを機あつまとして、嫁選よめえらみせんとなり。彼は  
 一昨年をととしの冬英吉利イギリスより帰朝するや否や、八方に手分てわけして嫁を求め  
 けれども、器量望のぞみの太甚はなはだしければ、二十余件の縁談皆意かなに称は  
 で、今日が日までもなほその事に齷齪あくさくして已まざるなり。当時  
 取急くろぎて普請せし芝しばの新宅は、未だ人いまの住着かざるに、はや日に  
 黒み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額あつを鳩  
 めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

## 第二章

骨牌かるたの会は十二時におよびて終りぬ。十時頃より一人起ち、二人起ちて、見る間に人数にんずの三分の一強を失ひけれども、猶飽なほかで残れるものは景氣好く勝負を続けたり。富山の姿を隠したりと知らざる者は、彼敗走して帰りしならんと想へり。宮は会の終まで居たり。彼若疾もしとく還かへりたらんには、恐おそく踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顔に富山は主と語合へり。

彼に心を寄せし輩やからは皆彼が夜深よふけの帰途かへりの程を氣遣きづかひて、我願ねがはくは何処いづくまでも送らんと、絶したたか念おもひに念ひけれど、彼等の深切しんせつは無用にも、宮の帰る時一人の男附添ひたり。その人は高等中学の



制服を着たる二十四五の学生なり。金剛石ダイヤモンドに亜いでは彼の挙動

の目指れしは、座中に宮と懇意に見えたるは彼一人なりければな

り。この一事の外は人目を牽くべき点も無く、彼は多く語らず、

又は躁さわがず、始終慎くしてゐたり。終までこの両個ふたりの同伴なりと

は露頭せざりき。さあらんには余所々々しさに過ぎたればなり。

彼等の打連れて門かどを出づるを見て、始めて失望せしもの寡すくなからず。

宮は鳩羽鼠はとばねずみの頭巾ずきんを被りて、濃浅黄地に白く中形模様あ

る毛織のシオールを絡まとひ、学生は焦茶の外オパコ套オトを着たるが、身

を窄すぼめて吹来る風こがらしを遣過しつゝ、遅れし宮の迎たどりつ着くを待ちて

言出せり。

「宮みいさん、あの金剛石ダイヤモンドの指環はを穿めてゐた奴はどうだい、可厭いや

に氣取つた奴ぢやないか」

「さうねえ、だけれど衆みんながあの人を目の敵かたきにして乱暴するので氣の毒だつたわ。隣合つてゐたもんだから私まで酷ひどい目に遭あはされて

よ」

「うむ、彼奴あいつが高慢な顔をしてゐるからさ。実は僕も横腹よこつばらを

二つばかり突いて遣つた」

「まあ、酷いのね」

「ああ云ふ奴は男の目から見ると反吐へどが出るとやうだけれど、女にはどうだらうね、あんなのが女の氣に入るのぢやないか」

「私は可厭いやだわ」

「芬ぶんぶん々と香水の匂におひがして、金剛石ダイヤモンドの金の指環を穿めて、殿様

然たる服装なりをして、好いいに違ちがひ無ひいさ」

学生は嘲あざむが如く笑へり。

「私は可厭よ」

「可厭なものが組になるものか」

「組は鬪くじだから為方しかたが無いわ」

「鬪だけれど、組に成つて可厭さうな様子も見えなかつたもの」

「そんな無理な事を言つて！」

「三百円の金剛石ぢや到底僕等の及ぶところにあらずだ」

「知らない！」

宮はシオールを揺ゆりあ上げて鼻なかばの半まで掩おほひかく隠かくしつ。

「ああ寒い！」

男は肩を峙そばだてて直ひたと彼に寄添へり。宮は猶黙なほして歩めり。

「ああ寒い!!」

宮はなほ答へず。

「ああ寒い※」

彼はこの時始めて男の方かたを見向きて、

「どうしたの」

「ああ寒い」

「あら可厭ね、どうしたの」

「寒くて耐たまらんからその中へ一いつしよ処に入れ給へ」

「どの中へ」

「シオールの中へ」

「可笑い、可厭だわ」  
をかし

男は逸早く彼の押へしシオールの片端を奪ひて、その中に  
いちはや かたはし うち  
 身を容れたり。宮は歩み得ぬまでに笑ひて、  
みや

「あら貫一さん。これぢや切なくて歩けやしない。ああ、前面  
かんいつ むかふ  
 から人が来てよ」

かかる戯を作して憚らず、女も為すままに信せて咎めざる彼等  
たはむれな はばか とが  
 の関繋は抑も如何。事情ありて十年来鳴沢に寄寓せるこの間  
かんけい そもそ いかに きぐう はざま  
 貫一は、此年の夏大学に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人  
かんいち ことし  
 なり。

### 第三章

間貫一の十年来鳴沢の家に寄寓せるは、怙<sup>よ</sup>る所無くて養はるるなり。母は彼の幼<sup>いとけな</sup>かりし頃世を去りて、父は彼の尋常中学を卒業するを見るに及ばずして病死せしより、彼は哀嘆<sup>なげき</sup>の中に父を葬るとともに、己<sup>おのれ</sup>が前途の望をさへ葬らざる可<sup>べ</sup>からざる不幸に遭<sup>あ</sup>へり。父在りし日さへ月謝の支出の血を絞るばかりに苦<sup>くるし</sup>き瘦世<sup>やせじ</sup>帯<sup>よたい</sup>なりけるを、当時彼なほ十五歳ながら間の戸主は学ぶに先ちて食<sup>くら</sup>ふべき急に迫られぬ。幼き戸主の学ぶに先ちては食<sup>くら</sup>ふべきの急、食<sup>くら</sup>ふべきに先ちては葬<sup>はうむり</sup>すべき急、猶<sup>なほ</sup>これに先ちては看護医薬の急ありしにあらずや。自活すべくもあらぬ幼<sup>をさな</sup>き者の如何<sup>いか</sup>にしてこれ等の急を救<sup>すくひえ</sup>得<sup>もと</sup>しか。固より貫一が力の能<sup>あた</sup>ふべきにあらず、鳴沢隆三

の身一個に引承けて万端の世話せしに因るなり。孤児の父は隆  
 三の恩人にて、彼は聊かその旧徳に報ゆるが為に、啻にその病め  
 りし時に扶助せしのみならず、常に心着けては貫一の月謝をさ  
 ままへ間支弁したり。かくて貧き父を亡ひし孤児は富める後見を  
 得て鳴沢の家に引取られぬ。隆三は恩人に報ゆるにその短き生時  
 を以て慊らず思ひければ、とかくはその忘形見を天晴人と成し  
 て、彼の一日も忘れざりし志を継がんとせるなり。

亡き人常に言ひけるは、苟くも侍の家に生れながら、何の面  
 目ありて我子貫一をも人に侮らすべきや。彼は学士となして、  
 願くは再び四民の上に立たしめん。貫一は不斷にこの言を以て警  
 められ、隆三は会ふ毎にまたこの言を以て啣たれしなり。彼は言

ふ<sup>いとま</sup>違だに無くて暴<sup>にはかみまか</sup>に歿りけれども、その前常に口にせしところは明かに彼の遺言なるべきのみ。

されば貫一が鳴沢の家内に於ける境遇は、決して厄介者として<sup>ひそかつと</sup>陰に疎まるる如き憂目<sup>うきめ</sup>に遭ふにはあらざりき。<sup>あ</sup>愁<sup>なまじ</sup>ひ継子<sup>ままこ</sup>などに生れたらんよりは、かくて在りなんこそ幾<sup>いかばかり</sup>許<sup>さいはひ</sup>か幸は多からんよ、と知る人は噂<sup>うはさ</sup>し合へり。隆三夫婦は<sup>げ</sup>実に彼を恩人の忘形見として疎<sup>おろそか</sup>ならず取扱ひけるなり。さばかり彼の愛せらるるを見て、彼等は貫一をば娘の婿にせむとすならんと想へる者もありしかど、當時彼等は構へてさる心ありしにはあらざりけるも、彼の篤学なるを見るに及びて、<sup>やうや</sup>漸くその心は出<sup>い</sup>で来<sup>き</sup>て、彼の高等中学校に<sup>い</sup>入りし時、彼等の了簡は始めて定りぬ。



貫一は篤学のみならず、性質も直に、すぐ行も正かりければ、この  
 人物を以つて学士の冠を戴いたかんには、誠に獲易えやすからざる媚なるべ  
 し、と夫婦は私ひそに喜びたり。この身代しんだいを譲られたりとて、他姓たせい  
 を冒をかして得謂えいはれぬ屈辱を忍ばんは、彼の屑いさぎよしと為ざるところな  
 れども、美き宮を妻に為るを得ば、この身代も屈辱も何か有ら  
 と、彼はなかなか夫婦に増したる權よろこびを懷いだきて、益ます學問を励ますみたり。  
 宮も貫一をば憎からず思へり。されど恐くは貫一の思へる半なかばには  
 過ぎざらん。彼は自らその色好いろよきを知ればなり。世間の女の誰たれか  
 自らその色好を知らざるべき、憂ふるところは自ら知るに過するに  
 在り。謂いふ可くんば、宮は己おのれが美しさの幾いかばかり、何値するかを当然  
 に知れるなり。彼の美しさを以てして纔わづかに箇程かほどの資産を嗣つぎ、類

多き学士風情ふぜいを夫に有たんは、決して彼が所望のぞみの絶頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤びせんより出でし例寡たぬしなからざるを見たり。又は富人の醜みにくき妻を厭いとひて、美めき妾かけに親むを見たり。才だにあらば男立身は思のままなる如く、女は色をもて富貴ふうきを得べしと信じたり。なほ彼は色を以て富貴を得たる人たちの若干そくばくを見たりしに、その容かたちの己おのれに如かざるものの多きを見出みいだせり。剩あまつさへ彼は行く所にその美しさを唱はれざるはあらざりき。なほ一件ひとつ最も彼の意を強うせし事あり。そは彼が十七の歳としに起りし事なり。当時彼は明治音楽院に通ひたりしに、ヴァイオリンのプロフエツサアなる独逸人ドイツは彼の愛らしき袂たもとに艶書えんしよを投入れぬ。これ素もとより仇あだなる恋にはあらで、女夫めをとの契ちぎりを望みしなり。殆ど同時ほとんどに、院長の某なにがし

年四十を踰こえたるに、先年その妻を喪うしなひしをもて再び彼を娶めとらんとて、密ひそかに一室に招きて切なる心を打明かせし事あり。

この時彼のちひさのちひさの胸は破れんとするばかり轟とどろけり。半は曾なて覺かえざる可はづかしさ羞はづかしさの為に、半は遽にはかおほいに大なる希望の宿りたるが為に。彼

はここに始めて己の美しさの寡すくなくとも奏任以上の地位ある名流をその夫に値つひすあたべきを信じたるなり。彼を美しく見たるは彼の教師と院長とのみならず、牆かきを隣だんじぶれる男子部の諸生の常に彼を見んとて打騒ぐをも、宮は知らざりしにあらず。

若もしかのプロフェッサアに添あはんか、或は四十の院長に従はんか、彼の榮譽ある地位は、学士を媚こにして鳴沢の後を嗣つぐの比にはあらざらんと、一旦抱いだける希望は年と共に太りて、彼は始終昼な

がら夢みつつ、今にも貴き人又は富める人又は名ある人の己おのれを見出しいだて、玉の輿こしを昇かかせて迎きたに来るべき天縁の、必ず廻めぐり到いたらんことを信じて疑はざりき。彼のさままでに深く貫一を思はざりしは全くこれが為のみ。されども決して彼を嫌きらへるにはあらず、彼と添たのしはばさすがに樂おもからんとは念おもへるなり。如かくのごとく決定さだかにそれとは無けれど又有りとし見ゆる筭ははきぎ木の好運を望みつつも、彼は怠らず貫一を愛してゐたり。貫一は彼の己を愛する外にはその胸の中に何もあらじとのみ思へるなりけり。

#### 第四章

漆の如き闇やみの中に貫一うちの書齋の枕時計は十時を打ちぬ。彼は午

後四時より向島むこうじまの八百松やおまつに新年会ありとて未だ還いまらざるなり。

宮は奥より手ランプを持ちて入来いりきにけるが、机の上なる書燈を

ともをは点し了れる時、婢をんなは台十能に火を盛りたるを持来もちきたれり。宮はこ

れを火鉢ひばちに移して、

「さうして奥のお鉄瓶てつも持つて来ておくれ。ああ、もう彼方あちらは御

やすみ寝になるのだから」

ひさしひとけ 久く人氣の絶えたりし一間の寒さむさは、今俄にはかに人の温き肉を得たる

を喜びて、直ちただに咬かまんとするが如く膚はだに薄へれり。宮は慌忙あわただし

く火鉢に取付きつつ、目を挙げて書棚しよだなに飾れる時計を見たり。

夜の闇くらく静なるに、燈ともの光の独り美ひとき顔を照したる、限無く艶えん

なり。松の内とて彼は常より着飾れるに、化粧をさへしたれば、露を帯びたる花の梢こずえに月のうつろへるが如く、背後うしろの壁に映れる黒き影さへ香にほひ滴こぼるるやうなり。

ダイアモンド

金剛石と光を争ひし目は惜氣をしげも無く瞪みはりて時計の秒セコンドを刻むを

うちまも

打目成れり。火に翳かざせる彼の手を見よ、玉の如くなり。さらば友

禅模様ある

紫むらさき縮ちぢり緬めん

の半襟はんえりに韜つつまれたる彼の胸を想へ。そ

の胸うちの中に彼は今如何いかなる事を思へるかを想へ。彼は憎からぬ人

の帰来かへりを待佗まちわぶるなりけり。

ひとしきりきむさはなはだし

一時又寒の太甚きを覚えて、彼は時計より目を放つとともに起

ちて、火鉢の対面むかふなる貫一しとねが

の上に座を移せり。こは彼の手に

縫ひしを貫一の常に敷くなり、貫一の敷くをば今夜彼の敷くなり。

もし  
若やと聞着けし車の音は漸く近きて、益轟きて、竟に我門に  
とどま  
停りぬ。宮は疑無しと思ひて起たんとする時、客はいと酔ひ  
たる声して物言へり。貫一は生下戸なれば嘗て酔ひて帰りし事あ  
らざれば、宮は力無く又坐りつ。時計を見れば早や十一時に垂ん  
とす。

かど  
門の戸引啓けて、酔ひたる足音の土間に踏入りたるに、宮は何  
事とも分かず唯慌ててラムプを持ちて出でぬ。台所より婢も、  
いであ  
出合へり。

ふみど  
足の踏所も覚束無げに酔ひて、帽は落ちなんばかりに打  
む  
傾き、ハンカチーフに裹みたる折を左に拵げて、山車人形のや  
ゆらゆら  
うに揺々と立てるは貫一なり。面は今にも破れぬべく紅に熱し

て、舌の乾かわくに堪たへかねて連しきりに空から唾つばを吐きつつ、

「遅おそかつたかね。さあ御土産おみやげです。還かへつてこれを細君おくに遣る。何ぞ仁じんなるや」

「まあ、大変酔つて！　どうしたの」

「酔しまつて了しまつた」

「あら、貫かん一いつさん、こんな所に寐ねちや困るわ。さあ、早くお上りなさいよ」

「かう見えても靴が脱げない。ああ酔つた」

仰のけ様さまに倒れたる貫一の脚あしを搔かき抱いだきて、宮からは辛くもその靴を取去りぬ。

「起きる、ああ、今起きる。さあ、起きた。起きたけれど、手を



牽ひいてくれなければ僕には歩けませんよ」

宮をんなは婢なに燈ともを把とらせ、自らは貫一の手を牽かんとせしに、彼はよろめ  
跟よきつつ肩かたに縋すがりて遂つひに放さざりければ、宮はその身一つさへ危あやふ  
きに、やうやう扶たすけて書齋しとねに入りぬ。

の上に昇かきおろされし貫一は顔くづる体を机たいに支へて、打うちあふ  
つつ微吟みぎんせり。

「君に勧きんむ、金縷きんるの衣ころもを惜おむなかれ。君に勧すべむ、須すべく少年からの時を  
惜おむべし。花有はなり折たるに堪たへなば直ただちに折たる須べし。花無はなきを待つて  
空むなく枝えを折たることなかれ」

「貫一さん、どうしてそんなに酔つたの？」

「酔めつてゐるでせう、僕は。ねえ、宮みさん、非常に酔つてゐるで

せう」

「酔つてゐるわ。苦いくるしでせう」

「然しか矣、苦いほど酔つてゐる。こんなに酔つてゐるに就ついては大おほいに訳が有るのだ。さうして又宮さんなるものが大いに介抱して可い訳が有るのだ。宮さん！」

「可い厭やよ、私は、そんなに酔つてゐちや。不断きんら嫌ひの癖なに何故なぜそんなに飲んだの。誰に飲のまれたの。端山はやまさんだの、荒尾さんだの、白瀬さんだのが附いてゐながら、酷ひどいわね、こんなに酔よして。十時にはきつと帰ると云ふから私は待つてゐたのに、もう十一時過よよ」

「本当に待つてゐてくれたのかい、宮みさん。謝しや、多謝たしや！ 若もしそれ

が事実であるならばだ、僕はそのまま死んでも恨みません。こんなに酔されたのも、実はそれなのだ」

彼は宮の手を取りて、情に堪へざる如く握にぎりし緊めつ。

「二人の事は荒尾より外に知る者は無いのだ。荒尾が又決して喋しゃべる男ぢやない。それがどうして知れたのか、衆みんなが知つてゐて……

僕は実に驚いた。四方八方から祝しゆくはい盃はいだ祝盃だと、十も二十も

一度に猪口ちよくを差されたのだ。祝盃などを受ける覚おぼえは無いと言つて、手ひっこを引籠めてゐたけれど、なかなか衆聴みんなかないぢやないか」

宮ひそかゑみは窃に笑を帯びて余念なく聴きゐたり。

「それぢや祝盃の主意を変へて、仮初かりそめにもああ云ふ美人と一いっし所に居て寢食を俱ともにすると云ふのが既に可うらやまし羨い。そこを祝

すのだ。次には、君も男児をとこなら、更に一步を進めて、妻君に為るやうに十分運動したまへ。十年も一所に居てから、今更人に奪とられるやうな事があつたら、独り間貫ひと一いつ個人の恥辱ばかりではない、我々朋友全体ほうゆうの面目にも関する事だ。我々朋友ばかりではない、延ひいて高等中学の名折なをれにもなるのだから、是非あの美人を君が妻君にするやうに、これは我々が心を一いつにして結むすぶの神に禱いのつた酒だから、辞退するのは礼ではない。受けなかつたら却かへつて神罰が有ると、弄から謔かひとは知れてゐるけれど、言草いひぐさが面白かつたから、片端かたつばしから引受けて呶々ぐひぐひやつつ遣付けた。

宮さんと夫婦に成れなかつたら、ははははは高等中学の名折になるのだと。恐入つたものだ。何分宜く願ひます」

「可厭<sup>いや</sup>よ、もう貫一さんは」

「友達中にもさう知れて見ると、立派に夫婦にならなければ、弥<sup>いよ</sup>よ僕の男が立たない義<sup>わけ</sup>だ」

「もう極<sup>きま</sup>つてゐるものを、今更……」

「さうでないです。この頃翁<sup>をぢ</sup>さんや姨<sup>おば</sup>さんの様子を見るのに、どうも僕は……」

「そんな事は決<sup>け</sup>して無いわ、邪推<sup>じゃすい</sup>だわ」

「実は翁<sup>りようけん</sup>さんや姨<sup>おば</sup>さんの了<sup>りようけん</sup>簡<sup>かん</sup>はどうでも可い、宮さんの心一つなのだ」

「私の心は極つてゐるわ」

「さうかしらん？」

「さうかしらんで、それぢや余りだわ」  
あんま

貫一は酔ゑひを支へかねて宮が膝ひざを枕に倒れぬ。宮は彼が火の如き  
頬ほほに、額に、手を加へて、

「水を上げませう。あれ、又寐ねちや……貫一さん、貫一さん」  
まこと

寔に愛の潔いさぎよき哉、この時は宮が胸の中にも例の汚れたる希望のぞみは

跡を絶ちて彼の美き目は他に見るべきもののあらざらんやうに、

その力を貫一の寐顔あつに鍾めて、富も貴きも、乃至有ゆる利慾ないしあらの念

は、その膝に覚ゆる一団の微温とろかの為に溶されて、彼は唯妙ただたかうばしに香

き甘露かんろの夢に酔ゑひて前後をも知らざるなりけり。

諸もろもろの可忌いまはしき妄想もうぞうはこの夜の如く眼まなこを閉ぢて、この一間ひとまに彼

等の二人よりは在らざる如く、彼は世間に別人の影を見ずして、

又この明なる燈あきらか火ともしびの光の如きものありて、特に彼等ことをのみ照すやうに感ずるなり。

## 第五章

或日箕輪みのわの内儀は思も懸けず訪来とひきたりぬ。その娘のお俊と宮とは学校朋輩ほうばいにて常に往来ゆききしたりけれども、未だ家いまと家うちとの交際はあらざるなり。彼等の通学せし頃さへ親々は互に識しらで過ぎたりしに、今は二人の往来も漸く疎くなりけるに及びて、俄にはかにその母の来きたれるは、如何いかなる故ゆゑにか、と宮も両親ふたおやも怪あやしき事に念おもへり。  
 凡そ三時間の後彼は帰行かへりゆきぬ。

先に怪みし家内は彼の来りしよりもその用事の更に思懸けざるに驚けり。貫一は不在なりしかばこの珍き客来のありしを知らず、宮もまた敢て告げずして、二日と過ぎ、三日と過ぎぬ。その日より宮は少く食して、多く眠らずなりぬ。貫一は知らず、宮はいよいよ告げんとは為ざりき。この間に両親は幾度と無く談合しては、その事を決しかねてゐたり。

彼の陰に在りて起れる事、又は見るべからざる人の心に浮べる事どもは、貫一の知る因もあらねど、片時もその目の忘れざる宮の様子の常に変れるを見出さんは難き事にあらず。さも無かりし人の顔の色の遽にはかに光を失ひたるやうにて、振舞など別けて力無く、笑ふさへいと打湿りたるを。



宮が居間と謂ふまでにはあらねど、彼の箏筥手道具等置きたる  
 小座敷あり。ここには火燵こたつの炉を切りて、用無き人の来ては送かたみに  
 冬籠ふゆごもりする所にも用ゐらる。彼は常にここに居て針仕事するな  
 り。倦めば琴をも弾くなり。彼が手玩てすきみと見ゆる狗子柳いのこやなぎのはや  
 根を弛ゆるみ、真しんの打傾きたるが、鮫鯨切あんこうぎりの水に埃ほこりを浮べて小机の  
 傍かたへに在り。庭に向へる肱懸窓ひちかけまどの明きに敷紙しきがみを披ひろげて、宮は膝  
 の上に紅絹もみの引解ひきときを載せたれど、針は持たで、懶ものうげに火燵に靠  
 れたり。

彼は少く食して多く眠らずなりてよりは、好みてこの一間に入い  
 りて、深く物思ふなりけり。両親ふたおやは仔細しさいを知れるにや、この様  
 子をば怪まんともせで、唯彼の為なすままに委まかせたり。

この日貫一は授業始はじめの式のみにて早く帰来かへりきにけるが、下座敷したに  
は誰たれも見えで、火燵こたつの間に宮みやの咳せきく声こゑして、後は静しずに、我が帰かへり  
しを知らざるよと思ひければ、忍足しのすくに窺うかがひ寄よりぬ。襖ふすまの僅わずかに啓あ  
きたる隙ひまより差さ覗しのぞけば、宮は火燵に倚よりて硝子障子がらすを眺ながめては  
俯目ふしめになり、又胸痛むねいたきやうに仰あぎては太息ためいき吐つきて、忽たちまち物の音  
を聞澄きこすが如く、美うき目めを睜みはるは、何なんをか思おもひ凝こすなるべし。  
人の窺うかがふと知らねば、彼は口もて訴こふるばかりに心の苦悶くもんをその  
かたあらははばかか  
状じやうに顕あして憚あやらざるなり。

貫一は異あやみつつも息を潜ひそめて、猶なほ彼の為ためんやうを見んとしたり。  
宮は少時しばしありて火燵に入りけるが、遂つひに櫓やぐらに打俯うちふしぬ。  
柱に身を倚よせて、斜ななめに内を窺うかがひつつ貫一は眉まゆを顰ひそめて思おもひ惑まど

へり。

彼は如何なる事ありてさばかり案じ煩ふならん。さばかり案じ煩ふべき事を如何なれば我に明さざるならん。その故のあるべく覚えざるとともに、案じ煩ふ事のあるべきをも彼は信じ得ざるなりけり。

かく又案じ煩へる彼の面も自ら俯きぬ。問はずして知るべきにあらずと思定めて、再び内を差覗きけるに、宮は猶打俯してゐたり。何時か落ちけむ、蒔絵の櫛の零れたるも知らで。

人の氣勢に驚きて宮の振仰ぐ時、貫一は既にその傍に在り。彼は慌てて思顔るる気色を蔽はんとしたるが如し。

「ああ、吃驚した。何時御帰んなすつて」

「今歸つたの」

「さう。<sup>ちつと</sup>些も知らなかつた」

宮はおのれの顔の<sup>しきり</sup>頻に眺めらるるを<sup>まば</sup>眩ゆがりて、

「何をそんなに<sup>み</sup>視るの、可<sup>いや</sup>厭、私は」

されども彼は猶目を放たず、宮はわざと<sup>うちそむ</sup>打背きて、裁片<sup>きれたたふ</sup>畳

の内を<sup>かきさが</sup>撈せり。

「宮<sup>みい</sup>さん、お前さんどうしたの。ええ、何<sup>どこ</sup>処か不<sup>わるい</sup>快のかい」

「何ともないのよ。何<sup>なぜ</sup>故？」

かく言ひつつ<sup>ますます</sup>益急に<sup>かきさが</sup>撈せり。貫一は帽を冠<sup>かぶ</sup>りたるまま火燵に片<sup>か</sup>

肱<sup>たひぢか</sup>掛けて、<sup>ななめ</sup>斜に彼の顔を見遣<sup>みや</sup>りつつ、

「だから僕は始終水臭いと言ふんだ。さう言へば、直<sup>ちき</sup>に疑<sup>うたぐり</sup>深<sup>ふか</sup>

いの、神経質だのと言ふけれど、それに違無いぢやないか」

「だつて何ともありませんなもの……」

「何ともないものが、ぼんやり惘然考へたり、ためいき太息を吐いたりしてふさ鬱い

であるものか。僕は先之からさつき唐紙からかみの外で立つて見てゐたんだよ。

病氣かい、心配でもあるのかい。言つて聞きしたつて可いぢやないか」

宮は言ふところを知らず、わづか纔に膝の上なる紅絹もみを手弄てまさぐるのみ。

「病氣なのかい」

彼はわづか僅に頭を掉ふりぬ。

「それぢや心配でもあるのかい」

彼はなほ頭を掉れば、

「ぢやどうしたと云ふのさ」

宮は唯胸うちの中を車輪くるまなどの廻めぐるやうに覚ゆるのみにて、誠にも  
いつはりことばいだ  
詐いつはりにも言を出すべき術すべを知らざりき。彼は犯せる罪の終つひに秘つひむ能  
はざるを悟れる如き恐怖おそれの為に心こころをののこす。如何いかに答へん  
とさへ惑へるに、傍かたはらには貫一の益詰ならんと待つよと思へば、身は  
搾しぼらるるやうに迫せまりくる息の隙ひまを、得も謂いはれず冷ひやかなる汗の流  
れ流れぬ。

「それぢやどうしたのだと言ふのに」

貫一こわねの声音は漸やうやく苛立いらだちぬ。彼の得言はぬを怪しと思へばなり。

宮は驚そぞろきて不覺いひいに言出せり。

「どうしたのだから私にも解らないけれど、……私はこの二三日ど

うしたのだか……変に色々な事を考へて、何だか世の中がつまらなくなつて、唯悲くなつて来るのよ」

あき 呆れたる貫一は瞬もせで耳を傾けぬ。またたき

「人間と云ふものは今日かうして生きてゐても、何時死んで了ふか解らないのね。かうしてゐれば、可たのしみ樂な事もある代に辛い事

や、悲い事や、苦い事くるしなんぞが有つて、二つ好い事は無し、考れば

考るほど私は世の中が心細いわ。不図ふつとさう思おもひだ出したら、毎日

そんな事ばかり考へて、可厭いやな心地になつて、自分でもどうか為

たのかしらんと思ふけれど、私病氣のやうに見えて？」

目を閉ぢて聴きゐし貫一は徐しづかまぶたに眸を開くとともに眉まゆを顰ひそめて、

「それは病氣だ！」

宮は打<sup>うちしを</sup>萎<sup>かしら</sup>れて頭を垂れぬ。

「然<sup>しか</sup>し心配する事は無いさ。氣に為ては可かんよ。可いかい」

「ええ、心配しはしません」

異<sup>あやし</sup>く沈みたるその声の寂しさを、如何<sup>いか</sup>に貫一は聴きたりしぞ。

「それは病氣<sup>せみ</sup>の所為<sup>せい</sup>だ、脳でも不良<sup>わるい</sup>のだよ。そんな事を考へた日

には、一日だつて笑つて暮せる日は有りはしない。固<sup>もと</sup>より世の中

と云ふものはさう面白い義<sup>わけ</sup>のものぢやないので、又人の身の上ほ

ど解らないものは無い。それはそれに違無いのだけれど、衆<sup>みんな</sup>が皆

そんな了<sup>りようけん</sup>簡<sup>かん</sup>を起して御覧な、世界中御寺ばかりになつて了<sup>しま</sup>ふ。

儚<sup>はかな</sup>いのが世の中と覺悟した上で、その儚い、つまらない中で切<sup>せめ</sup>て

は樂<sup>たのしみ</sup>を求めやうとして、究竟<sup>つまり</sup>我々が働いてゐるのだ。考へて鬱<sup>ふさ</sup>い



だところで、つまらない世の中に儂い人間と生れて来た以上は、  
 どうも今更為方が無いぢやないか。だから、つまらない世の中を  
 幾分いくぶんか面白く暮さうと考へるより外は無いのさ。面白く暮すには、  
 何かたのしみ樂が無ければならない。一事ひとつかうと云ふ樂があつたら決して  
 世の中はつまらんものではないよ。宮みさんはそれでは樂と云ふも  
 のが無いのだね。この樂があればこそ生きてゐると思ふ程の樂は  
 無いのだね」

宮は美き目を挙げて、求むるところあるが如くひそか儼ひそかに男の顔を見  
 たり。

「きつと無いのだね」

彼は笑あはを含みぬ。されども苦しげに見えたり。

「無い？」

宮の肩頭かたさきを捉りて貫一は此方こなたに引向けんとすれば、為すま  
まに彼は緩く身ゆるを廻めぐらしたれど、顔のみは可羞はぢがましそむく背けてゐたり。

「さあ、無いのか、有るのかよ」

肩に懸けたる手をば放さで連しきりに揺るるを、宮は鍔くろがねの槌つちもて撃うちこ  
懲さるるやうに覺えて、安き心もあらず。冷ひやなる汗は又一時流ひとしき  
出れいでぬ。

「これは怪けしからん！」

宮は危あやぶみつつ彼の顔色うかがを候ひぬ。常の如く戯るるなるべし。そ  
の面おもては和やはらぎて一点の怒氣むしだにあらず、寧ろ唇頭くちもとには笑を包める  
なり。

「僕などは一件ひとつ大きな大きな楽があるので、世の中が愉快で愉快で耐たまらんの。一日が経たつて行くのが惜くて惜くてね。僕は世の中がつまらない為にその樂を拵こしらへたのではなくて、その樂の為にこの世の中に生きてゐるのだ。若もしこの世の中からその樂を取去つたら、世の中は無い！ 貫一といふ者も無い！ 僕はその樂と生し死ようしを俱ともにするのだ。宮みさん、可うらやまし羨いだらう」

宮たちまは忽たちまち全身の血の氷れるばかりの寒さに堪たへかねて打顫うちふるひしが、この心の中を覺さとられじと思へば、弱る力を励して、

「可うらやまし羨いわ」

「可羨どうぞければ、お前さんの事だから分けてあげやう」

「何卒」

「ええみんなや悉皆遣つて了しまへ！」

彼は外オバコオト套かかしの衣兜より一袋のボンボンを取出とりいだして火燵こたつの上

に置けば、余力はずみに袋の口は弛ゆるみて、紅白の玉は珊さらさら々と乱みだれ出で

ぬ。こは宮の最も好める菓子なり。

## 第六章

その翌々日なりき、宮は貫一に勧められて行きて医の診察を受  
けしに、胃病なりとて一いちびん瓶の水薬すいやくを与へられぬ。貫一は信まことに

胃病なるべしと思へり。患者は必ずさる事あらじと思ひつつもそ  
の薬を服したり。懊惱おうのうとして憂うきに堪たへざらんやうなる彼の容ようた

体いに幾許いくばくの変も見えざりけれど、その心に水と火の如きものあ

りて相剋あひこくする苦痛は、益募ますますりて止やまざるなり。

貫一は彼の憎からぬ人ならずや。怪あやしむべし、彼はこの日頃さし

も憎からぬ人を見ることを懼おそれぬ。見ねばさすがに見まほしく思

ひながら、面おもてを合すれば冷汗ひやあせも出づべき恐怖おそれを生ずるなり。彼

の情有なさけある言を聞けば、身をも斫きらるるやうに覚ゆるなり。宮は

彼の優こころねき心根を見ることを恐れたり。宮が心地勝すぐれずなりてよ

り、彼に對する貫一の優しさはその平生へいぜいに一層を加へたれば、

彼は死もとを覓もとむれども得ず、生を求むれども得ざらんやうに、悩乱

してほとほとその堪たふべからざる限に至りぬ。

遂つひに彼はくるしみこの苦を両親に訴へしにやあらん、一日母と娘あるひとは遽にはか

に身支度して、忙々いそがはしく車に乗りて出でぬ。彼等は小からぬ一ひ

個とつの旅たび鞆かばんを携へたり。

大風おほかせの風なぎたる迹あとに孤屋ひとつやの立てるが如く、侘わびしげに留守せ

る主あるじの隆三ひとは独り碁盤に向ひて碁経きけいを披ひらきゐたり。齡よはひはなほ六十

に遠かけれど、頭かしは夥おびき白髪ただしにて、長く生ひひたる髯ひげなども六分は白

く、容かたちは瘦やせたれど未いまだ老おとろの衰へも見えず、眉び目も温厚おんこうにして頗すこぶる

古井波こせい無きの風あり。

やがて帰来かへりきにける貫一は二人の在らざるを怪あるじみて主たづに訊ねぬ。

彼は徐しづかに長き髯なを撫なでて片笑みつつ、

「二人はの、今朝新聞を見ると急に思しきりきりいて、熱海へ出掛けたよ。何でも昨日きのふ医者しきりが湯治が良いいと言いうて切しきりに勧めたらしいのだ。い

や、もう急の思おもひつき着きで、脚あしもと下から鳥の起たつやうな騒さわをして、十二時三十分の瀕きしや車で。ああ、独ひとりで寂いところ、まあ茶でも淹いれやう」

貫一は有る可からざる事のやうに疑へり。

「はあ、それは。何だか夢のやうですな」

「はあ、私わしもそんな塩梅あんばいで」

「然しかし、湯治は良いでございませう。幾日いくかほど逗とまり留ゆうのお心算つもりで？」

「まあどんなだか四五日と云ふので、些ほんの着のままで出掛けたのだが、なあに直ちきに飽あきて了しまうて、四五日も居られるものか、出で養生うちうの方が楽だ。何か旨うまい物でも食べやうぢやないか、

二人で、なう」

貫一は着更<sup>きか</sup>へんとて書齋に還りぬ。宮の遺<sup>のこ</sup>したる筆の蹟<sup>あと</sup>などあらんかと思ひて、求めけれども見えず。彼の居間をも尋ねけれども在らず。急ぎ出でしなればさもあるべし、明日は必ず便<sup>たより</sup>あらんとおもひかへ思<sup>おもひ</sup> 翻<sup>かへ</sup>せしが、さすがに心樂まざりき。彼の六時間学校に在りて帰来<sup>かへりきた</sup>れるは、心の瘦<sup>や</sup>するばかり美<sup>おも</sup>き梯<sup>かけ</sup>に饑<sup>う</sup>ゑて帰来れるなり。彼は空<sup>むなし</sup>く饑<sup>う</sup>ゑたる心を抱<sup>いだ</sup>きて慰むべくもあらぬ机に向へり。

「実に水臭いな。幾許<sup>いくら</sup>急いで出掛けたつて、何とか一言<sup>ひとこと</sup>ぐらゐ言遺<sup>いひお</sup>いて行きさうなものぢやないか。一寸<sup>ちよつと</sup>其処へ行つたのぢやなし、四五日でも旅だ。第一言遺<sup>いひお</sup>かないよりは、湯治に行くとなら行くと、始<sup>はじめ</sup>に話が有りさうなものだ。急に思着いた？ 急



に思着いたつて、急に行かなければならん所ぢやあるまい。俺の  
 歸るのを待つて、話をして、明日行くあしたと云ふのが順序だらう。四  
 五日ぐらゐの離別わかれには顔を見ずに行つても、あの人は平氣なのか  
 しらん。

女と云ふ者は一体男よりは情が濃こまやかであるべきなのだ。それが濃  
 でないと為れば、愛してをらんと考へるより外は無い。豈まさかにあの  
 人が愛してをらんとは考へられん。又万々ばんばんそんな事は無い。け  
 れども十分に愛してをると云ふほど濃ではないな。

元来あの人の性質は冷淡さ。それだから所謂いはゆる『娘らしい』と  
 ころが余り無い。自分の思ふやうに情が濃でないのもその所為せゐか  
 知らんて。子供の時分から成程さう云ふ傾向かたむきは有もつてゐたけれ

ど、今のやうに太甚くはなかつたやうに考へるがな。子供の時分にさうであつたなら、今ぢや猶更でなければならんだ。それを考へると疑ふよ、疑はざるを得ない！

それに引替へて自分だ、自分の愛してゐる度は実に非常なもの、殆ど……殆どではない、全くだ、全く溺れてゐるのだ。自分でもどうしてこんなだらうと思ふほど溺れてゐる！

これ程自分の思つてゐるのに対しても、もう少し情が篤くなければならんだ。或時などは実に水臭い事がある。今日の事なども随分酷い話だ。これが互に愛してゐる間の仕草だらうか。深く愛してゐるだけにかう云ふ事を為れると実に憎い。

小説的かも知れんけれど、八犬伝の浜路だ、信乃が明朝は立

つて了ふと云ふので、親の目を忍んで夜更よふけに逢あひに来る、あの情じやうあひ

合あひでなければならぬ。いや、妙だ！ 自分の身の上も信乃に似てゐる。幼少から親に別れてこの鳴沢の世話になつてゐて、  
そこ其処の娘と許いひなづけ嫁……似てゐる、似てゐる。

然し内の浜路は困る、信乃にばかり氣を揉もして、余り憎いな、  
 そでない為しかた方だ。これから手紙を書いて思ふさま言つて遣やらうか。  
 憎いは憎いけれど病氣ではあるし、病人に心配させるのも可か哀あいさ  
 うだ。

自分は又神経質に過るから、思おもひ過すこしを為るところも大きにあら  
 るのだ。それにあの人からも不斷言はれる、けれども自分が思おもひ  
すこし過であるか、あの人が情じが薄うすいのかは一件ひとつの疑問だ。

時々さう思ふ事がある、あの人の水臭い仕打の有るのは、多少いくらか自分を侮あなどつてゐるのではあるまいか。自分は此家ここの厄介者、あの人は家附の娘だ。そこで自ら主おのづかと家来と云ふやうな考が始終有つて、……否いや、それもあの人に能く言れる事だ、それくらゐなら始から許しはしない、好いと思へばこそかう云ふ訳に、……さうだ、さうだ、それを言出すと太く慍ひどられるのだ、一番それを慍おこるよ。勿論もちろんそんな様子の些少すこでも見えた事は無い。自分の僻見ひがみに過ぎんのだけれども、気が済まないから愚痴も出るのだ。然し、若ももしあの人の心にそんな根性が爪の垢あかほどでも有つたらば、自分は潔くこの縁は切つて了ふ。立派に切つて見せる！ 自分は愛情との俘とりことはなつても、未だま奴隸になる氣は無い。或はあるひこの縁を切つ

たなら自分はあの人を忘れかねて 焦こがれ死じに死ぬかも知れん。死なんまでも発狂するかも知れん。かまはん！ どうならうと切れて了ふ。切れずに措おくものか。

それは自分の僻見ひがみで、あの人に限つてはそんな心は微塵みじんも無いのだ。その点は自分も能く知つてゐる。けれども情こまやかが濃でないのは事実だ、冷淡なのは事実だ。だから、冷淡であるから情が濃でないのか。自分に対する愛情がその冷淡を打壊うちこはすほどに熱しいのか。或は熱し能あたはざるのが冷淡の人の愛情であるのか。これが、研究すべき問題だ」

彼は意こころに満たぬ事ある毎に、必ずこの問題を研究せざるなけれども、未だ曾かつて解釈し得ざるなりけり。今日はや如何いかに解釈せん

とすらん。

(六) の二

翌日果して熱海より便たよりはありけれど、僅わづかに一枚の端書はがきをもて途中の無事と宿とを通知せるに過ぎざりき。宛名は隆三と貫一とを並べて、宮の手蹟しゆせきなり。貫一は読よみ了をはると齊ひとしく片々きれきれに引裂きて捨ててけり。宮の在らば如何いかにとも言解いひとくなるべし。彼の親したしく言解いひとかば、如何に打腹立うちはらだちたりとも貫一の心の釈とけざることいひとはあらじ。宮の前には常に彼は慍いかりをも、恨をも、憂うれひをも忘るるなり。今は可なつかし懐なつかしき顔を見る能はざる失望に加ふるに、この不平に

遭<sup>あ</sup>ひて、しかも言解く者のあらざれば、彼の慍<sup>いかり</sup>は野火の飽くこと知らで燎<sup>や</sup>くやうなり。

この夕隆<sup>ゆふべ</sup>三は彼に食後の茶を薦<sup>すす</sup>めぬ。一人佗<sup>わび</sup>しければ留<sup>とど</sup>めて物のがたら語<sup>ご</sup>はんとてなるべし。されども貫一の屈托<sup>くつたく</sup>顔<sup>がほ</sup>して絶えず思の非<sup>あら</sup>ぬ方<sup>かた</sup>に馳<sup>は</sup>する気色<sup>けしき</sup>なるを、

「お前どうぞ為<sup>し</sup>なすつたか。うむ、元気が無いの」

「はあ、少し胸が痛みますので」

「それは好くない。劇<sup>ひど</sup>く痛みでもするかな」

「いえ、なに、もう宜<sup>よろ</sup>いのでございます」

「それぢや茶は可<sup>い</sup>くまい」

「頂<sup>ちようだい</sup>戴<sup>だい</sup>します」

かかる浅ましき愠いかりを人に移さんは、甚はなはだ謂いは無き事なり、と自ら制して、書斎に歸りて愁なまじひ心を傷めんより、人に対して姑しばらうきく憂うれしを忘るるに如しかじと思ひければ、彼は努めて寛くつろがんとしたれども、動ややもすれば心は空そらになりて、主の語を聞あるじことば逸ききそらさむとす。

今日ふみ文の来て細こま々と優き事など書かきつら聯ねたらば、如何いかに我は嬉うれしからん。なかなか同じ処に居て飽かず顔を見るに易かへて、その樂たのしみは深かるべきを。さては出行いでゆきし恨も忘られて、二夜三夜は遠ふたよみよとほざかりて、せめてその文を形見に思続けんもをかしかるべきを。

彼はその身の卒にはかに出行いでゆきしを、如何いかに本意ほい無く我の思ふらんかは能よく知るべきに。それを知らば一ひとふで筆書きて、など我を慰めんとは為せざる。その一筆を如何に我の嬉うれく思ふらんかをも能く知る



べきに。我を可憐いとしと思へる人の何故なにゆゑにさは為せざるにやあらん。  
かくまでに情なさけあつ篤あつからぬ恋の世に在るべきか。疑ふべし、疑ふ  
べし、と貫一の胸は又乱れぬ。主の声に驚かされて、彼は忽たちまちそ  
の事を忘るべき吾われに復かへれり。

「ちと話したい事があるのだが、や、誠に妙な話で、なう」

笑ふにもあらず、顰ひそむにもあらず、稍やや自ら嘲あざむに似たる隆三の

顔は、燈火ともしびに照されて、常には見ざる異あやし相あらはを顕あらわせるやうに、

貫一は覚ゆるなりき。

「はあ、どういふ御話ですか」

彼は長き髭ひげを忙せはしく揉もみては、又頤おとがひの辺あたりより徐しづかに撫なで下おろして、先まづ

打出うちいさん語ことばを案じたり。

「お前の一身上の事に就いてだかの」

わづか

纒にかく言ひしのみにて、彼は又遅ひぬ、その髯は虻に苦しむ

ためら

ひげ あぶ

馬の尾のやうに揮はれつつ、

ふる

「いよいよお前も今年の卒業だつたの」

にはか

おのづひぎ

貫一は遽に敬はるる心地して自と膝を正せり。

わし

「で、私もまあ一安心したと云ふもので、幾分かこれでお前の御

とつさん

おんがへし

ますます

父様に対して 恩返も出来たやうな訳、就いてはお前も益勉

強してくれんでは困るなう。未だこの先大学を卒業して、それか

ら社会へ出て相応の地位を得るまでに仕上げなければ、私も鼻は

高くないのだ。どうか洋行の一つも為せて、指折の人物に為し

と考へてゐるくらゐ、未だ未だこれから 両肌を脱いで世話を

ま

りようはだ

しなければならんお前の体だ、なう」

これを聞<sup>き</sup>ける貫一は鉄<sup>てつ</sup>繩<sup>じよう</sup>をもて縛<sup>い</sup>め<sup>まし</sup>られたるやうに、身の重きに堪<sup>た</sup>へず、心の転<sup>うた</sup>た<sup>くる</sup>苦<sup>し</sup>きを感じたり。その恩の余りに大いなるが為に、彼はその中<sup>うち</sup>に在りてその中に在ることを忘れんと為るへいぜい平生を省みたるなり。

「はい。非常な御恩に預りまして、考へて見ますと、口では御礼の申しやうもございません。愚父<sup>おやぢ</sup>がどれ程の事を致したか知りませんが、なかなかこんな御恩返を受けるほどの事が出来るものでは有りません。愚父の事は措<sup>お</sup>きまして、私は私で、この御恩はどうか立派に御返し申したいと念<sup>おも</sup>つてをります。愚父の亡<sup>なくな</sup>りましてあの時に、此方<sup>こちら</sup>で引取<sup>いた</sup>つて戴<sup>ただ</sup>かなかつたら、私は今頃何に成つ

てをりますか、それを思ひますと、世間に私ほど幸なものは恐く  
無いでございませう」

彼は十五の少年の驚くまでに大人びたる己おのれを見て、その着たる  
衣きぬを見て、その坐れるしとねを見て、やがて美き宮と共にこの家の主ぬし  
となるべきその身を思ひて、漫そぞろに涙を催せり。実に七千円の粧そうれ  
奩あんを随へて、百万金も購あがなふ可からざる恋女房を得べき学士よ。

彼は小買の米を風呂敷に提げて、その影の如く瘦せたる犬とともに  
に月夜を走りし少年なるをや。

「お前がさう思うてくれれば私も張合わしがある。就いては改めてお  
前に頼たのみがあるのだが、聴いてくれるか」

「どういふ事ですか、私で出来ます事ならば、何なりと致します」

彼はかく潔く答ふるに憚らざりけれど、心の底には危むところ  
 無きにしもあらざりき。人のかかる言を出す時は、多く能はざる  
 事を強ふる例なればなり。

「外でも無いがの、宮の事だ、宮を嫁に遣らうかと思つて」  
 見るに堪へざる貫一の驚愕をば、せめて乱さんと彼は慌  
 忙しく語を次ぎぬ。

「これに就いては私も種々と考へたけれど、大きに思ふところも  
 あるで、いつそあれは遣つて了うての、お前すこはも少しの事だから  
 大学を卒業して、四五年も欧羅巴エウロッパへ留学して、全然すつかり仕上げた  
 ところで身を固めるとしたらどうかかな」

汝なんぢの命を与へよと逼らるる事あらば、その時の人の思は如何いかな

るべき！　可おそろし恐きまでに色を失へる貫一は空く隆三の面を打目うち成まもるのみ。彼は太く困こうじたる体ていにて、長き髯をば揉みに揉みたり。「お前に約束をして置いて、今更へんがへ変換を為るのは、何とも氣の毒だが、これに就いては私も大きに考へたところがあるので、必ずお前の為にも悪いやうには計はんから、可いかい、宮は嫁に遣る事にしてくれ、なう」

待てども貫一の言ことばを出いださざれば、主は寡あるじすくなからず惑へり。

「なう、悪く取つてくれば困るよ、あれを嫁に遣るから、それで我家うちとお前との縁を切つて了ふと云ふのではない、可いかい。大たいした事は無いがこの家は全然そつくりお前に譲るのだ、お前は矢張やはり私の家督よ、なう。で、洋行も為せやうと思ふのだ。必ず悪く取つて

は困るよ。

約束をした宮をの、余所<sup>よそ</sup>へ遣ると云へば、何かお前に不足でもあるやうに聞えるけれど、決してさうした訳ではないのだから、其<sup>そこ</sup>処はお前が能く承知してくれなければ困る、誤解されては困る。又お前にしても、学問を仕上げて、なう、天晴<sup>あっぱれ</sup>の人物に成るのが第一の希望であらう。その志を遂<sup>と</sup>げさへ為れば、宮と一所になる、ならんはどれ程の事でもないのだ。なう、さうだらう、然<sup>しか</sup>しこれは理窟<sup>りくつ</sup>で、お前も不服かも知れん。不服と思ふから私も頼むのだ。お前に頼<sup>たの</sup>みがあると云うたのはこの事だ。

従<sup>これまで</sup>来もお前を世話した、後<sup>これから</sup>来も益世話をせうからなう、其<sup>そ</sup>処に免じて、お前もこの頼は聴いてくれ」

貫一は戦<sup>をの</sup>く唇<sup>ぐちびる</sup>を咬緊めつつ、故<sup>こと</sup>ら緩<sup>ゆる</sup>舒<sup>やか</sup>に出<sup>い</sup>せる声<sup>こ</sup>音<sup>わね</sup>は、怪<sup>あや</sup>くも常<sup>じょう</sup>に變<sup>か</sup>れり。

「それぢや翁<sup>おぢさん</sup>様の御都合で、どうしても宮<sup>みや</sup>さんは私に下<sup>くだ</sup>さる訳には参<sup>まゐ</sup>らんのですか」

「さあ、断<sup>た</sup>つて遣<sup>や</sup>れんと云ふ次第ではないが、お前の意はどうだ。私の頼<sup>たの</sup>は聴<sup>き</sup>ずとも、又自分の修業の邪魔にならうとも、そんな貪<sup>と</sup>んちやく着<sup>き</sup>は無<sup>な</sup>しに、何でもかでも宮が欲しいと云ふのかな」

「……………」

「さうではあるまい」

「……………」

得言はぬ貫一が胸には、理<sup>ことわり</sup>に似たる彼の理不尽を憤りて、責む



べき事、詰るべき事、罵るべき、言破るべき事、辱むべき事の数  
 々は沸くが如く充満したれど、彼は神にも勝れる恩人なり。理非  
 を問はずその言には逆ふべからずと思へば、血出づるまで舌を咬  
 みても、敢て言はじと覚悟せるなり。

彼は又思へり。恩人は恩を枷に如く此く逼れども、我はこの  
 枷の為に屈せらるべきも、彼は如何なる斧を以てか宮の愛をば割  
 かとすらん。宮が情は我が思ふままに濃ならずとも、我を棄つ  
 るが如きさばかり薄き情にはあらざるを。彼だに我を棄てざらん  
 には、枷も理不尽も恐るべきかは。頼むべきは宮が心なり。頼ま  
 るるも宮が心也と、彼は可憐き宮を思ひて、その父に対する慍を  
 和げんと勉めたり。

我は常に宮が情の濃なさはこまやかならざるを疑へり。あだかも好しこの理不

尽ぞ彼が愛の力を試むるに足るなる。善し善し、盤根錯節ばんこんさくせつに

遇あはずんば。

「嫁に遣ると有仰おつしやるのは、何方どちらへ御遣おつかはしになるのですか」

「それは未だ確ましかとは極きまらんがの、下谷したやに富山銀行と云ふのがある、

それ、富山重平な、あれの息子の嫁に欲いと云ふ話があるので」

それぞ箕輪の骨牌会かるたかいに三百円の金剛石ダイヤモンドを炫ひけらかせし男にあら

ずやと、貫一は陰ひそかに嘲笑あざわらへり。されど又余りにその人の意外な

るに駭おどろきて、やがて又彼は自ら笑ひぬ。これ必ずしも意外ならず、

苟くも吾が宮の如く美きを、目あり心あるものの誰たれかは恋ひざら

ん。独り怪ひとしとも怪きは隆三の意こころなる哉かな。我十年の約わがは輕かるがろし々々

く破るべきにあらず、猶なほ謂いは無なきは、一人娘を出いだして嫁かせしめん  
とするなり。戯たはむるにはあらずや、心狂へるにはあらずや。貫一  
は寧むしろかく疑ふをば、事の彼の真意に出でしを疑はんより邇ちかかる  
べしと信じたりき。

彼は競争者の金剛ダイアモンド石なるを聞きて、一度ひとたびは汚けがされ、辱はづかしめら  
れたらんやうにも怒いかりを作なせしかど、既に勝負は分明ぶんめいにして、我  
は手つかを束ねてこの弱敵の自ら僵たふるるを看みんと思へば、心稍落ややるぬ。

「は、はあ、富山重平、聞いてをります、偉い財産家で」

この一言に隆三おもての面は熱くなりぬ。

「これに就いては私わしも大きに考へたのだ、何なにに為しろ、お前との約  
束もあるものなり、又一人娘の事でもあり、然しかし、お前の後来こうらいに

就いても、宮の一身に就いても、又私たちは段々取る年であつて見れば、その老後だの、それ等の事を考へて見ると、この鳴沢の家には、お前も知つての通り、かうと云ふ親類も無いで、何かに就けて誠に心細いわ、なう。私たちは追々年を取るばかり、お前たちは若しと云ふもので、ここに可頼たのもしい親類が有れば、どれ程心丈夫だか知れんて、なう。そこで富山ならば親類に持つても可愧はづかしからん家格いへがらだ。気の毒な思をしてお前との約束へんがへを變易つまりするのも、私たちが一人娘を他へ遣つて了ふのも、究竟は銘々の為に行末好かれと思ふより外は無いのだ。

それに、富山からは切つての懇望たで、無理に一人娘を貰ふと云ふ事であれば、息子夫婦は鳴沢の子同様に、富山も鳴沢も一家いっけの

つもりで、決して鳴沢家を疎おろそには為せまい。娘が内に居なくなつて不都合があるならば、どの様にもその不都合の無いやうには計はうからと、なう、それは随分事を分けた話で。

決して慾ではないが、良い親類を持つと云ふものは、人で謂いへば取とりも直なさず良い友達で、お前にしてもさうだらう、良い友達が有れば、万事の話し合手になる、何かの力になる、なう、謂はば親類は一家いっかの友達だ。

お前がこれから世の中に出るにしても、大相たいそうな便宜になるといふもの。それやこれや考へて見ると、内に置かうよりは、遣つた方が、誰たれの為彼の為ではない。四方八方が好いわしのだから、私も決心して、いつそ遣らうと思ふのだ。

私の了簡りようけんはかう云ふのだから、必ず悪く取つてくれては困るよ、なう。私だとして年効としがひも無く事を好んで、何為なにしに若いものの不為ふためになれと思ふものかな。お前も能く其処そこを考へて見てくれ。私もかうして頼むからは、お前の方の頼も聴かう。今年卒業したら直すぐに洋行でもしたいと思ふなら、又さう云ふ事に私も一番奮発しやうではないか。明日にも宮と一処になつて、私たちを安心さしてくれるよりは、お前も私も少しすこのところを辛抱して、いつその事博士はかせになつて喜ばしてくれんか」

彼はさも思ひのままに説完ときおほせたる面色おももちして、寛ゆたかに髯ひげを撫なでてゐたり。

貫一は彼の説進むに従ひて、漸やうやくその心事の火を覩みるより明あきらか

るを得たり。彼が千言万語の舌を弄<sup>ろう</sup>して倦<sup>う</sup>まざるは、畢<sup>ひつき</sup> 竟<sup>よう</sup>利  
 の一字を掩<sup>おほ</sup>はんが為のみ。貧する者の盗むは世の習ながら、貧せ  
 ざるもなほ盗まんとするか。我も穢<sup>けが</sup>れたるこの世に生れたれば、  
 穢<sup>おこな</sup>れたりとは自ら知らで、或は穢<sup>あるひ</sup>れたる念を起し、或は穢<sup>おこな</sup>れたる  
 行を為すことあらむ。されど自ら穢<sup>おこな</sup>れたりと知りて自ら穢すべき  
 や。妻を売<sup>おこな</sup>りて博士を買ふ！ これ豈<sup>あに</sup>穢れたるの最も大なる者な  
 らずや。

世は穢れ、人は穢れたれども、我は常に我恩人の独<sup>ひと</sup>り汚<sup>けがれ</sup>に染<sup>そ</sup>み  
 ざるを信じて疑はざりき。過ぐれば夢より淡き小恩をも忘れずし  
 て、貧<sup>みなしご</sup>き孤子を養へる志は、これを証<sup>あま</sup>して余あるを。人の浅ま  
 しきか、我の愚なるか、恩人は酷<sup>むご</sup>くも我を欺きぬ。今は世を挙げ

て皆穢れたるよ。悲めばとて既に穢れたる世をいかにせん。我はこの時この穢れたる世を喜ばんか。さしもこの穢れたる世に唯一つ穢れざるものあり。喜ぶべきものあるにあらずや。貫一は可憐き宮が事を思へるなり。

私の愛か、死をもて脅すとも得て屈すべからず。宮が愛か、某の帝の冠を飾れると聞く世界無双の大金剛石をもて購はんとすとも、争でか動し得べき。我と彼との愛こそ淤泥の中に輝く玉の如きものなれ、我はこの一つの穢れざるを抱きて、この世の渾て穢れたるを忘れん。

貫一はかく自ら慰めて、さすがに彼の巧言を憎し可恨しとは思ひつつも、枉げてさあらぬ体に聴きゐるなりけり。



「それで、この話は宮さんみいも知つてゐるのですか」

「薄々うすうすは知つてゐる」

「では未だ宮さんまの意見は御聞にならんのぞ？」

「それは、何だ、一寸聞いたがのちよつと」

「宮さんはどう申してをりました」

「宮か、宮は別にどうといふ事は無いのだ。御父様おとつさんや御母様おつかさん

の宜いやうにと云ふので、宮の方には異存は無いのだ、あれにも

すつかり訳を説いて聞かしたところが、さう云ふ次第ならばと、

漸く得心やうやがいつたのだ」

断じて詐いつはりなるべしと思ひながらも、貫一の胸は跳をどりぬ。

「はあ、宮さんは承知を為ましたので？」

「さう、異存は無いのだ。で、お前も承知してくれ、なう。一寸聞けば無理のやうではあるが、その実少しも無理ではないのだ。<sup>わし</sup>私の今話した訳はお前にも能く解つたらうが、なう」

「はい」

「その訳が解つたら、お前も快く承知してくれ、なう。なう、貫一」

「はい」

「それではお前も承知をしてくれるな。それで私も多きに安心した。<sup>くはし</sup>。悉い事は何れ又寛<sup>ゆつくり</sup>緩話を為やう。さうしてお前の頼も聴かうから、まあ能く種々<sup>いろいろ</sup>考へて置くが可いの」

「はい」

## 第七章

熱海は東京に比して温きこと十余度なれば、今日漸く一月の半  
 を過ぎぬるに、梅林の花は二千本の梢に咲乱れて、日に映へる  
 光は玲瓏として人の面を照し、路を埋むる幾斗の清香は凝り  
 て掬ぶに堪へたり。梅の外には一木無く、処々の乱石の低  
 く横はるのみにて、地は坦に氈を鋪きたるやうの芝生の園の中を、  
 玉の碎けて迸り、練の裂けて翻る如き早瀬の流ありて横さまに貫  
 けり。後に負へる松杉の緑は麗に霽れたる空を攢してその頂に方  
 りて懶げに懸れる雲は眠るに似たり。習との風もあらぬに花は頻

に散りぬ。散る時にかろ軽く舞ふをうぐひす鶯は争ひて歌へり。

宮は母親と連立ちて入いりきた来りぬ。彼等は橋を渡りて、船板の牀し

几ようぎを据ゑたる木この下もとを指してゆる緩く歩めり。彼の病は未いまだ快から

ぬにや、薄うすげしやう仮粧したる顔色も散りたる葩はなびらのやうに衰へて、足の

運はこびたゆも怠ともげに、動すれば頭かしらの低たるを、思出おもひだしては努めて梢ながを眺む

るなりけり。彼の常として物もの案あんじすれば必ず唇くちびるを咬かむなり。彼

は今しきり頻に唇を咬みたりしが、

「御母おつかさん、どうしませうねえ」

いと好く咲きたる枝を飽かず見上げし母の目は、この時漸く娘にうつ転りぬ。

「どうせうたつて、お前の心一つぢやないか。初はじめ発にお前が適いき

たいといふから、かう云ふ話にしたのぢやないかね。それを今更……」

「それはさうだけれど、どうも貫一かんいつさんの事が氣になつて。御父とつさんはもう貫一さんに話を為すなつたらうか、ねえ御母おつかさん」

「ああ、もう為すつたらうとも」

宮は又唇を咬みぬ。

「私は、御母さん、貫一さんに顔が合されないわね。だから若しも適ゆくのなら、もう逢あはずに直すつと行つて了しまひたいのだから、さう云ふ都合にして下さいな。私はもう逢あはずに行くわ」

声は低くなりて、美き目は湿うるほへり。彼は忘れざるべし、その涙を拭ぬぐへるハンカチーフは再び逢あはざらんとする人の形見なるを。

「お前がそれ程に思ふのなら、何で自分から適いきたいと言ひなのだえ。さう何時いつまでも気が迷つてゐては困るぢやないか。一日経たてば一日だけ話が運ぶのだから、本当にどうとも確しつかり然極きめなくては何いけないよ。お前が可厭いやなものを無理にお出いでといふのぢやないのだから、断るものなら早く断らなければ、だけれど、今になつて断ると云つたつて……」

「可いいわ。私は適くことは適くのだけれど、貫一さんの事を考へると情無くなつて……」

貫一が事は母の寢覚にも苦むところなれば、娘のその名を言ふ度たびに、犯せる罪をも歌はるる心地して、この良縁の喜ぶべきを思ひつつも、さすがに胸を開きて喜ぶを得しざるなり。彼は強しひて宮

を慰めんと試みつ。兼ねては自ら慰むるなるべし。

「お父さんとつからお話があつて、貫一さんもそれで得心がいけば、済む事だし、又お前あちらが彼方へ適つて、末々まで貫一さんの力になれば、お互の仕合しあはせと云ふものだから、其処そこを考へれば、貫一さんだつて……、それに男と云ふものは思おもひきり切が好いから、お前が心配してゐるやうなものではないよ。これなり遇あはずに行くなんて、それはお前かへ却つて善くないから、矢張逢つて、丁ちゃんと話をしゆきかよひて、さうして清く別れるのさ。この後とも末長く兄弟で往来をしなければならぬものだもの。

いづれ今日か明日あしたには御音信おたよりがあつて、様子が解らうから、さうしたら還つて、早く支度に掛らなければ」

宮は牀しょうぎ几よに寄りて、半は聴なき、半は思ひひつつ、膝ひざに散はな来びらる葩はなを拾ひろひては、おのれの唇くちびるに代かへて連しきりに咬かみ碎くだきぬ。鶯うぐいすの声こゑの絶間せつかんを流ながの音おとは咽むせびて止とまず。

宮は何心おもてあぐ無く面おもてを挙あぐるとともに稍やや隔へてたる木この間まがくれ隠かくに男おとこの漫そぞろあるき

行いする姿すがたを認さとめたり。彼は忽たちまち眼まなこを着きけて、木立きだては垣かきの如ごとく、

花はなは幕まくらの如ごとくに遮さへぎる隙ひまを縫ぬいひつつ、姑しばらくその影かげを逐おひたりしが、

遂つひに誰たれをや見み出いだしけん。慌あわ忙ただしく母親ははに唄うたけり。彼は急きふに牀几しょうぎ

を離はなれて五いつ六あしむ歩あし進すす行みゆきしが、彼方あな方たよりも見み付つけて、逸いち早はや

く呼よびぬ。

「其そこ処こに御出おいででしたか」

その声こゑは静しずなる林はやしを動うごして響ひびきぬ。宮みやは聞きこくと斉ひとしく、恐おそれたる



風情<sup>ふぜい</sup>にて牀<sup>し</sup>几<sup>すくま</sup>の端<sup>はし</sup>に竝<sup>すくま</sup>りつ。

「はい、唯<sup>ただいま</sup>今<sup>がた</sup>し方<sup>がた</sup>参<sup>まゐ</sup>つたばかりでございます。好くお出掛でございしましたこと」

母はかく挨拶<sup>あいさつ</sup>しつつ彼を迎へて立てり。宮は其方<sup>そなた</sup>を見向きもやらで、彼の急<sup>いそぎ</sup>足<sup>あし</sup>に近く音を聞けり。

母子<sup>おやこ</sup>の前に顕<sup>あらは</sup>れたる若き紳士は、その誰<sup>たれ</sup>なるやを説かずもあらなん。目<sup>め</sup>覚<sup>ざま</sup>く大なる金剛石<sup>ダイヤモンド</sup>の指環<sup>おほい</sup>を輝<sup>きら</sup>かせるよ。柄<sup>にぎり</sup>には緑色の玉<sup>ぎよく</sup>を獅子頭<sup>ししがしら</sup>に彫<sup>きざ</sup>みて、象牙<sup>ぞうげ</sup>の如く瑩<sup>つややか</sup>潤<sup>つゑ</sup>に白き杖<sup>つゑ</sup>を携<sup>も</sup>へたるが、その尾<sup>さき</sup>をもて低き梢の花を打落し打落し、

「今お留守へ行きましたて、此処<sup>ここ</sup>だといふのを聞いて追懸<sup>おつか</sup>けて来た訳です。熱いぢやないですか」

宮はやうやう面<sup>おもて</sup>を向けて、さて淑<sup>しとやか</sup>に起ちて、恭<sup>うやうやし</sup>く礼するを、唯

繼は世にも嬉しげなる目して受けながら、なほ飽くまでも倨<sup>おつたかぶ</sup>り高

るを忘れざりき。その張りたる腮<sup>あぎと</sup>と、への字に結べる薄<sup>うすくちびる</sup>唇と、

尤<sup>けやけ</sup>異<sup>きんぶち</sup>き金縁の目鏡<sup>めがね</sup>とは彼が尊大の風に尠<sup>すくな</sup>からざる光彩を添ふる

うたがひ  
や疑無し。

「おや、さやうでございましたか、それはまあ。余り好い御天気でございますから、ぶらぶらと出掛けて見ました。真<sup>ほん</sup>に今日<sup>こんにち</sup>は

お熱いくらゐでございます。まあこれへお掛遊ばして」

母は牀几を払へば、宮は路<sup>みち</sup>を開きて傍<sup>かたはゐたはず</sup>に佇めり。

「貴方<sup>あなた</sup>がたもお掛けなさいましな。今朝です、東京から手紙で、

急用があるから早速帰るやうに——と云ふのは、今度私が一寸し

た会社を建てるのです。外国へ此方こちらの塗物を売込む会社。これは去年中からの計画で、いよいよこの三四月頃には立派に出来上る訳でありますから、私も今は随分忙せはしい体からだ、なにしろ社長ですからな。それで私が行かなければ解らん事があるので、呼びに来た。で、翌あすの朝立たなければならのであります」

「おや、それは急な事で」

「貴方がたも一いつしよ所にお立ちなさらんか」

彼は宮の顔を偷ぬす視みつ。宮は物言はん気色けしきもなくて又母の答へぬ。

「はい、難ありがた有う存じます」

「それとも未だ御在まおいでですか。宿屋に居るのも不自由で、面白くも

ないぢやありませんか。来年あたりは一つ別荘でも建てませう。

何の難わけは無ない事です。地面を広く取つてその中に風流な田舎家あなを造るです。食物などは東京から取寄せて、それでなくては実は保養には成らん。家が出来てから寛ゆつくり緩遊びびに来るです」

「結構でございますね」

「お宮さんは、何ですか、かう云ふ田舎の静な所が御好なの？」

宮は笑えみを含こみて言はざるを、母は傍かたはらより、

「これはもう遊ぶ事なら嫌きらひはございませんので」

「ははははは誰もさうです。それでは以後盛これかきにお遊あそびなさい。

どうせ毎日用は無ないのだから、田舎でも、東京でも西さい京きやうでも、好きな所へ行つて遊ぶのです。船は御嫌おきらひですか、ははあ。船が

平氣だと、支那しなから亜米利加アメリカの方を見物がてら今度旅行を為て来るのも面白いけれど。日本の内ぢや遊山ゆうさんに行いたところあるで知れたもの。どんなに贅沢ぜいたくを為たからと云つて」

「御帰おかへりになつたら一日赤坂の別荘の方へ遊びにお出いで下ください、

ねえ。梅が好いのであります。それは大きな梅林が有つて、一本々々種の違ふのを集めて二百本もあるが、皆老木ばかり。この梅などは全まるで為方しかたが無い！　こんな若い野梅のうめ、薪まきのやうなもので、庭に植ゑられる花ぢやない。これで熱海の梅林も凄すさましい。是非内うちのをお目に懸かけたいでありますね、一日遊びに来て下さい。御馳走ごちそうを為ますよ。お宮さんは何なんが所好すきですか、ええ、一番所好なもの  
は？」

彼は陰ひそかに宮と語らんことを望めるなり、宮はなほ言はずして可は羞づかしげに打笑うちゑめり。

「で、何日御帰でありますか。明朝あした一所に御発足おたちにはなりません。此地こつちにさう長く居なければならんと云ふ次第ではないのでせう、そんなら一所にお立ちなすつたらどうであります」

「はい、難ありがた有ううございしますが、少々宅の方の都合がございまして、二三日内うちには音信たよりがございます筈はずで、その音信たよりを待ちまして、実は帰ることに致してございますものですから、折角の仰せですが、はい」

「ははあ、それぢやどうもな」

唯継は例の倨おごりて天を睨にらむやうに打仰うちあふぎて、杖の獅子頭ししがしらを

撫廻なでまはしつゝ、少時思案する体ていなりしが、やをら白羽二重しろはぶたへのハン

カチイフを取とり出いだして、片手に一揮揮ひとふりふるよと見れば鼻はなを拭ぬぐへり。

葦ヴァイオレット花の香を咽ばさるるばかりに薫じ遍りぬ。

宮も母もその鋭き句にほひに驚けるなり。

「ああと、私これから少し散歩しやうと思ふのであります。これから出て、流つに沿たいて、田圃たんぼの方を。私未まだ知らんけれども、余

程景色が好いさう。御一所にと云ふのだが、大分跡程みちが有るから、

貴方あなたは御迷惑であります。二時間ばかりお宮さんを御貸し下さ

いな。私一人で歩いてもつまらない。お宮さんは胃わいが不良わるいのだから

散歩は極きはめて薬、これから行つて見ませう、ねえ」

彼は杖を取直してはや立たんとす。

「はい。難<sup>ありがた</sup>有うございます。お前お供をお為<sup>し</sup>かい」

宮の遅<sup>ためら</sup>ふを見て、唯繼<sup>ことさら</sup>は故に座<sup>た</sup>を起てり。

「さあ行つて見ませう、ええ、胃病の薬です。さう因<sup>いんじん</sup>循<sup>ゆん</sup>してゐては可<sup>い</sup>けない」

つと寄りて輕<sup>かろ</sup>く宮の肩<sup>う</sup>を拊ちぬ。宮は忽ち面<sup>たちまおもてあか</sup>を紅めて、如何<sup>いか</sup>にとも為<sup>せすべ</sup>ん術<sup>なれなれ</sup>を知らざらんやうに立<sup>たちまど</sup>惑<sup>おのれはした</sup>ひてゐたり。母の前<sup>はばか</sup>をも憚<sup>はば</sup>らぬ男の馴<sup>なれなれ</sup>々しさを、憎しとにはあらねど、己<sup>おのれ</sup>の仿<sup>なま</sup>なきやうに慙<sup>は</sup>づるなりけり。

得<sup>い</sup>も謂<sup>あじな</sup>はれぬその仇無<sup>あじな</sup>きの身<sup>い</sup>に浸<sup>しみわた</sup>遍<sup>た</sup>るに堪<sup>た</sup>へざる思<sup>そぞろ</sup>は、漫<sup>そぞろ</sup>に唯繼<sup>あじな</sup>の目<sup>い</sup>の中に蹶<sup>うちあらは</sup>れて異<sup>あやし</sup>き独<sup>ひとりゑみ</sup>笑<sup>あじな</sup>となりぬ。この仇無<sup>あじな</sup>きしら<sup>いと</sup>しき、美<sup>や</sup>き娘<sup>はら</sup>の柔<sup>か</sup>き手<sup>かた</sup>を携<sup>かた</sup>へて、人無<sup>のど</sup>き野道<sup>かた</sup>の長閑<sup>かた</sup>なるを語<sup>かた</sup>ひつ



つ行かば、如何いかばかり楽らくからんよと、彼ははや心こころも空そらになりて、

「さあ、行つて見ませう。御母おつかさんから御許おゆるしが出たから可い

はありませんか、ねえ、貴方あなた、宜よろしいでありませう」

母は宮の猶なほ羞はづるを見て、

「お前いお出いでかい、どうお為しだえ」

「貴方、お出いかいなどと有おつしや仰おほつちや可かけません。お出いなさいと

命令なを為なすつて下さい」

宮も母も思はず笑へり。唯ただ継つぐも後おくれじと笑へり。

又人の入いり来くる氣勢けはひなるを宮は心着うかきて窺うかがひしに、姿は見えみえずし

て靴の音のみを聞けり。梅見る人か、あらぬか、用もちありげに忙せはし

踏立ふみだつる足音なりき。

「ではお前<sup>まい</sup>お供をおしな」

「さあ、行きませう。直<sup>ちき</sup>其<sup>そ</sup>処<sup>こ</sup>まででありますよ」

宮<sup>ちひさ</sup>は小さき声して、

「御母<sup>おつか</sup>さんも一処<sup>おいで</sup>に御出<sup>で</sup>なさいな」

「私<sup>わたし</sup>かい、まあお前<sup>まい</sup>お供をおしな」

母親を伴ひては大いに風流ならず、頗<sup>すこぶ</sup>る妙ならずと思へば、唯

繼は飽くまでこれを防がんと、

「いや、御母さんには却<sup>かへ</sup>つて御迷惑です。道が良くないから御母さんにはとても可けますまい。實際貴方<sup>あなた</sup>には切<sup>た</sup>つてお勧め申され  
ない。御迷惑は知れてゐる。何も遠方へ行くのではないのだから、  
御母さんが一処でなくても可いぢやありませんか、ねえ。私折角

思立つたものでありますから、それでは一寸其処までで可いから  
 附合つて下さい。貴女が可厭いやだつたら直すぐに帰りますよ、ねえ。そ  
 れはなかなか好い景色だから、まあ私に騙だまされたと思つて来て御  
 覧なさいな、ねえ」

この時忙せはしげに聞えし靴音ははや止やみたり。人は出いで去りしにあ  
 らで、七八間彼方あなたなる木蔭に足を停とどめて、忍びやかに様子を窺ふ  
 なるを、此方こなたの三人は誰たれも知らず。イめる人は高等中学の制服の  
 上に焦茶の外オバコ套オトを着て、肩には古りたる象皮の学校鞆かばんを掛け  
 たり。彼は間貫一にあらずや。

再び靴音は高く響きぬ。その驟にはかなると近きとに驚きて、三人は  
 始めて音かたする方みを見遣りつ。

花の散りかかる中を進<sup>すす</sup>来<sup>き</sup>つつ学生は帽を取りて、

「姨<sup>をば</sup>さん、参りましたよ」

母子<sup>おやこ</sup>は動<sup>どう</sup>顛<sup>てん</sup>して殆<sup>ほとん</sup>ど人<sup>ひと</sup>心<sup>ご</sup>地<sup>ち</sup>を失ひぬ。母親は物を見るべき

力もあらず呆<sup>あき</sup>れ果てたる目をば空<sup>むなし</sup>く瞪<sup>みは</sup>りて、少<sup>しばし</sup>時は石の如く動か

ず、宮は、あはれ生きてあらんより忽<sup>たちま</sup>ち消えてこの土と成<sup>なり</sup>了<sup>をは</sup>ら

んことの、せめて心<sup>こころ</sup>易<sup>やす</sup>さを思ひつつ、その淡<sup>うす</sup>白<sup>しろ</sup>き唇<sup>くちびる</sup>を啖<sup>くひさ</sup>裂

かんとすばかりに咬<sup>か</sup>みて咬<sup>か</sup>みて止<sup>や</sup>まざりき。

想<sup>おも</sup>ふに彼等<sup>おどろき</sup>の驚<sup>おそれ</sup>愕<sup>おそれ</sup>と恐怖とはその殺せし人の計らずも今生<sup>うは</sup>き

て来<sup>きた</sup>れるに会<sup>い</sup>へるが如<sup>い</sup>きものならん。氣も不<sup>そ</sup>覚<sup>ぞろ</sup>なれば母は譚<sup>うは</sup>語<sup>ごと</sup>

のやうに言<sup>い</sup>出<sup>ひい</sup>せり。

「おや、お出<sup>いで</sup>なの」

宮は些<sup>わづか</sup>少なりともおのれの姿の多く彼の目に触れざらんやうにと冀<sup>ねが</sup>へる如く、木蔭<sup>こかげ</sup>に身を側<sup>そば</sup>めて、打過<sup>うちはず</sup>む呼吸<sup>いき</sup>を人に聞かれじとハンカチーフに口元を掩<sup>おほ</sup>ひて、見るは苦<sup>くる</sup>けれども、見ざるも辛<sup>つら</sup>き貫一の顔を、俯<sup>ふ</sup>したる額<sup>ひたひごし</sup>越<sup>うかが</sup>に窺<sup>うかが</sup>ひては、又唯継の氣色<sup>けしき</sup>をも氣遣<sup>きづか</sup>へり。

唯継は彼等の心々にさばかりの大波瀾<sup>だいはらん</sup>ありとは知らざれば、聞及びたる鳴沢の食<sup>しよくかく</sup>客<sup>きた</sup>の来れるよと、例の金剛石<sup>ダイヤモンド</sup>の手を見よがしに杖を立てて、誇りかに梢を仰ぐ腮<sup>あぎと</sup>を張れり。

貫一は今回<sup>こたび</sup>の事も知れり、彼の唯継なる事も知れり、既にこの場の様子をも知らざるにはあらねど、言ふべき事は後にぞ犇<sup>ひし</sup>と言はん、今は姑<sup>しばら</sup>く色にも出さじと、裂けもしぬべき無念の胸をやう

やう鎮めて、苦き笑顔を作りてゐたり。

「宮さんの病氣はどうでございます」

宮は耐りかねて窃にハンカチーフを咬緊めたり。

「ああ、大きに良いので、もう二三日内には歸らうと思つてね。

お前さん能く来られましたね。学校の方は？」

「教場の普請を為るところがあるので、今日半日と明日明後日と休課になつたものですから」

「おや、さうかい」

唯継と貫一とを左右に受けたる母親の絶体絶命は、過ちて野中の古井に落ちたる人の、沈みも果てず、上りも得為ず、命の綱と危くも取継りたる草の根を、鼠の来りて噛むに遭ふと云へる比

とへいといよ  
 喩に最能く似たり。如何に為べきかと或は懼れ、或は惑ひたりしが、終にその免るまじきを知りて、彼はやうやう胸を定めつ。

「丁度宅から人が参りましてございますから、甚だ勝手がましようございますが、私等はこちらから宿へ帰りますのでございますから、いづれ後程伺ひに出ますのでございますが……」

「ははあ、それでは何でありますか、明朝は御一所に帰れるやうな都合になりますな」

「はい、話の模様に因りましては、さやう願はれるかも知れませんで、いづれ後程には是非伺ひまして、……」

「成程、それでは残念ですが、私も散歩は罷めます。散歩は罷めてこれから帰ります。帰つてお待申してゐますから、後に是非お

出いで下くださいよ。宜よろしいですか、お宮さん、それでは後にきつとお出いで

なさいよ。誠に今日は残念でありますな」

彼は行かんとして、更に宮の傍そば近く寄来よりきて、

「貴方あなた、きつと後のちにお出いでなさいよ、ええ」

貫一は瞬まばたきも為せで視みてゐたり。宮は窮して彼に会釈さへ為しかねつ。

娘氣はづかしの可はづかし羞はづかしにかくあるとのみ思へる唯繼ますますは、益寄添ますますひつつ、

舌した怠たるきまでに語ことばを和やはらげて、

「宜よろしいですか、来なくては何けませんよ。私待つてゐますから」

貫一まなこの眼は燃ゆるが如き色を作なして、宮の横顔を睨ねめつ着めけたり。

彼は懼おそれて傍目わきめをも転ふらざりけれど、必ずさあるべきを想ひとひて独

り心をのを慄おそかせしが、猶唯繼なほの如何いかなることを言出でんも知られず



と思へば、とにかくにもその場を繕ひぬ。母子の為には幾いかばかり

許りの幸さいはひなりけん。彼は貫一に就いて半点の疑ひをも容いれず、唯

饜あくまでもいとしき宮に心を遺のこして行けり。

その後うしろかげ影を透とほすばかりに目成まもれる貫一は我を忘れて姑く佇しばたえず

めり。両個ふたりはその心を測りかねて、言も出ことばでず、息をさへ凝して、

空むなしく早瀬の音の聒かしましきを聴くのみなりけり。

やがて此方こなたを向きたる貫一は、尋常ただならず激して血の色を失へ

る面上おもてに、多からんとすれども能あたはずと見ゆる微少わづかゑみの笑を漏して、

「宮みいさん、今の奴やつはこの間の骨牌かるたに来てゐた金剛石ダイヤモンドだね」

宮うつつむは俯うつむきて唇を咬みぬ。母は聞かざる為まねして、折しも啼なうぐひすける鶯

の木の間こまを窺まうかがへり。貫一はこの体ていを見て更に嗤あざわら笑ひつ。

「夜見たらそれ程でもなかつたが、昼間見ると実に氣障きざな奴だね、さうしてどうだ、あの高慢つらちきの面は！」

「貫一さん」母は卒にはかに呼びかけたり。

「はい」

「お前さんをぢ翁さんから話はお聞きでせうね、今度の話は」

「はい」

「ああ、そんなら可いけれど。不斷のお前さんにも似合はない、そんな人の悪あつこ口などを言ふものぢやありませんよ」

「はい」

「さあ、もう帰りませう。お前さんもお草くたび臥れだらうから、お湯にでも入つて、さうして未だま御午餐おひる前なのでせう」

「いえ、きしや瀟車すしの中で鮎あゆみを食べました」

みたり三人は俱ともに歩あゆみ始めぬ。貫一は外オバコ套オトの肩を払はれて、後うしろを捻ねぢむ向けば宮と面を合せたり。

「そこ其処に花が粘ついてゐたから取つたのよ」

「それは難ありがた有う※」

## 第八章

うちかす打霞みたる空ながら、月の色の匂におひ滴こぼるるやうにして、微ほ

のじろ白き海は縹ひようびよう渺として限を知らず、譬たとへば無邪気なる夢を敷

けるに似たり。寄せては返す波の音も眠ねむげに怠りて、吹来る風は

人を酔はしめんとす。打連れてこの浜辺をしやうよう逍遙せるは貫一と宮となりけり。

「僕は唯胸ただが一杯で、何も言ふことが出来ない」

いつあしむあし五歩六歩行きし後宮はやうやう言出でつ。

「堪忍かんにんして下さい」

「何も今更謝あやまることは無いよ。一体今度の事は翁おぢさん姨おばさんの意から出たのか、又はお前さんも得心であるのか、それを聞けば可いいのだから」

「……………」

「此地こつちへ来るまでは、僕は十分信じてをつた、お前さんに限つてそんなりようけん了簡のあるべき筈はずは無いと。実は信じるも信じないも

有りはしない、夫婦の間で、知れきつた話だ。

昨夜翁さんから悉く話があつて、その上に頼むといふ御言だ」  
差含む涙に彼の声は顫ひぬ。

「大恩を受けてゐる翁さん嬢さんの事だから、頼むと言はれた日には、僕の体は火水の中へでも飛込まなければならないのだ。翁さん嬢さんの頼なら、無論僕は火水の中へでも飛込む精神だ。火水の中へなら飛込むがこの頼ばかりは僕も聴くことは出来ないと思つた。火水の中へ飛込めと云ふよりは、もつと無理な、余り無理な頼ではないかと、僕は済まないけれど翁さんを恨んでゐる。

さうして、言ふ事も有らうに、この頼を聴いてくれれば洋行さして遣るとお言ひのだ。い……い……いかに貫一は乞食士族の孤

なしご

児でも、女房を売つた錢で洋行せうとは思はん！」

貫一はふみとどま蹈留りて海に向ひて泣けり。宮はこの時始めて彼に

寄添ひて、きづかは氣遣しげにその顔をさしのぞ差覗きぬ。

「堪忍して下さいよ、皆私みんなが……どうぞ堪忍して下さい」

貫一の手すがに縋りて、たちま忽ちその肩に面を推当つると見れば、彼も

泣なくね音を洩もらすなりけり。波は漾々ようようとして遠く烟けむり、月おぼろは朧に一湾

の真砂まさごを照して、空も汀もみぎは淡白うすしろき中に、立尽せる二人の姿は墨

の滴したたりたるやうの影を作れり。

「それで僕は考へたのだ、これは一方には翁おぢさんが僕を説いて、

お前さんの方は姨おばさんが説得しやうと云ふので、無理に此処ここへ連

出したに違無い。翁さん姨さんの頼と有つて見れば、僕は不承知

を言ふことの出来ない身分だから、唯々はいはいと言つて聞いてゐたけれど、宮さんみいは幾多いくちでも剛情を張つて差支さしつかへ無いのだ。どうあつても可厭いやだとお前さんさへ言通せば、この縁談はそれで破れてしまふのだ。僕が傍そばに居ると智慧ちゑを付けて邪魔すを為ると思ふものだから、遠くへ連出して無理往生に納得させる計だなど考着くと、さあ心配で心配で僕は昨夜ゆふべは夜一夜寐よつびはしない、そんな事は万々ばんばん有るまいけれど、種々いろいろ言はれる為に可厭いやと言はれない義理になつて、若や承諾もしするやうな事があつては大変だと思つて、家は学校へ出る積つもりで、僕はわざわざ様子を見に来たのだ。

馬鹿な、馬鹿な！ 貫一ほどの大馬鹿者が世界中を捜して何処どこに在る!! 僕はこれ程自分が大馬鹿とは、二十五歳の今日まで知し

……知……知らないかつた」

宮は可<sup>かなしき</sup>悲と可<sup>おそろしき</sup>懼に襲はれて少<sup>すこし</sup>く声さへ立てて泣きぬ。

いかりおき  
憤を抑ふる貫一の呼吸は漸<sup>やうや</sup>く乱れたり。

「宮<sup>みい</sup>さん、お前は好くも僕を欺いたね」

宮は覺えず慄<sup>そのの</sup>けり。

「病氣と云つてここへ来たのは、富山と逢ふ為だらう」

「まあ、そればかりは……」

「おおそればかりは？」

「余<sup>あんま</sup>り邪推が過ぎるわ、余<sup>ひど</sup>り酷いわ。何ぼ何でも余<sup>ひど</sup>り酷い事を」

泣入る宮を尻目に挂<sup>か</sup>けて、

「お前でも酷いと云ふ事を知つてゐるのかい、宮さん。これが酷



いと云つて泣く程なら、大馬鹿者にされた貫一は……貫一は……  
貫一は血の涙を流しても足りは為せんよ。

お前が得心せんものなら、此地ここへ来るに就いて僕に一言いちごんも言は  
んと云ふ法は無からう。家を出るのが突然で、その暇が無かつた  
なら、後から手紙を寄来よこすが可いぢやないか。出抜だしぬいて家を出る  
ばかりか、何の便たよりも為んとくろを見れば、始から富山と出会あふ手  
筈はずになつてゐたのだ。或あるひは一所に來たのか知れはしない。宮さん、  
お前は奸婦かんぷだよ。姦通かんつうしたも同じだよ」

「そんな酷いことを、貫一さん、余あんまりだわ、余りだわ」

彼は正体も無く泣な顔なれつつ、寄らんとするを貫一は突退つぎのけて、  
「操みさをを破れば奸婦ぢやあるまいか」

「何時いつ私が操を破つて？」

「幾許いくら大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻さいが操を破る傍そばに付いて見てゐるものかい！ 貫一と云ふ歴れきとした夫を持ちながら、その夫を出抜いて、余所よその男と湯治に来てゐたら、姦通してゐないといふ証拠が何処どこに在る？」

「さう言はれて了しまふと、私は何とも言へないけれど、富山さんと逢ふの、約束してあつたのと云ふのは、それは全く貫一さんの邪推よ。私等わたしたちが此地こつちに来てゐるのを聞いて、富山さんが後から尋ねて来たのだわ」

「何で富山が後から尋ねて来たのだ」

宮はその唇くちびるに釘打たれたるやうに再び言ことばは出でざりき。貫一は、

かく詰責せる間に彼の必ず過あやまちを悔い、罪を詫わびて、その身は未おろか  
 命までも己おのれの欲するままならんことを誓ふべしと信じたりしなり。  
 よし信ぜざりけんも、心こころひそか陰に望みたりしならん。如何いかにぞや、  
 彼は露ばかりもさせる気色けしきは無くて、引けども朝顔の垣を離るま  
 じき一匁こころがはりの心變を、貫一はなかなか信まことしからず覚ゆるまでに  
 呆あきれたり。

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも  
 換いへて最いとをし愛つんぎみし人は芥あくたの如く我を悪にくめるよ。恨は彼の骨に徹し、  
 憤いかりは彼の胸を劈つんぎきて、ほとほと身も世も忘れたる貫一は、あはれ  
 奸婦の肉を啖くらひて、この熱ねつちよう腸さまを冷さんとも思へり。忽たちまち彼は  
 頭腦の裂けんとするを覚えて、苦痛に得堪えたへずして尻居たふに僵れた

り。

宮は見るより驚く<sup>いとま</sup>違もあらず、諸共に砂に塗れて<sup>まび</sup>搔<sup>かき</sup>抱<sup>いだ</sup>けば、  
 閉ぢたる眼より<sup>まなこ</sup>乱落<sup>はふりお</sup>つる涙に浸れる灰色の頬を、<sup>ほほ</sup>月の光は悲し  
 げに彷徨<sup>さまよ</sup>ひて、迫れる息は<sup>すさまじ</sup>凄く波打つ胸の響を伝ふ。宮は彼の背<sup>う</sup>  
 後より<sup>しろ</sup>取<sup>とり</sup>縋<sup>すが</sup>り、抱<sup>いだ</sup>緊<sup>きし</sup>め、撼<sup>ゆりうご</sup>動して、戦<sup>をの</sup>く声を励せば、励  
 す声は更に戦きぬ。

「どうして、貫一さん、どうしたのよう！」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顔をい  
 ねんごろ<sup>ねんごろぬぐ</sup>と懇<sup>ねん</sup>に拭<sup>ぬぐ</sup>ひたり。

「<sup>ああ</sup>、<sup>みい</sup>宮さんかうして二人が一処に居るのも今夜ぎりだ。お前が  
 僕の介抱をしてくれるのも今夜ぎり、僕がお前に物を言ふのも今

夜ぎりだよ。一月の十七日、宮さん、善く覚えてお置き。来年の  
 今月今夜は、貫一は何処どこでこの月を見るのだから！ 再来年さらいねんの今  
 月今夜……十年後のちの今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘  
 れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！ 可いか、宮さん、  
 一月の十七日だ。来年の今月今夜になつたならば、僕の涙で必ず  
 月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、  
 宮さん、貫一は何処かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐる  
 と思つてくれ」

宮は挫ひしぐばかりに貫一に取着きて、物ものぐるはし 狂むせびいう咽入いりぬ。

「そんな悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事がある  
 のだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱

してゐて下さいな。私はお肚なかの中には言ひたい事が沢山あるのだけれど、余あんまり言いひ難にくい事ばかりだから、口へは出さないけれど、  
 たつたひとこと  
 唯一言いひたいのは、私は貴方あなたの事は忘れはしないわ——私は生涯忘れはしないわ」

「聞きたくない！ 忘れんくらゐなら何故見棄てた」

「だから、私は決して見棄てはしないわ」

「何、見棄てない？ 見棄てないものが嫁よめに歸かへるか、馬鹿な！

二人の夫が有てるかい」

「だから、私は考へてゐる事があるのだから、も少し辛抱すごしてそれを——私の心を見て下さいな。きつと貴方の事を忘れない証拠を私は見せるわ」

「ええ、狼狽<sup>うろた</sup>へてくだらんことを言ふな。食ふに窮<sup>こま</sup>つて身を売らなければならんのぢやなし、何を苦んで嫁に歸<sup>ゆ</sup>くのだ。内には七千円も財産が在つて、お前は其処<sup>そこ</sup>の一人娘ぢやないか、さうして婿<sup>きま</sup>まで極<sup>きま</sup>つてゐるのぢやないか。その婿も四五年の後には学士になると、末の見込も着いてゐるのだ。しかもお前はその婿を生涯忘れないほどに思つてゐると云ふぢやないか。それに何の不足が有つて、無理にも嫁に歸<sup>ゆ</sup>かなければならんのだ。天下にこれくらゐ理<sup>わけ</sup>の解らん話が有らうか。どう考へても、嫁に歸<sup>ゆ</sup>くべき必用の無いものが、無理に算段をして嫁に歸<sup>ゆ</sup>かうと為るには、必ず何ぞ事情が無ければ成らない。

婿が不足なのか、金持と縁を組みたいのか、主意は決してこの

二件ふたつの外にはあるまい。言つて聞かしてくれ。遠慮は要いらない。

さあ、さあ、宮さん、遠慮することは無いよ。一旦夫に定めたものを振捨てるくらゐの無遠慮なものが、こんな事に遠慮も何も要るものか」

「私が悪いのだから堪忍して下さい」

「それぢや婿が不足なのだね」

「貫一さん、それは余あんまりだわ。そんなに疑ふのなら、私はどんな事でもして、さうして証拠を見せるわ」

「婿に不足は無い？ それぢや富山が財かねがあるからか、して見るとこの結婚は慾からだね、僕の離縁も慾からだね。で、この結婚はお前も承知をしたのだね、ええ？



翁さんをち姨さんをばに迫られて、余義無くお前も承知をしたのならば、

僕の考で破談にする方は幾許ほうもある。僕一人が悪者になれば、翁さん姨さんを始めお前の迷惑にもならずぶちこはに打壊して了ふことは出来る、だからお前の心持を聞いた上で手段があるのだが、お前も適いつて見る氣は有るのかい」

貫一の眼はまなこその全身の力を聚あつめて、思悩める宮が顔を鋭く打目うち成まもれり。五歩行き、七歩行き、十歩を行けども、彼の答はあらざりき。貫一は空を仰ぎためいきて太息したり。

「宜よろしい、もう宜い。お前の心は能く解つた」

今ははや言ふも益無ければ、重ねて口を開かざらんかと打按うちあんじつつも、彼は乱るる胸を寛ゆるうせんが為に、強しひて目を放ちて海

の方かたを眺めたりしが、なほ得堪へずやありけん、又言はんとして顧れば、宮は傍かたはらに在らずして、六七間後あとなる波打際なみうちぎはに面おもてを掩おほひて泣けるなり。

なやま

可惱なやましげなる姿の月に照され、風に吹れて、あはれ消えもしぬべく立ち迷へるに、森々びようびようたる海の端はしの白く頽くづれて波と打寄せたる、艶えんに哀あはれを尽せる風情ふぜいに、貫一いかりは憤いかりをも恨をも忘れて、少時しばしは画みを見る如き心地もしつ。更に、この美き人も今は我物ならずと思へば、なかなか夢かとも疑へり。

「夢だ夢だ、長い夢を見たのだ！」

彼は頭かしらを低たれて足の向ふままに汀みぎはの方かたへ進行きしが、泣く泣く歩あゆみ来きたれる宮と互に知らで行合ひたり。

「宮さん、何を泣くのだ。お前は些<sup>ちつと</sup>も泣くことは無いぢやないか。空涙！」

「どうせさうよ」

殆ど聞得べからざるまでにその声は涙に乱れたり。

「宮さん、お前に限つてはさう云ふ了簡は無からうと、僕は自分を信じるほどに信じてゐたが、それぢややつぱりお前の心は慾だね、財<sup>かね</sup>なのだね。如何<sup>いか</sup>に何でも余り情無い、宮さん、お前はそれで自分に愛<sup>あい</sup>相<sup>そう</sup>は尽きないかい。

好<sup>い</sup>い出世をして、さぞ榮耀<sup>えいよう</sup>も出来て、お前はそれで可からうけれど、財<sup>かね</sup>に見換<sup>か</sup>へられて棄てられた僕の身になつて見るが可<sup>い</sup>い。無念と謂<sup>い</sup>はうか、口惜<sup>くちをし</sup>いと謂<sup>い</sup>はうか、宮さん、僕はお前を刺<sup>さしこ</sup>

殺して——驚くことは無い！——いつそ死んで了ひたいのだ。

それを怵へてお前を人に奪れるのを手出しも為ずに見てゐる僕の

心地は、どんなだと思ふ、どんなだと思ふよ！ 自分さへ好

ければ他はどうなうともお前はかまはんのかい。一体貫一はお

前の何だよ。何だと思ふのだよ。鳴沢の家には厄介者の居候

でも、お前の為には夫ぢやないかい。僕はお前の男妾になつ

た覚は無いよ、宮さん、お前は貫一を玩弄物にしたのだね。平

生お前の仕打が水臭い水臭いと思つたも道理だ、始から僕を一

時の玩弄物の意で、本当の愛情は無かつたのだ。さうとは知らず

に僕は自分の身よりもお前を愛してゐた。お前の外には何の楽も

無いほどにお前の事を思つてゐた。それ程までに思つてゐる貫一

を、宮さん、お前はどうしても棄てる氣かい。

それは無論金力の点では、僕と富山とは比くらべもの較くらべにはならない。

あつち

彼方は屈指の財産家、僕は固もとより一介の書生だ。けれども善く宮

さん考へて御覧、ねえ、人間の幸福ばかりは決して財かねで買へるも

のぢやないよ。幸福と財とは全く別物だよ。人の幸福の第一は家

内の平和だ、家内の平和は何か、夫婦が互に深く愛すると云ふ外

は無い。お前を深く愛する点では、富山如きが百人寄つても到底

僕の十分の一だけでも愛することは出来まい、富山が財産で誇る

なら、僕は彼等の夢想することも出来んこの愛情で争つて見せる。

夫婦の幸福は全くこの愛情の力、愛情が無ければ既に夫婦は無い

のだ。

おのれ

己の身に換へてお前を思つてゐる程の愛情を有つてゐる貫一を棄てて、夫婦間の幸福には何の益も無い、寧ろ害になり易い、その財産を目的に結婚を為るのは、宮さん、どういふ心得なのだ。

かね

然し財といふものは人の心を迷はすもので、智者の学者の豪傑

のと、千万人に勝れた立派な立派な男子さへ、財の為には随分甚

すく

ふつと

ひど

い事も為るのだ。それを考へれば、お前が偶然氣の変つたのも、

あるひ

或は無理も無いのだらう。からして僕はそれは咎めない、但もう

ただ

一遍、宮さん善く考へて御覧な、その財が——富山の財産がお前

の夫婦間にどれ程の効力があるのかと謂ふことを。

すずめ

雀が米を食ふのは僅か十粒か二十粒だ、俵で置いてあつたつて、

わづ

とつと

一度に一俵食へるものぢやない、僕は鳴沢の財産を譲つてもらは

んでも、十粒か二十粒の米に事を欠いて、お前に餒<sup>ひもじ</sup>い思を為せるやうな、そんな意気<sup>いきち</sup>地の無い男でもない。若し間違つて、その十粒か二十粒の工面が出来なかつたら、僕は自分は食はんでも、決してお前に不自由は為せん。宮さん、僕はこれ……これ程までにお前の事を思つてゐる！」

貫一は雫<sup>しづく</sup>する涙を払ひて、

「お前が富山へ嫁<sup>よめ</sup>く、それは立派な生活をして、栄耀<sup>えいよう</sup>も出来やうし、樂も出来やう、けれどもあれだけの財産は決して息子の嫁の為に費さうとて作られた財産ではない、と云ふ事をお前考へなければならんよ。愛情の無い夫婦の間に、立派な生活が何だ！ 栄耀が何だ！ 世間には、馬車に乗つて心配さうな青い顔をして、

夜会へ招よばれて行く人もあれば、自分の妻子つまこを車に載せて、それを自分が挽ひいて花見に出掛ける車夫もある。富山へ嫁よめけば、家内も多ければ人出入ひとでいりも、劇はげしし、従つて気兼も苦勞も一通の事ぢやなからう。その中へ入つて、氣を傷いためながら愛してもをらん夫を持つて、それでお前はたのしみ何を樂に生きてゐるのだ。さうして勤めてゐれば、末にはあの財産がお前の物になるのかい、富山の奥様と云へば立派かも知れんけれど、食ふところは今の雀の十粒か二十粒に過ぎんのぢやないか。よしんばあの財産がお前の自由になるとしたところで、女の身に何十万と云ふ金がどうなる、何十万の金を女の身で面白く費つかへるかい。雀に一俵の米を一度に食へと云ふやうなものぢやないか。男を持たなければ女の身は立てないも



のなら、一生の苦樂他人に頼よるで、女の宝とするのはその夫ではないか。何百万の財かねが有らうと、その夫が宝と為るに足らんものであつたら、女の心細さは、なかなか車に載せて花見に連れられる車夫の女房には及ばんぢやあるまいか。

聞けばあの富山の父と云ふものは、内に二人外おもてに三人も妾を置いてゐると云ふ話だ。財の有る者は大方そんな真似まねをして、妻は些ほんの床の置物にされて、謂いはば棄てられてゐるのだ。棄てられてゐながらその愛されてゐる妾よりは、責任も重く、苦勞も多く、苦くるばかりで樂たのしみは無いと謂つて可い。お前の嫁ゆく唯繼だつて、固もとより所望のぞみでお前を迎もつたのだから、当座は随分愛しも為るだらうが、それが長く続くものか、財かねが有るから好きな真似も出来る、他ほかの

樂たのしみに氣が移つて、直ぢきにお前の恋は冷さされて了ふのは判つてゐる。

その時になつて、お前の心地こころもちを考へて御覽、あの富山の財産がそ  
くろしみすく  
の苦を拯ふかい。家に沢山の財が在れば、夫に棄てられて床の置  
物になつてゐても、お前はそれで樂たのしみかい、満足かい。

僕が人にお前を奪とられる無念は謂いふまでも無いけれど、三年の  
後のお前の後悔が目に見えて、心こころ變がをした憎いお前ぢやある  
けれど、やつぱり可哀かあいさうでならんから、僕は眞実で言ふのだ。

僕に飽きて富山に惚ほれてお前が嫁くのなら、僕は未練らしく何  
も言はんけれど、宮さん、お前は唯立派なところへ嫁くといふそ  
ればかりに迷はされてゐるのだから、それは過あやまつてゐる、それは  
實あやまに過つてゐる、愛情の無い結婚は究竟つまり自他の後悔だよ。今夜こ

の場のお前の分別ふんべつ一つで、お前の一生の苦樂は定るのだから、

宮さん、お前も自分の身が大事と思ふなら、又貫一が不便ふびんだと思

つて、頼む！ 頼むから、もう一度分別を為直しなおしてくれないか。

七千円の財産と貫一が学士とは、二人の幸福を保つには十分だ

よ。今でさへも随分二人は幸福ではないか。男の僕でさへ、お前

が在れば富山の財産などを可うらやまし羨うらやましいとは更に思はんのに、宮さ

ん、お前はこうしたのだ！ 僕を忘れたのかい、僕を可愛かはゆくは思

はんのかい」

彼は危あやふきを拯すくはんとする如ひしく犇はしと宮に取着きて句にほひこほ滴なみだるる頸え

元もとに沸にゆる涙を濺そそぎつつ、蘆あしの枯葉の風に揉もまるるやうに身を顛ふるは

せり。宮も離れじと抱いだ緊きしめて諸もろとも共に顛ひつつ、貫一が臂ひぢを咬か

みて咽<sup>むせびなき</sup>泣に泣けり。

「嗚呼<sup>ああ</sup>、私はどうしたら可からう！ 若し私が彼方<sup>あつち</sup>へ嫁<sup>い</sup>つたら、貫一さんはどうするの、それを聞かして下さいな」

木を裂く如く貫一は宮を突放して、

「それぢや断<sup>いよいよ</sup>然お前は嫁く気だね！ これまでに僕が言つても聴いてくれんのだね。ちええ、腸<sup>はらわた</sup>の腐つた女！ 姦婦<sup>かんぷ</sup>!!」

その声とともに貫一は脚<sup>あし</sup>を挙げて宮の弱腰をはたと<sup>け</sup>たり。地響<sup>よこさま</sup>して横<sup>まろ</sup>様に転びしが、なかなか声をも立てず苦痛を忍びて、

彼はそのまま砂の上に泣伏したり。貫一は猛兽などを撃ちたるやうに、彼の身動も得<sup>え</sup>為<sup>せ</sup>ず弱<sup>よわ</sup>々と僵<sup>たふ</sup>れたるを、なほ憎<sup>み</sup>さげに見遣<sup>や</sup>りつつ、

「宮、おのれ、おのれ姦婦、やい！ 貴様のな、心変をしたばかりに間貫一の男一匹いつびきはな、失望の極癡狂して、大事の一生を誤つて了しまふのだ。学問も何ももう廃やめだ。この恨の為に貫一は生きながら悪魔になつて、貴様のやうな畜生の肉を啖くらつて遣る覚悟だ。富山の令……令夫……令夫人！ もう一生お目には掛らんから、その顔を挙げて、真人間で居る内の貫一の面つらを好く見て置かないかい。長々の御恩に預つた翁おぢさん姨おばさんには一目会つて段々の御礼を申上げなければ済まんのでありますけれど、仔細しさいあつて貫一はこのまま長の御暇おいとまを致しますから、随分お達者で御機嫌ごきげんよろしう……宮みいさん、お前から好くさう言つておくれ、よ、若もし貫一はどうしたとお訊たづねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晩

に氣が違つて、熱海の浜辺から行方知れずになつて了つたと……」

宮はやにはに蹶はねお起きて、立たんと為れば脚の痛いたみに脆もろくも倒れて

効かひな無きを、漸やうやく這寄りて貫一の脚に縋すがりつ付き、声と涙とを争ひて、

「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方あなたこれから何……何

処こへ行くのよ」

貫一はさすがに驚けり、宮が衣きぬの披はだけて雪可差ゆきづかしく露せる膝ひざがし

頭らは、夥おびただしく血に染みて顫ふるふなりき。

「や、怪我けがをしたか」

寄らんとするを宮は支へて、

「ええ、こんな事とはまはないから、貴方は何処へ行くのよ、話があるから今夜は一所に歸つて下さい、よう、貫一さん、後生だ

から」

「話が有ればここで聞かう」

「ここぢや私は可厭よ」

「ええ、何の話が有るものか。さあここを放さないか」

「私は放さない」

「剛情張ると蹴飛ばすぞ」

「蹴られても可いわ」

貫一は力を極めて振断れば、宮は無残に伏転びぬ。

「貫一さん」

「貫一ははや幾間を急行きたり。宮は見るより必死と起上りて、脚の傷に幾度か仆れんとしつつも後を慕ひて、

「貫一さん、それぢやもう留めないから、もう一度、もう一度……私は言遺した事がある」

遂に倒れし宮は再び起つべき力も失せて、唯声を頼に彼の名を

呼ぶのみ。漸く朧になれる貫一の影が一散に岡を登るが見えぬ。

宮は身悶して猶呼続けつ。やがてその黒き影の岡の頂に立てる

は、此方を目成れるならんと、宮は声の限に呼べば、男の声も遙

に來りぬ。

「宮さん！」

「あ、あ、あ、貫一さん！」

首を延べて胸せども、目を瞪りて眺むれども、声せし後は黒き

影の搔消す如く失せて、それかと思ひし木立の寂しげに動かず、



波は悲き音を寄せて、一月十七日の月は白く愁ひぬ。

宮は再び<sup>こひし</sup>恋き貫一の名を呼びたりき。

# 中編

## 第一章

新橋停車場しんばしステーションの大時計は四時を過すぐること二分余よ、東海道行の  
 列車は既に客車の扉を鎖とびらして、機関車に烟けを噴ふせつつ、三十余よりよ  
 輜うを聯つらねて蜿蜒えんえんとして横よこはりたるが、真承まうけの秋の日影に夕榮ゆふばえ

して、窓々の硝子ガラスは燃えんとすばかりに耀かがやけり。駅夫は右往左  
 往に奔走して、早く早くと喚わめくを余所よそに、大踏歩だいとうほの寛々かんかんたる  
 老欧羅巴エウロッパ人は麦酒樽ビールだるを窃ぬすみたるやうに腹突つきい出して、桃色の  
 服着たる十七八の娘の日本の絵日傘えひがさの柄えに橙色オレンジのリボンを飾りた  
 るを小脇こわきにせると推おし並び、おのれが乗物の顔して急ぐ気色けしきも無  
 く過すぐる後より、蚤取眼のみとりまなこになりて遅れじと所体しよたい顔くづして駈来かけくる  
 女房の、嵩高かさだかなる風呂敷包いを抱いだくが上に、四歳よつほどの子を背負  
 ひたるが、何処どこの扉も鎖したるに狼狽うろたふるを、車掌しよびに強ひか曳ひかれて  
 やうやあんど漸まく安堵せる間も無く、青洩垂あをばなせる女の子を率あゐて、五十余あまの  
 老夫おやぢのこれも戸惑とまどひひして往ゆきつ復もどりつせし揚句あげく、駅夫ひかに曳ひかれて室  
 内に押入れられ、如何いかなる罪やあらげなく閉たてらるる扉に袂たもとを介

まれて、もしもしと救すくひを呼ぶなど、未だ都を離れざるにはや旅の哀あはれを見るべし。

五人一隊の若き紳士等は中等室の片隅かたすみに円居まどゐして、その中に旅行らしき手荷物を控へたるは一人よりあらず、他は皆横浜までとも見ゆる扮装いでたちにて、紋付の袷羽織あはせはおりを着たるもあれば、精縷セルの背広なるもあり、袴はかま着けたるが一人、大島紬おほしまつむぎの長羽織と差向へる人のみぞフロックコートを着て、待合所にて受けし饞別せんべつの瓶びん、函はこなどを網棚あみだなの上に片附けて、その手を摩すり払はらひつつ窓より首を出して、停車場ステーションの方かたをば、求むるものありげに望見のぞみみたりしが、やがて藍あゐの如き晚霽ばんせいの空を仰ぎて、

「不思議に好い天氣に成つた、なあ。この分なら大丈夫じや」

「今晚雨になるのも又一興だよ、ねえ、甘糟あまかす」

黒餅こくもちに立沢瀉たちおもだかの黒紬くろつむぎの羽織着たるがかく言ひて示すと

ころあるが如き微笑を洩もらせり。甘糟いひらと呼ばれたるは、茶柳条ちやじまの仙せん台平たいへいの袴を着けたる、この中にて独りひと頬鬚ほほひげの巖いきを蓄たくはふる紳

士なり。

甘糟さきだの答ふるに先ちて、背広かざはやの風早は若きに似合はぬ皺しわ嗟がれ声こゑを振ふり搾しぼりて、

「甘糟は一興で、君は望むところなのだらう」

「馬鹿言へ。甘糟かゆの痒きに堪たへんことを僕は丁ちやんと洞察どうさつしてをる

のだ」

「これは憚はばかりさま様です」

大島紬の紳士は黏<sup>へばりつ</sup>着いたるやうに靠<sup>もた</sup>れたりし身を遽<sup>にはか</sup>に起して、

「風早、君と僕はね、今日は實際犠牲に供されてゐるのだよ。佐<sup>さ</sup>

分利<sup>ぶんり</sup>と甘糟<sup>かんね</sup>は夙<sup>かね</sup>て横浜を主張してゐるのだ。何でもこの間遊仙<sup>ゆうせん</sup>

窟<sup>くつ</sup>を見出して來たのだ。それで我々を引張つて行つて、大いに

氣焰<sup>きえん</sup>を吐<sup>つ</sup>く意<sup>つもり</sup>なのさ」

「何じやい、何じやい！ 君達がこの二人に犠牲に供されたと謂<sup>い</sup>

ふなら、僕は四人の為に売られたんじや。それには及ばんと云ふ

のに、是非浜まで見送ると言うで、氣の毒なと思つてをつたら、

僕を送るのを名として君達は……怪<sup>け</sup>しからん事<sup>こと</sup>たぞ。学生中から

その方は勉強しをつた君達の事ぢやから、今後は実に想<sup>おもひや</sup>遣<sup>や</sup>らる

るね。ええ、肩書<sup>はづかし</sup>を辱<sup>はづかし</sup>めん限は遣<sup>よ</sup>るも可<sup>よ</sup>からうけれど、注意はし

たまへよ、本当に」

この老实の言げんを作なすは、今は四年の昔よとせ間貫一はざまかんいちが兄事けいじせし同窓の荒尾あらおじようすけ讓介なりけりなりけり。彼は去年法学士を授けられ、次いで内務省試補に挙げあげられ、踰えて一年の今こん日にち愛知県の参事官に榮転して、赴任の途に上れるなり。その齡よはひと深慮と誠実との故ゆゑを以つて、彼は他の同学の先輩として推服するところたり。

「これで僕は諸君へ意見の言いひをさめ納ねがはじや。願よろしくは君達も宜く自重してくれたまへ」

面白く発はりし一座たちましらも忽ち白しきりけて、頻くゆに燻まきたばこらす巻ま 蓑のの煙のの、急きゆうし駛しせる車の逆むかひ風かぜに扇あふらるるが、飛雲の如く窓を逸のがれて六ろく郷川くごうがわを掠かすむあるのみ。

佐分利は幾数回頷きて、  
あまたたびうなづ

「いやさう言れると慄然とするよ、実は嚮停車場で例の『美人

クリム』(こは美人の高利貸を戯称せるなり)を見掛けたのだ。

あの声で蜥蜴とかげくら啖ふかと思ふね、毎見ても美しいには驚嘆する。全

で淑女の扮装だ。レディ いでたち就中今日は治してをつたが、何処か旨い

口でもあると見える。那奴あいつに搾しばられちや克かなはん、あれが本当の真

綿で首だらう」

「見たかつたね、それは。夙かねて御高名は聞及んでゐる」

とおほしまつむぎと大島紬なほの猶続なほけんとするを遮りて、甘糟さへぎの言へる。

「おお、宝井が退学を吃くつたのも、其奴そいつが債権者の重なる者だと

云ふぢやないか。余程好い女ださうだね。黄金きんの腕環おもとなんぞ簪はめ



てゐると云ふぢやないか。酷い奴な！ 鬼神のお松だ。佐分利は

その劇なるを知りながら係つたのは、大いに冒険の目的があつて

存するのだらうけれど、木乃伊にならんやうに禪を緊めて掛るが

可いぜ」

「誰か其奴には尻押が有るのだらう。亭主が有るのか、或は情

夫か、何か有るのだらう」

皺しわがれごゑ嗟声は卒然としてこの問を発せるなり。

「それに就いては小説的の閱歴ライフがあるのさ、情夫ぢやない、亭主

がある、此奴が君、我々の一世紀ぜん前に鳴した高利貸アイスで、赤檉あかがし権こん

三郎と云つては、いや無法な強慾で、加ふるに大々的物いんぶつと

来てゐるのだ」

「成程！ 積極しやくぎよくと消極と相触れたので爪つめに火がともる訳だな」

大島紬が得意の謔まげ浪かへしに、深沈なる荒尾も已やむを得ざらんやうに破顔しつ。

「その赤檉と云ふ奴は貸金の督促を利用しては女を弄もてあそぶのが道楽で、此奴こいつの為に汚けがされた者は随分意外の辺へんにも在るさうな。そこで今の『美人クリムびじ』、これもその手に雇かかつたので、原は貧乏士族の娘で堅気であつたのだが、老猾おやぢこの娘を見ると食指大に動いた訳で、これを俘とりこにしたさに父親に少しばかりの金を貸したのだ。期限が来ても返せん、それを何とも言はずに、後から後からと三四度も貸して置いて、もう好い時分に、内に手が無くて困るから、半月ばかり仲働なかばたらきに貸してくれと言出した。これはよ

しんば奴の胸中が見え透いてゐたからとて、勢ひ辞ことわりかねる人情だらう。今から六年ばかり前の事で、娘が十九の年おやち老猶は六十ばかりの禿はげ顱あたまの事だから、まさかに色気とは想はんわね。そこで内へ引張つて来て口説いたのだ。女房といふ者は無いので、怪しげなたきざはりぜん嬰たきざはりぜん妾然たる女を置いてをつたのが、その内にいつか娘は妾同様になつたのはどうだい！」

かたづ固唾を嚙のみたりし荒尾は思ふところありげに打うちうなづ領うなづきて、

「女といふ者はそんなものじやて」

甘糟はその面おもてを振仰ぎつつ、

「驚いたね、君にしてこの言あるのは。荒尾が女を解釈せうとは想はなんだ」

「何故かい」

佐分利の話を進むる折から、きしやにはか 瀟車は遽に速力を加へぬ。

佐「聞えん聞えん、もつと大きな声で」

甘「さあ、御順にお膝ひざくり繰だ」

佐「荒尾、あの葡萄酒を抜かんか、ぶどうしゅ 喉のどが渴かわいた。これからが佳

境に入るのだからね」

甘「中なか銭せんがあるのは酷ひどい」

佐「蒲田かまだ、君は好い苮たばこを吃すつてゐるぢやないか、一本頂ちようだい戴」

甘「いや、てまはり 図に乗ること。僕は手廻の物を片附けやう」

佐「甘糟マツチ、焔児マツチを持つてゐるか」

甘「そら、いで お出だ。持参いたしてをりまする仕合しあはせで」

佐分利は居長高ゐたけだかになりて、

「些ちよつと点けてくれ」

葡萄酒の紅くれないを啜り、ハヴァナの紫を吹きて、佐分利は徐おもむくに語を

繼ぐ、

「所謂いはゆる一朶いちだの梨花海棠りかかいどうを圧してからに、娘の満枝は自由にされ

て了しまつた訳だ。これは無論親父には内証だつたのだが、当座しきは荐

つて歸りたがつた娘が、後には親父の方から歸れ歸れ言つても、

歸らんだらう。その内に段々様子が知れたもので、侍形氣かたぎの親父

は非常な立腹だ。子でない、親でないと云ふ騒になつたね。する

と禿はげの方から、妾だから不承知なのだらう、籍を入れて本妻に直

すからくれろといふ談判になつた。それで逢つて見ると娘も、阿お

父さん、どうか承知して下さいは、親父益ますす意外の益す不服だ。

けれども、天魔に魅入られたものと親父も愛相あいそを尽つかして、唯ただ一人

の娘を阿父さん彼自身より十歳とをばかりも老漢おやちの高利貸にくれて了

つたのだ。それから満枝は益す禿ちようの寵を得て、内政を自由にする

やうになつたから、定めて生家さとの方へ貢ぐと思の外、極きめの給ものの外

は塵葉ちりつば一本や饋らん。これが又禿ぎよの御意に入つたところで、女め

熟つらつら高利の塩梅あんばいを見てゐる内に、いつかこの商売が面白くなつ

て来て、この身代しんだい我物と考へて見ると、一人の親父よりは金銭かね

の方が大事、といふ不敵りようけんな了簡りようけんが出た訳だね」

「驚くべきものぢやね」

荒尾は可忌いまはしげに呟つぶやきて、稍やや不快の色を動うごせり。

「そこで、<sup>びんしょう</sup>敏捷な女には違無い、自然と高利<sup>アイス</sup>の呼吸を吞込んで、後には手の足りん時には禿の代理として、何処<sup>どこ</sup>へでも出掛けるやうになつたのは益す驚くべきものだらう。丁度一昨<sup>あたり</sup>年辺から禿は中氣が出て未<sup>いま</sup>だに動けない。そいつを大小便の世話までして、女の手一つで盛<sup>さかん</sup>に商売をしてゐるのだ。それでその前年かに親父は死んだのださうだが、板の間に薄<sup>うすべり</sup>縁を一板<sup>いちまい</sup>敷いて、その上で往生したと云ふくらゐの始末だ。病氣の出る前などはろくに寄せ付けなんださうだがな、残刻と云つても、どう云ふのだから余り氣が知れんぢやないかな——然<sup>しか</sup>し事實だ。で、禿はその通の病人だから、今ではあの女が独<sup>ひとり</sup>で腕<sup>うで</sup>を揮<sup>ふる</sup>つて益す盛<sup>や</sup>に遣<sup>や</sup>つてゐる。これ則<sup>すなは</sup>ち『美人<sup>びじん</sup>クリイム』の名ある所以<sup>ゆゑん</sup>さ。

年紀としかい、二十五だと聞いたが、さう、漸やうやう二三とよりは見え  
 んね。あれで可愛かはゆい細い声をして物柔ものやはらかに、口数くちかずが寡すくなくつて  
 巧ことい言をいふこと、恐るべきものだよ。銀貨を見て何処の国の勲  
 章だらうなどと言ひさうな、誠に上品な様子をしてゐて、書替かきかへ  
 だの、手形に願ふのと、急所を衝つく手際てぎはの婉えんき曲よくに巧妙な具合  
 と来たら、実に魔薬でも用ゐて人の心を痿なやすかと思ふばかりだ。  
 僕も三度ほど痿なやされたが、柔能く剛を制すで、高利貸アイスには美人が  
 妙！ 那彼あいづに一国を預ければ輒すなはちクレオパトラだね。那彼には滅  
 されるよ」

風早は最も興を覺えたる気色けしきにて、  
 「では、今はその禿はげ顱ちゆうふうは中風で寐ねたきりなのだね、一昨年をととしか



ら？ それでは何か虫があるだらう。有る、有る、それくらゐの女で神妙にしてゐるものか、無いと見せて有るところがクレオパトラよ。然し、さかん 壮な女だな」

「余り壮なのは恐れる」

佐分利は頭かしらを抑おさへて後うしろ様さまにもた靠れつつ笑ひぬ。次いで一同も笑ひぬ。

佐分利は二年生たりしより既に高利の大火坑に墮おちて、今はしも連帶一判、取交とりまぜ五口いづくちの債務六百四十何円の呵かし責やくに膏あぶらを取るる身の上にぞありける。次いでは甘糟むきずの四百円、大島紬氏は卒業前にして百五十円、後ごに又二百円、無疵むきずなるは風早と荒尾とのみ。

汽車は神奈川に着きぬ。彼等の物語をば笑しげに傍聴したりし  
 横浜商人しようにんていの乗客は、幸さいはひに無聊を慰められしを謝すらんや  
 うに、懇ねんごろに一揖いつゆうしてここに下車せり。暫しばらく話の絶えける間に荒  
 尾は何をか打案ていずる体にて、その目を空むなしく見据みゑつつ漫そぞろごと語の  
 やうに言出いひいでたり。

「その後誰たれも間はざまの事を聞かんかね」

「間貫一かい」と皺しわかれ噺はな声は問とひかへ反へせり。

「おお、誰やらぢやつたね、高利貸アイスの才取さいとりとか、手代てだいとかして  
 をると言うたのは」

蒲「さうさう、そんな話を聞いたつけね。然し、間には高利貸アイスの  
 才取は出来ない。あれは高利を貸すべく余り多くの涙を有つてゐ

るのだ」

我が意を得つと謂はんやうに荒尾は領きて、猶も思に沈みゐたり。佐分利と甘糟の二人はその頃一級先ちてありければ、間とは相識らざるなりき。

荒「高利貸と云ふのはどうも妄ぢやらう。全く余り多くの涙を有つてをる。惜い事をした、得難い才子ぢやつたものね。あれが今居らうなら……」

彼は忍びやかに太息を泄せり。

「君達は今逢うても顔を見忘れはすまいな」

風「それは覚えてゐるとも。あれの峭然と外眥の昂つた所が目標さ」

蒲「さうして髪あたまの癖毛くせつけの具合がな、愛あい嬌きようが有つたぢやないか。デスクの上に頬杖ほづゑをついて、かう下向になつて何時いつでも真ま面目じめに講義を聴いてゐたところは、何処どこかアルフレッド大王に肖にてゐたさ」

荒尾は仰いぎて笑へり。

「君は毎いも妙な事を言ふ人ぢやね。アルフレッド大王とは奇想天外だ。僕の親友を古英雄に擬してくれた御礼に一い盃つぱいを献じやう」  
蒲「成程、君は兄弟のやうにしてをつたから、始終憶おもひ出すだらうな」

「僕は實際死んだ弟おととよりも間の居らなくなつたのを悲む」  
愁然として彼は頭かしらを俛たれぬ。大島紬は受けたる盃さかづきを把りながら、

更に佐分利が持てる猪口ちよくを借りて荒尾に差しつ。

「さあ、君を慰める為ひとつに一番間の健康を祝さう」

荒尾の喜は実げに溢あふるるばかりなりき。

「おお、それは辱かたじけない」

なみなみ

盈々と酒を容いれたる二つの猪口は、彼等の目より高く挙げら

ると斉ひとしく憂かつと相撃あひうてば、紅くれなゐの雫づくの漏るが如く流るるを、互に引

くより早く一息ひといきに飲乾したり。これを見たる佐分利は甘糟うごかの膝

を揺うごかして、

「蒲田は如才つらまつないね。面は醜まづいがあの呼吸で行くから、往々拾ひろひ

物を為いるのだ。ああ言いはれて見ると誰たれでも些ちよつと憎くないからね」

甘さすが「遺いは交際官試補！」

佐「試補々々！」

風「試補々々立つて泣きに行く……」

荒「馬鹿な！」

ことば  
言を改めて荒尾は言出せり。

「どうも僕は不思議でならんが、停車場で間を見たよ。間に違

無いのじや」

ただいま  
唯の今陰ながらその健康を誇りし蒲田は拍子を抜して彼の面を  
眺めたり。

「ふう、それは不思議。他は気が着かなんだかい」

「始は待合所の入口の所で些と顔が見えたのじや。余り意外ぢ  
やつたから、僕は思はず長椅子を起つと、もう見えなくなつた。

それから有間<sup>しばらく</sup>して又偶然<sup>ふつと</sup>見ると、又見えたのじや」

甘「探偵小説だ」

荒「その時も起ちかけると又見えなくなつて、それから切符を切つて 歩<sup>プラットフォーム</sup> 場へ入るまで見えなかつたのじやが、入つて少し

来てから、どうも氣になるから振返つて見ると、傍<sup>そば</sup>の柱に僕を見て黒い帽を揮<sup>ふ</sup>つとる者がある、それは間よ。帽を揮つとつたから間に違無いぢやないか」

横浜！ 横浜！ と或<sup>あるひ</sup>は急に、或<sup>ゆる</sup>は緩く叫ぶ声の窓の外面<sup>そとも</sup>を飛

びすぐ

過るとともに、響は雑然として起り、迸<sup>ほとばし</sup>り出づる、群集<sup>くんじゆ</sup>は玩

もちやばこ<sup>かへ</sup>

具箱を覆したる如く、場内の彼方<sup>かなた</sup>より轟<sup>とどろ</sup>く鐸<sup>ベル</sup>の音はこの響と混

雑との中を貫きて奔注せり。

☆昨七日イ便の葉書にて（飯田町局消印）美人クリイムの  
さくなぬか  
 語にフエアクリイム或はベルクリイムの傍訓有度との言  
あるひ  
おくを貽られし読者あり。ここにその好意を謝するとともに、聊  
 か弁ずるところあらむとす。おのれも始め美人の英語を用ゐ  
 むと思ひしかど、かかる造語は慙に理詰ならむよりは、出ま  
なましひ  
 かせの可笑き響あらむこそ可よかめれとバيسクリイムとも思  
をかし  
もひつ着きしなり。意は美アイスクリームなるを、ビ、アイ――  
 バイの格にて試みしが、さては説明を要すべき炊くたくだ冗きようこうしやしさを  
きら嫌ひて、更に美人の二字にびじ訓を付せしを、校合者の  
おもひひが思おもひひが 僻おもひひが めてん字は添へたるなり。陋いやしげなるびじクリイム



の響うちの中には嘲弄とうろうの意も籠こもらむとてなり。なほ高論こうろんを請こふ

(三〇・九・八附読売新聞より)

## 第二章

柵さくの柱もとの下に在りて帽を揮ふりたりしは、荒尾が言ことばの如く、四年  
 の生死しやうしを詳つまびらか悉みづからにせざりし間貫一にぞありける。彼は親友の  
 前に自の影を晦くらまし、その消息をさへ知らせざりしかど、陰ながら  
 荒尾が動静の概略あらましを伺ふことを怠らざりき、こ回たびその参事官た  
 る事も、午後四時発の列車にて赴任する事をも知るを得しかば、  
 余よそ所ながら暇いとまごひ乞こもし、二つには榮譽にしきの錦を飾れる姿をも見ん

と思ひて、群集くんじゆに紛れてここには来りきたしなりけり。

何なにの故ゆゑに間まは四年おとづれの音信を絶ち、又何またの故にさしも懷おもひに忘れざる旧友と相見て別べつを為さざりしか。彼が今の身の上を知らば、この疑問は自ら解釈せらるべし。

柵の外に立ちて列車の行くを送りしは独り間貫一ひとのみにあらず、そこもとに聚つどひし老若貴賤ろうにやくきせんの男女は皆個々の心をもて、愁ふるもの、樂むもの、虞きづかふもの、或は何とも感ぜぬものなど、品変れども目的はいつ一なり。数分時の混雑の後車の出いづるとともに、一人散り、二人散りて、彼の如く久う立尽せるはあらざりき。やがて重さなき物など引くらんやうに彼の漸く踵やうやきびすめぐらを旋せし時には、推おしかるまでに柵際さくぎはに聚つどひし衆は殆ど散果てて、駅夫の三四人が

箒<sup>はうき</sup>を執りて場内を掃除せるのみ。

貫一は差含<sup>さしぐま</sup>るる涙を払ひて、独り後<sup>おく</sup>れたるを驚きけん、遽<sup>にはか</sup>に急

ぎて、蓬萊橋<sup>ほうらいばしぐち</sup>口より出<sup>い</sup>でんと、あだかも石段際に寄るところ

を、誰<sup>たれ</sup>とも知らで中等待合の内より声を懸けぬ。

「間さん！」

慌<sup>あわ</sup>てて彼の見向く途端に、

「些<sup>ちよつ</sup>と」と戸口より半身を示して、黄金<sup>きん</sup>の腕環の氣爽<sup>けざやか</sup>に耀<sup>かがや</sup>ける

手なる絹ハンカチーフに唇<sup>くちもと</sup>辺を掩<sup>おほ</sup>いて束髪<sup>くちもと</sup>の婦人の小腰を屈<sup>かが</sup>む

るに会へり。艶<sup>えん</sup>なる面<sup>おもて</sup>に得<sup>い</sup>も謂<sup>い</sup>はれず愛らしき笑<sup>ゑみ</sup>をさへ浮べたり。

「や、赤<sup>あか</sup>檜<sup>がし</sup>さん！」

婦人の笑<sup>ゑみ</sup>もて迎ふるには似ず、貫一は冷然として眉<sup>まゆ</sup>だに動かさ

ず。

「好よい所でお目に懸かりましたこと。急にお話を致したい事が出来  
ましたので、まあ、些ちよつと此方こちへ」

婦人は内に入れば、貫一も渋々跟ついて入るに、長椅子ソオフワアに掛かれ  
ば、止む無くその側そばに座を占めたり。

「実はあの保険建築会社の小車梅おぐるめの件なのでございますがね」  
彼は黒檣文絹くろちよろけんの帯の間を搜さぐりて金側時計とりいだを取り出し、手早く

収めつつ、

「貴方あなたどうせ御飯前であらつしやいませう。ここでは、御話も出  
来ませんですから、何方どちらへかお供を致しませう」

紫紺塩瀬しほぜに消金けしきんの口金くちがね打ちたる手鞆てかばんを取直して、婦人は

やをら<sup>たち</sup>起<sup>あが</sup>上りつ。迷惑は貫一<sup>おもて</sup>が面<sup>あらは</sup>に顕れたり。

「何方<sup>どちら</sup>へ？」

「何方<sup>どちら</sup>でも、私には解りませんですから貴方<sup>あなた</sup>のお宜<sup>よろ</sup>い所<sup>し</sup>へ」

「私にも解りません」

「あら、そんな事を仰<sup>おつ</sup>有<sup>しや</sup>らずに、私は何方<sup>よろ</sup>でも宜<sup>し</sup>いのでござい

ます」

荒布革<sup>あらめがは</sup>の横長<sup>てか</sup>なる手<sup>ばん</sup>鞆<sup>をかき</sup>を膝<sup>いだ</sup>の上に搔<sup>か</sup>抱<sup>き</sup>きつつ貫一の思案

せるは、その宜<sup>かた</sup>き方を扱<sup>とも</sup>ぶにあらで、俱<sup>とも</sup>に行くをば躊<sup>ちゆう</sup>躇<sup>うちよ</sup>せるなり。

「まあ、何にしても出ませう」

「さやう」

貫一も今は是非無く婦人に従ひて待合所の<sup>であひがしら</sup>出會頭に、入来る者ありて、その足<sup>つまさき</sup>尖<sup>ひし</sup>を挫げよと踏付けられぬ。驚き見れば長<sup>たけた</sup>高<sup>か</sup>き老紳士の目尻も異<sup>あやし</sup>く、満枝の色香<sup>いろか</sup>に惑ひて、これは失敬、意外の麁相<sup>そそう</sup>をせるなりけり。彼は猶懲りずまにこの目<sup>め</sup>覺<sup>めざまし</sup>き美形<sup>びけい</sup>の同伴<sup>どうはん</sup>をさへ暫<sup>しばら</sup>く目送<sup>もくそう</sup>せり。

二人は停<sup>ステエシヨン</sup>車場を出でて、指<sup>かた</sup>す方も無く新橋に向へり。

「本当に、貴方、何方へ参りませう」

「私は、何方でも」

「貴方、何時までもそんな事を言つてゐらしつてはきりがござい  
ませんから、好い加減に極<sup>き</sup>めやうでは御坐いませんか」

「さやう」

満枝は彼の心進まざるを曉れども、勉めて吾意に従はしめんと  
 念へば、さばかりの無遇をも甘んじて、

「それでは、貴方、鰻は上りますか」

「鰻？ 遣りますよ」

「鶏肉と何方が宜うございます」

「何方でも」

「余り御挨拶ですね」

「何為ですか」

この時貫一は始めて満枝の面に眼を移せり。百の媚を含みて  
 へし彼の眸は、未だ言はずして既にその言はんとせる半をば語  
 尽したるべし。彼の為人を知りて畜生と疎める貫一も、さ

すがに艶なりと思ふ心を制し得ざりき。満枝は貝の如き前歯と隣れる金歯とを露して片笑みつつ、

「まあ、何為でも宜うございますから、それでは鶏肉に致しませ

うか」

「それも可いでせう」

三十間堀に出でて、二町ばかり来たる角を西に折れて、唯

有る露地口に清らなる門構して、光沢消硝子の軒燈籠に鳥と標

したる方に、人目にはさぞ解あるらしう二人は連立ちて入りぬ。

いと奥まりて、在りとも覚えぬ辺に六畳の隠座敷の板道伝に離

れたる一間に案内されしも宜なり。

懼れたるにもあらず、困じたるにもあらねど、又全くさにあら



ざるにもあらざらんけしき気色にて貫一の容かたちさへ可つつま慎しげに黙して控へ  
 たるは、かかる所にこの人と共にとは思おもひか懸けざる為ていたらく體を、さ  
 すがに胸の安からぬなるべし。通し物は逸いちはや早く満枝が好きに計  
 ひて、少頃しばしは言無き二人が中に置れたるたばこぼん莧たばこ 盆ぼんは子細らしう一  
 炷ちゆうひやつかこうの百和香くゆを燻らせぬ。

「間さん、貴方どうぞお楽に」

「はい、これが勝手で」

「まあ、そんな事を有おつしや仰らずに、よう、どうぞ」

「内に居つても私はこの通なのですから」

「嘘うそを有おつしや仰いまし」

かくても貫一は膝ひざを崩くづさで、  
 卷まきた莧たばこ入いれを取とり出いだせしが、  
 生あやに

憎く一本の莚もあらざりければ、手を鳴さんとするを、満枝は先じて、

「お間に合せにこれを召上りましたな」

あさえぞ 麻蝦夷の御主殿持とともに薦むる筒の端より焼金の吸口は灰に耀けり。齒は黄金、帶留は黄金、指環は黄金、腕環は黄金、時計は黄金、今又煙管は黄金にあらずや。黄金なる哉、金、金！知る可し、その心も金！と貫一は独り可笑しさに堪へざりき。

「いや、私は日本莚は一向可かんのので」

言ひも訖らぬ顔を満枝は熟と視て、

「決して穢いものでは御坐いませんけれど、つい心着きませんでした」

ふところがみ  
懐紙を出してわざとらしくその吸口を振拭ねぢぬぐへば、貫一も  
すこしあわ慌わてて、  
少く慌わてて、

「決してさう云ふ訳ぢやありません、私は日本葎は用ゐるのです  
から」

満枝は再び彼の顔を眺めつ。

「貴方、嘘をお吐つきなさるなら、もう少し物もの覚おぼえを善く遊ばせ  
よ」

「はあ？」

「先日鰐淵わにぶちさんへ上つた節、貴方召上つてゐらしたではござ  
いませんか」

「はあ？」

「瓢ひょうたん筆のやうな恰好かつこうのお煙管で、さうして羅宇らうの本もとに些ちよつと紙の巻いてございました」

「あ！」と叫びし口は頓とみに塞ふさがざりき。満枝は仇無あどなげに口を掩おほひて笑へり。この罰として貫一ただちは直に三服の吸付莨しを強ひられぬ。

とかくする間に盃はいばん盤つらは陳ねられたれど、満枝も貫一ばいも三盃はいを過し得ぬ下戸げこなり。女は清めし猪口ちよくを出いだして、

「貴方、お一盞ひとつ」

「可かんです」

「又そんな事を」

「今度は實際」

「それでは麦酒ビールに致しませうか」

「いや、酒は和洋とも可かんですから、どうぞ御随意に」

酒には礼ありて、おのれ辞せんとらば、必ず他に侑<sup>すす</sup>めて酌せんとこそあるべきに、<sup>はなはだし</sup>甚い哉、彼の手を束<sup>つか</sup>ねて、御随意にと会釈せるや、満枝は心憎しとよりはなかなか可笑しと思へり。

「私も一向不調法なのでございますよ。折角差上げたものですか  
らお一盞<sup>ひとつ</sup>お受け下さいましな」

貫一は止む無くその一盞<sup>ひとつ</sup>を受けたり。はやかく酒になりけれども、満枝が至急と言ひし用談に及ばざれば、

「時<sup>おぐるめ</sup>に小車梅の件と云ふのはどんな事が起りましたな」

「もうお一盞召上れ、それからお話を致しますから。まあ、お見  
事！ もうお一盞」

彼は忽ち眉を攢めて、

「いやそんなに」

「それでは私が戴きませう、恐入りますが酌を」

「で、小車梅の件は？」

「その件の外に未だお話があるのでございます」

「大相有りますな」

「酔はないと申上げ難い事なので、私少々酔ひますから貴方、憚様ですが、もう一つ酌を」

「酔つちや困ります。用事は酔はん内にお話し下さい」

「今晚は私酔ふ意なのでございますもの」

その媚ある目の辺は漸く花桜の色に染みて、心樂しげに稍身を

寛ゆるやかに取成としたる風情ふぜいは、実げに匂にほひなど零こぼれぬべく、熱あつしとて紺きの絹ぬセルの被風ひふを脱はげば、羽織はなやかは無なくて、粲然ぱつとしたる紋御召あはせの袷あはせに  
 黒樗文絹くろちよろけんの全帶まるおび、華麗はなやかに紅べにの入りたる友禪おびあけの帶揚おびあけして、  
 鬢びんのおく後かれの被かる耳際みみぎはを搔かき上あぐる左の手首さには、早蕨さわらびを二筋ふたすぢ  
 寄ちようせて蝶ちようの宿かたれる形かたしたる例の腕環さはやなぎらめの爽さわに晃きらめき遍わたりぬ。常いまはに可忌い  
 しと思あからさまへる物あをかく明々地あからさまに見みせつけられたる貫一えは、得堪えふま  
 じく苦にがりたる眉状まゆつきして密ひそかに目めを翳そらしつ。彼は女おんなの貴族的きそくに装よそほへ  
 るに反さかして、黒紬くろつむぎの紋付あの羽織あに藍千筋あゐせんすぢの秩父銘撰ちちぶめいせんの袷あ  
 着きて、白縮緬しろちりめんの兵児帶へこおびも新あたらからず。  
 彼しを識しれりし者は定さだめて見咎みとがむべし、彼の面影おもかげは尠すくなからず変  
 りぬ。愛あいらしかりしところは皆失うせて、四年よとせに余あまる悲酸ひさんと憂苦うくと

相結びて常に解けざる色は、自ら暗き陰を成してその面を蔽へり。  
 撓むとも折るべからざる堅忍の気は、沈鬱せる顔色の表に動  
 けども、嘗て宮を見しやうの優き光は再びその眼に輝かずなりぬ。  
 見ることの冷に、言ふことの謹めるは、彼が近來の特質にして、  
 人はこれが為に狎るるを憚れば、自もまた苟も親みを求めざるほ  
 どに、同業者は誰も誰も偏人として彼を遠けぬ。焉んぞ知らん、  
 貫一が心には、さしもの恋を失ひし身のいかで狂人たらざりしか  
 を怪むなりけり。

彼は色を正して、満枝が独り興に乗じて盃を重ねる体を打目成  
 れり。

「もう一盞戴きませうか」



笑<sup>ゑみ</sup>を漾<sup>ただ</sup>ふる眸<sup>まなじり</sup>は微醺<sup>びくん</sup>に彩<sup>いろ</sup>られて、更に別様の媚<sup>こび</sup>を加へぬ。

「もう止したが可いでせう」

「貴方<sup>あなた</sup>が止せと仰<sup>おつしや</sup>有るなら私は止します」

「敢<sup>あへ</sup>て止せとは言ひません」

「それぢや私酔ひますよ」

答無かりければ、満枝は手<sup>て</sup>酌<sup>じやく</sup>してその半<sup>なか</sup>を傾<sup>かば</sup>けしが、見る見

る頬<sup>く</sup>の麗<sup>れな</sup>く紅<sup>な</sup>になれるを、彼は手<sup>お</sup>もて掩<sup>ほ</sup>ひつつ、

「ああ、酔ひましたこと」

貫一は聞かざる為<sup>まね</sup>して莨<sup>くゆ</sup>を燻<sup>くゆ</sup>らしゐたり。

「間さん、……」

「何ですか」

「私今晚は是非お話し申したいことがあるので御坐いますが、貴方お聴き下さいますか」

「それをお聞き申す為に御同道したのぢやありませんか」

満枝は嘲むが如く微笑みて、

「私何だか酔つてをりますから、或は失礼なことを申上げるかも知れませんが、お氣に障へては困りますの。然し、御酒の上で申すのではございせんから、どうぞそのお意で、宜うござい  
ますか」

「撞どうちやく着やくしてゐるぢやありませんか」

「まあそんなに有おつしや仰らずに、高たかが女の申すことでござい  
ますか」

こは事ことむづかし難なうなりぬべし。克かなはぬまでも多少は累を免れんと、  
 貫一は手を拱こまぬきつつ俯目ふしめになりて、力つとめて関かかはらざらんやうに持もて成な  
 すを、満枝みんしは擦すりよ寄りて、

「これお一盞ひとつで後は決けしてお強ひひ申しませんですから、これだけ  
 お受けなすつて下さいましな」

貫一は些さの言ことばも出いさでその猪口ちよくを受けつ。

「これで私の願は届いたきましたの」

「易やすい願ねがですな」と、あはや出いでんとせし唇くちびるを結びて、貫一は纔わづか  
 に苦笑して止みぬ。

「間さん」

「はい」

「貴方失礼ながら、何でございますか、鰐淵まさんの方に未だお長くゐらつしやるお意つもりなのですか。然し、いづれ独立あそばすので御坐いませう」

「勿もちろん論です」

「さうして、まづ何頃いつごろ彼方あちらと別にお成りあそばすお見込なのでございますの」

「資本のやうなものが少しでも出来たらと思つてゐます」

満枝たちまは忽ち声こゑを斂とめて、物思はしげに差さしう俯つむき、蓑盆ふちの縁ふちをもてあそば弄もべるやうに煙管きせるもて刻きざを打ちてゐたり。折しも電燈の光ひの邊かはに晦くらむに驚おどろきて顔あぐを挙げば、又旧もとの如く一間ひとまは明あかるうなりぬ。彼は煙管を捨てて猶なほ暫しばし打案じたりしが、

「こんな事を申上げては甚だ失礼なのでございますけれど、何時まで彼方あちらにゐらつしやるよりは、早く独立あそばした方が宜いよろしでは御坐いませんか。もし明日にもさうと云ふ御考でゐらつしやるならば、私……こんな事を申しては……鳥濤をこがましいので御坐います、大した事は出来ませんけれど、都合の出来るだけは御用達申して上げたいのでございますが、さう遊ばしませんか」

意外に打れたる貫一は箸はしを扣ひかへて女の顔を屹きと視みたり。

「さう遊ばせよ」

「それはどう云ふ訳ですか」

実に貫一は答に窮せるなりき。

「訳ですか？」と満枝は口籠くちごもりたりしが、

「別に申上げなくてもお察し下さいましな。私だつて何時までも赤あかがし檜えに居たいことは無いぢやございませんか。さう云ふ訳なのでございます」

さつぱり  
「全然解らんですな」

「貴方、可うございますよ」

うらめ  
可恨しげに満枝は言を絶ちて、横よこ膝ひざに荏ひねを拈ねりゐたり。

「失礼ですけれど、私はお先へ御飯を戴きます」

めしつぎ  
貫一が飯桶を引寄せんとするを、はたと抑おさへて、

「お給仕なれば私致します」

はばかりさま  
「それは憚はづか様です」

満枝は飯桶を我が側に取寄せしが、茶ちや碗わんをそれに伏せて、彼あ

方なたの壁かべ際に推遣おしやりたり。

「未だお早うございますよ。もうお一盞召上れ」

「もう頭が痛くて克かなはんですから赦ゆるして下さい。腹が空いてゐるのですから」

「お餒ひもじいところを御飯を上げませんでは、さぞお辛つらうございませう」

「知れた事ですわ」

「さうでございませう。それなら、此方こちらで思つてゐることが全まるで先方さきへ通らなかつたら、餒さきいのに御飯を食べないのよりか簀はるに辛うございますよ。そんなにお餒ひもじじければ御飯をお附け申しますから、貴方も只今の御返事をなすつて下さいましな」

「返事と言はれたつて、有<sup>おつしや</sup>仰ることの主意が能く解<sup>よ</sup>らんですもの」

「何<sup>なぜ</sup>故<sup>わかり</sup>お了解になりますの」

責むるが如く男の顔を見遣れば、彼もまた詰<sup>なじ</sup>るが如く見返しつ。

「解らんぢやありませんか。親い御交際の間でもない私に資本を出して下さる。さうしてその訳はと云へば、貴方も彼<sup>あすこ</sup>処<sup>こ</sup>を出る。」

「解らんぢやありませんか。どうか飯を下さいな」

「解らないとは、貴方、お酷いぢやございませんか。ではお氣に召さないのでございますか」

「氣に入らんと云ふ事は有りませんが、縁も無い貴方に金を出して戴く……」



「あれ、その事ではございませんてば」

「どうも非常に腹が空いて来ました」

「それとも貴方外にお約束でも遊ばした御方がお在なさるのでございますか」

彼終に鋒銚を露し来れるよと思へば、貫一は猶解せざる体を作して、

「妙な事を聞きますね」

と苦笑せしのみにて続く言もあらざるに、満枝は図を外されて、やや心惑へるなりけり。

「さう云ふやうな方がお在なさるなければ、……私貴方にお願があるのでございます」

貫一も今は屹きつと胸を据ゑて、

「うむ、解りました」

「ああ、お了解わかりになりました」

嬉しと心を言へらんやうの氣色けしきにて、彼の猪口ちよくに余せし酒をあま一ひ息いきに飲乾のみほして、その盃をつと貫一に差せり。

「又ですか」

「是非！」

発はずみに乗せられて貫一は思はず受うくると斉ひとしく盈なみなみ々注そがれて、下にも置れず一口附くるを見たる満枝が歡喜よろこび！

「その盃は清めてございせんよ」

一々底意ありて忽ゆるがせ諸にすべからざる女の言を、彼はいと可わづら

煩はしくて持もて余あませるなり。

「お了解わかりになりましたら、どうぞ御返事を」

「その事なら、どうぞこれぎりにして下さい」

わづか

僅わずかにかく言ひ放ちて貫一は嚴かに沈黙しつ。満枝もさすがに酔ゑひ

さま

を冷さして、彼の氣色けしきを候うかがひたりしに、例の言ことば寡すくななる男の次い

では言はざれば、

「私もこんな可はづかし耻はづかしい事を、一旦申上げたからには、このままで

は済されません」

貫一は緩ゆるかに頷うなづけり。

「女の口からかう云ふ事を言出しますのは能よくよく々の事でございま

すから、それに対するだけの理由を有おつしや仰おつしやつて、どうぞ十分に私

が得心の参るやうにお話し下さいましな、私座興でこんな事を申したのではございませんから」

「御ごもつとも尤もつともです。私のやうな者でもそんなに言つて下さると思へば、決して嬉くない事はありません。ですから、その御深切に對して裏つまず自分の考かんがへ量をお話し申します。けれど、私は御承知の偏屈者でありますから、衆ひととは大きに考量が違つてをります。

第一、私は一生妻さいといふ者は決けして持たん覺悟なので。御承知か知りませんが、元、私は書生でありました。それが中途から學問を罷やめて、この商売を始めたのは、放蕩ほうとうで遣やり損そこなつたのでもなければ、敢あへて食窮くひつめた訳でも有りませんので。書生が可厭いやさに商売を遣らうと云ふのなら、未だ外ほかに幾多いくたも好い商売は有りま

すさ、何を苦んでこんな極悪非道な、白日盗はくじつとうを為なすと謂いはうか、病人のどくちの喉ほ口を干すと謂いはうか、命よりは大事な人の名誉を殺して、その金錢を奪取る高利貸などを扱えらむものですか」

聴居る満枝は益ますす醉ゑひを冷されぬ。

「不正な家業と謂ふよりは、もう悪事ですな。それを私が今日こんにち始めて知つたのではない、知つて身を墮おとしたのは、私は当時敵手さきを殺して自分も死にたかつくらゐ無念極きはまる失望をした事があつたからです。その失望と云ふのは、私が人を頼たのみにしてをつた事があつて、その人達も頼れなければならん義理合になつてをつたのを、不図した慾に誘れて、約束は違へる、義理は捨てる、さうして私は見事に売られたのです」

火影<sup>ひかげ</sup>を避けんとしたる彼の目の中に遽<sup>には</sup>に耀けるは、なほ新<sup>あらた</sup>なる

痛恨の涙の浮べるなり。

「実に頼<sup>たのみすくな</sup>少い世の中で、その義理も人情も忘れて、罪も無い

私の売られたのも、原<sup>もと</sup>はと云へば、金銭<sup>かね</sup>からです。仮<sup>かり</sup>初<sup>そめ</sup>にも一<sup>い</sup>

つびき

匹の男子たる者が、金銭<sup>かね</sup>の為に見易<sup>みか</sup>へられたかと思へば、その

無念といふものは、私は一<sup>い</sup>……一生忘れられます。

軽薄でなければ詐<sup>いつはり</sup>、詐でなければ利慾、愛相<sup>あいそ</sup>の尽きた世の中で

す。それほど可厭<sup>いや</sup>な世の中なら、何<sup>なぜ</sup>為<sup>ひと</sup>一<sup>とおもひ</sup>思に死んで了はんか、

と或は御不審かも知れん。私は死にたいにも、その無念<sup>さなり</sup>が障<sup>さわり</sup>にな

つて死切れんです。売られた人達を苦めるやうなそんな復<sup>ふくしゅ</sup>

讐<sup>う</sup>などは為たくはありません、唯自分だけで可いから、一旦受

けた恨！ それだけは屹きつと霽はらさなければ措おかん精神。片時でもその恨を忘れることの出来ん胸中といふものは、我ながらさう思ひますが、全まるで発狂してゐるやうですな。それで、高利貸のやうな残刻はなはだしの甚ほとんい、殆ど人を殺す程の度胸を要する事を毎日扱つて、さうして感情を暴あらしてゐなければとても堪へられんので、発狂者には適當の商売です。そこで、金錢かねゆゑに売られもすれば、辱はづかしめられもした、金錢の無いのも謂はば無念の一つです。その金錢が有つたら何とでも恨が霽はらされやうか、とそれを樂たのしみに義理も人情も捨てて掛つて、今では名誉も色恋も無く、金錢より外には何の望のぞみも持たんです。又考へて見ると、愁なまじひ人などを信じるよりは金錢を信じた方が間違が無い。人間よりは金錢の方が負はるか頼たのみになりま

すよ。頼にならんのは人の心です！

先まづかう云ふ考でこの商売に入つたのでありますから、実を申せば、貴方の貸して遣らうと有おつしや仰る資本は欲いが、人間の貴方には用が無いのです」

彼は仰ぎて高たかわらひ笑ことばしつつも、その面は痛く激したり。

満枝は、彼の言の決ことばして譌いつはりならざるべきを信じたり。彼の偏屈なる、実げにさるべき所かんがへ見を懐けるも怪むには足らずと思へるなり。されども、彼は未だ恋の甘きを知らざるが故ゆゑに、心狭くもこの面白き世に偏屈とびらの扉を閉ぢて、詐いつはりと輕薄と利欲との外なる樂あるを曉さとらざるならん。やがて我そを教へんと、満枝は輒たやすく望を失はざるなりき。



「では何でございますか、私の心もやはり頼にならないとお疑ひ遊ばすのでございますか」

「疑ふ、疑はんと云ふのは二の次で、私はその失望以来この世の中が嫌で、総ての人間を好まんですから」

「それでは誠も誠も——命懸けて貴方を思ふ者がございましても？」

「勿論！ 別して惚れたの、思ふのと云ふ事は大嫌です」

「あの、命を懸けて慕つてゐるといふのがお了解になりまして」

「高利貸の目には涙は無いですよ」

今は取付く島も無くて、満枝は暫し惘然としてゐたり。

「どうぞ御飯を頂戴」

打ちしを  
打萎れつつ満枝は飯を盛りて出せり。

「これは恐入ります」

彼は啖ふこと傍に人無き若し。満枝の面は薄紅になほ酔は  
有りながら、酔へる体も無くて、唯打案じたり。

「貴方も上りませんか」

かく会釈して貫一は三盃目を易へつ。やや有りて、

「間さん」と、呼れし時、彼は満口に飯を啣みて遽に応ふる能はず、唯目を挙げて女の顔を見たるのみ。

「私もこんな事を口に出しますまでには、もしや貴方が御承知の無い時には、とそれ等を考へまして、もう多時胸に畳んでをつたのでございます。それまで大事を取つてをりながら、かう一も

二も無く奇麗にお謝絶ことわりを受けては、私実に面目めんぼく無くて……余あんまり悔くやしうございますわ」

慌あわただし忙わしくハンカチーフを取りて、片手に恨うらみなき泣の目元を掩おほへり。

「面目無くて私、この座たが起れません。間さん、お察し下さいまし」

貫一は冷々ひややかに見返りて、

「貴方一人を嫌つたと云ふ訳なら、さうかも知れませんか、私は総すべての人間が嫌なのですから、どうぞ悪あしからず思つて下さい。貴方も御飯をお上んなさいな。おお！ さうして小車梅おぐるめの件に就

いてのお話は？」

泣<sup>なき</sup>赤<sup>あか</sup>めたる目を拭<sup>ぬぐ</sup>ひて満枝は答へず。

「どう云ふお話ですか」

「そんな事は<sup>よろし</sup>どうでも宜うございます。間さん、私、どうしても思切れませんから、さう思<sup>おぼしめ</sup>召して下さい。で、お可<sup>い</sup>厭ならお可厭で宜うございますから、私がこんなに思つてゐることを、どうぞ何日までもお忘れなく……きつと覚えてゐらつしやいまいしょ」

「承知しました」

「もつと優<sup>やさし</sup>い言をお聞せ下さいましな」

「私も覚えてゐます」

「もつと何とか有<sup>おつしや</sup>仰りやうが有りさうなものではございませんか」

「御志は決<sup>け</sup>して忘れません。これなら宜いでせう」

満枝は物をも言はずつと起ちしが、翻<sup>ひらり</sup>然と貫一の身近に寄添ひ  
て、

「お忘れあそばすな」と言ふさへに力<sup>ちから</sup>籠<sup>こも</sup>りて、その太股<sup>ふともも</sup>を  
絶<sup>したた</sup>か撮<sup>つめ</sup>れば、貫一は不意の痛<sup>くつ</sup>に覆<sup>が</sup>らんとするを支<sup>よこ</sup>へつつ横<sup>よこ</sup>様に  
振<sup>を</sup>払<sup>んな</sup>ふを、満枝は早くも身を開きて、知らず顔に手を打鳴して婢  
を呼<sup>よ</sup>ぶなりけり。

### 第三章

赤坂氷川<sup>あかさかひかわ</sup>の辺<sup>ほとり</sup>に写真<sup>ごぜん</sup>の御前<sup>ごぜん</sup>と言へば知らぬ者無く、実<sup>げ</sup>にこの

殿の出づるに写真機械を車に積みて随へざることあらざれば、自ら人目を<sup>のが</sup>れず、かかる異名<sup>いみよう</sup>は呼るるにぞありける。子細<sup>しさい</sup>を明めずしては、「将棊<sup>しょうぎ</sup>の殿様」の流かとも想はるべし。あらず！

才の敏、学の博、貴族院の椅子を占めて優に高かるべき器<sup>うつはいだ</sup>を抱きながら、五年を独逸<sup>ドイツ</sup>に薰染せし学者風を喜び、世事<sup>なげう</sup>を抛ちて愚なるが如く、累代の富を控へて、無勘定の雅量<sup>ほしいまま</sup>を肆にすれども、なほ歳<sup>とし</sup>の入るものを計るに正<sup>まさ</sup>に出づるに五倍すてふ、子爵中有数の内福と聞えたる田鶴<sup>たづみ</sup>見良春<sup>よしはる</sup>その人なり。

氷川なる邸内には、唐破風造<sup>からはふづくり</sup>の昔を摸<sup>うつ</sup>せる館<sup>たち</sup>と相並びて、帰朝後起せし三層の煉瓦造<sup>れんがづくり</sup>の異きまで目慣れぬ式なるは、この殿の数寄<sup>すき</sup>にて、独逸に名ある古城の面影<sup>おもかげ</sup>を偲<sup>しの</sup>びてここに象<sup>かたど</sup>れるな

りとぞ。これを文庫と書齋と客間とに充てて、万足らざる無き  
 閑日月をば、書に耽り、画に楽しみ、彫刻を愛し、音楽に嘯き、  
 近き頃よりは専ら写真に遊びて、齢三十四にべども頑として未  
 だ娶らず。その居るや、行くや、出づるや、入るや、常に飄  
 然として、絶えて貴族的容儀を修めざれど、自らなる七万石の  
 品格は、面白う眉秀でて、鼻高く、眼爽に、形の清  
 に揚げるは、皎として玉樹の風前に臨めるとも謂ふべくや、  
 御代々御美男にわたらせらるるとは常に藩士の誇るところなり。  
 かかれれば良縁の空からざること、蝶を捉へんとする蜘蛛の糸よ  
 り繁しといへども、反顧だに為ずして、例の飄然忍びては酔の  
 紛れの逸早き風流に慰み、内には無妻主義を主張して、人の諫な

どふつに用ゐざるなりけり。さるは、かの地に留学の日、陸軍中  
 佐なる人の娘と相あひあい愛して、末の契も堅く、月下の小舟をふねに比翼の  
 權かひあやつを操り、スプレイの流を指ゆびさして、この水の終つひに涸かるる日はあら  
 んとも、我が恋ほのほの消ゆる時あらせじ、と互の誓詞せいしに詐いつはりはあら  
 ざりけるを、歸りて母君に請こふことありしに、いと太いたう驚かれて、  
 こは由ゆゆ々しき家の大事ぞや。夷狄いてきは□□よりも賤いやしむべきに、畏かしこく  
 も我が田鶴見の家をばなでう禽きんじゆう獸おの檻おりと為すべき。あな、可う  
 疎とましの吾子あこが心やと、涙と共に搔かきくど口説かなしきて、悲かなしび歎なげきの余は病に  
 さへ伏したまへりしかば、殿せんなも所為せんな無くて、心苦う思ひつつも、  
 猶なほ行末をこそ頼めと文たよりの便たびたびを度々に慰めて、彼方あなたも在るにあら  
 れぬ三年みとせの月日を、憂うきは死ななんと味氣あぢきなく過せしに、一昨年をととし



の秋物思ふ積りやありけん、心自から弱りて、存へかねし身の苦  
るしみ 悩を、御神みかみめぐみの恵に助けられて、導かれし天国ようの杳として原ぬべ  
 からざるを、いとど可懐なつかしの殿の胸は破れぬべく、ほとほと知覚  
 の半をも失ひて、世と絶つの念益ますますす深く、今は無尽の富も世襲の  
 貴きも何にかはせんと、唯ただおもひ懐を亡き人に寄せて、形見こそ仇あだ  
 ならず書斎の壁に掛けたる半身像は、彼かのをんな女が十九の春の色を  
 苦ねんごろゆしやに手写して、嘗かつて貽おくりしものなりけり。  
 殿はこの失望の極放肆遊惰ほうしの裏に聊うちいささおもひか懐を遣り、一具の写真機  
 に千金なげうを擲ちて、これに嬉戯しやうにすること少児の如く、身をも家をも  
ほか外にして、遊ぶと費すに余念は無かりけれど、家令くろやなに畔柳  
ぎもとえ元衛ありて、その人迂うならず、善く財を理し、事を計るに由り

て、かかる疎放の殿を戴いたける田鶴見家も、幸さいはひに些さの破綻はたんを生ずる無きを得てけり。

彼は貨殖の一端として密ひそに高利の貸元を営みけるなり。千、二千、三千、五千、乃至ないし一万の巨額をも容易に支出する大資本主たるを以もて、高利貸の大口を引受くる輩はいのここに便たよらんとせざるはあらず。されども慧さかしき畔柳は事の密なるを策の上と為なして叨みだりに利の為に誘はれず、始よりその藩士なる鰐淵ただゆき直行の一手に貸出するのみにて、他は皆彼の名義を用ゐて、直接の取引を為さざれば、同業者は彼の那辺いづれにか金穴きんけつあるを疑はざれども、その果して誰なるやを知る者絶えてあらざるなりき。

鰐淵わにぶちの名が同業間に聞えて、威権をさをさ四天王の随一たる

べき勢あるは、この資本主の後うしろだて 楯ありて、運転神助の如き  
 由るのみ。彼は元田鶴見の藩士にて、身柄は謂ふにも足あしがらぬ足  
 軽るがしら 頭に過ぎざりしが、才覚ある者なりければ、廃藩の後出で  
 て小役人を勤め、転じて商社に事へ、一時あるひ或は地所家屋の売買を  
 周旋し、万年青おもとを手掛け、米屋町こめやまちに出しゅつ入し、何れいづにしても  
 世渡よわたりの茶を濁さずといふこと無かりしかど、皆思はしからで巡  
 査を志願せしに、上官の首尾けん好く、竟つひには警部にまで取立てられ  
 しを、中ごろにして金きんこれ権と感ずるところありて、奉職中たくは蓄  
 得へえたりし三百余円を元に高利貸を始め、世間の未だいまこの種の悪  
 手段に慣れざるに乘じて、或は欺あをき、或は嚇おどし、或は賺すかし、或は  
 虐しひたげ、纔わづかに法網くくを潜り得て辛からくも繩附なはつきたらざるの罪を犯し、積

不善の五六千円に達せし比、あだかも好し、畔柳の後見を得たりしは、虎とらに翼を添へたる如く、現に彼の今運転せる金額は殆ど数万に上るとぞ聞えし。

畔柳はこの手より獲るる利の半は、これを御殿ごてんの金庫に致し、半はこれを懐ふところにして、鰐淵もこれに因りて利し、金は一きんにしてその利を三にせる家令が六臂ろつぴの働は、主公が不生産的なるを補ひて猶余なほありとも謂いふべくや。

鰐淵直行、この人ぞ間貫一が捨鉢すてばちの身を寄せて、牛頭馬頭のごずめず手代と頼まれ、五番町なるその家に四年の今日よとせまで寄寓きぐうせるなり。貫一は鰐淵の裏二階なる八畳の一間を与へられて、名は雇人なれども客分に遇あつかはれ、手代となり、顧問となりて、主の重宝大あるじ

方ならざれば、四年よとせの久ひさしきに弥わたれども主は彼を出いだすことを喜ばず、  
 彼もまた家を構かまふる必要無ければ、敢あへて留るを厭いとふにもあらで、  
 手代を勤むる傍かたはぢくばく若干の我が小額をも運転して、自おのづから営たよりむ便もあ  
 れば、今愁なまじひにここを出でて瘦臂やせひぢを張らんよりは、然しかるべき時  
 節の到来を待つには如しかじと分別せるなり。彼は啻ただに手代として  
 能よく働はたらき、顧問として能おもんばかく慮るのみをもて、鰐淵が信用を得たる  
 にあらず、彼の齡よはひを以てして、色を近けず、酒に親まず、浪費せ  
 ず、遊惰せず、勤むべきは必ず勤め、為すべきは必ず為して、己おのれ  
 を銜てらはず、他を貶ひとめず、恭謹にしてしかも氣節に乏からざるなど、  
 世に難ありがた有あるじき若者なり、と鰐淵は寧ろ心むし陰こころひそかに彼を畏おそれたり。  
 主は彼の為あるじ人ひととなりを知りし後のち、如かくのごと此いき人の如何いかにして高利

貸などや志せると疑ひしなり、貫一は己おのれの履歴いっはを詐りて、如何なる失望の極身をこれに墜おとせしかを告げざるなりき。されども彼が高等中学の学生たりしことは後に顕あらはれにき。他の一事の秘に至りては、今もなほ主が疑問に存すれども、そのままに年経にければ、改めて穿せん鑿さくもせられで、やがては、暖簾のれんを分けて屹きつとしたる後うしろみ見は為てくれんと、鰐淵は常に疎おろそならず彼が身を念おもひぬ。直行は今年五十を一つ越えて、妻なるお峯みねは四十六なり。夫は心猛たけく、人の憂うれひを見ること、犬の噓くさめの如く、唯ただ貪むさぼりて饜あくを知らざるに引易きだてへて、氣立優しとまでにはあらねど、鬼の女房ながらも尋常の人の心は有もてるなり。彼も貫一の偏屈なれども律義りちぎに、愛すべきところとは無けれど、憎ましきところとは猶なほ更さらにあら

ぬを愛して、何くれと心着けては、彼の為に計りて善かれと祈るなりける。

いと幸ありける貫一が身の上哉。彼は世を恨むる余その執念の驅るままに、人の生ける肉を啖ひ、以つて聊か逆境に暴されたりし枯腸を癒さんが為に、三惡道に捨身の大願を發起せる心中には、百の呵責も、千の苦難も固より期したるを、なかなかかゝる寛なる信用と、かかる温き憐愍とを被らんは、羝羊の乳を得んとよりも彼は望まざりしなり。憂の中の喜なる哉、彼はこの喜を如何に喜びけるか。今は呵責をも苦難をも敢て悪まざるべき覺悟の貫一は、この信用の終には慾の為に剥がれ、この憐愍も利の為に吝まるる時の目前なるべきを固く信じたり。

(三) の二

毒は毒を以て制せらる。鰐淵わにぶちが債務者中に高利借の名にしお

ふ某党ぼうの有志家某あり。彼は三年来生なまごろし殺ころの關係にて、元利五

百余円せめの責を負ひながら、奸智かんちを弄ろうし、雄弁ふるを揮ひ、大胆不敵に

構かまへて出沒自在はかりごとの計を出し、鰐淵が老巧かかの術といへども得て施す

ところ無かりければ、同業者のこれに係かかりては、逆振さかねぢを吃くひて

血反吐ちへどを噴はかされし者すくなからざるを、鰐淵は弥いよ憎しと思へど、彼

に對しては鍊かなてこ桿こも折れぬべきに持余かなしつるを、克かなはぬまでも棄す

措ておくは口惜くちをしければ、せめては令見みせしめの為にも折々釘くぎを刺して、



再び那奴しやつはがいのの翅はねを展べしめざらんにかかずと、昨日きのふは貫一の曠ぬからず  
 嚴談せよと代理を命ぜられてその家に向ひしなり。

彼は散々にほんろう翻弄せられけるを、劣らじと罵りて、前後四時間

ばかりその座を起ちも遣やらでさかんに言争ひしが、病者に等き青二才

と侮りし貫一の、陰忍しんねり強く立向ひて屈する気色けしきあらざるより、

有合ふ仕込しこみつゑ杖を拔放し、おのれ還かへらずば生けては還さじと、二

尺余あまりの白刃あやふを危く突付けて脅おびやかせしを、その鼻頭はなさきあしらに待ひて愈いよいよ動

かざりける折柄をりから、来合せつる壮士三名の乱拳に囲れて門外に突

放され、少しは傷など受けて帰来かへりきにけるが、これが為に彼の感じ

易やすき神経はなはだしは甚く激動して夜もすがら眠を成さず、今朝は心地うたの転

た勝すぐれねば、一日の休養を乞ひて、夜具をも収めぬ一間ひきこもに引籠れ

るなりけり。かかることありし翌日は夥く脳の憊るとともに、心乱れ動きて、その憤りし後を憤り、悲みし後を悲まざれば已まず、為に必ず一日の勤を廃するは彼の病なりき。故に彼は折に触れつつその体の弱く、その情の急なる、到底この業に不適當なるを感じざることを無し。彼がこの業に入りし最初の一年は働より休の多かりし由を言ひて、今も鰐淵の笑ふことあり。次の年よりは漸く慣れてけれど、彼の心は決してこの悪を作すに慣れざりき。唯能く忍得るを学びたるなり。彼の学びてこれを忍得るの故は、爾来終天の失望と恨との一日も忘るる能はざるが為に、その苦悶の余勢を駆りて他の方面に注がしむるに過ぎず。彼はその失望と恨とを忘れんが為には、以外の堪ふまじき苦悶を辞せざるなり。

されども彼は今もなほ往々自ら為せる残刻を悔い、或は人の加ふ  
 る侮辱に堪へずして、神経の過度に亢奮せらるる為に、一日の  
 調摂を求めざるべからざる微恙を得ることあり。

ほがらか

朗に秋の気澄みて、空の色、雲の布置句はしう、金色

の日影は豊に快晴を飾れる南受の縁障子を隙して、爽なる肌

ださむ

ところ

たけたか

や

貫一は横はれり。

蒼く濁れる頬の肉

あを

に

ほほ

めざし

色

よ、

へる横顔の輪廓よ、曇の懸れる眉の下に物思はしき眼色

りんかく

まゆ

ほぼづゑ

枕

の凝りて動かざりしが、やがて崩るるやうに頬杖を倒して、枕

くりまくら

かしろ

かい

まき

なげや

ふた

たりし新聞を取りけるが、見る間もあらず投遣りて仰向になりぬ。

折しも誰ならん、階子を昇来る音す。貫一は凝然として目を塞

たれ

はしご

のぼりく

貫一は凝然として目を塞

ふた

ふた

ふた

ふた

ふた

ふた

ふた

ふた

ぎゐたり。紙門ふすまを啓あけて入いり来きたれるは主あるじの妻なり。貫一の慌あわてて起上るを、そのままにと制して、机かたはらの傍はらに坐りつ。

「紅茶を淹いれましたからお上んなさい。少しばかり栗くりを茹ゆでましたから」

手籃てかごに入れたる栗と盆なる茶器とを枕まくら頭もとに置き、

「気分はどうです」

「いや、なあに、寝てゐるほどの事は無いので。これは色々御馳ごちそう走様うさまでございます」

「冷めない内にお上んなさい」

彼は会釈して珈琲カフヒイチャワン茶碗を取上げしが、

「旦那だんなは何時いつ頃でかけお出懸でかけになりました」

「今朝は毎いっもより早くね、氷川ひかわへ行くと云つて」

言ふも可疎うとましげに聞えけれど、さして貫一こころは意も留めず、

「はあ、畔くろやなぎ 柳さんですか」

「それがどうか知れないの」

お峯は苦にがわらひ笑あきらかしつ。明なる障子の日脚ひぎしはその面の小皺おもてこじわの読ま

れぬは無きまでに照しぬ。髪は薄けれど、櫛くしの齒通りて、一いっばつ髪

を乱さず円まるわけ髻かたに結びて顔の色は赤き方なれど、いと好く磨みがきて

清きよめらかに滑なめなり。鼻あたりうすいもの辺に薄痘痕ひきすぼありて、口を引ひきすぼ窄ぬばたまむる癖あり。齒

性悪ければとて常に涅くろめたるが、かかるをや烏羽玉ぬばたまとも謂いふべく

殆ど耀ほとかがやくばかりに麗うるはし。茶柳条ちやしまのフラネルひとへの単衣あささむに朝寒の羽織

着たるが、御召縮緬ちりめんの染直ちりめんしなるべく見ゆ。貫一はさすがに聞

きも流されず、

「何なぜ為ですか」

お峯は羽織ひもの紐を解きつ結びつして、言はんか、言はざらんか

を遅ためらへる風情ふぜいなるを、強しひて問はまほしき事にはあらじと思へば、

貫一は籃かごなる栗を取りて剥むきゐたり。彼は姑しばらく打案ぜし後、

「あの赤あかがし櫛べつびんの別品べつひんさんね、あの人は悪いうはさ噂うわさが有るぢやありま

せんか、聞きませんか」

「悪い噂とは？」

「男を引掛けては食物くひものに為るとか云ふ……」

貫一は覺えず首を傾けたり。曩さきの夜の事など思合するべし。

「さうでせう」

「一向聞きませんな。那奴男あいつを引掛けなくとも金銭かねには窮こまらんで  
せうから、そんな事は無からうと思ひますが……」

「だから可いけない。お前さんなんでもべいろしや組の方ですよ。  
金銭かねが有るから為ないと限つたものですか。さう云ふ噂が私の耳  
へ入つてゐるのですもの」

「はて、な」

「あれ、そんな剥きやうをしちや食べるところは無い、此方こつちへお  
貸しなさい」

「これは憚はばかりさま様です」

お峯はその言はんとするところを言はんとには、墨々まじまじと手を  
束ねて在らんより、事に紛らしつつ語るの便たよりあるを思へるなり。

彼は更に栗の大きいなるを<sup>えら</sup>択みて、その頂<sup>いただき</sup>よりナイフを加へつ。

「些<sup>ちよ</sup>と見たつてそんな事を為さうな風ぢやありませんか。お前さんなんぞは堅<sup>かたじん</sup>人だから可いけれど、本当にあんな者に係<sup>かかり</sup>合<sup>あ</sup>ひでもしたら大変ですよ」

「さう云ふ事が有りますかな」

「だつて、私の耳へさへ入る位なのに、お前さんが万更知らない事は無からうと思ひますがね。あの別品<sup>や</sup>さんがそれを遣<sup>や</sup>ると云ふのは評判ですよ。金<sup>かな</sup>窪<sup>くぼ</sup>さん、鷺<sup>わしづめ</sup>爪<sup>づめ</sup>さん、それから芥<sup>あくたはら</sup>原<sup>はら</sup>さん、皆<sup>みな</sup>その話をしてゐましたよ」

「或<sup>あるひ</sup>はそんな評判があるのかも知れませんが、私は一向聞きません。成程、ああ云ふ風ですから、それはさうかも知れません」



「外の人にはこんな話は出来ません。長年氣心も知り合つて家内うちの人も同じのお前さんの事だから、私もお話を為るのですけれども、困つた事が出来て了つたの——どうしたら可からうかと思つてね」

お峯がナイフを執れる手は漸く鈍くなりぬ。

「おや、これは大変な虫だ。こら、御覧なさい。この虫はどうでせう」

「非常ですな」

「虫が付いちや可けません！ 栗には限らず」

「さうです」

お峯は又一つ取りて剥き始めけるが、心進まざらんやうにナイ

フの運は愈はこびいよいよ等閑なほざりなりき。

「これは本当にお前さんだから私は信仰して話を為るのですけれど、此処ここきりの話ですからね」

「承知しました」

貫一は食はんとせし栗を持ち直して、屹きとお峯に打向ひたり。

聞く耳もあらずと知れど、秘密を語らんとする彼の声は自おのづから潜ひそりぬ。

「どうも私はこの間から異をかしいわいと思つてゐたのですが、どうも様子がね、内の夫ひとがあかの別品かりあひさんに係合を付けてゐやしないかと思ふの——どうもそれに違無いの！」

彼ははや栗など剥かずなりぬ。貫一は揺ゆすり笑わらひして、

「そんな馬鹿な事が、貴方……」  
あなた

「外の人ならいざ知らず、附いてゐる女房にようぼの私が……それはもう間違無しよ！」

貫一は熟じつと思ひ入りて、

「旦那はお幾歳いくつでしたな」

「五十一、もう爺ぢぢいですわね」

彼は又思案して、

「何ぞ証拠が有りますか」

「証拠と云つて、別に寄越した文を見た訳でもないのですけれど、そんな念を推さなくたつて、もう違無いの!!」

息巻くお峯の前に彼は面おもてを俯ふして言はず、静に思おもひ廻めぐらすな

るべし。お峯は心着きて栗を剥き始めつ。その一つを終ふるまで  
ことば言を継がざりしが、おもむろさて徐に、

「それはもう男の働とか云ふのだから、めかけのしみ妾も楽も可うございます。

これが芸者だとか、かこひもの囿者だとか云ふのなら、私は何も言ひは

しませんけれど第一は、あかがし赤檜さんといふ者があるのぢやありま

せんか、ねえ。その上にあの女だ！ただ凡の代物ぢやありはしま

せんわね。それだから私は実に心配で、ちんちん心火なら可いけれど、

なかなか心火どころの洒落しやれた沙汰さたぢやありはしません。あんな者

に係かかりあ合つてゐた日には、末始終どんな事になるか知れやしない、

それが私は苦勞でね。ひと内の夫もあのくらゐ利巧で居ながらどうし

たと云ふのでせう。今朝出掛けたのもどうも異をかしいの、確に氷川へ

行つたんぢやないらしい。だから御覧なさい。この頃は何となく治しやれてゐますわね、さうして今朝なんぞは羽織したてから帶まで仕立おろしづくめ渾成で、その奇麗事と謂いつたら、何が日ひにも氷川へ行くのにあんなに靚めかした事はありません。もうそれは氷川でない事は知れきつてゐるの」

「それが事実なら困りましたな」

「あれ、お前さんは未だそんな氣樂なことを言つてゐるよ。事実ならツて、事實に違無いと云ふのに」

貫一の氣乗せぬをお峯はいと齒痒はがゆくて心苛いらつなるべし。

「はあ、事実とすれば弥いよよい善くない。あの女に係合つちや全く妙でない。御心配でせう」

「私は<sup>りんき</sup>悟気で言ふ訳ぢやない、本当に旦那の身を思つて心配を為るのですよ、敵手<sup>あひて</sup>が悪いからねえ」

思ひ直せども貫一が腑<sup>ふ</sup>には落ちざるなりけり。

「さうして、それは何頃<sup>いつごろ</sup>からの事でございます」

「ついこの頃ですよ、何でも」

「然<sup>しか</sup>し、何<sup>な</sup>にしる御心配でせう」

「それに就いて是非お頼があるんですがね、折を見て私も<sup>とつく</sup>篤り言はうと思ふのです。就いてはこれといふ証拠が無くちや口が出来せんから、何とか其<sup>そこ</sup>処を突止めたいのだけれど、私の体<sup>からだ</sup>ぢや戸外<sup>おもて</sup>の様子が全然解<sup>さっぱり</sup>らないのですものね」

「<sup>ごもつとも</sup>御尤」

「で、お前さんと見立ててお頼があるんです。どうか内々様子を  
探つて見て下さいな。お前さんが寝てお在いででないと、実は今日早  
速お頼があるのだけれど、折が悪いのね」

行けよと命ぜられたるとなんぞ忖ばん、これ有る哉かな、紅茶と栗  
と、と貫一はその余あまりに安く売られたるが独り可笑ひとをかしかりき。

「いえ、一向差さしつかへ支さごさいません。どういふ事ですか」

「さう？ 余あんまりお気の毒ね」

彼の赤き顔の色は耀かがやくばかりに懽よろこびぬ。

「御遠慮無く有おつしや仰つて下さい」

「さう？ 本當に可いのですか」

お峯は彼が然ぜん諾だくの爽さはなるに遇あひて、紅茶と栗とのこれに酬むかゆ

るの薄儀に過ぎたるを、今更に可<sup>はづかし</sup>愧く覚ゆるなり。

「それではね、本当に御苦労で済まないけれど、氷川まで行つて見て来て下されば、それで可いのですよ。畔柳さんへ行つて、旦那が行つたか、行かないか、若<sup>も</sup>し行つたのなら、何<sup>いつごろ</sup>頃行つて何頃歸つたか、なあに、十に九まではきつと行きはしませんから。その様子だけ解れば、それで可いのです。それだけ知れば、それで探偵が一つ出来たのですから」

「では行つて参りませう」

彼は起ちて寝衣帯<sup>ねまきおび</sup>を解かんとすれば、

「お待ちなさいよ、今俵<sup>くるま</sup>を呼びに遣<sup>や</sup>るから」  
かく言捨ててお峯<sup>せはし</sup>は忙<sup>はしご</sup>く階子<sup>おりゆ</sup>を下行けり。



あと  
迹に貫一は繰返し繰返しこの事の真偽を案じ煩ひけるが、服を

改めて居間を出でんとしつつ、

「女房に振られて、学士に成なりそこな損つて、後が高利貸の手代で、

お上さんの秘密探偵か！」

と端無く思ひ浮べては漫に独り打笑れつ。  
はしな  
そぞろひとうちゑま

## 第四章

貫一は直に俵を飛して氷川なる畔くろやなぎ柳のもとに赴けり。その

居宅は田鶴見子爵の邸内に在りて、裏門より出しゆつにゆう入すべく、館やかた

の側面を負ひて、横長に三百坪ばかりを木もくげがき槿垣に取廻して、昔む

かしかたぎ  
形氣の内に幽ゆかしげに造つく成なりしたる二階建なり。構かまの可慎へつつましう目立  
たぬに引易ひきかへて、木口きぐちの撰せん択たくの至れるは、館の改築ありし折そ  
の旧材を拝領して用ゐたるなりとぞ。

貫一も彼の主あるじもこの家に公然でいりの出入はばかを憚はばる身なれば、玄関側わきな

る格子口こうしぐちより訪おとづるるを常とせり。彼は戸口に立寄りけるに、鰐

淵はきものの履物はきものは在らず。はや帰りしか、来こざりしか、或あるひは未だ見え

ざるにや、とにもかくにもお峯ことばが言にも符号すれども、直ただちにこれ

を以て疑いを容ゆるるべきにあらずなど思ひつつ音なへば、応ずる者無

くて、再びする時間慣れたる主あるじの妻の声して、連しきりをんなに婢の名を呼び

たりしに、答へざりければやがて自ら出いで来て、

「おや、さあ、お上んなさい。丁度好いところへお出いででした」

まなこ  
眼のみいと大きくて、

やまひがち  
病 勝に

やせおとろ  
瘦 衰へたる五体は

とうしみ  
燈 心の

如く、見るだに惨々いたいたしながら、

声の明あきらにして張ある、

何処いづこより

出づる音ねならんと、

一たびは目を驚かし、一たびは耳を驚かすて

ふ、貫一が一種の化物と謂いへるその人なり。

年は五十路いそぢばかりに

て頭かしらの霜しも繁しげく夫よりは姉なりとぞ。

貫一は屋敷風の恭うやうやき礼なを作して、

「はい、今日こんにちは急いぎまするので、

これで失礼を致しまする。主

人は今朝けさほど此方こちら様へ伺うかがひましたでございませうか」

「いいえ、お出いではありませんよ。実はね、

ちとお話が有るので、

お目に懸かりたかいと申してをりましたところ。

唯ただいま今御殿へ出てを

りますので、些ちよつと呼びに遣りませうから、

暫しばらくお上んなすつて」

言はるるままに客間に通りて、端はし近ちかう控ふれば、彼は井いの端はたなりし婢をんなを呼立てて、速そく々そく主あるじの方かたへ走らせつ。蓂たばこ盆ぼんを出いだし、番茶を出いだせしにのみにて、納戸なんどに入りける妻は再び出いで来きたらず。この間は貫一は如何いかにこの探偵一件を処置せんかと工夫してゐたり。やや有りて婢の息促いきせき還来かへりきにける氣勢けはひせしが、やがて妻の出でて例の声を振ひぬ。

「さあ唯今ちよつ些と手が放せませんので、御殿の方に居りますから、どうか彼方あちらへお出なすつて。直ちき其そ処ですよ。婢に案内を為せます。あの豊とよや！」

暇いとま乞こひして戸口を出づれば、勝手元の垣きの側はたに二十歳たちかと思おもゆる物馴ものなれ顔の婢がの待まてりしが、後うしろさまに帯おびかひつつくろひつつ道みち

知<sup>る</sup>込<sup>す</sup>。垣に沿ひて曲れば、玉川砂礫<sup>ざり</sup>を敷きたる徑<sup>こみち</sup>ありて、出<sup>で</sup>  
 外<sup>はづ</sup>るれば子爵家の構<sup>かまへうち</sup>内<sup>うち</sup>にて、三棟並べる塗籠<sup>ぬりごめ</sup>の背後<sup>うしろ</sup>に、桐<sup>きり</sup>  
 の木高く植<sup>うゑ</sup>列<sup>つら</sup>ねたる下道<sup>したみち</sup>の清く掃いたるを行窮<sup>ゆきつむ</sup>れば、板<sup>いた</sup>  
 塀<sup>いめぐ</sup>繞<sup>めぐ</sup>らせる下屋造<sup>げやつくり</sup>の煙突より忙<sup>せは</sup>しげなる煙立昇<sup>けふり</sup>りて、折しも  
 御前籠昇<sup>ごぜんかご</sup>入<sup>かきい</sup>るるは通用門なり。貫一もこれを入<sup>い</sup>りて、余所<sup>よそ</sup>なが  
 ら過<sup>すぎ</sup>来<sup>こ</sup>し厨<sup>くりや</sup>に、酒<sup>さけ</sup>の香<sup>か</sup>、物煮<sup>ものにほひ</sup>る匂<sup>しき</sup>頻<sup>しき</sup>りて、奥よりは絶えず人  
 の通<sup>ひ</sup>ふ乱<sup>しめ</sup>響<sup>めき</sup>したる、来客などやと覚えつつ、畔柳<sup>ひとま</sup>が詰所なるべ  
 き一間に導かれぬ。

(四) の二

くろやなぎもとえ 畔柳元衛の娘静緒は館の腰元に通勤せるなれば、今日は特

に女客の執持とりもちに召れて、高髻たかわけ、変裏かはりうらに粧を改め、お傍そばさ

不去らざに鹿略そりやくあらせじと冊かしづくなりけり。かくて邸内遊覧の所望

ありければ、先づ西洋館の三階に案内すとて、迂廻階子の半を昇まはりばしごの

行く後姿うしろすがたに、その客の如何いかに貴婦人なるかを窺うかがふべし。鬢かつら

ならではと見ゆるまでに結做ゆひなしたる円髻まるわけの漆の如きに、珊瑚さんごの

六分玉ろくぶだまの後挿うしろざしを点じたれば、更に白襟しろえりの冷豔れいえん物の類たぐふ

べき無く、貴族鼠きぞくねずみの高縮緬しぼたかちりめんの五紋いつつもんなる単衣ひとへを曳ひきて、

帯みは海松色地に装束しようぞく切摸きれうつしの色紙散しきしちらしの七糸しちんを高く負おひた

り。淡紅色紋紹ときいろもんろの長襦袢ながじゆばんの裾すそは上履うはぐつの歩あゆみに緩ゆるく勾にほひこぼ零ばして、

絹足袋きぬたびの雪なぐさに嫋々たわわなる山茶花さざんかの開ひらく心地す。

この麗き容をば見返り勝に静緒は壁側に寄りて二三段づつ先  
 立ちけるが、彼の俯きて昇れるに、櫛の蒔絵のいと能く見えけれ  
 ば、ふとそれに目を奪はれつつ一段踏み失ねて、凄き響の中にあ  
 なや僵れんと為たり。幸に怪我は無かりけれど、彼はなかなか己  
 の怪我などより貴客を駭かせし狼藉をば、得も忍ばれず満面に  
 慚ぢて、

「どうも飛んだ麁相を致しまして……」

「いいえ。貴方本当に何処もお傷めなさりはしませんか」

「いいえ。さぞ吃驚遊ばしたでございませう、御免あそばしまし  
 て」

今度は薄氷を踏む想して一段を昇る時、貴婦人はその帯の

解けたるを見て、

「些<sup>ちよつ</sup>とお待ちなさい」

進寄りて結ばんとするを、心着きし静緒は慌<sup>あわ</sup>て驚きて、

「あれ、恐<sup>おそれい</sup>入ります」

「可<sup>よ</sup>うございますよ。さあ、熟<sup>じつ</sup>として」

「あれ、それでは本当に恐入りますから」

争ひ得ずして竟<sup>つひ</sup>に貴婦人の手を勞<sup>わづらは</sup>せし彼の心は、溢<sup>あふ</sup>るばかり

感謝の情を起して、次いではこの優しさを桜の花の薫<sup>かをり</sup>あらんやう

にも覚ゆるなり。彼は女<sup>じよしよ</sup>四書の内訓<sup>ないくん</sup>に出でたりとて屢<sup>しばしば</sup>ば父に

聴さるる「五綵<sup>ごさいふく</sup>服を盛<sup>さかん</sup>にするも、以つて身の華<sup>か</sup>と為すに足らず、

貞順<sup>ていじゆんみち</sup>道に率<sup>した</sup>へば、乃<sup>すなは</sup>ち以つて婦徳を進むべし」の本文<sup>ほんもん</sup>に合<sup>かな</sup>



ひて、かくてこそ始めて色に矜ほこらず、その徳に爽そむかずとも謂ふべきなれ。愛めでたき人にも遇あへるかなと絶したたかに思入りぬ。

三階に着くより静緒は西北にしきたの窓に寄り行きて、効かひ々がひしく緑色とぼりの帷ガラスどを絞り硝子戸くりあを繰繰揚繰げて、

「どうぞ此方こちらへお出いであそばしまして。ここが一番見晴みはらしが宜よろいのでございます」

「まあ、好よい景色ですことね！ 富士が好く晴れて。おや、大相もくせい木犀にほが匂にほひますね、お邸やしきうち内うちに在ありますの？」

貴婦人はこの秋しゅう霽せいの朗ほがらに潤かひろくして心往こころくばかりなるに、夢など見るらん面おも色もちして佇たたずめり。窓を争さしひて射入さしる日影ななめは斜ななめにその姿を照して、襟留えりどめなる真珠もは焚もゆる如く輝きらきぬ。塵ちりをだに容ゆる

さず澄みに澄みたる添景うちの中に立てる彼の容かほ華はは清く鮮あざやかに見勝みまさりて、玉壺ぎよくこに白き花を挿さしたらん風情ふぜいあり。静緒は女ながらも見惚みとれて、不束ふつつかに眺ながめ入りつ。

その目の爽さはやかにして滴したたるばかり情の籠なさけれる、その眉まゆの思へるまゝに画えがき成せる如き、その口元の荅つぼみながら香かに立つと見ゆる、その鼻の似るものも無くいと好く整ひたる、肌理きめ濃こまやかに光をさへ帯びたる、色の透とほるばかりに白き、難を求めなば、髪は濃くて瑩つややか沢つややかに、頭かしらも重げに束つかねられたれど、髪際はへぎはの少く打乱すこしれたると、立かたちてる容かたちこそ風にも堪たふまじく纖弱なよやかなれど、面おもての瘦の過ぎたる為おのづかれはしに、自ら愁そこさびう底寂えりきと、頸の細きが折れやしぬべく可いたはし傷はしきとなり。

されどかく揃そろひて好き容量きりようは未いまだ見ずと、静緒は心に驚きつ  
 つ、蹈ふみはづ外そこつせし麁忽そこつははや忘れて、見据みうる流盼ながしめはその物を奪  
 はんと覘ねらふが如く、吾を失へる顔は間抜けて、常は顧かたはららるる貌かたちあ  
 りながら、草の花の匂無きやうに、この貴婦人の傍かたはらには見劣せら  
 るること夥おびただしかり。彼は己の間抜おのれけたりとも知らで、返す返すも人  
 の上を思ひて止やまざりき。実げにこの奥方なれば、金時計持てるも、  
 真珠の襟留せるも、指環を五つまで穿させるも、よし馬車に乗りて  
 行かんと、何をか愧はづべき。婦をんなの徳をさへ虧かかでこの嬋娟あでやかに  
 生れ得て、しかもこの富めるに遇あへる、天の恵めぐみと世の幸さちとを併あはせ  
 享うけて、残かたる方無き果報のかくも痛いみじき人もあるものか。美きは貧  
 くて、売らざるを得ず、富めるは醜みにくくて、買はざるを得ず、二者ふたつ

は愜<sup>かな</sup>はぬ世の習なるに、女ながらもかう生れたらんには、その幸  
は男にも過ぎぬべしなど、若き女は物<sup>もの</sup>羨<sup>うらやみ</sup>の念強けれど、妬<sup>ねた</sup>し  
とは及び難くて、静緒は心に畏<sup>おそ</sup>るるなるべし。

彼は貴婦人の貌<sup>かたち</sup>に耽<sup>ふけ</sup>りて、その欸待<sup>もてなし</sup>にとて携へ来つる双眼鏡

を参らするをば氣着かであたり。こは殿の仏蘭西<sup>フランス</sup>より持ち歸られ

し名器なるを、漸<sup>やうや</sup>く取<sup>とり</sup>出して薦<sup>すす</sup>めたり。形は一握<sup>いちあく</sup>の中に隠る

るばかりなれど、能<sup>よ</sup>く遠くを望み得る力はほとほと神助と疑ふべ

く、筒は乳白色の玉<sup>ぎよく</sup>もて造られ、僅<sup>わづか</sup>に黄金<sup>きん</sup>細工の金具を施したる

のみ。

やがて双眼鏡は貴婦人の手に在りて、措<sup>お</sup>くを忘らるるまでに愛<sup>め</sup>

でられけるが、目の及ばぬ遠き限は南に北に眺<sup>ながめ</sup>つゝ尽されて、彼

はこの鏡グラスの凡ただならず精巧なるに驚ける状さまなり。

「那あすこ処ほんに遠く些こようじの小楊枝ほどの棒が見えませう、あれが旗なので、浅黄あさぎに赤い柳条しまの模様まで昭然はつきり見えて、さうして旗竿はたさの頭さきに鳶とびが宿つてゐるが手に取るやう」

「おや、さやうでございますか。何でもこの位の眼鏡は西洋にも多度御座たんといけませんさうで、招魂社しょうこんしゃのお祭の時などは、狼煙のろしの人形よが能く見えるのでございます。私はこれを見まする度たびにさやう思ひますのでございますが、かう云う風に話が聞えましたらさぞ宜よろしうございませう。余あんまり近くに見えますので、音や声なんぞが致すかと想ふやうでございます」

「音が聞えたら、彼方あちこち此方の音が一所に成つて粉こちやこちや雑ざになつて

了<sup>しま</sup>ひませう」

かく言ひて齊<sup>ひとし</sup>く笑へり。静緒は客<sup>きやく</sup>遇<sup>あしらひ</sup>に慣れたれば、可羞<sup>はづか</sup>

しげに見えながらも話を求むるには拙<sup>つたな</sup>からざりき。

「私は始めてこれを見せて戴<sup>いただ</sup>きました折、殿様に全<sup>すつかり</sup>然<sup>だま</sup>騙されま

したのでございます。鼻の前<sup>さき</sup>に見えるだらうと仰せられますから、

さやうにございますと申上げますと、見えたら直<sup>すぐ</sup>にその眼鏡を耳

に推付<sup>おつ</sup>けて見ろ、早くさへ耳に推付<sup>おつ</sup>ければ、音でも声でも聞える

と仰せられますので……」

淀<sup>よどみな</sup>無<sup>かた</sup>く語<sup>り</sup>出づる静緒の顔を見入りつつ貴婦人は笑<sup>ゑ</sup>ましげに

聴<sup>き</sup>みたり。

「私は急いで推付けましたのでございます」

「まあ！」

「なに、ちつとも聞えは致しませんのでございますから、さやう申上げますと、推付けやうが悪いと仰せられまして、御自身に遊ばして御覧なさるのでございますよ。何遍致して見ましたか知れませんのでございますけれど、何も聞えは致しませんので。さやう致しますると、お前では可かんと仰せられまして、御供を致してをりました御家来から、御親類方も御在おいででゐらつしやいました  
が、皆みんな為なつて御覧遊ばしました」

貴婦人は怵こらへかねて失笑せり。

「あら、本当なのでございますよ。それで、未だ推付けやうが悪い、もつと早く早くと仰せられるものでございますから、御殿に

居ります速水と申す者は余り急ぎましたので、耳の此処を酷く打ちまして、血を出したのでございます」

彼の歎けるを見るより静緒は椅子を持来りて薦めし後、さて語り続けるやう。

「それで誰にも聞えないのでございます。さやう致しますると、殿様は御自身に遊ばして御覽で、なるほど聞えない。どうしたのか知らんなんて、それは、もう実にお真面目なお顔で、わざと御考へあそばして、仏蘭西に居た時には能く聞えたのだが、日本は氣候が違ふから、空氣の具合が眼鏡の度に合はない、それで聞えないのだらうと仰せられましたのを、皆本當に致して、一年ばかり釣られてをりましたのでございます」



その名器を手にし、その耳にせし人を前にせる貴婦人の興を覚  
ゆることは、殿の悪作劇あくさげきを親く睹みたらんにも劣らざりき。

「殿様はお面白い方おもしろでゐらつしやいますから、随分そんな事を遊  
ばしませうね」

「それでもこの二三年はどうも御気分がお勝すぐれ遊ばしませんので、  
お険むづかしい顔をしてゐらつしやるのでございます」

書齋に掛けたる半身の画像こそその病根なるべきを知れる貴婦  
人は、卒にはかに空目遣そらめづかひして物の思はしげに、例の底そこさびし寂うちしめう打湿  
りて見えぬ。

やや有りて彼は徐しづかに立ち上りけるが、今回は更たびに邇ちかきを眺めん  
とて双眼鏡を取り直してけり。彼方あなた此方こなたに差向くる筒あてどの当所も無

かりければ、たまたからゆづりは偶ま唐櫟葉のいと近きが鏡面レンズに入り来て一面はびこに蔓りぬ。粒々の実も珍く、何の木かとそのまま子細に視たりしに、葉蔭を透きて人顔の見ゆるを、心とも無く眺めけるに、おのづ自から得忘れぬ面影に肖にたるところあり。

貴婦人は差し向けたる手を緊しかと据ゑて、目を拭ぬぐふ間も忙せはしく、なほ心を留めて望みけるに、えだはさへぎ枝葉の遮りてとかくに思ふままならず。やうや漸くその顔の明あきらかに見ゆる隙ひまを求めけるが、別に相対さしむかへる人ありて、髪は黒けれども真額まつかうの瑩てらてら々禿はげたるは、先に挨拶あいさつに出でし家扶の畔柳にて、今一人なるその人こそ、眉濃まゆこく、外眦まなじりの昂あがれる三十前後の男なりけれ。得忘れぬ面影に肖にたりとは未おろかや、得忘れぬその面影なりと、ゆくりなくも認めたる貴婦人の鏡持グラスて

る手は競々わなわなと打顫うちふるひぬ。

行く水に数画かずかくよりも儂はかなき恋しさと可懐なつかしさとの朝夕に、なほ

夜昼わかちの別も無く、絶えぬ思はその外ならざりし四年よとせの久きを、熱

海の月おぼろは朧なりしかど、一期いちごの涙に宿りし面影は、なかなか消え

もやらで身に添ふ幻を形見にして、又何日いつかは必ずと念懸おもひかけつつ、

雨にも風にも君が無事を祈りて、心は毫つゆも昔に渝かはらねど、君が恨

を重ぬる宮はここに在り。思ひに思ふのみにて別れて後の事は知

らず、如何いかなる労わづらひをやさまでは積みけん、齡よはひよりは面おもやつれ瘁おもやつれして、

異あやしうも物々しき分別ぶんべつかほ顔に老いにけるよ。幸さいはひ薄うすく暮さるるか、

着たるものの見好みよげにもあらで、なほ書生なるべき姿なるは何に

か身を寄せらるるならんなど、思は置所無く湧出わきいでて、胸も裂け

ぬべく覚ゆる時、男の何語りてや打笑む顔の鮮あざやかに映れば、貴婦人の目よりは涙すずろに玉の糸の如く流れぬ。今は堪たへ難くて声も立ちぬべきに、始めて人目あるを曉さとりて失しなしたりと思ひたれど、所為せん無くハンカチーフを緊きびしく目に掩あてたり。静緒の驚駭おどろきは謂ふばかり無く、

「あれ、如何いかが遊ばしました」

「いえ、なに、私は脳わが不良わるいものですから、余あんまり物を噴みめてをると、どうかすると眩暈めまひがして涙の出ることがあるので」

「お腰をお掛け遊ばし、少しお頭ぐしをお摩さすり申上げませう」

「いえ、かうしてをると、今に直ぢきに癒なほります。憚はばかりですがお冷ひやを一つ下さいましな」

静緒は驀<sup>ましぐら</sup>地に行かんとす。

「あの、貴方<sup>あなた</sup>、誰にも有<sup>おつしや</sup>仰らずにね、心配することは無いので  
すから、本当に有<sup>うがひ</sup>仰らずに、唯私が嗽<sup>うがひ</sup>をすると云つて、持つて来  
て下さいましよ」

「はい、<sup>かしこま</sup>畏りました」

彼の階子<sup>はしご</sup>を下り行くと斉<sup>ひとし</sup>く貴婦人は再び鏡<sup>グラス</sup>を取りて、葉越<sup>はぐし</sup>の面  
影を望みしが、一目見るより漸<sup>さしぐ</sup>含む涙に曇<sup>くづ</sup>らされて、忽<sup>たちま</sup>ち文色<sup>あいろ</sup>も  
分<sup>しどな</sup>かずなりぬ。彼は静<sup>しどな</sup>無く椅子に崩折<sup>くづ</sup>れて、縦<sup>ほしいま</sup>まに泣乱したり。

(四) の三

この貴婦人こそ富山宮子にて、今日夫なる唯ただつぐ継ともと俱に田鶴見子爵に招れて、男同士のシャンペンなど酌くみ交かはす間まを、請うて庭内を遊覧せんとて出でしにぞありける。

子爵と富山との交際は近き頃よりにて、彼等の孰いづれも日本写真会々員たるに因よれり。おのづか自ら宮の除物のけものになりて二人の興いに入れるは、想ふにその物語なるべし。富山はこの殿と親友たらんことを切望して、ひたすらその意こころを獲えんと力つとめけるより、子爵も好みて交まじはるべき人とも思はざれど、勢うひ疎とんじ難がたくして、今は会員中善く識しれるものの最さいたるなり。爾来じらい富山は益ますす傾慕かんとして措おかず、家にツイシアンの模写と伝へて所蔵せる古画の鑒かん定ていを乞ふを名として、曩さきに芝西久保しばにしのくぼなる居宅に請じて疎おろならず饗もてす事ありければ、そ

の返<sup>かへし</sup>とて今日は夫婦を招<sup>しょうだい</sup>待<sup>たい</sup>せるなり。

会員等は富山が頻<sup>しきり</sup>に子爵に取入るを見て、皆その心を測りかねて、大方は彼<sup>かれため</sup>為<sup>ため</sup>にするとところあらなど言ひて陋<sup>いやし</sup>み合<sup>あ</sup>へりけれど、その実敢<sup>あへ</sup>て為<sup>ため</sup>にせんとにもあらざるべし。彼は常にその友を扱<sup>あつか</sup>べり。富山が交<sup>まじは</sup>るところは、その地位<sup>おひ</sup>に於<sup>お</sup>て、その名声<sup>めいせい</sup>に於<sup>お</sup>て、その家柄<sup>あやう</sup>に於<sup>お</sup>て、或<sup>あるひ</sup>はその資産<sup>しさん</sup>に於<sup>お</sup>て、孰<sup>いづれ</sup>のつか取るべき者ならざれば決して取らざりき。されば彼の友とするところは、それらの一つを以て優に彼以上に価する人士にあらざるは無し。實<sup>げ</sup>に彼は美<sup>うつく</sup>き友<sup>とも</sup>を有<sup>も</sup>てるなり。さりとして彼は未<sup>いま</sup>だ曾<sup>かつ</sup>てその友を利用せし事などあらざれば、こたびも強<sup>あながち</sup>に有福なる華族を利用せんとにはあらで、友として美<sup>うつく</sup>き人なれば、かく勉<sup>つと</sup>めて交<sup>まじはり</sup>は求むるならん。

故に彼はその名簿の中に一箇の憂を同うすべき友をだに見出さざ

るを知れり。抑も友とは樂を共にせんが為の友にして、若し憂を

同うせんとは、別に金錢ありて、人の助を用ゐず、又決して用

ゐるに足らずと信じたり。彼の美き友を択ぶは固よりこの理に外

ならず、寔に彼の択べる友は皆美けれども、尽くこれ酒肉の兄

弟たるのみ。知らず、彼はこれを以てその友に満足すとも、な

ほこれをその妻に於けるも然りと為すの勇あるか。彼が最愛の妻

は、その一人を守るべき夫の目を、めて、陋みても猶余ある高利

貸の手代に片思の涙を灑ぐにあらずや。

宮は傍に人無しと思へば、限知られぬ涙に搔昏れて、熱海の浜

に打俯したりし悲歎の足らざるをここに続がんとすなるべし。階



下より<sup>た</sup>仄<sup>ほのか</sup>に足音の響きければ、やうやう泣顔隠して、わざと頭<sup>かしら</sup>を支へつつ室<sup>しつ</sup>の中央<sup>まなか</sup>なる卓子<sup>テエブル</sup>の周圍<sup>めぐり</sup>を歩みゐたり。やがて静緒<sup>もちきた</sup>の持<sup>も</sup>来<sup>きた</sup>りし水に漱<sup>くちそ</sup>ぎ、懷<sup>かい</sup>中<sup>ちゆう</sup>葉<sup>くすり</sup>など服して後、心地復<sup>をさま</sup>りぬて又窓に倚<sup>よ</sup>りて外<sup>と</sup>方<sup>がた</sup>を眺めたりしが、

「ちよいと、那<sup>あ</sup>処<sup>そこ</sup>に、それ、男の方の話をしてお在<sup>い</sup>の所も御殿の続<sup>つづ</sup>きなのですか」

「何方<sup>どちら</sup>でございます。へ、へい、あれは父の詰所で、誰か客と見え<sup>み</sup>ます」

「お宅は？ 御近所なのですか」

「はい、お邸<sup>やしきうち</sup>内<sup>うち</sup>でございます。これから直<sup>ち</sup>に見え<sup>み</sup>ます、あの、倉の左手に高い樅<sup>もみ</sup>の木がございませう、あの陰に見え<sup>み</sup>ます二

階家が宅なのでございます」

「おや、さうで。それではこの下から直<sup>す</sup>とお宅の方へ行かれますのね」

「さやうでございます。お邸の裏門の側でございます」

「ああさうですか。では些<sup>ちつ</sup>とお庭の方からお邸内を見せて下さいましな」

「お邸内と申しても裏門の方は誠に穢<sup>きたな</sup>うございまして、御覧あそばすやうな所はございませんです」

宮はここを去らんとして又葉越<sup>はぎし</sup>の面影<sup>うかが</sup>を窺<sup>うかが</sup>へり。

「付かない事をお聞き申すやうですが、那<sup>あそこ</sup>処<sup>ところ</sup>にお父様とお話を  
してゐらつしやるのは何<sup>ど</sup>地<sup>ち</sup>の方ですか」

彼の親達は常に出入でいりせる鰐淵わにぶちの高利貸なるを明さざれば、静緒は教へられし通りを告つぐるなり。

「他あれは番町の方の鰐淵と申す、地面や家作などの売うり買かひを致してをります者の手代で、間はざまとか申しました」

「はあ、それでは違ふか知らん」

宮は聞えよがしに独ひとりご語ちて、その違たがへるを訝いぶるやうに擬もてしつ又其方そなたを打目成うちまもれり。

「番町はどの辺で？」

「五番町だとか申しました」

「お宅へは始終見えるのでございますか」

「はい、折々参りますのでございます」

この物語に因<sup>よ</sup>りて宮は彼の五番町なる鰐淵といふに身を寄する  
 を知り得たれば、この上は如何<sup>いか</sup>にとも逢ふべき便<sup>たより</sup>はあらんと、獲<sup>え</sup>  
 難<sup>がた</sup>き宝を獲たるにも勝<sup>まさ</sup>れる心地せるなり。されどもこの後相見ん  
 ことは何日<sup>いつ</sup>をも計られざるに、願うては神の力も及ぶまじき今日  
 の奇遇<sup>あだ</sup>を仇<sup>よそ</sup>に、余所ながら見て別れんは本意<sup>ほんい</sup>無からずや。若<sup>も</sup>し彼  
 の眼に睨<sup>まなこ</sup>まれんとも、互<sup>おもて</sup>の面を合せて、言<sup>ことば</sup>は交<sup>かは</sup>さずとも切<sup>せめ</sup>ては相  
 見て相知らばやと、四年<sup>よとせ</sup>を恋に饑<sup>う</sup>ゑたる彼の心は熬<sup>いら</sup>るる如く動き  
 ぬ。

さすがに彼の氣遣<sup>きづか</sup>へるは、事の危<sup>あやふ</sup>きに過ぎたるなり。附添<sup>まらうど</sup>さへ  
 ある寶の身にして、賤<sup>いやし</sup>きものに遇<sup>あつ</sup>はるる手代風情<sup>ふぜい</sup>と、しかもその  
 邸<sup>やしきうち</sup>内<sup>こみち</sup>の徑に相見て、万一不慮の事などあらば、我等夫婦<sup>そも</sup>は抑

や幾許いかばかり恥辱を受くるならん。人にも知られず、我身一つの恥辱  
 ならんには、この面おもてに唾つば吐はかるるも厭いとはじの覚悟なれど奇遇は棄  
 つるに惜き奇遇ながら、逢瀬あふせは今日の一日ひとひに限らぬものを、事の  
 破やぶれを目に見て愚に躁はやまるべきや。ゆめゆめ今日は逢ふべき機をりならず、  
 辛つらくとも思止まんと胸は据すゑつつも、彼は静緒を賺すかして、邸やしきう  
 内うちを一周せんと、西洋館うしろの後より通用門わきの側に出でて、外堀そとべいぎ  
 際はなる礫道ざりみちを行けば、静緒は斜ななめに見ゆる父が詰所のきばの軒端さを指  
 して、

「那処あそこが唯今の客の参つてをります所でございます」  
 實げに唐櫟葉からゆづりは高く立ちて、折しく一羽の小鳥きな来鳴けり。宮が  
 胸あやしは異うつと塞ふたがりぬ。

たかどの

楼を下りてここに來たるは僅少の間なれば、よもかの人はいまだ

歸らざるべし、若しここに出で來らば如何にすべきなど、さすが

に可おそろし恐きやうにも覺えて、歩あゆみは運べど地を踏める心地も無く、

静緒の語るも耳には入らで、さて行くほどに裏門かたはらの傍に到りぬ。

遊覽せんとありしには似で、貴婦人の目を挙げども何処いづこを眺む

るにもあらず、俯うつむき勝に物思はしき風情ふぜいなるを、静緒は怪くも氣き

づかはし

遣つかはしくて、

「まだ御気分がお悪うゐらつしやいますか」

「いいえ、もう大概良いのですけれど、未だまだ何だか胸が少し悪い

ので」

「それはお宜よろしうございません。ではお座敷へお歸りあそばしまし

た方がお宜うございませう」

「家の中よりは戸外の方が未だ可いので、もう些と歩いてゐる中  
には復りますよ。ああ、此方がお宅ですか」

「はい、誠に見苦い所でございます」

「まあ、奇麗な！ 木槿が盛ですこと。白ばかりも淡泊して好い

ぢやありませんか」

畔柳の住居を限として、それより前は道あれども、竇の足を容

るべくもあらず、納屋、物干場、井戸端などの透きて見ゆる疎

垣の此方に、櫓の実の夥く零れて、片側に下水を流せる細

路を鶏の遊び、犬の睡れるなど見るも悞きに、静緒は急ぎ返さ

んとせるなり。貴婦人もはや返さんとするとともに恐懼は忽ちそ

の心を襲へり。

この一筋道を行くなれば、もしかの人の出来るに会はば、遁<sup>のが</sup>

れんやうはあらで明々<sup>あからさ</sup>地に面を合すべし。さるは望まざるにもあ

らねど、静緒の見る目あるを如何<sup>いか</sup>にせん。仮令<sup>たとひ</sup>此方<sup>こなた</sup>にては知らぬ

顔してあるべきも、争<sup>い</sup>でかの人の見付けて驚かざらん。固<sup>もと</sup>より恨

を負へる我が身なれば、言<sup>こと</sup>など懸けらるべしとは想はねど、さり

とてなかなか道行く人のやうには見過されざるべし。ここに宮を

見たるその驚<sup>おどろ</sup>駭<sup>き</sup>は如何ならん。仇<sup>あだ</sup>に遇<sup>あ</sup>へるその憤<sup>いきどほ</sup>懣<sup>り</sup>は如何

ならん。必ずかの人の凄<sup>すさ</sup>う激<sup>まし</sup>せるを見ば、静緒は幾<sup>い</sup>許<sup>か</sup>ばかり我を怪

むらん。かく思ひ浮ぶると齊<sup>ひと</sup>く身内は熱して冷<sup>つめ</sup>き汗<sup>あせ</sup>を出<sup>い</sup>し、足は

地に吸るるかとはかり疎<sup>すく</sup>みて、宮はこれを想ふにだに堪<sup>た</sup>へざるな



りけり。わきみち脇道もあらば避けんと、静緒に問へば有らずと言ふ。

知りつつもこの死地に陥りたるを悔いて、遣やる方も無く惑へる宮が面おももち色の穩やすからぬを見み尤とがめて、静緒は窃ひそかに目を側そばめたり。彼はいとどその目を懼おそるるなるべし。今は心も漫そぞろに足を疾はやむれば、土蔵の角かども間近になりて其処そこをだに無事に過ぎなば、と切しきりに急がる折しも、人の影は突とつとしてその角より蹶あらはれつ。宮は眩めくるめきぬ。

これより歸りてともかくもお峯が前は好よきやうに言いひこしら譌へへ、さて篤と実否ただを糺ただせし上ひそかにて私せに為なんやうも有あらんなど貫一は思案しつゝ、黒の中折帽を稍目深ややまぶかに引側ひきそばめ、通学に馴ならされし疾はやあ足しを駆りて、塗籠ぬりこめの角より斜ななめに桐の並木の間あひを出でて、礫道ざりみちの端を歩み来きたれり。

あたり ゆきき 四辺に往来のあるにあらねば、二人の姿は忽ち彼の目に入りぬ。

一人は畔柳の娘なりとは疾く知られけれど、顔打背けたる貴婦

人の眩く着飾りたるは、子爵家の客なるべしと纔に察せらるるの

み。互に歩み寄りて一間ばかりに近けば、貫一は静緒に向ひて慇

懃に礼するを、宮は傍に能ふ限は身を窄めて密に流盼を凝し

たり。その面の色は惨として夕顔の花に宵月の映へる如く、その

冷なるべきもほとほと、相似たりと見えぬ。脚は打顫ひ打顫ひ、

胸は今にも裂けぬべく轟くを、覚られじとすれば猶打顫ひ猶轟き

て、貫一が面影の目に沁むばかり見ゆる外は、生きたりとも死に

たりとも自ら分かぬ心地してき。貫一は帽を打着て行過ぎんとす

る際に、ふと目鞆の走りて、館の賓なる貴婦人を一瞥せり。端無

くも相互たがひの面おもては合へり。宮なるよ！ 姦婦かんぶなるよ！ 銅臭にくぶの肉

蒲団とんなるよ！ とかつは驚おどき、かつは憤ひり、はたと睨ねめて動か

ざる眼まなこには見る見る涙なみだを湛たへて、唯一ひとつ攫つかにもせまほしく肉の

躍をどるを推おし忪こらへつつ、窃ひそかに齒咬はがみをなしたり。可懷なつかしさと可恐おそろしさ

と可耻はづかしさとを取集はめたる宮が胸の内は何に喩たとへんやうも無く、

あはれ、人目ひとめだにあらずば抱いだ付きても思ふままに苛さいまれんをと、

心こころのみは憧あこがれながら身を如何いかにとも為難しがたければ、せめてこの誠は通

ぜよかしと、見る目に思を籠こむるより外はあらず。

貫一はつと踏出あしして始はじの如く足疾あしに過行やけり。宮は附つき人に

面そむを背そむけて、唇くちびるを咬かみつつ歩あり。驚おどきに驚かされし静緒は何事

とも弁わきまへねど、推すいすべきほどには推して、事の秘密なるを思へば、

まらうど

賓の顔色のさしも常ならず変りて可惱しげなるを、問出でんも可

や否やを料りかねて、唯可慎う引添ひて行くのみなりしが、漸く

庭口に来にける時、

「大相お顔色がお悪くてゐらつしやいますが、お座敷へお出あそばして、お休み遊ばしましては如何でございます」

「そんなに顔色が悪うございますか」

「はい、真蒼でゐらつしやいます」

「ああさうですか、困りましたね。それでは彼方へ参つて、又皆

さんに御心配を懸けると可けませんから、お庭を一周しまし

て、その内には気分が復りますから、さうしてお座敷へ参りませ

う。然し今日は大変貴方のお世話になりました、お蔭様で私も：

…」

「あれ、飛んでもない事を有<sup>おつしや</sup>仰<sup>おつしや</sup>います」

貴婦人はその無名指<sup>むめいし</sup>より繡眼児<sup>めじろ</sup>の押競<sup>おしくら</sup>を片截<sup>かたきり</sup>にせる黄金<sup>きん</sup>の指環を抜取りて、懐紙<sup>ふところかみ</sup>に包みたるを、

「失礼ですが、これはお礼のお証<sup>しるし</sup>に」

静緒は驚き怖<sup>おそ</sup>れたるなり。

「はい……かう云ふ物を……」

「可<sup>よ</sup>うございますから取つて置いて下さい。その代り誰にもお見せなさらないやうに、阿父様<sup>おとつさま</sup>にも阿母様<sup>おつかさま</sup>にも誰にも有<sup>おつしや</sup>仰<sup>おつしや</sup>らないやうに、ねえ」

受けじと為るを手籠<sup>てごめ</sup>に取せて、互に何も知らぬ顔して、木の間

伝ひに泉水そたばしの麓もと、架橋かきう近く寄る時、書院の静なるに夫の高たか笑わらするが聞えぬ。

宮はこの散歩の間に勉つとめて氣を平たひらげ、色を斂をさめて、ともかくも人目のをがれんと計れるなり。されどもこは酒を窃ぬすみて酔はざらんと欲するに同おなじかるべし。

彼は先に遭あひし事の胸に鏤あられたらんやうに忘るる能あたはざるさへあるに、なかなか朽ちも果てざりし恋の更に萌出もえいでて、募もらんとする心の乱みだれは、堪たふるに難かたき痛苦くるしみを齎もたらして、一步は一步より、胸の逼せまること急に、身内の血は尽ことごとくその心頭しんとうに注うぎて余さず熬いらるるかと思ゆるばかりなるに、かかる折は打うち寛くつろぎて意こころ任まかせの我が家に独り居たらんぞ可よき。人に接して強しひて

語り、強ひて笑ひ、強ひて樂まんなど、あな可煩<sup>わづらは</sup>しと、例<sup>はげし</sup>の劇<sup>く</sup>く唇<sup>くちびる</sup>を咬<sup>く</sup>みて止まず。

築山<sup>つきやま</sup>陰<sup>かげ</sup>の野路<sup>のぢ</sup>を写<sup>こ</sup>せる徑<sup>みち</sup>を行けば、蹈<sup>ふ</sup>処<sup>みどころ</sup>無<sup>な</sup>く地<sup>ち</sup>を這<sup>は</sup>ふ葛<sup>くず</sup>の乱<sup>お</sup>れ生<sup>な</sup>ひて、草<sup>くさ</sup>藤<sup>ふぢ</sup>、金線<sup>みづひき</sup>草<sup>くさ</sup>、紫茉莉<sup>おしろい</sup>の色々<sup>いろ</sup>、茅<sup>か</sup>萱<sup>や</sup>、穂<sup>ほ</sup>薄<sup>すすき</sup>の露<sup>つ</sup>ゆしげ  
滋<sup>み</sup>く、泉水<sup>ちよろちよろ</sup>の末<sup>みづ</sup>を引きて、々<sup>ひく</sup>水<sup>みづ</sup>を卑<sup>ひく</sup>きに落<sup>お</sup>せる汀<sup>みぎは</sup>なる胡<sup>ご</sup>麻<sup>ま</sup>  
竹<sup>たけ</sup>の一<sup>ひとむら</sup>叢<sup>むら</sup>茂<sup>も</sup>れるに、隠<sup>みえ</sup>く<sup>かく</sup>れ、顯<sup>こ</sup>して苔<sup>こけ</sup>蒸<sup>む</sup>す石組<sup>いしぐみ</sup>の小高<sup>なやま</sup>きに四<sup>あづま</sup>阿<sup>あ</sup>の  
立<sup>た</sup>てるを、やうやう辿<sup>たど</sup>り着<sup>き</sup>きて貴婦人<sup>きふじん</sup>は艱<sup>なやま</sup>しげに憩<sup>やす</sup>へり。

彼は静緒<sup>はしらぎ</sup>の柱<sup>はしらぎ</sup>際<sup>は</sup>に立<sup>た</sup>ちて控<sup>ひか</sup>ふるを、

「貴方<sup>きなた</sup>もお草<sup>くた</sup>臥<sup>び</sup>でせう、あれへお掛<sup>か</sup>けなさいな。未<sup>な</sup>だ私<sup>わたし</sup>の顔<sup>かほ</sup>色<sup>いろ</sup>  
は悪<sup>わる</sup>うございますか」

その色<sup>いろ</sup>の前<sup>さき</sup>にも劣<sup>あ</sup>らず蒼白<sup>あをぞ</sup>めたるのみならで、下唇<sup>さきずつ</sup>の何<sup>なに</sup>に傷<sup>きず</sup>き

てや、<sup>すこし</sup>少く血の流れたるに、彼は<sup>いた</sup>太く驚きて、

「あれ、お唇から血が出てをります。如何<sup>いかが</sup>あそばしました」

ハンカチイフもて抑へければ、絹の白きに<sup>ざくろ</sup>柘榴の花<sup>はな</sup>弁<sup>びら</sup>の如く

附きたるに、貴婦人は<sup>ふところ</sup>懐<sup>かがみ</sup>鏡<sup>とり</sup>取出して、咬<sup>か</sup>むことの過ぎし

故<sup>ゆゑ</sup>ぞと知りぬ。実<sup>げ</sup>に顔の色は<sup>みづから</sup>躬も<sup>すこ</sup>凄しと見るまでに変わるを、庭

の内をば<sup>いくめぐり</sup>幾<sup>い</sup>周<sup>しゅう</sup>して我はこの色を隠さんと<sup>す</sup>為らんと、彼は心<sup>こころ</sup>

<sup>ひそか</sup>おのれ<sup>あざけ</sup>陰<sup>いん</sup>に己を嘲るなりき。

<sup>たちま</sup>忽ち女の声して<sup>あなた</sup>築山の彼方より、

「静緒さん、静緒さん！」

彼は走り行き、手を鳴して<sup>こた</sup>応へけるが、やがて<sup>こがくれ</sup>木隠<sup>かた</sup>に<sup>け</sup>語ふ氣

<sup>はひ</sup>勢して、<sup>ひとしまらうど</sup>返り来ると<sup>ひ</sup>齊く<sup>ひ</sup>賓の前に会釈して、



「先程からお座敷ではお待兼であつしやいますさうで御座いますから、直に彼方へお出あそばしますやうに」

「おや、さうでしたか。随分先から長い間道草を食べましたから」  
道を転じて静緒は雲帯橋の在る方へ導けり。橋に出づれば正面の書院を望むべく、はや所狭きまで盃盤を陳ねたるも見えて、夫は席に着きゐたり。

此方の姿を見るより子爵は縁先に出でて磨きつつ、  
「そこをお渡りになつて、此方に燈籠がございませう、あの傍へ些とお出で下さいませんか。一枚像して戴きたい」

写真機は既に好き処に据ゑられたるなり。子爵は庭に下立ちて、早くもカメラの覆を引被ぎ、かれこれ位置を取りなどして、

「さあ、光線の具合が妙だ！」

いでや、事の様を見んとて、慢々と出来るは富山唯繼な

り。片手には葉巻の半燻りしを撮み、片臂を五紋の単羽織の

袖の内に張りて、鼻の下の延びて見ゆるやうの笑を浮べつつ、

「ああ、おまへ其処に居らんければ可かんよ、何為歩いて来るの

かね」

子爵の慌てたる顔はこの時毛繻子の覆の内よりついと顕れたり。

「可けない！ 那処に居て下さらなければ可けませんな。何、御

免を蒙る？ —— 可けない！ お手間は取せませんから、どうぞ」

「いや、貴方は巧い言をお覚えですな。お手間は取せません余

程好い」

「この位に言つて願はんとね、近頃は写してもらふ人よりは写したがる者の方が多いですからね。さあ、奥さん、まあ、彼方へ。あちら静緒、お前奥さんを那処へお連れ申して」あそこ

唯継は目もて示して、

「お前、早く行かんけりや可かんよ、折角かうして御支度をなすつて下すつたのに、是非願ひな。ええ。あの燈籠の傍へ立つのだ。そばこの機械は非常に結構なのだから是非願ひな。何も差含むことは無いぢやないか、何差含む訳ぢやない？ さうとも差含むことは無いとも、始終内で遣つてをるのに、あれで可いのさ。かたち姿勢は私が見て遣るから早くおいで。燈籠へ倚掛つて頬杖でも拄いて、よっかか空を眺めてゐる状なども可いよ。ねえ、如何でせう」いかが

「結構。結構」と子爵は頷けり。

心は進まねど強ひて否むべくもあらねば、宮は行きて指定の位置に立てるを、唯継は望み見て、

「さう棒立ちになつてをつちや可かんぢやないか。何ぞ持つてをる方が可いか知らんて」

かく眩きつつ庭下駄を引掛け、急ぎ行きて、その想へるやうに燈籠に倚しめ、頬杖を拄しめ、空を眺めよと教へて、袂の皺めるを展べ、裾の縫を引直し、さて好しと、少く退きて姿勢を見るとともに、彼はその面の可惱げに太くも色を変へたるを発見して、直に寄り来つ、

「どうしたのだい、おまへ、その顔色は？ 何処か不快のか、え

え。非常な血色だよ。どうした」

「少しばかり頭痛がいたすので」

「頭痛？ それぢやかうして立つてをるのは苦いだらう」

「いいえ、それ程ではないので」

「苦いやうなら我慢をせんと、私が訳を言つてお謝絶ことわりをするから」

「いいえ、宜よろしうございますよ」

「可いかい、本当に可いかね。我慢をせんと可いから」

「宜うございますよ」

「さうか、然し非常に可厭いやな色だ」

彼は眷けんけん々として去る能あたはざるなり。待ちかねたる子爵は呼べ

り。

「如何いかがですか」

唯繼は慌あわただし忙いそく身を開きて、

「一つこれで御覧下さい」

鏡面レンズに照して二三の改むべきを注意せし後、子爵は種板たねいたを挿さ入しいるれば、唯繼は心得てその邇ちかきを避けたり。

空を眺むる宮が目の中うちには焚もゆらんやうに一種の表情力充満みちみちて、物憂さの支へかねたる姿もわざとならず。色ある衣きぬは唐松からまつ

の翠みどりの下蔭したかげに章あやを成して、秋高き清遠の空はその後に舗しき、四よ

脚つあしの雪見燈籠を小楯こだてに裾あたりの辺は寒咲躑躅かんざきつづじの茂しげみに隠れて、近き

に二羽の鷺がみぎはあさの汀あさに、るなど、寧ろ画むしにこそ写さまほしきを、子爵

は心に喜びつつ写真機の前に進み出で、今や鏡面レンズを開かんと構ふる時、貴婦人の頬杖は忽ち頰たちまくづれて、その身は燈籠の笠の上に折重なりて岸破がばと伏しぬ。

## 第五章

遊ゆさりようきつ佐良橘は郷里に在りし日も、出京の遊学中も、頗すこぶる謹直を以て聞えしに、却かへりて、日本周航会社に出勤せる今日こんにち、三百円の高利の為に艱なやまさると知れる彼の友は皆驚けるなり。或ものは結婚費なるべしと言ひ、或ものは外おもてを張らざるべからざる為の遣や繰りくりなるべしと言ひ、或ものは隠かくれあそび遊の風流債ならんと説くも

ありて、この不思議の負債とその美き妻とは、遊佐に過ぎたる物が二つに数へらるるなりき。されどもこは謂ふべからざる事情の下に連帶の印を仮せしが、形の如く腐れ込みて、義理の余毒の苦を受ると知りて、彼の不幸を悲むものは、交際官試補なる法学士うく蒲田鉄弥と、同会社の貨物課なる法学士かまだ風早庫之助とあるのみ。かざはやくらのすけ

凡そ高利の術たるや、およ渴者かつしやに水を売るなり。渴の甚く堪へ難き者に至りては、決してその肉を割きてこれを換ふるを辞せざるべし。この急に乗じてこれを売る、一杯の水もその値あたきよくしよう玉漿を盛るに異る無し。故に前後不覺に渴する者能くこれを買ふべし、その渴の癒るに及びては、玉漿なりとして喜び吃せしものは、素と下水の上澄うはずみに過ぎざるを悟りて、痛恨、痛悔すといへども、



彼は約の如く下水の倍量をばその鮮血に搾<sup>しぼ</sup>りその活肉に割きて以て返さざるべからず。噫<sup>ああ</sup>、世間の最も不敵なる者高利を貸して、これを借<sup>か</sup>るは更に最も不敵なる者と為さざらんや。ここを以<sup>も</sup>て、高利は借<sup>か</sup>るべき人これを借りて始めて用ゐるべし。さらずばこれを借<sup>か</sup>るの覚悟あるべきを要す。これ風早法学士の高利貸に對する意見の概要なり。遊佐は実にこの人にあらず、又この覚悟とても有らざるを、奇禍<sup>かか</sup>に罹<sup>かな</sup>れる哉と、彼は人の為ながら常にこの憂<sup>うれひ</sup>を解<sup>あた</sup>く能はざりき。

近<sup>き</sup>きに郷友<sup>きようゆう</sup>會<sup>かい</sup>の秋季大会あらんとて、今日委員會のありしかへる歸<sup>かへる</sup>さを彼等<sup>みたり</sup>は三人打連れて、遊佐が家へ向へるなり。

「別に御馳走<sup>ごちそう</sup>と云つては無いけれど、松茸<sup>まつたけ</sup>の極<sup>ごく</sup>新<sup>あたらし</sup>いのと、

製造元から貰<sup>もら</sup>つた黒<sup>くろ</sup>麦<sup>ビール</sup>酒<sup>酒</sup>が有<sup>あ</sup>るからね、鶏<sup>とり</sup>でも買<sup>か</sup>つて、寛<sup>ゆ</sup>り話<sup>つ</sup>さうぢやないか」

遊佐<sup>まさぐ</sup>が弄<sup>も</sup>れる半月形<sup>半月形</sup>の熏<sup>ハム</sup>豚<sup>豚</sup>の罐<sup>かんづめ</sup>詰<sup>詰</sup>も、この設<sup>まうけ</sup>にとて途<sup>みち</sup>に求めしなり。

蒲田<sup>ハタタ</sup>の声は朗々として聴<sup>き</sup>くに快<sup>は</sup>く、

蒲<sup>ハタタ</sup>「それは結構<sup>とまり</sup>だ。さう泊<sup>とまり</sup>が知<sup>し</sup>れて見<sup>み</sup>ると急<sup>い</sup>ぐにも当<sup>あ</sup>らんから、  
 どうだね、一ゲエム。君<sup>きみ</sup>はこの頃<sup>頃</sup>風<sup>ふう</sup>早<sup>はや</sup>と対<sup>たい</sup>に成<sup>な</sup>つたさうだが、長<sup>なが</sup>  
 足の進<sup>しん</sup>歩<sup>ぽ</sup>ぢやないか。然<sup>しか</sup>し、どうもその長<sup>なが</sup>足のちやうはてう（貂<sup>貂</sup>）  
 足<sup>あし</sup>らず、続<sup>つ</sup>ぐにフロツクを以<sup>も</sup>つて為<sup>な</sup>るのぢやないかい。この頃<sup>頃</sup>は  
 全<sup>すつかり</sup>然<sup>然</sup>フロツクが止<sup>とま</sup>つた？ ははははは、それはお目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>いやう  
 な御<sup>ご</sup>愁<sup>しう</sup>傷<sup>けう</sup>のやうな妙<sup>めう</sup>な次第<sup>しだい</sup>だね。然<sup>しか</sup>し、フロツクが止<sup>とま</sup>つたのは明<sup>あき</sup>ら

に一段の進境を示すものだ。まあ、それで大分話せるやうになりました」

風早は例の皺しわかれごゑ嗟たいしょう声こゑして大笑たいしょうを發せり。

風「更に一段の進境を示すには、  
たてキユウ 豎杖たてキユウをして二寸三分クロオ

スを裂やぶかなければ可けません」

蒲「三たび臂ひぢを折つて良医となるさ。あれから僕は  
たてキユウ 豎杖たてキユウの極

意を悟つたのだ」

風「へへへ、この頃の僕の後曳あとびきの手際てぎはも知らんで」

これを聞きて、こたびは遊佐が笑へり。

遊「君の後曳も口ほどではないよ。この間那処あそこの主翁おやぢがさう言つ

てゐた、風早さんが後曳を三度なさると新しいチヨオクが半分失なくる

……」

蒲「穿<sup>うがちえ</sup>得て妙だ」

風「チヨオクの多少は業<sup>わざ</sup>の巧拙には関せんよ。遊佐が無闇<sup>むやみ</sup>に杖<sup>キユウ</sup>を取<sup>とり</sup>易<sup>か</sup>へるのだつて、決して見<sup>み</sup>とも好くはない」

蒲田は手もて遽<sup>にはか</sup>に制<sup>ひと</sup>しつ。

「もう、それで可い。他<sup>ひと</sup>の非<sup>ひ</sup>を挙げるやうな者に業<sup>わざ</sup>の出来た例<sup>ためし</sup>が無い。悲<sup>かな</sup>い哉<sup>かな</sup>君達の球も蒲田に八十で底止<sup>とまり</sup>だね」

風「八十の事があるものか」

蒲「それでは幾箇<sup>いくつ</sup>で来るのだ」

「八十五よ」

「五とは情無い！ 心の程も知られける哉<sup>かな</sup>だ」

「何でも可いから一ゲエム行かう」

「行かうとは何だ！ 願ひますと言ふものだ」

語も訖らざるに彼は傍腹に不意の肱突を吃ひぬ。  
ことばをは ひばら ひぢつき くら

「あ、痛！ さう強く撞くから毎々球が滾げ出すのだ。風早の球

は暴いから癰癰玉と謂ふのだし、遊佐のは馬鹿に柔いから蒟

蒟玉。それで、二人の撞くところは電公と蚊帳が捫扱

してゐるやうなものだ」

風「ええ、自分がどれほど撞けるのだ」

蒲「さう、多度も行かんが、天狗の風早に二十遣るのさ」

二人は劣らじと諍ひし末、直に一番の勝負をいざいざと手薬煉

引きかくるを、遊佐は引分けて、

「それは飲んでからに為やう。夜が長いから後で寛<sup>ゆつく</sup>り出来るさ。

歸つて風呂にでも入<sup>い</sup>つて、それから徐々<sup>そろそろ</sup>始めやうよ」

往來<sup>ゆききしげ</sup>繁き町を湯屋の角より入<sup>い</sup>れば、道幅その二分の一ばかり

なる横町の物売る店も雑<sup>まじ</sup>りながら閑静に、家並<sup>やなみ</sup>整へる中程に店<sup>みせぐ</sup>

蔵<sup>くら</sup>の質店<sup>しちや</sup>と軒ランプの並びて、格子木戸<sup>こうしきど</sup>の内を庭がかりにした

る門<sup>かど</sup>に櫟<sup>ゆづり</sup>葉<sup>は</sup>の立てるぞ遊佐<sup>すまひ</sup>が居住<sup>すまひ</sup>なる。

彼は二人を導きて内格子を開きける時、彼の美き妻<sup>い</sup>は出<sup>きた</sup>で来り

て、伴へる客あるを見て稍<sup>やや</sup>打惑<sup>うたど</sup>へる気色<sup>けしき</sup>なりしが、遽<sup>にはか</sup>に笑<sup>ゑみ</sup>を含み

て常の如く迎へたり。

「さあ、どうぞお二階へ」

「座敷は？」と夫<sup>とが</sup>に尤められて、彼はいよいよ困<sup>こう</sup>じたるなり。

「唯今些と塞つてをりますから」  
ただいまちよいふさが

「ぢや、君、二階へどうぞ」

勝手を知る客なれば  
づかづか 々と長四畳を通りて行く跡に、妻は

小声になりて、

「鰐淵わにぶちから参つてをりますよ」

「来たか！」

「是非お目に懸りたいと言つて、何と言つても帰りませんから、  
 座敷へ上げて置きました、些ちよいとお会ひなすつて、早く還かへしてお了しま  
 ひなさいましな」

「松茸まつだけはどうした」

妻はこの暢気のんきなる問に驚かされぬ。

「貴方、まあ松茸なんぞよりは早く……」

「待てよ。それからこの間の黒麦酒な……」

「麦酒も松茸もございますから早くあれを還してお了ひなさいましよ。私は那奴が居ると思ふと不快な心持で」

遊佐も差当りて当惑の眉を顰めつ。二階にては例の玉戲の  
争なるべし、さも氣樂に高笑するを妻はいと心憎く。

少間ありて遊佐は二階に昇り来れり。

蒲「浴に一つ行かうよ。手拭を貸してくれ給へな」

遊「ま、待ち給へ、今一処に行くから。時に弱つて了つた」

実と言ふが如く彼は心穩かならず見ゆるなり。

風「まあ、坐りたまへ。どうしたのかい」



遊「坐つてもをられんのだ、下に高利貸アイスが来てをるのだよ」

蒲「那えてもの物が来たのか」

遊「先から座敷で帰来かへりを待つてをつたのだ。困つたね！」

彼は立ちながら頭かしらを抑へて緩ゆるく柱に倚よれり。

蒲「何とか言つて逐返おつかへして了ひ給へ」

遊「なかなか逐返ひねくねらんのだよ。陰忍あいつつかました皮肉な奴でね、那奴に捉

つたら耐たまらん」

蒲「二三円も叩たたき付けて遣るさ」

遊「もうそれも度々たびたびなのでね、他むかふは書替さを為せやうと掛つてゐ

るのだから、延期料を握つたのぢや今日は帰らん」

風早は聴ゐるだに心苦くて、

「蒲田、君一つ談判してやり給へ、ええ、何とか君の弁を揮<sup>ふる</sup>つて」

「これは外の談判と違つて唯金<sup>かね</sup>錢<sup>ね</sup>づくなのだから、素<sup>す</sup>手で飛込むのぢや弁<sup>ふ</sup>の奮<sup>ふる</sup>ひやうが無いよ。それで忽<sup>まづ</sup>諸<sup>まづ</sup>すると飛んで火に入る

夏の虫となるのだから、まあ君が行つて何とか話をして見たまへ。

僕は様子を立聞して、臨機応變の助<sup>すけ</sup>太<sup>だ</sup>刀<sup>ち</sup>を為<sup>な</sup>るから」

いと難<sup>むづ</sup>しと思<sup>か</sup>ひながらも、かくては果てじと、遊佐は氣を取直

して下り行くなりけり。

風「氣の毒な、萎<sup>し</sup>れてゐる。あれの事だから心配してゐるのだ。

君、何とかして拯<sup>すく</sup>つて遣り給へな」

蒲「一つ行つて様子を見て来やう。なあに、そんなに心配するほどの事は無いのだよ。遊佐は氣が小さいから可<sup>い</sup>かない。ああ云ふ風

だから益ますす脚あし下もとを見られて好い事を為れるのだ。高たかが金かね錢ねの貸か借かりだ、命に別条は有りはしないさ」

「命に別条は無くても、名譽に別条が有るから、紳士たるものはおそ懼おそれるだらうぢやないか」

「ところが懼れない！ 紳士たるものが高利を貸したら名譽に關アイスらうけれど、高い利を払つて借りるのだから、安利あんりや無利息なんぞを借りるから見れば、はるか匱はるかに以つて榮とするに足りりさ。紳士たりといへども金かね錢ねに窮こまらんと云ふ限は無い、窮つたから借りるのだ。借りて返さんと言ひは為すまいし、名譽に於て傷きずつつところは少しも無い」

「恐入りました、高利アイスを借りやうと云ふ紳士の心掛は又別の物で

すな」

「で、仮に一步を譲るさ、譲つて、高利アイスを借りるなどは、紳士たるもののいと慚はづべき行おこなひと為るよ。さほど慚はづべきならば始から借りんが可いちやないか。既に借りた以上は仕方が無い、未だいま借りざる先の慚はづべき心を以つてこれに対せんとするも能あたはざるなりだらう。宋そうの時代であつたかね、何か乱おこが興つた。すると上奏に及んだものがある、これは師いくさを動かさるまでもない、一いちに人の將かじようを河上つかはへ遣して、賊おのづの方かたに向つて孝経こうきようを読せられた事ならば、賊は自から消滅せん、は好いちやないか。これを笑ふけれど、遊佐の如きは真面目まじめで孝経を読んでゐるのだよ、既に借りてき、天引てんびきしわり四割と吃くつて一月隔おきに血を吮すはれる。そんな無法

な目に遭<sup>あ</sup>ひながら、未<sup>いま</sup>だ借りざる先の紳士たる徳義や、良心を持つてゐて耐るものか。孝経が解<sup>アイス</sup>るくらゐなら高利は貸<sup>貸</sup>しません、彼等は錢勘定の出来る毛<sup>けだもの</sup>族<sup>もの</sup>さ」

得意の快弁流るる如く、彼は息をも繼<sup>つが</sup>せず説<sup>とききた</sup>来りぬ。

「濡<sup>ぬ</sup>れぬ内こそ露をもだ。遊佐も借りんのなら可いさ、既に借りて、無法な目に遭<sup>あ</sup>ひながら、なほ未<sup>いま</sup>だ借りざる先の良心を持つてゐるのは大きな悞<sup>あやまり</sup>だ。それは勿<sup>もちろん</sup>論借りた後といへども良心を持たなければならんけれど、借りざる先の良心と、借りたる後の良心とは、一<sup>いちぶつ</sup>物にして一物ならずだよ。武士の魂<sup>たましひ</sup>と商人<sup>あきんど</sup>根性とは元<sup>これ</sup>は一物なのだ。それが境遇に応じて魂ともなれば根性ともなるのさ。で、商人根性といへども決して不義不徳を容<sup>ゆる</sup>さんことは、

武士の魂と敢て異<sup>あへ</sup>なるところは無い。武士にあつては武士魂なるものが、商人<sup>あきんど</sup>にあつては商人根性なのだもの。そこで、紳士も高<sup>ア</sup>利などを借りん内は武士の魂よ、既<sup>アイス</sup>に対高利となつたら、商人根性にならんければ身が立たない。究竟<sup>つまり</sup>は敵に應ずる手段なのだ」

「それは固より御同感さ。けれども、紳士が高利<sup>アイス</sup>を借りて、榮と為るに足りると謂<sup>い</sup>ふに至つては……」

蒲田は恐縮せる状<sup>さま</sup>を作<sup>な</sup>して、

「それは少し白馬は馬に非<sup>あら</sup>ずだつたよ」

「時に、もう下へ行つて見て遣り給へ」

「どれ、一ヒ深く探る蛟<sup>こう</sup>鰐<sup>がく</sup>の淵<sup>えん</sup>と出掛けやうか」

「空<sup>くう</sup>拳<sup>けん</sup>を奈<sup>いか</sup>んだらう」

一笑して蒲田は二階を下りけり。風早は独りひと臥ねつ起きつ安否のきづかは氣遣れて苦き無聊ぶりように堪へざる折から、主あるじの妻は漸やうやく茶を持ち来りぬ。

「どうもはなは甚だ失礼を致しました」

「蒲田は座敷へ参りましたか」

彼はその美き顔を少くあか赧あかめて、

「はい、あの居間へお出いでで、紙門ふすまごし越に様子を聴いてゐらつしやいます。どうもこんなところを皆様のお目に掛けまして、実にお可恥はづかしくてなりません」

「なあに、他人ぢやなし、皆様子を知つてゐる者ばかりですから構ふ事はありません」

「わたくしはもう彼奴あいつが参りますと、惣毛そうけだ豎たてつて頭痛が致すのでござい

ます。あんな強慾な事を致すものは全く人相が別でございます。

それは可厭いやに陰気なねちねち々した、底意地の悪さうな、本当に探偵

小説にでも在りさうな奴でございますよ」

急いそぎあし足はしごに階子を鳴して昇り来りし蒲田は、

「おいおい風早、不思議、不思議」

と上あがり端はなに坐れる妻の背後うしろを過るとすぐ絶したたかその足を踏ふんづ付けた

り。

「これは失礼を。お痛うございましたらう。どうも失礼を」

骨身に沁しみて痛かりけるを妻は赤くなりて推おしこ忭こらへつつ、さり

気無く挨あいさつ拶さつせるを、風早は見かねたりけん、



「不相変<sup>あひかはらず</sup>麁相<sup>そそつ</sup>かしいね、蒲田は」

「どうぞ御免を。つい慌<sup>あわ</sup>てたものだから……」

「何をそんなに慌てるのさ」

「落<sup>おちつか</sup>付れる訳のものではないよ。下に來てゐる高利貸<sup>アイス</sup>と云ふの

は、誰<sup>たれ</sup>だと思ふ」

「君のと同じ奴かい」

「人様の居る前で君のとは怪しからんぢやないか」

「これは失礼」

「僕は妻君の足を踏んだのだが、君は僕の面<sup>つら</sup>を踏んだ」

「でも仕<sup>しあはせ</sup>合と皮の厚いところで」

「怪<sup>け</sup>しからん！」

妻の足の痛は忽ち<sup>いたみたちま</sup>下腹に<sup>うつ</sup>転りて、彼は得堪へず笑ふなりけり。

風「常談どころぢやない、下では苦しんでゐる人があるのだ」

蒲「その苦しめてゐる奴だ、不思議ぢやないか、間だよ、あの間貫一だよ」

敵寄すると聞きけんやうに風早は身構へて、

「間貫一、学校に居た」

「さう！ 驚いたらう」

彼は長き鼻息を出して、<sup>むなしまなこ</sup>空く眼を<sup>みは</sup>瞪りしが、

「本当かい」

「まあ、見て来たまへ」

別して呆れたるは<sup>あき</sup>主の妻なり。<sup>あるじ</sup>彼は鈍まし<sup>おぞ</sup>からず胸の跳るを<sup>をど</sup>覚

えぬ。同じ思は二人が面にもおもてあらはに顔を見るべし。

「下に参つてゐるのは御朋友なのでございますか」

蒲田は忙しげに頷きて、

「さうです。我々と高等中学の同級に居つた男なのですよ」

「まあ！」

「夙て学校を罷めてから高利貸を遣つてゐると云ふ話は聞いてゐ

ましたけれど、極温和い男で、高利貸などの出来る氣ぢやない

のですから、そんな事は虚だらうと誰も想つてをつたのです。と

ころが、下に來てゐるのがその間貫一ですから驚くぢやありません

んか」

「まあ！ 高等中学にも居た人が何だつて高利貸などに成つたの

でございませう」

「さあ、そこで誰も虚<sup>うそ</sup>と想ふのです」

「本<sup>ほん</sup>にさうでございますね」

すこし

少き前に起ちて行きし風早は疑<sup>うたがひ</sup>を霽<sup>はら</sup>して歸<sup>きた</sup>り来<sup>きた</sup>れり。

「どうだ、どうだ」

「驚いたね、確に間貫一！」

「アルフレッド大王の面影<sup>おもかげ</sup>があるだらう」

「エッセクスを逐<sup>おっばら</sup>払はれた時の面影だ。然し彼奴<sup>あいつ</sup>が高利貸を遣

らうとは想はなかつたが、どうしたのだらう」

「さあ、あれで因<sup>いんごう</sup>業な事が出来るだらうか」

「因業どころではございせんよ」

あるし  
主の妻はその美き顔を皺しわめたるなり。

蒲「随分酷ひどうございますか」

妻「酷ひどうございますわ」

こたびは泣顔せるなり。風早は決するところ有るが如くに余せし茶をば遽にはかに取りて飲干し、

「然し間であるのが幸だ、押掛けて行つて、昔の顔で一つ談判せ

うぢやないか。我々が口を利くのだ、奴もさう阿漕あこぎなことは言ひもすまい。次手ついでに何とか話を着けて、元金もとぎんだけか何かに負けさ

して遣らうよ。那奴あいつなら恐れることは無い」

彼の起ちて帯締直すを蒲田は見て、

「まるで喧嘩けんかに行くやうだ」

「そんな事を言はずに自分も些ちつと氣凛とするが可い、帶の下へ時計の垂ぶらさが下つてゐるなどは威嚴を損じるぢやないか」

「うむ、成程」と蒲田も立上りて帶を解けば、主あるじの妻は傍かたはらより、

「お羽織をお取りなさいましな」

「これは憚はばかりさま様ちよつです。些と身支度こころぞへに婦人の心にんず添そへを受けると

ころは堀部安兵衛といふ役だ。然し芝居でも、人数が多くて、支度をする方は大概取つて投げられるやうだから、お互に氣を着ける事だよ」

「馬鹿な！はぐさま 間如まがごときに」

「急に強くなつたから可笑をかしい。さあ。用意は好いよ」

「此方こつちも可い」

二人は膝を正して屹きと差向へり。

妻「お茶を一つ差上げませう」

蒲「どうしても敵かたきうち討かどでの門出だ。互に交す茶ちやさ盃かづきか」

## 第六章

座敷には窘くるしめる遊佐と沈おちつ着きたる貫一と相對して、  
莧たばこ盆ぼんの

火の消えんとすれど呼ばず、彼の傍かたはらに茶托ちやたくの上に伏せたる茶ちやわ

碗んは、嘗かつて肺病患者と知らで出せしを恐れて除物のけものにしたりし

をば、妻の取出してわざと用ゐたるなり。

遊佐は憤いきどほりを忍こべる声音こわねにて、

「それは出来んよ。勿論<sup>もちろん</sup>朋友<sup>ほうゆう</sup>は幾多<sup>いくた</sup>も有るけれど、書替の連帶を頼むやうな者は無いのだから。考へて見給へ、何<sup>なん</sup>ぼ朋友の中だと云つても外の事と違つて、借金の連帶は頼めないよ。さう無理を言つて困らせんでも可いぢやないか」

貫一の声は重きを曳<sup>ひ</sup>くが如く底強く沈みたり。

「敢<sup>あへ</sup>て困らせるの、何のと云ふ訳ではありません。利は下さらず、書替は出来んと、それでは私<sup>わたくし</sup>の方が立ちません。何方<sup>どちら</sup>とも今日は是非願はんければならのでございます。連帶と云つたところで、固<sup>もと</sup>より貴方<sup>あなた</sup>がお引受けなさる精神なれば、外の迷惑にはならんですから、些<sup>ほん</sup>の名義を借りるだけの話、それくらゐの事は朋友の誼<sup>よし</sup>として、何方<sup>どなた</sup>でも承諾なさりさうなものです。究<sup>つ</sup>竟<sup>まり</sup>名義だ



けあれば宜いので、私の方では十分貴方を信用してをるのですから、決してその連帶者に掛らうなどとは思はんです。ここで何とか一つ廉が付きませんと、私も主人に対して言訳がありません。利を受取る訳に行かなかつたから、書替をして来たと言へば、それで一先句切が付くのでありますから、どうぞ一つさう願ひます」

遊佐は答ふところを知らざるなり。

「何方でも可うございます、御親友の内で一名」

「可かんよ、それは到底可かんのだよ」

「到底可かんでは私の方が済みません。さう致すと、自然御名譽にかかはるやうな手段も取らんければなりません」

「どうせうと言ふのかね」

「無論差押です」

遊佐は強ひて微笑を含みけれど、胸には犇と応へて、はや八分の怯氣付きたるなり。彼は悶えて振断るばかりにその髭を拈り拈りて止まず。

「三百円やそこらの端金で貴方の御名誉を傷けて、後來御出世の妨碍にもなるやうな事を為るのは、私の方でも決して可好くはないのです。けれども、此方の請求を容れて下さらなければ已むを得るので、実は事は穩便の方が双方の利益なのですから、更に御一考を願ひます」

「それは、まあ、品に由つたら書替も為んではないけれど、君の

要求は、元金もとぎんの上に借用当時から今日こんにちまでの制規の利子が一ケ年分と、今度払ふべき九十円の一月分を加へて三百九十円かね、それに対する三月分の天引が百十七円強なにがし、それと合がっして五百円の証書面に書替へると云ふのだらう。又それが連帶債務と言ふだらうけれど、一文だつて自分が費つかつたのでもないのに、この間九十円といふものを取られた上に、又改めて五百円の証書を書かされる！ 余り馬鹿々々しくて話にならん。此方こつちの身にも成つて少しは斟酌しんしやくするが可いぢやないか。一文も費ひもせずに五百円の証書が書けると想ふかい」

空そらうそぶ 嘯ささやきて貫一は笑へり。

「今更そんな事を！」

遊佐は陰に切齒をなしてその横顔を睨付けた。ひそか ながみ

彼も <sup>の</sup>れ難き義理に迫りて連帯の印捺きしより、不測の禍は起 <sup>わ</sup>ぎはひ

りてかかる憂き目を見るよと、太く己に懲りてければ、この際人 <sup>いた</sup>おのれ

に連帯を頼みて、同様の迷惑を懸くることもやと、断じて貫一の <sup>か</sup>

請求を容れざりき。さりとして今一つの請求なる利子を即座に払ふ <sup>い</sup>

べき道もあらざれば、彼の進退はここに谷るとともに貫一もこの <sup>き</sup>はま

場は一寸も去らじと構へたれば、遊佐は羅に係れる獲物の如く一 <sup>わ</sup>な

分時毎に窮する外は無く、今は唯身に受くべき謂無き責苦を <sup>い</sup>はれな

受けて、かくまでに悩まざる不幸を恨み、<sup>ひる</sup>がへ 翻りて一点の人情無

き賤奴の虐待を憤る胸の内は、前後も覚えず暴れ乱れてほとほと <sup>あ</sup>

引裂けんとするなり。

「第一今日は未だ催促に来る約束ぢやないのではないか」

「先月の二十日はつかにお払ひ下さるべきのを、未だいまにお渡わたしが無いので  
すから、何日いつでも御催促は出来るのです」

遊佐は拳こぶしを握りて顫ふるひぬ。

「さう云ふ怪しからん事を！ 何の為に延期料を取つた」

「別に延期料と云つては受取りません。期限の日に参加したにお  
払が無い、そこで空むなしく帰るその日当及び俸くるまだい代として下すつた  
から戴きました。ですから、若もしあれに延期料と云ふ名を附けた  
らば、その日の取立を延期する料とも謂ふべきでせう」

「貴、貴様は！ 最初十円だけ渡さうと言つたら、十円では受取  
らん、利子の内うちきん金でなしに三日間の延期料としてなら受取る、

と言つて持つて行つたぢやないか。それからついこの間又十円……」

「それは確に受取りました。が、今申す通り、無駄<sup>むだ</sup>足を踏<sup>あし</sup>みました日当でありますから、その日が経過すれば、翌日<sup>よるし</sup>から催促に参つても宜<sup>よろし</sup>い訳なのです。まあ、過去つた事は措<sup>お</sup>きまして……」

「措けんよ。過去りは為<sup>こん</sup>んのだ」

「今日<sup>こんにち</sup>はその事で上つたのではないのですから、今日<sup>こんにち</sup>の始末をお付け下さいまし。ではどうあつても書替は出来んと仰<sup>おつしや</sup>有るのですな」

「出来ん！」

「で、金<sup>きん</sup>も下さらない？」

「無いから遣れん！」

貫一は目を側めて遊佐が面を熟と候へり。その冷に鋭き眼の光は異く彼を襲ひて、坐に熱する怒氣を忘れしめぬ。遊佐は忽ち吾に復れるやうに覚えて、身の危きに処るを省みたり。一時を快くする暴言も竟に曳れ者の小唄に過ぎざるを曉りて、手持無沙汰に鳴を鎮めつ。

「では、何ごろ御都合が出来るのですか」  
機を制して彼も劣らず和ぎぬ。

「さあ、十六日まで待つてくれたまへ」

「睨と相違ございませんか」

「十六日なら相違ない」

「それでは十六日まで待ちますから……」

「延期料かい」

「まあ、お聞きなさいまし、約束手形を一枚お書き下さい。それなら宜うございませう」

「宜い事も無い……」

「不承を有<sup>おつしや</sup>仰るところは少しも有りはしません、その代り何<sup>なんぶ</sup>分<sup>ぶん</sup>か今<sup>こん</sup>日<sup>にち</sup>お遣<sup>つか</sup>し下さい」

かく言ひつつ手<sup>て</sup>鞆<sup>かばん</sup>を開きて、約束手形の用紙を取<sup>とり</sup>出<sup>いだ</sup>せり。

「銭は有りはせんよ」

「僅<sup>わづか</sup>少<sup>よろし</sup>で宜いので、手数料として」

「又手数料か！ ぢや一円も出さう」



「日当、俵代なども入つてゐるのですから五円ばかり」

「五円なんと云ふ金かね円は有りはせん」

「それぢや、どうも」

彼は遽にはかに躊躇ちゆうちよして、手形用紙を惜めるやうに拈ひねるなりけり。

「ええ、では三円ばかり出さう」

折から紙門ふすまを開きけるを弗ふと貫一みむかのふる目前めさきに、二人の紳士

は徐々しづしづと入来いりきたりぬ。案内も無くかかる内証の席に立入りて、彼

等の各心得顔おのおのなるは、必ず子細あるべしと思ひつつ、彼は少く座すこし

を動ゆるぎて容かたちを改めたり。紳士は上かみしも下に分れて二人が間に坐りけ

れば、貫一は敬ひて礼なを作せり。

蒲「どうも曩さきから見たやうだ、見たやうだと思つてゐたら、間君

ぢやないか」

風「余り様子が變つたから別人かと思つた。久く会ひませんな」

貫一は愕然<sup>がくぜん</sup>として二人の面<sup>おもて</sup>を眺めたりしが、忽ち<sup>たちま</sup>身の熱する

を覚えて、その誰なるやを憶<sup>おもひだ</sup>出せるなり。

「これはお珍<sup>めづらし</sup>い。何方<sup>どなた</sup>かと思ひましたら、蒲田君に風早君。久く

お目に掛りませんでした、いつもお變無く」

蒲「その後はどうですか、何か當時は變つた商売をお始めですな

——<sup>まうか</sup>儲りませう」

貫一は打笑<sup>うちゑ</sup>みて、

「儲りもしませんが、間違つてこんな事になつて了ひました」

彼の毫<sup>いささ</sup>も愧<sup>かは</sup>づる色無きを見て、二人は心<sup>こころ</sup>陰<sup>ひそ</sup>に呆<sup>あき</sup>れぬ。侮<sup>あなど</sup>り

し風早もかくては与<sup>くみ</sup>し易<sup>やす</sup>からず思へるなるべし。

蒲「儲けづくであるから何でも可いけれど、然<sup>しか</sup>し思切つた事を始めましたね。君の性質で能<sup>よ</sup>くこの家業が出来ると思つて感服しましたよ」

「真人間に出来る業<sup>わざ</sup>ぢやありませんな」

これ実に真人間にあらざる人の言<sup>ことば</sup>なり。二人はこの破廉耻<sup>はれんち</sup>の老<sup>ろ</sup>うめん<sup>び</sup>を憎しと思へり。

蒲<sup>ひづ</sup>「酷<sup>ひど</sup>いね、それぢや君は真人間でないやうだ」

「私<sup>わたし</sup>のやうな者が愁<sup>なまし</sup>ひ人間の道を守つてをつたら、とてもこの世の中は渡れんと悟りましたから、学校を罷<sup>や</sup>めるとともに人間も罷めて了つて、この商売を始めましたので」

風「然し真人間時分の朋友であつた僕等にかうして会つてゐる間だけは、依旧真人間やはりで居てもらひたいね」

風早は親しげに放笑せり。

蒲「さうさう、それ、あの時分浮名うきなの聒やかましかつた、何とか云つたけね、それ、君の所に居つた美人さ」

貫一は知らざる為まねしてゐたり。

風「おおおあれ？ さあ、何とか云つたつけ」

蒲「ねえ、間君、何とか云つた」

よしその旧友の前に人間の面おもてあかを赧めざる貫一も、ここに到りて多少の心を動かさざるを得ざりき。

「そんなつまらん事を」

蒲「この頃はあの美人と一所ですか、可うらやまし羨いい」

「もう昔話は御免下さい。それでは遊佐さん、これに御印ごいんを願ひます」

彼は矢立やたての筆を抽ぬきて、手形用紙に金額を書入れんとするを、

風「ああ些ちよつと、その手形はどう云ふのですね」

貫一の簡単にその始末を述ぶるを聴きて、

「成程御ごもつとも尤、そこで少しお話を為たい」

蒲田は姑しぼらく助太刀の口を嚙つくみて、皺しわがれごゑ嗟い声の如何に弁ずるかを

聴かんと、吃すひさし余の葉巻を火入ひいれに挿して、威長高ゐたけだかに腕組して控

へたり。

「遊佐君の借財の件ですがね、あれはどうか特別あつかひの扱をして戴き

たいのだ。君の方も営業なのだから、御迷惑は掛けませんさ、然し旧友の頼たのみと思つて、少し勘弁をしてもらひたい」

彼も答へず、これも少時しばしは言はざりしが、

「どうかね、君」

「勘弁と申しますと？」

「究竟つまり君の方に損の掛らん限は減まけてもらひたいのだ。知つての

通り、元金もとこの借金は遊佐君が連帯であつて、實際頼れて印を貸しただけの話であるのが、測らず倒れて来たといふ訳なので、それは貸主の目から見れば、そんな事はどうでも可いよのだから、取立てるものは取立てる、其処そこは能く解つてゐる、からして今更その愚痴を言ふのぢやない。然し朋友の側から遊佐君を見ると、飛ん

だ災難に罹<sup>か</sup>つたので、如何<sup>いか</sup>にも氣の毒な次第。ところで、図<sup>は</sup>らずも貸主が君と云ふので、鰻<sup>てつぷ</sup>鮒の水を得たる想<sup>おもひ</sup>で我々が中へ入つたのは、營業者の鰻淵として話を為るのではなくて、旧友の間<sup>はざま</sup>として、実は無理な頼も聴いてもらひたいのさ。夙<sup>かね</sup>て話は聞いてゐるが、あの三百円に対しては、借主の遠<sup>とおばやし</sup>林<sup>これまで</sup>が従来三回に二百七十円の利を払<sup>あ</sup>つて在る。それから遊佐君の手で九十円、合計三百六十円と云ふものが既に入つてゐるのでせう。して見ると、君の方には既に損は無いのだ、であるから、この三百円の元金<sup>もとぎん</sup>だけを遊佐君の手で返せば可いといふ事にしてもらひたいのだ」

貫一は冷笑せり。

「さうすれば遊佐君は三百九十円払ふ訳だが、これが一文も費<sup>つか</sup>は

ずに空<sup>くう</sup>に出るのだから随分<sup>つら</sup>辛い話、君の方は未<sup>ま</sup>だ未<sup>ま</sup>だ利益になるの<sup>くらべ</sup>をここで見切るのだからこれも辛い。そこで辛<sup>くら</sup>さ競<sup>べ</sup>を為<sup>な</sup>るの<sup>くらべ</sup>だ<sup>べ</sup>が、君の方は三百円の物が六百六十円になつてゐるのだから、立<sup>た</sup>前<sup>ちまへ</sup>にはなつてゐる、此方<sup>こつち</sup>は三百九十円的全<sup>まるぞん</sup>損だから、ここを一つ酌量してもらひたい、ねえ、特別の扱<sup>あつかひ</sup>で」

「全<sup>まる</sup>でお話にならない」

秋の日は短<sup>みじか</sup>しと謂<sup>い</sup>はんやうに、貫一は手形用紙を取上げて、用捨無く約束の金額を書入れたり。一斉に彼の面<sup>おもて</sup>を注視せし風早と蒲田との眼<sup>まなこ</sup>は、更に相合<sup>あひあ</sup>うて瞋<sup>いか</sup>れるを、再び彼方<sup>あなた</sup>に差向<sup>さむか</sup>けて、いとど厳<sup>きびし</sup>く打目<sup>うちまも</sup>成<sup>な</sup>れり。

風「どうかさう云ふ事にしてくれたまへ」



貫「それでは遊佐さん、これに御印ごいんを願ひませう。日限にちげんは十六日、宜よろしうございますか」

この傍若無人の振舞に蒲田の怵こらへかねたる気色けしきなるを、風早はめまぜ目授めまぜして、

「間君、まあ少し待つてくれたまへよ。恥を言はんければ解らんけれど、この借金は遊佐君には荷が勝過ぎてゐるので、利を入れるだけでも方ほうが付かんのだから、長くこれを背負つてゐた日には、体いっしょも一所に沈没して了ふばかり、実に一身の浮沈かかに関する大事なので、僕等も非常に心配してゐるやうなもの、力が足らんで如何かにとも手の着けやうが無い。対手あいてが君であつたのが運すくの尽きざるところなのだ。旧友の僕等の難を拯すくふと思つて、一つ頼を聴いて

くれ給へ。まるまる全然損を掛けやうと云ふのぢやないのだから、決して

さう無理な頼ぢやなからうと思ふのだが、どうかね、君」

「わたくし私は鰐淵の手代なのですから、さう云ふお話は解りかねます。

遊佐さん、では、こんにち今日はまあ三円頂戴してこれに御印をどうぞ

お早く」

遊佐はその独ひとりに計ひかねて覺束おぼつかなげに領うなづくのみ。言はで忍び

たりし蒲田の怒いかりはこの時衝つくが如く、

「待ち給へと言ふに！ 先から風早が口を酸すくして頼んでゐるの

ぢやないか、ぜにもらひ錢貫が門かどに立つたのぢやない、人に対するには

礼と云ふものがある、しかるべ可然あいさつき挨拶を為たまへ」

「お話がお話だから可然しかるべき御挨拶の為やうが無い」

「黙れ、間！ はざま

貴様の頭脳あたまは錢勘定ばかりしてゐるので、人の言

ふ事が解らんと見えるな。誰がその話しかるべきに可然挨拶しかるべきを為ると言つた。

友人に対する挙動が無礼だから節めたしなと言つたのだ。高利貸なら高

利貸のやうに、身の程を省みて神妙ぬすつとにしてをれ。盗人の兄弟分

のやうな不正な営業をしてゐながら、かうして旧友に会つたらば

赧あかい顔の一つも為ることか、世界漫遊でもして来たやうな見識で、

貴様は高利を貸すのをあつぱれ名誉と心得てゐるのか。恥を恥と

も思はんのみか、一枚の証文を鼻に懸けて我々を侮蔑ぶべつしたこの有

様を、荒尾あらおし讓介ようすけに見せて遣りたい！ 貴様のやうな畜生に生

れ變つた奴を、荒尾はやはり昔の間貫一だと思つて、この間も我

々と話して、貴様の安否を苦にしてな、実の弟おととを殺したより、貴

様を失つた方が悲いと言つて鬱ふさいでゐたぞ。その一言いちごんに対しても少しは良心の眠ねむりを覺せ！ 真人間の風早庫之助と蒲田鉄弥が中に入るからは決して迷惑を掛けるやうな事は為んから、今日は順おとなしく帰れ、帰れ」

「受取るものを受取らなくては帰れもしません。貴あなた下が方たがそれまで遊佐さんの件に就いて御心配下さいますなら、かう為なすつて下さいませんか、ともかくもこの約束手形は遊佐さんから戴きまして、この方の形かたはそれで一先ひとまづ附くのですから、改めて三百円の証書をお書き下さいまし、風早君と蒲田君の連帯にして」

蒲田はこの手段を知るの経験あるなり。

「うん、宜よろい」

「ではさう<sup>なす</sup>為つて下さるか」

「うん、宜い」

「さう致せば又お話の付けやうもあります」

「然し氣の毒だな、無利息、十<sup>じつかねんぶ</sup>個年賦は」

「ええ？ 常談ぢやありません」

さすがに彼の一本参りしを、蒲田は誇りかに<sup>せせらわらひ</sup>嘲笑しつ。

風「常談は措いて、いづれ四五日<sup>うち</sup>内に篤<sup>とく</sup>と話を付けるから、今日のところは、久しぶりで会つた僕等の顔を立てて、何も言はずに歸つてくれ給へな」

「さう云ふ無理を有<sup>おつしや</sup>仰るで、私の方も然るべき御挨拶が出来なくなるのです。既に遊佐さんも御承諾なのですから、この手形は

お貰ひ申して帰ります。未だ外へ廻るで急ぎますから、お話は後日寛り伺ひませう。遊佐さん、御印を願ひますよ。貴方御承諾なすつて置きながら今になつて遅々なすつては困ります」

蒲「疫病神が戸惑したやうに手形々と煩い奴だ。俺が始末をして遣らうよ」

彼は遊佐が前なる用紙を取りて、

蒲「金壱百拾七円……何だ、百拾七円とは」

遊「百十七円？ 九十円だよ」

蒲「金壱百拾七円とこの通り書いてある」

かかる事は能く知りながら彼はわざと怪しむなりき。

遊「そんな筈は無い」

貫一は彼等の騒ぐを尻目に掛けて、

「九十円が元金、これに加へた二十七円は天引の三割、これが  
アイス高利の定法です」

音もせざれど遊佐が胆は潰れぬ。

「お……ど……ろ……いたね！」

蒲田は物をも言はず件の手形を二つに引裂き、遊佐も風早もこ  
 れはと見る間に、なほ猶も引裂き引裂き、ひきねぢ引振りて間が目先に投遣  
 りたり。彼は騒げる色も無く、

「何を為るのです」

「始末をして遣つたのだ」

「遊佐さん、それでは手形もお出し下さらんですな」

彼は間が非常手段を取らんとするよ、と心こころ陰ひそかに懼おそれを作して、

「いやさう云ふ訳ぢやない……」

蒲田は乞きつと膝ひざを前すすめて、

「いや、さう云ふ訳だ!」

彼の鬼こ臉はもてなるをいと稚をさなしと輕かろしめたるやうに、間はわざと色

を和やはらげて、

「手形の始末はそれで付いたか知りませんが、貴方あなたも折角中へ入  
つて下さるなら、もう少し男らしい扱をなさいましな。私わたくし如き畜生

とは違つて、貴方は立派な法学士」

「おお俺が法学士ならどうした」

「名実が相副あひそはんと謂ふのです」



「生意氣なもう一遍言つて見ろ」

「何遍でも言ひます。学士なら学士のやうな所業を為さい」<sup>な</sup>

蒲田<sup>かひな</sup>が腕は電光の如く躍りて、<sup>をど</sup>猶言はんとせし貫一が胸先を諸<sup>も</sup>ろつかみ

拵<sup>むす</sup>に無図と捉りたり。

「間、貴様は……」

振向<sup>ねぢむ</sup>けたる彼の面<sup>おもて</sup>を打目成りて、<sup>うちまも</sup>

「取つて投げてくれやうと思ふほど憎い奴でも、かうして顔を見  
合せると、白い二本筋の帽子を冠<sup>かぶ</sup>つて、<sup>ストオブ</sup>燗<sup>ストオブ</sup>炉<sup>ストオブ</sup>の前に膝を並べた時  
分の姿が目<sup>め</sup>に附いて、<sup>あ</sup>嗚呼<sup>あ</sup>、<sup>おとなし</sup>順い間を、と力<sup>ちから</sup>拔<sup>ぬけ</sup>がして了ふ。

貴様これが人情だぞ」

鷹<sup>たか</sup>に遭<sup>あ</sup>へる小鳥の如く身動<sup>みうごき</sup>し得<sup>え</sup>為<sup>せ</sup>で押付けられたる貫一を、

風早はさすがに憫然あはれと見遣りて、

「蒲田の言ふ通りだ。僕等も中学に居た頃の間と思つて、それは誓つて迷惑を掛けるやうな事は為んから、君も友人の誼よしみを思つて、二人の頼を聴いてくれ給へ」

「さあ、間、どうだ」

「友人の誼は友人の誼、貸した金は貸した金で自おのづから別問題……」  
彼は忽ち吭のどつま迫りて言ふを得ず、蒲田は稍強ややく緊しめたるなり。

「さあ、もつと言へ、言つて見る。言つたら貴様の呼吸いきが止るぞ」  
貫一は苦しさに堪たへで振ふり釈ほどかんと挽もがけども、嘉納流かのうりゆうの覺あある蒲田が力に敵しかねて、なかなかその為すに信まかせたる幾分の安きを頼むのみなりけり。遊佐は驚き、風早も心ならず、

「おい蒲田、可いかい、死にはしないか」

「余り、暴くするなよ」

蒲田は哄然として大笑せり。

「かうなると金力よりは腕力だな。ねえ、どうしてもこれは水  
 滸伝にある図だらう。惟ふに、凡そ国利を護り、国権を保つに

は、国際公法などは実は糸瓜の皮、要は兵力よ。万国の上には立

法の君主が無ければ、国と国との曲直の争は抑も誰の手で公明正

大に遺憾無く決せらるるのだ。ここに唯一つ審判の機関がある、

いはたかひ  
 曰く戦！」

風「もう釈してやれ、大分苦しうだ」

蒲「強国にして辱められた例を聞かん、故に僕は外交の術も嘉納

流よ」

遊「余り酷い目に遭せると、僕の方へ報つて来るから、もう舎してくれたまへな」

他の言に手は弛めたれど、蒲田は未だ放ちも遣らず、

「さあ、間、返事はどうか」

「吭を緊められても出す音は変りませんよ。間は金力には屈しても、腕力などに屈するものか。憎いと思ふならこの面を五百円の紙幣束でお撲きなさい」

「金貨ぢや可かんか」

「金貨、結構です」

「ぢや金貨だぞ！」

油断せる貫一が左の高頬たかほを平手打に絶したか吃くらすれば、呀あと両手に痛おさを抑へて、少時しばしは顔も得え拳あげざりき。蒲田はやうやう座かえに復かえりて、

「急には此奴こいつ帰らんね。いつそこで酒を始めやうぢやないか、さうして飲みかつ談せずると為せう」

「さあ、それも可よからう」

独り可からぬは遊佐なり。

「ここで飲んぢや旨うまくないね。さうして形が付かなければ、何時いつまでだつて歸りはせんよ。酒が仕舞しまひになつてこればかり遺のこられたら猶なほ困こる」

「宜よろしい、歸去かへりには僕が一所に引張つて好い処へ連れて行つて遣る

から。ねえ、間、おい、間と言ふのに」

「はい」

「貴様、妻君有るのか。おお、風早！」

と彼は横手を拍ちて不意に※べば、

「ええ、吃驚する、何だ」

「憶出した。間の許婚はお宮、お宮」

「この頃はあれと一所かい。鬼の女房に天女だけれど、今日ち

や大きに日済などを貸してゐるかも知れん。ええ、貴様、そんな

事を為しちや可かんよ。けれども高利貸などは、これで却つて女

子には温いとね、間、さうかい。彼等の非義非道を働いて暴利を

貪る所以の者は、やはり旨いものを食ひ、好い女を自由にして、

好きな栄耀えようがして見たいと云ふ、唯それだけの目的より外に無い  
 のだと謂ふが、さうなのかね。我々から考へると、人情の忍ぶ可  
 からざるを忍んで、経営慘憺さんたんと努めるところは、何ぞ非常の目  
 的があつて貨を殖かねこしらへるやうだがな、譬たとへば、軍用金を聚あつめるとか、  
 お家の宝を質しちうけ請するとか。単に己の慾を充さうばかりで、あんな  
 思切つて殘刻な仕事が出来るものではないと想ふのだ。許多おほくの  
 ガリガリ亡もうじや者は論外として、間貫一おひに於ては何ぞ目的が有るの  
 だらう。こんな非常手段を遣るくらゐだから、必ず非常の目的が  
 有つて存そんするのだらう」  
 秋の日は忽たちまち黄昏たそがれて、稍早ややけれど燈ともしを入るとともに、用意  
 の酒さけさかな肴は順を逐おひて運び出いだされぬ。

「おつと、麦酒<sup>ビール</sup>かい、頂戴<sup>ちやうだい</sup>。鍋<sup>なべ</sup>は風早の方へ、煮方<sup>よろし</sup>は宜くお頼み申しますよ。うう、好い松茸<sup>まつたけ</sup>だ。京でなくてはかうは行かんよ——中<sup>まし</sup>が真白<sup>しろ</sup>で、庖丁<sup>ほうちやう</sup>が軋<sup>きし</sup>むやうでなくては。今年<sup>ことし</sup>は不作<sup>づれ</sup>だね、瘠<sup>や</sup>せてゐて、虫が多い、あの雨<sup>あめ</sup>が障<sup>さは</sup>つたのさ。間、どうだい、君の目的は」

「唯<sup>かね</sup>貨<sup>か</sup>が欲いのです」

「で、その貨をどうする」

「つまらん事を！ 貨はどうでもなるぢやありませんか。どうでもなる貨だから欲い、その欲い貨だから、かうして催促もするのです。さあ、遊佐さん、本当にどうして下さるのです」

風「まあ、これを一盃<sup>いっぱい</sup>飲んで、今日は機嫌<sup>きげん</sup>好く帰つてくれ給へ」



蒲「そら、お取次だ」

「私は酒は不可わたくし いかんのです」

蒲「折角差したものだ」

「全く不可のですから」

差付けらるるを排除おしのする機はずみに、コップは脆もろくも蒲田の手を脱すべれ  
ば、莩たぼこ盆ぼんの火入ひいれに抵あたりて発矢はつしと割れたり。

「何を為る！」

貫一も今は怵こらへかねて、

「どうしたと！」

やをら起たんと為るところを、蒲田が力に胸板むないたを衝つかれて、一ひ  
耐とたまりもせず仰様のけさまに打僵うちこけたり。蒲田はこの隙ひまに彼の手鞆てかばんを

奪ひて、中なる書類をてまかせ手信につかみだ掴出せば、狂氣の如くかけよ駈寄る貫

一、

「身分に障さはるぞ！」と組み付くを、利腕ききうでと捉つて、

「黙れ！」と振ねぢふ伏せ、

「さあ、遊佐、その中に君の証書が在るに違無いから、早く其奴そいつを取つて了ひ給へ」

これを聞きたる遊佐は色を変へぬ。風早も事の余に暴あまりなるを快こころよしと為なざるなりき。貫一は駭おどろきて、撥はねかへ返さんと右に左に身を揉むを、蹈ふんまたが跨ねぢありて振揚げ振揚げ、蒲田は声を励して、

「この期ごに及んで！ 躊躇ちゆうちよするところでないよ。早く、早く、

早く！ 風早、何を考へとる。さあ、遊佐、ええ、何事も僕が引

受けたから、かまはず遣り給へ。証書を取つて了へば、後は細工はりうりう僕が心得てゐるから、早く探したまへと言ふに」

手を出しかねたる二人を睨ねめ廻まはして、蒲田はなかなか下に貫一もたの悶もたゆるにも劣らず、独り業を沸ひとして、効無かひなき地ぢ韃たを踏みてぞゐたる。

風「それは余り遣過ぎる、善よくない、善くない」

「善いいも悪いもあるものか、僕が引受けたからかまはんよ。遊佐、君の事ぢやないか、何をぼんやり然してゐるのだ」

彼はほとほと慄そのきて、寧ろ蒲田が腕むし立うでだての紳士にあるまじきを諫いさめんとも思へるなり。腰弱き彼等の与くみするに足らざるを憤れる蒲田は、宝の山に入りいながら手を空むなしうする無念さに、貫一が手も

折れよとばかり振ねぢ上あぐれば、

「ああ、待つた待つた。蒲田君、待つてくれ、何とか話を付けるから」

「ええ聒やかましい。君等のやうな意氣地無しはもう頼まん。僕が独ひとりで遣つて見せるから、後学の為に能く見て置き給へ」

かく言捨てて蒲田は片手して己おのれの帶を解かんとすれば、時計の紐ひもの生憎あやにくに絡からまるを、躁あせりに躁りて引放さんとす。

風「独ひとりでどうするのだよ」

彼はさすがに見かねて手を飯さんと寄り進みつ。

蒲「どうするものか、此奴こいつを蹈縛ふんじばつて置いて、僕が証書を探すわ」

「まあ、余り穩おだやかでないから、それだけは思おもひ止とり給へ。今間も話を付けると言つたから」

「何か此奴こいつの言ふ事が！」

間は苦くるき声を搾しぼりて、

「きつと話を付けるから、この手を釈ゆるしてくれ給へ」

風「きつと話を付けるな——此方こつちの要求を容いれるか」

間「容れる」

いつはり

詐いつはりとは知れど、二人の同意せざるを見て、蒲田もさまではと力ち

挫つひけて、竟に貫一を放ちてけり。

身を起すとともに貫一は落散りたる書類を搔聚かきあつめ、鞆かばんを拾ひ

てその中に振込みねちこ、さて慌忙あわただしく座かへに復りて、

「それでは今日こんにちはこれでお暇いとまをします」

蒲田が思切りたる無法にこの長居は危あやふしと見たれば、心に恨は含みながら、陽おもてには克かなはじと閉口して、重ねて難題の出いでざる先

にとかくは引取らんと為るを、

「待て待て」と蒲田は下司げすあつかひ扱に呼掛けて、

「話を付けると言つたでないか。さあ、約束通り要求を容いれん内は、今度は此方こつちが還かへさんぞ」

膝ひざおしむ推向つめよけて迫寄る気色は、飽くまで喧嘩を買はんとするなり。

「きつと要求は容れますけれど、嚮さつきから散々の目に遭あはされて、何だか酷く心持が悪くてなりませんから、今日はこれで還して下さいます。これは長座ちようざをいたしてお邪魔でございました。それで

は遊佐さん、いづれ二三日の内に又上つてお話を願ひます」

たちま

忽ち打つて変りし貫一の様子に蒲田は冷笑あざわらひして、

くそかたき

「間、貴様は犬の糞で仇を取らうと思つてゐるな。遣つて見ろ、

これからいつ

そんな場合には自今毎でも蒲田が現れて取挫とりひしいで遣るから」

かたき

「間も男なら犬の糞ぢや仇は取らない」

き

「利いた風なことを言ふな」

風「これさ、もう好加減にしないかい。間も帰り給へ。近日是非  
篤と話をしたいから、何事もその節だ。さあ、僕が其処そこまで送ら  
う」

おくりいだ

遊佐と風早とは起ちて彼を送出せり。あるじ主の妻は縁側より入

きた

り来りぬ。

「まあ、貴方あなた、お蔭様で難有ありがたう存じました。もうもうどんなに

好い心持でございましたらう」

「や、これは。些ちよつと壮士そうし芝居といふところを」

「大相宜よろしい幕でございましたこと。お酌を致しませう」

件の騷動くだんにて四辺あたりの狼藉ろうぜきたるを、彼は効々かひかひしく取形付けてゐ

たりしが、二人はやがて入来いりくるを見て、

「風早さん、どうもお蔭様で助りました、然し飛んだ御迷惑様で。

さあ、何も御坐いませんけれど、どうぞ貴下方御寛ごゆるり召上つて下

さいまし」

妻の喜は溢あふるるばかりなるに引易ひきかへて、遊佐は青息あをいき响ききて思

案くに昏くれたり。



「弱つた！ 君がああして取緊めてくれたのは可いが、この返報に那奴あいつどんな事を為るか知れん。明日あたり突然と差押などを吃くはせられたら耐たまらんな」

「余り蒲田が手酷てひどい事を為るから、僕も、さあ、それを案じて、惴々はらはらしてゐたぢやないか。嘉納流も可いけれど、後前あとさきを考へて遣つてくれなくては他迷惑はためいわくだらうぢやないか」

「まあ、待ち給へと言ふことさ」

蒲田は袂たもとの中を撈かいさぐりて、揉皺もめしわみたる二通の書類を取とり出いだしつ。

風「それは何だ」

遊「どうしたのさ」

何ならんと主あるじの妻も鼻の下を延べて窺うかがへり。

風「何だか僕も始めてお目に掛るのだ」

彼は先づその一通を取りて披ひら見るに、鰐淵直行に対する債務者は聞きも知らざる百円の公正証書謄本なり。

二人は蒲田が案外の物持てるに驚おどろかれて、各息を凝こして瞪みれるまなこ眼を動うさず。蒲田も無言の間に他の一通を取りて披ひらけば、妻はいよいよ近ちかきて差さ覗のぞきつ。四箇よつの頭顱かしらはラムプの周辺めぐりに魅ふに寄る池の鯉こひの如ひしく犇あつと聚まれり。

「これは三百円の証書だな」

一枚二枚と繰り行けば、債務者の中に鼻はなの前さきなる遊佐良橘よさの名をも署しるしたり、蒲田は弾機仕掛ばねじかけのやうに躍をどり上りて、

「占めた！ これだこれだ」

驚喜の余り身を支へ得ざる遊佐の片手は鵜の鉢の中ですつぽと  
 落入り、乗出す膝ひざがしら頭に銚子ちようしを薙倒なぎたふして、

「僕のかい、僕のかい」

「どう、どう、どう」と証書を取らんとする風早が手は、筋きんの活は  
 動を失へるやうにて幾度いくたびも捉へ得ざるなりき。

「まあ！」と叫びし妻は忽ちたちま胸むね塞ふたりて、その後を言ふ能はざ  
 るなり。蒲田は手の舞ひ、膝の蹈ふむところを知らず、

「占めたぞ！ 占めたぞ!! 難ありがた有い※」

証書は風早の手に移りて、遊佐とその妻と彼と六むつの目を以て子  
 細にこれを点検して、その夢ならざるを明あきらめたり。

「君はどうしたのだ」

風早の面はかつ呆れ、かつ喜び、かつ懼るるに似たり。やがて

証書は遊佐夫婦の手に渡りて、打拡げたる二人が膝の上に、これぞ比翼読なるべき。更に麦酒の満を引きし蒲田は「血は大刀に滴りて拭ふに違あらざる」意気を昂げて、

「何と凄からう。奴を振伏せてゐる中に脚で搔寄せて袂へ忍ばせたのだ——早業さね」

「やはり嘉納流にあるのかい」

「常談言つちや可かん。然しこれも嘉納流の教外別伝さ」

「遊佐の証書といふのはどうして知つたのだ」

「それは知らん。何でも可いから一つ二つ奪つて置けば、奴を退治る材料になると考へたから、早業をして置いたのだが、思ひき

やこれが覘ねらふ敵かたきの証書ならんとは、全く天の善くみに与よするところだ」

風「余り善でもない。さうしてあれを此方こつちへ取つて了へば、三百

円は蹈ふめるのかね」

蒲おほふ「大蹈め！ 少し悪党になれば蹈める」

風「然し、公正証書であつて見ると……」

蒲「あつても差支さしつかへ無い。それは公証人役場には証書の原本が備

付けてあるから、いざと云ふ日にはそれが物を言ふけれど、この

正せいほん本さへ引揚げてあれば、間貫一いくら地動波動じたばたしたつて『河

童つばの皿に水の乾かわいた』同然、かうなれば無証拠だから、矢でも鉄

砲でも持つて来いだ。然し、全然蹈まるまるむのもさすがに不便ふびんとの思おぼし

召めしを以つて、そこは何とか又色を着けて遣らうさ。まあまあ君

達は安心してゐたまへ。蒲田弁理公使がよろし宜くそんな樽俎の間に折衝して、  
遊佐家を泰山たいざんの安きに置いて見せる。嗚呼あゝ、実に近来の一大快  
事だ！」

人々の呆るるには目も掛けず、蒲田は証書を推戴おしいただき推戴き  
て、

「さあ、遊佐君の為に万歳を唱へやう。奥さん、貴方あなたが音頭おんどをお  
取んなさいましよ——いいえ、本当に」

小心なる遊佐はこの非常手段を極悪大罪と心安からず覚ゆるな  
れど、蒲田が一切を引受けて見事に埒開うちけんといふに励されて、  
さては一生の怨敵おんてき退散いはひの賀おのぎと、各漫に前む膝を聚あつめて、長夜ちようや  
の宴を催さんとぞひしめ犇ひしめいたる。

## 第七章

茫々<sup>ぼうぼう</sup>たる世間に放れて、蚤<sup>はや</sup>く骨肉の親むべき無く、況<sup>いはん</sup>や愛情  
 の温<sup>あた</sup>むるに会はざりし貫一が身は、一鳥も過ぎざる枯野の広きに  
 塊<sup>かいぜん</sup>然<sup>よこた</sup>として横はる石の如きものなるべし。彼が鳴<sup>しぎさわ</sup>沢の家<sup>さわ</sup>に在  
 りける日宮を恋ひて、その優<sup>たのしみ</sup>き声と、柔<sup>やはらか</sup>き手と、温<sup>ぬ</sup>き心とを得た  
 りし彼の満足は、何等<sup>たのしみ</sup>の樂をも以外に求むる事を忘れしめき。彼  
 はこの恋人をもて妻とし、生命<sup>あきた</sup>として慊<sup>あきら</sup>らず、母の一部分となし、  
 妹<sup>いもと</sup>の一部分となし、或<sup>あるひ</sup>は父の、兄の一部分とも為<sup>な</sup>して宮の一身は  
 彼に於ける愉快なる家族の団<sup>まじひ</sup>欒に値せしなり、故<sup>ゆゑ</sup>に彼の恋は青年

を樂むいちじよう一場の風流の麗き夢うるはしに似たる類たぐひならで、質はその文ぶんに  
 勝てるものなりけり。彼の宮に於おけるは都すべての人の妻となすべき  
 以上を妻として、寧むしろその望むところ多きに過ぎずやと思はしむ  
 るまでに心に懸けて、自みづからはその至当なるを固く信ずるなりき。彼  
 はこの世に一人の宮を得たるが為に、万木一時いちじに花を着くる心地  
 して、曩さきの枯野に夕暮れし石も今將はた水に温ぬくみ、霞かすみに酔よひて、長の  
 閑どかなる日影に眠る如く覚えけんよ。その恋のいよいよ急に、いよ  
 いよ濃こまやかになり勝まされる時、人の最も憎める競争者の為に、しかも輒たやす  
 く宮を奪はれし貫一が心は如何いかなりけん。身をも心をも打うち委まかせ  
 て詐いつはることを知らざりし恋人の、忽ち敵の如く己おのれに反そむきて、空むなしく  
 他人に嫁するを見たる貫一が心は更に如何いかなりけん。彼はここに



於いて曩さきに半箇の骨肉の親むべきなく、一点の愛情の温むるに会  
 はざりし凄せいら寥ようを感じるのみにて止らず、失望を添へ、恨を累かさ  
 ねて、かの塊然たる野末のすゑの石は、霜置く上に凧こがらしの吹誘ひて、皮肉  
 を穿うがち来きたる人生の酸味の到頭骨に徹する一種の痛苦を悩みて已やま  
 ざるなりき。実に彼の宮を奪れしは、その嘗かつて与へられし物を取  
 去られし上に、与へられざりし物をも併あはせて取去られしなり。

彼は或あるひはその恨なげうを抛つべし、なんぞその失望をも忘れざらん。  
 されども彼は永くその痛苦を去らしむる能はざるべし、一ひと旦たび太いた  
 くその心を傷きずけられたるかの痛苦は、永くその心の存在と俱ともに存  
 在すべければなり。その業務として行はざるべからざる残忍刻薄  
 を自ら強しふる痛苦は、能よく彼の痛苦と相あひ剋こくして、その間聊かぬさおもひか思

を遣るべき余地をぬす窃み得るに慣れて、彼は漸く忍ぶべからざるを  
 忍びて為し、恥づべきをも恥ぢずして行ひけるほどに、勁敵に  
 遇あひ、悪徒にかか罹りて、或は弄もてあそばれ、或は欺かれ、或は脅おびやかされ勢毒  
 を以つて制し、暴を以つて易かふるの已やむを得ざるより、一いつはその  
 道の習に薰染して、彼は益ますます懼おそれず貪むさぼるに至れるなり。同時に例  
 の不斷の痛苦は彼を撻むちうつやうに募ることありて、心も消きえ々に悩  
 まさるる毎に、齷あくさく 利を趁おふ力も失せて、彼はなかなか死の安  
 きを懷おもはざるにあらず。唯その一旦にして易やすく、又今の空むなしき死を  
 遂とげ了をはらんをば、いと効かひ為しと思返して、よし遠くとも心に期す  
 るところは、なでう一ひとたび度前の失望と恨とを霽はらし得て、胸裡きようりの  
 涼きこと、氷を砕いて明鏡を磨とぐが如く為ざらん、その夕ゆふべぞ我は

正に死ぬべきと私に慰むるなりき。

貫一は一はかの痛苦を忘るる手段として、一はその妄執を散すべき快心の事を買はんの目的をもて、かくは高利を貪れるなり。知らず彼がその夕にして瞑せんとする快心の事とは何ぞ。彼は尋常復讐の小術を成して、宮に富山に鳴沢に人身的攻撃を加へて快を取らんとにはあらず、今少く事の大きく男らしくあらんをば企図せるなり。然れども、痛苦の劇く、懐旧の恨に堪へざる折々、彼は熱き涙を握りて祈るが如く嘆ちぬ。

「!!」

頭も打割るるやうに覚えて、この以上を想ふ能はざる貫一は、

ここに到りて自失し了るを常とす。かかる折よ、熱海の浜に泣倒

れし嶋沢の娘と、田鶴見たづみの底に逍遙しょうようせし富山が妻との姿は、

双々そうそう貫一が身边ほうこうを彷徨して去らざるなり。彼はこの痛苦の堪ふ

べからざるに任せて、ほとほと前後を顧ずして他の一方に事を為

すより、往々その性の為す能はざるをも為して、仮かさざること仇き

敵ゆうてきの如く、債務を逼りて酷きを極むるなり。退しりぞいてはこれを悔

ゆるも、又折に触れて激すれば、忽たちまち勢に駆られて断行するを憚はばか

らざるなり。かくして彼の心かかつらに拘ふ事あれば、自おのづから念頭を去らざ

る痛苦をもその間に忘るるを得べく、素もとより彼は正せいを知らずして

邪を為し、是ぜを喜ばずして非ひを為すものにあらざれば、己おのれを枉まげ

てこれを行ふ心苦しさは俯ふして愧はぢ、仰おそぎて懼れ、天地の間に身

を置くところは、纔わづかにその容いる空間なほひろだに猶潤なほひろきを覚ゆるなれ

ど、かの痛苦に較べては、はるか 簀に忍ぶの易く、たい 体のまたゆたか 胖なるをさへ感ずるなりけり。

一 ひたぶる 一向に神を勞し、思を費して、日夜これを暢るにのぶ 違あらぬ貫いとま 一は、にくや 肉痩せ、骨立ち、色疲れて、宛然死水などのやうに沈鬱さはなからしうい し了んぬ。その攢めたる眉と空く凝せる目とは、体力の漸く衰ふるに反して、精神の愈いよいよ 興奮するとともに、思の益ますま 繁く、益まし 乱るるを、従ひてか 芟り、従ひて解かんとすれば、なほも繁り、なほも乱るるを、竟つひ に如何いか に為せ ばや、と心も砕けつつ打悩めるを示せり。更に見よ、漆のやうに鮮潤つややか なりし髪は、後腦の辺あたり に若そくば 干く の白きを交まじ へて、額に催せし皺しわ の一筋長く横よこた はれるぞ、その心せばま の窄ひだ れる襞ひだ ならざるべき、況いは んや彼の面おもて を蔽おほ へる蔭ますま は益ますま 暗く き

にあらずや。

吁、<sup>あゝ</sup>彼はその初一念を遂<sup>と</sup>げて、外面<sup>げめん</sup>に、内心に、今は全くこの

世からなる魔道に墜<sup>お</sup>つるを得たりけるなり。貪欲<sup>どんよく</sup>界の雲は凝<sup>こ</sup>り

て歩<sup>ほ</sup>々に厚く護<sup>まも</sup>り、離恨<sup>りこんてん</sup>天の雨は随所<sup>ただちそこ</sup>直に灑<sup>い</sup>ぐ、一飛一躍出で

ては人の肉を啖<sup>くら</sup>ひ、半生半死<sup>い</sup>りては我と腸<sup>はら</sup>を劈<sup>わ</sup>く。居る所は陰

風常に廻<sup>めぐ</sup>りて白日を見ず、行けども行けども無明<sup>むみょう</sup>の長夜<sup>ちやうや</sup>今に

到るまで一千四百六十日、逢<sup>あ</sup>へども可懷<sup>なつかし</sup>き友の面<sup>おもて</sup>を知らず、交<sup>まじは</sup>

れども曾<sup>かつ</sup>て情の蜜<sup>なみ</sup>より甘きを知らず、花咲けども春日<sup>はるび</sup>の麗なるを

知らず、樂<sup>たのしみ</sup>来れども打背<sup>うちそむ</sup>きて飲ぶを知らず、道あれども履<sup>ふ</sup>

むを知らず、善あれども与<sup>くみ</sup>するを知らず、福<sup>さいはひ</sup>あれども招くを知ら

ず、恵あれども享<sup>う</sup>くるを知らず、空<sup>むなし</sup>く利欲<sup>ふけ</sup>に耽<sup>うしな</sup>りて志を喪<sup>ひと</sup>ひ、偏

に迷執もてあそに弄ばれて思を勞つからす、吁ああ、彼は終つひに何をか成さんとすらん。間貫一やうやの名は漸く同業者間に聞えて、恐るべき彼の未来を属しよくもく

目 せざるはあらずなりぬ。

かの堪たふべからざる痛苦と、この死をも快くせんとする目的とあるが為に、貫一の漸しきりく頻なる嚴談酷げんだんこくそく促おのづは自から此処ここに彼処かしこに債務者の怨うらみを買ひて、彼の為に泣き、彼の為に憤るもの寡すくなからず、同業者といへども時としては彼の余あまりに用捨無きを咎とがむるさへありけり。独り鰐淵ひとはこれを喜びて、強將の下弱卒くだを出さざるを誇れるなり。彼は己おのれの今日こんにちあるを致せし辛抱と苦勞とは、未だいまかくのごと

如 此かくくにして足るものならずとて、屢しばしばばその例を挙げては貫一そそのかをし、飽くまで彼の意を強うせんと勉つとめき。これが為に慰め

らるるにはあらねど、その行へる残忍酷薄の人の道に欠けたるを知らざるにあらぬ貫一は、職業の性質既に不法なればこれを営むの非道なるは必然の理にて、己の為すところは都ての同業者の為すところにて、己一人の殘刻なるにあらず、高利貸なる者は、世間一様に如く殘刻ならざるべからずと念へるなり。  
 故に彼は決して己の所業のみひとり怨を買ふべきにあらずと信じた。  
 り。

實に彼の頼める鰐淵直行の如きは、彼の辛うじてその半を想ひ得る殘刻と、終に学ぶ能はざる譎詐とを左右にして、始めて今日の富を得てしなり。この点に於ては彼は一も二も無く貫一の師表たるべしといへども、その実さばかりの殘刻と譎詐とを擅に



して、なほ天に畏れず、人に憚らざる不敵の傲骨あるにあらず。  
 彼は密に警めて多く夜出でず、内には神を敬して、得知れぬ教会  
 の大信者となりて、奉納寄進に財を吝まず、唯これ身の無事を祈  
 るに汲々として、自ら安ずる計をなせり。彼は年来非道を行  
 ひて、なほこの家栄え、身の全きを得るは、正にこの信心の致す  
 ところと仕へ奉る御神の冥護を辱なみて措かざるなりき。貫一  
 は彼の如く残刻と譎詐とに勇ならざりけれど、又彼の如く敬神と  
 閉居とに怯ならず、身は人と生れて人がましく行ひ、一も曾て犯  
 せる事のあらざりしに、天は却りて己を罰し人は却りて己を詐り、  
 終生の失望と遺恨とは濫に断腸の斧を揮ひて、死苦の若かざ  
 る絶痛を与ふるを思ひては、彼はよし天に人に憤るところあるも、

おそ  
懼るべき無しと為るならん。貫一の最も懼れ、最も憚るところは  
みづから  
自の心のみなりけり。

## 第八章

用談果つるを俟ちて貫一の魚膠無く暇いとまごひ乞するを、満枝は暫しば  
しと留置とどめおきて、用有りげに奥の間にぞ入りたる。その言の如くことば  
暫し待てども出で来ざれば、又巻まきた蓆たばこを取り出しけるに、手てあぶ  
炉りの炭は狼の糞のやうになりて、いつか火の氣の絶えたるに、  
檀座たんざに毛糸の敷物したる石笠いしがさのラムプのほのほを仮りて、貫一は為せ  
う事無しに煙けふりを吹きつつ、この赤檜あかがしの客間を夜目ながらみまはしつ。

袋ふくろ 棚だな

なる置時計は十時十分前を指せり。違棚には箱入の人

形を大小二つ並べて、その下は七宝しつぽう焼擬やきまがひの一輪挿いちりんざし、蠟石ろうせき

の飾玉を水色みづいろ縮緬ちりめんの二三重みつがさねの褥しとねに載せて、床柱なる水牛の

角の懸花かけはな入はいれは松に隼はやぶさの勸工場まきゑきんきん時絵金ときえきん々として、花を見ず。鑄い

物の香炉ものの悪わる古ふるびに玄くすませたと、羽二重細工はぶたへの花はな筐かたみとを

床に飾りて、雨うちゅう中の富士をば引攪旋ひきかきまはしたるやうに落墨くもまして、

金泥精描のぼりりゆうの騰めぬき竜めぬきは目貫めぬきを打つたるかとばかり雲間くもまに耀かがやける横よ

物ものの一幅かしろめく。頭すみを回ふたばちらせば、楣間びかんに黄こうかい海かい大海戦こうかいの一間程なる水

彩画さいがを掲げて座敷すみの隅ふたばちには二鉢ふたばちの菊きくを据すゑたり。

やや有りて出来いできたれる満枝みんしは服ふくを改めたるなり。糸織えりかの衿懸えりかけ

たる小袖こそでに納戸なんど小紋こもんの縮緬ちりめんの羽織しつちん着くろじゆすて、七糸しつちんと黒縹くろじゆす子ことの昼夜

帯して、華美なるシオウルを携へ、髪など撫付けしと覺く、面も見違ふやうに軽く粧ひて、

「大變失礼を致しました。些と私も其処まで買物に出ますので、実は御一緒に願はうと存じまして」

無礼なりとは思ひけれど、口説れし誼に貫一は今更腹も立て難くて、

「ああさうですか」

満枝はつと寄りて声を低くし、

「御迷惑であらつしやいませうけれど」

聴き飽きたりと謂はんやうに彼は取合はで、

「それぢや参りませう。貴方は何方までお出なのですか」

わたくし おおよこちよう  
「私は大横町まで」

二人は打連れて 四谷左門町 よつやさんちようなる赤檜の家を出でぬ。伝馬 てんまちよう

どおり

町通は両側の店に燈を列ねて、未だ宵なる景気なれど、秋とし  
はなはだしも覚えず夜寒の甚ければ、往来も稀に、空は星あれどいと暗し。

「何といふお寒いのでございませう」

「さやう」

「貴方、間さん、貴方そんなに離れてお歩き遊ばさなくても宜い  
よろしぢやございせんか。それではお話が達きませんわ」  
とど

彼は町の左側をこたびは貫一に擦寄りて歩めり。  
すりよ

「これぢや私が歩き難いです」  
わたくし  
にく

「貴方お寒うございませう。私お鞆を持ちませう」  
かばん

「いいや、どういたして」

「貴方あなた恐入りますが、もう少し御ご緩ゆりお歩きなすつて下さいましな、私呼吸いきが切れて……」

已やむ無く彼は加減して歩めり。満枝は着重きおもるシオウルを揺ゆりあ上げて、

「疾とつからは是非お話致したいと思ふ事があるのでございますけれど、その後些ちよつともお目に掛らないものですから。間さん、貴方、本当に偶たまにはお遊びにいらしつて下さいましな。私もう決して先達せんだつ而てのやうな事は再び申上げませんから。些ちといらしつて下さいましな」

「は、難有ありがたう」

「お手紙を上げましても宜うございますか」

「何の手紙ですか」

「御機嫌伺の  
ごきげんうかがひ

「貴方から機嫌を伺はれる訳が無いぢやありませんか」

「では、恋い時に  
こひし

「貴方が何も私を……」

「恋いのは私の勝手でございますよ」

「然し、手紙は人にでも見られると面倒ですから、お辞をします  
ことわり

「でも近日に私お話を致したい事があるのでございますから、  
にぶち淵さんの事に就きましてね、私はこれ程困つた事はございませ  
鰐わ

んの。で、是非貴方に御相談を願はうと存じまして、……」

唯<sup>と</sup>見れば伝馬町三丁目と二丁目との角なり。貫一はここにて

満枝を撒<sup>ま</sup>かんと思ひ設けたるなれば、彼の語り続けるをも会釈<sup>せ</sup>為

ずして立<sup>たちどま</sup>住りつ。

「それぢや私はここで失礼します」

その不意に出<sup>い</sup>でて貫一の闇<sup>くら</sup>き横町に入るを、

「あれ、貴方<sup>あなた</sup>、其方<sup>そちら</sup>からいらつしやるのですか。この通をいらつ

しやいましなね、わざわざ、そんな寂<sup>さびし</sup>い道をお出<sup>いで</sup>なさらなくても、

此方<sup>こつち</sup>の方が順ではございませんか」

満枝は離れ難なく二三間追ひ行きたり。

「なあに、此方<sup>こつち</sup>が余程近いのですから」

「幾<sup>いくら</sup>多も違ひは致しませんのに、賑<sup>にぎや</sup>かな方をいらつしやいましよ。



私その代り四谷見附みつけの所までお送り申しますから」

「貴方に送つて戴いたいたつて為やうが無い。夜が更ふけますから、貴

方も早く買物を為すつてお帰りなさいまし」

「そんなお為ため転ごかしを有おつしや仰よろしらなくても宜よろしうございます」

かく言争ひつつ、行くにもあらねど留るにもあらぬ貫一に引添しらずしらずそなたひて、不知不識其方に歩ませられし満枝は、やにはに立竦たちすくみて  
声を揚げつ。

「ああ！ 間ちよつさん些ちよつと」

「どうしました」

「路みち悪わるへ入つて了しまつて、履物はきものが取れないのでございますよ」

「それだから貴方はこんな方へお出いでなさらんが可いいのに」

彼は渋々寄り来<sup>きた</sup>れり。

「憚<sup>はばかりさま</sup> 様ですが、この手を引張つて下さいましな。ああ、早く、

私転びますよ」

シオウルの外に援<sup>たすけ</sup>を求むる彼の手を取りて引寄すれば、女は<sup>よろめ</sup>

きつつ泥<sup>ぬかるみ</sup>濘を出でたりしが、力や余りけん、身を支へかねて<sup>どう</sup>

と貫一に靠<sup>もた</sup>れたり。

「ああ、危い」

「転びましたら貴方<sup>あなた</sup>の所為<sup>せゐ</sup>でございますよ」

「馬鹿なことを」

彼はこの時扶<sup>たす</sup>けし手を放たんとせしに、釘<sup>くぎ</sup>付<sup>つけ</sup>などにしたらん

やうに曳<sup>ひ</sup>けども振れども得離れざるを、怪しと女の面<sup>おもてうかが</sup>を窺へるな

り。満枝は打背うちそむけたる顔の半なかばをシオウルの端はしに包みて、握れる手をば弥いよいよよ固く緊しめたり。

「さあ、もう放して下さい」  
ますま

益ますますす緊めて袖の中へさへ曳入れんとすれば、  
そで

「貴方、馬鹿な事をしてはけません」

女は一語ひとことも言はず、面も背けたるままに、その手は益ますます放たで

男の行く方かたに歩めり。

「常談しちや可かんですよ。さあ、後うしろから人が来る」

「宜よろうございますよ」

独語ひとりごつやうに言ひて、満枝は弥いよいよ寄添よひつ。貫一は怵こらへかねて

力任うんせに咩と曳けば、手は離れずして、女の体のみ倒れかかりぬ。

「あ、痛いた！ そんな酷ひどい事をなさらなくても、其処そこの角まで参れ

ばお放し申しますから、もう少しの間どうぞ……」

「好い加減になさい」

と暴あらうかに引ひつぱらひて、寄らんとする隙ひまもあらせず摩脱すりぬくるより

足を疾はやめて津守坂つのかみざかを驀ましぐら直に下りたり。

やうやう昇れる利鎌とかまの月は乱雲らんうんを芟かりて、はるけこずいただきばら

掛れり。一いちまつ抹やみの闇を透きて士官学校の森と、その中なる兵營と、

その隣なる町の片割かたわれとは、懶く寢覚めたるやうに覺束おぼつかなき形

を顕あらはしぬ。坂上なる巡査派出所の燈は空く血紅の光を射て、下

り行きし男の影も、取残されし女の姿も終つひに見えず。

## (八)の二

片側町かたかはまちなる坂町さかまちは軒並のきなみに鎖とぎして、何処いづこに隙洩すきもる火影ひかげも見  
 えず、旧砲兵營きうほうへいえいの外柵がいさくに生茂おひしげる群松むらまつは颯々さつさつの響なを作なして、  
 その下道したみちの小暗をくらき空をくらに五位鷺ごいさぎの魂切たまきる声消えて、夜色愁なふるが  
 如まさく、正まに十一時に垂なんなんとす。

忽たちまち兵營へいえいの門前あたに方あたりて人の叫あぶが聞えぬ、間貫つば一まぶかは二人の曲ひきおろ  
 者せものに困いちにんれたるなり。一人は黒の中折帽つばの鐔まぶかを目深ひきおろに引下し、  
 鼠ねずみいろ色の毛糸えりまきの衿しり卷からげに半面つづを裏つづみ、黒キヤリコの紋付くろたびの羽織せ  
 の下に紀州ネルしたばきの下穿しり高々からげと尻しり褰つゑして、黒足袋くろたびに木裏めくらじの雪  
 踏つたを履はき、六分強ろくぶつよなる色木いろきの弓の折をれを杖つゑにしたり。他は盲めくらじ

縞まの股引ももひき腹掛はらがけに、唐棧とうざんの半纏はんてん着て、茶ヅツクの深靴ふかぐつを穿うがち、衿卷ほのかぶりの頬ほ冠かぶりに鳥撃帽子とりうちぼうしを頂きて、六角けずりなに削成けずりなしたる檳榔子びんろうじの逞ひんだきステッキを引抱ひんだき、いづれも身材みのたけ貫一より  
は低けれど、血氣腕力兼備と見えたる壮佼わかもどもなり。

「物取か。恨を受ける覚は無いぞ！」

「黙れ！」と弓の折の寄るを貫一は片手に障ささへて、

「僕は間貫一といふ者だ。恨があらば尋常あひてに敵手にならう。物取ならば財かねはくれる、訳も言はずに無法千万な、待たんか！」

答は無くて揮ふり下したる弓の折は貫一が高頬たかほほを発矢はつしと打めくつ。眩めくるめきつつも逃行にげくを、猛然おひせまと追迫おひせまれる檳榔子くだんは、件の杖もて片手  
突に肩あたりの辺えいを曳えいと突いたり。踏こたみ耐こたへんとせし貫一は水道工事の

レイルつまづ 鉄道に跌きて仆るるを、得たりと附入る曲者は、余に躁りて貫一  
 の仆れたるに又跌き、一間ばかりの彼方に反跳を打ちて投飛され  
 ぬ。入替りて一番手の弓の折は貫一の背を袈裟掛に打据ゑけれ  
 ぬ。起きも得せで、崩折るるを、畳みかけんとする隙に、手元に  
 脱捨てたりし駒下駄を取るより早く、彼の面を望みて投げたるが、  
 丁と中りて痠むその時、貫一は蹶起きて三歩ばかりも、れしを打  
 転けし檳榔子の躍り蒐りて、拜打に下せる杖は小鬢を掠り、  
 肩を迂りて、鞆持つ手を断れんとすばかりに撲ちけるを、辛くも  
 忍びてつと退きながら身構しが、目潰吃ひし一番手の怒を作  
 して奮進し来るを見るより今は危しと鞆の中なる小刀撈りつつ  
 馳出づるを、輒く肉薄せる二人が答は雨の如く、所嫌はぬ滅

多打に、彼は敢無くも昏倒せるなり。  
つたうち あへな こんとう

檣「どうです、もう可いに為ませうか」

弓「此奴おれの鼻面へ下駄を打着けよつた、ああ、痛」  
こいつ はなづら

衿巻搔除けて彼の撫でたる鼻は朱に染みて、西洋蕃椒の熟  
かきの な あけ たうがらし  
 えたるに異らず。

檣「おお、大変な衄ですぜ」  
はなぢ

貫一は息も絶々ながら緊と鞆を搔抱き、右の逆手に小刀を隠  
しか ろうぜき  
 し持ちて、この上にも狼藉に及ばば為んやう有りと、油断を計  
てい よそほ ひたうめ  
 りてわざと為す無き体を装ひ、直呻きにぞ呻きゐたる。

弓「憎い奴じや。然し、随分撲つたの」  
う

檣「ええ、手が痛くなつて了ひました」



弓「もう引揚げやう」

かくて曲者は間近の横町に入りぬ。

辛うじておもてあ面を擡げ得たりし

貫一は、一時に発せる全身の疼通いたみに、

精神漸くやうや乱れて、屢しばしば前後

を覚えざらんとす。

## 後編

### 第一章

翌々日の諸新聞は坂<sup>さか</sup>町<sup>まち</sup>に於ける高利貸<sup>アイス</sup>遭難の一件を報道せり。  
 中<sup>うち</sup>に間貫<sup>はざま</sup>一<sup>いち</sup>を誤りて鰐淵<sup>わにぶち</sup>直行<sup>ただゆき</sup>と為<sup>せ</sup>るもありしが、負傷者は翌  
 日大学第二医院に入院したりとのみは、一様に事実の真を伝ふる

なりけり。されどその人を誤れる報道は決して何等の不都合をも  
 生ぜざるべし。彼等を識<sup>し</sup>らざる読者は湯屋の喧嘩<sup>けんか</sup>も同じく、三ノ  
 面記事の常<sup>じょうとう</sup>套<sup>たう</sup>として看過<sup>みすご</sup>すべく、何<sup>い</sup>の違<sup>とま</sup>かその敵手<sup>あひて</sup>の誰<sup>たれたれ</sup>々  
 なるを問はん。識れる者は恐くは、貫一も鰐淵も一つに足腰の利<sup>き</sup>  
 かずなるまで撃<sup>うち</sup>のめされざりしを本意<sup>ほんい</sup>無く思<sup>ほ</sup>へるなるべし。又或  
 者は彼の即死せざりしをも物足らず覚ゆるなるべし。下手人は不  
 明なれども、察するに貸借上の遺趣<sup>いそ</sup>より為<sup>な</sup>せる業<sup>わざ</sup>ならんとは、諸  
 新聞の記<sup>し</sup>せる如く、人も皆思ふところなりけり。

直行は今朝病院へ見舞に行きて、妻は患者の容体を案じつつ留  
 守せるなり。夫婦は心を協<sup>あは</sup>せて貫一の災難<sup>かなし</sup>を悲<sup>かな</sup>み、何程<sup>つひえ</sup>の費<sup>ひ</sup>をも  
 吝<sup>を</sup>まず手宛<sup>てあて</sup>の限を加へて、少小<sup>すこし</sup>の癥<sup>きず</sup>をも遺<sup>のこ</sup>さざらんと祈るなりき。

股肱ここうと恃たのみ、我子とも思へる貫一の遭難を、主人はなかなかその身に受けし闇打やみうちのやうに覚えて、無念の止み難く、かばかりの事に屈する鰐淵ならぬ令見みせしめの為に、彼が入院中を目覚めざましくも厚く賄まかなひて、再び手出しもならざらんやう、陰かげながら卑怯者の息の根を遏とめんと、氣も狂くるはしく力を竭つくせり。

彼の妻は又、やがてはかかる不慮の事の夫の身にも出いで来きたるべきを思過おもひすごして、若もしさるべからんには如何いかにか為すべき、この悲しさ、この口惜くちをしさ、この心細さにては止やまじと思ふに就けて、空そらおそろし可おそろし恐く胸の打騒ぐを禁め得ず。奉公大事ゆゑに怨うらみを結びて、憂き目に遭あひし貫一は、夫の禍わざはひを転じて身の仇あだとせし可憫あはれさを、日頃の手柄に増して浸しみ々難ありがた有く、かれを念おもひ、これを思ひて、

絶に心弱くのみ成行くほどに、裏に愧はづること、懼おそるること、疚やましきことなどの常に抑おさへたるが、忽たちまち涌わきたち、跳をどり出でて、その身を責むる痛苦に堪たへざるなりき。

年久く飼かはるる老猫ろうみようの凡おほそ子狗こいぬほどなるが、棄てたる雪の塊かたまりのやうに長火鉢ながひばちの猫板ねこいたの上に蹲うづくまりて、前足の隻かたし落おとして爪つまざき

頭の灰に埋うづもるるをも知らず、齧いびきをさへ搔かきて熟睡うまいしたり。妻はその夜の騷擾とりこみ、次の日の氣勞きづかれに、血の道を悩める心地にて、うつらうつら

々となりては驚かされつつありける耳元に、格子こうしの鐸ベルの轟とどろきければ、はや夫の歸来かへりかと疑ひも果てぬに、紙門ふすまを開きて顕あらはせる姿は、年とし紀二十六七と見えて、身材たけは高からず、色やや蒼あをき瘦やるせがほむづかくちひげたくまし顔かほの陰むづかしげに口髭くちひげ遅まく、髪おの生ふかひふか乱れたるに深々と紺

ネルトンの二重外套にじゆうまわし えりの襟を立てて、黒の中折帽はきを脱ぎて手にしつ。高き鼻に鼈甲縁べつこうぶちの眼鏡を挿みて、稜ある眼色まなざしは見る物毎に恨あるが如し。

妻は思設けぬ面色おももちの中に喜を漾たたへて、

「まあ直道ただみちかい、好くお出いでだね」

片隅かたすみに外套を脱捨がいつとうつれば、彼は黒綾くろあやのモオニングあたらしの新からぬに、濃納戸地こいなんどじに黒縞くろじまの穿袴ズボンの寛ゆたかなるを着きけて、清きよならぬ護謄ゴムのカラ、カフ、鼠色ねずみいろの紋繻子もんじゆすの頸飾えりかざりしたり。妻は得いそい々そ起ちて、その外套を柱の折釘をりくぎに懸けつ。

「どうも取んだ事で、阿父おとつさんの様子はどうな？ 今朝新聞を見ると愕おどろいて飛んで来たのです。容体ようだいはどうです」

彼は時儀を叙ぶるにおよばずして忙しげにかく問出とひいでぬ。

「ああ新聞で、さうだつたかい。なあに阿父さんはどうも作りはなさしないわね」

「はあ？ 坂町で大怪我おほけがを為なすつて、病院へ入つたと云ふのは？」

「あれは間はざまさ。阿父さんだと思ひなの？ 可厭いやだね、どうした

と云ふのだらう」

「いや、さうですか。でも、新聞には歴然ちやんとさう出てゐましたよ」

「それぢやその新聞が違つてゐるのだよ。阿父さんは先之病院へ見舞にお出掛だから、間も無くお歸来かへりだらう。まあ寛々ゆつくりしてお在いな」

かくと聞ける直道は余あまりの不意に拍子抜して、喜びも得え為せず啞然あぜん

たるのみ。

「ああ、さうですか、間が遣やられたのですか」

「ああ、間が可哀かあいさうにねえ、取んだ災難で、大怪我をしたのだよ」

「どんなです、新聞には余程ひどいやうに出てゐましたが」

「新聞に在る通だけれど、不具かたはになるやうな事も無いさうだが、全然すつかり快くなるには三月みつぐらゐはどんな事をしてかも要かるといふ話

だよ。誠に気の毒な、それで、阿父おとつさんも大抵な心配ぢやないの。

まあ、ね、病院も上等へ入れて手宛てあては十分にしているのだから、

決して氣遣きづは無いやうなものだけれど、何しろ大怪我だからね。

左の肩の骨が少し摧くだけたとかで、手が緩縦ぶらぶらになつて了しまつたの、



その外紫色の痣あざだの、蚯蚓腫めめずばれだの、打切ぶつきれたり、擦すりこ毀こしたやうな負傷きずは、お前、体一面なのさ。それに氣絶するほど頭部あたまを撲ぶたれたのだから、脳病でも出なければ可いつて、お医者様もさう言うつてお在いでなさうだけれど、今のところではそんな塩梅あんばいも無いさうだよ。何しろその晩内へ昇かつきこ込んだ時は半死半生で、些ほんの虫の息が通つてゐるばかり、私わたしは一目見ると、これはとても助るまいと想つたけれど、割合に人間といふものは丈夫なものだね」

「それは災難な、氣の毒な事をしましたな。まあ十分に手宛をし  
て遣るが可いいです。さうして阿父さんは何と言つてゐました」

「何ととは？」

「間やみうちが闇打にされた事を」

「いづれ敵手は貸金の事から遺趣を持つて、その悔し紛に無法な真似をしたのだらうつて、大相腹を立ててお在なのだよ。全くね、間はああ云ふ不斷の大人い人だから、つまらない喧嘩なぞを為る氣遣はなし、何でもそれに違は無いのさ。それだから猶更氣の毒で、何とも謂ひやうが無い」

「間は若いから、それでも助るのです、阿父さんであつたら命は有りませんよ、阿母さん」

「まあ可厭なことをお言ひでないな！」

浸々思入りたりし直道は徐にその恨き目を挙げて、

「阿母さん、阿父さんは未だこの家業をお廃めなさる様子は無いのですかね」

母は苦しげに鈍り鈍りて、

「さうねえ……別に何とも……私わたしには能く解らないね……」

「もう今に応報むくいは阿父さんにも……。阿母さん、間があんな目に遭あつたのは、決して人事ぢやありませんよ」

「お前又阿父さんの前でそんな事をお言ひでないよ」

「言ひます！ 今日では是非言はなければならぬ」

「それは言ふも可いけれど、従これまで来も随分お言ひだけれど、あの気性だから阿父さんは些ちつともお聴きではないぢやないか。とても他ひとの言ふことなんぞは聴かない人なのだから、まあ、もう少しお前も目を瞑つぶつてお在いでよ、よ」

「私わたしだつて親に向つて言ひたくはありません。大概の事なら目を

瞑つぶつてゐたいのだけれど、実にこればかりは目を瞑つぶつてゐられないのですから。始終さう思ひます。私は外に何も苦勞といふものは無い、唯これだけが苦勞で、考出すと夜も寝られないのです。外にどんな苦勞が在つても可いから、どうかこの苦勞だけは没なくして、了しまひたいと熟つくづく思ふのです。噫ああ、こんな事なら未まだ親子で乞食をした方が、復はるに可い」

彼は涙を浮べて、倆うつつきぬ。母はその身も俱ともに責めらるる想して、  
或あるひはづかしは可い慚はく、或いまはしは可い忌くく、この苦くるき位置しに在るに堪たへかねつ  
つ、言解すべかん術すべさへ無けれど、  
ならねば、辛からうじて打うち出いしつ。

「それはもうお前の言ふのは尤もつともだけれど、お前と阿父おとつさんとは全まる

で気合きあひが違ふのだから、万事考かんが量へが別々で、お前の言ふ事は阿父さんの肚はらには入らず、ね、又阿父さんの為る事はお前には不承知と謂いふので、その中へ入つて私も困るわね。内も今では相應にお財かねも出来たのだから、かう云ふ家業は廃やめて、樂隠居になつて、お前に嫁を貰もらつて、孫の顔でも見たい、とさう思ふのだけれど、ああ云ふ氣の阿父さんだから、そんなことを言出さうものなら、どんなに慍おこられるだらうと、それが見え透いてゐるから、漫然うっかりした事は言はれずさ、お前の心を察して見れば可哀かあいさうではありさうかと云つて何方どっちをどうすることも出来ず、陰で心配するばかりで、何の役にも立たないながら、これでなかなか苦いのは私の身だよ。

さぞお前は氣も済まなからうけれど、とても今のところでは何と言つたところが、応と承知をしさうな様子は無いのだから、なまじ慙ひ言合つてお互に心持を悪くするのが果だから、……それは、お前、何と云つたつて親一人子一人の中だもの、阿父さんだつて心ぢやどんなにお前がたより便だか知れやしないのだから、究竟はつまりお前の言ふ事も聴くのは知れてゐるのだし、阿父さんだつて現在の子のそんなにまで思つてゐるのを、決して心に掛けないのではないけれども、又阿父さんおとつの方にも其処そこには了りようけん簡があつて、一概にお前の言ふ通にも成りかねるのだらう。

それに今日あたりは、間の事で大變氣が立つてゐるところだから、お前が何か言ふと却かへつて善くないから、今日は窃そつとして措おい

ておくれ、よ、本当に私が頼むから、ねえ直道」

實に母は自ら言へりし如く、板挟の難局に立てるなれば、

ひたすら事あらせじと、誠の一図に直道を諭すなりき。彼は涙の

催すに堪へずして、鼻目鏡を取捨てて目を推拭ひつつ猶咽び

ゐたりしが、

「阿母さんにさう言れるから、私は不断は忪へてゐるのです。今

日ばかり存分に言はして下さい。今日言はなかつたら言ふ時は有りませんよ。間のそんな目に遭つたのは天罰です、この天罰は阿

父さんも今に免れんことは知れてゐるから、言ふのなら今、今言

はんくらゐなら私はもう一生言ひません」

母はその一念に脅されけんやうにて漫寒きを覚えたり。渾打

か  
去みて直道は語を継ぎぬ。ことば

「然し私の仕打も善くはありません、阿父さんの方にも言分は有わたしらうと、それは自分で思つてゐます。阿父さんの家業が氣に入らん、意見をしても用ゐない、こんな汚れた家業を為るのを見てゐるのが可厭だ、と親を棄てて別居してゐると云ふのは、如何にも情合の無い話で、実に私も心苦いのです。決して人の子たる道ではない、さぞ不孝者と阿父さん始阿母さんもさう思つてお在いででせう」

「さうは思ひはしないよ。お前の方にも理はあるのだから、さうは思ひはしないけれど、一いつしよ処に居たらさぞ好からうとは……」

「それは、私は猶なほの事です。こんな内に居るのは可厭だ、別居し



て独ひとりで遣る、と我儘わがままを言つて、どうなりかうなり自分で暮して

行けるのも、それまでに教育して貰つたのは誰たれのお陰かと謂へば、

みんな

皆親の恩。それもこれも知つてゐながら、阿父おとうさんを踏付にした

おこなひ

やうな行を為るのは、阿母おつかさん能々よくよくの事だと思つて下さい。私

さから

は親に悖さふのぢやない、阿父さんと一処に居るのを嫌きらふのぢやな

い

いが、私は金貸などと云ふ賤いやしい家業が大嫌だいきらひなのです。人を悩なや

おのれこや

めて己を肥す——浅ましい家業です！」

ふる

身を顫ふるはして彼は涙に搔かき昏れたり。母は居いたたま

るなり。

すべし

「親を過すすほどの芸も無くて、生意気な事ばかり言つて実は面めん

目くも無いのです。然し不自由を辛抱してさへ下されば、両親めんぼぐ

らゐに乾い思はきつと為せませんから、破屋でも可いから親子  
 三人一所に暮して、人に後指を差れず、罪も作らず、怨も受けず  
 に、清く暮したいぢやありませんか。世の中は貨が有つたから、  
 それで可い訳のものをぢやありませんよ。まして非道をして拵へた  
 貨、そんな貨が何の頼になるものですか、必ず悪銭身に附かずで  
 す。無理に仕上げた身、上は一代持たずに滅びます。因果の報  
 う例は恐るべきものだから、一日でも早くこんな家業は廃めるに  
 越した事はありません。噫、末が見えてゐるのに、情無い事です  
 なあ！」

積悪の応報、面の末を憂ひて措かざる直道が心の眼は、無残  
 にも怨の刃に劈れて、路上に横死の恥を暴せる父が死顔の、犬に

踏<sup>け</sup>られ、泥<sup>まみ</sup>に塗<sup>ぬ</sup>れて、古<sup>ふる</sup> 蓆<sup>むしろ</sup>の陰<sup>まぐら</sup>に枕<sup>まくら</sup>せるを、怪<sup>あや</sup>くも歴<sup>まぎ</sup>々と  
 見て、恐<sup>おそ</sup>くは我が至誠<sup>しかみ</sup>の鑑<sup>かがみ</sup>は父<sup>ちち</sup>が未<sup>ま</sup>然<sup>な</sup>を宛<sup>さながら</sup>然<sup>しか</sup>映<sup>うつ</sup>し出<sup>い</sup>して謬<sup>あやま</sup>らざ  
 るにあらざるかと、事<sup>こと</sup>の目<sup>ま</sup>前<sup>あた</sup>の真<sup>ま</sup>にあらざるを知<sup>し</sup>りつつも、余<sup>あ</sup>り  
 の浅<sup>あ</sup>ましさに我<sup>われ</sup>を忘<sup>わす</sup>れてつと迸<sup>ほとばし</sup>る哭<sup>なき</sup>声<sup>こゑ</sup>は、咬<sup>く</sup>緊<sup>ひし</sup>むる齒<sup>は</sup>をさへ漏<sup>も</sup>  
 れて出<sup>で</sup>づるを、母<sup>はは</sup>は驚<sup>おど</sup>き、途<sup>みち</sup>方<sup>かた</sup>に昏<sup>く</sup>れたる折<sup>を</sup>しも、門<sup>かど</sup>に俾<sup>くるま</sup>の駐<sup>どま</sup>り  
 て、格子<sup>くわ</sup>の鐸<sup>ベル</sup>の鳴<sup>な</sup>るは夫<sup>そ</sup>の歸<sup>かへ</sup>来<sup>り</sup>か、次<sup>ついで</sup>手<sup>て</sup>悪<sup>わる</sup>しと胸<sup>むね</sup>を轟<sup>とどろ</sup>かして、直<sup>ち</sup>  
 道<sup>みち</sup>の肩<sup>かた</sup>を揺<sup>うご</sup>り動<sup>か</sup>しつゝ、声<sup>こゑ</sup>を潜<sup>ひそ</sup>めて口<sup>くち</sup>早<sup>はや</sup>に、

「直<sup>ち</sup>道<sup>みち</sup>、阿<sup>あ</sup>父<sup>ふ</sup>さんのお歸<sup>かへ</sup>来<sup>り</sup>だから、泣<sup>な</sup>いてゐちや可<sup>か</sup>けないよ、早<sup>はや</sup>  
 く彼<sup>あつち</sup>方<sup>かた</sup>へ行<sup>い</sup>つて、……よ、今日<sup>けふ</sup>は後<sup>あと</sup>生<sup>せい</sup>だから何<sup>なん</sup>も言<sup>い</sup>はずに……」  
 はや足<sup>あし</sup>音<sup>おと</sup>は次<sup>つぎ</sup>の間<sup>ま</sup>に來<sup>きた</sup>りぬ。母<sup>はは</sup>は慌<sup>あわ</sup>てて出<sup>で</sup>迎<sup>むか</sup>ひに起<sup>た</sup>てば、一<sup>ひと</sup>足<sup>あし</sup>遅<sup>おそ</sup>  
 れに紙<sup>ふすま</sup>門<sup>かど</sup>は外<sup>あへ</sup>より開<sup>あ</sup>れて主<sup>あるじ</sup>直<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>の高<sup>たか</sup>く幅<sup>はら</sup>たき軀<sup>からだ</sup>は岸<sup>のつそり</sup>然<sup>しか</sup>とお峯<sup>たかね</sup>の

肩越に顕れぬ。  
かたごし あらは

(一) の二

「おお、直道か珍しいの。何時来たのか」

かく言ひつつ彼は艶々つやつやと赭あからみたる鉢割はちわれの広き額の陰に小く

点せる金壺かねつぼ眼まなこを心快こころよげに瞪みひらきて、妻が例の如く外套がいとうを脱ぬす

るままに立てり。お峯は直道が言に稜かどあらんことを慮おもひりて、さり

気無く自ら代りて答へつ。

「もう少し先さつきでした。貴君は大相お早かつたぢやありませんか、

丁度好よございましたこと。さうして間の容体はどんなですね」

「いや、仕合しあはせと想うたよりは軽くての、まあ、ま、あの分なら

心配は無いて」

黒一楽くろいちらくの三紋みつもん付けたる綿入羽織わたいればおりの衣紋えもんを直して、彼は機嫌げん好く火鉢ひばちの傍そばに歩み寄る時、直道やうやおもては漸く面あを抗なげて礼を作せり。

「お前、どうした、ああ、妙な顔をしてをるでないか」

梭欄しゆろの毛を植うゑたりやとも見ゆる口髭くちひげを搔かい拈ひねりて、太ふとみじ

短かなる眉まゆを顰ひそむれば、聞きゐる妻は呀はっとばかり、刃やいばを踏める心地

も為なめり。直道きは屹きと振仰おもてぐとともに両手を胸に組合せて、居ゐたけ

長高だかになりけるが、父おもての面を見し目を伏せて、さて徐しづかに口を開

きぬ。

「今朝新聞を見ましたところが、阿父おとつさんが、大怪我なすを為つたと

出てをつたので、早速お見舞に参つたのです」

白髪しらがまじを交へたる茶褐色ちやかつしよくの髪かの頭しらに置余るばかりなるを撫なで

て、直行は、

「何新聞か知らんけれど、それは間の間違ぢやが。俺おれならそんな

場合に出会ふたて、唯々おもめめた打れちやをりやせん。何の先は二人でな

いかい、五人までは敵手あひてにしてくれるが」

直道の隣に居たる母は密ひそかに彼のコオトの裾すそを引きて、言ことばを返さ

せじと心着づくるなり。これが為に彼は少しく遅ためらひぬ。

「本ほんにお前まへどうした、顔色かほつきが良うないが」

「さうですか。余あなたり貴方の事が心配になるからです」

「何じや？」

「阿父さん、度々言ふ事ですが、もう金貸は廃めて下さいな」

「又！もう言ふな。言ふな。廃める時分には廃めるわ」

「廃めなければならんやうになつて廃めるのは見ともない。今朝  
 貴方が半死半生の怪我をしたといふ新聞を見た時、私はどんなに  
 しても早くこの家業をお廃めなさるやうに為せなかつたのを熟く  
 後悔したのです。幸に貴方は無事であつた、から猶更今日は私  
 の意見を用ゐて貰はなければならんです。今に阿父さんも間の  
 やうな災難を必ず受けるですよ。それが可恐いから廃めると謂  
 ふのぢやありません、正しい事で争つて殞す命ならば、決して辞す  
 ることは無いけれど、金銭づくの事で怨を受けて、それ故に無法  
 な目に遭ふのは、如何にも恥曝してはいませんか。一つ間違へ

ば命も失はなければならん、不具かたはにも為されなければならん、阿父さんの身の上を考へると、私は夜も寝られんですよ。

こんな家業せを為せんでは生活が出来んのではなし、阿父さん阿母さん二人なら、一生安楽に過せるほどの資産は既に有るのでせう、それに何を苦んで人には怨まれ、世間からは指つまはぢき弾はぢきをされて、無理な財かねを拵こしらへなければならんですか。何でそんなに金いが要いるのですか。誰にしても自身に足りる以外の財かねは、子孫のこに遺さうと謂ふより外は無いのでせう。貴方には私ひとりが一人子、その私は一錢たりとも貴方の財は譲られませんが！ 欲くないのです。さうすれば、貴方は今こんにち日無用の財たぐはを貯たくはへる為に、人の怨を受けたり、世そしに誚そしられたり、さうして現在の親子かたきが讐かたきのやうになつて、貴方



にしてもこんな家業を決して名誉と思つて楽しんで為<sup>なす</sup>つてゐるのではないでせう。

私のやうなものでも可愛<sup>かはい</sup>いと思つて下さるなら、財産を遺<sup>のこ</sup>して下さる代<sup>かはり</sup>に私の意見を聴いて下さい。意見とは言ひません、私の願です。一生の願ですからどうぞ聴いて下さい」

父が前に頭<sup>かしら</sup>を低<sup>た</sup>れて、輒<sup>たやす</sup>く抗<sup>あ</sup>げぬ彼の面<sup>おもて</sup>は熱き涙に蔽<sup>おほは</sup>るるなりき。

些<sup>さ</sup>も動ずる色無き直行は却<sup>かへ</sup>つて微笑を帯びて、語<sup>ことば</sup>をさへ和<sup>やはら</sup>げつ。「俺の身を思つてそんなに言うてくれるのは嬉しい<sup>うれし</sup>けど、お前のはそれは杞憂<sup>きゆう</sup>と謂ふんじや。俺と違つてお前は神経家ぢやからそんなに思ふんぢやけど、世間と謂ふものはの、お前の考へとるやう

なものではない。学問の好きな頭脳あたまで実業を遣る者の仕事を責むるのは、それは可かん。人の怨の、世の誚そしりのと言ふけどの、我々同業者に対する人の怨などと云ふのは、面々の手前勝手の愚痴に過ぎんのじや。世の誚と云ふのは、多くは嫉そねみ、その証拠は、働の無い奴が貧乏しとれば慇あはれまるるじや。何家業に限らず、財かねを拵こしらへる奴は必ず世間から何とか攻撃を受くる、さうぢやらう。財かねの有る奴で評判の好ええものは一人も無い、その通じやが。お前は学者ぢやから自ら心持も違うて、財かねなどをさう貴たつといものに思うてをらん。学者はさうなけりやならんけど、世間は皆学者ではないぞ、可ええか。実業家の精神は唯ただ財かねじや、世の中の奴の慾ほしも財より外には無い。それほどに、のう、人の欲ほしがる財じや、何ぞ好ええとこ

ろが無くてはならんぢやらう。何処どこが好ええのか、何でそんなに好ええのかは学者には解らん。

お前は自身に供給するに足るほどの財かねがあつたら、その上に望む必要は無いと言ふのぢやな、それが学者の考量かんがへじやと謂ふんじやが。自身に足るほどの物があつたら、それで可ええと満足してうてからに手を退ひくやうな了りようけん簡であつたら、国は忽たちまほろぶち亡るじや——社会の事業は発達せんじや。さうして国こくちゆう中若隠居ばかりになつて了うたと為れば、お前どうするか、あ。慾にきりの無いのが国民の生命なんじや。

俺にそんなに財かねを拵こしらへてどうするか、とお前は不審するじやね。俺はどうも為せん、財は余計にあるだけ愉快なんじや。究竟つまり財を拵

へるが極<sup>きは</sup>めて面白いんじや。お前の学問するのが面白い如く、俺は財の出来るが面白いんじや。お前に本を読むのを好<sup>え</sup>え加減に為<sup>せ</sup>い、一人前の学問が有つたらその上望む必要は有るまいと言うたら、お前何と答へる、あ。

お前は能<sup>よ</sup>うこの家業を不正ぢやの、汚<sup>けがらはし</sup>いと言ふけど、財を儲くるに君子の道を行うてゆく商売が何<sup>どこ</sup>処に在るか。我々が高利の金を貸す、如何<sup>いか</sup>にも高利じや、何<sup>なぜ</sup>為高利か、可<sup>え</sup>えか、無抵当じや、そりや。借る方に無抵当といふ便利を与ふるから、その便利に対する報酬として利が高いのぢやらう。それで我々は決して利の高い金を安<sup>いっは</sup>いと詐つて貸しはせんで。無抵当で貸すぢやから利が高い、それを承知で皆借るんじや。それが何で不正か、何<sup>けがらはし</sup>で汚いか。

利が高うて不当と思ふなら、始から借らんが可え、そんな高利を借りても急を拯すくはにや措おれんくらゐの困難が様々にある今の社会じや、高利貸を不正と謂ふなら、その不正の高利貸を作つた社会が不正なんじや。必要の上から借る者があるので、貸す者がある。なんぼ貸したうても借る者が無けりや、我々の家業は成立ちは為ん。その必要を見込んで仕事を為るが則すなはち營業の魂たましひなんじや。

財かねといふものは誰でも愛して、皆獲やうと念おもうとる、獲たら離すまいと為しとる、のう。その財を人より多く持たうと云ふぢやもの、尋常一樣の手段で行くものではない。合意の上で貸借して、それで儲くるのが不正なら、総すべての商業は皆不正でないか。学者の目からは、金かね儲まうけする者は皆不正な事をしとるんじや」

太くもこの弁論に感じたる彼の妻は、いた屢しばしばば直道の顔を偷視ぬすみみて、あはれ彼が理窟りくつもこれが為ために挫くじけて、氣遣きづかひたりし口論も無くて止みぬべきを想ひて私ひそかに懽よろこべり。

直道は先づま厳おごそかに頭を掉しらりて、

「学者でも商業家でも同じ人間です。人間である以上は人間たる道は誰にしても守らんければなりません。わたし私は決して金儲を為るのを悪いと言ふのではない、いくら儲けても可いから、正当に儲けるのです。人の弱みに付入つけいつて高利を貸すのは、断じて正当でない。そんな事が營業の魂などとは……！ 譬たとへば間が災難に遭あつた。あれは先は二人で、しかも不意打を吃くはしたのでせう、貴方はあの所業を何とお考へなさる。男らしい遺趣返いしゆがへしの為方とお思

ひなさるか。卑劣きはま極る奴等だと、さぞ無念にお思ひでせう？」

彼は声を昂あげて逼せまれり。されども父は他を顧て何等の答をも与へざりければ、再び声を鎮しづめて、

「どうですか」

「勿論もちろん」

「勿論？ 勿論ですとも！ 何奴なにやつか知らんけれど、実に陋きたない根

性、劣けちな奴等です。然し、怨を返すといふ点から謂つたら、奴等

は立派に目的を達したのですね。さうでせう、設たとひその手段は如何いかにあらうとも」

父は騒がず、笑ゑみを含みて赤き髭ひげを弄まさぐりたり。

「卑劣と言れやうが、陋きたないと言れやうが、思ふさま遺趣返をした

奴等は目的を達してさぞ満足してをるでせう。それを掴つか殺ころしても遣よりたいほど悔くやしいのは此方こつちばかり。

阿父おとつさんの營業の主意も、彼等の為方と少しも違はんぢやありませんか。間の事に就いて無念だと貴方あなたがと思ひなさるなら、貴方から金を借りて苦められる者は、やはり貴方を恨まずにはゐませんよ」

又しても感じ入りたるは彼の母なり。かくては如何なる言をもことばて夫はこれに答へんとすらん、我はこの理ことわりの覲てきめん面ことわり当然なるに口を開かんやうも無きにと、心慌あわてつつ夫の氣色を密ひそに窺しかうひたり。彼は自若として、却かへつてその子の善く論ずるを心に愛めづらんやうの面おも色もちにて、転うたた微笑を弄ろうするのみ。されども妻は能く知れり、



彼の微笑を弄するは、必ずしも、人のこれを弄するにあらざる時に於いて屢するを。彼は今それか非ぬかを疑へるなり。

蒼く羸れたる直道が顔は可忌くも白き色に変じ、声は甲高に細りて、膝に置ける手頭は連りに震ひぬ。

「いくら論じたところで、解りきつた理窟なのですから、もう言ひますまい。言へば唯阿父さんの心持を悪くするに過ぎんです。

然し、従来も度々言ひましたし、又今日こんなに言ふのも、

皆阿父さんの身を案じるからで、これに就いては陰でどれほど私が始終苦心してゐるか知つてお在は無からうけれど、考出すと勉強するのも何も可厭になつて、吁、いつそ山の中へでも引籠んで了はうかと思ひます。阿父さんはこの家業を不正でないとお

言ひなさるが、実に世間でも地獄の獄卒のやうに憎み賤<sup>いやし</sup>んで、附合ふのも耻<sup>はぢ</sup>にしてゐるのですよ。世間なんぞはかまふものか、と貴方はお言ひでせうが、子としてそれを聞<sup>き</sup>かれる心苦しさを察して下さい。貴方はかまはんと謂ふその世間も、やはり我々が渡つて行かなければならん世間です。その世間に肩身が狭くなつて終<sup>つひ</sup>には容<sup>い</sup>れられなくなるのは、男の面目ではありませんよ。私はそれが何より悲い。此方<sup>こつち</sup>に大見識があつて、それが世間と衝突して、その為<sup>ため</sup>に憎まれるとか、棄てられるとか謂ふなら、世間は私を棄てんでも、私は喜んで阿父さんと一処に世間に棄てられます。親子棄てられて路<sup>みち</sup>辺<sup>ばた</sup>に餓<sup>かつゑ</sup>死<sup>じ</sup>するのを、私は親子の名誉、家の名誉と思ふのです。今我々親子の世間から疎<sup>う</sup>れてゐるのは、自業

自得の致すところで、不名誉の極です！」

まなこ  
眼は痛恨の涙を湧わかして、彼は覚えぬ父の面おもてを睨にらみたり。直行は  
うそぶ  
例の嘯そぶけり。

直道は今日を限と思入りたるやうに飽くまで言ことばを止やめず。

「今度の事を見ても、如何いかに間が恨まれてゐるかが解りませう。

あなた  
貴方の手代でさへあの通ではありませんか、して見れば貴方の受  
けてゐる恨、憎にくみはどんなであるか言ふに忍びない」

父は忽ち遮たちまさへぎりて、

「善し、解つた。能よう解つた」

「では私ことばの言を用ゐて下さるか」

「まあ可ええ。解つた、解つたから……」

「解つたと言ひなさるからはきつと用ゐて下さるのでせうな」  
 「お前の言ふ事は能う解つたさ。然し、爾は爾たり、吾は吾たり  
 じゃ」

直道は怵<sup>こら</sup>へかねて犇<sup>ひし</sup>と拳<sup>こぶし</sup>を握れり。

「まだ若い、若い。書物ばかり見とるぢや可かん、少しは世間も  
 見い。なるほど子の情として親の身を案じてくれる、その点は空<sup>あだ</sup>  
 には思はん。お前の心中も察する、意見も解つた。然し、俺は俺  
 で又自ら信ずるところあつて遣るんぢやから、折角の忠告ぢやか  
 らと謂うて、枉<sup>ま</sup>げて従ふ訳にはいかんで、のう。今度間がああ云  
 ふ目に遭うたから、俺は猶<sup>なほ</sup>更<sup>さら</sup>劇<sup>えら</sup>い目に遭はうと謂うて、心配し  
 てくれるんか、あ？」

はや言ふも益無しと観念して直道は口を開かず。

「そりや辱かたじけないが、ま、当分俺の軀からだは俺に委まかして置いてくれ」

彼は徐しづかに立上りて、

「些ちよつとこれから行いて来にやならん処があるで、寛ゆつくりして行くが可え

え」

忽そそくさ忙にじゆうまわしと二重外套を打被うちかつぎて出づる後より、帽子を持ちて送おく

れる妻は密ひそかに出先を問へるなり。彼は大いなる鼻を皺しわめて、

「俺が居ると面倒ぢやから、些ちよつと出て来る。可ええやうに言うての、

還かへしてくれい」

「へえ？ そりや困りますよ。貴方あなた、私わたしだつてそれは困るぢやあ

りませんか」

「まあ可えが」

「可<sup>よ</sup>くはありません、私は困りますよ」

お峯は足<sup>あし</sup>摩<sup>すり</sup>して迷惑を訴ふるなりけり。

「お前なら居ても可え。さうして、もう還るぢやらうから」

「それぢや貴方還るまでゐらしつて下さいな」

「俺が居ては還らんからじやが。早う行けよ」

さすがに争ひかねてお峯の渋々<sup>たたず</sup>佇めるを、見も返らで夫は驀<sup>まつし</sup>  
地<sup>ぐら</sup>に門<sup>かど</sup>を出でぬ。母は直道の勢<sup>おそ</sup>に怖れて先にも増してさぞや苛<sup>さいな</sup>

まるるならんと想へば、虎<sup>とら</sup>の尾をも履<sup>ふ</sup>むらんやうに覚えつつ歸り  
来にけり。唯<sup>と</sup>見れば、直道は手<sup>こまぬ</sup>を拱<sup>かしら</sup>き、頭<sup>た</sup>を低れて、在りけるま  
まに凝然と坐したり。

「もうお中食<sup>ひる</sup>だが、お前何をお上りだ」

彼は身<sup>み</sup>転<sup>じろぎ</sup>も為<sup>せ</sup>ざるなり。重ねて、

「直道<sup>おつか</sup>」と呼ばば、始めて覚<sup>おぼつか</sup>束<sup>おぼつか</sup>なげに顔を挙<sup>あ</sup>げて、

「阿母<sup>おつか</sup>さん！」

その術<sup>じゆつ</sup>無<sup>な</sup>き声<sup>こゑ</sup>は謂<sup>い</sup>知<sup>ひ</sup>らず母の胸を刺<sup>さ</sup>せり。彼はこの子の幼<sup>こ</sup>く

て善<sup>よ</sup>く病<sup>や</sup>める枕<sup>まくら</sup>頭<sup>もと</sup>に居<sup>ゐ</sup>たりし心地をそのままに覺<sup>おぼ</sup>えて、ほと

ほとつと寄<sup>よ</sup>らんとしたり。

「それぢや私はもう歸<sup>かへ</sup>ります」

「あれ何<sup>なん</sup>だね、未<sup>な</sup>だ可<sup>よ</sup>いよ」

異<sup>あや</sup>くも遽<sup>には</sup>に名<sup>な</sup>残<sup>ごり</sup>の惜<sup>を</sup>れて、今は得<sup>は</sup>も放<sup>な</sup>たじと心<sup>こころ</sup>牽<sup>ひ</sup>るるなり。

「もうお中食<sup>ひる</sup>だから、久<sup>く</sup>しぶりで御膳<sup>ごぜん</sup>を食<sup>く</sup>べて……」

「御膳も吭<sup>のど</sup>へは通りませんから……」

## 第二章

主人公なる間貫一が大学第二医院の病室にありて、昼夜を重傷に悩める外<sup>ほか</sup>、身边に事あらざる暇<sup>いとま</sup>に乗じて、富山に嫁ぎたる宮がその後の消息を伝ふべし。

一月十七日をもて彼は熱海の月下に貫一に別れ、その三月三日を扨<sup>えら</sup>びて富山の家に輿<sup>こしいれ</sup>入したりき。その場より貫一の失踪<sup>しつそう</sup>せしは、嶋沢<sup>しぎさわ</sup>一家の為に物化<sup>もつけ</sup>の邪魔<sup>じやま</sup>払<sup>はら</sup>たりしには疑<sup>うたがひ</sup>無<sup>な</sup>かりけれど、家内<sup>かない</sup>は挙<sup>こぞ</sup>りてさすがに騒動しき。その父よりも母よりも



宮は更に切なる誠を籠めて心痛せり。彼はただに棄てざる恋を棄てにし悔に泣くのみならで、寄辺あらぬ貫一が身の安否を慮りて措く能はざりしなり。

氣強くは別れにけれど、やがて歸り来んと頼めし心待も、終に空なるを曉りし後、さりとも今一度は仮初にも相見んことを願ひ、又その心の奥には、必ずさばかりの逢瀬は有るべきを、おのれと契りけるに、彼の行方は知られずして、その身の家を出づべき日は潮の如く迫れるに、遣方も無く漫惑ひては、常に鈍う思ひ下せる卜者にも問ひて、後には廻合ふべきも、今はなかなか文に便もあらじと教へられしを、筆持つは篤なる人なれば、長き長き怨言などは告来さんと、そののみは掌を指すばかりに待ち

たりしも、疑ひし卜者の言は不幸にも過たで、宮は彼の怨言をだに聞くを得ざりしなり。

ともかくにも今一目見ずば動かじと始に念ひ、それは慚はずなりてより、せめて一筆の便聞かずばと更に念ひしに、事は心と渾て違ひて、さしも願はぬ一事のみは玉を転ずらんやうに何等の障も無く抄取りて、彼が空く貫一の便を望みし一日にも似ず、三月三日は忽ち頭の上に跳り来れるなりき。彼は終に心を許し肌身を許せし初恋を擲ちて、絶痛絶苦の悶々の中に一生最も樂かるべき大礼を挙げ畢んぬ。

宮は実に貫一に別れてより、始めて己の如何ばかり彼に恋せしかを知りけるなり。

彼の出<sup>い</sup>でて歸らざる恋しさに堪<sup>た</sup>へかねたる夕、宮はその机に倚<sup>よ</sup>りて思ひ、その衣<sup>きぬ</sup>の人香<sup>ひとか</sup>を嗅<sup>か</sup>ぎて悶<sup>もだ</sup>え、その写真に頬<sup>ほ</sup>摩<sup>ぼ</sup>して憧<sup>あこが</sup>れ、彼若<sup>も</sup>し己<sup>おのれ</sup>を容<sup>い</sup>れて、ここに優<sup>たより</sup>き便<sup>きか</sup>をだに聞<sup>き</sup>せなば、親をも家をも振捨<sup>ただち</sup>て、直<sup>はし</sup>に彼に奔<sup>はし</sup>るべきものと念<sup>ゆい</sup>へり。結<sup>ゆい</sup>納<sup>のう</sup>の交<sup>かは</sup>されし日も宮は富山唯繼<sup>つま</sup>を夫と定めたる心はつゆ起らざりき。されど、己は終<sup>つひ</sup>にその家<sup>い</sup>に適<sup>ゆ</sup>くべき身<sup>あた</sup>たるを忘れざりしなり。

ほとほと自らその緒<sup>いとぐち</sup>を索<sup>もと</sup>むる能<sup>あた</sup>はざるまでに宮は心を乱<sup>あや</sup>しぬ。彼は別<sup>み</sup>れし後<sup>さを</sup>の貫<sup>み</sup>一<sup>さを</sup>をばさばかり慕<sup>あや</sup>ひて止まざりしかど、過<sup>あや</sup>を改<sup>まち</sup>め、操<sup>み</sup>を守<sup>さを</sup>り、覺悟<sup>み</sup>してその恋を全<sup>ま</sup>うせんとは計<sup>は</sup>らざりけるよ。真<sup>ま</sup>に彼の胸<sup>たの</sup>に恃<sup>たの</sup>める覺悟<sup>まこと</sup>としてはあらざりき。恋<sup>わ</sup>侘<sup>わ</sup>びつつも心を貫<sup>ま</sup>かんとにはあらず、由無<sup>ゆ</sup>き縁<sup>えん</sup>を組<sup>く</sup>まんとしたるよと思<sup>おも</sup>ひつつも、

強<sup>し</sup>ひて今更<sup>いな</sup>否<sup>な</sup>まんとするにもあらず、彼方<sup>かなた</sup>の恋<sup>こひ</sup>きを思<sup>おも</sup>ひ、こなたの富<sup>とみ</sup>めるを愛<sup>を</sup>み、自ら決<sup>き</sup>するところ無<sup>な</sup>く、為<sup>な</sup>すところ無<sup>な</sup>くして空<sup>むな</sup>き迷<sup>まよ</sup>ひに弄<sup>も</sup>はれつつ、終<sup>は</sup>に移<sup>うつ</sup>すべからざる三月三日<sup>きた</sup>の来<sup>き</sup>るに会<sup>あ</sup>へるなり。

この日<sup>ゆふべ</sup>よ、この夕<sup>ふ</sup>よ、更<sup>とこ</sup>けて床<sup>かさ</sup> 盃<sup>づき</sup>のその期<sup>ご</sup>に びても、怪<sup>あや</sup>むべし、宮<sup>みや</sup>は決<sup>き</sup>して富山<sup>ふ</sup>唯<sup>つ</sup>繼<sup>ま</sup>を夫<sup>つま</sup>と定<sup>つ</sup>めたる心<sup>こころ</sup>は起<sup>お</sup>らざるにぞありける、止<sup>ただ</sup>この人<sup>ひと</sup>を夫<sup>つま</sup>と定<sup>つ</sup>めざるべからざる我<sup>われ</sup>身<sup>み</sup>なるを忘<sup>わす</sup>れざりしかど。彼<sup>かれ</sup>は自ら謂<sup>おも</sup>へり、この心<sup>こころ</sup>は始<sup>は</sup>より貫<sup>くわん</sup>一<sup>いつ</sup>に許<sup>ゆる</sup>したるを、縁<sup>えん</sup>ありて身<sup>み</sup>は唯<sup>つ</sup>繼<sup>ま</sup>に委<sup>まか</sup>すなり。故<sup>ゆゑ</sup>に身<sup>み</sup>は唯<sup>つ</sup>繼<sup>ま</sup>に委<sup>まか</sup>すとも、心<sup>こころ</sup>は長<sup>なが</sup>く貫<sup>くわん</sup>一<sup>いつ</sup>を忘<sup>わす</sup>れずと、かく謂<sup>おも</sup>へる宮<sup>みや</sup>はここの心<sup>こころ</sup>事<sup>こと</sup>の不<sup>ふ</sup>徳<sup>とく</sup>なるを知<sup>し</sup>れり、されどこの不<sup>ふ</sup>徳<sup>とく</sup>のその身<sup>み</sup>に免<sup>まぬ</sup>か<sup>あた</sup>る能<sup>あた</sup>はざる約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>なるべきを信<sup>しん</sup>じて、

寧ろ深く怪むにもあらざりき。如此にして宮は唯繼の妻となりぬ。

はなむこぎみ

花聶君は彼を愛するに二念無く、彼を遇するに全力を挙げた

り。宮はその身の上の日毎輝き勝るまに、いよいよ意中の人と

わたくし

私すべき陰無くなりゆくを見て、愈よ楽まざる心は、夫の愛を承

ものう

くるに慵くて、唯機械の如く事ふるに過ぎざりしも、唯繼は彼の

ものい

言ふ花の姿、温き玉の容を一向に愛で悦ぶ余に、冷かに空き器

いだ

を抱くに異らざる妻を擁して、殆ど憎むべきまでに得意の顔を撫

ほとん

づるなりき。彼が一段の得意は、二箇月の後最愛の妻は妊りて、

みごも

なんし

翌年の春美き男子を挙げぬ。宮は我とも覚えず浅ましがりて、産

後を三月ばかり重く病みけるが、その癒ゆる日を竣たで、初子は

うひご

みまか

いと弱くて肺炎の為に歿りにけり。

子を生みし後も宮が色香はつゆ移はずして、自ら可惱き風情の  
おのづかなやまし ふぜい  
 添りたるに、夫が愛護の念は益深く、寵は人目の見苦きばかり  
そは つま ますます ちよう  
 弥よ加るのみ。彼はその妻の常に樂まざる故を毫も曉らず、始よ  
いよはは  
 り唯その色を見て、打沈みたる生得と都合点して多く問はざ  
うちしづ ひとりがてん  
 るなりけり。

かく怜まれつつも宮が初一念は動かんともせで、難有き人の  
いとし  
 情に負きて、ここに嫁ぎし罪をさへ歎きて止まざりしに、思はぬ  
なさけそむ とつ  
 子まで成せし過は如何にすべきと、躬らその容し難きを慙ぢて、  
あやまち いか みづか ゆる  
 悲むこと太甚かりしが、実に親の所憎にや堪へざりけん。その  
はなはだし にくしみ た  
 子の失せし後、彼は再び唯繼の子をば生まじ、と固く心に誓ひし  
う  
 なり。一二年の後、三年の後、四年の後まで異くも宮はこの誓を  
ふたとせ のち みとせ よとせ あやし

全うせり。

次第に彼の心は楽まずなりて、今は何の故にその嫁ぎたるかを自ら知るに苦めるなりき。くるし機械の如く夫を守り置物のやうに内に据られ、絶えて人の妻たる効も思出もあらで、かひ空く籠むなし鳥ろうちようの雲を望める身には、そのみの願なりし裕なる生活も、ゆたか富める家計も、土の如く顧るに足らず、却りてこの四年が間思ひに思ふばかりにて、熱海より行方知れざりし人の姿を田鶴見の邸内に見てしまで、彼は全く音沙汰をも聞かざりしなり。おとさた生家なる嶋沢にては薄々知らざるにもあらざりしかど、さる由無き事を告ぐるが如き愚なる親にもあらねば、宮のこれを知るべき便は絶れたりしなり。おろか

計らずもその夢寐に忘れざる姿を見たりし彼が思は幾計なりけんよ。饑餓たる者の貪り食ふらんやうに、彼はその一目にして四年の求むるところを求めんとしたり。饜かず、饜かず、彼の慾はこの日より益急になりて、既に自ら心事の不徳を以つて許せる身を投じて、唯快く万事を一事に換へて已まん、と深くも念じたり。

五番町なる鰐淵といふ方に住める由は、静緒より聞きつれど、むざとは文も通はせ難く、道は遠からねど、独り出でて彷徨ふべき身にもあらぬなど、克はぬ事のみなるに苦かりけれど、安否を分かざりし幾年の思に較ぶれば、はや囊の物を搜るに等しかるをと、その一筋に慰められつつも彼は日毎の徒然を憂きに堪へ



ざる余、あまり我心を遺る方無く明すべき長き長き文を書かんと思立ちぬ。そは折を得て送らんとにもあらず、又逢うては言ふ能はざるを言はしめんとにもあらず、止だかくも儚はかなき身の上と切なき胸の内とを独自ひとりら慇うつたへんとてなり。

## (二) の二

宮は貫一が事を忘れざるとともに、又長く熱海の悲き別を忘る能はざるなり。あた更に見よ。歳々としどし廻来めぐりくる一月十七日なる日は、その悲き別を忘れざる胸に烙やきがねして、彼の悔を新にするにあらずや。「十年後の今月今夜も、僕のちの涙で月は曇らして見せるから、月が

曇つたらば、貫一は何処かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐると想ふが可い」

掩へども宮が耳は常にこの声を聞かざるなし。彼はその日のその夜に会ふ毎に、果して月の曇るか、あらぬかを試しに、曾てその人の余所に泣ける徴もあらざりければ、さすがに恨は忘れしかと、それには心安きにつけて、諸共に今は我をも思はでや、さては何処に如何にしてなど、更に打歎かるるなりき。

例のその日は四たび廻りて今日しも来りぬ。晴れたりし空は午後より曇りて少く吹出でたる風のいと寒く、凡ならず冷ゆる日なり。宮は毎よりも心煩きこの日なれば、かの筆採りて書続けんと為たりしが、余に思乱るればさるべき力も無くて、いと

どしく紛れかねてゐたり。

ますま

益す寒威の募るに堪へざりければ、遽にはかに煖炉だんろを調ぜしめて、彼

は西洋間うつつに徙りぬ。尽く窓帷ことごとカーテンを引きたる十畳まの間は寸隙すんげきもあ

らず裏つつまれて、火氣の漸く春を蒸すところに、宮は体たいを胖ゆたかに友

禪んちりめん縮緬ながじゅばんの長襦袢つまの袂ふみひらを蹈な披がきて、緋ひの紋緞子もんどんす張らくの楽椅

子いすに凭りて、心の影そこの其処そこに映るを眺むらんやうに、その美き目

をば唯白く坦たひらなる天井に注ぎたり。

夫の留守にはこの家の主あるじとして、彼は事つかふべき舅姑きゆうこを戴いたかず、

氣兼こじうとすべき小姑かかを抱あしてへず、足手絡まとひの幼きも未だ有らずして、

一箇ひとりの仲なか働かと両箇ふたりの下婢かひとに万般よろづの煩わづらはしきを委まかせ、一日何なの為

すべき事も無くて、出いづるに車あり、膳ぜんには肉あり、しかも言ふ

ことは皆聴れ、為すことは皆悦よろこばるる夫を持てるなど、彼は今若き妻の黄金時代をば夢むる如く樂めるなり。實げに世間の娘の想ひに想ひ、望みに望める絶頂は正まさに己おのれのこの身の上なる哉かな、と宮は不覺胸そぞろに浮べたるなり。

嗟あ乎、おのれもこの身の上を願ひに願ひし余あまりに、再び得難き恋人を棄てにしよ。されども、この身の上に窮きはめし樂たのしみも、五年の昔なりける今日の日に窮きはめし悲かなしみに易ふべきものはあらざりしを、と彼は苦しげに太息ためいきしたり。今にして彼は始めて悟りぬ。おのれのこの身の上を願ひしは、その恋人と俱ともに同じき樂たのしみを享けんと願ひしに外ならざるを。若もし身の樂たのしみと心の樂たのしみとを併あはせう享くべき幸さちなく、必ずその一つを択えらぶべきものならば、孰いづれを取るべきかを

知ることの晩おそかりしを、遣方やるかたも無く悔ゆるなりけり。

この寒き日をこの煖あたき室かに、この焦るる身をこの意中の人に並

べて、この誠をもてこの恋しさを語らば如何いかに、と思到れる時、

宮は殆ど裂けぬべく胸を苦く覚えて、今の待つ身は待たざる人を

待つ身なる、その口惜くちしさを悶もえては、在るにも在られぬ椅子を

離れて、歩み寄りたる窓の外面そとを何心無く打見遣れば、いつしか

雪の降出でて、薄白く庭に敷けるなり。一月十七日なる感はいと

劇はげく動きて、宮は降頻ふりしきる雪に或言あることばを聴くが如く佇たたずめり。折

から唯繼かへりきたは還来りぬ。静に啓あけたる闔ドアの響は絶したたか

には入いらざりき。氷の如く冷徹ひえわたりたる手をわりなく懷ふところに差入れ

らるるに驚き、咄嗟あなやと見向かんとすれば、後より緊しかと抱かかへられた

れど、夫の常に飮める香水の薫は隠るべくもあらず。

「おや、お歸来でございましたか」

「寒かつたよ」

「大相降つて参りました、さぞお困りでしたらう」

「何だか知らんが、むちやくちやに寒かつた」

宮は樂椅子を夫に勧めて、躬は煖炉の薪をべたり。今の今

まで貫一が事を思窮めたりし心には、夫なる唯繼にかく事ふる

も、なかなか道ならぬやうにて屑からず覚ゆるなり。窓の外に降

る雪、風に乱るる雪、梢に宿れる雪、庭に布く雪、見ゆる限の白

妙は、我身に積める人の怨の丈かとも思ふに、かくてあること

の疚しさ、切なさは、脂を搾らるるやうにも忍び難かり。されど

も、この美人の前にこの雪を得たる夫の得意は限無くて、その脚あしを八文字に踏ふみ展はけ、漸やうやく暖おとまれる頤がを突つき反そして、

「ああ、降る降る、面白い。かう云ふ日は寄鍋よせなべで飲のむんだね。寄鍋を取もつて貰もらはう、寄鍋が好い。それから珈琲カフェを一つ拵こしらへてくれ、コニヤツクを些ちと余計に入れて」

宮の行かんとするを、

「お前、行かんでも可いぢやないか、要いる物を取寄せてここで拵こしらへなさい」

彼の電鈴でんれいを鳴して、火の傍そばに寄来ると齊ひとしく、唯繼はその手を取りて小脇こわきに挟はさみつ。宮は憚よろこべる気色も無くて、彼の為すに任ずるのみ。

「おまへどうした、何を鬱ふさいでゐるのかね」

引寄せられし宮はほとほと仆たふれんとして椅子に支へられたるを、

唯継は鼻も摩するばかりにその顔を差さ覗しのぞきて余念も無く見入りつ

つ、

「顔の色が甚はなはだ悪いよ。雪で寒いんで、胸でも痛むんか、頭痛で

もするんか、さうも無い？ どうしたんだな。それぢや、もつと

爽はつきり然してくれんぢや困るぢやないか。さう陰気だと情合じようあひが薄い

やうに想はれるよ。一体お前は夫婦の情が薄いんぢやあるまいか

と疑ふよ。ええ？ そんなことは無いかね」

忽たちまどアち闔あの啓くと見れば、仲なかばたらき働の命ぜし物を持もちきた来れるなり。

人目を憚はばからずその妻を愛するは唯継が常なるを、見苦しと思ふ宮



はその傍そばを退のかんとすれど、放たざるを例の事とて仲働は見ぬ風  
 しつつ、器具と壇ポトルとをテエブルに置きて、直ちきに退まかり出いでぬ。かく  
 執しゅう念うねく愛せらるるを、宮はなかなか憂うくも浅ましくも思ふなり  
 けり。

雪は風を添へて搔かき乱みだし搔ふり乱しきし降頻りつつ、はや日暮れなん  
 とするに、楽き夜の漸やうく来きたれるが最いと辱かたじけなき唯繼の目尻なり。  
 「近頃はお前別して鬱ひつこいでをるやうぢやないか、俺おれにはさう見え  
 るがね。さうして内にばかり引籠ひっこんでをるのが宜よろくないよ。この  
 頃は些ちよつとも出掛けんぢやないか。さう因いん循じゆんしてをるから、益ます  
 す陰気になつて了ふのだ。この間も鳥柴としばの奥さんに会つたら、さ  
 う言つてゐたよ。何な為ぜ近頃は奥さんは些ちよつともお見えなさらんのだ

らう。芝居ぐらゐにはお出掛になつても可ささうなものだが、全<sup>ま</sup>るつきり

然

影も形もお見せなさらん。なんぼお大事になさるつて、そ

んなに仕舞<sup>しまひ</sup>込んでお置きなさるものぢやございません。慈善の為

に少しは衆<sup>ひと</sup>にも見せてお遣<sup>や</sup>んなさい、なんぞと非常に遣られたぢ

やないか。それからね、知つてをる通り、今度の選挙には実業家

として福<sup>ふくづみ</sup>積が当選したらう。俺も大<sup>おほ</sup>いに与<sup>あづか</sup>つて尽力したんさ。

それで近日当選祝があつて、それが済<sup>すみ</sup>次第<sup>しだい</sup>別に慰労会と云ふや

うな名で、格別尽力した連<sup>れんじゆう</sup>中を招待するんだ。その席へは令

夫人携帯といふ訳なんだから、是非お前も出なければならん。驚

くよ。俺の社会では富山の細君と来たら評判なもんだ。会つたこ

との無い奴まで、お前の事は知つてをるんさ。そこで、俺は実は

自慢でね、さう評判になつて見ると、軽々しく出行であるかれるのも面白くない、余り顔を見せん方が見識よが好いけれど、然し、近頃のやうに籠こもつてばかり居をるのは、第一衛生におまへ良くない。実は俺は日曜毎にお前を連れて出たいんさ。おまへの来た当座はさうであつたぢやないかね。子供を産んでから、さう、あれから半はんと年しばかり経たつてからだよ。余り出なくなつたのは。それでも随分彼地あちこち此地出たぢやないかね。

善し、珈琲カフェ出来たか。うう熱い、旨うまい。お前もお飲み、これを半分上げやうか。沢山だ？ それだからお前は冷淡で可かんと謂ふんさ。ぢや、酒の入らんのを飲むと可い。寄鍋は未まだか。うむ、彼方あつちに支度がしてあるから、来たら言ひに来る？ それは善い、

西洋室の寄鍋なんかは風流でない、あれは長火鉢ながひばちの相對さしむかひに限るんさ。

可いかね、福積の招待しょうだいには吃驚びつくりさせるほど美しくして出て貰はなけりやならん。それで、着物だ、何か欲ければ早速こしら拵へやう。おまへが、これならば十分と思ふ服装なりで、隆りゆうとして推出すんだね。さうしてお前この頃は余り服装なりにかまはんどやないか、可かんよ。いつでもこの小紋の羽織ねぼの寐恍ねぼけたのばかりは恐れるね。何為なぜあの被風ひふを着ないのかね、あれは好く似合ふにな。

あさつて 明後日は日曜だ、何処どこかへ行かうよ。その着物を見に三井へでも行かうか。いや、さうさう、柏原かしわばらの奥さんが、お前の写真あしたを是非欲いと言つて、会ふ度たびに晤あひまく催促するんで克かなはんよ。明日

は用が有つて行かなければならんのだから、持つて行かんと拙い<sup>まづ</sup>て。未だ有つたね、無い？ そりや可かん。一枚も無いんか、そりや可かん。それぢや、明後日<sup>あさつて</sup>写しに行かう。直と若返つて二人で写すなんぞも可いぢやないか。

善し、寄鍋が来た？ さあ行かう」

夫に引添ひて宮はこの室を出でんとして、思ふところありげに姑<sup>しばら</sup>く窓の外面<sup>そとも</sup>を窺<sup>う</sup>ひたりしが、

「どうしてこんなに降るのでせう」

「何を下らん<sup>くだ</sup>ことを言ふんだ。さあ、行かう行かう」

### 第三章

宮は既に富むと裕ゆたかなるとに饜あきぬ。抑も彼がこの家に嫁とつぎしは、  
 惑まどひ 深ふかき娘氣の一図に、榮耀榮華えいようの欲するままなる身分を願ふ

を旨とするなりければ、始より夫の愛情の如きは、有るも善し、  
 有らざるも更に善しと、殆ど無用の物のやうに輕めたりき。今や  
 その願足りて、しかも遂に饜つひきたる彼は弥いよいままつはるる愛情の煩わづらはしき  
 に堪たへずして、寧ろ影を追ふよりも儚はかなき昔の恋を思ひて、私ひそに樂  
 むの味あるを覚ゆるなり。

かくなりてより彼は自ら唯繼の面前まへを厭いとひて、寂く垂たれこ籠めては、  
 随意に物思ふを憚よろこびたりしが、図らずも田鶴見たづみの邸やしきうち内に貫一  
 を見しより、彼のさして昔に変わぬ一介の書生風なるを見しより、

ひとたび  
一度は絶えし恋ながら、なほ冥々めいめいに行末望あるが如く、さるは、  
彼が昔のままの容かたちなるを、今もその独ひとりを守りて、時の到るを待つ  
らんやうに思おもひな做さるるなりけり。

その時は果して到るべきものなるか。宮は躬みづからの心の底を叩たたきて、  
答を得るに沮はばみつつも、さすがに又己おのれにも知れざる秘密の潜める  
心地して、一面には覺おぼつか束なくも、又一面にはとにもかくにも信  
ぜらるるなり。

すなは  
便ち宮の夫の愛を受くるを難たへがた堪く苦しと思知りたるは、彼の  
写真の鏡面レンズの前に悶もんぜつ絶せし日よりにて、その恋しさに取迫とりつめて  
は、いでや、この富めるに饜ゆたかき、裕なるに倦うめる家を棄つべきか、  
棄てよとならば遅ためらはじと思へるも屡しばしば々なりき。唯ただあへ敢てこれを

為<sup>せ</sup>ざるは、窃<sup>ひそ</sup>に望<sup>か</sup>は繋<sup>な</sup>けながらも、行くべき方<sup>かた</sup>の怨<sup>うら</sup>を解<sup>か</sup>かざるを  
 おそ  
 虞<sup>ゆゑ</sup>る故<sup>ゆゑ</sup>のみ。

素<sup>もと</sup>より宮は唯繼を愛せざりしかど、決してこれを憎むとはあ  
 らざりき。されど今はしも正にその念は起れるなり。自ら謂<sup>おも</sup>へら  
 く、吾<sup>わが</sup> 夫<sup>をつと</sup>こそ当時恋と富との値<sup>あたひ</sup>を知らざりし己を欺<sup>む</sup>き、空<sup>むなし</sup>く  
 輝ける富を示して、售<sup>う</sup>るべくもあらざりし恋を奪<sup>う</sup>ひけるよ、と悔  
 の余はかかる恨をも他<sup>ひと</sup>に被<sup>き</sup>せて、彼は己<sup>おのれ</sup>を過<sup>あや</sup>りしをば、全く夫の  
 罪<sup>な</sup>と為<sup>な</sup>せり。

この心なる宮はこの一月十七日に会ひて、この一月十七日の雪  
 に会ひて、いとどしく貫一が事の忍<sup>しの</sup>ばるるに就<sup>つ</sup>けて転<sup>うた</sup>た悪人の夫  
 を厭<sup>は</sup>ふこと甚<sup>はな</sup>だし。無<sup>む</sup>辜<sup>こ</sup>の唯繼はかかる今宵<sup>このし</sup>の樂<sup>み</sup>を授<sup>づ</sup>くこの美<sup>み</sup>き



妻を拝するばかりに、有程あるほどの誠を捧げて、蜜みつよりも甘き言ことばの数々を咄ささやきて止まざれど、宮が耳には人の声は聞えずして、雪の音のみぞいと能く響よきたる。

その雪は明方になりて歇やみぬ。乾坤けんこんの白きに漂ひて華麗はなやかに差出でたる日影は、漲みなぎるばかりに暖き光を鋪しきて終日ひねもす輝きければ、七分の雪はその日に解けて、はや翌日は往来ゆききの妨碍さまたげもあらず、処々ところどころの泥濘ぬかるみは打続く快晴の天そらに曝さらされて、刻々に乾かわき行くなり。

この雪の為に外出そとでを封ぜられし人は、この日和ひよりとこの道とを見て、皆怵こはへかねて昨日きのふより出でしも多かるべし。まして今日となりては、手置よろしの宜よろしからぬ横町、不性なる裏通、屋敷町の小路など

の氷れる雪の九十九折、或は捏返せし汁粉の海の、差掛りて難  
つづらをりあるこねかへしるこ  
 儀を極むるとは知らず、見渡す町通の乾々干に固れるに唆か  
きはまちとほりからから固たまそその  
 されて、控へたりし人の出でざるはあらざらんやうに、往來の常  
しきり  
 より頻なる午前十一時といふ頃、屈み勝に疲れたる車夫は、泥の  
ころもなやままろばくろあやあづま  
 粉衣掛けたる車輪を可惱しげに転して、黒綾の吾妻コオト着て、  
てついろちりめんづきんえりいそぢいやし  
 鉄色縮緬の頭巾を領に巻きたる五十路に近き賤からぬ婦人を  
かた  
 載せたるが、南の方より芝飯倉通に來かかりぬ。  
とあるなにかしなまがき  
 唯有る横町を西に切れて、某の神社の石の玉垣に沿ひて、だ  
のほしげふさ  
 らだらと上る道狭く、繁き木立に南を塞がれて、残れる雪の夥  
だしどろまじりくだんえいえいひきあ  
 多きが泥交に踏散されたるを、件の車は曳々と挽上げて、  
とつきどべいゆゆかど  
 取着に土塀を由々しく構へて、門には電燈を掲げたる方にぞ入り

ける。

こは富山唯繼が住居すまひにて、その女客は宮が母なり。あるじとく主は疾に会社に出勤せし後にて、例刻きたに来れる髪結の今方かへりゆ帰行きて、まだその跡も掃かぬ程なり。もんはぶたへ紋羽二重の肉色にくいろがのこ鹿子を掛けたる大円おほまる鬚わげより水は滴たるばかりに、玉の如き喉のどを白絹のハンカチーフに巻きて、風邪かぜ気などにや、連しきりに打咳うちしはぶきつつ、宮は奥より出迎に見えぬ。その故ゆゑとも覚えず余に著き面おもやつれ羸れは、唯一目に母が心おどろかを驚せり。

ひま閑ある身なれば、宮は月々生家さとなる両親を見舞ひ、母も同じほど訪とひ音づるるをば、此上こよな無き隠居の保養と為るなり。まこと信に女親の心は、娘の身の定りて、その家栄え、その身安泰に、しかもい

みじう出世したる姿を見るに増して樂まざる事はあらざらん。  
 彼は宮を見る毎に大なる手柄をも成したらんやうに吾が識れるほ  
 どの親といふ親は、皆才覚無く、仕合薄くて、有様は氣の毒  
 なる人達哉、と漫に己の誇らるるなりけり。されば月毎に彼が富  
 山の門を入るは、正に人の母たる成功の凱旋門を過る心地もす  
 なるべし。

可懷きと、嬉きと、猶今一つとにて、母は得々と奥に導れ  
 ぬ。久く垂籠めて友欲き宮は、拯を得たるやうに覚えて、有るま  
 じき事ながら、或は密に貫一の報を齎せるにはあらずやなど、枉  
 げても念じつつ、せめては愁に閉ぢたる胸を姑くも寛うせんとす  
 るなり。

母は語るべき事の日頃蓄へたる数々を措きて、先づ宮が血色の  
 氣遣きづかはしく衰へたる故を詰りぬ。なじ同じ事を夫にさへ問れしを思合  
 せて、彼はさまでに己の羸やつれたるを惧おそれつつも、

「さう？　でも、何処どこも悪い所なんぞ有りはしません。余あんまり体を  
 動かさないから、その所為せゐかも知れません。けれども、この頃は  
 時々氣が鬱ふさいで鬱ふさいで耐たまらない事があるの。あれは血の道と謂いふ  
 んでせうね」

「ああ、それは血の道さ。私なんぞも持病にあるのだから、やつ  
 ぱりさうだらうよ。それでも、それで痩せるやうぢや良くないの  
 だから、お医者に診みてもらふ方が可いよ、放つて措おくから畢ひつきよ  
 竟う持病にもなるのさ」

宮は唯<sup>うなづ</sup>頷きぬ。

母は不図思起してや、さも慌<sup>あわ</sup>忙<sup>ただ</sup>しげに、

「後が出来たのぢやないかい」

宮は打笑<sup>うちあへ</sup>みつ。されども例の可羞<sup>はづか</sup>しとはあらで傍<sup>かたはら</sup>痛<sup>いた</sup>き余

を微<sup>ほの</sup>見<sup>み</sup>せしやうなり。

「そんな事はありませんわ」

「さう何<sup>い</sup>日<sup>つ</sup>までも沙汰<sup>さた</sup>が無くちや困るぢやないか。本当に未<sup>ま</sup>だそ

んな様子は無いのかえ」

「有りはしませんよ」

「無いのを手柄にでもしてゐるやうに、何だね、一人はもう無く  
てどうするのだらう、先へ寄つて御覧、後悔を為るから。本当な

ら二人ぐらゐ有つて好い時分なのに、あれきり後が出来ないところを見ると、やつぱり体が弱いのだね。今の内養生して、丈夫にならなくちや可けないよ。お前はさうして平気で、いつまでも若くて居る気なのだらうけれど、本宅の方なんぞでも後が後がつて、どんなに待兼ねてお在<sup>いで</sup>だか知れはしないのだよ。内ぢや又阿父<sup>おとつ</sup>さんは、あれはどうしたと謂<sup>い</sup>ふんだらう、情無い奴だ。子を生み得ないのは女の恥だつて、慍<sup>おこ</sup>りきつてゐなさるくらゐなのに、当人のお前と云つたら、可厭<sup>いや</sup>に落着いてゐるから、憎らしくてなりはしない。さうして、お前は先<sup>せん</sup>の内は子供が所好<sup>すき</sup>だつた癖に、自分の子は欲くないのかね」

宮もさすがに当惑しつつ、

「欲くない事はありませんけれど、出来ないものは為方が無いわ」

「だから、何でも養生して、体を丈夫にするのが専だよ」

「体が弱いとお言ひだけれど、自分には別段ここが悪いと思ふところも無いから、診てもらふのも変だし……けれどもね、阿母さん、私は疾から言はう言はうと思つてゐたのですけれど、実は氣に懸る事があつてね、それで始終何だか心持が快くないの。その為で自然と体も良くないのかしらんと思ふのよ」

母のその目は瞪り、その膝は前み、その胸は潰れたり。

「どうしたのさ！」

宮は俯きたりし顔を寂しげに起して、



「わたし私ね、去年の秋、貫かんいつ一さんに逢つてね……」

「さうかい！」

己だに聞くを憚はばかる秘密の如く、母はその応こたふる声をも潜めて、  
まして四辺あたりには油断もあらぬ氣勢けはひなり。

「どこ何処で」

「内の方へも全然爾来まるきめの様子には知れないの？」

「ああ」

「ちつと些ちつとも？」

「ああ」

「どうしてゐると云ふやうな話も？」

「ああ」

かく纔わづかに應ふるのみにて、母は自ら湧わかせる万感の渦うちの裏に陥りてぞゐたる。

「さう？ 阿父おとつさんは内証で知つてお在いでぢやなくて？」

「いいえ、そんな事は無いよ。何処で逢つたのだえ」

宮はその梗概あらましを語れり。聴ゐる母は、彼の事無くその場のがを遁れ得てし始末つまびらを詳かにするを俟まちて、始めて重荷を下したるやうにほと息を咆つきぬ。実に彼は熱海の梅園にて膩汗あぶらあせを搾しぼられしついで次手悪さを思合せて、憂き目を重ねし宮が不幸を、不愍ふびんとも、惨いぢらしとも、今更に親心を傷いたむるなりけり。されども過ぎしその事よりは、為に宮が前途に一大障礙しょうがいの或あるは来るべきを案じて、母はなかなか心穩こころおだやかならず、

「さうして貫一はどうしたえ」

「お互に知らん顔をして別れて了つたけれど……」

「ああそれから？」

「それきりなのだけれど、私は氣になつてね。それも出世して立派になつてゐるのなら、さうも思はないけれど、つまらない風采<sup>なり</sup>をして、何だか大變羸<sup>やつ</sup>れて、私も極<sup>きまり</sup>が悪かつたから、能くは見なかつたけれど、氣の毒のやうに身<sup>みすばらし</sup>窄<sup>み</sup>い様子だつたわ。それに、聞けばね、番町の方の鰐<sup>わに</sup>淵<sup>ぶち</sup>とかいふ、地面や家作なんぞの世話をしてゐる内に使はれて、やつぱり其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>に居るらしいのだから、好い事は無いのでせう、ああして子供の内から一<sup>いつしよ</sup>処<sup>こ</sup>に居た人が、あんなになつてゐるかと思ふと、昔の事を考へ出して、私は何だ

か情無くなつて……」

彼は襦袢じゆばんの袖そでの端はしに窃そと睚まぶたをすりて、

「好い心持はしないわ、ねえ」

「へええ、そんなになつてゐるのかね」

母の顔色あやしも異あやしき寒あやしさにや襲あやしはるると見えぬ。

「それまでだつて、憶おもひだ出おもひださない事は無いけれど、去年逢つてから

は、毎日のやうに氣になつて、可いや厭いやな夢なんぞを度々たびたび見るの。

おとつ 阿父おとつさんや、阿母おつかさんに会ふ度に、今度は話さう、今度は話さう

と思ひながら、私の口からは何と無く話し難にくいやうで、実は今ま

で言はずにゐただけけれど、その事が初しよつちゆう中終苦になる所せみ為せみで氣

を傷いためるから体にも障さはるのぢやないかと、さう想ふのです」

おもひこら  
思凝

せるやうに母は或方を見据ゑつつ、言は無く<sup>ことば</sup>て頷<sup>うなづ</sup>き  
たり。

「それで、私は阿母さんに相談して、貫一さんをどうかして上げ  
たいの——あの時にそんな話も有つたのでせう。さうして依旧<sup>やっぱりし</sup>嶋<sup>ぎさわ</sup>

沢の跡は貫一さんに取<sup>と</sup>りて下さいよ、それではなくては私の氣が  
済まないから。今までは行方<sup>ゆきがた</sup>が知れなかつたから為方がないけれ

ど、聞合<sup>きあ</sup>せれば直<sup>ちき</sup>に分るのだから、それを抛<sup>は</sup>つて措<sup>お</sup>いちや此方<sup>こつち</sup>が

悪いから、阿父さんにでも会つて貰<sup>もら</sup>つて、何とか話を付けるやう

にして下さいな。さうして従<sup>これまでもほり</sup>来通に内で世話を<sup>し</sup>て、どんな

にもあの人の目的を達<sup>た</sup>し<sup>し</sup>して、立派<sup>うち</sup>に吾家の跡を取<sup>と</sup>りて下さい。

私はさうしたら兄弟<sup>さかづき</sup>の盃<sup>さ</sup>をして、何処<sup>さ</sup>までも生家の兄<sup>と</sup>さんで、未

始終力になつて欲いわ」

宮がこの言は決して内に自ら欺き、又敢て外に他を欺くにはあらざりき。影とも儚く隔の関の遠き恋人として余所に朽さんより、近き他人の前に己を殺さんぞ、同く受くべき苦痛ならば、その忍び易きに就かんと冀へるなり。

「それはさうでもあらうけれど、随分考へ物だよ。あのひとの事なら、内でも時々話が出て、何処にどうしてゐるかしらんつて、案じないぢやないけれど、阿父さんも能くお言ひのさ、如何に何だつて、余り貫一の仕打が憎いつて。成程それは、お前との約束ね、それを反古にしたと云ふので、齡の若いものの事だから腹も立たう、立たうけれど、お前自分の身の上も些は考へて見るが可

いわね。子供の内からああして世話になつて、全く内のお蔭でもかくもあれだけにもなつたのぢやないか、その恩も有れば、義理も有るのだらう。そこ所<sup>どこ</sup>を些<sup>ちつ</sup>と考へたら、あれぎり家出をして、了ふなんて、あんなまあ面<sup>つら</sup>抵<sup>あて</sup>がましい仕打振をするつてが有るものかね。

それぢやあの約束を反古にして、もうお前には用は無いからどうでも独<sup>ひとり</sup>で勝手に為るが可い、と云ふやうな不人情なことを仮<sup>かり</sup>初<sup>め</sup>にも為たのぢやなし、鴨沢の家は譲らうし、所望<sup>のぞみ</sup>なら洋行も為<sup>さ</sup>せやうとまで言ふのぢやないか。それは一時は腹も立たうけれど、好く了簡して前後を考へて見たら、万更訳の解らない話をしてゐるのぢやないのだもの、私達の顔を立ててくれたつて、そん

なに罰ばちも当りはしまいと思ふのさ。さうしてお刺まけに、阿父さんから十分に訳を言つて、頭を低さげないばかりにして頼んだのぢやないかね。だから此方こつちには少しも無理は無はずい筈なのに、貫一あんまが余り身の程を知らな過すぎるよ。

それはね、阿父さんが昔あの人おんがへしの親の世話になつた事があるさうさ、その恩返ゆきどこなら、行処ゆきどこの無からい軀からだを十五の時から引取つて、高等学校を卒業するまでに仕上げたから、それで十分だらうぢやないか。

全く、お前、貫一の為方しかたは増長してゐるのだよ。それだから、阿父さんだつて、私だつて、あゝされて見ると決して可愛かはゆくはないのだからね、今更此方こつちから搜出して、とやかう言ふほどの事は



ありはしないよ。それぢや何ぼ何でも不見識とやらぢやないか」  
 その不見識とやらを嫌きらふよりは、別に嫌きらふべく、懼おそるべく、警いまし  
 むべき事あらずや、と母は私ひそおもひはかに慮おれるなり。

「阿父おとつさんや阿母おつかさんの身になつたら、さう思ふのは無理も無いけれど、どうもこのままぢや私が氣が済まないんですもの。今になつて考へて見ると、貫一さんが悪いのでなし、阿父さん阿母さんが悪いのでなし、全く私一人が悪かつたばかりに、貫一さんには阿父さん阿母さんを恨ませるし、阿父さん阿母さんには貫一さんを悪く思はせたのだから、やつぱり私が仲へ入つて、元々通に為なければ済まないと思ふんですから、貫一さんの悪いのは、どうぞ私に免じて、今までの事は水に流して了つて、改めて貫一さ

んを内の養子にして下さいな。若しさうなれば、私もそれで苦勞が滅<sup>なくな</sup>るのだから、きつと体も丈夫になるに違無<sup>な</sup>いから、是非さう云ふ事に阿父さんにも頼んで下さいな、ねえ、阿母さん。さうして下さらないと、私は段々体を悪くするわ」

かく言出でし宮が胸は、ここに尽<sup>ことごと</sup>くその罪を懺悔<sup>ざんげ</sup>したらんやうに、多少の涼きを覚ゆるなりき。

「そんなに言ふのなら、還<sup>かへ</sup>つて阿父さんに話をして見やうけれど、何もその所為<sup>せゐ</sup>で体が弱くなると云ふ訳も無かりさうなものぢやないか」

「いいえ、全くその所為よ。始終そればかり苦になつて、時々考<sup>た</sup>へ込むと、実に耐<sup>たま</sup>らない心持になることがあるんですもの、この間

逢ふ前まではそんなでもなかつたのだけれど、あれから急に——  
 さうね、何と謂いつたら可いのだらう——私があんなに不仕合ふしあはせな  
 身分にしてしま了つたとさう思つて、さぞ恨んでゐるだらうと、氣の  
 毒のやうな、可おそろし恐いやうな、さうして、何と無く私は悲くてね。  
ほか外には何も望は無いから、どうかあの人だけは元のやうにして、  
 あの優しい氣立で、未始終阿父さんや阿母さんの世話をして貰つた  
 ら、どんなに嬉うれしからうと、そんな事ばかり考へては鬱ふさいであるの  
 です。いづれ私からも阿父さんに話をしますけれど、差さしあたり当阿  
 母さんから好くこの訳をさう言つて、本当に頼んで下さいな。私  
 二三日の内に行きますから」  
 されども母は投首なげくびして、

「私の考かんがへ量ぢや、どうも今更ねえ……」

「阿母さんは！ 何もそんなに貫一さんを悪く思はなくたつて可いわ。折角話をして貰はうと思ふ阿母さんがさう云ふ氣ぢや、とても阿父さんだつて承知をしては下さるまいから……」

「お前がそれまでに言ふものだから、私は不承知とは言はないけれど……」

「可いの、不承知なのよ。阿父さんもやつぱり貫一さんが憎くて、大方不承知なんでせうから、私は憑あて拠あてにはしないから、不承知なら不承知でも可いの」

涙なみだぐ含なみだぐみつつ宮みやが焦せきごころ心こころになれるを、母は打惑うちごころひて、

「まあ、お聞きよ。それは、ね、……」

「阿母さん、可いわ——私、可いの」

「<sup>よ</sup>可かないよ」

「可かなくつても可いわ」

「あれ、まあ、……何だね」

「どうせ可いわ。私の事はかまつてはおくれでないのだから……」

我にもあらで<sup>ほとぼし</sup>迸る泣声を、つと袖に<sup>おき</sup>抑へても、宮は<sup>せき</sup>急来る涙を

<sup>とど</sup>止めかねたり。

「何もお前、泣くことは無いぢやないか。可笑<sup>をかし</sup>な人だよ、だから

お前の言ふことは解つてゐるから、内へ歸つて、善く話をした上で……」

「可いわ。そんなら、さうで私にも了<sup>りようけん</sup>簡があるから、どうと

も私は自分で為るわ」

「自分でそんな事を為るなんて、それは可くないよ。かう云ふ事は決してお前が自分で為ることぢやないのだから、それは可けませんよ」

「……………」

「歸つたら阿父おとつさんに善く話を為やうから、……泣くほどの事は無いぢやないかね」

「だから、阿母おつかさんは私の心を知らないのだから、  
頼たのみ効がひが無ない、と謂いふのよ」

「多度たんとお言ひな」

「言ふわ」

真顔作れる母は火鉢の縁に丁と煙管を撃けば、他行持の暫くから乾されて弛みし雁首はほつくり脱けて灰の中に舞込みぬ。

## 第四章

頭部に受けし貫一が挫傷は、危くも脳膜炎を続発せしむべかりしを、肢体に数個所の傷部とともに、その免るべからざる若く干の疾患を得たりしのみにて、今や日増に康復の歩を趁ひて、可艱しげにも自ら起居を扶け得る身となりければ、一日一夜を為す事も無く、ベッドの上に静養を勉めざるべからざる病院の無聊をば、殆ど生きながら葬られたらんやうに倦み困じつつ、彼

は更にこの病と相關する如く、関せざる如く併発したる別様の苦悩の為に侵さるるなりき。

主治医も、助手も、看護婦も、附添婆つきそひばばも、受附も、小使も、ないし乃至患者の幾人も、皆目を側そばめて彼と最も密なる關係あるべきを

疑はざるまでに、満枝の頻しげしばまひ繁病を訪ひ来るなり。三月にわたる

久きをかの美き姿の絶えず出しゆつにゆう入するなれば、噂うはさおのづは自から院内

に播ひろまりて、博士の某ぼうさへ終に唆つひそそのかされて、垣間見かいまみの歩をここに枉まげ

られしとぞ伝はべへ侍る。始の程は何者の美形びけいとも得知れざりしを、

医員の中に例の困くるしめられしがありて、名著なうての美人クリイムと洩もらせ

しより、いとど人の耳を驚かし、目を悦よろこばす種とはなりて、貫一が

浮名もこれに伴ひて唱はれけり。



さりととは彼の暁るべき由無けれど、何の廉かどもあらむに足近く訪  
 はるるを心憂く思ふ余に、一度ならず満枝に向ひて言ひし事もあ  
 りけれど、見舞といふを陽おもてにして訪ひ来るなれば、理として好意  
 を拒絶すべきにあらず。さは謂いへ、こは情なさけの掛かけ※と知れば、又甘  
 んじて受くべきにもあらず、しかのみならず、彼は素より満枝の  
 為ひととなり 人を悪にくみて、その貌かたちの美きを見ず、その思切おもひせつなるを汲きまん  
 ともせざるに、猶なほかつ主ぬしある身の謬あやまりて仇名あだなもや立たばなど氣遣きづか  
 はるるに就けて、貫一は彼の入来いりくるに会へば、冷き汗あせの湧出わきいづる  
 とともに、創所きずしよの遽にはに疼いたき立ちて、唯ただ 異あやくも己おのれなる者の全  
 く痺しびらさるるに似たるを、吾ながら心弱しと尤とがむれども効無かひかり  
 けり。實げに彼は日頃わづらひこの煩わづらひを逃れん為に、努めてこの敵を避けて

ぞ過せし。今彼の身は第二医院の一室に密封せられて、しかも隠るる所無きベッドの上に横はれれば、宛然<sup>さながら</sup>俎<sup>まな</sup>板<sup>いた</sup>に上れる魚の如く、<sup>むなし</sup>空く他の為すに委<sup>まか</sup>するのみなる仕合を、搔<sup>かき</sup>撈<sup>むし</sup>らんとばかりに悶<sup>もだ</sup>ゆるなり。

かかる苦<sup>くる</sup>き枕<sup>まくら</sup>頭<sup>もと</sup>に彼は又驚くべき事實を見出<sup>みい</sup>しつゝ、<sup>ひる</sup>翻<sup>が</sup>へつて己を顧れば、測らざる累の既に逮<sup>およ</sup>べる迷惑は、その藁<sup>わら</sup>蒲<sup>ぶ</sup>団<sup>どん</sup>の内に針<sup>はり</sup>の包れたる心地して、今なほ彼の病むと謂はば、恐くは外に三分<sup>さんぶ</sup>を患<sup>わづら</sup>ひて、内に却<sup>かへ</sup>つて七分<sup>しちぶ</sup>を憂<sup>うれ</sup>ふるにあらざらんや。貫一もそれをこそ懸<sup>け</sup>念<sup>ねん</sup>せしが、果して鰐<sup>わに</sup>淵<sup>ぶち</sup>は彼と満枝との間を疑ひ初めき。彼は又鰐淵の疑へるに由りて、その人と満枝との間をも略<sup>ほ</sup>推<sup>すい</sup>し得たるなり。

例わづらしの煩わづらしき人は今日も訪とひ来きつ、しかも仇あだならず意こころを籠こめたりと  
 覚おぼしき見舞物など持ちて。はや一時間余を過せども、彼は枕頭に起  
 ちつ、居つして、なかなか歸り行くべくも見えず。貫一は寄よせつ付つけ  
 じとやうに彼方あなたを向きて、覚めながら目を塞ふさぎていと静ふに臥ふした  
 り。附添つきそひ婆ばの折つから出い行できしを候うひて、満枝は椅子いをかをがにに寄にせ  
 つつ、

はざま  
 「間さん、間さん。貴方あなた、貴方」

と枕はしの端を指もて音なへど、眠れるにもあらぬ貫一は何の答を  
 も与へず、満枝は起ちてベッドの彼方あなたへ廻り行きて、彼の寐ね顔がほを  
 差さ覗のぞきつ。

「間さん」

猶答へざりけるを、軽く肩の辺あたりのうごかを撼せば、貫一はさるをも知ら

ざる為まねはしかねて、始めて目を開きぬ。彼はかく覺めたれど、満

枝はなほ覺めざりし先の可懷なつかしげに差寄りたる態かたちを改めずして、

その手を彼の肩に置き、その顔を彼の枕に近けたるまま、

わたくし

「私貴方ちよつに些とお話をして置かなければならない事があるのでご

ざいますから、お聞き下さいまし」

「あ、まだ在ゐらしたのですか」

「いつも長居を致して、さぞ御迷惑でございませう」

「……………」

「外でもございせんが……」

彼の隔へだて無く身近なに狎うとまるるを可忌しと思へば、貫一はわざと寐返ねがへ

りて、椅子を置きたる方かたに向直り、

「どうぞ此方こちらへ」

この心をさと曉れる満枝は、飽くまで憎き事為るよと、持てるハンカチーフにベッドを打ちて、かくまでに遇あつはれながら、なほこの人を慕やはでは已まぬ我身かと、効かひ無くも余に軽もてあそく弄はるるを可はづ愧しうて佇たたずみたり。されども貫一は直すぐに席を移さざる満枝の為に、再ことばび言を費さんとも為せざりけり。

氣きがさ嵩なる彼は胸に余して、聞えよがしに、

「あ、貴方あには軽蔑けいべつされてゐる事を知りながら、何な為私腹ちよくしを立たてることが出来ないのでせう。実に貴方は！」

満枝は彼の枕とらを捉とらへて顫ふるひしが、貫一の寂然せきぜんとして眼まなこを閉ぢ

たるに益苛ますはあだちて、

あんまひど

「余り酷うございますよ。間さん、何とか有仰おつしやつて下さいまし

な」

彼は堪へざらんやうに苦にがりたる口元を引歪ひきゆがめて、

「別に言ふ事はありません。第一貴方のお見舞下さるのは難有ありがた

迷惑で……」

「何と有仰おつしやいます！」

「以来はお見舞にお出で下さるのを御辞退します」

「貴方、何と……!!」

満枝は眉まゆを昂あげて詰寄せたり。貫一は仰まなこぎて眼を塞ふたぎぬ。

素もとより彼の無愛相なるを満枝は知れり。彼の無愛相おのれの己おのれに対し

ては更に甚きはなはだしを加ふるをも善く知れり。満枝が手管てくだは、今その外おもてにあらは顯せるやうに決けして内に怵こころへかねたるにはあらず、かくしてその人と諍いさかふも、また慚かなはざる恋の内に聊いささか楽む道なるを思へるなり。涙微紅ほのあかめたる眸まぶたに耀かがやきて、いつか宿せる暁あかつきの葩はなに露の津々しとどなる。

「お内にも御病人の在るのに、早く帰つて上げたが可いちやありませんか。わたくし私も貴方に度々たびたび来て戴くのは甚だ迷惑はなはなのですから」「御迷惑は始から存じてをります」

「いいや、未だ外にこの頃があるのです」

「ああ！ 鰐淵さんの事ではございませんか」

「まあ、さうです」

「それだから、私お話が有ると申したのではございませんか。それを貴方は、私と謂ふと何でも鬱陶うつとしがつて、如何いかに何でもそんなに作るものぢやございませんよ。その事ならば、貴方が御迷惑遊ばしてゐらつしやるばかりぢやございません。私だつてどんなに窮こまつてをるか知れは致しません。この間も鰐淵さんが可厭いやなことを有仰おつしやつたのです。私些ちつともかまひは致しませんけれど、さうでもない、貴方がこの先御迷惑あそばすやうな事があつてはと存じて、私それを心配致してをくらゐなのでございます」

聴るざるにはあらねど、貫一は絶えて 応うけこたへ 答こたへだに為せざるなり。

「実は疾とつからお話を申さうとは存じたのでございますけれど、そんな可厭いやな事を自分の口から吹聴らしく、却かへつて何も御存じない



方が可からうと存じて、何も申上げずにをつたのでございますが、鰐淵さん様のかれこれ有おつしや仰るのは今に始つた事ではないので、もう私実に窮こまつてをるのでございます。始終好い加減なことを申しては遁にげてをるのですけれど、鰐淵さんは私が貴方をこんなに……と云ふ事は御存じなかつたのですから、それで済んでをりましたけれど、貴方が御入院あそばしてから、私かうして始終お訪ね申しますし、鰐淵さんも頻しげしげ繁いらつしやるので、度たびたび々お目に懸るところから、何とかお想ひなすつたのでございませう。それで、この間は到頭それを有おつしや仰つて、訳が有るなら有るで、隠さずに話をしろと有仰るのぢやございませんか。私為方がありませんから、お約束をしたと申して了しまひました」

「え！」と貫一は繻帶ほうたいしたる頭を擡もたげて、彼の有為したりがほ顔を赦ゆるし難く打目成うちまもれり。満枝はさすが過あやまちを悔ふいたる風情ふぜいにて、やをら左の袂たもととひざひざに搔載かきのせ、牡丹ぼたんの荅つの如く揃そろへる紅絹裏もみうらの振ふりを弄まさぐりつつ、彼の咎とがめおそを懼おそるる目遣めづかひしてゐたり。

「実に怪けしからん！　ばかなことを有おつしや仰おつしやつたものです」  
 萎しをるる満枝を尻目に掛けて、

「もう可いから、早くお還り下さい」

彼を喝かつせし怒いかりに任せて、半起なかばしたりし体たいを投倒きせば、腰部ようぶの創きずしよ所しよを強く抵あてて、得堪えたへず呻うめき苦むを、不意ふいなりければ満枝は殊ことにまど惑まどひて、

「どう遊ばして？　何処どこぞお痛みですか」

手早く夜着よぎを揚げんとすれば、払退はらひのけて、

「もうお還り下さい」

言放ちて貫一は例の背そびらを差向けて、遽にはかに打うちしづま鎮りゐたり。

わたくし

「私還りません！ 貴方がさう酷く有仰おつしやれば、以上還りません。

いつまでも居られる軀からだではないのでございますから、順おとなしく還るや

うにして還して下さいまし」

いとはしたなくて立てる満枝は闔ドアの啓あくに驚かされぬ。入来いりきた

つきそひばば

れるは、附添婆か、あらず。看護婦か、あらず。国手ドクトルの回診

か、あらず。小使か、あらず。あらず！

ごましほらしや

にじゆうまわし まと

かいひ

胡麻塩羅紗の地厚なる二重外套を絡へる魁肥かいひの老紳士は悠然ゆうぜん

いりきた

ありさま

ひとし

として入来りしが、内の光景を見ると斉く胸悪き色はつとそ

の面<sup>おもて</sup>に出<sup>い</sup>でぬ。満枝は心に少<sup>すこ</sup>く慌<sup>あわ</sup>てたれど、さしも顕<sup>あらは</sup>さで、雍<sup>しとや</sup>かに小腰<sup>かが</sup>を屈<sup>か</sup>めて、

「おや、お出<sup>いで</sup>あそばしまし」

「ほほ、これは、毎度お見舞下さつて」

同<sup>いんぎん</sup>く慇懃<sup>いんぎん</sup>に会釈はすれど、疑も無く反対の意を示せる金壺<sup>かなつぼ</sup>

眼<sup>まなこ</sup>は光<sup>たくまし</sup>を逞<sup>たくまし</sup>う女の横顔を瞥<sup>べっけん</sup>見せり。静に臥<sup>ふ</sup>したる貫一は発<sup>ぱろき</sup>

作<sup>シマ</sup>の来<sup>きた</sup>れる如き苦悩を感じつつ、身を起して直行<sup>ただゆき</sup>を迎ふれば、

「どうぢやな。好<sup>え</sup>え方がお見舞に來てをつて下さるで、可<sup>え</sup>えの」

打付<sup>うちつけ</sup>に過<sup>ことば</sup>ぎし言を二人ともに快からず思へば、頓<sup>とみ</sup>に答<sup>いらへ</sup>は無<sup>な</sup>く

て、その場の白<sup>しろ</sup>けたるを、さこそと謂<sup>い</sup>はんやうに直行<sup>ひと</sup>の独<sup>ひと</sup>り笑ふ

なりき。如何<sup>いか</sup>に答ふべきか。如何に言<sup>い</sup>釈<sup>ひと</sup>くべきか、如何に処すべ

きかを思おもひ煩わづらへる貫一は艱むづかしげなる顔を稍内やや向けたるに、今はなかなか悪わる怯びれもせで満枝は椅子の前なる手て炉あふりに寄りぬ。

「然しお宅の御都合もあるぢやらうし、又お忙せはいところを度々お見舞下されては痛いた入みります。それにこれの病氣も最早快ようなるばかりじやで御心配には及ばんで、以来お出いで下さるのは何分お断り申しまする」

言いひ黒くろめたる邪魔立を満枝は面つら憎にくがりて、

「いいえ、もうどう致しまして、この御近辺まで毎々次手ついでがありますのでございますから、その御心配には及びません」

直行まなこの眼は再び輝けり。貫一は懋なまじに彼ひを窘くるめじと、傍かたはより言ことばを添へぬ。

「毎度お訪ね下さるので、却<sup>かへ</sup>つて私は迷惑致すのですから、どうか貴方から可<sup>しかるべく</sup>然御断り下さるやうに」

「当人もお気の毒に思うてあの様に申すで、折角ではありませんけど、決して御心配下さらんやうに、のう」

「お見舞に上りましてはお邪魔になりまする事ならば、私<sup>わたくし</sup>差控へませう」

満枝は色<sup>な</sup>を作して直行を打見遣りつつ、その面<sup>おもて</sup>を引<sup>ひきめぐら</sup>廻して、やがて非<sup>あら</sup>ぬ方<sup>かた</sup>を目成<sup>まも</sup>りたり。

「いや、いや、な、決して、そんな訳ぢや……」

「余<sup>あんま</sup>りな御挨拶で！ 女<sup>おぼしめ</sup>だと思<sup>おつしや</sup>召して有<sup>よろし</sup>仰るのかは存じませんが、それまでのお指図<sup>さしづ</sup>は受けませんで宜<sup>よろし</sup>うございます」

「いや、そんなに悪う取られては甚だ困る、  
畢 竟 貴方の為を

思ひますじやに因つて……」

「何と有仰います。お見舞に出ますのが、何で私の不為になるの  
でございませう」

「それにお心着が無い？」

その能く用ゐる微笑を弄して、直行は巧に温顔を作れるなり。

満枝は稍急立ちぬ。

「ございません」

「それは、お若いでさう有らう。甚だ失敬ながら、すいちや申し  
て見やう。な。貴方もお若いりや間も若い。若い男の所へ若い女  
子が度々出入したら、そんな事は無うても、人がかれこれ言ひ易

い、可<sup>え</sup>えですか、そしたら、間はとにかくじや、赤<sup>あかがし</sup>檉<sup>せん</sup>様と云ふ者のある貴方の軀<sup>からだ</sup>に疵<sup>きず</sup>が付く。そりや、不為ぢやありますまいか、ああ」

陰<sup>おのれ</sup>には己自ら更に甚<sup>はなは</sup>だし<sup>だし</sup>不為を強<sup>し</sup>ひながら、人の口といふもののかくまでに重宝なるが可<sup>を</sup>笑<sup>か</sup>し、と満枝は思ひつつも、

「それは御深切に難<sup>あり</sup>がた<sup>がた</sup>有<sup>あ</sup>う存じます。私はとにかく、間さんはこれからお美<sup>うつく</sup>しい御妻君をお持ち遊ばす大事のお軀<sup>からだ</sup>でゐらつしやるのを、私のやうな者の為に御迷惑遊ばすやうな事が御座いましては何とも済みませんですから、私自<sup>これ</sup>今<sup>から</sup>慎<sup>つつし</sup>みますでございます」

「これは太<sup>えら</sup>い失敬なことを申しましたに、早速お用ゐなさつて難<sup>えら</sup>有<sup>えら</sup>い。然し、間も貴方のやうな方と嘘<sup>うそ</sup>にもかれこれ言<sup>いは</sup>るるんぢや



から、どんなにも嬉しいぢやらう、私のやうな老人ぢやつたら、死ぬほどの病氣したて、赤檉さんは訪ねても下さりや為まいにな」  
貫一は苦々しさに聞かざる為してゐたり。

「そんな事が有るものでございますか、お見舞に上りますとも」  
「さやうかな。然し、こんなに度々来ては下さりやすまい」

「それこそ、御妻君が在つしやるのですから、余り頻繁上りますと……」

後は得言はで打笑める目元の媚、ハンカチーフを口蔽にし  
たる羞含しさなど、直行はふと目を奪はれて、飽かず覚ゆるなり  
き。

「はッ、はッ、はッ、すぢや細君が無いで、ここへは安心してお

出<sup>いで</sup>かな。私<sup>わし</sup>は赤檉さんの処へ行つて言ひますぞ」

「はい、有<sup>おつしや</sup>仰つて下さいまし。私<sup>わたくし</sup>此方へ度々お見舞に出ますこ

とは、宅でも存じてをるのでございますから、唯今も貴方<sup>あなた</sup>から御

注意を受けたのでございますが、私も用を抱へてをる体でかうし

て上りますのは、お見舞に出なければ済まないと考へまする訳が

ございますからで、その実、上りますれば、間<sup>かへ</sup>さんは却つて私の

伺<sup>うるさ</sup>ふのを懊惱<sup>おぼしめ</sup>く思召してゐらつしやるのですから、それは私の

やうな者が余り参つてはお目障<sup>めざはり</sup>か知れませんが、外の事で

はなし、お見舞に上るのでございますから、そんなに作<sup>なさ</sup>らなくて

も宜<sup>よろし</sup>いではございませんか。

然し、それでも私氣に懸つて、かうして上るのは、でございま

す、宅へお出いでになつた御帰途おかへりみちにこの御怪我おけがなんでございませう。  
それに、未だ私ま済みません事は、あの時大通の方をお帰りあそば  
すと有仰つたのを、津守坂つのかみざかへお出いでなさる方がお近いとさう申し  
てお勧め申すと、その途みちでこの御災難でございませう。で私考へ  
るほど申訳が無くて、宅でも大相氣に致して、勉めてお見舞に出  
なければ済まないと申すので、その心持で毎度上るのでございま  
すから、唯今のやうな御忠告を伺ひますと、私実に心外なのでご  
ざいます。そんなにして上れば、間さんは間さんようこびでお喜が無いの  
でございませう」

彼はいと辛つらしとやうに、恨うらめしとやうに、さては悲しとやうにも  
直行を視みるなりけり。直行は又その辛し、恨し、悲しとやうの情

に堪へざらんとする満枝が顔をば、ひそかなつぽまなこ 窃に金壺眼の一角を溶しとろかつつ  
眺ながめい入るにぞありける。

「さやうかな。如何いかさま、それで善う解りましたじや。太い御深えら  
切な事で、間もさぞ満足ぢやらうと思ひます。又私わしからも、そ  
りや厚うお礼を申しまするじや、で、な、お礼はお礼、今の御忠  
告は御忠告じや、悪う取つて下さつては困る。貴方がそんなに念おも  
うて、毎々お訪ね下さると思や、私も実に嬉しいで、折角の御好意  
をな、どうかしりぞく却るやうな、失敬なことは決して言ひたうはないん  
じや、言ふのはお為を念ふからで、これもやつぱり年寄役なんぢ  
やから、捨てて措おけんで。年寄と云ふ者は、これでとかく嫌きらはる  
るじや。貴方もやつぱり年寄はお嫌ひぢやらう。ああ、どうです

か、ああ」

赤髭あかひげ ひねを拵り拵りて、直行は女の気色けしきを偷視ぬすみみつ。

「さやうでございます。お年寄は勿論もちろん結構でございますけれど、どう致しても若いものは若い同士の方が気が合ひまして宜いやうでございますね」

「すぢやて、お宅の赤檜さんも年寄でせうが」

「それでございますから、もうもう口くちやかまし喧けんくてなりませんので  
す」

「ぢや、口喧うも、気難きむづかしうもなうたら、どうありますか」

「それでも私好きませんでございますね」

「それでも好かん？ 太えらう嫌うたもんですな」

「尤も年寄だから嫌ふ、若いから一概に好くと申す訳には参りませんでございます。いくら此方から好きましても、他で嫌はれましては、何の効もございせんわ」

「さやう、な。けど、貴方のやうな方が此方から好いたと言うたら、どんな者でも可厭言ふ者は、そりや無い」

「あんな事を有仰つて！ 如何でございますか、私そんな覺はございせんから、一向存じませんでございます」

「さやうかな。はッはッ。さやうかな。はッはッはッ」

椅子も傾くばかりに身を反して、彼はわざとらしく揺上げ揺上げて笑ひたりしが、

「間、どうぢやらう。赤檉さんはああ言うてをらるるが、さうか

の」

「如何いかですか、さう云ふ事は」

誰たれか鳥からすの雌雄しゆうを知らんとやうに、貫一は冷然として嘯うそぶけり。

「お前も知らんかな、はッはッはッはッはッ」

「私が自分にさへ存じませんものを、間さんが御承知有はずらう筈はずはございせんわ。ほほほほほほほほ」

そのわざとらしさは彼にも遜ゆづらじとばかり、満枝は笑ひ囃はやせり。  
直行まなこが眼は誰を見るときも無くて独ひとり耀かがやけり。

「それでは私もうお暇いとまを致します」

「ほう、もう、お帰去かへりかな。私わしもはや行かん成らんで、其所そこまで

御一処に」

「いえ、私些と、あの、西黒門町へ寄りますでございませう  
 ら、甚だ失礼でございませうが……」

「まあ、宜い。其処まで」

「いえ、本当に今日は……」

「まあ、宜いが、実は、何じや、あの旭座の株式一件な、あれ  
 がつい纏りさうぢやで、この際お打合をして置かんと、『琴  
 吹』の収債が面白うない。お目に掛つたのが幸ぢやから、些  
 とそのお話を」

「では、明日にでも又、今日は些と急ぎますでございませうから」

「そんなに急にお急ぎにならんでも宜いかな。商売上には年寄も  
 若い者も無い、さう嫌はれてはどうもならん」



姑しく推問答ばらの末彼は終つひに満枝らを拉ひし去れり。迹あとに貫一あは悪夢の  
 覚めたる如しく連きりに太息ためいき洵ついたりしが、やがて為せん方無まげに枕まくらに  
 就つきてよりは、見るべき物もあらぬ方かたに、止ただ果はて無しく目を奪うれ  
 るたり。

## 第五章

檜ひ葉は、樅もみなどの古葉貧うしげなるを望のぞむべき窓の外そとに、庭ともあ  
 らず打荒うちあられたる広場は、唯麗うらなる日影ひかげのみぞ饒ゆたに置お余あして、そ  
 こらの梅の点々ぼちぼちと咲初はめたるも、自おのら怠つり勝かに風情ふぜい作つくらずと見  
 ゆれど、春の色香いろかに出いでたるは憐あはむべく、打霞うちかすめる空そらに來き馴なる

る鶯ひよのいとどしく鳴なき頻しきりて、午後二時を過ぎぬる院内の寂々せきせき

たるに、たまたま響くは患者の廊下を緩ゆるう行くなり。

枕の上の徒つれづれ然は、この時人を圧して殆ほとんど重きを覚えしめんと

す。書見せると見えし貫一は辛からうじて夢を結びゐたり。彼は実げに

夢ならでは有得べからざる怪あやしき夢に弄もてあそばれて、躬みづからも夢と知り、夢

と覚さんとしつつ、なほ睡ねむりの中に囚とらはれしを、端はしな無く人の呼おどろかぶに駭

されて、漸やうやものうく慵そぼだき枕を欹そてつ。

愕がくぜん然ひとみこらとして彼は瞳を凝かたはらせり。ベッドの傍に立てるは、その怪

き夢の中に顕あらはれて、終始相離あひはなれざりし主人公その人ならずや。

打返し打返し視みれども訪とひきた来れる満枝に紛まぎれあらざりき。とは謂いへ、

彼は夢か、あらぬかを疑ひて止まず。さるはその真ならんよりな

ほ夢の中なるべきを信ずるの当れるを思へるなり、美しさも常に  
 増して、夢に見るべき姿などのやうに四辺も可<sup>あた</sup>輝<sup>かが</sup>く、五六<sup>いつつむ</sup>  
 歳ばかりも若<sup>わか</sup>ぎて、その人の妹なりやとも見えぬ。まして、六<sup>む</sup>  
 十路に余れる夫有<sup>つまも</sup>て身と誰<sup>たれ</sup>かは想ふべき。  
 髪を台湾銀杏<sup>たいわんいちよう</sup>といふに結びて、飾<sup>かざり</sup>とてはわざと本甲蒔絵<sup>ほんこうまきゑ</sup>  
 の櫛<sup>くし</sup>のみを挿<sup>さ</sup>したり。黒縮緬<sup>くろちりめん</sup>の羽織に夢想裏<sup>むそうら</sup>に光琳風<sup>こうりんふう</sup>の春  
 の野を色入<sup>いろいり</sup>に染めて、納戸縞<sup>なんどしま</sup>の御召の下に濃小豆<sup>こいあづき</sup>の更紗<sup>さらさち</sup>  
 縮緬<sup>しりめん</sup>、紫根七糸<sup>しこんしちん</sup>に樂器<sup>がっき</sup>尽<sup>つくし</sup>の昼夜帯<sup>はんえり</sup>して、半襟<sup>はんえり</sup>は色系<sup>ぬひ</sup>の縫<sup>ぬい</sup>あ  
 る肉色なるが、頸<sup>えり</sup>の白きを匂<sup>にお</sup>はすやうにて、化粧などもやや濃く、  
 例の腕環<sup>きたき</sup>のみは燦爛<sup>うるさ</sup>と煩<sup>わづ</sup>し。今日は殊<sup>こと</sup>に推<sup>お</sup>して来<sup>き</sup>にけるを、得<sup>え</sup>  
 堪<sup>た</sup>へず心の尤<sup>とが</sup>むらん風情<sup>ふぜい</sup>にて佇<sup>たたず</sup>める姿限<sup>すがたぎり</sup>無<sup>な</sup>く嬌<sup>なまめ</sup>きて見ゆ。

「お寝の<sup>やすみ</sup>ところを飛んだ失礼を致しました。<sup>わたしが</sup>私上る筈<sup>はず</sup>ではないのでございませうけれど、是非申上げなければなりません。事<sup>こと</sup>がござい<sup>ちよつ</sup>ますので、些<sup>ちよつ</sup>と伺ひましたのでございませうから、今日<sup>こんにち</sup>のところはどうか御堪忍<sup>ごかんにん</sup>あそばして」

彼の許<sup>ゆるし</sup>を得んまでは席に着くをだに憚<sup>はばか</sup>る如く、満枝は漂<sup>ただよは</sup>しげになほ立てるなり。

「はあ、さやうですか。一昨々日あれ程申上げたのに……」  
内に燃ゆる憤<sup>いかり</sup>を抑<sup>おさ</sup>ふるとともに貫一の言<sup>ことば</sup>は絶えぬ。

「鰐淵さんの事なのでございますの。私困りまして、どういたした<sup>よろし</sup>ら宜いのでございませう……間さん、かうなのでございますよ」

「いや、その事なら伺ふ必要は無いのです」

「あら、そんなことを有<sup>おつしや</sup>仰らずに……」

「失礼します。今日<sup>こんにち</sup>は腰の傷部<sup>きず</sup>が又痛みますので」

「おや、それは、お劇<sup>きつ</sup>いことはお在<sup>あん</sup>なさらないのでございますか」

「いえ、なに」

「どうぞお楽<sup>あは</sup>に在<sup>あ</sup>しつて」

貫一は無雑作に郡内<sup>ぐんない</sup>縞<sup>しま</sup>の搔<sup>かい</sup>卷<sup>まき</sup>引<sup>ひ</sup>被<sup>き</sup>けて臥<sup>ふ</sup>しけるを、疎略<sup>そりやく</sup>あ

らせじと満枝<sup>まめやか</sup>は勤<sup>かしづ</sup>篤<sup>あつ</sup>に冊<sup>さふ</sup>きて、やがて己<sup>おのれ</sup>も始めて椅子<sup>いす</sup>に倚<sup>よ</sup>れり。

「貴方<sup>あなた</sup>の前でこんな事は私<sup>わたし</sup>申<sup>まう</sup>上げ難<sup>にく</sup>いのでございますけれど、実

は、あの一昨<sup>いちさく</sup>々<sup>さ</sup>日<sup>にち</sup>でございませうね、ああ云<sup>い</sup>ふ訳<sup>わけ</sup>で鰐淵<sup>わいえん</sup>さんと御一

処<sup>ところ</sup>に参<sup>まゐ</sup>りましたところが、御飯<sup>ごはん</sup>を食べるから何でも附合<sup>おつきあ</sup>へと有<sup>あ</sup>

仰<sup>おほ</sup>るので、湯島<sup>ゆしま</sup>の天神<sup>てんじん</sup>の茶屋<sup>ちや</sup>へ寄<sup>よ</sup>りましたのでございます。さ

う致すと、案の定可厭いやらしい事をもうもう執濃しつこく有仰るのでござい  
ます。さうして飽くまで貴方の事を疑うたぐつて、始終それを有仰るので、  
私一番それには困りました。あの方もお年効としがひの無い、物の道理  
がお解りにならないにも程の有つたもので、一体私を何と思召おぼしめ  
してゐらつしやるのか存じませんが、客商売でもしてをる者たはむに戯  
れるやうな事を、それも一度や二度ではないのでございますから、  
私残念で、一昨々日なども泣いたのでございます。で、この後二  
度とそんな事の有仰れないやうに、私その場で十分に申したこと  
は申しましたけれど、変に氣を廻してゐらつしやる方の事でござ  
いますから、取とんだ八やつあたり当で貴方へ御迷惑が懸りますやうでは、  
何とも私申訳がございませんから、どうぞそれだけお含み置き下

さいまして、悪<sup>あし</sup>からず……。

今度お会ひあそばしたら、鰐淵さんが何とか有仰るかも知れません。さぞ御迷惑であらつしやいませうけれど、そこは宜<sup>よろ</sup>いやうに有仰つて置いて下さいまし。それも貴方が何とか些<sup>ちよつと</sup>でも思召してゐらつしやる方とならば、そんな事を有仰られるのもまた何でございませうけれど、嫌<sup>きら</sup>抜<sup>ひぬ</sup>いてお在<sup>いで</sup>あそばす私<sup>わたくし</sup>のやうな者と訳でもあるやうに有<sup>おつしや</sup>仰られるのは、さぞお辛くてゐらつしやいませうけれど、私のやうな者に見込れたのが因果とお諦<sup>あきら</sup>め遊ばしまし。

貴方も因果なれば、私も……私は猶<sup>なほ</sup>因果なのでございますよ。

かう云ふのが実に因果と謂<sup>い</sup>ふのでございませうね」

金煙管きんぎせるの莨たばこの独り杳眇ほのぼのと燻くゆるを手にせるまま、満枝はかなは儚はかなさ  
の遣方やるかた無なげに萎しをれゐたり。さるをも見向みむかかず、答こたへず、頑がんとし  
て石の如よこたく横はれる貫一。

「貴方もお諦め下さいまし、全く因果なのでございますから、切せめ  
てさうと諦めてでもゐて下されば、それだけでも私幾分とほか思が透とほ  
つたやうな氣が致すのでございます。

間さん。貴方は過いつぞや日私いつぞやがこんなに思つてゐることを何日いつまで  
もお忘れないやうにと申上げたら、お志は決して忘れんと有仰い  
ましたね。お覚えあそばしてゐらつしやいませう。ねえ、貴方、  
よもやお忘れは無いでせう。如何いかになのでございますよ」

勢いきはひて問詰きむれば、極きめて事も無なげに、



「忘れません」

満枝は彼の面を絶に怨視て瞬も為ず、その時人声して闔は徐に啓きぬ。おもてしたたかうらみみまたたきせ

案内せる附添の婆は戸口の外に立ちて請じ入れんとすれば、客はその老に似気なく、今更内の様子を心惑せらるる体にて、彼にさへ可愼う小声に言付けつつ名刺を渡せり。つつまし

満枝は如何なる人かと瞥と見るに、白髪交りの髯は長く胸の辺に垂れて、篤実の面貌瘦せたれども賤からず、長は高しとにあらねど、素より腰にもあらざりし肉の自ら齡の衰に削れたれば、冬枯の峰に抽けるやうに聳えても見ゆ。衣服などさる可く、程を守りたるが奥幽くて、誰とも知らねどさすがに疎ならず覚えおくゆかし

て、彼は早くもこの賓まらうどの席を設けて待てるなりき。

貫一は婆の示せる名刺を取りて、何心無く打見れば、鳴沢しぎさわ

隆三うどうと誌しるしたり。色を失へる貫一はその堪へかぬる驚愕おどろきに駆

れて、忽ち身たちまを翻ひるがへして其方を見向かんとせしが、幾ど同時ほとんに又枕

して、終つひに動かず。狂ひ出でんずる息を厳きびしく閉ぢて、燃もゆるばかり

に瞋いかれる眼は放たず名刺を見入れたりしが、さしも内なる千万無

量の思を裏つつめる一点の涙は不覺に滾まろび出いでぬ。こは怪しと思ひつ

つも婆は、

「此方こちらへお通し申しませうで……」

「知らん！」

「はい？」

「こんな人は知らん」

人目あらずば引裂き棄つべき名刺よ、けがらは流しと投返せば床の上に  
 落ちぬ。彼は強しひて目を塞ふさぎ、身の顫ふるふをば吾と吾手に抱だき窘すくめ  
 て、恨は忘いれずとも憤いかりは忍ぶべしと、撻むちうたんやうにも己を制すれ  
 ば、髪は逆さか堅ただち蠢うごめきて、頭腦うちの裏に沸わ騰きのる血はその欲するま  
 まに注ぐところを求めて、心も狂へと乱みだ螫れすなり。彼はこれと争  
 ひて猶なほも抑へぬ。面色は漸やうやく変じて灰の如し。婆は懼おそれたる目色めざし  
 を客の方へ忍ばせて、

「御存じないお方なので？」

「一向知らん。人違だらうから、断ことわつて返すが可い」

「さやうでございますか。それでも、貴方様のお名前を有おつ仰しやつ

てお尋ね……」

「ああ、何でも可いから早く断つて」

「さやうでございますか、それではお断り申しませうかね」

(五)の二

婆はしぎさわ鵬沢の前にその趣を述べて、投棄てられし名刺を返さんとすれば、手うしろさまを後様つかに束ねたるままに受取らで、強しひて面おもてを和やはらぐるも苦しげに見えぬ。

「ああ、さやうかね、御承知の無い訳は無いのだ。ははは、大分だいぶん久い前の事だから、お忘れになつたのか知れん、それでは宜よろしい。

私が直<sup>わし</sup>にお目<sup>ぢか</sup>に掛<sup>か</sup>らう。この部屋は間貫一さんだね、ああ、それでは間違<sup>まちが</sup>無い」

屹<sup>き</sup>と思案<sup>し</sup>せる鳴沢の椅子ある方<sup>かた</sup>に進み寄れば、満枝は座を起ち、会釈<sup>えいせき</sup>して、席<sup>す</sup>を薦<sup>すす</sup>めぬ。

「貫一さん、私<sup>わし</sup>だよ。久う会はんので忘れられたかのう」

室<sup>すみ</sup>の隅<sup>すみ</sup>に婆<sup>あむひ</sup>が茶の支度<sup>しど</sup>せんとするを、満枝は自ら行きて手を下し、或<sup>あるひ</sup>は指図<sup>しず</sup>もし、又自ら持<sup>もち</sup>来<sup>きた</sup>りて薦<sup>すす</sup>むるなど尋常<sup>じんじょう</sup>の見舞客<sup>みまいきやく</sup>にはあらずと、鳴沢は始めてこの女に注目<sup>しゅぼく</sup>せるなり。貫一は知らざる如く、彼方<sup>あな</sup>を向きて答へず。仔細<sup>しさい</sup>こそあれとは覚ゆれど、例<sup>れい</sup>のこの人の無愛想<sup>むあいさう</sup>よ、と満枝は傍<sup>よそ</sup>に見つとも憫<sup>あはれ</sup>に可笑<sup>をかし</sup>かりき。

「貫一さんや、私<sup>わし</sup>だ。疾<sup>とう</sup>にも訪ねたいのであつたが、何にしる居

所が全然知れんの。おとつひ一昨日ふと聞出したから不取敢かうして  
出向いたのだが、病気はどうかのう。何か、大怪我おほげがださうではな  
いか」

猶も答のあらざるを腹なほ立はらだたしくは思へど、満枝の居るを幸さいはひに、  
「睡ねてをりますですか」

「はい、如何いかがでございますか」

彼はこの長者の窘くるしめるを傍よそに見かねて、貫一が枕に近く差寄うかがりて  
窺うかがへば、涙の顔を褥しとねに擦すりつ付けて、急せきあ上げ急かたいき上げ肩息ことばしてゐた  
り。何事とも覚えおどろかず驚おどろかされしを、色にも見せず、怪まるるをも言  
に出いださず、些ちとの心着さへあらぬやうに擬もてなして、

「お客様がいらつしやいましたよ」

「今も言ひました通り、一向識らん方なのですから、お還し申して下さい」

彼は面を伏せて又言はず、満枝は早くもその意を推して、また多くは問はず席に復りて、

「お人違ではございませんでせうか、どうも御覚が無いと有仰るのでございます」

長き髯を推揉みつつ鳴沢は為方無さに苦笑して、

「人違とは如何なことでも！五年や七年会はんでも私は未だそれほど老耄はsenのだ。然し覚が無いと言へばそれまでの話、覚もあらうし、人違でもなからうと思へばこそ、かうして折角会ひにも来たらうと謂ふもの。老人の私がわざわざかうして出向い

て来たのでう、そこに免じて、些<sup>ちよつ</sup>とでも会うて貰ひませう」

挨拶<sup>あいさつ</sup>如何にと待てども、貫一は音だに立てざるなり。

「それぢや、何かい、こんなに言うても不承してはくれんのかの。  
ああ、さやうか、是非が無い。

然し、貫一さん、能<sup>よ</sup>う考へて御覧、まあ、私たちの事をどう思  
うてゐらるか知らんが、お前さんの爾<sup>これまで</sup>来の爲方<sup>しかた</sup>、又今日のこの  
始末は、ちと妥<sup>おだやか</sup>当ならんではあるまいか。とにかく鳴沢の翁<sup>をぢ</sup>に  
対してかう爲たものではなからうと思ふがどうであらうの。成程  
お前さんの方にも言分はあらう、それも聞きに來た。私の方にも  
少<sup>すこし</sup>く言分の無いではない。それも聞かせたい。然し、かうしてわ  
ざわざ尋ねて來たものであるから、此方<sup>こちら</sup>では既に折れて出てゐる



のだ。さうしてお前さんに会うて話と謂ふは、決して身勝手な事  
 を言ひに来たぢやない、やはり其方の身の上に就いて善かれと計  
 ひたい老婆心切。ろうばしんせつ私の方ではその当時に在つてもお前さんを棄  
 てた覚は無し、又今日こんにちも五年前も同じ考量かんがへで居るのだ。それ  
 を、まあ、若い人の血氣と謂ふのであらう。唯一図に思ひ込んで  
 誤解されたのか、私は如何にも残念でならん。今日こんにちまでも誤解  
 されてゐるのは愈よ心外だで、お前さんの住所の知れ次第早速出  
 掛けて来たのだ。凡そ此方およこちらの了簡りようけんを誤解されてゐるほど心苦  
 い事は無い。人の為に謀つて、さうして僅わづかの行違ゆきちがひから恨まれ  
 る、恩に被せうとて謀つたではないが、恨まれやうとは誰たれにして  
 も思はん。で、ああして睦むつまじう一家族で居つて、私たちも死水を取

つて貰ふ意であつたものを、僅の行違から音信不通の間になつ  
 て了ふと謂ふは、何ともはや浅ましい次第で、私も誠に寢覚が悪  
 からうと謂ふもの、実に姨とも言暮してゐるのだ。私の方では何  
 処までも旧通りになつて貰うて、早く隠居でもしたいのだ。そ  
 れも然しお前さんの了簡が釈けんでは話が出来ん。その話は二の  
 次としても、差当り誤解されてゐる一条だ。会うて篤と話をした  
 ら直に訳は分らうと思ふで、是非一通りは聞いて貰ひたい。その  
 上でも心が釈けん事なら、どうもそれまで。私はお前さんの親御  
 の墓へ詣つて、のう、抑もお前さんを引取つてから今日までの  
 来歴を在様陳べて、鳴沢はこれこれの事を為、かうかう思ひま  
 する、けれども成行でかう云ふ始末になりましたのは、残念なが

ら致方が無い、と丁とお分ちやん　ことわり疏を言うて、そして私は私の一分いちぶんを立ててから立派に縁を切りたいのだ。のう。はや五年も便たよりを為せんのだから、お前さんは縁を切つた氣であらうが、私の方では未だ縁は切らんのだ。

私は考へる、たとへばこの鴨沢の翁をぢの為た事が不都合であらうか知れん、けれども間貫一たる者は唯一度の不都合ぐらゐは如何いかにも我慢をしてくれんければ成るまいかと思ふのだ。又その我慢が成らんならば、も少し妥おだ当やかに事を為てもらひたかつた。私の方と言分のあると謂ふのは其処そこだ。言はせればその通り私にも言分はある。然し、そんな事を言ひに來たではない、私の方にも如何いか様手落があつたで、その詫わびも言はうし、又昔も今も此方こちらには心

持に異変かはりは無いのだから、それが第一に知らせたい。翁が久しぶりで来たのだ、のう、貫一さん、今日こんにちは何も言はずに清う会うてくれ」

曾かつて聞かざりし恋人が身の上の秘密よ、と満枝あやしは奇き興を覚えて耳を傾けぬ。

我がづよ強くも貫一ものいのなほ言はんとはせざるに、漸く怵やうやこらへかねたる鳴

沢の翁はやにはに椅子を起ちて、強しひてもその顔見んと歩み寄り。事の由は知るべきやう無けれど、この客の言を尽せるにも理ことわり聞えて、無下むげうちに打も棄てられず、されども貫一が唯涙を流して一語を出さず、いと善く識るらん人をば覺無しと言へる、これにもなかなか所謂いはれはあらんと推測おしはからるれば、一も二も無く満枝は恋

人に与<sup>くみ</sup>してこの場の急を拯<sup>すく</sup>はんと思へるなり。

枕<sup>まくらもと</sup>頭<sup>うかが</sup>を窺<sup>うかが</sup>ひつつ危む如く眉を攢<sup>あつ</sup>めて、鳴沢の未<sup>いま</sup>だ言出でざる時、

「私<sup>わたくし</sup>看病に参つてをります者でございですが、何方<sup>どなたさま</sup>様であらうしやいますか存じませんが、この一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup>日<sup>にち</sup>病人は熱の氣味で始終<sup>うとうと</sup>昏々<sup>うとうと</sup>いたして、時々譫<sup>うはごと</sup>語のやうな事を申して、泣いたり、慍<sup>おこ</sup>つたり致すのでございますが、……」

頭を捻<sup>ねぢ</sup>向<sup>む</sup>けて満枝に對せる鳴沢の顔の色は、この時故<sup>ことさら</sup>に解きたり<sup>と</sup>と見えぬ。

「はあ、は、さやうですかな」

「先程から伺ひますれば、年来御懇意であらうしやるのを人違だ

とか申して、大相失礼を致してをるやうでございしますが、やつぱり熱の加減で前後が解りませんのでございしますから、どうぞお氣にお懸け遊ばしませんやうに。この熱も直ちきに除とれまするさうでございしますから、又改めてお出いでを願ひたう存じます。今日こんにちは私御名刺いただを戴いて置きまして、お輕こころよく快くはしなり次第私から悉くお話を致しますでございします」

「はあ、それはそれは」

「実は、何でございました。昨日もお見舞にお出で下すつたお方に變な事を申掛けまして、何も病氣の事でしかた為方しもございませんけれど、私弱りきりましたのでございします。今日こんにちは又如何いか致したのでございしますか、昨日とは全まるで反対であの通り黙りきつてをり

ますのですが、却つて無闇なことを申されるよりは始末が宜い  
 でございます」

かくても始末は善しと謂ふかと、翁は打蹙むべきを強ひて易  
 へたるやうの笑を洩せば、満枝はその言了せしを喜べるやうに  
 笑ひぬ。彼は婆を呼びて湯を易へ、更に熱き茶を薦めて、再び客  
 を席に着かしめぬ。

「さう云ふ訳では話も解りかねる。では又上る事に致しませう。  
 手前は嶋沢隆三と申して——名刺を差上げて置きまする、これに  
 住所も誌してあります——貴方は失礼ながらやはり鰐淵さんの  
 御親戚でも？」

「はい、親戚ではございませんが、鰐淵さんとは父が極御懇意に

致してをりますので、それに宅がこの近所でございますもので、ちよくちよくお見舞に上つてはお手伝を致してをります」

「はは、さやうで。手前は五年ほど掛違うて間とは会ひませんので、どうか去年あたり嫁を娶うたと聞きましたが、如何いたしましたな」

彼はこの美き看病人の素性知らまほしさに、あらぬ問をも設けたるなり。

「さやうな事はついに存じませんが」

「はて、さうとばかり思うてをりましたに」

容儀人かたちの娘とは見えず、妻とも見えず、しかも絢粲きくらきらしう装よそほ飾ひかざれる様は色を売る儔たぐひにやと疑はれざるにはあらねど、言辭ものごし



行儀の端々はしはものづか自らさにもあらざる、畢ひつきよう竟これ何者と、鳴沢は  
 容易にその一斑いっばんをも推し得すいざるなりけり。されども、懇意と謂  
 ふも、手伝と謂ふも、皆詐いつはりならんとは想ひぬ。正ただしき筋の知辺しるべには  
 あらで、人の娘にもあらず、又貫一が妻と謂ふにもあらずして、  
 深き訳ある内証者なるべし。若もしさもあらば、貫一はその身の境  
 遇とともに墮落して性根しようねも腐れ、身持も頽くづれたるを想ふべし、  
 とかくは好みて昔の縁を繋つなぐべきものにあらず。如かくのごと此やからき輩を  
 出入せしむる鳴沢の家は、終つひに不慮の禍を招くに至らんも知るべ  
 からざるを、と彼は心中には遽はかに懼を生じて、さては彼の恨深く言を  
 容れざるを幸さいはひに、今日こんにちは一先ひとまづ立還りて、尚なほ一層の探索と  
 一番の熟考とを遂とげて後、来きたる可べくは再び来らんも晩おそからず、と

失望の裏別うちに幾分の得るところあるを私ひそかに喜べり。

「いや、これはどうも図らずお世話様に成りました。いづれ又近日改めてお目に掛りまするで、失礼ながらお名前を伺つて置きたうござりまするが」

「はい、私わたくしは」と紫根塩瀬しこんしほぜの手提うちの中より小形の名刺を取出だして、

はなは「甚だ失礼でございませうが」

「はい、これは。赤檉あかがしみつえ満枝さまと有仰おつしやいますか」

この女の素性に於おける彼の疑は益ますます暗くなりぬ。夫つまも有てる身の我

は顔に名刺を用意せるも似氣にげな無し、まして裏面うらに横文字を入れたるは、猶なほつつまし可慎かじんからず。応対しとやかの雍ひとなにして人馴れたる、服装みなりなどの

当世風に貴族的なる、或はあるひ欧羅巴ヨウロッパ的女子職業に自營せる人などな  
 らずや。但しその余にあまり色美いろよきが、又さる際にはきは相応ふさはしからずも覺  
 えて、こは終につひ一題の麗うるはき謎を彼に与ふるに過なぎざりき。鳴沢の  
 翁は貫一の冷遇ぶあしらひにいきどほ慍るをも忘れて、この謎なぞの為に苦められつ  
 つ病院を辞し去れり。

客を送り出でて満枝の内にいりきた入来れば、ベッドの上に貫一の居ゐ  
ただか丈高に起直りて、瘦やせ尽すがれたる拳を握りつつ、咄とつ々、言はで  
 忍びし無念に堪へずして、独りひと疾視しつしの瞳を凝ひとみすに会へり。

## 第六章

数日すじつぜん前より鰐淵わにぶちが家は燈あかしとも点ともる頃を期して、何処いづこより来

るとも知らぬ一人の老女ろうによに訪とほるるが例となりぬ。その人は齡六

十路そぢ余かたふに傾かたむきて、顔は皺しわみたれど膚はだ清へきよく、切髪きりがみの容かたちなどな

かなか由よしありげにて、風俗も見苦からず、唯ただ異様なるは茶微塵ちやみじん

の御召縮緬おめしちりめんの被風ひふをも着ながら、更紗さらさの小風呂敷包に油紙うしの上

掛はしたるを矢筈やはずに負うひて、薄うす穢きたなき護謨底ゴムぞこの運動靴はを履はいた

り。

所用は折入あるじつて主に会あひたしとなり。生憎あいにくにも来る度たび他出中な

りけれど、本意ほんい無なげにも見えで急いそぎ帰かへり、飽あきもせずして通とほひ来

るなりけり。お峯やうやは漸おそく怪あやしと思おもひ初はじめぬ。

彼のあだかも三日きた続つけて来きれる日、その挙動ことの常ならず、殊ことに

は眼色<sup>まなざし</sup>凄<sup>す</sup>く、憚<sup>はばかり</sup>も無く人を目<sup>ま</sup>成<sup>なり</sup>ては、時ならぬに独<sup>ひと</sup>り打笑<sup>うちあ</sup>む顔<sup>かほ</sup>の坐<sup>す</sup>寒<sup>さむ</sup>きまでに可<sup>お</sup>恐<sup>そろ</sup>きは、狂人なるべし、しかも夜に入<sup>い</sup>るを候<sup>うかが</sup>ひ、時をも差<sup>たが</sup>へず訪<sup>おと</sup>ひ来るなど、我家に祟<sup>たたり</sup>を作<sup>な</sup>すにはあらずや、とお峯は遽<sup>には</sup>に懼<sup>か</sup>を抱<sup>か</sup>きて、とても一度は会<sup>あ</sup>ひて、又と足踏<sup>あしふ</sup>せざらんやう、ひたすら直行にその始末を頼<sup>たの</sup>みければ、今日是用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>して、四時頃にはや還<sup>かへ</sup>り来<sup>き</sup>にけるなり。

「どうも貴方<sup>あなた</sup>、あれは氣違<sup>きちが</sup>ですよ。それでも品の良<sup>い</sup>いことは、些<sup>ちよ</sup>とまあ旗本か何かの隠居さんと謂<sup>い</sup>つたやうな、然し一体、鼻の高<sup>たか</sup>い、目の大きい、瘦<sup>や</sup>せた面<sup>おも</sup>長<sup>なが</sup>な、怖<sup>こは</sup>い顔なんです。戸外<sup>おも</sup>へ来て案内する時のその声といふものが、実に無いんですよ。毎<sup>い</sup>でも極<sup>きま</sup>つて、『頼<sup>たの</sup>みます、はい頼<sup>たの</sup>みます』とかう雍<sup>しとやか</sup>に、緩<sup>ゆ</sup>り二声言<sup>ふ</sup>

んで。もうもうその声を聞くと悚然<sup>ぞつ</sup>として、ああ可厭<sup>いや</sup>だ。何だつて又あんな氣違なんぞが来出したんでせう。本当に縁起でもない！

お峯は柱なる時計を仰ぎぬ。<sup>あかしとも</sup>燈の点るには未だ間ありと見るなるべし。直行は可難<sup>むづか</sup>しげに眉<sup>まゆ</sup>を寄せ、唇<sup>くちびる</sup>を引結びて、

「何者か知らんて、一向心<sup>こころあたり</sup>当と謂うては無い。名は言はんて？」

「聞きましたけれど言ひませんの。あの様子ぢや名なんかも解りは為ますまい」

「さうして今晚来るのか」

「来られては困りますけれど、きつと来ますよ。あんなのが毎晩

々々来られては耐たまりませんから、貴方本当に来ましたら、篤とつくり説諭して、もう来ないやうに作なつて下さいよ」

「そりや受合へん。他さきが氣違ぢやもの」

「氣違だから私わたしも氣味が悪いからお頼申すのぢやありませんか」

「幾多いくら頼まれたてて、氣違ぢやもの、俺おれも為やうは無い」

頼める夫つまのさしも思はで頼たの無みなき言ことに、お峯は力落してかつは

尠すくなからず心慌あわつるなり。

「貴方でも可けないやうだつたらば、巡查にさう言つて引渡して遣やりませう」

直行は打笑うちわらへり。

「まあ、そんなに騒さわがんとも可ええ」

「騒ぎはしませんけれど、私は可厭ですもの」

「誰も氣違の好えものは無い」

「それ、御覽なさいな」

「何じや」

知らず、その老女ろうによは何者、狂か、あらざるか、合ごうりよく力か、

物売か、将主はあるじの知人しりびとか、正体の顯あらはるべき時はかかる裏うちにも一分

時毎ちかづに近くなりき。

終日ひねもす灰色に打曇りて、薄日をだに吝をしみて洩もらさざりし空は漸やうやく

暮れんとして、弥増いやます寒さは怪けしからず人に逼せまれば、幾分の凌しのぎに

もと家々の戸は例よりも早く鎖さされて、なほ稍ややあか明くその色厚あつこほ

氷りを懸けたる如き西の空より、隱々いんいんとして寂き余光の遠く来きた



れるが、遽にはかに去るに忍びざらんやうに彷徨さまよへる巷ちまたの此処ここ彼処かしこに、

軒ランプは既に点じりて、新に白き焰ほのほを放てり。

一陣の風は砂を捲まきて起りぬ。怪しの老女ろうによはこの風に吹出ふきいさ

れたるが如く姿を顕はせり。切髪は乱れ逆さか立ちて、披は払はと飄ひるがへる

裾すそ袂もとに靡なびされつつ漂ただよしげに行きつ留りつ、町の南側を辿たどり辿

りて、鰐淵が住へる横町に入りぬ。銃じゅう槍そうの忍しのび返がへを打ちた

る石堀いしべいを溢あふれて一本の梅の咲誇れるを、斜ななめに軒ランプの照せ

るがその門かどなり。

彼は殆ど我家に帰り来きたれると見ゆる態度にて、つかつか

を啓あけんとしたれど、啓かざりければ、かの雍しとやかに緩しと謂ふ声し

て、

「頼みます、はい、頼みます」

風は颯々ひようひようと鳴りて過ぎぬ。この声を聞きしお峯は竦すくみて立

たず。

「貴方、来ましたよ」

「うん、あれか」

実に直行も気味好からぬ声とは思へり。小鍋こなべ立てる火鉢ひばちの角かど

に猪口ちよくを措おき、燈あかしを持て来よと婢をんなに命じて、玄関に出でけるが、

先まづ戸の内より、

「はい何方どなたですな」

「旦那だんなはお宅でございませうか」

「居りますが、何方どなたで」

答はあらで、<sup>つぶや</sup>呟くか、<sup>ささや</sup>呟くか、小声ながら<sup>しきり</sup>頻に物言ふが聞ゆるのみ。

「何方<sup>どなた</sup>ですか、お名前は何と有<sup>おつしや</sup>仰るな」

「お目に掛れば解ります。何に致せ、おおお、まあ、梅が好く咲きましたぢやございせんか。当日の挿花<sup>はな</sup>はやつぱりこの梅<sup>よろし</sup>が宜からうと存じます。さあ、どうぞ此方<sup>こちら</sup>へお入り下さいまし、御遠慮無しに、さあ」

啓<sup>あ</sup>けんとせしに啓かざれば、彼は戸<sup>うち</sup>を打叩<sup>たた</sup>きて劇<sup>はげ</sup>く案内<sup>あない</sup>す。

さては狂人なるよと直行も迷惑したれど、このままにては逐<sup>お</sup>ふとも立去るまじきに、一度<sup>ひとたび</sup>は会<sup>あ</sup>うてとにもかくにも為<sup>せ</sup>んと、心ならずも戸を開けば、聞<sup>き</sup>きしに差<sup>たが</sup>はぬ老女<sup>ろうによ</sup>は入<sup>いり</sup>来<sup>きた</sup>れり。

「鰐淵は私<sup>わし</sup>じやが、何ぞ用かな」

「おお、おまへが鰐淵か！」

つと乗<sup>のり</sup>出<sup>いだ</sup>してその面<sup>おもて</sup>に瞳<sup>ひとみ</sup>を据<sup>す</sup>ゑられたる直行は、鬼氣に襲は

れて忽<sup>たちま</sup>ち寒<sup>をの</sup>く戦<sup>つ</sup>けるなり。熟くと見入る眼<sup>まなこ</sup>を放つと共に、老女は

皺<sup>しわ</sup>手に顔<sup>おほ</sup>を掩<sup>さめ</sup>ひて潜<sup>な</sup>々と泣<sup>なき</sup>出<sup>いだ</sup>せり。呆<sup>あき</sup>れ果てたる直行は金<sup>かな</sup>

壺<sup>ぼ</sup>眼<sup>まなこ</sup>を凝<sup>こ</sup>してその泣<sup>な</sup>くを眺<sup>な</sup>むる外はあらざりけり。

彼は泣きて泣きて止まず。

「解らんな！ 一体どう云ふんか、ああ、私<sup>わし</sup>に用と云ふのは？」

朽木<sup>おのづか</sup>の自<sup>おのづか</sup>ら顔<sup>か</sup>れ行<sup>く</sup>くらんやうにも打<sup>うち</sup>萎<sup>し</sup>れて見えし老女は、猛<sup>も</sup>

然<sup>うねん</sup>として振<sup>し</sup>仰<sup>ほ</sup>ぎ、血<sup>しほ</sup>声<sup>こゑ</sup>を搾<sup>しぼ</sup>りて、

「この大<sup>おほ</sup>騙<sup>かた</sup>め！」

「何ぢやと！」

「大、大悪人！ おのれのやうな奴が懲役に行かずに、内の……

内の……雅之まさゆきのやうな孝行者が……先祖を尋ねれば、甲斐国かいのくに

の住人 武田大膳太夫 信玄入道、田夫野人の為に欺かれて、

このまま断絶する家へ誰が嫁に来る。柏井かしわいの鈴ちやんがお嫁に

来てくれれば、私の仕合わたしは言ふまでもない、雅之もどんなにか嬉

からう。子を捨てる藪やぶは有つても、懲役みずに遣る親は無いぞ。二十

七にはなつても世間不見みずのあの雅之、能ようも能うもおのれは瞞だまし

たな！ さあ、さあさ讐かたきを討つから立合ひなさい」

直行は舌を吐きて独語ひとりごちぬ。

「あ、いよいよ気違じやわい」

見る見る老女の怒いかりは激して、形ぎようそう相漸くおどろおどろしく、

物の怪もののけなどの憑ついたるやうに、一挙一動も全くその人ならず、足

を踏鳴し踏鳴し、白齒まばらの疎きばなるを牙の如く露あらはして、一念の凝これる

まなじり  
眸は直行の外ほかを見ず、

「歿なくなられた良人つれあひから懇々くれぐれも頼まれた秘蔵の秘蔵の一人子ひとりっこ、

それを瞞あやしておのれが懲役なぎなたに遣つたのだ。此方このほうを女あなどと侮あなつてさや

うな不埒ふらちを致したか。長刀の一手も心得てゐるぞよ。恐入つた

か」

彼は忽たちまちさも心地快こころちよげに笑へり。

「さうあらうとも、赦ゆるします。内には鈴すうちやんが今日を曠はれと着飾

つて、その美しさと謂ふものは！ ほんにまああんな縹きりよう致と云

ひ、氣立と云ひ、諸芸も出来れば、読<sup>よみ</sup>、書<sup>かき</sup>、針仕事<sup>はりしごと</sup>、そんなことは言つてゐるところではない。頸<sup>くび</sup>を長くして待つてお在<sup>いで</sup>だのに、早く歸つて来ないと云ふ法が有るのですか。大きにまあお世話様でございましたね、さあさ、馬車を待たして置いたから、履<sup>はきも</sup>物は<sup>の</sup>ここに在るよ。なあに、おまへ私はね、瀟<sup>きしや</sup>車で行くから訳は無いとも」

かく言ふ間も忙<sup>せは</sup>しげに我が靴を脱ぎて、其<sup>そこ</sup>処に直すと見れば、背負<sup>ひ</sup>し風呂敷包の中<sup>なか</sup>結<sup>ゆひ</sup>を釈きて、直行が前に上<sup>うは</sup>掛<sup>かけ</sup>の油紙を披<sup>ひろ</sup>げたり。

「さあさ、お前の首をこの中へ入れるのだ。ころつと落して。直<sup>ちき</sup>に落ちるから、早く落してお了<sup>り</sup>ひなさい」

さすがに持もてあつか扱あつかひて直行の途方に暮れたるを、老女は目を纖ほそめて、何処いづこより出づらんやとばかり世にも奇あやしき声を発はなちて緩ゆるく笑ひぬ。彼は謂いひし知らぬ凄せい氣きに打れて、覺えず肩そびやを聳そびかせり。

懲役と言ひ、雅之と言ふに因よりて、彼は始めてこの狂女の身元を思合せぬ。彼の債務者なる飽浦雅之は、私書偽造罪を以もつて彼の被告としてこの十数日ぜん前、罰金十円、重禁錮じゅうきんこ一箇年に処せられしなり。實げにその母なり。その母はこれが為に乱心せしか。  
爾しかおも思おもへりしのみにて直行はその他に猶なほも思ふべき事あるを思ふを欲せざりき。雅之の私書偽造罪をもて刑せられしは事實の表にして、その罪は裏面に彼の謀はかりて陥はかれたるなり。

彼等の用ゐる悪手段うちの中に、人の借かるを求めて連帶者を得るに



窮するあれば、その一判にても話合の上は貸さんと称へて先づ誘ひ、然る後、但し証書の体を成さしめんが為、例の如く連帯者の記名調印を要すればとて、仮に可然き親族知己などの名義を私用して、在合ふ印章を捺さしめ、固より懇意上の内約なればその偽なるを咎めず、と手輕に持掛けて、実は法律上有効の証書を造らしむるなり。借方もかかる所業の不義なるを知るといへども、一は焦眉の急に迫り、一は期限内にだに返弁せば何事もあるじと姑息して、この術中には陥るなりけり。

期にびて還さざらんか、彼は忽ち爪牙を露し、陰に告訴の意を示してこれを脅し、散々に不当の利を貪りて、その肉尽き、骨枯るの後、猶ほ饜く無き慾は、更に件の連帯者に対して寢耳に

水の強制執行を加ふるなり。これを表沙汰おもてぎたにせば債務者は論無  
う刑法の罪人たらざるべからず、ここに於おいて誰たれか恐慌し、狼狽ろうばいし、  
悩乱し、号泣し、死力を竭つくして七所借ななところかりの調達ちようだつを計らざらん。  
この時魔の如き力は喉のんどやくを扼してその背をうつ、人の死と生とは渾すべ  
て彼が手中に在りて緊握せらる、欲するところとして得られざる  
は無し。

雅之もこの※わなに繋かかりて学友の父の名を仮りて連印者に私用した  
りき。事の破綻はたんに及びて、不幸にも相識れる学友は折から海外に  
遊学して在らず、しかも父なる人は彼を識らざりしより、その間  
の調停成らずして、彼の行為は終つひに第二百十条の問ふところとな  
りぬ。

法律は鉄腕の如く雅之を拉し去りて、剩さへ杖に離れ、涙に蹠  
 ふ老母をば道の傍に返して顧ざりけり。噫、母は幾許この  
 子に思を繫けたりけるよ。親に仕へて、此上無う優かりしを、柏  
 井の鈴とて美き娘をも見立てて、この秋には妻すべかりしを、  
 又この歳暮には援く方有りて、新に興るべき鉄道会社に好地位を  
 得んと頼めしを、事は皆休みぬ、彼は人の齒せざる国法の罪人と  
 なり了れり。耻辱、憤恨、悲歎、憂愁、心を置惑ひてこの母は  
 終に発狂せるなり。

無益に言を用ゐんより、唯手柔に撮み出すに如かじと、直  
 行は少しも逆はずして、

「ああ宜いが。この首が欲いか、遣らうとも遣らうとも、ここで

は可かんから外へ行かう。おもてさあ一処に來た」

狂女は苦々しげに頭を掉りて、かしらふ

「お前さんの云ふことは皆妄だ。うそその手で雅之を瞞したのだらう。だま

それ、それ見なさい、親孝行の、正直者の雅之を瞞だまくらか着して、

散々金を取つた上に懲役に遣つたに相違無いと云ふ一札をこのいつさつ

通入れただぢやないか、これでも未だ晶しい顔をしてゐるのか」ましうじら

打披うちひろげたりし油紙を取りて直行の目先へ突付くれば、何を包

みし移うつりが香にや、胸悪き一種の腥氣せいきありて夥く鼻を撲うちぬ。直行

は猶も逆はで已むなほ無く面を背けたるを、狂女は目を瞪りつつ雀こをど

躍りして、

「おおおお、あれあれ！ これは嬉しい、自然とお前さんの首が段

々細くなつて来る。ああ、それそれ、今にもう落ちる」

地には落さじとやうに慌あわてふためき、油紙もて承けんと為せる、その

ききうで

利腕をやにはに捉とらへて直行は格子こうしの外へおしださんと為たり。彼は

おさ

推れながら格子に縋すがりて差理無理争ひ、

しやりむり

「ええ、おのれは他ひとをこの崖がけから突落す気だな。この老婦としよりを騙だ

ましうち

討うに為るのだな」

わめ

喚わめきつつ身を捻返ねぢかへして、突掛けし力の怪き強さに、直行は踏ふ

みすべ

込こらして尻居に倒るれば、彼は囃はやし立てて笑ふなり。忽ち起上たちま

えりがみ

りし直行は彼の衿上かいつかを搔掴かきつかみて、力まかせに外方このかたへ突遣り、

ひま

手早く雨戸を引かんとせしに、軋きしみて動かざる間ひまに又駈かけ戻りて、

すさまじ

狂女はその凄き顔を戸口に顛あはせり。余りの可恐おそしさに直行は吾

を忘れてその顔をはたと撲ち、うひる 痿むところを得たりと鎖せば、外より割るるばかりに戸を叩きて、

「さあ、首を渡せ。大事な証文も取上げて了つたな、大事な靴も取つたな。くつどろぼう 靴盗坊、おほかた 大騙！ 首を寄来せ」

直行は佇みて様子を候ひゐたり。うかが 抜足差足忍び来れる妻は、

後より小声に呼びて、

「貴方、どうしました」

夫は戸の外を指してなほ去らざるを示せり。ゆびさ お峯は土間に護謨ゴム靴と油紙との遺散れるを見付けて、おちち 由無き質を取りけるよと思ひよしな 煩へる折しも、わづら

「頼みます、はい、頼みますよ」

と例の声は聞えぬ。お峯は胴顫どうぶるひして、長くここに留とどまるに堪へず、夫を勧めて奥に入りいにけり。

戸叩く音は後のちも撓たゆまず響きたりしが、直行の裏口より出でて窺うかがひける時は、風吹荒ふきすさぶ門かどの梅の飛雪ひせつの如く乱点して、燈火の微ほのかに照す処その影は見えざるなりき。

次の日も例刻になれば狂女は又訪とひ来れり。主は不在あるじなりとて、婢をんなをして彼の遺のこせし一二品ふたしなを返さしめけるに、前夜の暴あれに暴れけしきし気色はなくて、殊勝に聞分けて歸り行きぬ。

お峯はその翌日も必ず来きたるべきを懼おそれて夫の在宅を請ひけるが、果して来にけり。又試をんなに婢ないだを出して不在よしの由を言はしめしに、こたびは直ちきに立去らで、

「それぢやお歸来までここでお待ち申しませう。実はね、是非お受取申す品があるので、それを持つて歸りませんと都合が悪いのですから、幾日でもお待ち申しますよ」

彼は戸口に蹲りて動かず。婢は様々に言作へて賺しけれど、一声も耳には入らざらんやうに、石仏の如く応ぜざるなり。彼は已む無くこれを奥へ告げぬ。直行も為ん術あらねば棄措きたりしに、やや二時間も居て見えずなりぬ。

お峯は心苦がりて、この上は唯警察の手を借らんなど噪ぐを、直行は人を煩すべき事にはあらずとて聴かず。さらば又と来ざらんやうに逐払ふべき手立のありやと責むるに、害を為すにもあらねば、宿無犬の寝たると想ひて意に介るなどのみ。意に介



くまじき如きを故に夫には学ばじ、と彼ははらだたし腹立はく思へり。こ  
 の一事いちじのみにあらず、お峯は常に夫の共に謀はかると謂ふこと無く、  
 をんなわらべあなど女をんな童わらべと侮れるやうに取合はぬ風あるを、口惜くちをしくも可恨うらめしくも、  
 又或時は心細さの便たよりな無き余に、神を信ずる念は出でて、夫の頼  
 むに足らざるところをば神明しんめいの冥護みようごに拠よらんと、八百万やほよろづの  
 神といふ神は差別しやべつな無く敬神せるが中にも、ここに数年前ぜんより新  
 に神道の一派を開きて、天尊教と称ふるあり。神体あがと崇めたるは、  
 その光紫の一大明みようじよう星ほしにて、御名おんなを大御明おおみあかり尊のみことと申す。天て  
 地渾沌んちこんとんとして日月じつげつも未だ成らざりし先高天原たかまがはらに出現しま  
 せしに因よりて、天上下万物つかさの司つかさと仰ぎ、諸もろもろの足らざるを補ひ、  
 総すべて欠けたるを完まつたうせしめんの大御誓おほみちかひをもて国土百姓やすらけを寧く恵

ませ給ふとなり。彼は夙に起信して、この尊をば一身一家の守護神と敬ひ奉り、事と有れば祈念を凝して偏に頼み聞ゆるにぞありける。

この夜は別して身を浄め、御燈の数を献げて、災難即滅、怨敵退散の祈願を籠めたりしが、翌日の点燈頃ともなれば、

又来にけり。夫は出でて未だ帰らざれば、今日若し罵り噪ぎて、

内に躍入ることもやあらば如何せんと、前後の別知らぬばかり

に動顛して、取次には婢を出し遣り、躬は神棚の前に駈着け、

顛聲を打揚げ、丹精を抽でて祝詞を宣りゐたり。狂女は不在

と聞きて敢て争はず、昨日の如く、ここにて归来を待たんとて、

おなじ處に同じ形して蹲れり。婢は格子を鎖し固めて内に入りける

が、暫くは音も為ざりしに、遽にはかに物語る如き、或は罵る如き声の頻しきりに聞ゆるより主あるじの知らで帰来かへりきて、捉とらへられたるにはあらずや、と台所の小窓より差さしのぞ覗けば、彼の外には人も在らぬに、在るが如く語るなり。その語るところは婢の耳に聞分けかねたれど、我子あるじがここの主に欺かれて無実の罪に陥されし段々を、前後不揃ひに泣いつ怒りつ訴ふるなり。

## 第七章

子の讐かたきなる直行が首を獲えんとして夕々ゆふべゆふべに狂女の訪ひ来ると八日およにべり。浅ましとは思へど、逐おひて去らしむべきにあら

ず、又門かどぐち口に居たりとて人を騒がすにもあらねば、とにもかく  
 にも手を着けかねて棄措すておかるるなりき。直行が言へりし如く、畢ひつき  
 竟よう彼は何等の害をも加ふるにあらざれば、犬の寝たると太だ扱  
 ばざるべけれど、縮ちりめん緬ひふの被風着たる人の形の黄昏たそがるる門の薄寒  
 きに踞つくばひて、灰色の剪髪きりがみを搔乱かきみだし、妖星ようせいの光にも似たる眼  
 を睨ねめそら反して、笑ふかと見れば泣き、泣くかと見れば憤いり、己おのれの  
 胸のやうに際そこひも知らず黒く濁れる夕暮の空に向ひてその悲かなしみと恨と  
 を訴へ、腥なまぐさき油紙ひねを拈りては人の首を獲んを待つなる狂女！ よ  
 し今は何等の害を加へずとも、終つひにはこの家に祟たたりを作すべき望を  
 繋かくるにあらずや。人の執着の一念は水をも火と成し、山をも海  
 と成し、鉄つんぎを劈いはほき、巖いはほを砕くためしの例、ましてや家めつを滅し、人みなごろしを塵に

すなど、塵ちりを吹くよりも易やすかるべきに、可おそ恐しや事無くてあれかしと、お峯ひとは独いひしり謂いひし知らず心を傷いたむるなり。

夫は決けして雅之の私書偽造を己おのれの陥たれし巧たくみなりとは彼に告げざれば、悪まさは正まく狂女の子に在りて、此方こなたに恨を受くべき筋は無く、自おのづからかかる事いも出来でるは家業の上の勝負にて、又一方には貸かしだふ

倒れの損耗あるを思へば、所詮しよせん仆たふし、仆あさるるは商あきなひの習と、お

峯おのづかは自おのづから意を強うして、この老女ろうによの狂くるを発はせしを、夫なの為なせる業わざとは毫つゆも思よひ寄よるにあらざりき。さは謂いへ、人の親の切なさけなる情

を思へば、実げにさぞと肝こたに徹ふる節ふし無なきにもあらざるめり。大方たかか筋たより人あは恨あまれて、奇あき殃わざはひにも遭あふなればと唯思過ただおもひすごされては窮きはまりな無おそき恐怖おその募もるのみ。

日に日に狂女の忘れず通ひ来るは、陰ながら我等の命を絶たん  
 が為にて、多しばらくかど時門に居て動かざるは、その妄もうしゆう執ねんりきの念力を  
 籠こめて夫婦を呪のろふにあらずや、とほとほと信ぜらるるまでにお峯  
 が夕暮の心地は譬たとへん方無く悩されぬ。されば狂女の門かどに在る間  
 は、大御明尊の御前に打頻うちしきり祝詞を唱ふるにあらざれば凌しのぐ能あた  
 はず。かかる中にも心に些ちとの弛ゆるみあれば、煌こうこう々と耀かがやき遍わたれる御みあか  
 燈しの影遽かげはかくらに晦み行き、天尊てんそんの御像みかたちも朧おぼろに消失きえうせなんと吾わ  
 目がめに見ゆるは、納受のうじゆの恵に泄もれ、擁護おうごの綱も切れ果つるやと、  
 彼は身も世も忘るるばかりに念を籠こめ、烟けむりを立て、汗を流して神  
 慮を驚かすにぞありける。槍やりは降りても必ず来くべし、と震おちおそ摺すれ  
 ながら待たれし九日目の例刻になりぬれど、如何いかにしたりけん狂

女は見えず。鋭く<sup>さえかへ</sup>返りたるこの日の寒気は<sup>はり</sup>鍼もて<sup>はだへ</sup>膚に霜を種  
 うらんやうに覚えしめぬ。外には<sup>はげしきかぜいか</sup>烈風怒り号<sup>さけ</sup>びて、樹を鳴し、  
 屋を撼<sup>いへうごか</sup>し、砂を捲<sup>ま</sup>き、礫<sup>こいし</sup>を飛して、曇れる空ならねど吹揚げらる  
 ほこりおほはる埃に蔽れて、一天晦<sup>くら</sup>く乱れ、日色<sup>につしよくき</sup>黄に濁りて、殊<sup>こと</sup>に物可<sup>ものおそ</sup>  
 ろし恐<sup>おそ</sup>き夕暮の氣勢<sup>けはひ</sup>なり。

鰐淵<sup>かど</sup>が門の燈は硝子<sup>ガラス</sup>を二面まで吹落されて、火は消え、ランプ  
 くつがへは覆<sup>あかし</sup>りたり。内の燈火は常より鮮<sup>あざやかなるじ</sup>に主が晩酌<sup>ちやぶだい</sup>の喫<sup>あかし</sup>台<sup>ちやぶだい</sup>を照し、  
 ひばち<sup>か</sup>に架<sup>なべ</sup>けたる鍋の物は沸<sup>ふつふつ</sup>々と薰<sup>くん</sup>じて、はや一銚子<sup>ひとちようしか</sup>更へたる  
 に、未<sup>いま</sup>だ狂女の音容<sup>おとづれ</sup>はあらず。お峯は半危<sup>なかば</sup>みつつも幾分の安堵<sup>あんど</sup>  
 の思<sup>もてあそ</sup>を弄<sup>ふぜい</sup>び喜ぶ風情<sup>ふうせい</sup>にて、

「氣違<sup>い</sup>さんもこの風には弱つたと見えますね。もう毎<sup>いっ</sup>もきつと来

るのに来ませんから、今夜は来やしますまい、何ほ何でもこの風  
 ぢや吹飛されて了しまひませうから。ああ、真ほんに天尊様の御利益ごりやくがあ  
 つたのだ」

夫ちよくが差せる猪口を受けて、

「お相あひをませうかね。何は無くともこんな好い心持の時に戴いたく  
 とお美いいものですね。いいえ、さう続けてはとても……まあ、貴あ  
 方なた。おやおやもう七時廻つたんですよ。そんなら断いよいよ然今晚は来  
 ないと極きまりましたね。ぢや、戸締とじまりを為さして了ひませうか、真ほんに  
 今晚のやうな氣の霽せいせい々した、心の底しんから好い心持の事はありません  
 せんよ。あの氣違さんぢやどんなに寿いのちを短ちぢめたか知れはしません。  
 もうこれきり来なくなるやうに天尊様へお願い申しませう。はい、



戴ごしゅきませう。御酒もお美いしいものですね。なあにあの婆さんが唯ただこ怖はいのぢやありませんよ。それは氣味きびは悪うございますけれど  
 もさ、怖いより、氣味が悪いより、何と無く凄すこくて耐たまらないので  
 す。あれが来ると、悚然ぞつと、惣毛そうけだ豎たてつて体からだが竦すくむのですもの、唯  
 の怖おそいとは違ちがひますわね。それが、何だか、かう執とつ着つかれでもす  
 るやうな氣がして、あの、それ、能よく夢で可おそ恐ろい奴やつなんぞに追お  
 懸つかけられると、逃にげるには逃にげられず、声を出さうとしても出な  
 いので、どうなる事かと思ふ事がありませう、とんとあんなやう  
 な心持なんです。ああ、もうそんな話は止ませう。私は少し酔ひ  
 ました」

銚子かを更をんなへて婢もちきたの持来もちきたれば、

「金<sup>きん</sup>や、今晚は到頭来ないね、氣違<sup>き</sup>さんさ」

「好<sup>あん</sup>い塩梅<sup>ばい</sup>でございます」

「お前には後でお菓子<sup>ごほうび</sup>を御褒美に出すからね。貴方<sup>あなた</sup>、これはあの

氣違<sup>き</sup>さんとこの頃懇意になつて了ひましてね。氣違<sup>き</sup>の取次は金に限<sup>かぎ</sup>るのです」

「あ<sup>い</sup>ら可厭<sup>いや</sup>なことを有<sup>おつしや</sup>仰<sup>おほなみ</sup>いまし」

吹<sup>ふききた</sup>来<sup>きた</sup>り、吹去<sup>おほなみ</sup>る風は大浪の寄せては返す如く絶間無く轟<sup>とどろ</sup>き

て、その劇<sup>はげし</sup>きは柱などをひちひちと鳴<sup>なりゆる</sup>揺<sup>なりゆる</sup>がし、物打倒<sup>ひしめ</sup>す轟<sup>ひしめ</sup>き、

引断<sup>ひきちぎ</sup>る音、圧折<sup>へしお</sup>る響は此処<sup>ここかしこ</sup>彼処に聞えて、唯居<sup>きも</sup>るさへに胆<sup>ひや</sup>は冷

されぬ。長火鉢には怠らず炭を加へ加へ、鉄瓶<sup>てつびん</sup>の湯氣は雲を噴<sup>は</sup>く

こと頻<sup>しきり</sup>なれど、更に背面を圧する寒<sup>さむさ</sup>は鉄板<sup>てつばん</sup>などや負はさるるか

と、飲めども多く酔ゑひ成さざるに、直行は後を牽ひきて已やまず、お  
 峯も心こころいはひ祝いの数を過して、その地顔あかの赭あかきをば仮漆布ニスしきたるや  
 うに照り耀かがやかして陶然たり。

狂女は果して来こざりけり。歡よろこび酔ゑへるお峯も唯酔ゑへる夫も、褒  
 美もち貫なほよこしまひし婢も、十時近き比ころほひには皆寐鎮ねしづまりぬ。

風は猶も邪なほよこしまに吹募なほよこしまりて、高き梢こずゑははきは箒の掃くが如く撓たわめられ、疎  
 に散れる星の数は終つひに吹下ふきおろされぬべく、層々凝これる寒さむさほとんは殆ど有  
 らん限の生気を吸尽すさまじして、さらぬだに陰森たる夜色は益ますますす冥く、  
 益すさまじす凄すさまじからんとす。忽たちまちこの黒暗つんざを劈つんざきて、鰐淵あたりが裏木戸の辺  
 に一いちどう道の光は揚りぬ。低く発おこりて物に遮さへぎられたれば、何の火と  
 も弁わきまへ難くて、その迸ほとばしり発あかの朱けむく烟けむれる中に、母家もやと土蔵との

影は朧おぼろに顕あらはるともなく奪はれて、瞬またたくばかりに消失せしは、風

の強きに吹敷れたるなり。やや有りて、同じほどの火影の又映うつろふ

と見れば、早くも薄れ行きて、こたびは燃えも揚らず、消えも遣

らで、少時しば明を保ちたりしが、風の僅わづかの絶間を偷ぬすみて、閃々ひらひらと

納屋の板戸を伝ひ、始めて騰のぼれる焰は炳ほのほ然へいぜんとして四辺を照せり。

塀際へいぎに添すそひて人の形動くと見えしが、なほ暗くて了然さだかならず。

数息すそくの間にして火の手は縦横に蔓りつつ、納屋の内に乱入れば、

噴出ふきいづる黒烟くろけふりの渦あるひくづは或は頽たふれ、或は畳みて、その外を引韁ひきつつ

むとともに、見え遍わたりし家も土蔵も堆うづたかき黯黮あんたんの底に没して、闇

は焰に破られ、焰けふりは烟もみたに揉立てられ、烟けむりは更に風の為に碎かれつ

つも、蒸出す勢おびただしの夥おびければ、猶ほ所狭く漲りて、文目も分かず攪か

きみだ

乱れたる中より爆然と鳴りて、天も焦げよと納屋は一面の猛火

と変じてけり。かの了然さだかならざりし形はこの時明あきらに輝かされぬ。

宵に來くべかりし狂女の佇ためるなり。躍をどり狂ふ烟の下に自若として、

おもてただ

面も爛れんとすばかりに照されたる姿は、この災を司る鬼女など

の現れ出でにけるかと疑はしむ。實げに彼は火の如何いかに焚もえ、如何

に燬やくや、と嚴おごに監そるが如く皆を裂きて、その立てる処を一步も

移さず、風と烟と焰との相ま雜あひまじり、相あひ争あらそひ、相あひ勢きほひて、

力の限を互に奮ふるふをば、妙いくも為したりとや、漫笑そぞろみを洩もせる顔がんしよ

色くはこの世に匹たぐふべきものありとも知らず。

風の暴頻あれしきる響動どよみに紛れて、寝耳にこれを聞き着つくる者も無かり

ければ、誰一人出いでて噪さわがざる間に、火は烈々めらめらと下屋げやに延しきて、

厨くりやの燃立つ底より一声叫喚きようかんせるは誰たれ、狂女ききは々として高く笑ひぬ。

(七) の二

人々出合ひて打騒うちさわぐ比ころほひには、火元の建物の大半は烈火となりて、土蔵の窓々より焰ほのほを出し、はや如何いかにとも為んやうあらざるなり。さしもの強風ごうふうなりしかど、消防力つとめたりしに抛よりて、三十幾戸を焼きしのみにて、午前二時におよびて鎮火するを得たり。雑踏うちの裏より怪き奴は早くも拘引せられしと伝へぬ。かの狂女の去りも遣やらざりしが捕とられしなり。

火元と認定せらるる鰐淵方は塵一筋だに持出さずして、

あはれ憐むべき一片の焦土を遺したるのみ。家族の消息は直ちに警察の

じんもん 訊問するところとなりぬ。婢は命辛々逝了せけれども、目

覚むると齊く頭面は一面の火なるに仰天し、二声三声奥を呼

びすて捨にして走り出でければ、主たちは如何になりけん、知らずと

言ふ。夜明けぬれど夫婦の出で来ざりけるは、過など有りしには

あらずやと、警官は出張して搜索に及べり。

ねつかい 熱灰の下より一体の屍の半焦爛れたるが見出されぬ。目も

当てられず、浅ましう恹き限を尽したれど、主の妻と輒く弁ぜら

るべき面影は焚残れり。さてはその邇くを隈無く搔起し

けれど、他に見当るものは無くて、倉前と覚き辺より始めて焦

壊れたる人骨を掘出せり。酔ひて遁惑ひし故か、貪りて身を忘れし故か、とにもかくにも主夫婦はこの火の為に落命せしなり。家屋も土蔵も一夜の烟となりて、鰐淵の跡としては赤土と灰との外に覓むべきものもあらず、風吹迷ふ長烟短焰の紛糾する処に、独り無事の形を留めたるは、主が居間に備へ付たりし金庫のみ。

別居せる直道は旅行中にて未だ還らず、貫一はあだかもお峯の死体の出でし時病院より駈着けたり。彼は三日の後には退院すべき手筈なりければ、今は全く癒えて務を執るをも妨げざれど、事の極めて不慮なると、急激なると、瑣小ならざるとに心惑のみせられて、病後の身を以てこれに当らんはいと苦かりけ



るを、じんすい尽瘁して万端を処理しつつ、ひたすら直道の帰京を待てり。

枕をも得え挙げざりし病人の今かく健すこやかに起きて、常に来ては親く慰められし人の頑かたくなにも強かりしを、空く燼余の断骨に相見て、弔ことばふ言だにあらざらんとは、貫一の遽にはかにその真をば真とし能あたはざるところなりき。人は皆死ぬべきものと人は皆知れるなり。されどもその常に相見る人の死ぬべきを思ふ能はず。貫一はこの五年間の家族を迫せめての一人も余さず、家倉と共に焚やきつく尽されて一夜の中に儚はかなくなり了をはるに会ひては、おのれが懷ふところ裡の物の故無ゆゑなく消失せにけんやうにも頼み難く覚えて、かくては我身の上の今宵如い何かに成りなんをも料はかられざるをと、無常の愁しきりはらわたは頻に腸に沁むなり

けり。

住むべき家の痕跡あとかたも無く焼失せたりと謂いふだに、見果てぬ夢

の如し、まして併あはせて頼めし主夫婦あるじを喪うしなへるをや、音容幻おんまぼろしを去ら

ずして、ほとほと幽明さかひの界を弁あまつさぜず、剩あまつさへ久く病院の乾燥せる生

活こうに困こじて、この家を懷おもふこと切なりければ、追慕おその情は極きはまりて

迷執せし、迫せめては得るところもありやと、夜の晩おそきに貫い一は市いちヶ

谷やなる立退所たちのきじよを出でて、杖つゑに扶たすけられつつ程遠からぬ焼跡を弔

へり。

連日風立ち、寒かりしに、この夜は遽にはかに緩ゆるみて、朧おぼろの月の色も

暖あたたかに、曇うりともなく打霞うちかすめる町筋は静に眠れり。燻いぶりくさ臭いき悪

気は四辺あたりに充満みちみちて、踏荒されし道は水にしとり、燼もえがらうづもに埋れ、焼やけく

杭<sup>ひやげはら</sup> 焼<sup>や</sup> 瓦<sup>がはら</sup> など所狭く積重ねたる空地<sup>くうち</sup>を、火元とて板<sup>いたがこひ</sup> 囲<sup>こ</sup>も  
 得<sup>え</sup>為<sup>せ</sup>ず、それとも分かぬ焼原の狼藉<sup>ろうぜき</sup>として、鰐淵<sup>いへる</sup>が家居<sup>いえ</sup>は全く  
 形を失へるなり。黒焦に削れたる幹<sup>みき</sup>のみ短く残れる一<sup>ひとつ</sup>列<sup>つら</sup>の立木  
 の傍<sup>かたはら</sup>に、塊<sup>ちぢぢ</sup>堆<sup>たか</sup>く盛りたるは土蔵の名残<sup>なごり</sup>と踏み行けば、灰燼<sup>かいじん</sup>の熱氣  
 は未<sup>いま</sup>だ冷めずして、微<sup>ほのか</sup>に面<sup>おもて</sup>を撲<sup>う</sup>つ。貫一<sup>まへづゑ</sup>は前杖<sup>ちようぜん</sup>拄<sup>おこ</sup>いて悵<sup>ちようぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>  
 として佇<sup>たたず</sup>めり。その立てる二三步の前は直行が遺骨<sup>おこ</sup>を発<sup>は</sup>せし所な  
 り。恨むと見ゆる死顔の月は、肉<sup>き</sup>の片<sup>きれ</sup>の棄てられたるやうに朱<sup>あか</sup>く  
 敷<sup>し</sup>ける満地の瓦を照して、目<sup>め</sup>に入るものは皆伏<sup>い</sup>し、四望の空く寥<sup>り</sup>  
 ようりよう  
 々<sup>々</sup> たるに、黒く点せる人の影を、彼<sup>おのづか</sup>は自ら物<sup>もの</sup>凄<sup>すご</sup>く顧<sup>かへ</sup>らるる  
 なりき。

立尽せる貫一が胸には、在りし家居<sup>さま</sup>の状の明かに映じて、赭<sup>あか</sup>く

光れるお峯が顔も、苦にがき口付せる主が面も眼に浮びて、歴々まざまざと  
 相さしむか対へる心地もするに、姑しばらくはその境に己おのれを忘れたりしが、や  
 がつて徐しづかに仰ぎ、徐に俯ふして、さて徐に一步を行きては一步を返し  
 つつ、いとど思に沈みては、折々涙をも推おしぬぐ拭ひつ。彼は転うたた人  
 生の凄せ涼いりようを感じて禁ずる能あたはざりき。苟いやしくもその親める者の  
 半にして離れ乖そむかざるはあらず。見よ或はかの棄てられし恨を遺のこ  
 し、或はこの奪はれし悲かなしみに遭ひ、前の恨の消えざるに又新なる悲  
 を添ふ。棄つる者は去り、棄てざる者は逝ゆき、然けいぜんとして吾われひ  
 独とり在り。在るが故に慶よろこぶべきか、亡なきが故に悼いたむべきか、在  
 る者は積憂の中に活いき、亡き者は非命の下に殯たふる。抑もこの活かつと  
 この死とは孰いづれあはれを哀み、孰かなしを悲まん。

吾が煩悶はんもんの活を見るに、彼等が慘憺さんたんの死と相あひ同おなじからざるなし、但殊ただことにするところは去ると留るとのみ。彼等の死ありて聊いささか吾が活くるしの苦きをも慰むべきか、吾が活ありて、始めて彼等が死いたましの傷きを弔ふに足らんか。吾が腸ちようは断たれ、吾が心は壊やぶれたり、彼等が肉は爛ただれ、彼等が骨は砕けたり。活きて爾しかく苦める身をも、なほさすがに魂たましひも消ぬべく打うち駭おどろかしつる彼等が死しにぎ状まなるよ。産を失ひ、家を失ひ、猶なほも身を失ふに尋常の終を得ずして、極悪の重罪の者といへども未だ曾いまて如かくのごと此はづかしめき虐刑の辱を受けず、犬畜生の末までも箇様かようの業は曝さらさざるに、天か、命めいか、或あるは応報か、然れども独りひと吾が直行をもて世間に善を作なさざる者と為なすなかれ。人情は暗中に刃やいばを揮ひ、世路は到る処に陷かん穽せいを

設け、陰に陽に悪を行ひ、不善を作さざるはなし。若し吾が直行  
 の行ふところをもて咎むべしと為さば、誰か有りて咎められざら  
 ん、しかも猶甚きを為して天も憎まず、命も薄んぜず、応報もこ  
 れを避るもの有るを見るにあらずや。彼等の惨死を辱むるなかれ、  
 適<sup>たまた</sup>ま奇禍を免れ得ざりしのみ。

かく念<sup>おも</sup>へる貫一は生<sup>しやうぜん</sup>前の誼<sup>よし</sup>深<sup>ふか</sup>かりし夫婦の死を歎きて、  
 この永<sup>わかれ</sup>き別<sup>やるかた</sup>を遣<sup>い</sup>方も無く悲み惜むなりき。さて何時<sup>いつ</sup>までかここ  
 に在らんと、主の遺骨を出せし辺を拝し、又妻の屍の横はりし処  
 を拝して、心<sup>こころ</sup>侘<sup>わび</sup>く立去らんとしたりしに、彼は怪くも遽<sup>にはか</sup>に胸  
 の内の搔<sup>かき</sup>乱<sup>みだ</sup>るる心地するとともに、失せし夫婦の弔ふ者もあら  
 で闇路の奥に打棄てられたるを悲く、あはれ猶<sup>なほ</sup>少<sup>しばし</sup>時留らずやと、

いと迫<sup>せ</sup>めて乞ひ縋<sup>すが</sup>ると覺ゆるに、行くにも忍びず、又立還りて積  
みたる土に息<sup>いこ</sup>へり。

實<sup>げ</sup>に彼も家の内に居て、遺骸<sup>なきがら</sup>の前に限知られず思ひ乱れんよ  
り、ここには亡き人の傍<sup>そば</sup>にも近く、遺言に似たる或る消息をも得  
るらん想<sup>おもひ</sup>して、立てたる杖に重き頭<sup>かしら</sup>を支へて、夫婦が地下に齎<sup>もたら</sup>せ  
し念々を冥<sup>めい</sup>搜<sup>そう</sup>したり。やがて彼は何の得るところや有りけん、  
繁<sup>しげ</sup>き涙は滂沱<sup>はらはら</sup>と頬<sup>ほほ</sup>を伝ひて零<sup>こぼ</sup>れぬ。

夜陰<sup>とどろ</sup>に轟く車ありて、一散<sup>とば</sup>に飛し来りけるが、焼場<sup>やけば</sup>の際<sup>きは</sup>に止<sup>とどま</sup>  
て、翩<sup>ひらり</sup>と下立ちし人は、直<sup>ただ</sup>ちに鰐淵<sup>あゆみ</sup>が跡の前に尋ね行きて歩<sup>とど</sup>を住  
めたり。

焼<sup>やけ</sup> 瓦<sup>がはら</sup>の踏<sup>ふみ</sup>破<sup>しだ</sup>かるる音<sup>おもて</sup>に面<sup>もた</sup>を擡<sup>もた</sup>げたる貫<sup>く</sup>一<sup>だん</sup>は、件<sup>くだん</sup>の人影<sup>の</sup>の

近く進来るをば、誰ならんと認むる間も無く、

「間さんですか」

「おお、貴方は！ お帰来でしたか」

その人は待ちに待たれし直道なり。貫一は忙しく出迎へぬ。向ひて立てる両箇は月明に面を見合ひけるが、各口吃して卒に言ふ能はざるなりき。

「何とも不慮な事で、申上げやうもございません」

「はい。この度は留守中と云ひ、別してお世話になりました」

「私は事の起りました晩は未だ病院に居りまして、かう云ふ事とは一向存じませんで、夜明になつて漸く駈着けたやうな始末、今更申したところが愚痴に過ぎんですけれど、私が居りましたら



まさかこんな事にはお為せ申さんかつたと、実に残念でなりませ  
 ん。又お二人にしても余り不覚な、それしきの事に狼狽ろうばいされる方  
 ではなかつたに、これまでの御寿命であつたか、残のこり多おほい事を  
 致しました」

直道は塞ふさぎし眼を怠まなこげに開きて、

「何もかも皆焼けましたらうな」

「唯一ひとしな品、金庫が助りました外には、すつかり焼いて了ひまし  
 た」

「金庫が残りました？ 何が入つてゐるのですか」

「貨かねも少しは在りませうが、帳簿、証書の類おもが主でございます」

「貸金に關した？」

「さやうで」

「ええ、それが焼きたかつたのに！」

口惜しくちをとの色は絶したたかその面おもてに上のぼり。貫一は彼が意見の父と相あ容ひいれずして、年とし来別居ころせる内情を詳つまびらかに知れば、迫せめてその喜ぶべきをも、却かへつてかく憂うれひと為なす故ゆゑを曉さとれるなり。

「家の焼けたの、土蔵の落ちたのは差支さしつかへ無いのです。寧むしろ焼いて了はんければ成らんのでしたから、それは結構です。両親なくの歿なつたのも、私わたくしであれ、貴方であれ、かうして泣いて悲む者は、ここに居る二人きりで、世間に誰一人……さぞ衆みんなが喜んでゐるだらうと思ふと、唯親なくを喪なくしたのが情無なさけいばかりではないのですよ」

されども堰敢せきあへず流るるは恩愛の涙なり。彼はを憚はばりし父と彼を

畏れし母とは、決して共に子として彼を慈むを忘れざりけり。その憚られ、畏れられし点を除きては、彼は他の憚られ、畏れられざる子よりも多く愛を被りき。生きてこそ争ひし父よ。亡くての今は、その聴れざりし恨より、親として事へざりし不孝の悔は直道の心を責むるなり。

生なま暖あたき風は急に來りてその外套の翼を吹捲りぬ。こはここに失せし母の賜ひしを、と端無く彼は憶おもひ起おこして、さばかりは有ありのすさびに徳とも為ざりけるが、世間に量り知られぬ人の数の中に、誰か故無くして一紙を与ふる者ぞ、我は今聘へいせられし測量地より歸來れるなり。この學術とこの位置とを与へて恩と為ざりしは誰なるべき。外にこれを求むる能はず、重ねてこれを得べ

からざる父と母とは、相携へて杳に迢に隔つる世の人となりぬ。  
はるか

炎々たる猛火の裏に、その父と母とは苦み悶えて援を呼びけん  
うち  
いかばかり

は幾許ぞ。彼等は果して誰を呼びつらん。思ここに到りて、

直道が哀咽は渾身をして涙に化し了らしめんとするなり。  
あいえつ  
こんしん  
をは

「喜ぶなら世間の奴は喜んだが可いです。貴方一箇のお心持で御  
あなたひとり

両親は御満足なさるのですから。こんな事を申上げては実に失礼

ですけれども、貴方が今日まで御両親をお持ちになつてゐられ  
こんにち

たのは、私などの身から見ると何より可羨いので、この世  
わたくし  
うらやまし

の中に親子の情愛ぐらゐる詐の無いものは決して御座いませんな、

私は十五の歳から孤児になりましたのですが、それは、親が附  
とし  
みなしご

いてをらんと見縊られます。余り見縊られたのが自棄の本で、遂  
みくび  
やけもと  
つひ

に私も真人間になりそこな成損つて了つたやうな訳で。固より己おのれの至ら  
 ん罪ではありませんけれど、抑も親そもその附いてをらんかつたのが非常  
 な不仕合ふしあはせで、そんな薄命な者もかうして在るのですから、それ  
 はもう幾歳いくつになつたから親に別れて可いと謂いふ理窟りくつはありません  
 けれど、聊いささか慰むるに足ると、まあ、思召おほしめさなければなりません  
 一

貫一のこの人に向ひて親く物言ふ今夜の如き例ためしはあらず、彼の  
 物言はずとよりは、この人の惡にくみ遠とほざけたりしなり。故は、彼こそ  
 父が不善の助手なれと、始より畜生視して、得べくば撲うつて殺さ  
 んとも念ずるなりければ、今彼が言ことばの端々はしはしに人がましき響ある  
 を聞きて、いと異あやしと思へり。

「それでは、貴方真人間に成なりそこな損こつたとお言ひのですな」

「さうでございます」

「さうすると、今は真人間ではないと謂ふ訳ですか」

「勿もちろん論でございます」

直道は俯うつむきて言はざりき。

「いや貴方のやうな方に向つてこんな太ふてくさ腐れた事を申しては済

みません。さあ、参りませうか」

彼はなほ俯うつむき、なほ言はずして、頷うなづくのみ。

夜は太いたく更ふけにければ、さらでだに音を絶たてる寂しづ静かきはここに

澄すみわた徹ちやうりて、深くも物を思入る苦しさに直道が蹂ふみ躪にじる靴の下に、

瓦もろの脆わく割るるが鋭く響きぬ。地は荒れ、物は毀こぼれたる中に一箇ひとり

は立ち、一箇ひとりは偃いこひて、言ことばあらぬ姿の佗わびしげなるに照すとも無き  
 月影の隠々と映添さしそひたる、既に彷彿ほうふつとして悲かなしみの図えがきを描成なせり。  
 かくて暫しばらく有りし後、直道は卒然言を出いだせり。

「貴方、真人間に成つてくれませんか」

その声音こわねの可うれはし愁き底には情なさけも籠れりと聞えぬ。貫一は粗彼ほぼの  
 意を曉さとれり。

「はい、難ありがた有うございます」

「どうですか」

「折角のお言ことばではございしますが、私わたくしはどうぞこのままにお措おき下

さいまし」

「それは何なぜ為ですか」

「今更真人間に復かへる必要も無いのです」

「さあ、必要は有りますまい。私も必要から貴方にお勧めするのではない。もう一度考へてから挨拶あいさつをして下さいな」

「いや、お氣に障さはりましたらお赦ゆるし下さいまし。貴方とは従来これまで浸々しみじみお話を致した事もございませんで私といふ者はどんな人物

であるか、御承知はございますまい。私の方では毎々お噂うはさを伺つて、能く貴方を存じてをります。極潔ごくきよいお方なので、精神的に

傷きずいたところの無い御人物、さう云ふ方に対して我々などの心事

を申上げるのは、實際恥入る次第で、言ふ事は一々曲つてゐるのですから、正ただしい、直すぐなお耳へは入らいんところではない。逆ふのでございませう。で、潔い貴方と、拗ねぢけた私とは、始からお話は



合はんのですから、それでお話を為る以上は、どうぞ何事もお聞ききな

流ながしに願ひます」

「ああ、善く解りました」

「真人間になつてくれんかと有おつしや仰つて下すつたのが、私は非常にうれし嬉しいのでございます。こんな商売は真人間の為る事ではない、と知つてゐながらかうして致してゐる私の心中、辛つらいのでございます。そんな思をしつつ何な為ぜしてゐるか！ 曰いはく言難いひがたしで、精神的に酷ひどく傷けられた反動と、先まづ思おほしめ召して下さいまし。私が酒が飲めたら自暴酒でも吃くらつて、体からだを毀こはして、それきりに成つたのかも知れませんが、酒は可いかず、腹を切る勇氣は無し、究竟つまりは意気地の無いところから、こんな者に成つて了つたのであらう

と考へられます」

彼の潔きよしと謂ふなる直道が潔き心の同情は、彼の微見ほのめかしたる述

懐の為に稍動ややされぬ。

「お話を聞いて見ると、貴方が今日こんにちの境遇になられたに就いては、余程深い御様子が有るやう、どう云ふのですか、悉く聞くはしき下きさいませんか」

「極愚ぐな話で、到底お聞せ申されるやうな者ではないのです。又自分もこの事は他ひとには語るまい、と堅く誓つてゐるのでありますから、どうも申上げられません。究竟つまり或事に就いて或者に欺かれたのでございます」

「はあ、それではお話はそれで措おきませう。で、貴方もあんな家

業は真人間の為べき事ではない、と十分承知してゐらるる、父などは決して愧はづべき事ではない、と謂つて剛情を張り通した。実に浅ましい事だと思ふから、或時は不如父いっその前で死んで見せて、最後の意見を為るより外は無い、と決心したことも有つたのです。父は飽くまで聴かん、私も飽くまで棄てては措おかん精神、どんな事をしてても是非改心させる覚悟で居つたところ、今度の災難で父を失つた、残念なのは、改心せずに死んでくれたのだ、これが一生の遺憾いかんで。一時に両親ふたおやに別れて、死目にも逢あはず、その臨終と謂へば、気の毒とも何とも謂ひやうの無い……凡およそ人の子としてこれより上の悲かなしみが有らうか、察し給へ。それに就けても、改心せずに死なしたのが、愈いよいよよ残念で、早く改心さへしてくれたらば、

この災難は免れたに違無い。いや私はさう信じてゐる。然し、過ぎた事は今更為方が無いから、父の代かはりに是非貴方に改心して貰もらひたい。今貴方が改心して下さいれば、私は父が改心したも同じと思つて、それで満足するのです。さうすれば、必ず父の罪も滅びる、私の念も霽はれる、貴方も正しい道を行けば、心安く、樂く世に送られる。

成程、お話の様子では、こんな家業に身を墜おとされたのも、已やむを得ざる事情の為とは承知してをりますが、父への追善、又その遺族の路頭に迷つてゐるのを救ふのと思つて、金を貸すのは罷やめて下さい。父に關した財産は一切貴方へお譲り申しますからそれを資本に何ぞ人をも益するやうな商売をして下されば、この上の

喜は有りません。父は非常に貴方を愛してをつた、貴方も父を愛して下さるでせう。愛して下さるなら、父に代つて非を<sup>あらた</sup>懺めて下さい」

聴ゐる貫一は露の晨の草の如く仰ぎ視<sup>み</sup>ず。語<sup>を</sup>り訖れども猶仰ぎ視ず、如何にと問るるにも仰ぎ視ざるなりけり。

忽ち<sup>たちま</sup>一閃<sup>いつせん</sup>の光ありて焼跡を貫く道の畔を照しけるが、その燈<sup>とも</sup>

の此方に向ひて近くは、巡査の見尤めて寄来るなり。両箇は一樣

にへて、待つとしもなく動かずゐたりければ、その前に到れる

角燈の光は限無く彼等を曝しぬ。巡査は如何に驚きけんよ、かれ

もこれも各慘として蒼き面に涙垂れたり——しかもここは人の泣

くべき処なるか、時は正に午前二時半。



続金色夜叉

与紅葉山人書

学海居士

紅葉山人足下。僕幼嗜読稗史小説。當時行於世者。京伝三馬一

九。及曲亭柳亭春水數輩。雖有文辭之巧麗。構思之妙絕。多是舐古人之糟粕。拾兔園之殘簡。聊以加己意焉耳。獨曲亭柳亭二子較之余子。學問該博。熟慣典故。所謂換骨奪胎。頗有可觀者。如八犬弓張俠客傳。及田舍源氏諸國物語類是也。然在當時。讀此等書者。不過閭巷少年。畧識文字。間有涉獵史傳者。識見淺薄。不足以判其巧拙良否焉。而文學之士斥為鄙猥。為害風素俗。禁子弟不得縱讀。其風習可以見矣。一年二十一二。稍讀水滸西遊金瓶三國紅樓諸書。兼及我源語竹取宇津保俊蔭等書。乃知稗史小說。亦文學之一途。不必止遊戲也。而所最喜。在水滸金瓶紅樓。及源語。能盡人情之隱微。世態之曲折。用筆周到。渾思巧緻。而源氏之能描性情。文雅而思深。金瓶之能寫人品。筆密



而心細。蓋千古無比也。近時小說大行。少好文辭者。莫不爭先攘臂其間。然率不過陋巷之談。鄙夫之事。至大手筆如金瓶源氏等者。寥乎無聞何也。僕及誦足下所著諸書。所謂細心邃思者。知不使古人專美於上矣。多情多恨金色夜叉類。殆與金瓶源語相似。僕反覆熟誦不能置也。惜範圍狹。而事跡微。地位卑而思想偏。未足以展布足下之大才矣。盍借一大幻境。以運思馳筆。必有大可觀者。僕老矣。若得足下之一大著述。快誦之。是一生之願也。足下以何如。

## 第一章

時を錢ぜになりとしてこれを換算せば、一秒を一毛に見積りて、壹

人前ちになまへの睡ねぶり量だか凡そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、

実に金五円七拾六錢に相当す。これを三百六十五日の一年に合計

すれば、金貳千壹百〇貳円四拾錢の巨額に上るにあらずや。され

ばここに二十七日と推おし薄つまりたる歳末の市中は物情きよう恟々とし

て、世界絶滅の期つひの終に宣告せられたらんもかくやとばかりに、

坐りし人は出でて歩み、歩みし人は走りて過ぎ、走りし人は足も

空に、合ふき離るけたたましさの氣立けんあひまく、肩相摩きずつしては傷こくあひうき、

ては砕けぬべきをも覚えざるは、心々こころごころに今を限かぎりと慌あわて騒ぐ事

ありて、不狂人も狂せるなり。彼等は皆過去あだの十一箇月を虚に送

りて、一秒ちりの塵の積める貳千余円の大金を何処いづくにか振落し、後悔

の尾しりに立ちて今更に血眼ちまなこを瞪みき、草を分け、瓦おこを揅おこしても、その行方ゆくへを尋ねんと為るにあらざるなし。かかる間ひまにも常ただは止一毛に値する一秒の壺銭ないし乃至拾銭にも暴騰せる貴々ききちようちよう重々ききちようちようの時ときは、速射砲を連つるべうち発はつにするが如く飛とび過るにぞ、彼等の恐慌は更に意こころ言ことも及ばざるなる。

その平生へいぜいに怠おこたり無なかりし天は、又今日けふに何の変易へんえきもあらず、悠々ゆうゆうとして蒼あをく、昭々ひろとして闊こうく、浩浩こうこうとして静しずに、しかも確然かくぜんとしてその覆おほふべきを覆おほひ、終日ひねもす北の風を下おろし、夕ゆふづく日の影かげを耀かがやかして、師走しはすの塵ちりの表おもてに高く澄みめり。見遍みわたせば両行かどの門かど飾ざりは一樣しめなに枝葉ふくかいの末かすみ広く寿山じゅざんの翠みどりを交かはし、十町じつちようの軒端のきばにしめなは、福海ふくかいの霞揺曳かすみして、繁華ふくかいを添かすみふる春待つ景色は、

うたふ  
転た旧り行く歳の魂を驚かす。

かの人々の式千余円を失ひて馳違ふ中を、梅提げて通るは誰

が子、獵銃担げ行くは誰が子、妓と車を同うするは誰が子、啣

楊枝して好き衣着たるは誰が子、或は二頭立の馬車を駆る者、

結納の品々担する者、雑誌など読みもて行く者、五人の子を数

珠繫にして勸工場に入る者、彼等は各若干の得たるところ有

りて、如 此 かくのごとく自ら足れりと為るにかあらん。これ等の少く失

へる者は喜び、彼等の多く失へる輩は憂ひ、又稀には全く失はざ

りし人の樂めるも、皆内には齷齪として、盈てるは虧けじ、虧け

るは盈たんと、孰かその求むるところに急ならざるはあらず。人

の世は三の朝より花の昼、月の夕にもその思の外はあらざれど、

ゆうきよう

勇 怯は死地に入りて始めて明なる年の関を、物の数とも為せざら

んほどを目にも見よとや、空臙からすねの酔ゑひを踏み、鉄鞭てつべんを曳ひき、一

巻のブックを懐ふところにして、嘉平治平かへいじひらの袴はかまの焼海苔やきのりを綴つづれる如うがきを穿

ち、フラネルゆかたの浴衣ゆかたの洗ざらひ曬あかぞめして垢染あかぞめにしたるに、文目あやめも分か

ぬ木綿縞もめんじまの布子ぬのこを襲かさねて、ジオンソン帽かほらいろの瓦色かほらいろに化けたる

を頂き、焦茶地の縞羅紗しまらしやの二重外套にじゆうまわしは何の冬誰たが不用をや譲ら

れけん、尋常なみなみよりは寸の薄つまりたるを、身材みのたけの人より豊なるに絡まと

ひたれば、例の袴は風ふきちぎにや吹断あやふれんと危ひらめくも閃きつつ、その人

は齡よはひ三十六七と見えて、形癪かたちやせたりとにはあらねど、寒樹の夕

空よに倚よりて孤なる風情ふぜい、独ひとり負げふ氣なうるはし無く麗はしくも富める髭髯ひげは、下

には乳ちの辺あたりまで、々さんさんと垂れて、左右ひねに拈りたるは八字の蔓つるを巻

きて耳の根にも およ びぬ。打見れば うちみ めんもはやか 面目爽に、稍 やや 傲れる色有れど

峻くはあらず、しかも今陶々然として酒興を発し、春の日長の野 の

辺を辿るらんやうに、西筋の横町をこの大路に出で来らんとす。

「瓢空く夜は静にして高楼に上り、酒を買ひ、簾を巻き、月を邀 むか

へて酔ひ、酔 中 剣を払へば光月を射る」

彼は節を ふし かしく微吟を放ちて、行く行くかつ楽むに似たり。打

晴れたる空は瑠璃色に夕榮えて、俄に冴え勝る し の目口に沁みて

磨 鍼を打つらんやうなるに、烈火の如き酔顔を差付けては太 ふとい

息嘘 きふ いて、右に一步左に一步と よろめ きつつ、

「往々 おうおう ひか 悲歌して独り流 ひと りゆうてい 涕す、君山 くんざん を さんきやく 却して湘 しようす

水平に桂樹 けいじゆ を しやくきやく 却して月更に明ならんを、丈夫 じようふ 志 こころざし 有

ありて……

と唱ひ出づる時、一隊の近衛騎兵は南頭に馬を疾めて、真

一文字に行手を横断するに会ひければ、彼は鉄鞭を植てて、

舞立つ砂煙の中に魁の花を装へる健児の参差として推行く後

影をば、壮なる哉と謂まほしげに看送りて、

「我四方に遊びて意を得ず、陽狂して薬を施す成都の市」

と漫にその詩の首をば小声朗に吟じゐたり。さては往来の違き

目も皆牽れて、この節季の修羅場を独天下に吃ひ酔へるは、何者

の暢気か、自棄か、豪傑か、悟か、酔生児か、と異き姿を見て

過る有れば、面を識らんと窺ふ有り、又はその身の上など思ひつ

つ行くも有り。彼は太く酔へれば総て知らず、町の殷賑を眺め

遣りて、何方いづれを指して行かんとも心定らず姑しばらく立てるなりけり。

さばかり人あやしに怪まるれど、彼は今日のみこの町に姿を顕あらはしたる

にあらず、折々散歩すらんやうに出来いでくることあれど、箇様かようの酔態

を認むるは、兼て注目せる派出所の巡查も希めづらしと思へるなり。

やがて彼は鉄鞭てつべんを曳鳴ひきならして大路を右に出でしが、二町ばか

りも行きて、乾いぬゐの方より狭き坂道の開きたる角かどに来にける途端とたんに、

風を帯びて馳はせ下りたる俤くるまは、生憎あいにく其方きなたによろめける酔客すいかくの賺よわの辺

を一衝ひとあて撞あてたりければ、彼は卻含はすみを打つて二間も彼方そなたへ撥飛はねとば

さると齊ひとしく、大地に横面よこづら擦すつて僵たふれたり。不思議にも無難に

踏ふみ留とどりし車夫は、この麓忽そこに氣を奪かれて立ちたりしが、面倒

なる相手と見たりけん、そのまま轅かぢを回して逃れんとするを、俤



の上なる黒綾くろあやの吾妻あづまコオト着て、素鼠すねずみ縮緬ちりめんの頭巾づきん被かれる  
 婦人は樺色かばいろ無地の絹臘虎きぬらつこの膝掛ひざかけを推除おしのけて、駐とめよ、返せと  
 悶もたゆるを、猶なほ聴かで曳えい々と挽ひき行く後うしろより、  
 「待て、こら！」と喝かつする声に、行く人の始て事有りと覚さとれるも  
 多く、はや車夫の不情とがを尤ことむる語も聞ゆるに、耐たまりかねたる夫人  
 は強しひて其処そこに下車して返り来りぬ。

例の物見高き町中なりければ、この忙せはき際きはをも忘れて、寄来よりくる  
 人数にんずは蟻ありの甘きを探りたるやうに、一面には遭難者の土つくばに踞くへる  
 周辺めりを擁し、一面には婦人の左右そに傍そばひて、目に物見んと揉もみたて  
 たり。婦人は途みちを来きつつ被かぶり物の紋羽もんは二重ふたへの小豆鹿子あづきかのこ  
 の手絡てがらしたる円鬚まるわけに、鼈甲脚べつこうあしの金七宝きんしつぼうの玉たまの後うしろ簪ざしを斜ななめ

に、高<sup>たか</sup>蒔<sup>まき</sup>絵<sup>ゑ</sup>の政<sup>まさ</sup>子<sup>こ</sup>櫛<sup>ぐし</sup>を翳<sup>か</sup>して、粧<sup>よそ</sup>は実<sup>まじ</sup>に塵<sup>ちり</sup>をも怯<sup>おそ</sup>れぬべき人の謂<sup>い</sup>ひ知<sup>ら</sup>ず思<sup>おも</sup>惑<sup>ひまど</sup>へるを、可<sup>いた</sup>痛<sup>は</sup>しの嵐<sup>あらし</sup>に堪<sup>た</sup>へぬ花<sup>かん</sup>の顔<sup>げ</sup>や、と群<sup>ぐん</sup>集<sup>じゆ</sup>は自<sup>おの</sup>ら声<sup>づか</sup>を斂<sup>をさ</sup>めて肝<sup>こた</sup>に徹<sup>てつ</sup>ふるなりき。

いと更<sup>おもて</sup>に面<sup>つづ</sup>の裏<sup>うら</sup>まほしきこの場<sup>ば</sup>を、頭<sup>あたま</sup>巾<sup>きん</sup>脱<sup>だつ</sup>ぎたる彼<sup>かれ</sup>の可<sup>はづ</sup>羞<sup>か</sup>しさ

と切<sup>い</sup>なさとは幾<sup>い</sup>許<sup>か</sup>なりけん、打<sup>うち</sup>赧<sup>あか</sup>めたる顔<sup>かほ</sup>は措<sup>お</sup>き所<sup>ところ</sup>あらぬ

やうに、人<sup>ひと</sup>堵<sup>ど</sup>の内<sup>うち</sup>を急<sup>いそ</sup>足<sup>あし</sup>に辿<sup>たど</sup>りたり。帽<sup>ぼう</sup>子<sup>し</sup>も鉄<sup>てつ</sup>鞭<sup>べん</sup>も、懷<sup>ふところ</sup>

にせしブツクも、薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>下<sup>げ</sup>駄<sup>だ</sup>の隻<sup>しか</sup>も投<sup>な</sup>散<sup>さん</sup>されたる中<sup>なかに</sup>に、醉<sup>すい</sup>客<sup>かく</sup>は半<sup>はん</sup>

ば身<sup>み</sup>を擡<sup>もた</sup>げて血<sup>ち</sup>を流<sup>なが</sup>せる右<sup>みぎ</sup>の高<sup>たか</sup>頬<sup>ほ</sup>を平<sup>へい</sup>手<sup>て</sup>に掩<sup>おほ</sup>ひつつ寄<sup>より</sup>来<sup>く</sup>る婦<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>を

打<sup>うち</sup>見<sup>み</sup>遣<sup>や</sup>りつ。彼<sup>かれ</sup>はその前<sup>まへ</sup>に先<sup>ま</sup>づ懦<sup>わ</sup>れず会<sup>あ</sup>釈<sup>しやく</sup>して、

「どうも取<sup>と</sup>んだ麁<sup>そ</sup>相<sup>そう</sup>を致<sup>いた</sup>しまして、何<sup>なん</sup>とも相<sup>あ</sup>済<sup>さい</sup>みませんでござい

ます。おや、お顔<sup>かほ</sup>を！ お目<sup>め</sup>を打<sup>ぶ</sup>ちましたか、まあどうも……」

「いや太<sup>たい</sup>した事は無いのです」

「さやうでございますか。何処<sup>どこ</sup>ぞお痛め遊ばしましたでございませう」

腰を得立てずゐるを、婦人はなほ氣遣<sup>きづか</sup>へるなり。

車夫は数<sup>あまたたび</sup>次<sup>こし</sup>腰を屈<sup>かが</sup>めて主人の後方<sup>うしろ</sup>より進出<sup>すすみい</sup>でけるが、

「どうも、旦那<sup>だんな</sup>、誠に申訳もございません、どうか、まあ平<sup>ひら</sup>に御

勘弁を願ひます」

まなこそなた

眼を其方に転じたる酔客は悲<sup>いか</sup>れるとしもなければ、声<sup>こゑ</sup> 肅<sup>おごそか</sup>に、

「貴様は善くないぞ。麁<sup>そ</sup>相を為たと思うたら何為<sup>なぜ</sup>車を駐<sup>と</sup>めん。逃

げやうとするから呼止めたんじや。貴様の不心得から主人にも恥<sup>か</sup>を搔<sup>か</sup>する」

「へい恐入りました」

「どうぞ御勘弁あそばしまして」

くるま  
俤の主の身を<sup>くだ</sup>下して辞を<sup>ことば</sup>添ふれば、彼も打<sup>うちうなづ</sup>領きて、

「以来氣を着けい、よ」

「へい……へい」

「早う行け、行け」

やをら彼は起たんとすなり。さては望外なる主従<sup>よろこびひきか</sup>の喜に引易へて、見物の飽氣<sup>あつけな</sup>無さは更に望外なりき。彼等は幕の開かぬ芝居に会へる想して、余に<sup>あまり</sup>落着の蛇尾<sup>だび</sup>振はざるを悔みて、はや忙<sup>いそが</sup>々<sup>はし</sup>き踵<sup>きびすかへ</sup>を回すも多かりけれど、又見栄<sup>みばえ</sup>あるこの場の模様<sup>なづこり</sup>に名残を惜みつつ去り敢<sup>あ</sup>へぬもありけり。

車夫は起ち悩める酔客を扶たすけて、履物はきものを拾ひ、鞭むちを拾ひて宛あ
 行てがへば、主人は帽を清め、ブックを取上げて彼に返し、頭巾を車
 夫に与へて、懇ねんごろがいに外套、袴の泥を払はしめぬ。免ゆるされし罪は消え
 ぬべきも、歴々まざまざと挫傷すりきずのその面おもてに残れるを見れば、疚やましきに堪へ
 ぬ心は、なほ為なすべき事あるを吝をしみて私わたくしせるにあらずやと省られ
 て、彼はさすがに見捨てかねたる人の顔を始は可いた傷ましと眺ながめたり
 しに、その眼色まなざしは漸く鋭く、かつは疑ひかつは怪むらんやうに、
 忍びては矚まもりつつ便無びんげに佇たたずみけるに、いでや長居は無益むやくとばか
 り、彼は蹠よろよろと踏ふみ出いだせり。

婦人はともかくにも遣過やりすごせしが、又何とか思おもひ直なほしけん、
 遽にはかに追行きて呼止めたり。頭かしらを捻向ねぢむけたる酔客はくもれる眼まなこを屹きと

見据ゑて、われひと自か他かと訝しさに言も出さず。ことばいだ

「もしお人ひと違ちがひでございましたら御免あそばしまして。貴方は、

あの、もしや荒尾さんではゐらつしやいませんか」

「は？」彼は覚えかへず身を回して、丁ちようと立てたる鉄鞭に仗り、こは

これ是白日の夢か、空華くうけの形か、正体見んと為れど、醉眼むなしの空く張る

のみにて、益ますす霽はれざるは疑うたがひなり。

「荒尾さんでゐらつしやいましたか！」

「はあ？ 荒尾です、私わたくし荒尾です」

「あの間貫一はざまを御承知の？」

「おお、間貫一、旧友でした」

わたくししぎさわ「私は嶋沢の宮でございます」

「何、鳴沢……鳴沢の……宮と有<sup>おつしや</sup>仰る……？」

「はい、間の居りました宅の鳴沢」

「おお、宮さん！」

奇遇に驚かされたる彼の酔<sup>ゑひ</sup>は頓<sup>とみ</sup>に半は消えて、せめて昔<sup>おもかげ</sup>の倂<sup>な</sup>を認<sup>う</sup>むるや、とその人を打<sup>うち</sup>眺<sup>なが</sup>むるより外はあらず。

「お久しぶりで御座いました」

宮<sup>よろこ</sup>は懽<sup>ひし</sup>び勇<sup>う</sup>みて犇<sup>はし</sup>と寄りぬ。

今は美<sup>うつく</sup>き俤<sup>くるま</sup>の主ならず、路傍の酔客ならず名<sup>な</sup>宣<sup>のり</sup>合<sup>あ</sup>へるかれとこ

れとの思<sup>い</sup>は如何<sup>かに</sup>。間貫一が鳴沢の家<sup>いかに</sup>に在りし日は、彼の兄<sup>いとし</sup>の如く

友として善<sup>いとし</sup>かりし人、彼の身の如く契<sup>いとし</sup>りて怜<sup>いと</sup>かりし人にあらずや。

その日の彼等は又<sup>はらから</sup>同胞<sup>はらから</sup>にも得<sup>した</sup>べからざる親<sup>しみ</sup>を以<sup>も</sup>て、膝<sup>ひざ</sup>をも交<sup>まじ</sup>へ

心をも語りしにあらずや。その日の彼等は多少の転変を覚悟せし一生の中に、今日の奇遇を算へざりしなり。よしざりとも、一たび同胞と睦合へりし身の、弊衣を飄して道に酔ひ、流車を驅りて富に驕れる高下の差別の自ら種有りて作せるに似たる如此きを、彼等は更に更に夢ざりしなり。その算へざりし奇遇と夢ざりし差別とは、咄々、相携へて二人の身上に逼れるなり。女気の脆き涙ははや宮の目に湿ひぬ。

「まあ大相お変り遊ばしたこと！」

「貴方も変りましたな！」

さしも見えざりし面の傷の可恐きまでに益す血を出すに、宮は持たりしハンカチーフを与へて拭はしめつつ、心も心ならず様



子を窺<sup>うかが</sup>ひて、

「お痛みあそばさすでせう。少しお待ちあそばさしまし」

彼は何やらん吩咐<sup>いひつ</sup>けて車夫を遣りぬ。

「直<sup>ちき</sup>この近くに懇意の医者が居りますから、其処<sup>そこ</sup>までいらしつて下さいまし。唯今俤を申附けました」

「何の、そんなに騒ぐほどの事は無いです」

「あれ、お殆<sup>あぶな</sup>うございますよ。さうして大相召上つてゐらつしやるやうですから、ともかくもお俤でお出<sup>いで</sup>あそばさしまし」

「いんや、宜<sup>よろ</sup>い、大丈夫。時に間はその後どうしましたか」

宮は胸<sup>むな</sup>先<sup>なき</sup>を刃<sup>やいば</sup>の透<sup>とほ</sup>るやうに覚<sup>おぼ</sup>ゆるなりき。

「その事に就きまして色々お話も致したので御座います」

「然し、どうしてゐますか、無事ですか」

「はい……」

「決して、無事ぢやない筈はずです」

生きたる心地もせずして宮の慙はぢをのの慄かたはらける傍に、車夫は見みぐるし苦からぬ一台の辻つじぐるま車を伴きたひ来れり。漸く面を挙げば、いつ又寄りしとも知らぬ人ひとたち立を、可いまはし忌くも巡查の怪ちかづみて近くなり。

## 第二章

鬚ひげふか深よこづらき横はりくすり面に貼あ葉あらおじようすけしたる荒あ尾お讓ひだ介はは既にあを蒼あへく酔ゑひさ醒さめて、煌こうこう々こうこうたる空気ランプの前に襞ひだもあらぬ袴はかまの膝ひざを丈じようろ

六に組み<sup>く</sup>て、接待<sup>せつたい</sup> 苳<sup>いたばこ</sup>の葉巻を燻<sup>くゆ</sup>しつつ意氣<sup>おご</sup>肅<sup>そ</sup>に、打<sup>うち</sup>菱<sup>し</sup>れ

たる宮と熊の敷皮を斜<sup>ななめ</sup>に差向<sup>さむか</sup>ひたり。こはこれ、彼の識<sup>し</sup>れると謂<sup>い</sup>

ひし医師の奥二階にて、畳敷にしたる西洋造の十畳間なり。物語

ははや緒<sup>いとぐち</sup>を解<sup>い</sup>きしなるべし。

「間<sup>はざま</sup>が影を隠<sup>かく</sup>す時、僕に遺<sup>のこ</sup>した手紙が有る、それで悉<sup>くは</sup>い様子を知

つてをるです。その手紙を見た時には、僕も顫<sup>ふる</sup>へて腹が立つた。

直<sup>すぐ</sup>に貴方<sup>あなた</sup>に会<sup>あ</sup>うて、是非これは思返<sup>おもひかへ</sup>すやうに飽くまで忠告して、

それで聴<sup>き</sup>かずば、もう人間の取扱は為<sup>な</sup>ちやをられん、腹の癒<sup>い</sup>ゆる

ほど打<sup>うち</sup>して、一生結婚の成らんやう立派<sup>かたは</sup>な不具<sup>ふぐ</sup>にしてくれや

う、と既にその時は立上<sup>たてあ</sup>つたですよ。然し、間<sup>ま</sup>が言<sup>ことば</sup>を尽<sup>つく</sup>しても貴

方が聴<sup>き</sup>かんと云ふ、僕<sup>こ</sup>の言<sup>ことば</sup>を容<sup>い</sup>れやう道理<sup>ことば</sup>が無い。又間<sup>ま</sup>を嫌<sup>きら</sup>うた

以上は、貴方は富山への売物じや。他の売物に疵きずを附けちや済ひとまん、とさう思うて、そりや実に矢も楯たても耐たまらん胸きすをつて了しまうたんです」

宮が顔を推当おしあてたる片袖かたそでの端はしより、連しきりに眉まゆの顰ひそむが見えぬ。

「宮さん、僕は貴方はさう云ふ人ではないと思つた。あれ程互に愛してをつた間はざまさへが欺かれたんぢやから、僕の欺れたのは無理も無いぢやらう。僕は僕として貴方を怨うらむばかりでは慊あきたらん、間に代つて貴方を怨うらむですよ、いんや、怨うらむ、七しち生しょうまで怨うらむ、

きつと怨うらむ！」

終つひに宮が得堪えたへぬ泣音なくねは洩もれぬ。

「間の一身を誤つたのは貴方が誤つたのぢや。それは又間にして

も、高が一婦女子いつぶじよしに棄てられたが為に志を挫くじいて、命を抛なげうつたも

同然の墮落に果てる彼の不心得は、別に間として大いに責めんけ

りやならん。然し、間が如何いかに不心得であらうと、貴方の罪は依

然として貴方の罪ぢや、のみならず、貴方が間を棄てた故ゆゑに、彼

が今日こんにちの有様に墮落したのであつて見れば、貴方は女の操みさをを破

つたのみでない。併あはせて夫を刺殺さしころしたも……」

宮は慄然りつぜんとして振仰あぎしが、荒尾の鋭き皆みなは貫一うらみが怨も憑うりた

りやと、その見る前に身の措所おきどころ無く打竦うちすくみたり。

「同じですよ。さうは思ひませんか。で、貴方の悔悟かいごされたのは

善い、これは人として悔悟せんけりやならん事。けれども残念な

がら今日こんにちに及いたんでの悔悟は業すでに晩おそい。間の墮落は間その人の死

んだも同然、貴方は夫を持つて六年、なあ、水は覆<sup>くつがへ</sup>つた。盆は破<sup>し</sup>れて了<sup>しま</sup>うたんじや。かう成つた上は最早<sup>もはや</sup>神の力も逮<sup>およ</sup>ぶことではない。お気の毒じやと言ひたいが、やはり貴方が自ら<sup>な</sup>作せる罪<sup>むくい</sup>の報<sup>むくい</sup>で、固よりかく有るべき事ぢやらうと思ふ」

宮は俯<sup>うつむ</sup>きてよよと泣くのみ。

あゝ、吾が罪！ さりとも知らで犯せし一旦の吾が罪！ その吾

が罪の深さは、あの人ならぬ人さへかくまで憎み、かくまで怨むか。さもあらば、必ず思知る時有らと言ひしその人の、争<sup>いか</sup>で争<sup>いか</sup>で吾が罪を容<sup>ゆる</sup>すべき。あゝ、吾が罪は終<sup>つひ</sup>に容<sup>ゆる</sup>されず、吾が恋人は終に再び見る能はざるか。

宮は胸<sup>むね</sup>潰<sup>つぶ</sup>れて、涙の中に人心地<sup>ひとこころ</sup>をも失はんとすなり。

おのれ、利を見て愛無かりし匹婦ひつぷ、憎しとも憎しと思はざるにあらぬ荒尾も、当面に彼の悔悟の切なるを見ては、さすがに情じようは動くなりき。宮は際はてしな無く顔を得えあ挙げずるたり。

「然し、好う悔悟を作なすつた。間が容さんでも、又僕が容さんでも、

貴方はその悔悟に因よつて自ら容されたんじや」

由よしな無なぐさめき慰藉は聞かじとやうに宮は俯ふしながら頭かしらを掉ふりて更に

泣入りぬ。

みづから

「自にても容されたのは、誰たれにも容されんのは勝まさつてをる。又

自ら容さるるのは、終には人に容さるるそれが始ぢやらうと謂いふ

もの。僕は未まだ未まだ容し難く貴方を怨む、怨みは為るけれど、今こ

んにち

日の貴方の胸中は十分察するのです。貴方のも察するからには、

他の者の間の胸中もまた察せにやならん、可いですか。さうして  
 執いづれが多く憐あはれむべきであるかと謂へば、間の無念は抑そもそもどんなぢやら  
 うか、なあ、僕はそれを思ふんです。それを思うて見ると、貴方  
 の苦痛を傍観するより外は無い。

かうして今日こんにち日ひ図らずお目に掛つた。僕は婦人として生涯の友

にせうと思うた人は、後にも先にも貴方ばかりじや。いや、それ  
 は段々お世話にもなつた、忝かたじけないと思うた事も幾いくたび度か知れん、そ  
 の媛レディ友に何年ぶりかで逢うたのぢやから、僕も実に可なつかし懐

う思ひました」

宮は泣音なくねの迸ほとばしらんとするを咬くひし緊めて、濡ぬれ浸ひたれる袖そでに犇ひしひし々と  
 おもてすりつ  
 面を擦付けた。



「けれど又、円鬚まるわけに結うて、立派にしてゐらるのを見りや、決して可愛かはゆうはなかつた。幸ひ貴方が話したい事が有いると言いはる、善し、あの様に間を詐いつはつた貴方じや、又僕を幾何どれほど詐いつはることぢやらう、それを聞いた上で、今日こそは打うちのめしてくれやうと待つてをつた。然るに、貴方の悔悟、僕は陰ひそかに喜んで聴いたのです。今日こんにちの貴方はやはり僕の友フレンドの宮さんぢやつた。好きう貴方悔悟なすつた！ さも無かつたら、貴方の顔にこの十倍の疵きずを附けにや還かへさんぢやつたのです。なあ、自ら容されたのは人に赦さるる始——解りましたか。

で、間に取成してくれい、詫わびを言うてくれい、とのお囑たのぢやけれど、それは僕は為せん。為せんのは、間に対してどうも出来んのぢ

やから。又貴方に罪有りと知つてをりながらその人から頼まるる僕でない。又僕が間であつたらば、断じて貴方の罪は容さんのぢやから。

かうして親友の敵に逢うてからに、指も差さずに別るる、これが荒尾の貴方に対する寸志と思つて下さい。いや、久しぶりで折角お目に掛りながら、可厭な言ばかり聞せました。それぢや、まあ、御機嫌好う、これでお暇します」

会釈して荒尾の身を起さんとする時、

「暫く、どうぞ」宮は取乱したる泣顔を振挙げて、重き瞼の露を

払へり。

「それではこの上どんなに願ひ申しましても、貴方はお詫を為

つては下さらないので御座いますか。さうして貴方もやはり私<sup>わたくし</sup>を  
 容<sup>ゆる</sup>さんと有<sup>おつしや</sup>仰るので御座いますか」

「さうです」

忙<sup>せは</sup>しげに荒尾は片<sup>かた</sup>膝<sup>ひざ</sup>立ててゐたり。

「どうぞもう暫くゐらしつて下さいまし、唯<sup>ただいまぢき</sup>今直に御飯が参り

ますですから」

「や、飯<sup>めし</sup>なら欲うありませんよ」

「私は未だ申上げたい事が有るのでございますから、荒尾さんど  
 うかお坐り下さいまし」

「いくら貴方が言うたつて、返らん事ぢやありませんか」

「そんなにまで有仰らなくても、……少しは、もう堪<sup>かん</sup>忍<sup>にん</sup>なすつ

て下さいまし」

火鉢ひばちの縁ふちに片手を翳かざして、何をか打案さずる様なる目を翳そらしつつ

荒尾は答へず。

「荒尾さん、それでは、とてもお聴入ききいれはあるまいと私は諦あきらめま

したから、貫一かんいつさんへお詫の事はもう申しますまい、又貴方に

容して戴く事も願ひますまい」

咄とつさ嗟に荒尾の視線は転じて、猶かた語たりつづく 続つづる宮が面を掠おもてかすめ去りぬ。

「唯一目私は貫一さんに逢ひまして、その前でもつて、私の如何いか

にも悪かつた事を思ふ存分謝あやまりたいので御座います。唯あの人の

目の前で謝りさへ為たら、それで私は本望なのでございます。素もと

より容してもらはうとは思ひません。貫一さんが又容してくれや

うとも、ええ、どうせ私は思ひは致しません。容されなくても私はかまひません。私はもう覚悟を致し……」

宮は苦しげに涙を吞みて、

「ですから、どうぞ御一所にお伴れなすつて下さいまし。貴方がお伴れなすつて下されば、貫一さんはきつと逢つてくれます。逢つてさへくれましたら、私は殺されましても可いので御座います。貴方と二人で私を責めて責めて責め抜いた上で、貫一さんに殺して下さいまし。私は貫一さんに殺してもらひたいので御座います」

感に打れて霜置く松の如く動かざりし荒尾は、忽ちその長き髯ひげを振りて頷うなづけり。

「うむ、面白い！ 逢うて間に殺されたいとは、宮さん好う言れいはた。さうなけりやならんじや。然し、なあ、然しじや、貴方は今は富山の奥さん、唯ただ継と云ふ夫の有る身じや、滅多な事は出来んですよ」

「私はかまひません！」

「可かん、そりや可かん。間に殺されても辞せんと云ふその悔悟は可いが、それぢや貴方は間有るを知つて夫有るの知らんのじや。夫はどうなさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。」

して見りや、始には富山が為に間を欺き、今又間の為に貴方あなたは富山を欺くんじや。一人ならず二人欺くんじや！ 一方には悔悟

して、それが為に又一方に罪を犯したら、折角の悔悟の効は没<sup>なく</sup>な  
て了ふ」

「そんな事のかまひません！」

無<sup>むざん</sup>慙<sup>くちびる</sup>に唇を咬みて、宮は抑へ難くも激せるなり。

「かまはんぢや可かん」

「いいえ、かまひません！」

「そりや可かん！」

<sup>わたくし</sup>

「私はもうそんな事のかまひませんのです。私の体はどんなにな

りませうとも、疾<sup>と</sup>から棄ててをるので御座いますから、唯もう一

度貫一さんにお目に掛つて、この氣の済むほど謝りさへ致したら、

その場でもつて私は死にましても本望なのですから、富山の事な

どは……不如さうして死んで了ひたいので御座います」

「それそれさう云ふ無考な、訳の解らん人に僕は与すること

は出来んと謂ふんじや。一体さうした貴方は了簡ぢやからし

て、始に間をも棄てたんじや。不埒です！ 人の妻たる身で夫を

欺いて、それでかまはんとは何事ですか。そんな貴方が了簡であ

つて見りや、僕は寧ろ富山を不憫に思ふです、貴方のやうな不貞

不義の妻を有つた富山その人の不幸を慇懃まんけりやならん、いや、

慇懃、貴方よりは富山に僕は同情を表する、愈よ憎むべきは貴方

じや」

四途乱に湿へる宮の目は焚ゆらんやうに耀けり。

「さう有仰つたら、私はどうして悔悟したら宜いので御座いま



せう。荒尾さん、どうぞ助けると思召おほしめしてお誨をしへなすつて下さ  
いまし」

「僕には誨よへられんで、貴方がまあ能う考へて御覧なさい」

「三年も四年も前から一日でもその事を考へません日と云つたら  
無いのでございます。それが為に始終ぶらぶら々々まるわづらと全で疾つてをるや  
うな気分で、噫あゝもうこんななら、いつそ死んで了しまはう、と熟つくづくさ  
うは思ひながら、唯たつたもう一目、一目で可うございますから貫かん一  
さんに逢ひませんでは、どうも死ぬにも死なれないので御座いま  
す」

「まあ能う考へて御覧なさい」

「荒尾さん、貴方それでは余あんまりでございますわ」

ひとり

独に余る心細さに、宮は男の袂を執りて泣きぬ。理切めて

荒尾もその手を払ひかねつつ、吾ならぬ愁に胸塞れて、実にもと

覚ゆる宮が衰容に眼を凝しゐたり。

「荒尾さん、こんなに思つて私は悔悟してをるのぢやございませ

んか、昔の宮だと思召して頼に成つて下さいまし。どうぞ、荒尾

さん、どうぞ、さあ、お誨へなすつて下さいまし」

涙に昏れてその語は能くも聞えず、階子下の物音は膳運び

出づるなるべし。

果して人の入来て、夕餉の設すとして少時紛されし後、二人は謂

ふべからざる佗き無言の中に相對するのみなりしを、荒尾は始

高く咳きつ。

「貴方の言る事は能う解つてをる、決して無理とは思はんです。  
 如何にも貴方に誨へて上げたい、誨へて貴方の身の立つやうな処  
 置で有るなら、誨へて上げんぢやないです。けれどもじや、それ  
 が誨へて上げられんのは、僕が貴方であつたらかう為ると云ふ考  
 量に止るので……いや、いや、そりや言れん。言うて善い事な  
 ら言ひます、人に対して言ふべき事でない、況や誨ふべき事では  
 ない、止だ僕一箇の了簡として肚の中に思うたままでの事、究竟荒  
 尾的空想に過ぎんのぢやから、空想を誨へて人を誤つてはどうも  
 ならんから、僕は何も言はなので、言はんぢやない、實際言得ん  
 のじや、然し猶能う考へて見て、貴方に誨へらるる方法を見出し  
 たら、更にお目に掛つて申上げやう。折が有つたら又お目に掛り

ます。は、僕の居住<sup>すまひ</sup>？ 居住は、まあ言はん方が可い、蟹<sup>あま</sup>が子<sup>こ</sup>な

れば宿も定めずじや。言うても差<sup>さ</sup>支<sup>しかへ</sup>は無<sup>な</sup>いけれど、貴方に押

掛けらるると困るから、まあ言はん。は、如何<sup>いか</sup>にも、こんな態<sup>なり</sup>を

してをるので、貴方は吃驚<sup>びっくり</sup>なすつたか、さうでせう。自分にも驚

いてをるのぢやけれどどうも為方が無い。僕の身の上に就ては段

々子細が有るですとも、それもお話したいけれど、又この次に。

酒は余り飲むな？ はあ、今日のやうに酔<sup>まれ</sup>うた事は希<sup>かたじけな</sup>です。忝

い、折角の御忠告ぢやから今後は宜<sup>よろし</sup>い、氣を着くるです。

力に成つてくれと言うたとて、義として僕は貴方の力には成れ

んぢやないですか。貴方の胸中も聴いた事ぢやから、敵にはなる

まい、けれど力には成られんですよ。

間にもその後逢はんのですとも。一遍逢うて聞きたい事も言ひ  
 たい事も頗る有るのぢやけれども。訪ねもせんので。それにや一  
 向意味は無いですとも。はあ、一遍訪ねませう。明日訪ねてくれ  
 い？ さうは可かん、僕もこれでなかなか用が有るのぢやから。  
 ああ、貴方も浮世が可厭か、僕も御同様じや。世の中と云ふもの  
 は、一つ間違ふと誠に面倒なもので、僕なども今日の有様では  
 生効の無い方じやけれど、このままで空く死ぬるも残念でな、  
 さう思うて生きてはをるけれど、苦しみつつ生きてをるなら、死  
 んだ方が無論勝ですき。何故命が惜いのか、考へて見ると頗る解  
 なくなる」

語りつつ彼は食を了りぬ。

「嗚呼、貴方に給仕して貰ふのは何年ぶりと謂ふのかしらん。間も善う食うた」

宮は差含む涙を啜れり。尽きせぬ悲を何時までか見んとやうに荒尾は俄に身支度して、

「こりや然し却つてお世話になりました。それぢや宮さん、お暇」

「あれ、荒尾さん、まあ、貴方……」

はや彼は起てるなり。宮はその前に塞りて立ちながら泣きぬ。

「私はどうしたら可いのでせう」

「覚悟一つです」

始て誨ふるが如く言放ちて荒尾の排け行かんとするを、彼は猶も縫りて、

「覺悟とは？」

「読んで字の如し」

驚破<sup>すはや</sup>、彼の座敷を出づるを、送りも行かず、坐りも遣<sup>や</sup>らぬ宮が姿は、寂<sup>さびし</sup>くも壁に向ひて動かざりけり。

### 第三章

門々<sup>かどかど</sup>の松は除かれて七八日<sup>ななやうか</sup>も過ぎぬれど、なほ正月機嫌<sup>きげん</sup>の失せぬ富山唯繼は、今日も明日もと行処<sup>あす ゆきどころ</sup>を求めては、夜を<sup>ひ</sup>に継ぎて打廻<sup>うちめぐ</sup>るなりけり。宮は毫<sup>いささ</sup>かもこれ<sup>とが</sup>も咎<sup>とが</sup>めず、出づるも入<sup>い</sup>るも唯彼の為<sup>な</sup>すに任せて、あだかも旅館の主<sup>あるじ</sup>の為<sup>す</sup>らんやうに、形<sup>かた</sup>ば

かりの送迎を怠らざると謂ふのみ。

この夫に対する仕向は両三年来の平生を貫きて、彼の性質と

も病身の故とも許さるるまでに目慣されて又彼方よりも咎められ

ざるなり。それと共に唯継の行も曩日とは漸く変りて、出遊

に耽らんとする傾も出で来しを、浅瀬の浪と見し間も無く近き頃

より俄に深陥して浮ると知れたるを、宮は猶しも措きて咎

めず。他は如何にとも為よ、吾身は如何にとも成らば成れと互に

咎めざる心易さを偷みて、異き女夫の契を繋ぐにぞありける。

かかれども唯継はなほその妻を忘れんとはせず。始終の憂に瘁

れたる宮は決して美き色を減ぜざりしよ。彼がその美しさを変へ

ざる限は夫の愛は虧くべきにあらざりき。抑もここに嫁ぎしより



一点の愛だに無かりし宮の、今に到りてはただ啻に愛無きに止らずし  
 て、ひそかに陰に厭ひ憎めるにあらずや。その故に彼は漸く家庭の樂から  
 ざるをも感ずるにあらずや。その故に彼は外に出でて憂うさを霽はらすに  
 忙いそがきにあらずや。されども彼の忘れずねぐら埒に歸り来るは、又この妻  
 の美き顔を見んが為のみ。既にその顔を見み了れば、何ばかりの樂たのしみ  
 のあらぬ家庭は、彼をして火無きストオブ煖かたはら炉の傍に処しむるなり。彼  
 の凍えて出いでいざること無し。出いづれば幸ひにその金力に頼よりて勢  
 を得、媚こびを買ひて、一時の慾ほしいまを肆まにし、其処そこには樂むとも知ら  
 ず樂み、苦むとも知らず苦みつつ宮が空むなしき色香いろかに溺おほれて、内には  
 かかる美きものを手活ていけの花と眺ながめ、外には到るところに当世はぶしの翻  
 を鳴して推廻おしまはすが、此上こよな無う紳士の願足れりと心得たるなり。

いで、その妻は見るも厭いとき夫の傍そばに在る苦を片時も軽くせんと  
 て、彼の繁しげき外出そとでを見赦みゆるして、十度とたびに一度ひとたびも色なを作さざるを風か  
ぜひ引かぬやうに召しませ猪牙ちよぎとやらの難ありがた有なほざりき賢女の志おもとも戴いたき喜  
 びて、いと堅き家の守とかつは等閑おもならず念ひにけり。さるは  
ひと独り夫のみならず、本家の両親を始親属知辺しるべに至るまで一般に彼  
 の病身を憫あはれみて、おとなしき嫁よと賞ほめ揚そやさぬはあらず。実に彼  
 は某なにがしの妻のやうに出行でかず、くれがしの夫人のやうに氣儘きままならず、  
 又は誰たれ々の如く華美はでを好まず、強請ねだりごと事せず、しかもそれ等の  
 人々より才かたちも容たちまきも立勝りて在りながら、常に内に居て夫に事つかふる  
 より外ほかを為せざるが、最いと怜しと見ゆるなるべし。宮が裏つめる秘密は  
 知る者もあらず、躬みづからも絶えて異あやしまるべき穂あを露さざりければ、そ

の夫に事<sup>つか</sup>へて、捌<sup>はか</sup>々しからぬ偽<sup>いつはり</sup>も偽<sup>いつはり</sup>とは為<sup>な</sup>られず、却<sup>かへ</sup>りて人<sup>あはれ</sup>に憫<sup>あはれ</sup>まるるなんど、その身には量<sup>はかりなさいはひう</sup>無<sup>な</sup>き幸<sup>さい</sup>を享<sup>う</sup>くる心の内に、独<sup>ひと</sup>り遣<sup>や</sup>るかたな方<sup>かた</sup>無<sup>な</sup>く苦<sup>くる</sup>める不幸<sup>ふこう</sup>は又量<sup>はかりなさいはひう</sup>無<sup>な</sup>しと為<sup>な</sup>ざらんや。

十九にして恋人を棄<sup>すく</sup>てにし宮<sup>みや</sup>は、昨<sup>きのふ</sup>日を夢<sup>む</sup>み、今<sup>けふ</sup>日を嘆<sup>かな</sup>ちつつ、過<sup>す</sup>せば過<sup>す</sup>さるる月<sup>つき</sup>日を累<sup>かさ</sup>ねて、こ<sup>は</sup>こに二十<sup>はたち</sup>あま<sup>い</sup>つ五<sup>いつ</sup>の春<sup>はる</sup>を迎<sup>むか</sup>へぬ。この春<sup>もたら</sup>の齋<sup>いはひ</sup>せしものは痛<sup>いた</sup>悔<sup>かい</sup>と失<sup>しつ</sup>望<sup>ぼう</sup>と憂<sup>ゆう</sup>悶<sup>もん</sup>と、別<sup>わか</sup>に空<sup>むなし</sup>くその身<sup>み</sup>を老<sup>おい</sup>しむる齡<sup>よはひ</sup>なるのみ。彼<sup>かれ</sup>は釈<sup>ゆる</sup>れざる囚<sup>とら</sup>にも同<sup>おな</sup>かる思<sup>おも</sup>を悩<sup>なや</sup>みて、元<sup>もと</sup>日<sup>あ</sup>の明<sup>あ</sup>るよりいとど懊<sup>おう</sup>惱<sup>のう</sup>の遣<sup>はな</sup>る方<sup>かた</sup>無<sup>な</sup>かりけるも、年<sup>とし</sup>の始<sup>はじ</sup>といふに臥<sup>ふ</sup>すべ<sup>やまひ</sup>き病<sup>びやう</sup>ならねば、起<sup>た</sup>きあるま<sup>ま</sup>に本<sup>もと</sup>意<sup>い</sup>ならぬ粧<sup>よそほひ</sup>も、色<sup>いろ</sup>を好<sup>この</sup>める夫<sup>お</sup>に勧<sup>すす</sup>められて、例<sup>れい</sup>の美<sup>うつく</sup>しと見<sup>み</sup>らるる浅<sup>あ</sup>ましきより、猶<sup>なほ</sup>甚<sup>は</sup>き浅<sup>あ</sup>ましきをその人<sup>ひと</sup>の陰<sup>かげ</sup>に陽<sup>ひなた</sup>に恨<sup>にく</sup>み悲<sup>かな</sup>むめり。

宮は今外出せんとする夫の寒<sup>さむさし</sup>凌<sup>ぶ</sup>ぎに葡萄<sup>ぶどう</sup>酒飲<sup>しゆ</sup>む間<sup>ま</sup>を暫<sup>しば</sup>く

長<sup>なが</sup>火鉢<sup>かひばち</sup>の前に冊<sup>かしづ</sup>くなり。木振<sup>きふり</sup>賤<sup>いやし</sup>からぬ二鉢<sup>ふたはち</sup>の梅<sup>うめ</sup>の影<sup>かげ</sup>を帯<sup>お</sup>びて

南縁<sup>なんえん</sup>の障子<sup>のぼ</sup>に上<sup>のぼ</sup>り尽<sup>ひぎし</sup>せる日脚<sup>ひぎし</sup>は、袋<sup>ふくろ</sup>棚<sup>だな</sup>に据<sup>す</sup>ゑたる福寿<sup>ふくじゆ</sup>草<sup>そう</sup>の

五六輪<sup>さきそろ</sup>咲<sup>はな</sup>揃<sup>なびら</sup>へる葩<sup>はな</sup>に輝<sup>きら</sup>きつつ、更<sup>さら</sup>に唯<sup>ただ</sup>繼<sup>つぎ</sup>の身<sup>み</sup>よりは光<sup>ひかり</sup>も出<sup>で</sup>づら

んやうに、彼は昼<sup>ひる</sup>眩<sup>まばゆ</sup>き新調<sup>しんてう</sup>の三<sup>さん</sup>枚<sup>まい</sup>襲<sup>がさね</sup>を着<sup>き</sup>飾<sup>かざ</sup>りてその最<sup>も</sup>も

珍<sup>ちん</sup>と為<sup>なり</sup>る里昂<sup>りやう</sup>製<sup>せい</sup>の白<sup>しろ</sup>の透<sup>すかし</sup>織<sup>おり</sup>の絹<sup>きぬ</sup>領<sup>えり</sup>巻<sup>まき</sup>を右<sup>みぎ</sup>手<sup>て</sup>に引<sup>ひ</sup>きつくるひ、

左<sup>ひだり</sup>に宮<sup>みや</sup>の酌<sup>しやく</sup>を受<sup>う</sup>けながら、

「あ、拙<sup>まづ</sup>い手<sup>て</sup>付<sup>つき</sup>……ああ零<sup>こぼ</sup>れる、零<sup>こぼ</sup>れる！ これは恐<sup>おそ</sup>入<sup>い</sup>つた。こ

れだからつい余<sup>よ</sup>所<sup>そ</sup>で飲<sup>の</sup>む氣<sup>き</sup>にもなりますと謂<sup>い</sup>つて可<sup>い</sup>い位<sup>くらい</sup>のものだ」

「ですから多<sup>た</sup>度<sup>んど</sup>上<sup>あが</sup>つていらつしやいまし」

「宜<sup>よろ</sup>いかい。宜<sup>よろ</sup>いね。宜<sup>よろ</sup>い。今夜<sup>こんや</sup>は遅<sup>おそ</sup>いよ」

「何時頃お歸来かへりになります」

「遅いよ」

「でも大おほよそ約時間を極めて置いて下さいませんと、お待ち申してをる者は困ります」

「遅いよ」

「それぢや十時には皆寝みんなみますから」

「遅いよ」

又言ふも煩わづらはしくて宮は口を閉ぢぬ。

「遅いよ」

「……………」

「驚くほど遅いよ」

「……………」

「おい、<sup>ちよつ</sup>些と」

「……………」

「おや。お前<sup>おこ</sup>慍つたのか」

「……………」

「慍らんでも可いぢやないか、おい」

彼は続け様に宮の袖<sup>そで</sup>を曳けば、

「何<sup>な</sup>を作るのよ」

「返事を為んからさ」

「お遅<sup>おそ</sup>いのは解りましたよ」

「遅くはないよ、実は。だからして、まあ機嫌<sup>きげん</sup>を直すべし」

「お遅いなら、お遅いで宜うよろしございますから……」

「遅くはないと言ふに、お前は近来直に慍ぢきるよ、どう云ふのかね」

「一つは病氣の所為せゐかも知れませんが」

「一つは俺の浮氣の所為かい。恐入つたね」

「……………」

「お前一つ飲まんかい」

わたくし  
「私沢山」

「ぢや俺が半分助すけて遣るから」

「いいえ、沢山なのですから」

「まあさう言はんで、少し、注つぐ真似まね」

「欲くもないものを、貴方は」

「まあ可いさ。お酌は、それかう云ふ塩梅あんばいに、愛子流かね」

妓ぎの名を聞ける宮の如何いかに言ふらん、と唯繼ひそかは陰に樂み待つな  
る流ながしめ眊おもてを彼の面に送れるなり。

宮は知らず貌がほに一口の酒を啣くくみて、眉まゆを顰ひそめたるのみ。

「もう飲めんのか。ぢや此方こつちにお寄来よこし」

「失礼ですけれど」

「この上へもう一盃いっぱい注いで貰はう」

「貴方、十時過ぎましたよ、早くいらつしやいませんか」

「可いよ、この二三日は別に俺の為る用は無いのだから。それで  
実はね今日は少し遅くなるのだ」

「さうでございますか」



「遅いと云つたつて怪いのぢやない。この二十八日に伝々会の大おほざらひ

温習ほざらひが有るといふ訳だらう、そこで今日五時から糸川いとがわの処へ

集つて下温習したざらひを為るのさ。俺は、それお特得はこの、「親々おやおやいざなに誘

はれ、難波なにわの浦を船出うらして、身を尽したる、憂きおもひ、泣いて

チチチチあかしのチントン風待かぜまちにテチンチンツン……」

厭いとしげに宮よそみの余所見のりぢせるに、乗地の唯継いよいよは愈よ声を作りて、

「たまたま逢ひはア——ア逢ひイ——ながらチツンチツンチツン

つれなき嵐あらしに吹分ふきわけられエエエエエエエ、ツンツンツンテツテ

ツトン、テツトン国へ帰ればアアアア父ちちイイイ母ははのチチチチ

ンチンチンチンチン「思ひも寄らぬ夫つまさだめ定……」

「貴方もう好加減いいかげんになさいましよ」

「もう少し聴いてくれ、〔立つる操を破ら……〕」

「又寛<sup>ゆつく</sup>り伺ひますから、早くいらつしやいまし」

「然し、巧くなつたらう、ねえ、些<sup>ちよつ</sup>と聞けるだらう」

「私には解りませんです」

「これは恐入つた、解らないのは情無いね。少し解るやうに成つて貰<sup>もら</sup>はうか」

「解らなくても宜うございます」

「何、宜いものか、浄瑠璃<sup>じようるり</sup>の解らんやうな頭脳<sup>あたま</sup>ぢや為方<sup>しかた</sup>が無い。

お前は一体冷淡な頭脳<sup>あたま</sup>を有<sup>も</sup>つてゐるから、それで浄瑠璃などを好まんのに違無い。どうもさうだ」

「そんな事はございません」

「何、さうだ。お前は一体冷淡さ」

「愛子はどうでございます」

「愛子か、あれはあれで冷淡でないさ」

「それで能く解りました」

「何が解つたのか」

「解りました」

「些<sup>ちつと</sup>も解らんよ」

「まあ可<sup>よ</sup>うございますから、早くいらつしやいまし、さうして早くお帰りなさいまし」

「うう、これは恐入つた、冷淡でない。ぢや早く帰る、お前待つてゐるか」

「私は何時いつでも待つてをりますぢや御座いませんか」

「これは冷淡やうやでない！」

漸やうやく唯繼たちあがの立起たちあがれば、宮がいとうは外套がいとうを着せ掛けて、不取敢とりあへず彼に

握手けを求めぬ。こは決して宮めをとの冷淡しゅつにゆうならざるを証するに足らざるなり、故ゆゑは、この女夫めをとの出しゅつ入にゆうに握手するは、夫の始より命じて習しつけせし躰しつけなるをや。

(三) の二

夫を玄関に送り出いでし宮は、やがて氷あなぐらの窖あなぐらなどに入るおもひらん想しつ、是非無あゆみき歩あゆみを運びて居間かへに還かへりぬ。彼はその夫と偕ともに在る

を謂はんやう無き累と為なれど、又その独を守りてこの家に処る  
 るをも堪へ難く悵きものに思へるなり。必しも力むるとにはあら  
 ねど、夫の前には自ら氣の張ありて、とにかくにさるべくは振舞  
 へど恣まなる身一箇となれば、遽に慵く打勞れて、心は整へん  
 術も知らず紊れに乱るるが常なり。

火鉢に倚りて宮は、我を喪へる体なりしが、如何に思入り、  
 思回し思窮むればとて、解くべきにあらぬ胸の内の、終に

明けぬ闇に彷徨へる可悲しさは、在るにもあられず身を起して彼  
 は障子の外なる縁に出でたり。

麗く冴えたる空は遠く三四の風の影を転じて、見遍す庭の名  
 残無く冬枯れたれば、浅露なる日の光の眩きのみにて、啼

狂<sup>くる</sup>ひし梢<sup>こずゑ</sup>の鶯<sup>ひよ</sup>の去りし後は、隔<sup>へ</sup>てる隣<sup>りん</sup>より憂<sup>かつ</sup>々と羽子<sup>はね</sup>突<sup>つ</sup>く音

して、なかなかここにはその寒<sup>さ</sup>さを忍<sup>しの</sup>ぶ値<sup>あた</sup>あらぬを、彼はされど

も少<sup>しば</sup>時居<sup>し</sup>て、又空<sup>なが</sup>を眺<sup>なが</sup>め、又冬<sup>ふゆ</sup>枯<sup>がれ</sup>を見遣<sup>み</sup>り、同<sup>おな</sup>き日<sup>じ</sup>の光<sup>ひ</sup>を仰<sup>あ</sup>ぎ、

同<sup>おな</sup>き羽子<sup>はね</sup>の音<sup>おと</sup>を聞<sup>き</sup>きて、抑<sup>おさ</sup>へんとはしたりけれども抑<sup>おさ</sup>へ難<sup>つひ</sup>さの竟<sup>つひ</sup>

に苦<sup>くる</sup>く、再<sup>また</sup>び居間<sup>い</sup>に入<sup>い</sup>ると見<sup>み</sup>れば、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>にも留<sup>とど</sup>らで書<sup>か</sup>斎<sup>さい</sup>の次<sup>つぎ</sup>なる

寝<sup>ね</sup>間<sup>ま</sup>に入<sup>い</sup>るより、身<sup>み</sup>を抛<sup>なげ</sup>ちてベツトに伏<sup>ふ</sup>したり。

厚<sup>しと</sup>き蔦<sup>ね</sup>の積<sup>し</sup>れる雪<sup>ゆき</sup>と真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>き上<sup>うへ</sup>に、乱<sup>みだ</sup>れ<sup>だ</sup>た<sup>た</sup> 畳<sup>たた</sup>める幾<sup>いく</sup>重<sup>へ</sup>の衣<sup>きぬ</sup>の彩<sup>いろ</sup>を

争<sup>あ</sup>ひつ<sup>つ</sup>、妖<sup>あや</sup>なる姿<sup>すがた</sup>を意<sup>こころ</sup>も介<sup>お</sup>かず横<sup>よこ</sup>はれるを、窓<sup>まど</sup>の日<sup>ひ</sup>の帷<sup>かたびら</sup>を透<sup>とほ</sup>し

て隠<sup>ほ</sup>々照<sup>のぼ</sup>したる、実<sup>げ</sup>に匂<sup>にお</sup>も零<sup>こぼ</sup>るるやうにして彼<sup>か</sup>は浪<sup>なみ</sup>に漂<sup>たふ</sup>ひし人<sup>ひと</sup>の

今<sup>いま</sup>打<sup>うち</sup>揚<sup>あ</sup>げられ<sup>あ</sup>たるも現<sup>う</sup>現<sup>つつ</sup>ならず、ほとほと力<sup>ちから</sup>竭<sup>つき</sup>きて絶<sup>たえ</sup>入<sup>い</sup>らんとす

るが如<sup>ごと</sup>く、止<sup>た</sup>だ手<sup>て</sup>枕<sup>まくら</sup>に横<sup>よこ</sup>顔<sup>がほ</sup>を支<sup>さ</sup>へて、力<sup>ちから</sup>無<sup>な</sup>き眼<sup>まなこ</sup>を瞪<sup>みは</sup>れり。竟<sup>つひ</sup>に

は溜息ためいき响ひびきてその目を閉ふづれば、片寝うに倦おめる面おもてを内うち向むけて、  
裾すその寒ささを佗わびしげに身動みうごきしたりしが、猶なほも底止そこひな無なき思おもの淵ふちは彼  
を沈しづめて、さのぎるなり。

隅すみ棚だなの枕時計はたは突つと秒刻チクタクを忘わすれぬ。益ますす静まに、益ますす明あかな  
る閨ねの内うちには、空むなしとも空むなき時の移うつるともなく移うつるのみなりしが、  
忽たちち差入さる鳥影のきばの軒端のきばに近く、俯ふしたる宮みやが肩頭かたさきに打連うちつらなり  
て翻ひらめきつ。

やや有ありて彼しどは嬾なくベツトの上に起直たてりけるが、鬢びんの纏ほうれし頭かしら  
を傾かたぶけて、帷カーテンの隙ひまより僅わずかに眺のぞめらる庭おの面おもに見みるとしもなき目  
を遣あてりて、当所あてど無なく心こころの彷徨さまよふ蹤あとを追おふなりき。

久ひさからずして彼かれはここをも出ででて又居間いに還かへれば、直ちきに簞笥たんすの

中より友禪ゆうぜんちりめん縮緬おびあげの帶揚とりいだを取出し、心に籠こめたりし一通の文ふみとも見ゆるものを抜きて、こたびは主あるじの書齋に持ち行きて机に向へり。その巻紙は貫一が遺のこせし筆の跡などにはあらで、いつかは宮の彼に送らんとて、別れし後の思の丈たけひそかを窃かきつらに書聯ねたるものなりかし。

往さいつとし年宮は田鶴見たづみの邸内に彼を見しより、いとど忍びかねたる胸の内の訴へん方かたもあらぬ切なさに、唯ただ心寛こころゆかしの仮初かりそめにと援つづりける筆ながら、なかなか口には打うちいだ出し難いき事を最いとよ好く書きつづて陳せけも為しを、あはれかのひとの許もとに送りて、思ひ知りたる今の悲しさを告げばやと、一図こころの意をも定めしが、又案ずれば、その文は果して貫一の手に触れ、目にも入るべきか。よしさればと



て、憎み怨める怒の余に投返されて、人目に曝さるる事などあら  
 ば、徒に身を滅す疵を求めて終りなんをと、遣れば火に入る虫の  
 危く、捨つるは惜くも、やがて好き首尾の有らんやうに抛無  
 き頼を繋けつつ、彼は懊悩に堪へざる毎に取出ては写し易ふ  
 る傍ら、或は書添へ、或は改めなどして、この文に向へば自らそ  
 の人に向ふが如く、その人に向ひてはほとほと言尽して心  
 残のあらざる如く、止これに因りて欲するままの夢をも結ぶに  
 似たる快きを覚ゆるなりき。かくして得送らぬ文は写せしも灰と  
 なり、反古となりて、彼の帶揚に籠められては、いつまで草の可  
 哀や用らるる果も知らず、宮が手習は実に久うなりぬ。

些箇に慰められて過せる身の荒尾に邂逅ひし嬉しさは、何に

似たりと謂はいんも愚おろかにて、この人をこそ仲立ちて、積る思を遂とげんと頼みしを、仇あだの如く与くみせられざりし悲しさに、さらでも切なき宮が胸は搔かき乱みだれて、今は漸やうやく危きを懼おそれざる覚悟も出いで来て、いつまで草のいつまでかくてあらんや、文は送らんと、この日頃思ひ立ちてけり。

紙の良きを拵えらび、筆の良きを拵えらび、墨の良きを拵えらび、彼は意こころしてその字の良きを殊ことに拵えらびて、今日の今ぞ始めて仮かり初そめならず写さんと為すなる。打顫うちふるふ手に十行余認あまじめしを、つと裂きて火鉢に差さべければ、焰ほの急に炎々と騰のぼるを、可疎うとましと眺めたる折しも、紙門ふすまを啓あけてその光に惧おびえし婢をんなは、覚えあるず主の気色けしきを異あやみつつ、「あの、御本家の奥様がお出いで遊ばしました」

## 第四章

あるじ 主夫婦を併せて 焼亡せし鰐淵が居宅は、さるほど貫一の  
 手に頼りてその跡に改築せられぬ、有形よりは小体に、質素を  
 旨としたれど専ら旧の構造を摸して差はざらんと勉強しに似たり。  
 間貫一と陶札を掲げて、彼はこの新宅の主になれるなり。家督  
 たるべき直道は如何にせし。彼は始よりこの不義の遺産に手をも  
 触れざらんと誓ひ、かつこれを貫一に与へて、その物は正業の資  
 たれ。その人は改善の人たれと冀しを、貫一は今この家の主とな  
 れるに、なほ先代の志を飜さずして、益す盛に例の貪を営むなり

き。然しかれば彼と貫一との今日こんにちの関かん繋けいは如何いかなるものならん。絶ことえてこれを知る者あらず。凡およそ人生箇ここ々の裏面には必ず如かくのご此とき内情もし若くは秘密とも謂ふべき者ありながら、幸さいはひに他の穿せん鑿くを免れて、曖あいまい昧うちの裏に葬られ畢をはんぬる例たゆめ尠くからず。二代の鰐淵なる間の家のこの一件もまた貫一と彼との外に洩もれざるを得たり。

かくして今は鰐淵の手代ならぬ三番町の間は、その向に有数の名を成して、外には善く貸し、善く斂をさむれども、内には事足る老ろう婢うひつかを役つかひて、僅わづかに自炊ならざる男世帯をとこせたいを張りて、なほも奢おごらず、樂たのまず、心は昔日きのふの手代にして、趣は失意の書生の如く依然たる変物へんぶつの名を失はでゐたり。

出でてはさすがに勞つかれて日暮に歸り来にける貫一は、彼の常として、吾家わがいえながら人氣無き居間の内を、旅の木蔭やすらにも休へる想しつゝ、稍興やや冷めて坐りも遣やらず、物の悲き夕ゆふべを特に独ひとりの感じるれば、老婢はラムプを持ち来きたりて、

「今日こんにち三時頃でございました、お客様が見えまして、明日又今頃来るから、是非内に居てくれるやうにと有おつしや仰つて、お名前を伺つても、学校の友達だと言へば可い、とさう有おつしや仰つてお歸りになりました」

「学校の友達？」

臆測おしあてにも知る能あたはざるはこの藪やぶから棒ぬしの主なり。

「どんな風の人かね」

「さやうでございますよ、としごろ年紀四十ばかりの蒙むしやくしや茸ひげと髭髯はの生えた、せい身材の高い、こは剛い顔の、まる全で壮士みたやうな風体ふうていをして  
お在いでした」

「……………」

些さの憶おもひ起おこす節ふしもありや、と貫一は打案じつつも半なかばは怪むに  
過ぎざりき。

「さうして、まあ大相横柄な方なのでございます」

あした「明日三時頃に又来ると?」

「さやうでございますよ」

たれ「誰か知らんな」

「何だか誠に風の悪さうな人にんてい体で御座いましたが、みようんち明日参りま

したら通しませうで御座いますか」

「ぢや用向は言つては行かんのだね」

「さやうでございますよ」

よろし

「宜い、会つて見やう」

「さやうでございますか」

起ち行かんとせし老婢は又居直りて、

「それから何でございました、間もなく赤あかがし櫛さんがいらつしや  
いまして」

貫一は憚よろこばざる色を作なしてこれに応こたへたり。

「神戸の蒲かまぼこ鉾を三枚、見事なのでございます。それに藤村ふじむらの  
蒸羊羹むしようかんを下さいまして、私わたくしまで毎度又頂ちようだい戴物ものを致しました

ので御座います」

彼は益す不快を禁じ得ざる面色おももちして、応答うけこたへも為で聴きゐたり。

「さうして明日みょうんち、五時頃些ちよいとお目に掛りたいから、さう申上げて置いてくれと有仰おつしやつてで御座いました」

可よしとも彼は口には出さいだで、寧ろ止めよとやうに忙せはく領けり。

(四) の二

学校友達と名宣なりし客はその言ことばの如く重ねて訪とひ来ぬ。不思議の対面おどろに駭おどろき惑へる貫一は、迅雷じんらいの耳を掩おほふに違いとまあらざらんや



うに劇くはげし吾を失ひて、頓とみにはその惘然ぼうぜんたるより覚むるを得ざるなりき。荒尾讓介は席あたたまひの温る間の手弄てまさぐりに放ちも遣やらぬ下髯したひげの、長く忘れたりし友の今を如何いかにと観みるに忙いそがしかり。

殆ど一昔と謂うても可よい程になるのぢやから話は沢山ある、けれどもこれより先に聞きたいのは、君は今日こんにちでも僕をじや、この荒尾を親友と思うてをるか、どうかと謂ふのじや」

答ふべき人の胸はなほ自在に語るべくもあらず乱れたるなり。

「考へるまではなからう。親友と思うてをるなら、をる、さうなけりや、ないと言ふまでで是イエスか否ノーかの一つじや」

「そりや昔は親友であつた」

彼は覚束おぼつか無なげに言出いひだせり。

「さう」

「今はさうぢやあるまい」

「何<sup>なぜ</sup>為にな」

「その後五六年も全く逢はずにゐたのだから、今では親友と謂ふことは出来まい」

「なに五六年<sup>ぜん</sup>前も一向親友ではありやせんぢやつたではないか」  
貫一は目を側<sup>そば</sup>めて彼を訝<sup>いぶか</sup>りつ。

「さうぢやらう、学士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈の場合に、何等の相談も為<sup>せ</sup>んのみか、それなり失<sup>しつ</sup>踪<sup>そう</sup>してうたのは何<sup>どこ</sup>処<sup>こ</sup>が親友なのか」

その常に慙<sup>は</sup>ぢかつ悔<sup>くゆ</sup>る一事を責められては、癒<sup>い</sup>えざる瘡<sup>きず</sup>をも割<sup>さか</sup>

るる心地して、彼は苦しげに容を斂め、声をも出さでゐたり。

「君の情人は君に負いたぢやらうが、君の友は決して君に負かん筈ぢや。その友を何為に君は棄てたか。その通り棄てられた僕ぢやけれど、かうして又訪ねて来たのは、未だ君を実は棄てんのじやと思ひ給へ」

学生たりし荒尾！ 参事官たりし荒尾！！ 尾羽打枯せる今の荒尾の姿は変りたれど、猶一片の変わぬ物ありと知れる貫一は、夢とも消えて、去りし、去りし昔の跡無き跡を悲しと偲ぶなりけり。

「然し、僕が棄てても棄てんでも、そんな事に君は痛痒を感じずるぢやなからうけれど、僕は僕で、友の徳義としてとにかく一旦

は棄てんで訪ねて来た。で、断然棄つるも、又棄てんのも、唯今こにちにある意じや。

今では荒尾を親友とは謂へん、と君の言うたところを以つて見ると、又今更親友であることを君は望んではをらんやうじや。さうであるならば僕の方でも敢て望まん、立派に名宣なつて僕も間貫一を棄つる！」

貫一は頭かしらを低たれて敢て言はず。

「然し、今こんにち日まで親友と思うてをつた君を棄つるからには、これわかれが一生の別になるのぢやから、その餞行はなむけとして一言云いちごんはんけりやならん。

間、君は何の為に貨かねを殖こしらゆるのぢや。かの大いなる樂たのしみとする者

を奪れた為に、それに易<sup>か</sup>へる者として金<sup>マネ</sup>銭<sup>エ</sup>といふ考を起したのか。  
 それも可からう、可いとして措<sup>お</sup>く。けれどもじや、それを獲<sup>え</sup>る為  
 に不義不正の事を働く必要が有るか。君も現在他<sup>ひと</sup>から苦められて  
 ある軀<sup>からだ</sup>ではないのか。さうなれば己<sup>おのれ</sup>が又他<sup>ひと</sup>を苦むるのは尤も用捨<sup>もつと</sup>  
 すべき事ぢやらうと思ふ。それが他<sup>ひと</sup>を苦むると謂うても、難儀に  
 附<sup>つ</sup>入<sup>けい</sup>つて、さうしてその血を搾<sup>しぼ</sup>るのが君の營業、殆ど強奪に等い  
 手段を以つて金を殖<sup>こし</sup>えつつ、君はそれで今<sup>こんにち</sup>日慰められてをるの  
 か。如何<sup>いか</sup>に金<sup>マネ</sup>銭<sup>エ</sup>が総ての力であるか知らんけれど、人たる者は悪  
 事を行つてをつて、一刻でも安樂に居らるるものではないのじや。  
 それとも、君は怡然<sup>いぜん</sup>として楽しんでをるか。長閑<sup>のどか</sup>な日に花<sup>さ</sup>の盛<sup>かり</sup>を眺  
 むるやうな氣持で催促に行つたり、差<sup>さし</sup>押<sup>おさ</sup>へを為たりしてをるか。

どうかい、間」

彼は愈いよいよ口を閉ぢたり。

「恐くじや。さう云ふ氣持の事は、この幾年間に一日でも有りは  
 せんのだやらう。君の顔がんしょく色いろを見い！ 全まるで罪人じやぞ。獄中  
 に居る者の面つらじや」

別人と見るまでに彼の浅ましく痺やつれたる面おもてを矚まもりて、讓介は涙  
 の落つるを覚えず。

「間、何で僕が泣くか、君は知つてをるか。今の間ぢや知らんぢ  
 やらう。幾多貨いくらかねを殖こしらへたところで、君はその分では到底慰めらる  
 る事はありません。病が有るからと謂うて毒を飲んで、その病が  
 痊なほるぢやらうか。君はあたかも藥を飲む事を知らんやうなものじ

やぞ。僕の友であつた間はそんな痴漢ぢやなかつた、して見りや

発狂したのじや。発狂してからに馬鹿な事を為居る奴は尤むるに

足らんけれど、一婦人の為に発狂したその根性を、彼の友とし

て僕が慥ぢざるを得んのじや。間、君は盗人と言れたぞ。罪人と

言れたぞ、狂人と言れたぞ。少しは腹を立てい！ 腹を立てて僕

を打つとも蹴るとも為て見い！」

彼は自ら言ひ、自ら憤り、尚自ら打ちも蹴も為んずる色を作し

て速々答を貫一に逼れり。

「腹は立たん！」

「腹は立たん？ それぢや君は自身に盗人とも、罪人とも……」

「狂人とも思つてゐる。一婦人の為に発狂したのは、君に対して

実に面目めんぼく無いけれど、既に発狂して了しまつたのだから、どうも今更為やうが無い。折角ぢやあるけれど、このまま棄置いてくれ給へ」

貫一は纔わづかにかく言ひて已やみぬ。

「さうか。それぢや君は不正な金銭マネエで慰められてをるのか」

「未だ慰められてはをらん」

「何日いっ慰めらるるのか」

「解らん」

「さうして君は妻君を娶もらうたか」

「娶はん」

「何故なぜ娶はんのか、かうして家を構へてをるのに独身ぢや不都合



ぢやらうに」

「さうでもないさ」

「君は今では彼の事をどう思つてをるな」

「彼とは宮の事かね。あれは畜生さ！」

「然し、君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは人の心は有つちやをらん、人の心が無けりや畜生じや」

「さう云ふけれど、世間は大方畜生ぢやないか」

「僕も畜生かな」

「……………」

「間、君は彼が畜生であるのに激してやはり畜生になつたのぢやな。若し彼が畜生であつたのを改心して人間に成つたと為たら、

同時に君も畜生を罷やめにやらんじやな」

「彼が人間に成る？ 能はざる事だ！ 僕は高利を貪むさぼる畜生だけ

れど、人を欺く事は為いつはんだ。詐いつはつて人の誠を受けて、さうして

それを売るやうな残忍な事は決して為いつはんだ。始から高利と名な宣

つて貸すのだから、否な者は借りんが可いので、借りん者を欺い

て貸すのぢやない。宮の如き畜生が何で再び人間に成り得うるもの

か」

「何なぜ為成り得えんのか」

「何なぜ為成り得えるのか」

「さうなら君は彼の人間に成り得えんのを望むのか」

「望むも望まえんも、あんな者に用は無ない！」

寧ろその面めんに唾つばせんとも思へる貫一の氣色けしきなり。

「そりや彼には用は無いちやらうけれど、君の為に言ふべきことぢやと思ふから話すのぢやが、彼は今では大いに悔悟してをるぞ。君に対して罪を悔いてをるぞ！」

貫一は吾を忘れて嗤あざわら笑ひぬ。彼はその如何いかに賤いやしむべきか、謂はんやうもあらぬを念おもひて、更に嗤あざわら笑ひ猶嗤笑ひ、遏やめんとして又嗤笑ひぬ。

「彼もさうして悔悟してをるのぢやから、君も悔悟するが可からう、悔悟する時ぢやらうと思ふ」

「彼の悔悟は彼の悔悟で、僕の与あづかる事は無い。畜生も少しは思知つたと見える、それも可からう」

「先頃計らず彼に逢うたのじや、すると、僕に向うて涙を流して、そりや真実悔悟してをるのじや。さうして僕に詫<sup>わび</sup>を為てくれ、それが成らずば、君に一遍逢せてくれ、と縋<sup>すが</sup>つて頼むのじやな、けれど僕も思ふところが有るから拒絶はした。又君に対しても、彼がその様に悔悟してゐるから容<sup>ゆる</sup>して遣れと勧めは為<sup>せ</sup>ん、それは別問題<sup>ただ</sup>じや。但僕として君に言ふところは、彼は悔悟して独<sup>ひと</sup>り苦んでをる。<sup>すなは</sup>即ち彼は自ら罰せられてをるのぢやから、君は君として<sup>うらみと</sup>怨を釈いて可からうと思ふ。君がその怨を釈いたなら、昔の間に復<sup>かへ</sup>るべきぢやらうと考へるのじや。

君は今のところ慰められてをらん、それで又、何日<sup>いつ</sup>慰めらるるとも解らんと言つたな、然しじや、彼が悔悟してからにその様に

思つてをると聞いたら、君はそれを以つて大いに慰められはせんかな。君がこの幾年間に得た金銭マネエ、それは幾多いくらか知らんけれど、その寡すくなからん金銭マネエよりは、彼が終に悔悟つひしたと聞いた一言いちごんの方が、遙はるかに大いなる力を以つて君の心を慰むるであらうと思ふのじやが、どうか」

「それは僕が慰められるよりは、宮が苦まなければならん為の悔悟だらう。宮が前非を悟つた為に、僕が失つた者を再び得られる訳ぢやない、さうして見れば、僕の今日こんにちはそれに因よつて少すこしも慰められるところは無いのだ。憎いことは彼は飽くまで憎い、が、その憎さに僕が慰められずにゐるのではないからして、宮その者の一身に向つて、僕は棄てられた怨を報いやうなどとは決して思

つてをらん、畜生に讐あだを復かへす価は無いさ。

今日こんにちになつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと謂ひた

いけれど、これは固もとよりさう有るべき事なのだ。始にあんな不心

得を為なかつたら、悔悟する事は無かつたらうに——不心得であ

つた、非常な不心得であつた！」

彼は黯あんぜん然むなしとして空く懷おもへるなり。

「僕は彼の事は言はんのじや。又彼が悔悟した為に君の失うた者が再び得らるる訳でないから、それぢや慰められんと謂ふのなら、それで可よいのじや。要するに、君はその失うた者が取返されたら可いのぢやらう、さうしてその目的を以つて君は貨かねを殖こしらへてをるのぢやらう、なあ、さうすりやその貨さへ得られたら、好んで不

正な營業を為る必要は有るまいが。君が失うた者が有る事は知つてをる。それが為に常に樂まんのも、同情を表してゐる、そこで金銭マネエの力に頼よつて慰められやうとしてゐる、に就いては異議も有るけれど、それは君の考まかに委する。貨かねを殖こゆるも可い、可いとする以上は大いに富むべしじや。けれど、富むと云ふのは貪むさぼつて聚あつむるのではない、又貪もつて聚めんけりや貨は得られんのではない、不正な手段もちゐを用んでも、富む道は幾多いくたも有るぢやらう。君に言ふのも、な、その目的を變へよではない、止ただ手段を改めよじや。路みちは違へても同じ高嶺たかねの月を見るのじやが」  
 「辱かたじけないけれど、僕の迷は未だ覚めんのだから、間は発狂してゐる者と想つて、一切いっせつかまひ付けずに措いてくれ給へ」

「さうか。どうあつても僕の言は用られんことばもちゐのじやな」

「容ゆるしてくれ給へ」

「何を容すのじや！ 貴様は俺を棄てたのではないか、俺も貴様を棄てたのじやぞ、容すも容さんも有るものか」

「今日限こんにちかぎり互に棄てて別れるに就いては、僕も一箇聞ひとつきたい事が有る。それは君の今の身の上だが、どうしたのかね」

「見たら解るぢやらう」

「見たばかりで解るものか」

「貧乏してをるのよ」

「それは解つてゐるぢやないか」

「それだけじや」



「それだけの事が有るものか。何で官途を罷めて、さうしてそんなに貧乏してゐるのか、様子が有りさうぢやないか」

「話したところで狂人きちがひには解らんのよ」

荒尾は空そらうそぶ嘯ききて起たんと為すなり。

「解つても解らんでも可いから、まあ話すだけは話してくれ給へ」  
 「それを聞いてどう為る。ああ貴様は何か、金でも貸さうと云ふのか。No《ノオ》Thank《サンク》じや、赤貧洗ふが如く窮してつても、心は怡然いぜんとして楽しんでをるのじや」

「それだから猶なほ、どう為てさう窮して、それを又楽しんでゐるのか、それには何か事情が有るのだらう、から、それを聞せてくれ給へと言ふのだ」

荒尾は故らに<sup>ことさ</sup> 哈々<sup>こうこう</sup>として笑へり。

「貴様如き無<sup>むけつちゆう</sup>血虫がそんな事を聞いたとて何が解るもので。人間らしい事を言ふな」

「さうまで辱められても辞<sup>ことば</sup>を返すことの出来ん程、僕の軀<sup>からだ</sup>は腐つて了つたのだ」

「固よりじや」

「かう腐つて了つた僕の軀<sup>からだ</sup>は今更為方が無い。けれども、君は立派に学位も取つて、参事官の椅子にも居た人、国家の為に有用の器<sup>うつは</sup>であることは、決して僕の疑はんところだ。で、僕は常に君の出世を予想し、又陰<sup>ひそか</sup>にそれを<sup>いの</sup>誘つてをつたのだ。君は僕を畜生と言ひ、狂人と言ひ、賊と言ふけれど、君を懷<sup>おも</sup>ふ念の僕の胸中を去

つた事はありませんよ。今日こんにちまで君の外には一人いちにんの友も無い

のだ。一昨年をとしであつた、君が静岡へ赴任すると聞いた時は、嬉く

もあり、可なつかし懐くもあり、又考へて見れば、自分の身が悲くもな

つて、僕は一日飯も食はんでゐた。それに就けても、久し振で君

に逢つて慶賀よろこびも言ひたいと念つたけれど、どうも逢れん僕の軀からだ

だから、切せめて陰ながらも君の出世の姿が見たいと、新橋の停ステエ

車場シヨンへ行つて、君の立派に成つたのを見た時は、何もかも忘れ

て僕は唯嬉くて涙が出た」

さてはと荒尾も心こころひそか陰うなづに頷きぬ。

「君の出世を見て、それほど嬉かつた僕が、今日こんにち君のそんなに

零落してゐるのを見る心持はどんなであるか、察し給へ。自分の

身を顧おもずにかう云ふ事を君に向つて言ふべきではないけれど、僕はもう己おのれを棄すててゐるのだ。一婦女子いつぶじよしの詐いつはりごと如ごときに憤いつて、それが為ために一身を過すつたと知りながら、自身の覺悟を以もつて匡きやう正せいすることの出来んと謂ふのは、全く天性愚劣の致すところと、自ら恨むよりは無いので、僕は生きながら腐れて、これで果てるのだ。君の親友であつた間貫一は既に亡き者に成つたのだ、とさう想つてくれ給へ。であるから、これは間まが言ふのではない。君の親友の或者が君の身を愛をんで忠告するのだとして聴いてくれ給へ。どう云ふ事情か、君が話してくれんから知れんけれど、君の軀は十分自重して、社会に立つて壮さかんなる働はたらきを作して欲ほいのだ。君はさうして窮迫してゐるやうだけれど、決して世間から棄てられるや

うな君でない事を僕は信ずるのだから、一箇人として己の為に身を愛をしみたまへと謂ふのではなく、国家の為に自重し給へと願ふのだ。君の親友の或者は君がその才を用る為に社会に出やうと為るならば、及ぶ限の助力を為る精神であるのだ」

貫一の面は病などの忽ち癒えけんやうに輝きつつ、如かくのごと此く潔くも麗うるはしき辞を語れるなり。

「うう、それぢや君は何か、僕のかうして落魄らくはくしてをるのを見てきのどく氣毒と思ふのか」

「君が謂ふほどの畜生でもない！」

「其処そこじや、間。世間に貴様のやうな高利貸が在る為に、あつぱれ用もちゐらるべき人才の多くがじや、名を傷きずつ、身を誤られて、社会

の外に放逐されて空く朽つるのじやぞ。国家の為に自重せい、と僕むかしの如き者にでもさう言うてくるのは忝かたじけないが、同じ筆法を以つて、君も社会の公益の為にその不正の業を罷やめてくれい、と僕は又頼むのじや。今日こんにちの人才を滅ほろぼす者は、曰く色、曰く高利貸ぢやらう。この通り零落おちぶれてをる僕が気毒と思ふなら、君の為に艱なやまされてをる人才の多くを一層不敏ふびんと思うて遣れ。

君が愛ラヴに失敗して苦むのもじや、或人が金錢マネエの為に苦むのも、苦むと云ふ点に於ては差異かはりは無いぞ。で、僕もかうして窮迫してをる際ぢやから、憂を分つ親友の一人は誠欲いのじや、昔の間貫一のやうな友フレンドが有つたらばと思はん事は無い。その友が僕フレンドの身おもを念おもうてくれて、社会へ打つて出て壮さかんに働け、一臂いつびの力を仮さうと

言うのであつたら、僕は如何いかにに嬉からう！ 世間に最も喜ぶべき者は友フレンド、最も悪にくむべき者は高利貸ぢや。如何いかにに高利貸の悪にくむべきかを知つてをるだけ、僕は益ますす友フレンドを懷おもふのじや。その昔の友フレンドが今んにち

日の高利貸——その悪にくむべき高利貸！ 吾又何をか言はんじや」

彼は口を閉ぢて、貫一を疾視せり。

「段々の君の忠告、僕は難ありがた有い。猶自分にも篤と考へて、この

腐れた軀からだが元の通潔白な者に成り得られるなら、それに越した幸

は無いのだ。君もまた自愛してくれ給へ。僕は君には棄てられても、君の大いに用られるのを見たいのだ。又必ず大いに用られなければならんその人が、さうして不遇で居るのは、残念であるよりは僕は悲い。そんなおもに念つてもゐるのだから一遍君の処を訪ね

さしてくれ給へ。何処どこに今居るかね」

「まあ、高利貸などは来て貰もらはん方が可い」

「その日は友フレンドとして訪ねるのだ」

「高利貸に友は持たんものな」

しとや

ふすま

おしひら

いできた

たれ

いかに

ぶしつけ

あらは

うちおどろ

あるじ

彼如何いかになれば不躰ぶしつけにもこの席には顕あらはれけん、と打駭うちおどろける主

よりも、荒尾が心の中こそ更に匹たぐふべくもあらざるなりけれ。い

でや、彼は窘くるしみてその長き髯ひげをば痛いたに拈ひりつ。されど狼狽うろたへたり

と見られんは口惜くちをしとやうに、遽にはかにその手を胸高むなたかに拱こまぬきて、動

かざること山の如うちひかしと打控うちひかへたる様も、自さまらわざとらしくて、

また見好みよげにはあらざりき。



満枝は先づ主まあるしに挨拶あいさつして、さて荒尾に向ひてはひときは一際礼を重  
く、しかも躬みづからは手の動き、目の視みるまで、専ら貴婦人もつぱの如く振舞  
ひつつ、笑むともあらず面おもてを和やはらげて姑く辞しばらを出さず。荒尾はこの  
際なかなか黙するに堪たへずして、

「これは不思議な所で！ 成程間とは御懇意かな」

「君はどうして此方こちらを識しつてゐるのだ」  
左瞻右視とみかうみして貫一あきは呆るるのみなり。

「そりや少し識つてをる。然し、長居はお邪魔ぢやらう、大きに  
失敬した」

「荒尾さん」

満枝はのがさじと呼留めて、

「かう云ふ処で申上げますのも如何いかがで御座いますけれど」

「ああ、そりや此こゝで聞くべき事ぢやない」

「けれど毎いっも御不在ばかりで、お話が付きかねると申して弱り切つてをりますで御座いますから」

「いや、会うたところだからに話の付けやうもないのじや。遁にげも隠れも為んから、まあ、時節を待つて貰はうさ」

「それはどんなにもお待ち申上げますけれど、貴方の御都合よろしの宜いやうにばかり致してはをられませんで御座います。そこはお察しあそばしませな」

「うう、随分酷ひどい事を察しさせられるのじやね」

「近日に是非わたくしお願い申しに伺ひますで御座いますから、どうぞ

宜く」

「そりや一向宜くないかも知れん」

「ああ、さう、この前でございましたか、あの者が伺ひました節、何か御無礼な事を申上げましたとかで、大相な御立腹で、お刀をお抜き遊ばして、斬つて了ふとか云ふ事が御座いましたさうで」

「有つた」

「あれ、本当にさやうな事を遊ばしましたので？」

満枝は彼に耻ぢはちよとばかり嗤あざわら笑ひぬ。さ知つたる荒尾は飽く

まで真顔を作りて、

「本当とも！ 実際那奴あやつたきき却つて了はうと思つた」

「然しお考へ遊ばしたで御座いませう」

「まあその辺ぢや。あれでも犬猫ぢやなし、斬捨てにもなるまい」  
 「まあ、怖い事ぢや御座いませんか。こは私わたくしなぞは滅多に伺ふ訳には  
 参りませんで御座いますね」

そは誰たが事を言ふならんとやうに、荒尾は頂うなじを反そらして噪のき笑めひ  
 ぬ。

「僕が美人を斬るか、その目で僕が殺さるるか。どれ歸つて、刀  
 でも拭ふいて置かう」

「荒尾君、夕飯ゆふめしの支度が出来たさうだから、食べて行つてくれ  
 給へ」

「それは折角ぢやが、盗泉の水は飲まんで」  
 「まあ貴方、私お給仕を勤めます。さあ、まあお下にゐらしつて」

満枝は荒尾の立てる脚あしもと下に褥しとねを推付けて、実げに還かへさじと主あるじにも劣くらず最いとをし惜をむ様なり。

「全で御夫婦のやうじやね。これは好一對じや」

「そのお意つもりで、どうぞお席にゐらしつて」

固もとより留とどまらざるべき荒尾は終つひに行かんとしつつ、

「間、貴様は……」

「……………」

「……………」

彼は唇くちびるの寒かるべきを思ひて、空むなしく鬱うつ抑よくして帰り去れり。そ

の言はざりし語ことばは直ただちに貫一が胸に響きて、彼は人の去いにける迹あとも、

なほ聴くるしおもてえあに苦き面を得挙げざりけり。

(四)の三

程も有らずランプは点<sup>とも</sup>されて、止<sup>た</sup>だ在りけるままに竦<sup>すく</sup>みゐたる彼の傍<sup>かたはら</sup>に置るとともに、その光に照さるる満枝の姿は、更<sup>よそほひ</sup>に粧をも加<sup>く</sup>へけんやうに怪<sup>け</sup>しからず妖<sup>あでやか</sup>艶に、宛<sup>さながら</sup>然色香を擅<sup>いかほしいまま</sup>にせる牡丹の枝を咲<sup>さきたわ</sup>撓<sup>ふぜい</sup>めたる風情にて、彼は親しげに座を進めつ。

はざま  
「間<sup>はざま</sup>さん、貴方<sup>あなた</sup>どうあそばして、非常にお鬱<sup>ふさ</sup>ぎ遊ばしてゐらつしやるぢや御座<sup>おま</sup>いませんか」

貫一は怠<sup>たゆ</sup>くも纔<sup>わづか</sup>に目を移して、

「一体貴方はどうして荒尾を御存じなのですか」

「私よりは、貴方があの方の御朋友ごほうゆうであらつしやるとは、実に私意外で御座いますわ」

「貴方はどうして御存じなのです」

「まあ債務者のやうな者なので御座います」

「債務者？ 荒尾が？ 貴方の？」

「私が直接に關係した訳ぢや御座いませんのですけれど」

「はあ、さうして額たかは若干どれほどなのですか」

「三千円ばかりでございますの」

「三千円？ それでその直接の貸主かしぬしと謂ふのは何処どこの誰ですか」

満枝は彼の遽にはかに振向ねぢむきて膝ひざの前すすむをさへ覚えざらんとするを見

て、歪ゆがむる口角くちもとに笑ゑみを忍びつ、

「貴方は実に現金であらうしやるのね。御自分のお聴になりたい事は熱心にお成りで、平生へいぜい私がお話でも致すと、全でまる取合つても下さいませぬのですもの」

「まあ可いです」

「些ちよつとも可い事はございません」

「うう、さうすると直接の貸主と謂ふのが有るのですね」

「存じません」

「お話し下さいな、様子に由つてはその金は私から弁償しやうと思ふのですから」

「私貴方からは戴きません」

「上げるのではない、弁償するのです」



「いいえ、貴方とは御相談になりません。又貴方が是非弁償なさると云ふ事ならば、私あの債権を棄てて了ひます」

「それは何為なぜですか」

「何為よろしでも宜う御座いますわ。ですから、貴方が弁償なさらうと

思召おぼしめすなら、私に債権を棄てて了へと有仰おつしやつて下さいまし、

さう致せば私喜んで棄てます」

「どう云ふ訳ですか」

「どう云ふ訳で御座いますか」

「甚はなはだ解らんぢやありませんか」

「勿もちろん論解らんので御座いますとも。私自分で自分が解らんくら

ゐで御座いますもの。然し貴方も間さん、随分お解りに成りませ

んのね」

「いいや、僕は解つてゐます」

「ええ、解つてゐらつしやりながら些ちよつともお解りにならないので

すから、私も益ますます解らなくりますすですから、さう思つてゐらつ

しやいまし」

満枝は金煙管きんぎせるに手炉てあぶりの縁ふちを丁ちようと拍うちて、男の顔に流ながしめ

怨うらみを注つぐなり。

「まあさう云ふ事を言はずに、ともかくもお話をなすつて下さい」

「御勝手ねえ、貴方は」

「さあ、お話し下さいな」

「唯今お話致しますよ」

満枝は遽にはかに煙管を索きせるめて、さて傍かたはらに人無ぐとゆるやみき若く緩に煙を吹きぬ。

「貴方の債務者であらうとは実に意外だ」

「……………」

「どうも事実として信ずる事は出来んくらゐだ」

「……………」

「三千円！ 荒尾が三千円の負債を何で為たのか、殆ど有得ほとんべき事でないのだけれど、……」

「……………」

唯見とれば、満枝はなほも煙管を放たざるなり。

「さあ、お話し下さいな」

「こんなに遅々ぐづぐづしてをりましたら、さぞ貴方憤じれつたくてゐらつ

しやいませう」

「憤つたいのは知れてゐるぢやありませんか」

「憤つたいと云ふものは、決して好い心持ちやございませんのね」

「貴方は何を言つてお在いでなのです！」

「はいはい恐入りました。それぢや早速お話を致しませう」

「どうぞ」

「蓋たしか御承知でゐらつしやいましたらう。前ぜんに宅に居りました向さ坂ざさかと申すの、あれが静岡へ参つて、今では些ちよつさと盛さんに遣いでつてをる

ので御座います。それで、あの方は静岡の参事官でお在いでなのでし

た。さやうで御座いましたらう。その頃向坂の手から何したので

御座います。究竟つまりあの方もその件から諭旨免官のやうな事にお成

なすつて、又東京へお還りにならなければ為方が無いので、彼方<sup>あちら</sup>を引払ふのに就いて、向坂から話が御座いまして、宅の方へ始は委任して参つたので御座いましたけれど、丁度去年の秋頃から全<sup>す</sup>つかりこちら然此方へ引継いで了ふやうな都合に致しましたの。

然し、それは取立に骨が折れるので御座いましてね、ああして止<sup>とん</sup>と遊んでお在も同様で、<sup>い</sup>翻譯<sup>ほんやく</sup>か何か少<sup>すこ</sup>ばかり為さる御様子なのですから、今のところではどうにも手の着けやうが無いので御座いますわ」

「はあ成程。然し、あれが何で三千円と云ふ金を借りたかしらん」  
「それはあの方は連帯者なので御座います」

「はあ！ さうして借主は何者ですか」

「大館朔郎とおおだちさくろうと云ふ岐阜の民主党員で、選挙に失敗したもので

すから、その運動費の後<sup>あと</sup>肚<sup>ばら</sup>だとか云ふ話でございました」

「うむ、如何<sup>いか</sup>にも！ 大館朔郎……それぢや事実でせう」

「御承知でゐらつしやいますか」

「それは荒尾に学資を給した人で、あれが始終恩人と言つてをつたその人だ」

はやその言<sup>ことば</sup>の中<sup>うち</sup>に彼の心は急<sup>いた</sup>に傷<sup>いた</sup>みぬ。己<sup>おのれ</sup>の敬愛せる荒尾讓介

の窮<sup>せき</sup>して戚<sup>せき</sup>々<sup>せき</sup>たらず、天命を樂むと言ひしは、真に義の為に功

名<sup>なげう</sup>を擲<sup>なげう</sup>ち、恩の為に富貴を顧<sup>ゆゑ</sup>ざりし故<sup>ゆゑ</sup>にあらずや。彼の貧きは万

々人の富めるに優<sup>まさ</sup>れり。君子なる吾<sup>わが</sup>友<sup>とも</sup>よ。さしも潔き志<sup>い</sup>を抱<sup>だ</sup>け

る者にして、その酬<sup>はつ</sup>らるる薄<sup>はつ</sup>倖<sup>こう</sup>の彼の如<sup>は</sup>く甚<sup>はな</sup>く酷<sup>はな</sup>なるを念<sup>はな</sup>ひて、

貫一は漫ろ涙の沸く目を閉ぢたり。

## 第五章

にはか  
遽に千葉に行く事有りて、貫一は午後五時の本所<sup>ほんじよ</sup>発を期して  
車を飛せしに、咄嗟<sup>あなや</sup>、一步の時を遅れて、二時間後の次回<sup>のち</sup>を待つ  
べき倒懸<sup>とうけん</sup>の難に遭<sup>あ</sup>へるなり。彼は悄悄<sup>すこすこ</sup>々々停車場前の休憩処<sup>い</sup>に入  
りて奥の一間なる縞毛布<sup>しまケット</sup>の上に温茶<sup>ぬるちや</sup>を啜<sup>すす</sup>りたりしが、門<sup>かど</sup>を出  
づる折受取りし三通の郵書の鞆<sup>かばん</sup>に打込みしまなるを、この時取<sup>と</sup>  
出<sup>いだ</sup>せば、中に一通の M. Shigis——と裏書せるが在り。

「ええ、又寄来<sup>よこ</sup>した!」

彼はこれのみ開封せずして、やがて他の読よみと一つに投入れし鞆はたを礮はたと閉づるや、枕に引寄せて仰臥あふぎふすと見れば、はや目を塞ふさぎて睡ねむりを促さんと為るなりき。されども、彼は能く睡ねぶるを得べきか。さすがにその人の筆の蹟あとを見ては、今更に憎しとも恋しも、絶えて念おもひには懸けざるべしと誓へる彼の心も、睡らるるまでに安かる能はざるなり。

いで、この文こそは宮が送りし再度の懇うつつたへにて、その始て貫一を驚かせし一札いつさつは、約およそ二週間前に彼の手に入りて、一字も漏れずその目に触れしかど、彼は曩さきに荒尾に答へしと同様の意を以もてその自筆の悔悟を読みぬ。こたびとてもまた同き繰くり言なるべきを、何の未練有りて、徒いたづらに目を汚けがし、懷おもひを傷けんやと、氣強くも



右より左に搔遣りけるなり。

宮は如何に悲しからん！ この兩度の消息は、その苦き胸を剖き、その切なる誠を吐きて、世をも身をも忘れし自白なるを。事若し誤らば、この手証は生ながら葬らるべき罪を獲るに余有るものならずや。さしも覺悟の文ながら、彼はその一通の力を以て直に貫一の心を解かんとは思設けざりき。

故に幾日の後に待ちて又かく聞えしを、この文にもなほ驗あらずば、彼は弥増す悲の中に定めて三度の筆を援るなるべし。知らずや、貫一は再度の封をだに切らざりしを——三度、五度、七度重ね重ねて十百通に及ばんとも、貫一は断じてこの愚なる悔悟を聴かじと意を決せるを。

静に臥ふしたりし貫一は忽ち起きて鞆を開き、先づかの文を出いだし、  
 焔マツチ児を搜さがりて、封のままなるその端はしに火を移しつつ、火鉢ひばちの上に  
 差翳さしかざせり。一片の焰ほは烈々はれつとして、白く颺あがるものは宮の思の何  
 か、黒く壞落くづれおつるものは宮が心の何か、彼は幾年いくとせの悲かなと悔しみと  
 は嬉うれくも今その人の手に在りながら、すげなき烟けふりと消えて跡無く  
 なりぬ。

貫一は再び鞆を枕にして始の如く仰臥あふぎふせり。  
 間しばし有をんなりて婢よびどもの口々に呼邀よびむかふる声して、入来いりきし客の、障子  
 越ごしなる隣室に案内されたる氣勢けはひに、貫一はその男女なんによの二人連づれな  
 るを知れり。

彼等は若き人のやうにもあらず頗すこぶる沈寂しめやかに座に着きたり。

「まだ沢山時間が有るから寛<sup>ゆつく</sup>り出来る。さあ、鈴<sup>すう</sup>さん、お茶をお上んなさい」

こは男の声なり。

「貴方<sup>あなた</sup>本当にこの夏にはお帰んなさいますのですか」

「盆<sup>ぼん</sup>過<sup>すぎ</sup>には是非一度帰ります。然しね、お話をした通り尊父<sup>をぢ</sup>さ

んや尊母<sup>をば</sup>さんの氣が變つて了つてお在<sup>いで</sup>なのだから、鈴さんばかり

そんなに思つてゐておくれでも、これがどうして、円く納るものぢやない。この上はもう唯<sup>ただ</sup>諦<sup>あきら</sup>めるのだ。私は男らしく諦<sup>わたし</sup>めた

！」

「雅<sup>まさ</sup>さんは男だからさうでせうけれど、私<sup>わたし</sup>は諦<sup>あきら</sup>めません。さうぢ

やないとお言ひなさるけれど、雅さんは阿父<sup>おとつ</sup>さんや阿母<sup>おつか</sup>さんの為<sup>し</sup>

方を慍かたおこつてお在いでなのに違無ちがふい。それだから私までが憎いので、いえ、さうよ、私は何でも可いから、若し雅さんが引取つて下さらなければ、一生何処どこへも適いきはしませんから」

女は処々ところどころ聞き得ぬまでの涙声になりぬ。

「だつて、尊父さんや尊母さんが不承知であつて見れば、幾許いくら私の方で引取りたくつても引取る訳に行かないぢやありませんか。それも、誰たれを怨むうら訳も無い、全く自分が悪いからで、こんな軀からだに疵きずの付いた者に大事の娘をくれる親は無い、くれないのが尤もつともだと、それは私は自分ながら思つてゐる」

「阿父さんや阿母さんがくれなくても、雅さんさへ貰もらつて下されば可いのぢやありませんか」

「そんな解らない事を言つて！ 私だつてどんなに悔い<sup>くやし</sup>か知れはしない。それは自分の不心得からあんな罪にも陥ちたのだけれど、実を謂へば、高利貸の※<sup>わな</sup>に罹<sup>か</sup>つたばかりで、自分の軀には生涯<sup>いひなづけ</sup>の疵<sup>きず</sup>を付け、隻<sup>ひとり</sup>の母親は……殺して了ひ、又その上に……許<sup>いひなづけ</sup>婚は破談にされ、……こんな情無い思を為る位なら、不如<sup>いっそ</sup>私は牢<sup>ろう</sup>の中で死んで了つた……方が可かつた！」

「あれ、雅さん、そんな事を……」

<sup>ふたり</sup>両箇は一度に哭<sup>な</sup>き出<sup>いだ</sup>せり。

「阿母さんがあん畜<sup>ちきしやう</sup>生の家を焼いて、夫婦とも焼死んだのは好い肚<sup>はらいせ</sup>癒<sup>い</sup>ぢやあるけれど、一旦私の軀に附いたこの疵は消えない。阿母さんも来月は鈴<sup>すう</sup>さんが来てくれると言つて、朝晩にそれ

ばかり楽たのしみにして在あなすつた……のだし」

女をんなはつと出でし泣音なくねの後を泳こらへ泳へて啜すすりあ上げぬ。

「私わたしも破談わたんに為する気は少も無いけれど、これは私の方から断るのが道だから、必ず悪く思つて下さるな」

「いいえ……いいえ……私は……何も……断られる訳はありません」

「私に添へば、鈴さんの肩身も狭くなつて、生涯何のかのと人と言いれなけりやならない。それがお気毒だから、私は自分から身を退ひいて、これまでの縁と諦あきらめてゐるので、然し、鈴さん、私は貴方の志は決して忘れませんよ」

女は唯い愈よいよ咽むせびゐたり。音も立てず臥ふしたりし貫一はこの時忍

び起きて、障子の其処そこここ此処より男を隙見すきみせんと為たりけれど、竟つひに意こころの如くならで止みぬ。然れども彼は正まさしくその声音こわねに聞き覺おぼえあるを思合せぬ。かの男は鰐淵あくらまさゆきの家に放火せし狂女の子にて、私書偽造罪を以て一年の苦役を受けし飽浦雅之せならずと為んや。さなり、女のその名を呼べるにても知らるるを、と独りひとり頷うなづきつつ貫一ひそまは又潜りて聴耳立てたり。

「嘘うそにもさうして志は忘れないなんて言つて下さる程なら、やつぱり約束通り私を引取つて下さいな。雅さんがああ云ふ災難にお遭あひなので、それが為に縁を切る意つもりなら、私は、雅さん、……一年が間……塩断しほだちなんぞ為はしませんわ」

彼は自らその苦節を憶おもひて泣きぬ。

「雅さんが自分に悪い事を為てあんな訳に成つたのぢやなし、高利貸の奴に瞞だまされて無実の罪に陥ちたのは、雅さんの災難だと、私は俱ともども共くに悔くやし……悔し……悔いとは思つてゐても、それで雅さんの軀に疵が附いたから、一処になるのは迷惑だなんと何時いつ私わたくしが思つて！ 雅さん、私はそんな女ぢやありません、そんな女ぢや……ない！」

この心を知らずや、と情じよう極きはまりて彼の悶もだえ慨なげくが手に取る如き隣には、貫一が内俯うつぶしに頭かしらを擦すり付つけて、卷まきた 莩ばこの消えしを擎ささげたるままだに横よこたはれるなり。

「雅さんは私をそんな女だと思ひのは、貴方がお留守中の私の事を御存じないからですよ。私は三月みつぎの余よも疾わづらつて……そんな事



も雅さんは知つてお在<sup>いで</sup>ぢやないのでせう。それは、阿父<sup>おとつ</sup>さんや阿母<sup>おつか</sup>さんは雅さんのところへ上げる気は無いにしても、私は私の了簡で、若しああ云ふ事が有つたので雅さんの肩身が狭くなるやうなら、私は猶更雅さんのところへ適<sup>ゆ</sup>かずにはゐられない。さうして私も雅さんと一処に肩身が狭くなりたいのですから。さうでなけりや、子供の内からあんなに可愛<sup>かはい</sup>がつて下すつた雅さんの尊母<sup>おつか</sup>さんに私は濟まない。

親が不承知なのを私が自分の了<sup>りようけん</sup>簡<sup>どほり</sup>通<sup>と</sup>に為るのは、そりや不孝かも知れませんが、私はどうしても雅さんのところへ適<sup>ゆ</sup>きたいのですから、お可厭<sup>いや</sup>でなくば引取つて下さいましな。私の事はかまひませんから雅さんが貰つて下さるお心持がお有<sup>あん</sup>なさる

のか、どうだか唯それを聞して下さいな」

貫一は身を回してめぐら臂ひざまくら枕うちあふに打仰ぎぬ。彼は己おのれが与へし男の

不幸よりも、添そはれぬ女の悲かなしみよりも、先まづその娘が意氣さかんの壮なるに

感じて、あはれ、世にはかかる切なる恋の焚もゆる如き誠もあるよ、

と頭かしらは熱ねつし胸とどろは轟とどろくなり。

さて男の声は聞ゆ。

「それは、鈴すうさん、言ふまでもありはしない。私もこんな目にさ

へ遭あはなかつたら、今頃は家内三人で睦むつまじく、笑つて暮してゐられ

るものを、と思へば猶の事、私は今日の別が何とも謂いはれないほど

情無い。かうして今では人に顔かほ向むけも出来ないやうな身に成つて

ゐる者をそんなに言つてくれるのは、この世の中に鈴さん一人だ

と私は思ふ。その優しい鈴さんと一処に成れるものなら、こんな結構な事は無いのだけれど、尊父さん<sup>をぢ</sup>、尊母さん<sup>をば</sup>の心にもなつて見たら、今の私には添<sup>そは</sup>されないので、決して無理の無いところで、子を念ふ親の情<sup>じょう</sup>は、何処<sup>どこ</sup>の親でも差違<sup>かはり</sup>は無い。そこを考へればこそ、私は鈴さんの事は諦<sup>あきら</sup>めると云ふので、子として親に苦勞を懸けるのは、不孝どころではない、悪事だ、立派な罪だ！ 私は自分の不心得から親に苦勞を懸けて、それが為に阿母さんもああ云ふ事に成つて了つたのだから、実は私が手に掛けて殺したも同然。その上に又私ゆゑに鈴さんの親達に苦勞を懸けては、それぢや人の親まで殺すと謂つたやうな者だから、私も諦められないところを諦めて、これから一働して世に出られるやうに成るのを<sup>たのしみ</sup>に、

やつぱり暗い処に入つてゐる氣で精一杯勉強するより外は無い、と私は覺悟してゐるのです」

「それぢや、雅さんは内の阿父さんや阿母さんおとつ おつかの事はそんなに思つて下すつても、私の事は些ちつとも思つては下さらないのですね。私の軀なんぞはどうなうと、雅さんはかまつては下さらないのね」

「そんな事が有るものぢやない！ 私だつて……」

「いいえ、可うございます。もう可いの、雅さんの心は解りましたから」

「鈴さん、それは違つてゐるよ。それぢや鈴さんは全まるで私の心を酌んではおくれでないのだ」

「それは雅さんの事よ。阿父さんや阿母さんの事をさうして思つ

て下さる程なら、本人の私の事だつて思つて下さりさうな者ぢや  
 ありませんか。雅さんのところへ適くと極つて、その為に御嫁入  
 道具まで丁と調へて置きながら、今更外へ適れますか、雅さんも  
 考へて見て下さいいな。阿父さんや阿母さんが不承知だと謂つても、  
 そりや余り酷いわ、余り勝手だわ！ 私は死んでも他へは適きは  
 しませんから、可いわ、可いわ、私は可いわ！」

女は身を顫ふるはして泣沈めるなるべし。

「そんな事をお言ひだつて、それぢやどう為うと云ふのです」

「どう為ても可う御座います、私は自分の心で極めてゐますから」  
 亜ついで男の声は為せざりしが、間しばしあ有りて孰いづれより語り出でしとも  
 分ひとしきひそひそかず、又一時密々と話声の洩れけれど、調子の低かりければ

此方こなたには聞知られざりき。彼等は久くこの細語ささめごとを息めずして、その間一たびも高く言ことばを出さざりしは、互にその意こころに逆ふところ無かりしなるべし。

「きつと？ きつとですか」

始て又明かに聞えしは女の声なり。

「さうすれば私もその気で居るから」

かくて彼等の声は又低うなりぬ。されど益す絮々じよじよとして飽か

ず語れるなり。貫一は心こころ陰ひそかに女の成效を祝し、かつ雅之たへたる

者のこれが為に如何いかに幸ならんかを想ひて、あたかも妙なる楽の

音ねの計らず洩聞もれきこえけんやうに、憂うかる己をも忘れんとしつ。

今かの娘の宮ならば如何いかならん、吾かの雅之ならば如何ならん。

吾は今<sup>こんにち</sup>日の吾たるを択<sup>えら</sup>ぶ可<sup>べ</sup>きか、将<sup>はた</sup>かの雅之たるを希<sup>こひねが</sup>はんや。  
 貫一は空<sup>むなし</sup>うかく想へり。

宮も嘗<sup>かつ</sup>て己に對して、かの娘に遜<sup>ゆづ</sup>るまじき誠を抱<sup>いだ</sup>かざるにしも  
 あらざりき。彼にして若<sup>も</sup>し金剛石<sup>ダイヤモンド</sup>の光を見ざりしならば、また  
 吾をも刑余に慕<sup>おびやか</sup>ひて、その誠を全<sup>まっ</sup>うしたらんや。唯<sup>ただ</sup>繼<sup>つぐ</sup>の金力を  
 以て彼女を脅<sup>おびやか</sup>したらんには、またかの雅之を入獄の先に棄てたり  
 けんや。耀<sup>かがや</sup>ける金剛石<sup>ダイヤモンド</sup>と汚<sup>けが</sup>れたる罪名とは、孰<sup>いづれ</sup>か愛を割<sup>さ</sup>くの力  
 多かる。

彼は更にかく思へり。

唯その人を命として、己<sup>おのれ</sup>も有らず、家も有らず、何處<sup>いづこ</sup>の野末<sup>のすゑ</sup>に  
 も相<sup>あひ</sup>從<sup>したが</sup>はんと誓<sup>ちか</sup>へるか娘の、竟<sup>つひ</sup>に利の為に志を移さざるを

得べきか。又は一旦その人に与へたる愛を吝<sup>をし</sup>みて、再び価高く他に売らんと為るなきを得べきか。利と争ひて打勝れたると、他の愛と争ひて敗れたると、吾等の恨は孰に深からん。

彼は又かくも思へるなり。

それ愛の最も篤<sup>あつ</sup>からんには、利にも惑はず、他に又易<sup>か</sup>ふる者もあらざる可きを、仮<sup>かり</sup>初<sup>そめ</sup>もこれの移るは、その最も篤きにあらざるを明<sup>あか</sup>せるなり。凡<sup>およ</sup>そ異性の愛は吾愛の如く篤かるを得ざる者なるか、或<sup>ある</sup>は己の信ずらんやうに、宮の愛の特<sup>こと</sup>に己にのみ篤からざりしなるか。吾は彼の不義不貞を憤<sup>ゆゑ</sup>るが故に世上の恋なる者を疑ひ、かつ渾<sup>すべ</sup>てこれを斥<sup>しりぞ</sup>けぬ。されどもその一旦<sup>いきどほり</sup>の憤は、これを斥けしが為に消ゆるにもあらずして、その必ず得べかりし物を失へ



るに似たる快々おうおうは、吾心を食は尽みつし、終つひに吾身を斃たふすにあらざれば、得やは去るまじき悪あく靈りようの如く執しゆう念ねく吾を苦むるなり。かかれば何事にも樂むを知らざりし心の今日偶たまたま人の相あひ悦よろこぶを見て、又躬みづかも怡よろこびつつ、樂の影を追ふらんやうなりしは何の故ならん。よし吾は宮の愛ならずとも、これに易ふる者を得て、とかくはこの心を慰めしむ可きや。

彼はいよいよ思廻おもひめぐせり。

宮はこの日頃吾に篤からざりしを悔いて、その悔を表せんには、何等の事を成さんも唯吾命めいのままならんとぞ言来いひこしたる。吾はその悔の為にはかの憤いきどほりを忘るべきか、任他さはれ吾恋むかしの旧かへに復りて再び完まつたかるを得るにあらず、彼の悔は彼の悔のみ、吾が失意の恨は終に

吾が失意の恨なるのみ。この恨は富山に数倍せる富に因りて始て償はるべきか、或はその富を獲んとする貪欲はこの恨を移すに足るか。

彼は苦き息を嘘きぬ。

吾恋を壊りし唯繼！ 彼等の恋を壊らんと為しは誰そ、その吾の今千葉に赴くも、又或は壊り、或は壊らんと為るにあらざる無きか。しかもその貪欲は吾に何をか与へんとすらん。富か、富は吾が狂疾を医すべき特效剤なりや。かの妨げられし恋は、破鏡の再び合ふを得て樂み、吾が割れし愛は落花の復る無くして畢らんのみ！ いで、吾はかくて空く埋るべきか、風に因りて飛ぶべきか、水に落ちて流るべきか。

貫一は船橋を過る燈暗き汽車の中に在り。

## 第六章

千葉より歸りて五日の後 M. Shigis —— の書信は又來りぬ。貫一は例に因りて封のまま火中してけり。その筆の跡を見れば、忽ち浮ぶその人の面影は、唯繼と並び立てる梅園の密会にあらざる無きに、彼は殆ど當時に同じ憤を發して、先の二度なるよりはこの三度に及べるを、徑廷くも廻らぬ筆の力などを以て、旧に返し得べき未練の吾に在りとや想へる、愚なる精衛の來りて大海を填めんとするやと、却りて頑に自ら守らんとも為なり。

さりととも知らぬ宮は蟻ありの思を運ぶに似たる片かた便よりも、行くべき方には音づるるを、さてかの人の如何いかに見るらん、書綴かきつづれるわがまこと  
 吾誠わがまことの千に一つも通ずる事あらば、掛けても願へる一筋ひとすぢのいとぐち  
 緒いとぐちともなりなんと、人目あらぬ折毎には必ず筆採りて、その限無おもひ  
 き思を写してぞ止まざりし。

唯繼は近頃彼の専ら手習すと聞きて、その善き行を感ずる余あまりに、もつば  
 良き墨、良き筆、良き硯すずり、良き手本まで自ら求め来ては、この難ありがた  
 有き心掛の妻に遣りぬ。宮はそれ等を汚けがはしとて一切用ること  
 無く、後には夫の机にだに向はずなりけり。かく怠らず綴つづられし  
 文は、又六日むゆかを経て貫一の許もとに送られぬ。彼は四度よたびの文をも例の  
 灰と棄てて顧ふざりしに、日を経ると思ふ程も無く、五度いつたびの文は

来にけり。よし送り送りて千束ちつかにも余れ、手に取るからの烟けむぞと  
 悔あなどれる貫一も、曾かつて宮には無かりし執着のかばかりなるを謂いひ知ら  
 ず異あやしみつ、今日のみは直すぐにも焚やかざりしその文を、一ひとたび度は披ひら  
 き見んと為たり。

「然し……」

彼は輒たやすく手を下さざりき。

「赦ゆるしてくれと謂ふのだらう。その外には、見なければ成らん用  
 事の有る訳は無い。若もし有ると為れば、それは見る可からざる用  
 事なのだ。赦してくれなら赦して遣やる、又赦さんでも既に赦れて  
 るのではないか。悔悟したなら、悔悟したで、それで可い。悔  
 悟したから、赦したからと云つて、それがどうなるのだ。それが

今日<sup>こんにち</sup>の貫一と宮との間に如何<sup>いか</sup>なる影響を与へるのだ。悔悟した  
 からあれの操<sup>みさをきず</sup>の疵<sup>きず</sup>が愈<sup>い</sup>えて、又赦したから、富山の事が無い昔に  
 成るのか。その点に於<sup>おい</sup>ては、貫一は飽くまでも十年前の貫一だ。  
 宮！ 貴様は一生汚<sup>けが</sup>れた宮ではないか。ことの破れて了<sup>しま</sup>つた今<sup>こんにち</sup>  
 日<sup>ち</sup>になつて悔悟も赦してくれも要<sup>い</sup>つたものか、無益な事だ！  
 少<sup>すこし</sup>も汚<sup>けが</sup>れん宮であるから愛してをつたのだ、それを貴様は汚して  
 了つたから怨<sup>おこな</sup>んだのだ。さうして一遍汚れた以上は、それに対す  
 る十倍の徳を行つても、その汚れたのを汚れざる者に改めること  
 は到底出来<sup>こ</sup>るのだ。

であるから何と言つた！ 熱海で別れる時も、お前の外<sup>ほか</sup>に妻と  
 思ふ者は無い、一命に換へてもこの縁は切られんから、俺<sup>おれ</sup>のこの

胸の中を可憐あはれと思つて、十分決心してくれ、と実に男を捨てて頼んだではないか。その貫一そむに負いて……何の面目めんぼく有つて今更悔悟……晚おそい！」

彼はその文を再三柱に鞭むちうちて、終に繩なはの如く引ひき振りぬ。

打続きて宮が音信たよりの必ず一週に一通来ずと謂ふこと無くて、披ひられざるに送り、送らるるに披ひらかざりしも、はや算かぞふれば十通に上のぼれり。さすがに今は貫一が見る度たびいかりの憤も弱りて、待つとにはあらねど、その定りて来る文の繁しげきに、自ら他おのづかの悔い悲める宮在るを忘る能あたはずなりぬ。されど、その忘るる能はざるも、遽にはかに彼を可なつかし懷むにはあらず、又その憤の弱れるも、彼を赦し、彼を容いれんと為るにあらずして、始はじめに恋ひしをば棄てられ、後には棄てし

を悔らるる身の、その古き恋はなほ己おのれに存し、彼の新なる悔は切  
 まつは、徒に凍えて水を得たるに同かるこの両ふたつの者の、相対し  
 あひすく、に貪るも、相拯ふ能はざる苦艱くげんを添ふるに過ぎざるをや。ここに於て貫  
 一は披かぬ宮が文に向へば、その幾倍の悲きものを吾と心に読み  
 て、かの恨ならぬ恨も生じ、かの憤いかりならぬ憤も発して、憂身独  
 はかなの儚き世をば如何いかにせんやうも知らで、唯安からぬ昼夜を送りつ  
 つ、出づるに入るに茫ぼうぼう々として、彼は屢しばしばばその貪むさぼるをさへ忘る  
 る事ありけり。劇く物思ひて寝ねざりし夜の明方近く疲睡を催せ  
 し貫一は、新緑の雨に暗き七時の閨ねやに甍おそはるる夢の苦しきりく頻うめに呻うめきし  
 を、老婢ろうひに喚よばれて、覚めたりと知りつつ現ならず又睡りけるを、  
 再び彼に揺ゆり起おこされて驚けば、



「お客様でございます」

「お客？ 誰だ」

「荒尾さんと有仰おつしやいました」

「何、荒尾？ ああ、さうか」

あるじ  
主の急ぎ起きんとすれば、

「お通し申しますで御座いますか」

「おお、早くお通し申して。さうしてな、唯今起きましたところ  
で御座いますから、暫しばらく失礼致しますとさう申して」

貫一はかの一別の後三度みたびまで彼の隠家かくれがを訪ひしかど、毎つねに不

在に会ひて、二度に及べる消息の返書さへあらざりければ、安否  
の如何いかがを満枝ただに糺せしに、変る事無く其処そこに住めりと言ふに、さ

ては真まことに交を絶たんとすならんを、姑しく強はて追はじと、一月余あまりも打絶うちえたりしに、彼方あなたより好よくこそ来つれ、吾われがこの苦くるしみを語るべきは唯彼在るのみなるを、朋ともの来きたれるも、実げにかくばかり樂たのきはあらざらん。今日は酒を出いだして一日いちじつ彼を還かへさじなど、心こころ忙せはしまでに飲よろこばれぬ。

絶交そいんせるやうに疏音そいんなりし荒尾あらいの、何の意ありて卒にはかに訪と来きたれるならん。貫一はその何の意なりやを念おもはず、又その突然おとつの来きた叩たたをも怪あやしまずして、畢ひつきよう竟彼の疏音ひつきようなりしはその飄ひようぜん然ぜん主しゅ義かの拘からざる故ゆゑ、交を絶つとは言いひしかど、誼よしの吾を棄すつるに忍しのびざる故と、彼はこの人のなほ己おのれを友として来きたれるを、有得あべからざる事とは信しんぜざりき。

てうづば いでき  
手水場を出来し貫一は腫 眶の赤きを連 しばたた

きつつ、羽織の

紐ひもを結びも敢あへず、つと客間の紙門を排ふすまけば、荒尾は居らず、か

の荒尾讓介は居らで、美うつくしう装へる婦人の独り羞含ひとはぢがましう控へたる。打う

ちまど

惑まどひて入りかねたる彼の目前まのあたりに、可うたがはし疑しき女客も未だ背いま そむけた

おもてめぐら

る面を回さず、細雨さいりゅう静づかに庭樹ていじゆを撲うちて滴したたる翠は内を照せり。

「荒尾さんと有おつしや仰るのは貴方で」

彼は先づかく会釈して席に着きけるに、婦人は猶も面おもてを示さざ

らんやうに頭かしらを下げて礼を作なせり。しかも彼は輒たやすくその下げたる

頭かしらと挂かへたる手とを挙げざるなりき。始おどろかに何者なりやと驚されし

貫一は、今又何事なりやと弥いよいよよ呆あきれて、彼の様子を打うち晒まもれり。

乍たちまち有ありて貫一の眼まなこは慌あわ忙たしく覓もとむらん色を作なして、婦人の俯うつむ

けるを<sup>き</sup>乞と窺<sup>う</sup>ひたりしが、

「何ぞ御用でございますか」

「……………」

彼は<sup>ますま</sup>益す急に<sup>とみかうみ</sup>左瞻右視して窺ひつ。

「どう云ふ御用向でございますか。伺ひませう」

「……………」

露置く<sup>ゆり</sup>百合の花などの<sup>ほのか</sup>仄に風を迎へたる如く、その<sup>うたがはし</sup>可疑<sup>き</sup>き

婦人の面は<sup>おもて</sup>術<sup>じゆつ</sup>無げに<sup>な</sup>挙らんとして、又<sup>は</sup>慙<sup>おそ</sup>ぢ懼れたるやうに<sup>たゆた</sup>遲疑<sup>き</sup>き

ふ時、

「宮!!」と貫一の声は筒抜けて走りぬ。

宮は嬉し悲しの<sup>こころく</sup>心<sup>くら</sup>昧<sup>くら</sup>みて、身も世もあらず泣伏したり。

「何用有つて来た！」

怒るべきか、この時。恨むべきか、この時。辱むべきか、悲むべきか、号ぶべきか、罵るべきか、責むべきか、彼は一時に万感の相乱れて急なるが為に、吾を吾としも覚ゆる能はずして打顫ひるたり。

「貫一さん！ どうぞ堪忍して下さいまし」

宮は漸う顔を振挙げしも、凄く色を変へたる貫一の面に向ふべくもあらで萎れ俯しぬ。

「早く帰れ！」

「……………」

「宮！」

幾年いくとせ間かざりしその声ならん。宮は危みつつも可なつか懐しと見る目を覚えそなたず其方に転うつせば、鋭みむかくふる貫一の眼の湿まなこうるほへるは、既に如何いかなる涙の催せしならん。

「今更お互に逢ふ必要は無い。又お前もどの顔で逢つふ意もりか。先せんだ達つて而しきりから頻に手紙を寄来よこすが、あれは一通でも開封したのは無い、来れば直すぐに焼棄てて了ふのだから、以来は断じて寄来さんやうに。わたし私は今病中で、かうしてゐるのも太儀たいぎでならんのだから、早く歸つて貰ひたい」

彼は老婢を召して、

「お客様のお立たちだ、お供にさう申して」

取附く島もあらず思おもひなや悩める宮を委おきて、貫一は早くも独り

座を起たんとす。

「貫一さん、<sup>わたし</sup>私は今日は死んでも可<sup>い</sup>意<sup>つもり</sup>でお目に掛りに来たので  
すから、貴方<sup>あなた</sup>の存分にどんな目にでも遭<sup>あは</sup>せて、さうしてそれでも  
かくも今日は勘弁して、願<sup>ねが</sup>ひですから私の話を聞いて下さいま  
し」

「何の為に！」

「私は全く後悔しました！ 貫一さん、私は今になつて後悔しま  
した!! <sup>くはし</sup> 悉<sup>まる</sup>い事はこの間からの手紙に段々書いて上げたのですけ  
れど、全<sup>まる</sup>で見<sup>み</sup>ては下さらないのでは、後悔してゐる私のどんな切  
ない思<sup>おも</sup>ひをしてゐるか、お解<sup>と</sup>りにはならないでせうが、お目に掛つ  
て口では言<sup>い</sup>ふに言<sup>い</sup>れない事ばかり、設<sup>たと</sup>ひ書けない私の筆でも、あ

れをすつかり見て下すつたら、些<sup>ちつ</sup>とはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。色々お詫<sup>わび</sup>は為る意<sup>つもり</sup>でも、かうしてお目に掛つて見ると、面目<sup>めんぼく</sup>が無いやら、悲いやらで、何一<sup>ひとこと</sup>語も言へないのですけれど、貫一さん、とても私は来られる筈<sup>はず</sup>でない処へかうして来たのには、死ぬほどの覚悟をしたのと思つて下さいまし」

「それがどう為たのだ」

「さうまで覚悟をして、是非お話を為たい事が有るのですから、御迷惑でもどうぞ、どうぞ、貫一さん、ともかくも聞いて下さいまし」

涙ながらに手を拄<sup>つか</sup>へて、吾が足<sup>あしもと</sup>下に額<sup>ぬかづ</sup>叩く宮を、何為らんとやうに打見遣りたる貫一は、



「六年<sup>ぜん</sup>前の一月十七日、あの時を覚えてゐるか」

「……………」

「さあ、どうか」

「私は忘れは為ません」

「うむ、あの時の貫一の心持を今日お前が思知るのだ」

「堪忍して下さい」

唯<sup>と</sup>見る間<sup>いでゆ</sup>に出行<sup>い</sup>く貫一、咄<sup>あなや</sup>嗟<sup>ふすま</sup>、紙門は鉄壁よりも堅く閉<sup>た</sup>てられ

たり。宮はその心に張<sup>はりつ</sup>充めし望を失ひてはたと領<sup>ひれふ</sup>伏しぬ。

「豊、豊！」と老婢を呼ぶ声劇<sup>はげし</sup>く縁<sup>えん</sup>続<sup>つづき</sup>の子亭<sup>はなれ</sup>より聞<sup>きこ</sup>ゆれば、

直<sup>ちき</sup>に走り行く足音の響<sup>き</sup>きしが、やがて返<sup>きた</sup>し来れる老婢は客間に顯<sup>あらは</sup>

れぬ。宮は未<sup>かしら</sup>だ頭を挙げずゐたり。可憐<sup>しをらし</sup>き束髪<sup>えりもとふか</sup>の頸元深く、黄<sup>お</sup>

うばくぞめ はんえり 襖染の半衿に紋御召の二枚衿を重ねたる衣紋の綾先づ謂  
はんやう無く、肩状優う内俯したる脊に金茶地の東綴の  
帯高く、勝色裏の敷乱れつつ、白羽二重のハンカチーフに涙  
おほを掩へる指に赤く、白く指環の玉を耀したる、殆ど物語の画をも  
み看るらん心地して、この美き人の身の上に何事の起りけると、豊  
は可恐きやうにも覚ゆるぞかし。  
おそろし

「あの、申上げますが、主人は病中の事でございますもので、唯  
あいにく今生憎と急に気分が悪くなりましたので、相済みませんで御座い  
ますが中座を致しました。恐入りますで御座いますが、どうぞ今  
んにち日はこれで御立帰を願ひますで御座います」  
おもて面を抑へたるままに宮は涙を噉りて、

「ああ、さやうで御座いますか」

「折角お出いでのところを誠にどうもお気毒さまで御座います」

「唯今ちよつ些と支度を致しますから、もう少々置いて戴いたきますよ」

「さあさあ、貴方あなた御遠慮無く御寛ごゆるりと遊ばしまし。又何だか降出し

て参りまして、今日こんにちはいつそお寒過ぎますで御座います」

彼の起ちし迹あとに宮は身支度を為るにもあらで、始よみがへて甦よみがへりたる人

の唯在るが如くに打沈みてぞゐたる。やや久ひさしかるに客の起たんと

する模様あらねば、老婢は又出いできた来れり。宮はその時遽にはかに身みづくろ

いして、

「それではお暇いとまを致します。些ちよつと御挨拶だけ致して参りたいので

すから、何方どちらにお寝よつてお在いでですか……」

「はい、あの何でございます、どうぞもうおかまひ無く……」

「いいえ、御挨拶だけ些と」

「さやうで御座いますか。では此方へ」

あるじ 主の本意ならじとは念ひながら、老婢は止むを得ず彼を子亭に

案内せり。昨夜の収めざる蓐の内に貫一は着のまま打仆れて、

夜着も搔卷も裾の方に蹴放し、枕に辛うじてその端に幾度か

置きかへ置易られし頭を載せたり。

思ひも懸けず宮の入来るを見て、起回らんとせし彼の膝下

に、早くも女の転び来て、立たんと為れば袂を執り、猶も犇と寄

添ひて、物をも言はず泣伏したり。

「ええ、何の真似だ！」

突返さんとする男の手を、宮は両手に抱き緊めて、

「貫一さん！」

「何を為る、この恥不知！」

「私が悪かつたのですから、堪忍して下さいまし」

「ええ、やかまし 聒い！　ここを放さんか」

「貫一さん」

「放さんかと言ふに、ええ、もう！」

その身を楯にたて宮は放さじと争ひて益ます放さず、両箇ふたりが顔は互に

息の通はんとすばかり近く合ひぬ。一生又相見あひみじと誓へるその人

の顔の、おのれ眺ながめたりし色は疾とく失せて、誰たれゆる今の別べつに豔えんな

るも、なほ形のみは変らずして、実げにかの宮にして宮ならぬ宮と、

吾は如何いかにしてここに逢へる！ 貫一はその胸の夢むる間に現ひまうつつともなく彼を矚まもれり。宮は殆ど情極ほとんきはまりて、纔わづかに狂せざるを得たるのみ。

彼は人の頭かしらより大いなるダイヤモンドを乞ふが為に、この貫一の手を把とる手をば釈とかざらん。大いなるダイヤモンドか、幾いかに

許り 大いなるダイヤモンドも、宮は人の心の最も小き誠に値せざ

るを既に知りぬ。彼の持もたるダイヤモンドはさせる大いなる者ならざれど、その棄去りし人の誠は量はかりな無きものなりしが、嗟あ乎、

今何処いづこに在りや。その嘗かつて誠を恵みし手は冷ひやかに残れり。空くそ

の手を抱いだきて泣かんが為に來きたれる宮が悔は、實げに幾許いかに 大いなる者ならん。

「さあ、早く帰れ！」

「もう二度と私はお目には掛りませんから、今日のところはとうとも堪忍して、打つなり、殴くなり貫一さんの勝手にして、さうして少小でも機嫌を直して、私のお詫に來た訳を聞いて下さい」

「ええ、煩い！」

「それぢや打つとも殴くともして……」

身悶みもだえして宮の縫すがるを、

「そんな事で俺おれの胸が霽はれると思つてゐるか、殺しても嫌あきたらんだ」

「ええ、殺れても可い！ 殺して下さい。私は、貫一さん、殺して貰ひたい、さあ、殺して下さい、死んで了つた方が可いのです」

から」

「自分で死ね！」

彼は自ら手を下して、この身を殺すさへ屑からずとまでに己を  
 鄙いやしむなるか、余に辛つらしと宮は唇くちびるを咬かみぬ。

「死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態さまを為  
 ずなに何な為死なぬまで立派に棄て通さんのだ」

「私は始から貴方を棄てる気などは有りはしません。それだから  
 篤とつくりとお話を為たいのです。死んで了へとお言ひでなくても、私  
 はもう疾とから自分ぢや生きてゐると思つてゐません」

「そんな事聞きたくはない。さあ、もう帰れと言つたら帰らんか  
 ！」



「帰りません！ 私はどんな事してもこのままぢや……帰れませ  
ん」

宮は男の手をば益す弛めず、益す激する心の中には、夫もあら  
ず、世間もあらずなりて、唯この命を易ふる者を失はじと一向  
に思入るなり。

折から縁に足音するは、老婢の来るならんと、貫一は取られた  
る手を引放たんとすれど、こは如何、宮は些も弛めざるのみか、  
その容をだに改めんと為ず。果して足音は紙門の外に逼れり。

「これ、人が来る」

「……………」

宮は唯力を極めぬ。

不意にこの体<sup>てい</sup>を見たる老婢は、半啓<sup>なかげ</sup>けたる紙門<sup>ふすま</sup>の陰に顔引入れ  
つつ、

「赤<sup>あかがし</sup>檉<sup>し</sup>さんがお出<sup>いで</sup>になりましたして御座います」

窮厄の色はつと貫一の面<sup>おもて</sup>に上<sup>のぼ</sup>れり。

「ああ、今其方<sup>そつち</sup>へ行くから。——さあ、客が有るのだ、好加減に  
帰らんか。ええ、放せ。客が有ると云ふのにどうするのか」

「ぢや私はここに待つてゐますから」

「知らん！ もう放せと言つたら」

用捨もあらず宮は捻倒<sup>ねぢたふ</sup>されて、落花の狼藉<sup>ろうぜき</sup>と起き敢<sup>あ</sup>へぬ間  
に貫一は出行<sup>いでゆ</sup>く。

## (六)の二

座敷外に脱ぎたる紫むらさきうら裏あづまの吾妻コオトに目留めし満枝は、嘗かつて知らざりしその内曲うちわの客を問はで止む能あたはざりき。又常に厚く恵めぐまるる老婢は、彼の為に始終の様子を告つぐるの労を吝をしまざりしなり。さてはと推せし胸の内は瞋しんい恚に燃えて、可憎にくき人の疾とく出で来こよかし、如何いかなる貌かほして我を見んと為すらん、と焦せきごころ心に待つ間のいとどしう久ひさしかりしに、貫一はなかなか出いで来ずして、しかも子は亭なれのほとほと人ひと気もあらざらんやうに打うちしづま鎮しづまれるは、我に忍ぶかと、弥いよいよ満枝は怵こらへかねて、

「お豊さん、もう一遍だんな旦那様にさう申して来て下さいな、私わたし今日

は急ぎますから、些ちよつとお目に懸りたいと」

「でも、私は誠わたくしに参り難にくいので御座いますよ、何だかお話が大変  
 込入いつてお在いのやうで御座いますから」

「かまはんぢやありませんか、私がさう申したと言つて行くので  
 すもの」

「ではさう申上げて参りますです」

「はあ」

老婢は行きて、紙門ふすまの外より、

「旦那さま、旦那さま」

「此方こちらにお在いは御座いませんよ」

かく答へしは客の声なり。豊は紙門ふすまを開きて、

「おや、さやうなので御座いますか」

げあるじ

実に主は在らずして、在るが如くその枕頭まくらもとに坐れる客の、

なほかなしみ

猶悲おもての残れる面に髪をば少し打乱うちみだし、左わきあけの二寸ばかり

も裂けたるままに姿も整はずゐたりしを、遽にはかに引ひきつくろ枢ひきつくろひつつ、

「今し方そちら其方へお出いでなすつたのですが……」

「おや、さやうなので御座いますか」

あちら

「那裡のお客様の方へお出いでなすつたのでは御座いませんか」

あちら

「いいえ、貴方、那裡のお客様が急ぐと有おつしや仰つてで御座います

ものですから、さう申上げに参つたので御座いますが、それぢや

どちら

まあ、那邊へいらつしやいましたらう！」

あちら

「那裡にもゐらつしやいませんの！」

「さやうなので御座いますよ」

老婢はここを倉皇<sup>とつかは</sup>起ちて、満枝が前に、

「此方<sup>こちら</sup>へもいらつしやいまして御座いますか」

「何が」

「あの、那裡<sup>あちら</sup>にもゐらつしやいまして御座います」

「旦那様が？ どうして」

「今し方這裡<sup>こちら</sup>へ出てお在<sup>いで</sup>になつたのださうで御座います」

「嘘<sup>うそ</sup>、嘘です」

「いいえ、那裡<sup>あちら</sup>にはお客様が一人でゐらつしやるばかり……」

「嘘ですよ」

「いいえ、どういたして貴方、決して嘘ぢや御座いません」

「だつて、此方へお出なさりは為ないぢやありませんか」

「ですから、まあ、何方へいらつしやつたのかと思ひまして……」

「那裡にきつと隠れてでもお在なのですよ」

「貴方、そんな事が御座いますものですか」

「どうだか知れはしません」

「はてね、まあ。お手水ですかしらん」

「随処尋ねんとて彼は又倉皇起ちぬ。」

「有効無きこの侵辱に遭へる吾身は如何にせん、と満枝は」

「無念の遣る方無さに色を変へながら、些も騒ぎ惑はずして、知り」

「つつ食みし毒の験を耐へ忍びゐたらんやうに、得も謂れず竊に苦」

「めり。宮はその人の遁れ去りしこそ頼の綱は切られしなれと、は」

や留るべき望も無く、まして立歸るべき力は有らで、罪の報は悲  
 くも何時まで儚きこの身ならんと、打俯し、打仰ぎて、太息  
 くのみに。

颯と空の昏み行く時、軒打つ雨は漸く密なり。

戸棚、押入の外捜さざる処もあらざりしに、終に主を見出さ

ざる老婢は希有なる貌して又子亭に入来れり。

「何方にもゐらつしやいませんで御座いますが……」

「あら、さやうですか。ではお出掛にでも成つたのでは御座いま  
 せんか」

「さやうで御座いますね。一体まあどうなすつたと云ふので御座  
 います、那裡にも這裡にもお客様を置去に作つてからに。は



てね、まあ、どうもお出掛になる訳は無いので御座いますけれど、  
 家中には何処どつこにもゐらつしやらないところを見ますと、お出掛に  
 なつたので御座いますかしらん。それにしても……まあ御免あそ  
 ばしまして」

彼は又満枝の許もとに急ぎ行きて、事の由よしを告げぬ。

「いいえ、貴方あなた、私は見て参りましたので御座いますよ。子亭はなれに

ゐらつしやりは致しません、それは大丈夫で御座います」

彼は遽にはかに心着きて履物はきものを検め来んとて起ちけるに、踵ついで起

てる満枝の庭前にはさきの縁に出づると見れば、々つかつかと行きて子亭はなれの入

口に顕あらはれたり。

宮は何人なにびとの何の為に入来いりきたれるとも知らず、先づ愕まきつつも

彼を迎へて容を改めぬ。かたち吾が恋人の恋人を拝まんとてここに来に

ける満枝の、意外にも敵の己より少く、己より美しく、己より可しをら

憐く、己より貴きを見たる妬き、憎きは、唯この者有りて可憐いと

しき故に、他の情も誠も彼は打忘るるよとあはれ、一念の力を剣つるぎ

とも成して、この場を去らず刺殺さまほしう、心は躍り襲り、をど かか

躍り襲らんと為るなりけり。

宮は稍やや羞はぢらひて、葉隠はかくれに咲遅れたる花の如く、夕月の涼うすずし

棟むねを離れたるやうに満枝は彼の前に進出すすみいでて、互に対面の礼せ

し後、

「始めましてお目に掛りますで御座いますが、間様の……御親戚  
？ でゐらつしやいますで御座いますか」

憎き人をば一番苦めんの満枝が底意なり。

「はい親類筋の者で御座います」

「おや、さやうでゐらつしやいますか。手前は赤檉満枝と申しまして、間様とは年来の御懇意で、もう御親戚同様に御交際を致して、毎々お世話になつたり、又及ばずながらお世話も致したり、始終お心易く致してをりますで御座いますが、ついぞ、まあ従<sup>これま</sup>来<sup>で</sup>お見上げ申しませんで御座いました」

「はい、つい先日まで長らく遠方に参つてをりましたもので御座いますから」

「まあ、さやうで。余程何でございますか、御遠方で？」

「はい……広島の方に居りまして御座います」

「はあ、さやうで。唯今は何方どちらに」

「池端いけのはたに居ります」

「へえ、池端、お宜よろしい処で御座いますね。然し、夙かねて間様のお話

では、御自分は身寄も何も無いから、どうぞ親戚同様に末の末ま

で交際したいと有おつしや仰るもので御座いますから、全くさうとばかり

私信わたくしじてをりましたので御座いますよ。それに唯今かうして伺

ひますれば、御立派な御親戚がお有り遊ばすのに、どう云ふお意つもり

であんな事を有仰つたので御座いませう。何も親戚のお有りあそ

ばす事をお隠しになるには当らんぢや御座いませんか。あの方は

時々さう云ふ水臭い事を一体なまこ作るので御座いますよ」

疑うたがひの雲は始て宮が胸かかに懸りぬ。父が嘗かつて病院にて見し女の必ず

訳有るべしと指せしはこれならん。さては客来と言ひしも詐  
 にて、或は内縁の妻と定れる身の、吾を咎めて邪魔立せんとか、  
 但は彼人のこれ見よとてここに引出せしかと、今更に差はざ  
 りし父が言を思ひて、宮は仇の為に病めるを咎たるるやうにも覺  
 ゆるなり。いよいよ長く居るべきにあらぬ今日のこの場はこれま  
 でと潔く座を起たんとしたりけれど、何処にか潜めある彼人の  
 吾が還るを待ちて忽ち出で来て、この者と手を把り、面を並べて、  
 可哀なる吾をば笑ひ罵りもやせんと想へば、得堪へず口惜くて、  
 如何にせば可きと心苦く遅ひゐたり。

「お久しぶりで折角お出のところで、生憎と余義無い用向の使が  
 見えしましたもので、お出掛になつたので御座いますが、些と遠方

でございますから、お歸來かへりの程は夜にお成りで御座いませう、近日どうぞ又御寛ごゆつくりとお出で遊ばしまして」

「大相長ちようざ座を致しまして、貴方の御用のお有り遊ばしたところを、心無いお邪魔を致しまして、相済みませんで御座いました」  
「いいえ、もう、私共は始終上つてをるので御座いますから、些ちよつとも御遠慮には及びませんで御座います。貴方こそさぞ御残念でゐらつしやいませう」

「はい、誠に残念でございます」

「さやうで御座いませうとも」

「四五年ぶりで逢ひましたので御座いますから、色々昔話でも致こんにちして今日は一日遊んで参らうと樂たのしみに致してをりましたのを、実

に残念で御座います」

「大きに」

「さやうなら私はお暇いとまを致しませう」

「お歸来かへりで御座いますか。丁度唯今小降で御座いますね」

「いいえ、幾多降いくらりましたところが俣くるまで御座いますから」

互に憎し、口惜くちをしと鑄しのぎを削る心の刃やいばを控へて、彼等は又相見あひみぎ

るべしと念じつつ別れにけり。

## 第七章

家の内を隈くま無く尋ねれども在らず、さては今にも何処いづこよりか歸か

へりこ  
来んと待てど暮せど、姿を晦せし貫一は、我家ながらも身を容  
るる所無き苦くるしまぎ紛れに、裏庭の木戸より傘かさも撃ささで忍び出でけ  
るなり。

されど唯一目散に脱のがれんとのみにて、卒にはかに志かたす方もあらぬに、  
生憎降頻る雨をば、辛からくも人の軒などに凌しのぎつつ、足に任せ  
て行くほどに、近頃思立ちて折をりふし節通へる碁会所の前に出でけれ  
ば、ともかくも成らんとて、其処そこに躍をどり入りけり。

客は三組ばかり、各静おのおのに窓前の竹の清せい韻いんを聴ききて相対あひたいせる座  
敷ひとまの一間奥に、主は乾魚あるじの如ひものき親仁おやぢの黄なる髯ひげを長く生はやしたるが、  
兀然こつぜんとして独り盤ひとを磨みがきある傍に通りて、彼は先まづ濡ぬれたる衣きぬ  
を炙あぶらんと火鉢ひばちに寄りたり。



あやし

異み問はるるには能くも答へずして、貫一は余りに不思議なる

今日の始末を、その余波は今も轟く胸の内に痛か思回して、又空

く神は傷み、魂は驚くといへども、我や怒る可き、事や哀むべき、

あるひ

或は悲む可きか、恨む可きか、抑も喜ぶ可きか、慰む可きか、彼

は全く自ら弁ぜず。五内渾て燃え、四肢直に氷らんと覺えて、名

状すべからざる感情と煩悶とは新に來りて彼を襲へるなり。

あるじ

主は貫一が全濡の姿よりも、更に可訝きその気色に目留め

て、問はでも椿事の有りしを疑はざりき。ここまで身は遁れ來に

けれど、なかなか心安からで、兩人を置去に為し跡は如何、又

我が為んやうは如何など、彼は打惑へり。沸くが如きその心の騒

しきには似で、小暗き空に満てる雨声を破りて、三面の盤の鳴る

石は断続して甚だ幽なり。はなは主はこの時窓際まどぎはの手合観てあはせみに呼れたれば、貫一は独り残りて、未だ乾ぬ袂ひ たもとを翳かざしつつ、愈いよいよに限無く惑ひゐたり。にはか遽に人の騒立つるに愕おどろきて顔を挙げあぐれば、座中ことごとく尽く頸を延べて己おのが方かたを眺め、声々に臭しと喚よばはるに、見れば、吾が羽織はしの端は火中に落ちて黒煙くろけふりを起つるなり。直ちきに揉消もみけせば人しづまは静るとともに、彼もまた前さきの如し。

少頃しばし有りて、門かどに入来いりきし女おとなの訪ふ声して、

「宅の旦那様だんなはもしや這裡こちらへいらつしやりは致しませんで為したらうか」

主は忽ち髯たちま ひげのおとがおとがめぐらめぐらの頤ほを回めぐらして、

「ああ、奥いにお在で御座いますよ」

豊かと差さ覗のぞきたる貫一は、

「おお、傘を持つて来たのか」

「はい。此方こちらにお在いでなので御座いましたか、もう方々お捜し申しました」

「さうか。客は帰つたか」

「はい、疾とうにお帰かへりになりましたして御座います」

「四谷のも帰つたか」

「いいえ、是非お目に掛りたいと有おっしや仰おほいまして」

「居る？」

「はい」

「それぢや見付からんと言つて措おけ」

「ではお歸りに成りませんので？」

「も少し経<sup>た</sup>つたら歸る」

「直<sup>ぢき</sup>にもうお中食<sup>ひる</sup>で御座いますが」

「可<sup>い</sup>いから早く行けよ」

「未<sup>ま</sup>だ旦那様は朝御飯も」

「可いと言ふに！」

老婢は傘と足駄<sup>あしだ</sup>とを置きて悄々<sup>すこすこ</sup>還りぬ。

程無く貫一も焦<sup>たもと</sup>げたる袂<sup>たもと</sup>を垂れて出行<sup>いでゆ</sup>けり。

彼はこの情緒<sup>はげし</sup>の劇く紛乱せるに際して、可<sup>わづらはし</sup>煩<sup>わづらはし</sup>き満枝<sup>まつは</sup>に責<sup>せ</sup>ら

る苦悩に堪へざるを思へば、その歸去<sup>かへりさ</sup>らん後までは決して還<sup>け</sup>ら

じと心を定めて、既に所在<sup>ありか</sup>を知られたる碁会所<sup>たちい</sup>を立出<sup>た</sup>でしが、い

よいよ指して行くべき方は有らず。はや正午と云ふに未だ朝の物さへ口に入れず、又半銭をも帯びずして、如何に為んとするにか有らん、猶降りに降る雨の中を茫々然として彷徨へり。

初夏の日は長かりけれど、纔に幾局の勝負を決せし盤の上には、殆ど惜き夢の間に昏れて、折から雨も霽れたれば、好者どもも終に碁子を斂めて、惣立に帰るをあたかも送らんとする主の忙々く燈ともす比なり、貫一の姿は始て我家の門に顕れぬ。

彼は内に入るより、

「飯を、飯を！」と婢を叱して、颯と奥の間の紙門を排けば、何ぞ図らん燈火の前に人の影在り。

彼は立てるままに目を睜りつ。されど、その影は後向に居

て動かんとも為<sup>せ</sup>ず。満枝は未<sup>いま</sup>だ往かざるか、と貫一は覺えず高く  
 舌打したり。女は尚<sup>なほ</sup>も殊<sup>こと</sup>更<sup>さら</sup>に見向かぬを、此<sup>こなた</sup>方もわざと言<sup>ことば</sup>を掛  
 けずして子亭<sup>はなれ</sup>に入り、豊を呼びて衣を更<sup>か</sup>へ、膳<sup>ぜん</sup>をも其<sup>そこ</sup>処に取寄せ  
 しが、何とか為<sup>いりく</sup>けん、必ず入来<sup>うちく</sup>べき満枝の食事を了<sup>をは</sup>るまでも来ざ  
 るなりき。却<sup>かへ</sup>りて仕合<sup>しあはせ</sup>好<sup>よ</sup>しと、貫一は打<sup>うち</sup>労<sup>つ</sup>れたる身を暢<sup>のび</sup>かに、  
 障子の月影に肱<sup>ひぢ</sup>枕<sup>まくら</sup>して、姑<sup>しば</sup>く喫<sup>きつ</sup>烟<sup>えん</sup>に耽<sup>ふけ</sup>りたり。  
 敢<sup>あへ</sup>て恋しとにはあらねど、苦しげに羸<sup>やつ</sup>れたる宮が面<sup>おも</sup>影<sup>かげ</sup>の幻は、  
 頭<sup>かしら</sup>を回<sup>めぐ</sup>れる一<sup>ひとつ</sup>蚊<sup>か</sup>の声の去らざらんやうに襲<sup>おもひ</sup>ひ来て、彼が切なる  
 哀訴も従<sup>おもひ</sup>ひて憶<sup>おもひ</sup>出<sup>い</sup>でらるれば、なほ往きかねて那<sup>そこ</sup>辺に忍<sup>しの</sup>ばずやと、  
 風の音にも幾<sup>いく</sup>度<sup>たび</sup>か頭<sup>かしら</sup>を挙げし貫一は、婆<sup>ば</sup>娑<sup>さ</sup>として障子に揺<sup>ゆ</sup>るる  
 竹の影を疑<sup>う</sup>へり。

宮は何時までここに在らん、我は例の孤なり。思ふに、彼の悔  
 いたるとは誠ならん、我の死を以て容さざるも誠なり。彼は悔い  
 たり、我より容さば容さるべきを、さは容さずして堅く隔つる思  
 も、又怪きまでに貫一は佗くて、その釈き難き怨に加ふるに、或  
 種の哀に似たる者有るを感じるなりき。いと淡き今宵の月の色こ  
 そ、その哀にも似たるやうに打眺めて、他の憎しとよりは転た  
 自を悲しと思続けぬ。彼は竟に堪へかねたる気色にて障子を推  
 啓れば、涼き空に懸れる片割月は真向に彼の面に照りて、彼  
 の愁ふる眼は又痛かにその光を望めり。

「間さん」

居たるを忘れし人の可疎き声に見返れば、はや背後に坐れる満

枝の、常は人を見るに必ず笑えみを帯びざる無き目の秋波しほも乾かわき、顔色などは殊ことに槁かれて、などかくは浅ましきと、心こころ陰ひそかに怪む貫一。

「ああ、未だ御在おいででしたか」

「はい、居りました。お午ひるまへ前わたくしから私お待ち申してをりました」

「ああ、さうでしたか、それは大きに失礼しました。さうして何ぞ急な用でも」

「急な用が無ければ、お待ち申してをつては悪いので御座いますか」

語氣にはかはげしの卒おどろに厲むなしきを駭みける貫一は、空く女の顔を見遣やるのみ。

「お悪いで御座いませう。お悪いのは私能く存じてをります。第



一お待ち申してをりましたのよりは、今朝ほど私の参りましたのが、一層お悪いので御座いませう。飛とんだ御おたのしみ娛のお邪魔を致しますて、間さん、誠に私相済みませんで御座いました」

その眼まなこ色は怨の銚うらみつきを露して、男の面上を貫きかんとやうに緊きびしく見据みゑたり。

貫一は苦笑して、

「貴方あなたは何をばかな事を言つてゐるのですか」

「今更かくお庖ひつつしなさるには及びませんさ。若い男と女がひとま一間に入つて、取付とつき引付ひつつきして泣いたり笑つたりしてをれば、訳は大概知れてをるぢや御座いませんか。私あれに控へてをりまして、様子は大方存じてをります。七歳ななつや八歳やつの子供ぢや御座いません、そ

れ位の事は誰にだつて直に解りませうでは御座いませんか。

爾それから後貴方がお出掛になりますと私直ぢきにここのお座敷へ推掛おしかけ

て参つて、あの御婦人にお目に掛りましたので御座います」

絮くどしと聞流せし貫一も、ここに到りて耳そばだを欻さてぬ。

「さうして色々お話を伺ひまして、お二人の中も私能く承知致し

ました。あの方も又有おつしや仰うやらなくても可ささうな事までお話を作なさ

いますので、それは随分聞きき難にくい事まで私伺ひました」

為しな失したりと貫一は密ひそかに術じゆつ無なき拳こぶしを握れり。満枝は猶なほも言足

らで、

「然し、間さん、遠さすがに貴方で御座いますのね、私敬服して、了ひ

ました。失礼ながら貴方のお腕前に驚きましたので御座います。

ああ云つた美婦人を御おたのしみ娛にお持ち遊ばしてゐながら、世間へは偏人だ事の、一國者いつこくものだ事のと、その方へ掛けては実に奇麗な顔を遊ばして、今日の今朝まで何年が間と云ふもの秘ひしかくし隠に隠し通してゐらしつたお手際てぎはには私実に驚入つて一言も御座いませいちごんん。能く凄すごいとか何とか申しますが、貴方のやうなお方の事をさう申すので御座いませう」

「もうつまらん事を……、貴方何ですか」

「お口ぢやさう有おつしや仰つても、実はお嬉しいうれしので御座いませう。あれ、ああしちや考へてゐらつしやる！ そんなにも恋こひしくてゐらつしやるのですかね」

されば我が出行いでゆきし迹をこそ案ぜしに、果してかかるわざはひは出で

来にけり。由よしな無き者の目には触れけるよ、と貫一はいと苦く心こころ踊くぐまりつつ、物言ふも憂き唇を閉ぢて、唯月に打向へるを、女はこなた此方より熟々と見透みすかして目も放たず。

「間さん、貴方さう黙つてゐらつしやらんでも宜よろしいでは御座いませんか。ああ云ふお美うつくしいのを御覧に成つた後では、私如き者には口をお利ききに成るのもお可厭いやなのでゐらつしやいませう。私お察し申してをります。ですから私決くどして絮くい事は申上げません。少し聞いて戴きたい事が御座いますのですから、庶どうかそれだけ言いはして下さいまし」

貫一は冷ひややかに目を転うつして、

「何なりと有おつしや仰い」

「私もう貴方を殺して了ひたい！」

「何です」

「貴方を殺して、あれも殺して、さうして自分も死んで了ひたく思ふのです」

「それも可いでせう。可いけれど何で私が貴方に殺されるのですか」

「間さん、貴方はその訳を御存無いとおつしや  
口で有仰るのですか」

「これは怪けしからん！ 何ですと」

「怪からんとは、貴方も余あんまりな事を有仰るでは御座いませんか」

既に恨み、既に瞋いかりし満枝まなこの眼は、ここに到りて始て泣きぬ。

いと有るまじく思掛けざりし貫一は寧ろ可恐しと念へり。

「貴方はそんなにも私が憎くてゐらつしやるのですか。何で又さうお憎みなさるのですか。その訳をお聞せ下さいまし。私それが伺ひたい、是非伺はなければ措きません」

「貴方を何日私が憎みました。そんな事は有りません」

「では、何で怪からんなどと有仰います」

「怪からんぢやありませんか、貴方に殺される訳が有るとは。私は決して貴方に殺される覚は無い」

満枝は口惜しげに頭を掉りて、

「有ります！ 立派に有ると私信じてをります」

「貴方が独で信じて……」

「いいえ、独で有らうが何で有らうが、自分の心に信じた以上は、私それを貫きます」

「私を殺すと云ふのですか」

「随分殺しかねませんから、覚悟をなすつてゐらつしやいまし」

「はあ、承知しました」

いよいよ昇れる月に木草の影もをかしく、庭の風情は添ふぜいりけれ  
ど、軒端のきばなる芭蕉葉ばしやうばの露つゆ夥おびただしく夜氣の侵すに堪たへで、やを  
ら内に入りたる貫一は、障子を閉たてて燈ひを明あかうし、故に床の間の  
置時計を見遣りて、

「貴方、もうお歸りに成つたが可いでせう、余り晚おそくなるですか  
ら。ええ？」

「憚り様で御座います」  
はばか

「いや、御注意を申すのです」

「その御注意が憚り様で御座いますと申上げるので」

「ああ、さうですか」

「今朝のあの方なら、そんな御注意なんぞは遊ばさんで御座いませう。如何ですか」  
いかが

憎さげに言放ちて、彼は吾矢の立つを看みんとやうに、姑しばく男の顔色うかがを候ひしが、

「一体あれは何者なので御座います！」

犬にも非ず、猫にも非ず、汝なんぢに似たる者よと思ひけれど、言いひ争あらそはんは愚なりと勘弁して、彼は才わづかに不快の色を作なせしのみ。



満枝は益す独り憤れて、

「旧いお馴染ださうで御座いますが、あの恰好は、商売人ではなし、万更の素人でもないやうな、貴方も余程不思議な物をお好み遊ばすでは御座いませんか。然し、間さん、あれは主有る花で御座いませう」

妄に言へるならんと念へど、如何にせん貫一が胸は陰に轟けるを。

「どうですか、なあ」

「さう云ふ者を相手に遊ばすと、別してお樂が深いとか申しますが、その代に罪も深いので御座いますよ。貴方が今日まで巧に隠し抜いてゐらした訳も、それで私能く解りました。こればか

りは余り公に御自慢は出来ん事で御座いますもの、秘密に遊ばしますのは実に御尤ごもつともで御座います。

その大事の秘密を、人も有らうに、貴方の嫌ひきらの嫌ひの大御だいおき嫌ひきらの私に知られたのは、どんなにかお心苦くゐらつしやいま

せう。私十分お察し申してをります。然し私に取りましては、こ

れ程幸な事さいはひは無いので御座います。貴方が余り片意地に他ひとを苦め

てばかりゐらつたから、今度は私から思ふ様これで苦めて上げるのです。さう思召おぼしめしてゐらつしやい！」

聞きき乞をりたる貫一は吃々きつきつとして窃笑せつしょうせり。

「貴方は気でも違ひは為せんですか」

「少しは違つてもをりませう。誰がこんな気違きちがひには作なすつたの

です。私氣が違つてゐるなら、今朝から変に成つたので御座いますよ。お宅に詣つて氣が違つたのですから、元の正氣に復してお返し下さいまし」

彼は擦寄り、擦寄りて貫一の身近に逼れり。浅ましく心苦かりけれど逃ぐべくもあらねば、臭き物に鼻を掩へる心地しつつ、貫一は身を側め側め居たり。満枝は猶も寄添はまほしき風情にて、

「就きましては、私一言貴方に伺ひたい事が有るので御座います  
が、これはどうぞ御遠慮無く貴方の思召す通を丁と有仰つてお  
聞せ下さいまし、宜う御座いますか」

「何ですか」

「なんですかでは可厭です、宜いと截然有仰つて下さい。さ

あ、さあ、貴方」

「けれども……」

「けれどもちや御座いません。私の申す事だと、貴方は毎もいっ気の無い返事ばかり遊ばすのですけれど、何も御迷惑に成る事では御座いませんです、私の申す事に就て貴方が思召す通を答へて下されば、それで宜いのですから」

「勿論もちろん答へます。それはあたりまへ当然の事ぢやないですか」

「それがあたりまへ然でなく、極打明けて少しも裏つまずに言つて戴きたいのですから」

善と貫一はよし領うなづきつ。

「では、きつと有仰つて下さいまし。間さん、貴方は私をあなたい奴うるさ

だと思召してゐらつしやるで御座いませう。私始終さう思ひながら、貴方の御迷惑もかまはずにやつぱりかうして附纏つきまとつてゐるのは、自分の口から箇様かような事を申すのも、甚はなはだ可笑をかいので御座いますけれど、私、実に貴方の事は片時でも忘れは致しませんので。それは如何いかに思つてをりましたところが、元来私と云ふ者を嫌きらひ抜いて御在おいでなのですから、あの歌が御座いますね、行く水に数画かずかくよりも儂はかなきは、思はぬ人を思ふなりけりとか申す、実にその通り、行く水に数を画くやうな者で、私の願の愜かなふ事は到底無いので御座いませう。もうさうと知りながら、それでも、間さん、私こればかりは諦めあきらめられなので御座います。

こんな者に見込れて、さぞ御迷惑ではゐらつしやいませうけれ

ども私がこれ程までに思つてゐると云ふ事は、貴方も御存ごぞんじでゐらつしやいませう。私が熱心わかつに貴方の事を思つてゐると云ふ事で御座います、それはお了解わかつに成つてゐるで御座いませう」

「さうですな……そりや或あるひはさうかも知れませんが……」

「何を言つてゐらつしやるのですね、貴方は、或あるひはもさうかでもないでは御座いませんか！ さも無ければ、私何も貴方うるさにうるさがられない訳は御座いませんさ、貴方も私うるさをうるさいと思召すのが、現に何よりの証拠で。漆膠しつこくて困ると御迷惑してゐらつしやるほど、承知を遊ばしてお在いでのでは御座いませんか」

「それはさう謂へばそんなものです」

「貴方から嫌はれ抜いてゐるにも関かはからず、こんなに私が思つてゐる

ると云ふ事は、十分御承知なので御座いませう」

「さう」

「で、私従<sup>これまで</sup>来に色々申上げた事が御座いましたけれど、些<sup>ちよつ</sup>とでもお聴き遊ばしては下さいませんでした。それは表面の理窟<sup>りくつ</sup>から申せば、無理なお願かも知れませんが、私は又私で別に考へるところが有つて、決して貴方の有<sup>おつしや</sup>仰るやうな道に外<sup>はず</sup>れた事とは思ひませんのです。よしんばさうでありまして、こればかりは外の事とは別で、お互にかうと思つた日には、其<sup>そこ</sup>処に理窟も何も有るのでは御座いけません。究竟<sup>つまり</sup>貴方がそれを口実にして遁<sup>に</sup>げてゐらつしやるのは、始から解り切つてゐるので。然し、貴方も人から偏屈だとか、一国だとか謂れてゐらつしやるのですから、成

程儀剛ぎぎこうな片意地なところもお有あなすつて、色恋の事なんぞには貪と

んちやく

着きを遊ばさん方で、それで私の心も汲分けては下さらんのか

と、さうも又思つたり致して、実は貴方の頑固がんこなのを私齒痒はがゆいや

うに存じてをつたので御座います……ところが！」

と言ひも敢あへず煙管きせるを取りて、彼は貫一の横膝よこひざをば或ねんりる念

力強きく痛したたか推したり。

「何を作るのです！」

払へば取直すその煙管にて、手とも云はず、膝とも云はず、当  
るを幸さいはひに満枝は又打ち被かる。

こは何事と駭おどろける貫一は、身を避さくる暇いとまもあらず三つ四つ撃れし

が、遂つひに取つて抑へて両手を働かせじと為れば、内俯うづふしに引据ゑ



られたる満枝は、物をも言はで彼の股の辺に咬付かみついたり。怪けしからぬ女哉かな、と怒いかりの余に手暴く振放せば、なほ辛からくも縋すがれるままに  
 おもてすりつ面を擦付けて咽むせびなき泣に泣くなりき。

貫一は唯不思議の為ていたらく体あきに呆れ惑ひて言も出ことばでず、漸く泣やうやめる彼を排斥おしけんと為たれど、膠にかはの附きたるやうに取縋りつつ、益  
 す泣いて泣いて止まず。涙の湿は単衣を透うるほひひとへして、この難面つれなき人の  
 膚はだへしに沁みぬ。

捨置かば如何いかに募もらんも知らずと、貫一は用捨無く※放もぎはなして、  
 起たんと為るを、彼は虚すかさず賣まつりて、又泣顔を擦すりつく付れば、怵こらへか  
 ねたる声を励す貫一、

「貴方は何を為るのですか！ 好い加減になさい」

「……………」

「さうして早くお帰りなさい」

「帰りません！」

「帰らん？ 帰らんけりや宜<sup>よろ</sup>い。もう明日<sup>あす</sup>からは貴方のここへ足<sup>あ</sup>踏<sup>しづ</sup>みの出来んやうに為<sup>しま</sup>て了ふから、さうお思ひなさい」

「私死んでも参ります！」

「今まで我慢をしてゐたですけれど、もう抛<sup>は</sup>つて置かれんから、私は赤檉<sup>せき</sup>さんに会つて、貴方の事をすつかり話して了ひます」

満枝は始て涙に沾<sup>うるほ</sup>へる目を挙げたり。

「はあ、お話し下さい」

「……………」

「赤檉に聞えましたら、どう致すので御座います」

貫一は齒を鳴して急<sup>せきあ</sup>上げたり。

「貴方は……実に……驚<sup>おどろきい</sup>入った根性ですな！ 赤檉は貴方の

何ですか」

「間さん、貴方は又赤檉を私の何だと思召してゐらつしやるので  
すか」

「怪<sup>けし</sup>からん！」

彼は憎き女の頬<sup>ほほ</sup>をば撃つて撃つて打割<sup>うちわ</sup>る能<sup>あた</sup>はざるを憾<sup>うらみ</sup>と為<sup>す</sup>  
なるべし。

「定<sup>さだめ</sup>てあれは私の夫だと思召すので御座いませうが、決<sup>け</sup>してさや  
うでは御座いませんです」

「そんなら何なんですか」

「往いつぞや日もお話致しましたが、金力で無理に私を奪つて、遂にこんな体にして了つた、謂はば私の讐かたきも同然なので。成程人は夫婦とも申しませうが私の氣では何とも思つてをりは致しません。さうですから、自分の好いた方かたに惚ほれて騒ぐ分は、一向差さ支しつかへの無い独ひとり身みも同じので御座います。

間さん、どうぞ赤檉にお会ひ遊あそばしたら、満枝の奴が惚ほれてゐて為方が無いから、内の御膳炊ごぜんたきに貰つて遣るから、さう思へど、貴方が有おつしや仰つて下さいまし。私とよ豊の手伝でも致して、此方こなたに一ひと生奉公を致します。

貴方は大方赤檉に言ふと有おつしや仰つたら、震へ上つて私が怖こはがり

でも為ると思召すのでせうが、私驚きも恐れも致しません、寧ろ  
 勝手なのですけれど、赤檜がそれは途方に昧くられるで御座いますせう」  
 貫一はほとほと答ふるところを知らず。満枝も然しかこそは呆あきれつ  
 らんと思へば、

「それは実際に御座いますの。若し話が一つ間違つて、面倒な事  
 でも生じましたら、私が困りますよりは余程赤檜の方が困るのは  
 知れてゐるのですから、私を遠とほざけやう為に、お話をなさるのなら、  
 徒爾むだな事で御座います。赤檜は私を恐れてをりませうとも、私些ちよつ  
 ともあの人を恐れてはをりませんです。けれども、折角さう思おほし  
 召めすものなら、物は試ためしで御座いますから、間さん、貴方、赤檜  
 にお話し遊ばして御覧なさいましな。

私も貴方の事を吹聴致します。ああ云ふ主有る婦人と関係遊ばして、始終人目を忍んで逢引あひびきしてゐらつしやる事を触散ふれちらしますから、それで何方どちらが余計迷惑するか、比較事を致しませう。  
如何いかがで御座います」

「男 勝りの機敏な貴方にも似合はん、さすがは女だ」  
をともまき

「何で御座います？」

「お聞きなさい。男と女が話をしてゐれば、それが直ただちに逢引あひびきですか。又妙齡としごろの女でさへあれば、必ず主有るに極きまつてゐるのですか。浅膚あさはかな邪推とは言ひながら、人を誣しふるも太甚はなはだしい！

失敬千万な、氣を着けて口をお利ききなさい」

「間さん、貴方、些ちよつと此方こちらをお向きなさい」

手を取りて引けば、ふりほど振釈き、

「ええ、もう貴方は」

「おうるさいでせう」

「勿もちろん論」

「私これから向後もつと、もつともつとくして上げるのです。さあ、

貴方、今何と有おつしや仰つたので御座います、あさはか浅膚な邪推ですつて

？ 貴方こそ少し氣を着けてお口をお利きき遊ばせな、貴方も男

子でゐらつしやるなら、何なぜ為立派に、その通だ。をんな情婦が有るのが

どうしたと、かう打ぶつ付けて有仰らんです。間さん、私貴方に向

つてそんな事をかれこれ申す権利は無い女なので御座いますよ。

いくら幾多さう云ふ権利を有ちたくても、有つ事が出来ずにゐるので御

座います。それに、何も私の前を憚はばつて、さう向むきに成つてお隠し遊ばすには当らんです御座いせんか。

私実を申しませうか、箇かよう様なので御座います。貴方が余所外よそほかに未だ何百人愛してゐらつしやる方が有かたりませうとも、それで愛相あいそを尽つかして、貴方の事を思切るやうな、私そんな浮氣りようけんな了簡で  
はないのです。又貴方の御迷惑に成る秘密を洩もらしましたところで、  
慍かなはない願が慍かなふ訳ではないので御座いませう。どう思召してゐ  
らつしやるか存じませんが、私それ程卑ひきよう怯つもりな女ではない積  
で御座います。

世間へ吹聴して貴方を困らせるなどと申したのは、あれは些ほんの  
その場の憎まれ口で、私決けしてそんな心は微塵みじんも無いので御座い



ますから、どうかそのお積で、お心持を悪く遊ばしませんやうに。つい口が過ぎましたのですから、御勘弁遊ばしまして。私この通お詫わびを致します」

満枝は惜まず身をくだ下して、彼の前に頭をかしら低ぐる可憐しをらしさよ。貫一は如何いかにとも為る能はずして、窃ひそに首を搔かいたり。

「就つきましては、私今から改めて折入った御願が有るので御座います。貴方も従これまで来の貴方ではなしに、十分人情を解してゐらつしやる間さんとして宣告を下して戴きたいので御座います。そのお辞次第で、私もう断然何方どちらに致しても了簡を極めて了ひますですから、間さん、貴方も庶どうか齒きぬに衣を着せずに、お心に在る通りをそのまま有仰つて下さいまし。宜よろしう御座いますか。

今更新く申上げませんでも、私の心は奥底まで見通しに貴方は御存ごぞんじであらつしやるのです。従来これまでも随分くど絮く申上げましたけれど、貴方は一図に私をお嫌きらひ遊ばして、些ちよつとでも私の申す事は取上げては下さらんです——さやうで御座いませう。貴方からそんなに嫌きらはれてゐるのですから、私もさう何時まで好い耻はぢを搔かずとも、早く立派に断念して了へば宜よいのです。私さう申すと何で御座いますけれど、これでも女子をんなにしては極未練の無い方で、手短てみじかに一か八か決してばち了がは側なので御座います。それがこの事ばかりは実に我ながら何なぜ為かう意氣地が無からうと思ふ程、……これが迷つたと申すので御座いませう。自分では物に迷つた事と云ふは無い積の私、それが貴方の事ばかりには全く迷ひました。

ですから、唯その胸の中うちだけを貴方に汲んで戴けば、私それで本望なので御座います。これ程に執心致してをる者を、徹頭徹尾貴方がお嫌ひ遊ばすと云ふのは、能く能くの因果で、究竟つまり貴方と私とは性が合はなので御座いませうから、それはもう致いたしかた方もあるりませんが、そんなに為されてまでもやつぱりかうして慕つてゐるとは、如何いかにも不敏ふびんな者だと、設たとひその当人はお氣に召しませんでも、その心情はお察し遊ばしても宜いでは御座いませんか。決してそれをお察し遊ばす事の出来ない貴方ではないと云ふ事は、私今朝の事実で十分確めてをります。

御自分が恋こひしく思召すのも、人が恋こひいのも、恋こひいに差かはりは無いで御座いませう。増まして、貴方、片かたおもひ思に思つてゐる者の心の中は

どんなに切ないでせうか、間さん、私貴方を殺して了ひたいと申したのは無理で御座いますか。こんな不束ふつつかな者でも、同じに生れた人間いちにん一人が、貴方の為には全まるで奴隷どれいのやうに成つて、しかも今貴方のお辞ことばを一ひとこと言聞きさへ致せば、それで死んでも惜くないとも思込んでゐるので御座います。其処そこをお考へ遊ばしたら、如何いかに好かん奴であらうとも、零しづくぐらゐの情なさけは懸やけて遣らう、と御不承が出来さうな者では御座いませんか。

私もさう御迷惑に成る事は望みませんです、せめて満足致されるほどのお辞ことばを、唯一ひとこと言で宜いのですから、今までのお馴染なじみが染ひ効ひにどうぞ間さん、それだけお聞せ下さいまし」

終に近く益ふす顫ふるへる声は、竟つひに平生へいぜいの調ちようをさへ失なひて聞えぬ。

彼は正しくその一言の爲には幾千円の公正証書を挙げて反古に爲ん  
 も、なかなか吝からぬ氣色を帯びて逼れり。息は凝り、面は打  
 蒼みて、その袖よりは劔を出さんか、その心よりは笑を出さん  
 か、と胸跳らせて片時も苦く待つなりき。

切なりと謂はば實に極めて切なる、可憐しと謂はば又極めて可  
 憐き彼の心の程は、貫一もいと善く知れれど、他の己を愛するの  
 故を以て直ちに蛇蝎に親まんや、と却りてその執念をば難堪く  
 浅ましと思へるなり。

されど又情として厲く言ふを得ざるこの場の仕儀なり。貫一は  
 打悩める眉を強て披かせつつ、

「さうして貴方が満足するやうな一言?……どう云ふ事を言つた

「可いのですか」

「貴方もまあ何を有<sup>おつしや</sup>仰<sup>お</sup>つてゐらつしやるのでせう。御自分の有<sup>ひと</sup>仰<sup>お</sup>る事を他にお聞き遊ばしたつて、誰が存じてをりますものですか」

「それはさうですけれど、私にも解らんから」

「解るも解らんも無いでは御座いませんか。それが貴方は何か巧<sup>にげこうじよう</sup>い遁<sup>おつしや</sup>口<sup>お</sup>上<sup>お</sup>を有<sup>お</sup>仰<sup>お</sup>らうとなさるから、急に御考も無いので、

貴方に対する私、その私が満足致すやうな一言と申したら、聞さん、外には有りは致しませんわ」

「いや、それなら解つてゐます……」

「解つてゐらつしやるなら些<sup>ちよつ</sup>と有<sup>おつしや</sup>仰<sup>お</sup>つて下さいましな」

「それは解つてゐますけれど、貴方の言れるのはかうでせう。段々お話の有つたやうな訳であるから、とにかくその心情は察しても可からう、それを察してゐるのが善く解るやうな挨拶あいさつを為してくれと云ふのぢやありませんか。実際それは余程むづかし難い、別にどうも外に言ひ様も無いですわ」

「まあ何でも宜よろしう御座いますから、私の満足致しますやうな御挨拶をなすつて下さいまし」

「だから、何と言つたら貴方が満足なさるのですか」

「私のこの心を汲んでさへ下されば、それで満足致すので御座います」

「貴方の思召おぼしめしは實に難有ありがたいと思つてゐます。私は永く記憶して

これは忘れません」

「間さん、きつとで御座いますか、貴方」

「勿論です」

「きつとで御座いますね」

「相違ありません！」

「きつと？」

「ええ！」

「その証拠をお見せ下さいまし」

「証拠を？」

「はあ。口頭くちさきばかりでは私可厭いやで御座います。貴方もあれ程たしか確  
に有仰おつしやつたのですから、万更心まんがうしんに無い事をお言ひ遊あそばしたので



は御座いますまい。さやうならそれだけの証拠が有る訳です。その証拠を見せて下さいませんか」

「みせられる者なら見せますけれど」

「見せて下さいますか」

「見せられる者なら。然し……」

「いいえ、貴方が見せて下さる思召ならば……」

驚破、障子<sup>すはや</sup>を推開<sup>おしひら</sup>きて、貫一は露けき庭に躍<sup>をど</sup>り下りぬ。つと

その迹<sup>あと</sup>に蹟<sup>あ</sup>れたる満枝の面<sup>おもて</sup>は、斜<sup>ななめ</sup>に葉越<sup>はづし</sup>の月の冷き影<sup>つめた</sup>を帯びなが

らなほ火の如く燃えに燃えたり。

## 第八章

家の内には己と老婢との外に、今客も在らざるに、女の泣く声、  
 ののし 訴る声の聞ゆるは甚だ謂無し、我或は夢むるにあらずやと疑ひ  
 つつ、貫一は枕せる頭を擡げて耳を澄せり。

その声は急に噪く、相争ふ氣勢さへして、はたはたと紙門  
 ひしめ を轟かすは、愈よ怪しと夜着排却けて起ち行かんとする時、ばつ  
 さり紙門の倒ると齊く、二人の女の姿は貫一が目前に転び出で  
 ぬ。

さいな 苛まれしと見ゆる方の髪は浮藻の如く乱れて、着たるコートは  
 しづく 雫するばかり雨に濡れたり。その人は起上り様に男の顔を見て、  
 うれ 嬉しや、可懐しやと心も空なる気色。

「貫一かんいつさん」と匍はひ寄よらんとするを、薄色うすいろ魚子ななこの羽織はおり着て、  
 夜会結やかいむすびに為したる後うしろ姿すがたの女をどは躍をどり被かつて引据ひきすうれば、

「あれ、貫、貫一さん！」

拯すくひを求むるその声に、貫一は身も消入るやうに覺えたり。彼は  
 念頭しんとうを去らざりし宮みやならずや。七しち生しょうまでその願ねがは聴きかじと卻しりぞ

けたる満枝つらの、我われの辛つらさを彼に移して、先の程より打ちも詬こりも

したりけんを、猶なほ慊あきたらで我が前に責せむるか、貫一は怵こへか

ねて顫ふるひゐたり。満枝ほしは縦いままに宮みやを据とへて些ちとも動うかせず、徐しづかに貫

一を見返りて、

「間さん、貴方あなたのお大事の恋人と云ふのはこれで御座いませう」

頸髪えりがみ取とつて宮みやが面おもてを引立てて、

「この女で御座いませう」

「貫一さん、わたしくやし私は悔う御座んす。この人は貴方の奥さんですか」

わたくし「私奥さんならどうしたのですか」

「貫一さん！」

彼は足あし擦すりして叫びぬ。満枝は直ただちに推伏おしふせて、

「ええ、やかまし聴きい！ 貫一さんかんいちは其処そこに一人居たら沢山ではありませ

んか。貴方より私が間さんには言ふ事が有るのですから、少し静いにして聴きいてお在いなさい。

間さん、私想ふのですね、究竟つまりかう云ふ女が貴方に腐れ付いて

ゐればこそ、どんなに申しても私の言ことは取上げては下さらないので御座いませう。貴方はそんなに未練みれんがお有り遊あそばしても、元この

女は貴方を棄てて、余所へ嫁に入つて了つたやうな、実に畜生にも劣つた薄情者なのでは御座いませんか。——私善く存じてゐますわ。貴方も余り男らしくなくてお在なさる。それは如何にお可愛いのか存じませんけれど、一旦愛相を尽して逃げて行つた女を、いつまでも思込んで遅々してゐらつしやるとは、まあ何たる不見識な事でせう！ 貴方はそれでも男子ですか。私ならこんな女は一息に刺殺して了ふのです」

宮は跣返さんと為しが、又抑へられて声も立てず。

「間さん、貴方、私の申上げた事をば、やあ道ならぬの、不義のと、実に立派な口上を有仰いましたでは御座いませんか、それ程義のお堅い貴方なら、何為こんな淫乱の人非人を阿容活

けてお置き遊ばすのですか。それでは私への口上に対しても、貴方男子の一分いちぶんが立たんで御座いませう。何なぜ為成敗は遊ばしません。さあ、私決けしてもう二度と貴方には何も申しませんから、貴方もこの女を見事に成敗遊ばしまし。さもなければ、私も立ちませんです。

間さん、どう遊ばしたので御座いますね、早く何とか遊ばして、貴方も男子の一分をお立てなさらんければ済まるところでは御座いませんか。私ここで拝見致してをりますから、立派に遣つて御覧あそばせ。卒いざと云ふ場で貴方の腕が鈍つても、決して為損しそんじの無いやうに、私好よい刃物きれものをお貸し申しませう。さあ、間さん、これをお持ち遊ばせ」

彼の懐ふところを出でたるは蠟塗ろうぬりの晃きらめく一口いつこうの短刀なり。貫一はその

殺氣うたに撲うれて一指をも得動かさず、空むなしく眼まなこを輝かがやかして満枝おもての面おもてを睨

みたり。宮ははや氣死せるか、推伏おしふせられたるままに声も無し。

「さあ、私かうして抑へてをりますから、吭のどなり胸なり、ぐつと

一突ひとつきに遣やつてお了しまひ遊ばせ。ええ、もう貴方は何を遅ぐづぐづ々して

ゐらつしやるのです。刀の持様もちやうさへ御存じ無いのですか、かう

して抜いて！」

と片手ながらに一揮ひとつりふ揮れば、鞘さやは発矢はつしと飛散つて、電光袂たもとを

廻めぐる白刃しらばの影は、忽たちまち翻ひるがへつて貫一が面上三寸の処おちきたに落来おちきたれり。

「これで突けば可よいのです」

「……………」

「さては貴方はこんな女に未だ未練が有つて、息の根を止めるのが惜くてゐらつしやるので御座いますね。殺して了はうと思ひながら、手を下す事が出来んのですね。私代つて殺して上げませう。

何の雑作も無い事。些と御覽あそばせな」

言下に勿焉と消えし刃の光は、早くも宮が乱鬢を掠めて顕

れぬ。啊呀と貫一の号ぶ時、妙くも彼は跂起きざまに突来る鋭を

危く外して、

「あれ、貫一さん！」

と満枝の手首に縋れるまま、一心不乱の力を極めて振伏せ振伏

せ、仰様に推重りて仆したり。

「貫、貫一さん、早く、早くこの刀を取つて下さい。さうして私



を殺して下さい——貴方の手に掛けて殺して下さい。私は貴方の手に掛けて死ぬのは本望です。さあ、早く殺して、私は早く死にたい。貴方の手に掛けて死にたいのですから、後生だから一ひとおも思ひに殺して下さい！」

この恐るべき危機に瀕ひんして、貫一は謂い知ひしらず自あら異やしくも、敢あへて拯すくひの手を藉かさんと為るにもあらで、しかも見るには堪へずして、空むなしく悶だえに悶だえゐたり。必死と争へる両ふた箇が手中の刃やいばは、或あるは高く、或は低く、右に左に閃せん々として、あたかも一いつ鉤こうの新月白く風の柳を縫ぬふに似たり。

「貫一さん、貴方は私を見殺みころしになさるのですか。どうでもこの女の手には掛けて殺すのですか！ 私は命は惜くはないが、この女

に殺されるのは悔い<sup>くやし</sup>！ 悔い!! 私は悔い!!」

彼は乱せる髪を夜叉<sup>やしや</sup>の如く打振り打振り、五体<sup>ごたい</sup>を揉<sup>も</sup>みて、唇<sup>くちびる</sup>の血を噴きぬ。彼も殺さじ、これも傷けじと、貫一が胸は車輪<sup>めぐ</sup>の廻るが若<sup>ごと</sup>くなれど、如何<sup>いか</sup>にせん、その身は内より不思議の力に緊縛<sup>きんばく</sup>せられたるやうにて、逸<sup>は</sup>れど、躁<sup>あせ</sup>れど、寸分の微揺<sup>ゆるぎ</sup>を得ず、せめては声を立てんと為れば、吭<sup>のんど</sup>は又塞<sup>ふさが</sup>りて、鋏<sup>てつがん</sup>丸<sup>ふく</sup>を啣<sup>おもひ</sup>める想。力も今は絶々に、はや危<sup>あやふ</sup>しと宮は血声を揚げて、

「貴方が殺して下さらなければ、私は自害して死にますから、貫一さん、この刀を取つて、私の手に持せて下さい。さ、早く、貫一さん、後生です、さ、さ、さあ取つて下さい」

又激<sup>ねぢあ</sup>く振合<sup>は</sup>ふ卻<sup>は</sup>含<sup>ずみ</sup>に、短刀は戛然<sup>からり</sup>と落ちて、貫一が前なる畳に

突<sup>つ</sup>立<sup>つ</sup>たり。宮は虚<sup>す</sup>さず躍<sup>を</sup>り被<sup>か</sup>りて、我物得つと手に為れば、遣<sup>つ</sup>らじと満枝の組付くを、推<sup>お</sup>隔<sup>し</sup>つる腋<sup>わ</sup>の下より後<sup>う</sup>突<sup>しろ</sup>に、も透<sup>と</sup>れと刺<sup>と</sup>したる急所、一声号<sup>さ</sup>びて仰<sup>の</sup>反<sup>け</sup>る満枝。鮮血！ 兇器！ 殺傷！ 死体！ 乱心！ 重罪！ 貫一は目も眩<sup>く</sup>れ、心も消ゆるばかりなり。宮は犇<sup>ひ</sup>と寄添<sup>し</sup>ひて、

「もうこの上はどうで私は無い命です。お願いですから、貫一さん、貴方の手に掛けて殺して下さい。私はそれで貴方に赦<sup>ゆる</sup>された積で喜んで死にますから。貴方もどうぞそれでもう堪<sup>かん</sup>忍<sup>にん</sup>して、今までの恨は霽<sup>は</sup>して下さいまし、よう、貫一さん。私がこんなに思つて死んだ後までも、貴方が堪忍して下さいさなければ、私は生<sup>いき</sup>替<sup>か</sup>死<sup>し</sup>替<sup>か</sup>して七<sup>しち</sup>生<sup>しょう</sup>まで貫一さんを怨<sup>う</sup>みますよ。さあ、そ

れだから私の迷はないやうに、貴方の口からお念仏を唱となへて、こ

れで一思ひに、さあ貫一さん、殺して下さい」

あけ朱に染みたる白刃しらばをば貫一が手に持添へつつ、宮はその可なつかし懐

こぶしき拳に頻あまたたび回ほほずり頬擦したり。

「私はこれで死んで了へば、もう二度とこの世でお目に掛ること

は無いのですから、せめて一遍の回向えこうをして下さると思つて、今

はの際きはただひとことで唯一言赦して遣ると有おつしや仰つて下さい。生きてゐる内こ

そどんなにも憎くお思ひでせうけれど、死んで了へばそれつきり、

罪も恨も残らず消えて土に成つて了ふのです。私はかうして前非

を後悔して、貴方の前で潔く命を捨てるのも、その御詫おわびが為たい

ばかりなのですから、貫一さん、既これまで往の事は水に流して、もう

好い加減に堪忍して下さいまし。よう、貫一さん、貫一さん！

今思へばあの時の不心得が実に悔<sup>くやし</sup>くて悔くて、私は何とも謂ひ

やうが無い！ 貴方が涙<sup>こぼ</sup>を零して言つて下すつた事も覚えてゐま

す。<sup>のちのち</sup>後来きつと思<sup>おもひあた</sup>中<sup>ちゆう</sup>るから、今夜の事を忘れるなどと言ひの

声も、今だに耳に付いてゐるわ。私の一凶の迷とは謂ひながら何<sup>な</sup>

為<sup>ぜ</sup>あの時に些<sup>すこし</sup>少でも気が着かなかつたか。愚<sup>おろか</sup>な自分を責めるより

外は無<sup>と</sup>いけれど、死んでもこんな回<sup>とりかへし</sup>復<sup>ふく</sup>の付かない事を何で私

は為<sup>な</sup>ましたらう！ 貫一さん、貴方の罰<sup>ばち</sup>が中<sup>あた</sup>つたわ！ 私は生き

てゐる空<sup>そら</sup>が無い程、貴方の罰<sup>ばち</sup>が中<sup>あた</sup>つたのだわ！ だから、もうこ

れで堪忍して下さい。よ、貫一さん。

さうしてとてもこの罰の中つた軀<sup>からだ</sup>では、今更どうかうと思つて

も、願なんぞの愜かなふと云ふのは愚な事、未だ未だ憂目うきめを見た上に  
おもひじに思 死に死にでも為なければ、私の業ごうは滅めつしないのでせうから、  
この世に未練は沢山有るけれど、私は早く死んで、この苦く難げんを埋う  
めて了つて、さうして早く元の淨い軀きよに生れ替かつて来たいのです。  
さう為たら、私は今度の世には、どんな艱難かんなん辛苦しんくを為ても、き  
つと貴方に添そひと遂とげて、この胸に一杯思つてゐる事もすつかり善く  
聴いたいて戴ただき、又この世で為し遺のこした事もその時は十分為てお目に掛  
けて、必ず貴方にも悦よろこばれ、自分も嬉うれしい思を為て、この上も無い  
楽しい一生を送る氣です。今度の世には、貫一さん、私は決してあ  
んな不心得は為ませんから、貴方も私の事を忘れずにゐて下さい。  
可ようござんすか！ きつと忘れずにゐて下さいよ。

人は最期さいごの一念で生しょうを引くと云ふから、私はこの事ばかり思おも窮つめて死にます。貫一さん、この通だから堪忍して！」

声震はせて継すがると見れば、宮は男の膝ひざの上なる鉋目掛けて岸破がばと伏したり。

「や、行やつたな！」

貫一が胸は劈つんざけて始てこの声を出いだせるなり。

「貫一さん！」

無残やな、振仰ぐ宮が喉のどは血に塗まみれて、刃の半を貫けるなり。

彼はその手を放たで苦き眼まなこを睜みきつつ、男の顔を視みんと為るを、

貫一は氣も漫そぞろに引抱ひつかへて、

「これ宮、貴様は、まあこれは何事だ！」

大事の刃を抜取らんと為れど、一念凝りて些も弛めぬ女の力。

「これを放せ、よ、これを放さんか。さあ、放せと言ふに、ええ、何為放さんのだ」

「貫、貫一さん」

「おお、何だ」

「私は嬉しい。もう……もう思遺す事は無<sup>おもひのこ</sup>い。堪忍して下すつたのですね」

「まあ、この手を放せ」

「放さない！ 私はこれで安心して死ぬのです。貫一さん、ああ、もう気が遠く成つて来たから、早く、早く、赦<sup>ゆる</sup>すと言つて聞せて下さい。赦すと、赦すと言つて！」



血は滾々と益す流れて、末期の影は次第に黯く逼れる気色。

貫一は見るにも堪へず心乱れて、

「これ、宮、確乎しろよ」

「あい」

「赦したぞ！ もう赦した、もう堪……堪……堪忍……した！」

「貫一さん！」

「宮！」

「嬉しい！ 私は嬉しい！」

貫一は唯胸も張裂けぬ可く覚えて、言は出でず、抱き緊めたる

宮が顔をば紛り下つる熱湯の涙に浸して、その冷たき唇を貪り吮

ひぬ。宮は男の唾を口に移に辛くも喉を潤して、

「それなら貫一さん、私は、ああくるし 吁、苦いから、もうこれで一思ひに

……」

と力を出していだ 刳らんと為るを、緊と抑へて貫一は、

「待て、待て待て！　ともかくもこの手を放せ」

「いいえ、止めずに」

「待てと言ふに」

「早く死にたい！」

やうや 漸く刀を挽放せば、宮は忽ち身たちまを回して、輾ころけつ転びつ座敷

の外に脱のがれ出づるを、

「宮、何処どこへ行く！」

や 遣らじと伸べし腕かひなは速おばず、苛いらつて起ちし貫一は唯一ひとつ 掴かみと

躍り被れば、生憎満枝が死骸に躓き、一間ばかり投げられたる  
 其処の敷居に膝頭を砕けんばかり強く打れて、りしままに  
 起きも得ず、身を竦めて呻きながらも、

「宮、待て！ 言ふことが有るから待て！ 豊、豊！ 豊は居な  
 いか。早く追掛けて宮を留めろ！」

呼べど号べど、宮は返らず、老婢は居らず、貫一は阿修羅の如  
 く憤りて起ちしが、又仆れぬ。仆れしを漸く起回して、忙  
 々く四下を睭せど、はや宮の影は在らず。その歩々に委せし血  
 は苧環の糸を曳きたるやうに長く連りて、畳より縁に、縁より  
 庭に、庭より外に何処まで、彼は重傷を負ひて行くならん。

磐石を曳くより苦く貫一は膝の疼痛を詠へ詠へて、とにも

かくにも堀外へいそとによろぼひ出づれば、宮は未だ遠くも行かず、有明ありあけの月つきひや冷かに夜は水の若く白みて、ほのぼのと狭霧罩めたる大路の寂せきとして物の影無き辺を、唯独りひとり覺束無げに走れるなり。

「宮！ 待て！」

呼ばばこた返せども、雲は幽ゆうにして彼は応こたへず。齒咬はがみを作して

貫一は後を追ひぬ。

固もとより間あはひいくばくは幾許も有らざるに、急所の血を出せる女の足取、引ひつとら

捉ふるに何程の事有らんと、侮りしに相違して、彼は始の如く走るに引易ひきかへ、此方こなたは漸く息疲いきつかるるに及べども、距離は竟つひに依

然として近く能はず。こは口惜くちをし、と貫一は満身の力を励し、僵たふるるならば僵れよと無二無三に走りたり。宮は猶なほ脱のがるるほどに、

帯は忽ち颯と釈けて脚に絡ふを、右に左に 払ひつつ、跌きては  
 進み、行きては跟き、彼もはや力は竭きたりと見えながら、如何  
 に為ん、其処に伏して復起きざる時、躬も終に及ばずして此処に  
 絶 入 せんと思へば、貫一は今に当りて纔に声を揚ぐるの術を  
 余すのみ。

「宮！」と奮つて呼びしかど、憫むべし、その声は苦き喘の如き  
 者なりき。我と吾肉を啖はんと想ふばかりに躁れども、貫一は既  
 に声を立つべき力をさへ失へるなり。さては効無き己に憤を作し  
 て、益す休まず狂呼すれば、彼の吭は終に破れて、汨然とし  
 て一涌の鮮紅を嘔出せり。心 晦みて覚えず倒れんとす  
 る耳元に、松風驀然と吹起りて、吾に復れば、眼前の御壕端。

只<sup>み</sup>看<sup>み</sup>る、宮は行き行きて生<sup>おひしげ</sup>茂<sup>げ</sup>る柳の暗きに分入りたる、入<sup>じゆすい</sup>水  
 の覺悟に極<sup>きはま</sup>れりと、貫一は必死の声を搾<sup>しぼ</sup>りて連<sup>しきり</sup>に呼<sup>よ</sup>べば、咳<sup>せきい</sup>入<sup>い</sup>り  
 咳<sup>すうこう</sup>入<sup>い</sup>り数<sup>すうこう</sup>口<sup>くち</sup>の咯<sup>かつ</sup>血<sup>けつ</sup>、斑<sup>はん</sup>爛<sup>らん</sup>として地<sup>ち</sup>に委<sup>お</sup>ちたり。何思<sup>なんし</sup>ひけん、  
 宮<sup>ちすぢ</sup>は千<sup>ち</sup>条<sup>じょう</sup>の緑の陰より、その色よりは稍<sup>やや</sup>白<sup>しろ</sup>き面<sup>おもて</sup>を露<sup>あらは</sup>して、追<sup>お</sup>来<sup>き</sup>る  
 人<sup>ひと</sup>を熟<sup>じ</sup>と見<sup>み</sup>たりしが、竟<sup>つひ</sup>に疲<sup>つか</sup>れて起<sup>た</sup>きも得<sup>え</sup>ざる貫<sup>くわん</sup>一<sup>いつ</sup>の、唯<sup>ただ</sup>手<sup>て</sup>を抗<sup>あ</sup>  
 げて遙<sup>はるか</sup>に留<sup>とど</sup>むるを、免<sup>ゆる</sup>し給<sup>たま</sup>へと伏<sup>ふし</sup>拝<sup>をが</sup>みて、つと茂<sup>もち</sup>の中<sup>うち</sup>に隠<sup>かく</sup>れた  
 り。

彼<sup>おのれ</sup>は己<sup>おのれ</sup>の死<sup>し</sup>ぬべきを忘<sup>わす</sup>れて又<sup>また</sup>起<sup>た</sup>てり。駈<sup>かけ</sup>寄<sup>よ</sup>る岸<sup>きし</sup>の柳<sup>りゅう</sup>を潜<sup>くぐ</sup>りて、  
 水<sup>みづ</sup>は深<sup>ふか</sup>きか、宮<sup>みや</sup>は何<sup>いづこ</sup>処<sup>ところ</sup>に、と葎<sup>むぐら</sup>の露<sup>つゆ</sup>に踏<sup>ふみ</sup>滑<sup>すべ</sup>る身<sup>み</sup>を危<sup>あや</sup>くも淵<sup>ふち</sup>に臨<sup>み</sup>  
 めば、<sup>どうとう</sup> 鞆<sup>そう</sup>と瀉<sup>そそ</sup>ぐ早<sup>はや</sup>瀬<sup>せ</sup>の水<sup>みづ</sup>は、駭<sup>おどろ</sup>く浪<sup>なみ</sup>の体<sup>たい</sup>を尽<sup>つく</sup>し、乱<sup>みだ</sup>るる流<sup>なが</sup>の  
 文<sup>ぶん</sup>を捲<sup>ま</sup>いて、眼<sup>がん</sup>下<sup>ま</sup>に幾<sup>いく</sup>個<sup>こ</sup>の怪<sup>かい</sup>き大<sup>たい</sup>石<sup>せき</sup>、か<sup>か</sup>の鰲<sup>ぎょう</sup>背<sup>はい</sup>を聚<sup>あつ</sup>めて丘<sup>かみ</sup>の

如く、その勢を拒いがんと為れど、触るれば払ひ、当れば飜ひるり、長  
 波の邁ゆくところ滔々とうとうとして破らざる為なき奮ふん迅じんの力は、兩岸も  
 為に震ひ、坤軸こんじくも為に轟とどろき、蹈居ふみゐる土も今にや崩くづれなんと疑ふ  
 ところ、衣袂いべいの雨あめ濃こまやかに灑そぎ、鬢髮びんぱつの風うた転うたた急なり。  
 あな凄すさまじ、と貫一は身毛みのけも弥よ豎ただちて、縋すがれる枝を放ちかねつつ、  
 看れば、叢くさむらの底に秋蛇しゅうだの行くに似たる径こみち有ありて、ほとほと逆さか  
とし落けんがいに懸崖くだを下るべし。危あやふき哉かなと差さ覗しのぞけば、茅かや葛かつらの頻しきりに  
 動をささうばらきて、小笹棘に見えつ隠れつ段々と迂すべり行くは、求むる宮な  
 り。

その死を止とどめんの一念より他たあらぬ貫一なれば、かくと見るよ  
 り心も空に、足は地を踏いとまむ違ちがひもあらず、唯遅れじと思ふばかりよ、

たにま あらし  
壑間の嵐の誘ふに委せて、まか 驀直に身を墮せり。おと

或は摧けて死ぬべかりしを、あるひくだ 恙無きこそ天の佑と、つつがな 彼は数歩

の内に宮を追ひしが、流に浸れる巖を涉りて、ひた いはほわた 既に渦巻く滝津瀬たきつせ

に生憎！あやにく 花は散りかかるを、

「宮！」

と後に呼ぶ声残りて、前には人の影も在らず。うしろ

咄嗟の遅を天に叫び、とつさ おくれ 地に号き、わめ 流に悶え、もだ 巖に狂へる貫一は、

血走る眼に水を射て、まなこ 此処や彼処と恋き水屑を覓むれば、ここ かしこ こひし みくづ もと 正く浮

木芥の類とも見えざる物の、きぎあくた 十間ばかり彼方を揉みに揉んで、じっけん あなた

波間隠に推流さるるは、なみまがくれ おしなが 人ならず哉、や 宮なるかと瞳を定むる

折しもあれ、水勢其処に一段急なり、そこ 在りける影は弦を放れし箭つる や



飛とびを作なして、行方ゆくへも知らずと胸潰むねつぶるれば、忽たちまち遠く浮き出でたり。

嬉しやと貫一は、道無き道の木を攀よぢ、崖がけを伝たづひ、或あるひは下りて水を踰こえ、石を躡ふみ、巖めぐを廻り、心地死ぬべく踉蹌ろうそうとして近ちかづき見れば、緑りよくじゆ樹蔭かげうれ愁さめひ、潺湲せんかん声咽こゑむせびて、浅瀬せんに繋かかれる宮が骸むくろよ！

貫一は唯その上に泣伏したり。

吁ああ、宮は生前おいわづかに於て纔さきに一刻の前なる生前に於て、この情なさけの熱なき一滴を幾いかばかり許かたじけかは忝かたじけなみけん。今や千行せんこうた垂るといへども効か無ひなき涙は、徒いたづらに無心の死顔そそてに濺そそぎて宮の魂こんは知らざるなり。

貫一の悲かなしみは窮きはまりぬ。

「宮、貴様は死……死……死んだのか。自殺を為るさへ可哀あはれなのに、この浅ましい姿はどうだ。

やいば刃に貫き、水に溺おぼれ、貴様はこれで苦くはなかつたか。可愛かはいい奴め、思迫おもひつめたなあ！

宮、貴様は自殺を為た上身を投げたのは、一つの死では慊あきたらずに、二つ命を捨てた気か。さう思つて俺は不敏ふびんだ！

どんな事が有らうとも、貴様に対するあの恨は決して忘れんと誓つたのだ。誓つたけれども、この無残な死しにさま状を見ては、罪も恨うらみも皆消えた！ 赦したぞ、宮！ 俺おれは心の底から赦したぞ！

今はの際きはに赦したと、俺ひとことが一言云つたらば、あの苦い息の下から嬉しいと言つたが、宮、貴様は俺に赦されるのがそんなに嬉しい

のか。好く後悔した！ 立派な悔悟だぞ！！

余り立派で、貫一は恥入った！ 宮、俺は面目無い！ これま

での精神とは知らずに見殺に為たのは残念だった！ 俺が過だ

！ 宮、赦してくれよ！ 可いか、宮、可いか。

嗚呼死んで了ったのだ※」

貫一は彼の死の余りに酷く、余りに潔きを見て、不貞の血は既

に尽く沃がれ、旧悪の膚は全く洗れて、残れる者は、悔の為に、

誠の為に、己の為に捨てたる亡骸の、実に憐みても憐むべく、

悲みても猶及ばざる思の、今は唯極めて切なる有るのみ。

かの烈々たる怨念の跡無く消ゆるとともに、一旦涸れにし愛

慕の情は又泉の湧くらんやうに起りて、その胸に漲りぬ。苦から

ず哉<sup>や</sup>、人亡<sup>な</sup>き後の愛慕は、何の思かこれに似る者あらん。彼はなかなか生ける人にこそ如何<sup>いか</sup>なる恨をも繋<sup>か</sup>くるの忍び易<sup>やす</sup>きを今ぞ知るなる。

貫一は腸断<sup>ちようた</sup>ち涙<sup>なみだ</sup>連<sup>つらな</sup>りて、我を我とも覚ゆる能はず。

「宮、貴様に手向<sup>たむ</sup>けるのは、俺のこの胸<sup>うち</sup>の中だ。これで成仏してくれ、よ。この世の事はこれまでだ、その代り今度の世には、貴様の言つた通り、必ず夫婦に成つて、百歳<sup>ひやく</sup>までも添<sup>そひ</sup>、添<sup>そひ</sup>遂<sup>と</sup>げるぞ！ 忘れるな、宮。俺も忘れん！ 貴様もきつと覚えてゐるよ！」

氷の如き宮が手を取り、犇<sup>ひし</sup>と握りて、永く眠れる面を覗<sup>おもて</sup>かんと為れば、涙急<sup>あいろ</sup>にして文色も分かず、推<sup>おしか</sup>重<sup>かさな</sup>りて、怜<sup>いと</sup>しやと身を

悶えつつ少時泣いたり。

「然し、宮、貴様は立派な者だ。一び罪を犯しても、かうして悔悟して自殺を為したのは、実に見上げた精神だ。さうなけりや成らん、天晴だぞ。それでこそ始て人間たるの面目が立つのだ。」

然るに、この貫一はどうか！ 一端男と生れながら、高が一

婦の愛を失つたが為に、志を挫いて一生を誤り、餓鬼の如き振舞を為て恥とも思はず、非道を働いて暴利を貪るの外は何も知

らん。その財は何に成るのか、何の為にそんな事を為るのか。

凡そ人と謂ふ者には、人として必ず尽すべき道が有る。己と云

ふ者の外に人の道と云ふ者が有るのだ。俺はその道を尽してゐるか、尽さうと為てゐるか、思つた女と添ふ事が出来ん。唯それだ

けの事に失望して了つて、その失望の為に、苟くも男と生れた一生を抛なげうたうと云ふのだ。人たるの効かひは何処どこに在る、人たる道はどうしたのか。

噫ああ、誤あつた！

宮、貴様が俺に対して悔悟するならば、俺は人たるの道に対して悔悟しなけりや済まん軀からだだ。貴様がかうして立派に悔悟したのを見て、俺は実に愧はぢい入りも為すりや、可うらやまし羨うらやましくもある。当初はじめ貴様に棄てられた為に、かう云ふ墮落をした貫一ならば、貴様の悔悟と共に俺も速すみかに心を惨あらためて、人たるの道に負ふところのこの罪を贖つぐなはなけりや成らん訳だ。

嗟ああ乎あ、然し、何に就つけても苦くるい世の中だ！

人間の道は道、義務は義務、たのしみ樂は又樂で、それも無けりや立たん。俺もしぎさわ嶋沢に居て宮をあいて対手に勉強してをつた時分は、この人世と云ふ者は唯面白い夢のやうに考へてゐた。

あれが浮世なのか、これが浮世なのか。

あれから  
こんにち爾来、

今日までの六年間、人らしい思を為た日は唯の一日で

も無かつた。それで何がたのみ頼で俺は生きてゐたのか。死を決する勇

氣が無いので生きてゐたやうなものだ！ 生きてゐたのではない、

しにぞくな死しにぞくな損

つてゐたのだ!!

わにぶち鰐淵

やけしは焚死に、

宮は自殺した、俺はどう為するのか。俺のこの

感情の強いのでは、

又向これから来宮のこの死顔が始終目に着いて、一

生悲い思を為なければ成らんのだらう。して見りや、今までより

は一層くるしみ苦を受けるのは知れてゐる。その中で俺は生きてゐて何を為なるのか。

人たるの道を尽す？ 人たるの行おこなひを為なる？ ああ、い、い

！ 人としてをればこそそんな義務も有る、人でなくさへあれば、何も要いらんのだ。自殺して命を捨てるのは、一いつの罪惡だと謂いふ。

或あるひは罪惡かも知れん。けれども、茫ぼうぼう然ぜんと呼吸こそしてゐるばかりで、

世間に対しては何等なの益えきするところも無く、自身に取つてはそれ

が苦痛であるとしたら、自殺も一種の身始みじまつ末まつだ。増まして、俺が今

死ねば、忽たちまち何十人の人が助り、何百人の人が懽よろこぶか知れん。

俺も一箇ひとりの女故ゆゑに身を誤あやつたその余あとが、盜ぬす人家業との高利貸とま

で墮落してこれでやみやみ死んで了ふのは、余り無念とは思ふけ



れど、当初はじめに出損でそくなつたのが一生の不覚、あれが抑そもそも不運の貫一の軀からだは、もう一遍鍛きたへなほ直して出て来るより外ほか為方が無い。この世の無念はその時霽はらす！」

さしも遣る方無く悲めりし貫一は、その悲を立たちどころに抜くべき術すべを今覚みれり。看みる々涙の頬ほほの乾かわける辺あたりに、異あやしく昂あがれる氣き有ありて青かがやく耀きぬ。

「宮、待つてゐろ、俺も死ぬぞ！ 貴様の死んでくれたのが余らいせり嬉しいから、さあ、貫一の命も貴様に遣る！ 来世で二人が夫婦ふうふに成る、これが結納ゆひのうだと思つて、幾いくひさし久く受けてくれ。貴様も定めて本望だらう、俺も不足は少しも無いぞ」

さらば往なんぢきて汝ふちの陥ふちりし淵ふちに沈まん。沈まば諸共もろともと、彼は宮

が屍かばねを引起うしろして背に負へば、その輕かろきこと一片ひとひらの紙ひとに等あやし。怪  
しと見返れば、更に怪し！ 芳ほうふん芬鼻うを撲うちて、一いち朶だの白百合しろゆめい大  
人じんめん面の若ごときが、満開はなびらの葩はなを垂はられて肩かかに懸かれり。

不思議おどろに愕おどろくと為れば目覚めさめぬ。覚めむれば暁あけの夢なり。

## 続続金色夜叉

## 第一章

貫一が胸は益ます苦まく成りまし愈まりぬ。彼を念おもひ、これを思ふに、生き  
て在るべき心地はせで、寧むしろかの怪あやしき夢の如く成りなを、快か  
らずやと疑へるなり。

彼は空く万事を抛ちて、懊むなしの間に三日ばかりを過しぬ。なげう おうのう

これを語らんに人無く、懇うつつへんには友無く、しかも自ら拯すくふべ

き道は有りや。有りとも覚え、無しとは知れど、煩わづらふ者の煩ひ、

悩む者の悩みて縦ほしいまなるを如何にせん。彼は実にこの昏迷こんめいらんじ乱

擾ようせる一いつこん根の悪障を袂くじりさ去りて、猛火に燬やかんことを冀こひねがへり。

その時彼は死ぬべきなり。生か、死か。貫一の苦悶くもんは漸く急やうやにし

て、終つひにこの問題の前に首かうべを垂るるに至れり。

値無き吾が生おなじ存は、又同く値無き死亡を以つて畢をへしむべき者

か。悔に堪たへざる吾が生おなじの値無かりしを結ばんには、これを償ふ

に足る可べき死を以て為せざる可あるひからざるか、或は、ここに過あやまち多

き半生の最期さいごを遂とげて、新あらたに他の値ある後半の復活を明日に計みようる

べきか。

彼は強<sup>あなが</sup>ちに死を避けず、又生を厭<sup>いと</sup>ふにもあらざれど、両<sup>ふたつ</sup>ながら

その値無きを、私<sup>ひそひさぎよ</sup>に屑<sup>せ</sup>しと為<sup>な</sup>ざるなり。当面の苦は彼に死を勧め、

半生の悔は耻<sup>はぢ</sup>を責めて仮<sup>か</sup>さず。苦を抜かんが為に、我は値無き死

を辞せざるべきか、過<sup>あやまち</sup>を償はんが為に、我は樂まざる生を忍ぶべ

きか。碌<sup>ろくろく</sup>々の生は易<sup>やす</sup>し、死は即<sup>すなは</sup>ち難<sup>かた</sup>し。碌々の死は易し、生は

則<sup>すなは</sup>ち難<sup>かた</sup>し。我は悔いて人と成るべきか、死してその愚<sup>まづた</sup>を完うすべ

きか。

貫一は活を求めて得ず、死を覓<sup>もと</sup>めて得ず、居れば立つを念<sup>おも</sup>ひ、

立てば臥<sup>ふ</sup>すを想<sup>おも</sup>ひ、臥せば行くを懷<sup>おも</sup>ひ、寐<sup>い</sup>ぬれば覚め、覚むれば

思ひて、夜もあらず、日もあらず、人もあらず、世もあらで、唯<sup>た</sup>

だうれ  
憂ひ惑へる己一個の措所無く可煩きに悩乱せり。

あだかもこの際抛ち去るべからざる一件の要事は起りぬ。先におほぐちいひこみあなげう大口の言込有りし貸付の緩々急に取引迫りて、彼は些の猶予も無く、自ら野州塩原なる畑下と云へる温泉場に出向き、其処に清琴楼と呼べる湯宿に就きて、密に云々の探知すべき必要を生じたるなり。

謂知らずしと腹立たれけれど、行懸の是非無く、かつは難得き奇景の地と聞及べば、少時の憂を忘るる事も有らんと、自ら努めて結束し、かの日より約一週間の後、彼はほとほと進まぬ足を曳きて家を出でぬ。その晨横雲白く明方の空に半輪の残月を懸けたり。一番列車を取らんと上野に向ふ俾の上なる貫一は、

この暁の眺<sup>ながめ</sup>に撲<sup>うた</sup>れて、覚え<sup>し</sup>ず悚<sup>しょう</sup>然<sup>ぜん</sup>たる者ありき。

(一) の二

車は駛<sup>は</sup>せ、景は移り、境は転じ、客は改まれど、貫一は易<sup>かは</sup>らざる他の悒<sup>そ</sup>鬱<sup>ゆううつ</sup>を抱<sup>いだ</sup>きて、遣<sup>や</sup>る方無き五時間の独<sup>ひとり</sup>に倦<sup>う</sup>み憊<sup>つか</sup>れつつ、始<sup>ただ</sup>て西那須野の駅に下車せり。

直<sup>ただ</sup>ちに西北に向ひて、今尚<sup>いまなほ</sup>茫<sup>ぼう</sup>々<sup>ぼう</sup>たる古の那須野原に入<sup>い</sup>れば、天は濶<sup>ひろ</sup>く、地は遐<sup>はるか</sup>に、唯<sup>ただ</sup>平蕪<sup>へいぶ</sup>の迷ひ、断雲の飛ぶのみにして、三里の坦途<sup>たんと</sup>、一帯の重<sup>ちようらん</sup>巒<sup>らん</sup>、塩原は其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>ぞと見えて、行くほどに跡<sup>みち</sup>は窮<sup>きはま</sup>らず、漸<sup>やうや</sup>く千本松を過ぎ、進みて関谷村<sup>せきやむら</sup>に到れば、人

家の尽る処に淙々そうそうの響有りて、これに架れるをかか入勝橋にゆうしようきようと為す。

すなは

輒ち橋を渡りて僅わづかに行けば、日光冥く、山厚く畳み、嵐氣冷に

たにふか

壑深く陥りて、幾廻いくめぐりせる葛折つづらをりの、後には密樹みつじゆに声せいせ

々いの鳥呼び、前には幽草歩々の花を発ひらき、いよいよ躋のぼれば、

遙はるかに木隠こかくれの音のみ聞えし流の水みな上は浅く露れて、驚破すはや、こ

こに空山くうざんの雷白光いかづちこうを放ちて頽くづれ落ちたるかと凄すさまじかり。道の

右は山きをりて長壁と成し、石幽いしゆうに蘚碧こけあをうして、幾条いくすぢとも

白糸を乱し懸けたる細瀑小瀑ほそたきこたきの珊々さんさんとして濺そそげるは、嶺上れいじよう

の松の調も、定てこの緒をよりやと見捨て難し。

俦かを駆りて白羽坂しらはさかを躑こえてより、回顧橋みかへりばしに三十尺の飛瀑ひばくを



ふ

みて、山中の景は始て奇なり。これより行きて道有れば、水有  
 り、水有れば、必ず橋有り、全溪にして三十橋、山有れば巖有<sup>いはあ</sup>  
 巖有れば必ず瀑有<sup>たき</sup>り、全嶺<sup>ぜんれい</sup>にして七十瀑。地有れば泉有り、泉  
 有れば必ず熱有り、全村にして四十五湯。猶<sup>なほ</sup>数ふれば十二勝、十  
 六名所、七不思議、誰<sup>たれ</sup>か一々探<sup>さぐ</sup>り得べき。

そもそ

抑も塩原の地形たる、塩谷郡<sup>しほやごほり</sup>の南より群峰の間を分けて深く

西北<sup>い</sup>に入り、綿々として箒<sup>はきはきがわ</sup>川の流に沂<sup>さかのほ</sup>る片<sup>かた</sup>岨<sup>そ</sup>の、四里<sup>わか</sup>に岐

れ、十一里に互<sup>わた</sup>りて、到る処<sup>さんがん</sup>巖<sup>はさ</sup>の水を夾まざる無きは、宛<sup>さなが</sup>

然<sup>ら</sup>青銅の薬研<sup>やげん</sup>に瑠璃末<sup>るりまつ</sup>を砕くに似たり。先づ大網<sup>おほあみ</sup>の湯を過<sup>すぐ</sup>れ

ば、根本山<sup>ねもとやま</sup>、魚止<sup>うおどめ</sup>滝<sup>たき</sup>、児ヶ淵<sup>ちごふち</sup>、左<sup>ひだり</sup>鞆<sup>うづつば</sup>の險<sup>ふ</sup>は古<sup>ふる</sup>りて、白<sup>は</sup>

雲洞<sup>くうんどう</sup>は朗<sup>はう</sup>に、布滝<sup>ぬのだき</sup>、竜ヶ鼻<sup>りゅうはな</sup>、材木石<sup>ざいもくいし</sup>、五色石<sup>ごしきせき</sup>、船岩<sup>ふないわ</sup>な

んどと眺<sup>ながめ</sup>行けば、鳥井戸<sup>とりいど</sup>、前山<sup>まえやま</sup>の翠<sup>みどり</sup>衣<sup>ころも</sup>に染みて、福渡<sup>ふくわた</sup>の里<sup>い</sup>に入るなり。

途<sup>みち</sup>すがら前面<sup>むかひ</sup>の崖<sup>がけ</sup>の処<sup>ところ</sup>々<sup>どこ</sup>に躑躅<sup>つつじ</sup>の残り、山藤の懸れるが、甚<sup>はなは</sup>だ興有りと目留まれば、又この辺<sup>あた</sup>殊<sup>ひと</sup>に谿<sup>たに</sup>浅<sup>あさ</sup>く、水澄みて、大いなる古鏡<sup>こきよう</sup>の沈める如く、深く蔽<sup>おほ</sup>へる岸樹<sup>がんじゆ</sup>は陰々として眠るに似たり。貫一は覺えず踏止りぬ。

かの逆巻<sup>さかま</sup>く波に分け入りし宮が、息絶えて浮び出でたりし其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>の景色に、似たりとも酷<sup>はなは</sup>だ似たる岸<sup>たたずま</sup>の布置<sup>ひしげり</sup>、茂<sup>あり</sup>の状<sup>さま</sup>況<sup>ないし</sup>、乃至は漾<sup>たた</sup>ふる水<sup>あや</sup>の文<sup>すき</sup>も、透<sup>すき</sup>徹<sup>とほ</sup>る底<sup>い</sup>の岩<sup>はづら</sup>面<sup>も</sup>も、広さの程も、位置も、趣<sup>おもむき</sup>も、子細<sup>みきた</sup>に看来<sup>かんり</sup>ればいよいよ差<sup>たが</sup>はず。

彼は眦<sup>まなじり</sup>を決きて寒慄<sup>かんりつ</sup>せり。

怪むべき哉、曾て経たりし場をそのままに夢むる例は有れ、所  
あやしかなかつへところためし

抛も無く夢みし跡を、歴々とかく目前に見ると云ふも有る  
りどころまじまじ

事か。宮の骸の横はりし処も、又は己の追来し筋も、彼処よ、此  
むくろよこたおのれおひきかしこ

処よと、陰に一々指しては、限無く駭けるなり。  
ひそかゆびさかぎりなおどろ

車夫を顧みて、処の名を問へば、不動沢と言ふ。  
ふどうざわ

物可恐しげなる沢の名なるよ。げに思へば、人も死ぬべき処の  
ものおそろ

名なり。我も既に死なんとせしがと、さすが現の身にも沁む時、  
うつつし

宮にはあらで山百合の花なりし怪異を又懷ひて、彼は肩頭寒く  
やまゆりおもかたさき

顫ひぬ。  
ふる

卒に踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、咄々、何等の  
にはかきびすかへゆくてふさがとつとつなんら

物か、と先驚かさるる異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見挙  
まおどろいぎようびようぶいはじようみあく

る絶頂には、はらはら松も危く立竦み、  
 幹竹割に割放した  
 る断面は、なかそら半空より一文字に垂下して、  
 岌々たるその勢、  
 幾ど眺むる眼も留らず。  
ほとんなが まなこ

貫一は惘然として佇めり。  
ぼうぜん たたず

彼が宮を追ひて転び落ちたりし谷間の深さは、正にこの天辺  
 の高きより投じたらんやうに、  
 再々として虚空を舞下る危惧  
 の堪難かりしを想へるなり。  
たへがた

我未だ嘗て見ざりつる絶壁！  
 危しとも、可恐しとも、夢なら  
 ずして争か飛下り得べき。又この人並ならぬ雲雀骨の粉微  
 塵に散つて失せざりしこそ、  
 洵に夢なりけれど、  
 身柱冷かに瞳  
 を凝す彼の傍より、これこそ名にし負ふ天狗巖、と為たり貌に  
こころ かたはら う まこと ちりけやや ひとみ がほ

も車夫は案内す。あない

貫一はかの夢の奇なりしより、更に更に奇なるこの塩原の実覺をば疑ひ懼れつつ立尽せり。おそ

既に如かくのごと此くなれば、怪は愈いよいよ怪に、或は夢中に見たりし踪あとの猶なほ着々活現きたし来りて、飽くまで我を脅おびさざれば休やすまざらん

と為るにあらずや、と彼は胸安からずも足に信まかせて、かの巖いはの頭

上そびに聳あたりゆる辺に到れば、谿急たにに激折して、水これが為に鼓怒こどし、

咆哮ほうこうし、噴薄激盪げきとうして、奔馬ほんばの乱れ競きそふが如し。この乱流の

間に横よこたはりて高さ二丈に余り、その頂は平に濶いただきひらひろが、寛ゆたかに百人を

立たしむべき大磐石だいばんじやく、風雨に歳経としふる膚は死灰しかいの色を成して、

鱗うろこも添かたはず、毛も生ひざれど、状可恐うづくましげに蹲りて、老木の蔭を

負ひ、急湍きゆうたんの浪なみに漬りて、夜な夜な天狗巖まふうの魔風まふうに誘はれて  
吼えもしぬべき怪しの物なり。

その古蒲生飛驒守氏郷いにしへもうひだのかみうじさとこの処のたちに野立せし事有るに因りて、野の  
立ちいし

立石とは申す、と例のが説出ときいだすを、貫一は領うなづきつつ、目を放  
たず打眺うちながめて、独り窃ひそかに舌を巻くのみ。

彼は実げに壑間たにまの宮を尋ぬる時、この大石たいせきを眼下に窺ひ見たり  
しを忘れざるなり。

又は流るる宮を追ひて、道無きに困くるしめる折、左右には水深く、  
崖高く、前には攀よづべからざる石の塞りたるを、攀よぢて半なかばに到り  
て進退谷きはまりつる、その石もこれなりけん、と肩は自と聳おのづそびえて、久  
く留とどまるに堪たへず。

数歩<sup>すほ</sup>を行けば、宮が命を沈めしその淵<sup>ふち</sup>と見るべき処も、彼が釈<sup>と</sup>  
 けたる帯を曳<sup>ひ</sup>きしその巖<sup>いはほ</sup>も、歴然として皆在らざるは無し！ 貫  
 一が髪<sup>かみのけ</sup>毛<sup>はり</sup>は針の如く豎<sup>た</sup>ちて戦<sup>そよ</sup>げり。彼の思は前夜の悪夢を反<sup>くりか</sup>  
 復<sup>へ</sup>すに等<sup>ひとし</sup>き苦悩を辞する能はざればなり。

夢ながら可<sup>おそろし</sup>恐くも、浅ましくも、悲くも、可<sup>いたまし</sup>傷くも、分<sup>わ</sup>く方

無くて唯一図に切なかりしを、事もし一場の夢にして止<sup>とど</sup>まらざらん

には、抑<sup>そもそ</sup>も如何<sup>いかに</sup>！ 今や塩原の実景は一<sup>いち</sup>々<sup>いち</sup>夢中<sup>ちゆう</sup>の見るところ、

然らばこの景既に夢ならず！ 思<sup>おもひが</sup>掛<sup>か</sup>けずもここに来<sup>き</sup>にける吾身

もまた夢ならず！ 但<sup>ただ</sup>夢に欠く者としては宮<sup>ひとり</sup>一箇<sup>いっかん</sup>のみ。纔<sup>わづか</sup>に彼のこ

こに來<sup>きた</sup>らざるのみ!!

貫一はかく思到りて、我又夢に入りたるにあらざるかと疑はん

とも為つ。夢ならずと為<sup>せ</sup>ば、我は由<sup>よし</sup>無<sup>な</sup>き処に來にけるよ。幸<sup>さい</sup>に夢  
 に似る事無くてあれかし。異<sup>あや</sup>しとも甚<sup>はな</sup>だ異し！ 疾<sup>と</sup>く往きて、疾  
 く還<sup>かへ</sup>らんと、遽<sup>には</sup>に率<sup>かひ</sup>し俚<sup>き</sup>に乘りて、白倉山の麓、塩釜の湯、  
 高尾塚、離<sup>はな</sup>れむろ室、甘湯沢、兄弟<sup>あに</sup>滝、玉簾瀨、小  
 太郎淵、路<sup>う</sup>の頭<sup>がぶち</sup>に高<sup>みち</sup>きは寺<sup>ほとり</sup>山、低<sup>てら</sup>きに人家の在る処、即ち畑<sup>は</sup>  
 下<sup>た</sup>戸<sup>おり</sup>。

## 第二章

一村十二戸、温泉は五箇所に涌<sup>わ</sup>きて、五軒の宿あり。ここに清  
 琴楼と呼べるは、南<sup>あた</sup>に方<sup>は</sup>りて箒<sup>は</sup>川<sup>きがわ</sup>の緩<sup>ゆる</sup>く廻<sup>めぐ</sup>れる磧<sup>かはら</sup>に臨<sup>ふ</sup>み、俯



しては、すいせき水石のりんりん粼々たるを弄び、もてあそ仰げば西に、富士、喜十  
ろく六の翠巒と対して、清風座に満ち、そで袖の沢を落来る流は、二  
 十丈の絶壁に懸りて、ねりぎぬ素縑を垂れたる如き吉井滝あり。東北  
 は山又山を重ねて、ろうかん琅玕の玉簾深く夏日の畏るべきを遮り  
 たれば、四面遊目ゆうもくに足りて丘壑きゆうかくの富を擅にし、林泉の奢を  
きは窮め、又有るまじき清福自在の別境なり。

貫一はこの絵を看みる如き清穩せいおんの風景に値あひて、かの途上みちすがら  
けはいはほさかし陰き巖と峻き流との為いくたびに幾度か魂飛び肉銷にくしようして、理をさむる方  
かきみだ無く搔乱されし胸の内は靄然あいぜんとして頓とみに和やはらぎ、恍然こうぜんとして  
すべ総て忘れたり。

彼は以おもはへ為らく。

誠に好くこそ我は来<sup>き</sup>つれ！ なんぞ来<sup>きた</sup>るの甚<sup>はなは</sup>だ遅<sup>おそ</sup>かりし。山の  
 麗<sup>うるは</sup>しと謂<sup>い</sup>ふも、壤<sup>つちうづたか</sup>の堆<sup>たか</sup>き者のみ、川の暢<sup>のどけ</sup>しと謂<sup>い</sup>ふも、水の逝<sup>ゆ</sup>くに  
 過ぎざるを、牢<sup>ろう</sup>として抜く可<sup>べ</sup>からざる我が半生の痼<sup>こしつ</sup>疾<sup>ぢ</sup>は、争<sup>いか</sup>で壤<sup>つち</sup>  
 と水との医<sup>い</sup>すべき者ならん、と齒<sup>しが</sup>牙<sup>が</sup>にも掛<sup>か</sup>けず侮<sup>あなど</sup>りたりし己<sup>おのれ</sup>こそ、  
 先づ侮<sup>あなど</sup>らるべき愚<sup>おろか</sup>の者ならずや。

看<sup>み</sup>よ、看<sup>み</sup>よ、木々の緑も、浮<sup>う</sup>べる雲も、秀<sup>ひいづ</sup>る峰<sup>みね</sup>も、流<sup>たに</sup>るる溪<sup>たに</sup>も、  
 峙<sup>そばだ</sup>つ巖<sup>いはほ</sup>も、吹<sup>ふき</sup>来る風も、日の光も、鷄<sup>とり</sup>の鳴<sup>な</sup>く音<sup>ね</sup>も、空の色も、皆<sup>みな</sup>  
 自<sup>おのづか</sup>ら浮世の物ならで、我はここに憂<sup>うれ</sup>ひを忘<sup>わす</sup>れ、悲<sup>かな</sup>しみを忘<sup>わす</sup>れ、苦<sup>くる</sup>しみを忘<sup>わす</sup>れ、  
 勞<sup>つかれ</sup>を忘<sup>わす</sup>れて、身はかの雲と輕<sup>かろ</sup>く、心は水と淡<sup>ひろ</sup>く、希<sup>こひ</sup>はくは今より  
 如<sup>かくのごと</sup>く此<sup>こ</sup>くして我生<sup>を</sup>を了<sup>かな</sup>らん哉<sup>や</sup>。

恋も有<sup>う</sup>らず、怨<sup>うら</sup>みも有<sup>あ</sup>らず、金<sup>ぜ</sup>錢<sup>に</sup>も有<sup>あ</sup>らず、權<sup>けん</sup>勢<sup>せい</sup>も有<sup>あ</sup>らず、名<sup>めい</sup>譽<sup>よ</sup>

も有らず、野心も有らず、栄達も有らず、墮落も有らず、競争も有らず、執着も有らず、得意も有らず、失望も有らず、止だ天然の無垢むくにして、形骸けいがいを安きのみなるこの里、我思わがおもひを埋むるの里か、吾骨を埋るの里か。

性来多く山水の美に親まざりし貫一は、殊に心の往くところを知らざるばかりに愛で悦びて、清琴楼の二階座敷に案内されたれど、内には入らで、始より滝に向へる欄干らんかんに寄りて、偶ま人中を迷ひたりし子の母の親にも逢ひけんやうに、少時はその傍を離れ得ざるなりき。

楼前の緑は漸く暗く、遠近の水音をちこち沓えて、はや夕暮るる山風の身に沁めば、先づ湯浴などせばやと、何気無く座敷に入りたる

彼の眼を、又一個驚かす物こそあれ。

かばん 鞆を置いたる床間に、山百合の花のいと大きなるを唯一輪棒

うざし 挿に活けたるが、茎形に曲り傾きて、あたかも此方に向へるなり。

貫一は覺えず足を踏止めて、その瞪れる眼を花に注ぎつ。宮ははやここに居たりとやうに、彼は卒爾の感に衝れたるなり。

既に幾處の实景の夢と符合するさへ有るに、またその殊に夢の夢なる一本百合のここに在る事、畢竟偶合に過ぎずと

は謂へ、さりとは余りにかの夢とこの旅との照応急に、因縁深きに似て、などかくは我を驚かすの太甚き！

奇を弄して益出づる不思議に、彼は益懼を作して、或はこの裏

に天意の測り難き者有るなからんや、とさすがに惑ひ苦めり。

やがて傍そば近く寄りて、幾い許か似たると眺ながむれば、打披うちひらける

葩はなびら

は凜れんとして玉を割さいたる如く、濃香ふん芬ふん々と迸とばしり、葉色ろに露き氣有

りて 緑みどり 鮮あざやか

に、定さだめて今朝けさや剪きりけんと覺おぼしき花いきほひの勢なりなり。

しばら

少く樂きようまされし貫一きも、これが為なに興おこ冷きようめて、俄にはかに重かしらき頭を

花の前に支へつつ、又かの愁うれひを徐よ々に喚おこ起おこさんと為つ。

「お風呂へ御案内申しませう」

その声こゑに彼は婢をんなを見返りて、

「ああ、姐ねえさん、この花を那裏そこへ持つて行つておくれでないか」

「はあ、その花で御座いますか。旦那だんな様は百合きくらの花はお嫌きらひで？」

「いや、匂におひが強く、頭痛がして成らんから」

「さやうで御座いますか。唯今直に片付けますです。これは唯一はやさき めづらしつ早咲で、珍う御座いましたもんですから、先程折つてまるつて、徒に挿して置いたんで御座います」

「うう、成程、早咲だね」

「さやうで御座います。来月あたりに成りませんと、余り咲きませんので、これが唯一たつたつ有りましたんで、紛れ咲なので御座いますね」

「うう紛れ咲、さうだね」

「御案内致しませう」

風呂場に入れば、一箇ひとりの客先在りて、未だ燈点さぬ微ひとも黯うすくらがりの湯槽ゆぶねに漬りけるが、何様人の来るに駭おどろけると覚おぼしく、甚だ忙しげに

身を起しつ。貫一が入れば、直ぢきに上ると齊ひとしく洗場の片隅かたすみに寄り  
て、色白そびらき背を此方こなたに向けたり。

としのころ

年紀は二十七八なるべきか。やや孱弱かよわなる短軀こづくりの男なり。頻しきり

とみかうみ

あからさま

おもて さだ

に左視右胆すれども、明々地ならぬ面貌は定かに認め難かり。さ

おのづかみしりこし

あきらか

ゆゑ

さく

れども、自ら見識みし越ならぬは明なるに、何が故に人目を避さくるが

かたち な

きやしや

かたちづくり

らあたり

如き態を作すならん。

華車きやしゃなる

形

成は、

ここ

等辺の人

なにびと

あらず、何人にして、何が故になど、貫一は徒いたづらに心こころ牽ひかれて

ゐたり。

やがて彼が出づれば、待ちけるやうに男は入替りて、なほ飽く

こなた

まで此方こなたを向かざらんと為つつ、蕭索しめやかに浴ゆを行つかふ音を立つるの

み。

その膚の色の男に似氣無く白きも、その骨纖に肉の瘦せたるも、又はその挙動の打湿りたるも、その人を懼るる氣色なるも、総て自ら尋常ならざるは、察するに精神病者の類なるべし。さては何の怪むところ有らん。節は初夏の未だ寒き、この寥々たる山中に來り宿れる客なれば、保養鬱散の為ならずして、湯治の目的なるを思ふべし。誠にさなり、彼は病客なるべきをと心釈けては、はや目も遣らずなりける間に、男は浴み果てて、貸浴衣引絡ひつつ出で行きけり。

暮色はいよいよ濃に、こまやか うたたはげし 転激き川音の寒さを添ふれど、手てずく  
寡なればや燈も持来らず、あかり きた 湯香高く蒸騰る煙の中に、独り影ひと  
暗く蹲るも、うづくま すこしさまじ 少く凄き心地して、程無く貫一も出でて座敷に返れ



ば、とこのま床間には百合の花も在らず、煌々たるこうこう燈火の下に座を設け、膳ぜんを据ゑて傍かたはらに手焙てあぶりを置き、茶器食籠じきろうなど取揃とりそろへて、

この一目さすがに旅の勞つかれを忘るべし。

先づ衣桁いこうに在りける襦袍どてらを被かつぎ、夕冷ゆふびえの火も悉く引寄せて、たばこ莨ふかを吃くしめれば、天地静しづかに石走いはばしる水の響こずゑ、梢こずゑを渡る風の聲、颯々さつさつそうそう

淙々そうそうと鳴りて、幽なること太古の如し。

たちま乍あしおとちはたと蹺あしおと音長ひく廊下に曳ひいて、先のはあらぬ小婢こをんの夕餉きふげを運び来きたれるに引添ひひて、其処そこに出でたる宿の主は、

「今日こんにちは好ようこそ御越おこし下さいまして、さぞ御勞おつかれさま様であらう

しやいませうで御座ります。ええ、又唯今程は格別に御茶料くたを下くだし置はなはれまして、甚だ恐入はなはりました儀で、難有ありがたう存じまして、厚

く御礼を申上げますので御座います。

ええ前ぜんもつ以てお詫わびを申上げ置きますのは、召上り物のところ

で御座りまして一向はや御覧の通何も御座りませんで、誠に相済

みません儀で御座いまするが、実は、未だ些ちよつと時候もお早いので、

自然お客様のお越こしも御座りませんゆゑ、何分用意等とうも致し置きま

せんやうな次第で、然し、一両日いちりょうにち中にはお麓末そまつながら何ぞ差

上げまするやうに取計ひまするで御座いますで、どうぞ、まあ今こ

明あけ日のところは御勘弁を下さいまして、御寛ごゆるりと御逗留ごとうりゆう下さ

いまするやうに。——これ、早う御味噌汁おみおつけをお易かへ申して来ない

か

あるじ主の辞し去りて後、貫一は彼の所いはゆる謂何も無き、腕わんも皿も皆黄

なる鶏子たまご一色の膳いつしきに向へり。

「内にはお客は今幾箇いくたり有るのだね」

「こちら這箇の外にお一ひと方かたで御座りやす」

「一箇ひとり？ あのお客は单身ひとりなのか」

「はい」

「さつき先に湯殿で些ちよつと遇あつたが、男の客だよ」

「さよで御座りやす」

「あれは病人だね」

「どうで御座りやすか。——そんな事無ねえで御座りやせう」

「さうかい。何処どこも不良わるいところは無いやうかね」

「無ねえやうで御座りやすな」

「どうも病人のやうだが、さうでないかな」

「ああ、旦那様はお医者様で御座りやすか」

貫一は覚えす噴飯ふんぱんせんと為つつ、

「成程、好い事を言ふな。俺は医者ぢやないけれど、どうも見たところが病人のやうだから、さうぢやないかと思つたのだ。もう

長く来てゐるお客か」

「いんえ、昨日きのふお出いでになりやしたので」

「昨日来たのだ？ 東京の人か」

「はい、日本橋の方のお方で御座りやす」

「それぢや商人あきんどか」

「私能く知りやせん」

「どうだ、お前達と懇意にして話をするか」

「そりやなさりやす」

「俺と那箇どつちが為る」

「旦那様とですけ？ そりや旦那様のやうにはなさりやせん」

「うむ、さうすると、俺の方がお饒しやべり舌なのだな」

「あれ、さよぢや御座りやせんけれど、那裏あちらのお客様は黙つてゐ

らつしやる方が多う御座りやす。さうして何でもお連つれさま様が直ちきに

いらしやる筈はずで、それを、まあ酷えらう待つてお在いでなさりやす」

「おお、伴つれが後から来るのか。いや、大きに御馳走ごちそうだつた」

「何も御座りやせんで、お麓そまつさま末様で御座りやす」

婢をんなは膳を引き起ちぬ。貫一は顛然こころいと臥ねたり。

二十間も座敷の数有る おほがまへ 大構の内に、唯二人の客を宿せるだ

に、さびしき 寂寥は既に余んぬるを、この深山幽谷の暗夜に蔽おほはれたる孤

村の片かたほとり 辺に倚よれる清琴楼の間毎に亘わたる長廊下は、星の下行く

町の小路より、幾いかに許心細くも可おそろし 恐き夜道ならんよ。戸一重とひとへ

外そとには、山風やまおろしの絶えずおどろおどろと吹廻ふきめぐりて、早瀬の波

の高鳴たかなりは、真に放鬼の名をも懷おもふばかり。

折しも唾壺はひふき打つ音は、二間ばかりを隔てて甚だ蕭索しめやかに聞え

ぬ。

貫一なにいは何の故ゆゑとも知らで、その念頭を得放れざるかの客の身の

上をば、独り様々に案じ入りつつ、彼既に病客ならず、又我が識し

る人ならずと為せば、何を以つて人を懼おそる態かたちを作すならん。抑そもそも

彼は何者なりや。又何の尤<sup>とが</sup>むるところ有りて、さばかり人を懼るるや。

貫一はこの秘密の鑰<sup>かぎ</sup>を獲んとして、左往右返に暗中摸索<sup>もさくおもひ</sup>の思を費すなりき。

## (二) の二

あくあした  
 明る朝の食後、貫一は先<sup>ま</sup>づこの狭き畑<sup>はた</sup>下戸<sup>おり</sup>の隅々<sup>すみずみ</sup>まで一<sup>ひと</sup>わた  
 遍<sup>り</sup>見周<sup>みめぐ</sup>りて、略<sup>ほ</sup>ぼその状況を知るとともに、清琴楼<sup>いへ</sup>の家格<sup>がら</sup>を  
 考へなどして、磧<sup>かはら</sup>に出づれば、浅瀬<sup>かか</sup>に架れる板橋<sup>ふせい</sup>の風情<sup>ふうせい</sup>面白く、  
 渡れば喜十六の山麓<sup>さんろく</sup>にて、十町ばかり登りて須卷<sup>すまき</sup>の滝<sup>たき</sup>の湯有り

と教へらるるままに、遂に其処まで往きて、午近き頃宿に帰りぬ。

汗を流さんと風呂場に急ぐ廊下の交互に、貫一はあたかも

かの客の湯上りに出会へり。こたびも彼は面を見せじとやうに、

慌忙く打背きて過行くなり。

今は疑ふべくもあらず、彼は正しく人目を避けんと為るなり。則

ち人を懼るるなり。故は、自ら尤るなり。彼は果して何者ならん、

と貫一は愈よ深く怪みぬ。

昨日こそ誰乎彼の黯黹にて、分明に面貌を弁ぜざりしが、今の

一目は、躬も奇なりと思ふばかり奇くも、彼の不用意の間に速写

機の如き力を以てして、その映じ来りし形を総て脱さず捉へ得た

りしなり。



貫一はその相貌そうぼうの瞥見べつけんに縁よりて、直ただちに彼の性質うらなを占うはんと  
 試こころむるまでに、いと善く見極みきはめたり。されども、いかにせん、彼の  
 相するところは始に疑ひしところと頗すこぶる一致せざる者有り。彼若も  
 し実まことに人を懼るると為なば、彼の人を懼るる所以ゆゑんと、我より彼の人  
 を懼るる所以と為なす者とは、或は稍趣あるひやおもむきことを異にせざらんや。又想ふ  
 に、彼は決して自ら尤とがむるところなど有るに非ずして、止ただその性せい  
 の多差シヤイなるが故のみか、未だ知るべからず。この二者ふたつの前のをも  
 取り難く、さすがに後のにも領うなづきかねて、彼は又新あらたに打惑うちまどへり。  
 午飯ひるめしの給仕には年嵩としかさの婢出でたれば、余所よそながらかの客の  
 事を問ひけるに、箸はしをも取らで今外に出で行きしと云ふ。

「はあ、飯めしも食はんで？ 何処どこへ行つたのかね」

「何でも昨日<sup>きのふ</sup>あたりお連<sup>つれさま</sup>様がお出<sup>いで</sup>の筈<sup>はず</sup>になつてをりましたので御座いませう。それを大相お待ちなすつてゐらつしやいましたところ<sup>あそ</sup>が、到頭お着<sup>あそ</sup>が無いもんで御座いますから、今朝<sup>けさ</sup>から御心配遊<sup>あそ</sup>して、停車場<sup>ステエシヨン</sup>まで様子を見がてら電報を掛けに行くと有<sup>おつしや</sup>仰<sup>あつしや</sup>いまして、それでお出ましに成つたので御座います」

「うむ、それは心配だらう。能く有る事だ。然し、飯も食はずに氣を揉<sup>も</sup>んでゐるとは、どう云ふ伴<sup>つれ</sup>なのかな。——年<sup>とし</sup>寄<sup>より</sup>か、婦<sup>をんな</sup>でもあるか」

「如何<sup>いかに</sup>で御座いますか」

「お前知<sup>わたくし</sup>らんのか」

「私存<sup>わたくし</sup>じません」

彼は覚えだんなず小首を傾かたむくれば、

「旦那も大相御心配ぢや御座いませんか」

「さう云ふ事を聞くと、俺おれも氣になるのだ」

「ぢや旦那も余よつほど程苦勞性の方ですな」

「大きにさうだ」

「それぢやお連様がいらしつて見て、お年寄か、お友達なら宜よろう

御座いますけれど、もしも、ねえ、貴方あなた、お美うつくい方か何かだつた

日には、それこそ旦那は大変で御座いますね」

「どう大変なのか」

「又御心配ぢや御座いませんか」

「うむ、大きにこれはさうだ」

風かぜしづか 恬かに草香かをりて、唯居るは惜ひよりき日和こそばゆに奇痒きく、貫一は又

出でて、塩釜の西南十町ばかりの山中なる塩の湯と云ふに遊びぬ。  
 還かへれば寂さびしく夕暮るる頃なり。例の如く湯に入りて、上あがれば直ちきに膳ぜん  
 を持もち出で、燈あかしも漸かく耀かがきしに、かの客、未いまだ歸こり来ず、

閑寂しづかなものも可いけれど、外に客と云ふ者が無くて、全まるでかう独ひ  
 法師とりぼつちも随分心細いね」

託言かごとがましく貫一は言出づれば、

「さやうでゐらつしやいませう、何と申したつてこの山奥で御座  
 いますから。全体旦那が一人でゐらつしやると云ふお心こころ懸がけ  
 が悪いので御座いますもの、それは為方が御座いません」

婢はわざとらしい高たかわらひ笑わらしつ。

「成程、これは恐入つた。今度から善く心得て置く事だ」

「今度なんて仰おつしや有らずに、旦那も明日あしたあたり電信でお呼よびよせ寄に

なつたら如何いかがで御座います」

「五十四になる老婢ばあやを呼んだつて、お前、始らんどやないか」

「まあ、旦那はあんな好い事を言つてゐらつしやる。その老婢さんの方でないのをお呼びなさいましょ」

「気の毒だが、内にはそれつきりより居ないのだ」

「ですから、旦那、ほかづつと外にお在んなさるので御座いませう」

「そりや外には幾多いくらでも在るとも」

「あら、御馳走で御座いますね」

「なあに、能く聴いて見ると、それが皆人みんなの物ださうだ」

「何ですよ、旦那。貴方、本当の事を有<sup>おつしや</sup>仰るもんですよ」

「本当にも嘘<sup>うそ</sup>にもその通だ。私<sup>わたし</sup>なんぞはそんな意気な者が有れば、何<sup>なに</sup>為にこんな青臭い山の中へ遊びに来るものか」

「おや！ どうせ青臭い山の中で御座います」

「青臭いどころか、お前、天狗<sup>てんぐい</sup>巖だ、七不思議だと云ふ者が有る、可<sup>おそろし</sup>恐い山の中に違無<sup>ちがひ</sup>いぢやないか。そこへ彷徨<sup>のそのそ</sup>、閑<sup>ひま</sup>さうな貌<sup>かほ</sup>をして唯一<sup>たつたひとり</sup>箇<sup>や</sup>で遣つて来るなんぞは、能<sup>よくよく</sup>々の間拔<sup>まぬけ</sup>と思はなけりやならんよ」

「それぢや旦那は間拔なのぢや御座いませんか。そんな解らない事が有るのですか」

「間拔にも大間拔よ。宿帳を御覽、東京間拔<sup>まぬけいちにん</sup>一人と附けて在る」

「その傍そばに小く、下女塩原間拔一人と、ぢや附けさせて戴いたきませう」

「面白い事を言ふなあ、おまへは」

「やつぱり少し抜けてゐる所せ為で御座います」

彼は食事を了をはりて湯浴し、少しばらく焉ありて九時を聞きけれど、か

の客は未いまだ歸らず。寢床に入りて、程無く十時の鳴りけるにも、

水声空むなしく楼を繞めぐりて、松の嵐の枕ちんじよう上うへに落つる有るのみなり。

始よりその人を怪まざらんにはこの咎とがむるに足らぬ瑣細ささいの事も、

大なる模糊もこの影を作なして、いよいよ彼が疑うたがひの眼を遮り来きらんと

するなりけり。貫一はほとほと疑ひ得らるる限疑ひて、躬みづからも其の

妄ばうに過すくるの太甚はなはだしきを驚けるまでに至りて、始て罷やめんと為たり。

これに垂<sup>つ</sup>いで、彼は抑<sup>そもそ</sup>も何の故<sup>ゆゑ</sup>有りて、肥瘠<sup>ひせき</sup>も関せざるかの客  
 に対して、かくばかり軽々しく思を費し、又念<sup>おもひ</sup>を懸<sup>かく</sup>るの固執なる  
 や、その謂<sup>いはれな</sup>無<sup>おのれ</sup>き己をば、敢て自ら解<sup>ひき</sup>かんと試みつ。

されども、人は往々にして自ら率<sup>ひき</sup>るその己を識<sup>し</sup>る能はず。貫一  
 は抑へて怪まざらんと為<sup>せ</sup>ば、理に於て怪まずしてあるべきを信ず  
 るものから、又幻視せるが如きその大いなる影の冥<sup>めい</sup>想<sup>そう</sup>の間に纏<sup>て</sup>  
 ん<sup>めん</sup>綿<sup>あるひ</sup>して、或は理外に在る者有る無からんや、と疑はざらんと為  
 した<sup>ら</sup>傍<sup>かへ</sup>より却<sup>まどは</sup>りて惑<sup>まどは</sup>しむるなり。

表階<sup>おもてぼしご</sup>子の口<sup>か</sup>に懸<sup>か</sup>れる大時計は、病<sup>つか</sup>み憊<sup>つか</sup>れたるやうの鈍き響を  
 作<sup>な</sup>して、廊下<sup>やみ</sup>の闇<sup>さまよ</sup>に彷徨<sup>さまよ</sup>ふを、数ふれば正<sup>まさ</sup>に十一時なり。

かの客はこの深<sup>しん</sup>更<sup>こう</sup>に及<sup>い</sup>べども未<sup>いま</sup>だ帰<sup>こ</sup>り来<sup>こ</sup>ず。



彼は帰り来らざるなるか、帰り得ざるなるか、帰らざるなるか  
 など、又思おもひはな放なつ能はずして、貫一は寝ねぐるし苦くるき枕まくらを頻あまたたび回か易か  
 へたり。今や十二時にも成りなんにと心に懸けながら、その音は  
 聞くに及ばずして遂つひに眠ねむりを催めせり。日高ひだかき朝景色の前に起出づれ  
 ば、座敷の外を小婢こをんなは雑巾掛ぞうきんかけしてゐたり。

「お早う御座りやす」

「睡ねむさうな顔かほをしてゐるな」

「はい、昨夜よんべあちら那裏のお客様がお帰かへりになるかと思つて、遅うまで待  
 つてをりやしたで、今朝睡よんべあちらうござりやす」

「ああ、あのお客は昨夜ゆふべは帰かへりらずか」

「はい、お帰かへりが御座りやせん」

貫一はかの客の間の障子を開放したるを見て、あけはな 唾楊枝のま

まてすりづた欄杆伝おもてひに外を眺め行く態ふりして、その前を過すぐれば、床の間に

小豆革あづきがはの手鞆てかばんと、浅黄あさぎキヤリコの風呂敷包とを並ならべて、傍そばに

二三枚の新聞紙を引ひつつく※ね、衣桁いこうに絹物の袷あはせを懸けて、その裾すそに紺

の靴下を置きたり。

さては少すこしく本意ほんい無きまでに、座敷の内には見出みいだすべき異状も有

らで、彼は宿帳に抛よりて、洋服仕立商なるを知りたると、敢あへて背そむ

くところ有りとも覚えざるなりき。

拍子もじ抜して返れる貫一は、心こころ私ひそかにその臆測いりほがの鑿はなりしを

ぢざるにもあらざれど、又これが為に、直ただちに彼の濡衣ぬれぎぬを剥去はぎさ

るまでに釈然たる能はずして、好し、この上はその待人まちびとの如何いか

なる者なるかを見て、疑は決すべしと、やがてその消息を齎し来るべき彼の帰來かへりの程を、陰ながら最更いとさらに遅しと待てり。

夜は山精木魅さんせいもくびの出でて遊ぶを想はしむる、陰森凄幽いんしんせいゆうの氣

を凝すに反してこの霽朗せいろうなる昼間の山容水態は、明媚争か画めいびかでがも

如かん、天色大氣も殆ど塵境ほとんじんきよう以外いがいの感無くんばあらず。黄金こがね

を織作おりなせる羅うすものにも似たる麗き日影を蒙りて、万斛ばんこくの珠を鳴す谷

間の清韻を樂みつつ、欄頭らんとうの山を枕に恍惚こうこつとして消ゆらんやう

に覺えたりし貫一は、急遽あわただしき蹕音あしおとの廊下を動し来るに駭うごかきたされて、

起おきかへ回りさまに頭かしらを捻向ねぢむくれば、何事とも知らず、年嵩としかさの婢をんなの駟か

着るなり。

「些ちよいと旦那、参りましたよ、参りましたよ！ 早くいらしつて御

覧なさいまし。些と早く」

「何が来たのだ」

「何でも可いんですから、早くいらつしやいましよ」

「何だ、何だよ」

「早く階子の所へいらしつて御覧なさい」

「おお、あの客が還つたのか」

彼ははや飛ぶが如くに引返して、貫一の言は五間も後に残され

たり。彼が注進の模様は、見るべき待人を伴ひ帰れるならんと、

直ぐに起ちて表階子の辺に行く時、既に晩し両箇の人影は欄の上

に顕れたり。

鍔つばひろ広なる藍あゐねずみ鼠なかをればうの中折帽まへのめりを前斜かむに冠れる男は、例の

おもて面を見せざらんと為れど、かの客なり。引連れたる女は、二十歳  
 を二つ三つも越したる可し。銀杏返を引約めて、本甲時絵の  
 挿櫛根深に、大粒の淡色瑪瑙に金脚の後簪、堆朱彫  
 の玉根掛をして、鬢の一髪をも乱さず、極めて快く結び做し  
 たり。葡萄茶の細格子の縞御召に勝色裏の袷を着て、羽織  
 は小紋縮緬の一紋、阿蘭陀模様の七糸の袷紗帯に金鎖  
 子の織きを導入れて、嬌き友禅染の襦袢の袖して口元を拭ひ  
 つつ、四季袋を紐短かに拵けたるが、弗と此方を見向ける素  
 顔の色蒼く、口の紅も点さで、やや裏寂くも花の咲過ぎたら  
 んやうの蕭衰を帯びたれど、美目の盼たる色香尚濃にして、  
 漫ろ人に染むばかりなり。

ふたり  
両箇は彼の見る目の顕露なるに氣怯きおくれせる様子にて、先を争ふ  
如く足早に過行きぬ。貫一もまたその逢ほうちやく着の唐突なるに打惑  
ひて、なかなか精くはしく看るべき違いとまあらざりけれど、その女は万々彼  
の妻などにはあらじ、と独ひとり合点せり。

### 第三章

かの男女なんによは、しさに堪たへざらんやうに居寄りて、手に手まじを交  
へつつ密々ひそやかに語れり。

「さうなの、だから私はどんなに心配したか知れやしない。なか  
なか貴方あなたがここで想つてゐるやうな訳に行きは為しませんとも。そ

りや貴方の心配もさうでせうけれど、私の心配と云つたら、本当に無かつたの。察するが可<sup>い</sup>いつて、そりや貴方、お互ぢやありませんか。吁、<sup>ああ</sup>私は今だに胸が悸<sup>どきどき</sup>々として、後から追掛<sup>おつか</sup>けられるやうな氣持がして、何だか落着かなくて可けない」

「まあ何でも、かうして約束通り逢<sup>あ</sup>へりや上首尾なんだ」

「全くよ。一昨日<sup>をととひ</sup>の晩あたりの私の心配と云つたら、こりやどう

だかと、さう思つたくらゐ、今考へて見れば、自分ながら好く出られたの。やつぱり尽きない縁なのだわ」

些<sup>ちよ</sup>と男の顔を睥<sup>みや</sup>りて、濡<sup>ぬ</sup>るる脛<sup>まぶた</sup>を軽く拭<sup>ぬぐ</sup>へり。

「その縁の尽きないのが、究竟<sup>つまりふたり</sup>彼我の身の窮迫<sup>つまり</sup>なのだ。俺<sup>おれ</sup>もかう云ふ事に成らうとは思はなかつたが、成程、悪縁と云ふ者は為<sup>しかた</sup>方

の無いものだ」

女は尚なほひそか 窃おもてそむに泣きゐる面を背けたるまま、

「貴方は直ちきに悪縁だ、悪縁だと言ふけれど、悪縁ならどうするんです！」

「悪縁だからかうなつたのぢやないか」

「かう成つたのがどうしたんですよ！」

「今更いまどうするものか」

「当あたりまへ然ささ！ 貴方は一体水臭いんだ!!」

「おい、お静しず、水臭いとは誰の事だ」

色なを作せる男まなこの眼は、つと湧わく涙に輝けり。

「貴方の事さ！」



女の目よりは漣々はらはらと零れぬこぼ。

「俺の事だ　お静……手前はそんな事を言つて、それで済むと思ふのか」

「済んでも済まなくても、貴方が水臭いからさ」

「未だまそんな事を言やがる！　さあ、何が水臭いか、それを言へ」

「はあ、言ひますとも。ねえ、貴方は他の顔さへ見りや、直ちきに悪

縁だと云ふのが癖ですよ。彼我ふたりの中の悪縁は、貴方がそんなに言いは

なくたつて善く知つてゐまさね。何も貴方一箇ひとりの悪縁ぢやなし、

私だつてこれでも随分謂いふに謂いはれない苦労を為てゐるんぢやあり

ませんか。それを貴方がさもさも迷惑さうに、何ぞの端はしには悪縁

だ悪縁だと言ひなさるけれど、聞きかされる身に成つて御覧なさい

な。あんま余り好い心持は為やしません。それも不断ならともかくもですき、この場になつてまでも、さう云ふ事を言ふのは、貴方の心が水臭いからだ——何がさうでない事が有るもんですか」

「悪縁だから悪縁だと言ふのぢやないか。何も迷惑して……」

「悪縁でも可ござんすよ！」

彼等は相あひそむ背しぼらきて姑ことばなく語無かりしが、女は忍びやかに泣きゐ

たり。

「おい、お静、おい」

「貴方きつと迷惑なんでせう。貴方がそんな気ぢや、私は……実に……つまらない。私はどうせう。情無い！」

お静は竟つひに顔を掩おほうて泣きぬ。

「何だな、お前も考へて見るが可いぢやないか。それを迷惑とも何とも思はないからこそ、世間を狭くするやうな間なかにも成りさ、又かう云ふ……なあ……訳なのぢやないか。それを嘘うそにも水臭いなんて言いはれりや、俺だつて悔くやしいだらうぢやないか。余り悔くて俺は涙が出た。お静、俺は何も芸人ぢやなし、お前に勤めてゐるんぢやないのだから、さう思つてゐてくれ」

「狭山さやまさん、貴方もそんなに言はなくてたつて可いぢやありませんか」

「お前が言出すからよ」

「だつて貴方がかう云ふ場になつて迷惑さうな事を言ふから、私は情無くなつて、どうしたら可からうと思つたんでさね。ぢや私

が悪かつたんだから謝ります。ねえ、狭山さん、些と」

お静の顔を打<sup>うちまも</sup> 矚りつつ、男は茫然<sup>ぼうぜん</sup>たるのみなり。

「狭山さんてば、貴方何を考へてゐるのね」

「知れた事さ、彼我<sup>ふたり</sup>の身の上をよ」

「何だつてそんな事を考へてゐるの」

「……………」

「今更何も考へる事は有りはしないわ」

狭山は徐々<sup>おもむろ</sup>に目を転<sup>うつ</sup>して、太息<sup>といき</sup>を呟<sup>つ</sup>いたり。

「もうそんな溜息<sup>ためいき</sup>なんぞを呟くのはお舎<sup>よ</sup>しなさいつてば」

「お前二十……二だつたね」

「それがどうしたの、貴方が二十八さ」

「あの時はお前が十九の夏だっけかな」

「ああ、さう、何でも<sup>あはせ</sup>袷を着てゐたから、丁度今時分でした。湖<sup>こ</sup>

月<sup>げつ</sup>さんのあの池に好いお月が映<sup>さ</sup>してゐて、暖<sup>あつたか</sup>い晩で、貴方と一処

に涼みに出たんですよ、善く覚えてゐる。あれが十九、二十、二

十一、二十二と、全<sup>まる</sup>三年に成るのね」

「おお、さうさう。昨日<sup>きのふ</sup>のやうに思つてゐたが、もう三年に成る

なあ」

「何だか、かう全で夢のやうね」

「<sup>ああ</sup>吁、夢だなあ！」

「夢ねえ！」

「お静！」

「狭山さん！」

両箇ふたりは手とを把り、膝ひざを重ねて、同じ思なを猶お悲かなく、

「ゆ……ゆ……夢だ！」

「夢だわ、ねえ！」

声立てじと男の胸に泣附く女。

「かう成るのも皆みんな約束事ぢやあらうけれど、那奴あいつさへ居なかつた

ら、貴方だつて余計な苦勞は為はしまいし。私は私で、ああもか

うも思つて、末始終の事も大概考へて置いたのだから、もう少し

の間時節が来るのを待つてゐられりや、曩日いつかの御神籤おみくじ通どほりな事に

成れるのは、もう目に見えてゐるのを、那奴あいつが邪魔あいつして、横紙よこがみ

を裂くやうな事を為やがるばかりに大事に為なけりや成らない貴

方の体に、取つて返しの付かない傷まで付けさせて、私は、狭山さん、余りあんま申訳が無い！ 堪……忍……して下さい」

「そりやなあに、お互の事だ」

「いいえ、私がもう少し意気地が有つたら、かうでもないんだらうけれど、胸には色々在つても、それが思切つて出来ない性分だもんだから、ついこんな破滅はめにも成つて了つて、私は実に濟まないと、自分の身を考へるよりは、貴方の事が先に立つて、さぞ陰ぢや迷惑もしてお在いでなんだらうに、逢ふ度たんびに私の身を案じて、毎いっも優しくして下さるのは仇や疎な事ぢやないと、私は嬉うれしいより難ありが有たいと思つてゐます。だものだから、近頃ぢや、貴方に逢ふと直ちきに涙が出て、何だか悲くばかりなるのが不思議だと思つてゐた

ら、果然やつぱりかう云ふ事になるしらせ識だつたんでせう。

貴方にはお氣の毒だ、お氣の毒だ、と始終自分が退ひけてゐるのに、悪縁だなんぞと言れると、私は体が縮るやうな心持がして、ああ、さうでもない、貴方が迷惑してゐるばかりなら未だ可いけれど、取んだ者に懸り合つた、ともしや後悔してお在いでなんぢやなからうかと思ふと、私だつて好い氣持はしないもんだから、つ一向者さつきはあんなに言過ぎて、私は誠に済みませんでした。それはもう貴方の言ふ通り悪縁には差ちがひ無いんだけれど、後生だからそんな可いや厭な事は考へずにゐて下さい。私はこれで本望だと思つてゐる」

「生木なまきを割きいて別れるよりは、まあ愈ましだ」



「別れる？　あゝ 吁！　可厭だ！　考へても慄然とする！　切れるの、

別れるのなんて事は、那奴あいつが来ない前には夢にだつて見やしなかつたのを、切れる切れるぢや私もどの位内で責められたか知れやしない。さうして挙句あげくがこんな事に成つたのも、想へば皆那奴のお蔭だ。ええ、悔いくやし！　私はきつと執着とつといても、この怨うらみは返して遣やるから、覚えてゐるが可い！」

女は身を顫ふるはせてのし詈るとともに、念おもひ入りて呪のろふが如き血相を作なせり。

不知しらず、この恨み、詈のしり、呪はるる者は、何処いづくの誰だれならんよ。

「那奴も好加減な馬鹿ぢやないか！」

男は齒咬はがみしつつ苦しげに嗤笑ししょうせり。

「馬鹿も大馬鹿よ！ 方図の知れない馬鹿だわ。畜生！ 所歆いの  
 有る女が金で靡なびくか、靡かないか、些ちつとは考へながら遊ぶが可い。  
 来りや不い好やな顔を為て遣るのに、それさへ解らずに、もううるさく附  
 けつ廻しつして、了局しまひには人の恋中の邪魔を為やがるとは、那奴  
 も能よく能くげいなしの芸無猿に出来てゐるんだ。憎さも憎し、私はもう  
 悔くて、悔くて、狭山さん、実はね、私はこの世の置土産おきみやげに、  
 那奴の額を打割ぶちわつて来たんでさね」  
 「ええ、どうして！」

「なあにね、貴方に別れたあの翌あくるひ日から、延続のべつに来てゐやがつ  
 て、ちつとでも傍そばを離さないんぢやありませんか。這箇こつちは気が気

ぢやないところへ、もう悪漆膠わるしつこくて耐たまらないから、病氣だと謂いつて内へ遁にげて来りや、直すぐに追懸おつかけて来て、附絡つきまとつてゐるんでせう。さうすると寸法は知れてまさね、丁ちゃんと涉わたりが付いてゐるんだから、阿母おつかさんは傍そばから『ちやほや』して、そりや貴方、真面目まじめぢや見ちやゐられないお手厚てあつさ加減なんだから、那奴は図に乗つて了つて、やあ、風呂を沸わかせだ事の、ビールを冷ひやせだ事のと、あの狭い内へ一個ひとりで幅しを為やがつて、なかなか動いごきさうにも為ないんぢやありませんか。

私は全いけどりで生捕いけどりに成つたやうなもので、出るには出られず、這こつちの事が有るから、さうしてゐる空そらは無し、あんな氣の揉もめた事は有りはしない——本ほん当とにどうせうかと思つた。ええ、なあに、

あんな奴は打抛出おつぽりだして措おいて、這箇こつちは搔かい巻まきを引被ひつかぶつて一心に考へてゐたんですけれど、もう憤じれたくて耐らなくなつて来たから、不如いっそかまはず飛出してはうかと、余程よつぽどさう念つたものの、丹子たんこの事も、ねえ、考へて見りや可哀かはいさうだし、あの子を始め阿母さんまで、私ばかりを頼たよりに為てゐるものを、さぞや私の亡ない後には、どんなにか力も落さうし、又あの子も為ないでも好い苦勞を為なけりやなるまいと、そればかりに牽ひかされて、色々話も有るものだから、あの子の阿母さんにも逢つて遣りたし、それに、私も出るに就いちや、為て置かなけりやならない事も有るし為るの  
で、到頭遅々ぐづぐづして出損でそこなつて了つたんです。

さうすると、どうでせう、まあ、那奴はその晩二時過までうで

付いてゐて、それでも不承々々に還つたのは可い。すると翌日  
 は半日阿母さんのお談義が始まつて、好加減に了りようけん 簡を極めろ  
 でせう。さう言つちや濟まないけれど、育てた恩も聞飽きてゐる  
 わ。それを追繰返し、引繰返し、悪体交りには、散々聴せ  
 て、了局しまひは口返答したと云つて足蹴にする。なあに、私は足蹴に  
 されたつて、撲れたつて、それを悔いとは思やしないけれど、這  
 箇つちだつて貴方と云ふ者が有ると思ふから、もう一生懸命に稼かせいで、  
 為るだけの事は丁と為てあるのに、何ぼ慾にきりが無いと謂つて  
 も、自分の言いひじよう 条ばかり通さうとして、他には些ちつとでも樂を為せ  
 ない算段を為る。私だつて金属かねで出来た機械ぢやなし、さうさう  
 駆使こきつかはれてお為にばかり成つてゐちや、這箇こつちの身が立ちはしな

い。

別にどうしてくれなくても、訳さへ解つてゐてくれりや、辛いぐらゐは私は辛抱する。所<sup>いろ</sup>歎は堰<sup>せ</sup>いて了ふし、旦那<sup>だんなとり</sup>取は為ろと云ふ。そんな不可<sup>いや</sup>な真似<sup>まね</sup>を為なくても、立派に行くやうに私が稼いであるんぢやありませんか。それをさう云ふ無理を言つてからに、素直でないの、馬鹿だのと、足蹴に為るとは……何……何事で……せう！

それぢや私も赫<sup>かつ</sup>として、もう我慢が為切れなく成つたから、物も言はずに飛出さうと為る途端に、運悪く又<sup>あいつ</sup>那奴が遣つて来たんぢやありませんか。さあ、捉<sup>つか</sup>つて了つて、其<sup>そこ</sup>処<sup>ばつ</sup>の場<sup>にげ</sup>で逃るには逃られず、阿母<sup>おつか</sup>さんは得<sup>え</sup>たり賢<sup>かしこ</sup>しなんでせう、一処に行け行けと

聒やかましく言ふし、那奴は何でも来いと云つて放さない。私も内を出た

方が都合が好いと思つたから、まあ言ふなりに成つて、例の処へ  
ひつぱ

られて行つたとお思ひなさい。あの長なが尻だから、さあ又還ら  
ない、さうして何か所思おもはくでも有つたんでせうよ、何だか知らな

いけれど、その晩に限つて無闇むやみとお酒を強しひるんでさ。這箇こつちも鬱むしや

勃くしやばら 肚で、飲めもないのに幾多いくたでも引受けたんだけれど、酔

ひさうにも為やしない。

その内に漸々そろそろ又お極きまりの氣障きざな話を始めやがつて、這箇こつちが柳

に受けて聞いてゐて遣りや、可いかと思つて増長して、呆あきれた真ま

似ねを為やがるから、性の付く程譚つげ々さう言つて遣つたら、さあ

自棄やけに成つて、それから毒吐どくつき出して、やあ店番の埃ほこり被かぶりだの、

ひやめしくら  
冷飯吃ひの雇人<sup>やとひにん</sup>がどうだのと、聞いちやゐられないやうな腹の立つ事を言やがるから、這箇<sup>こつち</sup>も思切つて随分な悪体<sup>あくたい</sup>を吐いて遣つたわ、私は。

さうすると、了局<sup>しまひ</sup>に那奴は何と言ふかと思ふと、幾許七顛八倒<sup>いくらじたばた</sup>しても金で縛<sup>しば</sup>つて置いた体だなんぞ、と利<sup>き</sup>いた風な事を言ふんぢやありませんか。だから、私はさう言つて遣つた、お気の毒だが、貴方は大方目が眩<sup>くら</sup>んで、そりやお袋を縛つたんだらうつて」

聴<sup>あいつ</sup>ゐる狭山は小氣味好<sup>こきみよ</sup>しとばかりに頷<sup>うなづ</sup>けり。

「それで那奴<sup>あいつ</sup>は全然<sup>すつかりおこ</sup>慍<sup>い</sup>つて了つて、それから<sup>さわぎ</sup>の騷擾<sup>さわぎ</sup>でさ。無礼な奴だとか何とか言つて、私は襟<sup>えり</sup>を持つて引擦<sup>ひきず</sup>り仆<sup>たふ</sup>された。随分飲んでゐたから、やつぱり酔つてゐたんでせう。その時はもう全<sup>まる</sup>



で夢中で、唯ただ那奴の憎らしいのが胸一杯に込こみあげて、這こん畜生ちくしょうと思ふと、突いきなり如其処そこに在つたお皿を那奴の横面へ叩たた付けて遣つた。丁度それが眉間みけんへ打着ぶつて血が淋漓だらだら流れて、顔が半分真赤に成つて了つた。これは居ちや面倒だと思つたから、家中大騒さわぎを遣つてゐる隙すきを見て、窃そくと飛出した事は飛出したけれど、別にゆきどころ往所むきどころも無いから、丹子の阿母おつかさんの処へ駈かけ込んだの。

ところが、好かつた事には、今旅から歸つたと云ふところなん  
で、時間を見ると、十時余程よつほど廻つてゐるんでせう。瀝車きしやはもう  
出ず、氣ばかりは急せくけれど、若箇道間どつちみちに合ふんぢやなし、そ  
れに話は有るし為るもんだから、一晚厄介に成る事にして、髪な  
んぞを結んでもらひながら、些ちつと訳が有つて、貴方と一処に当分

身を隠すのだと云ふやうに話を為てね、それから丹子の事も悉くくはし言置いて遣りましたら——善い人ね、あの阿母さんは——おいおい泣出して、自分の子の事はふつつりとも言はずに、唯私の身ばかりを案じて、ああのかうのと色々言つてくれたその実意と云つたら……噫ああ、同じ人間でありながら、内の阿母さんは、実に、あなた、鬼ですわ！ 私もあの子の阿母さんのやうな実の親が有つたらば、こんな苦勞は為やしまいし、又貴方のやうな方の有るのを、さぞかし力に念おもつて、喜びも為やうし、大事にも為る事だらうと思つたら、もうもう悲くなつて、悲くなつて、如何いかに何でも余り情無くて、私はどんなに泣きましたらう。  
あんま

それに、私をばあんなに頼たのみに為てゐた阿母さんの事だから、当

ゐなか

分でも田舎へ行つて了ふと云ふのを、それは心細がつて、力を落  
 したの何のと云つたら、私も別れるのが氣の毒に成るくらゐで、  
 先へ落付いたら、どうぞ一番に住所ところを知せてくれ、初中終旅しよつちゆう  
 である  
 出行いてゐる体だから、直に御機嫌伺ひに出ると、その事をあん  
 なに懇々くれぐれも頼んでゐましたから、後で聞いたら、さぞ吃驚びっくりして  
 ……きつと疾わづらひでも為るでせうよ。考へて見りや、丹子も可愛かはいし、

あの阿母さんも怜いといし。吁ああ、吁ああ！」

すすりなき

歔もた 歔もた して彼は悶もだえつ。

なほさら

「さう云ふ訳ぢや、猶更内ぢや大騒をして捜してゐる事だらう」

「大變でせうよ」

あんまぐづぐづ

「それだと余り遅々しちやゐられないのだ」

「どうで、狭山さん、先は知れてゐ……」

「さうだ」

「だからねえ、もう早い方が可ござんすよ」

女は咽びて其処に泣伏しぬ。狭山は涙を連<sup>しばた</sup>きて、

「お静、おい、お静や」

「あ……あい。狭山さん！」

あはれ 憐むべし、情 極<sup>じようきはま</sup>りて彼等の相擁<sup>あひよう</sup>するは、畢<sup>ひつき</sup>竟<sup>きやう</sup>尽きせ

ぬ哀歎<sup>なげき</sup>を抱<sup>いだ</sup>くが如き者ならんをや。

(三)の二

両箇ふたりは此方こなたにかつ泣きかつ語れる間、彼方あなたの一箇ひとりは徒然つれづれの柱に倚よりて、やうやう傾く日影に照されたり。

その待人の如何いかなる者なるかを見て、疑は決すべしと為せし貫一も、かの伴ひ還りし女を見るにおよびて、その疑はいよいよ錯雜して、しかも新なる怪訝あやしみの添はるのみなり。

如何いかなればや、女の顔色も甚はなはだ勝れず、その点の男といと善く

似たるは、同じ憂を分つにあらざる無からんや。我聞く、犯罪の

底には必ず女有りと、若し信まことなりとせば、彼は正まさしく彼女かのをんなゆゑ

に如何いかなる罪をも犯せるならんよ。その罪の故ゆゑに男は苦み、その

苦の故に女は憂ふると為せば、彼等は誠まことに相愛あいあいするの堅き者なら

ず哉や。

知らず、彼等は何の故に相率あひひきゐてこの人目稀まれなる山中やまなかには

来れるきた。その罪をのがれんが為か、その苦と憂とを忘れんが為か、

或はその愛を全うせんが為か、明に彼等は夫婦ならず、又は、女

の芸者風なるも、決して尋常の隠遊かくれあそびにあらずして、自から穂

に露るあらはるところ有り。さては何等の密会なにかならん。

貫一は彼を以て女を偷ぬすみて奔はしる者ならずや、と先推まづしつつ、尚な

ほ如何にやなど、飽かず疑へる間より、忽ち一片たちまの反映は閃きらめきて、

朧おぼろにも彼の胸の黯くらきを照せり。

彼はこの際熱海の旧夢を憶おもはざるを得ざりしなり。

世上貫一の外ほかに愛する者無かりし宮は、その貫一と奔るを諾うべなは

ずして、僅わづかに一瞥べつの富の前に、百年の契を蹂躪ふみにじりて吝をしまざりき。

噫あゝ我が当時の恨、彼が今日こんにちの悔！ 今彼かのをんな女は日夜に栄てらの街

ひ、利いざなの誘ふ間に立ち、守るに難き節を全うして、世の容れざる

愛したがに随つて奔らんと為るか。

爾しかおも思へる後の彼は、陰ひそかにかの両個ふたりの先に疑ひし如き可いまはし忌き

罪人ならで、潔く愛の為に奔る者たらんを、禱いのるばかりに冀こひねがへり。

若しさもあらば、彼は具つぶさに彼等の苦き身の上と切なる志とを聴か

んと念おもひぬ。

心永く瘡きずきて恋に敗れたる貫一は、殊ことさら更に他の成敗に就いて

観みるを欲せるなり。彼は己おのれの不幸の幾いかばかり許不幸に、人の幸さちの幾

許幸ならんかを想ひて、又己の失敗の幾許無残に、人の成効の幾

許十分ならんかを想ひて、又己の契の幾許薄く、人の縁えにしの幾許深

からんかを想ひて、又己の受けし愛の幾許浅く、人の交かはせる情なさけの幾許篤からんかを想ひて、又己の恋の障さまたげ碍がいの幾許強く、人の容れられぬ世の幾許狭からんかを想ひて。嗟あ呼あ、既に己の恋は敗れに破れたり。知るべからざる人の恋の末つひ終ひに如何いかならんかを想ひて。

昼間の程は昃つとめて籠こもりゐしかの両ふたり個ごの、夜に入りて後打うち連つれて入浴せるを伺ひ知りし貫一は、例の益ますす人目を避さくるならんよと念おもへり。

還きり来しばて多らく時酒など酌くみ交かはす様子なりしが、高声一つ立つるにもあらで、唯障子を照ともす燈しのみいと瞭さやかに、内の寂しさは露をも置きけんやうにて、さてはかの吹絶えぬ松風に、彼等は竟つひに醉あひを



成さざるならんと覺ゆばかりなりき。

為<sup>な</sup>す事もあらねば、貫一は疾<sup>と</sup>く臥<sup>ふしど</sup>内に入りけるが、僅<sup>わづか</sup>にむと

為れば直<sup>ちき</sup>に、寤<sup>さ</sup>めて、そのままに睡<sup>ねむり</sup>は失<sup>うす</sup>るとともに、様々の事思

ひゐたり。

夜の静なるを動かして、かの男<sup>なん</sup>女<sup>によ</sup>の細語<sup>ひそめき</sup>は洩<sup>も</sup>れ来<sup>き</sup>ぬ。甚<sup>はな</sup>だ

微<sup>すか</sup>なれば聞知るべくもあらねど、々<sup>び</sup>として絶えず枕に打響きて

は、なかなか大いなる声にも増して耳<sup>みみ</sup>煩<sup>わづら</sup>はしかり。

さなきだに寢<sup>いね</sup>難<sup>がた</sup>かりし貫一は、益す氣の澄み、心の沍<sup>さ</sup>え行く

に任せて、又徒<sup>いたづら</sup>にとやかくと、彼等の身上を推測<sup>み</sup>り推測<sup>のうへ</sup>り思<sup>おも</sup>ひめ

回<sup>ぐ</sup>らすの外はあらず。彼方<sup>あなた</sup>もその么微<sup>かすか</sup>なる声に語り語りて休<sup>や</sup>ま

ざるは、思<sup>たけ</sup>の丈<sup>たんや</sup>の短夜に余らんとするなるか。

たちま

乍ち有りて、ほとぼし逆れるやうにその声はつと高く揚れり。貫一は愕が

くぜん

然として枕をそばだ敬てつ。女は遽にはかに泣なき出せるなり。

その時男の声音は全く聞えずして、唯ひと独り女の縦ほしいままに泣音を洩なくねもら

すのみなる。寤めたる貫一は弥いやが上に寤めて、自ら故ゆゑを知らざる

胸とどろかを轟とどろせり。

しばし

少焉泣きたりし女の声は漸やうやく鎮りて、又湿しめり勝がちにも語り初そめし

が、一たび情じようの為に激せし声音は、自おのづから始よりは高く響けり。

されどなほその言ふところは聞知り難くて、男の声は却かへりて前さきよ

りも仄ほのかなり。

貫一は咳しかぶきも遣らで耳を澄せり。

あるひ

或は時に断ゆれども、又続つぎ、又続つぎて、彼等の物語は蚕かひこの糸

を吐きて倦まざらんやうに、限も知らず長く亘りぬ。げにこの積  
 る話を聞きも聞せもせんが為に、彼等はここに來つるにやあらん。  
 されども、日は明日も明後日も有るを、甚だ忙くも語るもの哉。  
 さばかり間遠なりし逢瀬なるか、言はでは裂けぬる胸の内か、か  
 く有らでは慊らぬ恋中か、など思ふに就けて、彼はさすがに我  
 身の今昔に感無き能はず、枕を引入れ、夜着引被ぎて、寐  
 返りたり。

何時罷みしとも覚えで、彼等の寐物語は漸く絶えぬ。

貫一も遂に短き夢を結びて、常よりは蚤かりけれど、目覚めし  
 ままに起出でし朝冷を、走り行きて推啓けつる湯殿の内に、人  
 は在らじと想ひし眼を驚して、かの男女は浴しゐたり。

貫一ははたと閉とぎして急ぎ返りつ。

## 第四章

両箇ふたりはやや熱かりしその日も垂籠たれこめて夕ゆふに抵いたりぬ。むづかしげに暮山ぼさんを繞めぐりし雲は、果して雨と成りて、冷々ひやひやと密下そぼふるほどに、宵の燈火ともしびも影更ふけて、壁に映うつろふ物の形皆寂く、愁なまじひに起きて在るべき夜頃よごろならず。さては貫一も枕まくらに就きたり。

ラムプを細めたる彼等の座敷も甚はなはだ静に、宿の者さへ寐急ねいそぎて後十一時は鳴りぬ。

凄すさまじき谷川の響に紛れつつ、小歇をやみもせざる雨の音の中に、かの病や

みつか  
 憊れたるやうの柱時計は、息も絶氣に半夜を告げわたる時、両  
 たりねやともしたちまあきらか  
 箇が閨の燈は乍ち明かに耀けるなり。

彼等は俱に起出でて火鉢の前に在り。  
 ぜん  
 「膳を持つて来ないか」

「ええ」

女は么微なる声して答へけれど、打菱れて、なかなか立ちも  
 や  
 遣らず。

「狭山さん、私は何だか貴方に言残した事が未だ有るやうな心持  
 がして……」

「吁、もうかう成つちやお互に何も言はないが可い。言へばやつ  
 ぱり未練が出る」

彼は熟<sup>じ</sup>と内向<sup>うつむ</sup>きて、目を閉ぢたり。

「貴方、その指環を私のと取替<sup>とりかへ</sup>事<sup>こと</sup>して下さいね」

「さうか」

おのおの

各その手に在るを抜きて、男は実印用のを女の指に、女はダイヤモンド入のを男の指に、  
さをはしりてもなほ離れかねつつ、物は

得言はであたり。

颯<sup>さ</sup>と鳴りて雨は一時繁<sup>ひとしきりげ</sup>く灑<sup>そそ</sup>ぎ来<sup>きた</sup>れり。

「ああ、大相降つて来た」

「貴方は不斷から雨が所好<sup>すき</sup>だったから、きつとそれで……暇<sup>いとま</sup>……

乞<sup>ごひ</sup>に降つて来たんですよ」

「好い折だ。あの雨を肴<sup>さかな</sup>に……お静、もう覚悟を為ろよ！」

「あ……あい。狭山さん、それぢや私も……覚……悟したわ」

「酒を持つて来な」

「あい」

お静も今は心を励して、宵の程詔へ置きし酒肴の床間に上げ  
 たるを持来て、両箇が中に膳を据れば、男は手早く爛して、その  
 間に各服を更むる忙しさは、忽ち衣の擦り、帯の鳴る音高く粹※  
 と乱れ合ひて、転た雨濃なる深夜を驚かせり。

「ええ、もう好かない！」

帯緊めながら女はその端を振りて身悶せるなり。

「どうしたのだ」

「なあにね、帯がこんなに結ばつて了つて」

「帯が結ばつた？」

「ああ！ あなた釈といて下さい、よう」

「何か吉いい事が有るのだ」

「私はもしも遣やり損そこなつて、耻はぢでも曝さらすやうな事が有つちやと、

それが苦勞に成つて耐たまらなかつたんだから、これでもう可いいわ」

「それは大丈夫だから安心するが可いい。けれど、もしもだ、お静、そんな事は無いとは念ふけれど、運悪く遅れたら、俺おれはきつと後から往くから——どんなにしても往くから、恨まずに待つてゐてくれ。よ、可……可いか」

つと俯ふしたるお静は、男の膝を咬かみて泣きぬ。

「その代り、偶ひよつとしてお前が後になるやうだつたら、俺は死んで



も……魂たましひはおまへの陰身かげみを離れないから、必ず心こころ変かはりはりりを……す、  
するなよ、お静」

「そんな事を言はないで、一処に……連れて……往つて……下さ  
いよ」

「一処に往くとも！」

「一処に！ 一処に往きますよ！」

「さあ、それぢやこ、この世の……別に一盃いっぱい飲むのだ。もう泣  
くな、お静」

「泣、泣かない」

「さあ、那裏あそこへ行つて飲まう」

男は先づ起ちて、女の手を把とれば、女はその手に縋すがりつつ、泣

く泣く火鉢の傍そばに座を移しても、なほ離はなれ難がたなに寄添ひゐたり。

「猪口ちよくでなしに、その湯吞ゆのみに為やう」

「さう。ぢや半分づつ」

熱爛あつがんの酒は烈々れつれつと薰くんじて、お静が顫ふるふ手元より狭山が顫ふ湯

呑に注がれぬ。

女の最も悲かりしは、げにこの刹那せつなの思なり。彼は人の為に酒

を佐たすくるに嫺ならひし手も、などや今宵の恋の命も、儚はかなき夢か、うたか

たの水 盃みづさのみづからに、酌取らんとは想の外の外なりしを、

唄うたにも似たる身の上哉かなと、漫そぞろに逼る胸の内、何に譬たとへん方かたもあら

ず。

男は爛の過ぎたるに口を着けかねて、少時しばし手にせるままに眺ながめ

るれば、よし今は憂くも苦くも、久く住慣れしこの世を去りて、  
 永く返らざらんとする身には、僅にわづかに一盃いっぱいの酒に対するも、又哀あ  
 別離いべつりく苦の感無き能はざるなり。

おも念へ、彼等の逢初めあひそし夕ゆふべ、互に意有りて銜ふくみしもこの酒ならず

や。更に兩個ふたりの影に伴ひて、人の情なさけの必ず濃こまやかなれば、必ず芳かうばしかり

しもこの酒ならずや。その恋中の樂たのしみを添へて、三歳みとせの憂うさを霽はらせし

もこの酒ならずや。彼はその酒を取りて、吉よき事積りし後の凶の

凶なる今夜の末期まつごに酬むくゆるの、可哀あはれに余り、可悲かなしきに過すぐるを觀じ

ては、口にこそ言はざりけれど、玉成す涙は点々と散りて零こぼれぬ。

「おまへの酌で飲むのも……今夜きりだ」

「狭山さん、私はこんなに苦勞を為て置きながら、到頭一日でも

……貴方と一処に成れずに、芸者風情で死んで了ふのが……悔い、  
私は！」

聞くも苦しと、男は一息に湯呑の半を呷りて、

「さあ、お静」

女は何気無く受けながら、思へば、別の盃かと、手に取るから  
に胸潰れて、

「狭山さん、私は今更お礼を言ふと云ふのも、異な者だけれど、  
貴方は長い月日の間、私のやうなこんな不束者の我儘者を、  
能くも愛相を尽かさずに、深切に、世話をして下さつた。

私は今まで口には出さなかつたけれど、心の内ぢや、狭山さん、  
嬉しいなんぞと謂ふのは通り越して、実に難有いと思つてゐまし

た。その御礼を為たいにも、知つてゐる通の阿母さんおつかが在るばかりに唯さう思ふばかりで、どうと云ふ事も出来ず、本ほん当とに可恥はづかしいほど行届かないだらけで、これぢや余あんまり済まないから、一日も早く所帯でも持つやうに成つて、さうしたら一度にこの恩返しを為ませうと、私は、そればかりを樂たのしみに、出来ない辛抱も為てゐただけけれど、もう、今と成つちや何もかも水……水……水……水の……泡。

つい心易こころやすだて立たから、浸しみ々じみお礼も言はずにゐたけれど、狭山さん、私の心は、さうだつたの。もうこれぎりで、貴方も……私も……土に成つて了へば、又とお目には掛れ、ないんだから、せめては、今改めて、狭山さん、私はお礼を申します」

男は身をも搾<sup>しぼ</sup>らるるばかりに慄<sup>こら</sup>へかねたる涙を出<sup>いだ</sup>せり。

「もうそ、そ、そんな事……言つて……くれるな！ 冥路<sup>よみぢ</sup>の障<sup>さはり</sup>だ。

両箇<sup>ふたり</sup>が一処に死なれりや、それで不足は無いとして、外の事なん

ぞは念はずに、お静、お互に喜んで死なうよ」

「私は喜んでゐますとも、嬉しいんですとも。嬉しくなくてどうしま  
せう。このお酒も、祝つて私は飲みます」

涙<sup>もろとも</sup>諸共飲干して、

「あなた、一つお酌して下さいな」

注<sup>つ</sup>げば又呷<sup>あふ</sup>りて、その余せるを男に差せば、受けて納めて、手

を把<sup>と</sup>りて、顔見合せて、抱緊<sup>だきし</sup>めて、惜めばいよいよ尽せぬ名残<sup>なごり</sup>を、

いかにせばやと思<sup>おもひまど</sup>惑<sup>まど</sup>へる互の心は、唯それなりに息も絶えよ

と祈る可かめり。

男は抱<sup>いだ</sup>ける女の耳のあたかも唇<sup>くちびる</sup>に触るる時、現<sup>うつ</sup>ともなく声誘はれて、

「お静、覚悟は可いか」

「可いわ、狭山さん」

「可<sup>い</sup>けりや……」

「不<sup>い</sup>如<sup>つ</sup>もう早く」

狭山は直<sup>ちき</sup>に枕の下なる袱紗<sup>ふくさづつみ</sup>包の紙<sup>かみ</sup>入<sup>いれ</sup>を取上げて、内<sup>うち</sup>より出<sup>いだ</sup>せる一<sup>いっ</sup>包<sup>ぽう</sup>の粉<sup>こな</sup>劑<sup>ざい</sup>こそ、正<sup>まさ</sup>に両<sup>ふた</sup>個<sup>たり</sup>が絶命<sup>やいば</sup>の刃<sup>か</sup>に易<sup>か</sup>ふる者なりけれ。女は二つの茶<sup>ちや</sup>碗<sup>わん</sup>を置並ぶれば、玉の如き真白の粉末は封<sup>ふう</sup>を披<sup>ひら</sup>きて、男の手よりその内に頒<sup>わか</sup>たれぬ。

「さあ、その酒を取つてくれ。お前には俺が酌をするから、俺のにはお前が」

「ああ可うござんす」

雨はこの時漸く霽はれて、軒の玉水絶々たえだえに、怪禽鳴過かいきん なきすぐる者  
両三声さんせいにして、跡松風の音颯々さつさつたり。

狭山はやがて銚子ちようしを取りて、一箇ひとつの茶碗に酒を澆そそげば、お静  
は目を閉ぢ、合掌して、聞えぬほどの忍音しのびねに、

「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」

代りて酌する彼の想は、吾手男わがての胸元むなもとに刺違さしちがふる銚きつさきを押当

つるにも似たる苦しさおのづに、自から洩出もれいづる声も打震うひて、

「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無……阿弥陀……南無阿弥……



…陀<sup>だ</sup>……仏<sup>ぶつ</sup>、南無<sup>なむ</sup>……」

と両個<sup>ふたり</sup>は心も消入らんとする時、俄<sup>にはか</sup>に屋鳴震動<sup>やなりしんどう</sup>して、百雷<sup>うづつ</sup>一処<sup>お</sup>に墮<sup>お</sup>ちたる響<sup>お</sup>に、男は顛<sup>たふ</sup>れ、女は叫<sup>お</sup>びて、前後不覚<sup>うづつ</sup>の夢<sup>うづつ</sup>か現<sup>うづつ</sup>の人影<sup>お</sup>は、乍<sup>たちま</sup>ち顛<sup>あらは</sup>れて燈火<sup>ともしび</sup>の前に在<sup>あ</sup>り。

「貴方<sup>あなた</sup>方は、怪<sup>あな</sup>からん事を！ 可<sup>あな</sup>けませんぞ」

男は漸<sup>かへ</sup>く我<sup>お</sup>に復<sup>おどろ</sup>りて、惧<sup>お</sup>ぢ愕<sup>おどろ</sup>ける目<sup>み</sup>を瞪<sup>み</sup>き、

「ああ！ 貴方<sup>あなた</sup>方は」

「お見<sup>み</sup>覚<sup>おぼえ</sup>ありませう、あれに居<sup>とまり</sup>る泊<sup>きやく</sup>客<sup>きやく</sup>です。無断<sup>むだん</sup>にお座敷

へ入<sup>はい</sup>つて参<sup>まゐ</sup>りまして、甚<sup>はな</sup>だ失礼<sup>しつれい</sup>ぢや御座<sup>ござ</sup>いますけれど、実<sup>じつ</sup>に危<sup>あや</sup>い

所<sup>ところ</sup>！ 貴<sup>あなた</sup>下方<sup>かた</sup>はどうなすつたのですか」

悄<sup>しょう</sup>然<sup>ぜん</sup>として面<sup>おもて</sup>を挙げ<sup>あ</sup>ぐる男、その陰<sup>かげ</sup>に半<sup>はん</sup>ば身<sup>み</sup>を潜<sup>ひそ</sup>めたる女、

貫一はふたり兩個の姿をみまはしつつ、彼の答を待てり。

「勿論もちろんこれには深い事情がお有んなさるのでせう。ですから込こみい入つたお話は承うけたまはらんでも宜よろしい、但何故ただなにゆゑに貴下方は活いきてをられんですか、それだけお聞せ下さい」

「……………」

「お二人が添そふに添れん、と云ふやうな事なのですか」

男は甚はなはだ微かすかうなづに頷うなづきつ。

「さやうですか。さうしてその添れんと云ふのは、何故なにゆゑに添れんです」

彼は又黙せり。

「その次第を伺つて、私わたくしの力で及ぶ事でありましたら、随分御相

談合手あひてにも成らうかと、実は考へるので。然し、お話の上で到底

私如きの力には及ばず、成程生きてをられんのは御ごもつとも尤だ、他

人の私わたしでさへ外に道は無い、と考へられるやうなそれが事情であ

りましたら、私は決してお止め申さん。ここに居て、立派に死な

れるのを拝見もすれば、介かいしやく錯むなしもして上げます。

私わたくしもこの間に入つた以上は、空く手を退くひ訳には行かんです。

貴下方を拯すくふ事が出来るか、出来んか、那一箇どつちかです。幸さいはひすくに拯すくふ事

が出来たら、私は命の親。又出来なかつたら、貴下方はこの世に

亡ない人。この世に亡ない人なら、如何いかなる秘密をここで打明けたと

ころが、一向差支無さしつかへなからうと私は思ふ。若もし命の親とすればで

す、猶更なおよさらその者に裏つつみ隠す事は無いぢやありませんか。私は何も

洒落<sup>しやれ</sup>に貴下方のお話を聴かうと云ふのぢやありません、可うござ  
いますか、顯然<sup>ちやん</sup>と聴くだけの覚悟を持つて聴くのです。さあ、お  
話し下さい！」

## 第五章

貫一は氣を嚴肅<sup>おごそか</sup>にして逼<sup>せま</sup>れるなり。さては男も是非無げに声  
出<sup>いだ</sup>すべき力も有らぬ口を開きて、

「はい御深切に……難<sup>ありがた</sup>有<sup>う</sup>う存じます……」

「さあ、お話し下さい」

「はい」

「今更お裏みなさる必要は無からう、と私は思ふ。いや、つい私は申上げんのでつたが、東京の麴こうじまち町の者で、間貫はざま一と申して、弁護士です。かう云ふ場合にお目に掛るのは、好々よくよくこれは深い御縁なのであらうと考へるのですから、決して貴下方ふための不為ふために成るやうには取計ひません。私も出来る事なら、人間ふたり兩個の命すくを拯ふのですから、どうにでもお助け申して、一生の手柄てがらに為て見たい。私はこれ程までに申すのです」

「はい、段々御深切に、難有う存じます」

「それぢや、お話し下さるか」

「はい、お聴に入れますで御座います」

「それは忝かたじけない」

彼は始めて心安う座を取れば、恐る惶る狭山は先づその姿を偷ぬすみみ見て、

「何からお話し申して宜いやら……」

「いや、その、何ですな、貴下方は添ふに添れんから死ぬと有おつし

仰やる——！ 何為添れんのですか」

「はい、実は私は、恥を申しませんければ解りませんが、主人の金を大分遣つかひ込みましたので御座います」

「はあ、御主人持もちですか」

「さやうで御座います。私は南伝馬町みなみてんまちようの幸菱こうびしと申します紙

問屋の支配人を致してをりまして、狭山元輔さやまもとすけと申します。又

これは新橋に勤を致してをります者で、柏屋かしわやの愛子と申します

る」

名宣<sup>なの</sup>られし女は、消えも遣<sup>や</sup>らでゐたりし人陰<sup>くろ</sup>の闇<sup>くら</sup>きより僅<sup>わづか</sup>に躡<sup>にじ</sup>り出<sup>で</sup>て、面伏<sup>おもふせ</sup>にも貫一<sup>くわんいち</sup>が前に会釈<sup>えいせき</sup>しつ。

「はあ、成程」

「然<sup>しか</sup>るところ、昨今<sup>けふ</sup>これに身請<sup>みうけ</sup>の客<sup>きやく</sup>が附<sup>つ</sup>きまして」

「ああ、身請<sup>みうけ</sup>の？ 成程」

「否<sup>いや</sup>でもその方<sup>かた</sup>へ参<sup>まゐ</sup>らんければ成<sup>な</sup>りませんやうな次第<sup>しだい</sup>。又私はその引負<sup>ひきおひ</sup>の爲<sup>ため</sup>に、主人<sup>しゅじん</sup>から告訴<sup>こつしゆ</sup>致<sup>いた</sup>されまして、活<sup>い</sup>きてをりますれば、その筋<sup>すぢ</sup>の手に掛<sup>か</sup>りますので、如何<sup>いか</sup>にとも致<sup>いた</sup>方<sup>かた</sup>が御座<sup>ござ</sup>いませんゆゑ、無分<sup>むぶん</sup>別<sup>べつ</sup>とは知りつつも、つい突迫<sup>つきつ</sup>めまして、面目次<sup>めいじ</sup>第<sup>だい</sup>も御座<sup>ござ</sup>いません」

彼等はその無分別を慙はぢたりとよりは、この死しにぞこな失うひし見苦しさを、天にも地にも曝さらしかねて、俯ふしも仰うぎも得うざる項すくを竦すくめ、尚なほも為なん方無なさの目を閉ぢたり。

「ははあ。さうするとここに金さへ有れば、どうにか成るのでせう！ 貴方の費つかひ消ひだつて、その金額を弁償して、宜よろく御主人に詫わびたら、無論内済に成る事です。婦人の方は、先方で請出ひきすと云ふのなら、此方こつちでも請出ひきすまでの事。さうして、貴方の引ひき負おは若干いくばくばかりの額たかに成るのですか」

「三千円ほど」

「三千円。それから身請の金は？」

狭山は女を顧みて、二言ふたこと三言みこと小声かたに語合あひたりしが、



「何やかやで八百円ぐらゐは要いりますので」

「三千八百円、それだけ有つたら、貴下方は死なずに済むのですな」

打算し来きたれば、真に彼等の命こそ、一人前一千九百円に過ぎざるなれ。

「それぢや死ぬのはつまらんですよ！ 三千や四千の金なら、随分そこらに滾ころがつてゐやうと私は思ふ。就いては何とか御心配して上げたいと考へるのですが、先づとにかく貴下方の身の上を一番ひとつ悉くはくお話し下さらんか」

かかる際きはには如何ばかり嬉こき人の言ことばならんよ。彼はその偽いつはと真まこととを思ふに違いとまあらずして、遣る方も無うきみき憂身こひねがの憂うきを、冀こひねがくば跡

も留めず語りて竭つくさんと、弱りし心は雨の柳の、漸く風に揺れた  
 いさみな  
 る勇を作して、

「はい、ついに一面識も御座いませぬ私共、殊ことに痴情の果に箇かよう様  
 な不始末ぶしまつを為出しだしました、何なにともはや申しやうも無い爛死蛇やくざものに、  
 段々と御深切のお心遣こころづかひ、却つて恥入りまして、実に面目次第  
 も御座いませぬ。

折角の御言おことばで御座いますから、思召おぼしめしに甘えまして、一通りお  
 話致しますで御座いますが、何から何まで皆恥で、人様の前では  
 ほとほと申上げ兼ねますので御座います。

実は、只今申上げました三千円の費つかひ消こみと申しますのは、究つ  
 竟遊蕩まりあそびを致しました為に、店の金に手を着けましたところ、始の

内はどうなり融通も利ききましたので、それが病付やみつに成つて、段々と無理を致しまして、長い間にうかうか々穴を開けましたのが、積たつて大分だいぶんに成りましたので御座います。

然しかるところ、もう八方塞ふさがつて遣やり繰くりは付きませず、いよいよ主人には知れますので、苦くる紛しまれに相場に手を出したのが怪我けがの元で、ちよろりと取られますと、さあそれだけ穴が大きく成りましたものですから、愈いよいよ為方御座いけません、今度はどうか、今度はどうかで、もうさう成つては私も死物しにものぐるひ狂くるで、無理の中から無理を致して、続くだけ遣りましたところが、到頭逐倒おひたふされて了ひまして、三千円と申上げました費つかひ消こも、半分以上はそれに注込みましたので御座います。

然し、これだけの事で御座いますれば、主人も従来これまでの勤勞つとめに免じて、又どうにも勘弁は致してくれましたので御座います。現にこの一条が発覺致しまして、主人の前に呼付けられました節も、この度の事は格別を以つて赦ゆるし難いところも赦して遣ると、箇様に申してはくれましたので」

「成程」

「と申すのには、少し又仔細しさいが御座いますので。それは、主人の家内の姪めひに当ります者が、内に引取つて御座いまして、これを私めあはに妻せやうと云ふ意衷つもりで、前々ぜんぜんからその話は有りましたので御座いますが、どうも私は気が向きませんもので、何と就かずに段々いひのば言延して御座いましたのを、決然いよいよどうかと云ふ手詰てづめの談はなしに

相成あひなりましたので。究竟つまり、費消つかひこみは赦して遣るから、その者を  
家内に持て、と箇様に主人は申すので御座います」

「大きに」

「其処そこには又千いろいろ百事情が御座いまして、私の身に致しますと、  
その縁談は実ことわに辞るにも辞りかねる義理に成つてをりますので、  
それを不承知などと吾儘わがままを申しては、なかなか済む訳の者で  
はないので御座います」

「ああ、さうなのですか」

「そこへ持つて参つて、此度こんどの不都合で御座います、それさへ大  
目に見てくれやうと云ふので御座いますから、全まるで仇かたきをば恩で返  
してくれますやうな、申分まをしぶんの無い主人の所計はからひ。それを乖もどき

ましては、私は罰ばちが中あたりますので御座います。さうとは存じながら、やつぱり私の手前勝手で、如何いかにともその氣に成れませんので、已やむを得ず縁談の事は拒絶ことわりを申しましたので御座います」

「うむ、成程」

「それが為に主人は非常な立腹で、さう吾儘わがままを言ふのなら、費つかひこみを償まへ、それが出来ずば告訴する。さうしては貴様の体に一生の疵きずが附く事だから、思おもひかへ反かへして主人の指図さしずに従へと、中に人まで入れて、未だ未だ申してくれましたのを、何処どこまでも私は剛情を張通して了つたので御座います」

「吁あゝ！ それは貴方が悪いな」

「はい、もう私の善いところは一つでも有るのぢや御座いません。

その事に就きまして、主人に書置かき置きも致しましたやうな次第で、既に覺悟を極めきはました際きはまで、心懸こころがかりと申すのは、唯そればかりなので御座いました。

で又その最中にこれの方の身請騒みうけさわぎが起りましたので」

「成程！」

「これの母親と申すのは養母で御座いまして、私も毎々話を聞いてをりますが、随分それは非道な強慾な者で御座います。まあ悉くはしく申上げれば、長いお話も御座いますが、これも娘と申すのは名のみで、年季で置いた抱かかへも同様の取扱とりあつかひを致して、為て遣る事は為かないのが徳、稼かせげるだけ稼がせないのは損だと云つたやうなりようけん了簡で、長い間無理な勤を為させまして、散々に搾しぼり取つたの

で御座います。

で、私の有る事も知つてはをりましたが、近頃私が追々廻らなく成つて参つたところから、さあやかまし眺く言出しまして、毎日のやうに切れろ切れろで責め抜いてをります際に、今の身請の客が附いたので御座います。丁度去年の正月頃から来出した客で、下谷したやに富山銀行といふのが御座います、あれの取締役で」

「え!! 何……何……何ですか!」

「御承知で御座いますか、あの富山唯ただ継と云ふ……」

「富山? 唯継!」

その面色、その声音こわね! 彼は言下ごんかに鼓怒こどして、その名に躍り被をどからんとする勢いきほひを示せば、愛子は駭おどろき、狭山は懼おそれて、何事とも知



らず狼狽<sup>うろた</sup>へたり。貫一は轟く胸を推鎮<sup>おししづ</sup>めても、なほ眼色<sup>まなざし</sup>の燃ゆるが如きを、両個<sup>ふたり</sup>が顔に忙<sup>せはし</sup>く注ぎて、

「その富山唯継が身請の客ですか」

「はい、さやうで御座いますが、貴方は御存じでゐらつしやいますので？」

「知つてゐます！ 好く……知つてゐます！」

狭山の打惑<sup>うちまど</sup>ふ傍<sup>そば</sup>に、女は密<sup>ひそか</sup>に驚く声を放てり。

「那奴<sup>あいづ</sup>が身請の？」

問はるる愛子は、会釈して、

「はい、さやうなんで御座います」

「で、貴方は彼に退<sup>ひ</sup>かされるのを嫌<sup>きら</sup>つたのですな」

「はい」

「さうすると、去年の始から貴方はあれの世話に成つてをつたのですか」

「私はある人の世話なんぞには成りは致しません！」

「はあ？ さうですか。世話に成つてゐたのぢやないのですか」

「いいえ、貴方。唯お座敷で始終呼れますばかりで」

「ああ、さうですか！ それぢや旦那だんなに取つてをつたと云ふ訳ぢやないのですか」

女は聞くも穢けがらはしと、さすが謂ふには謂れぬ尻目しりめづかひ遣して、

「私には、さう云ふ事が出来ませんので、今までついにお客まるつきりなぞを取つた事は、全然無いんで御座います」

「ああ、さうですか！　うむ、成程……成程な……解りました、  
 好く解りました」

狭山は俯うつむきゐたり。

「それではかう云ふのですな、貴方は勤つとめを為てをつても、外の客  
 には出ずに、この人一個ひとりを守つて——さうですね」

「さやうです」

「さうして、余所よその身請ことわを辞つて——富山唯継を振つたのだ！  
 さうですな」

「はい」

倏たちまち忽ひとみに瞳こころを凝せる貫一は、愛子の面おもてを熟視して止やまざりしが、  
 やがてその眼まなこの中に浮びて、輝くと見れば霑うるほひて出づるものあり。

「嗚呼……感心しました！ 実に立派な者です！ 貴方は命を捨

てても……この人と……添ひたいのですか！」

何の故とも分かず彼の男泣に泣くを見て、ふたりむなしあき 兩個は空く呆るるのみ。

貫一が涙なるか。彼はこの色を売るのいつひつづ一匹婦も、知らず誰かたれ爾なんぢに教へて、死に抵いたるまで尚なほこの頼り難がたき義に頼り、守り難かたき節を守りて、終つひに奪はれざる者あるに泣けるなり。

其の泣く所以ゆゑんなるか。彼はこの人の世に、さばかり清く新くも、たふと崇く優くも、高く麗くも、うるはし又は、完くも大いなる者在るを信ぜざらんと為るばかりに、ひとたびまのあたぬ一度は目前睹るを得て、その倒懸の苦をゆる寛うせん、と心やくが如く望みたりしを、今却りて浮萍うきくさの底に

沈める泥中の光に値<sup>あ</sup>へる卒爾<sup>そつじ</sup>の歡<sup>よろこび</sup>極<sup>きは</sup>まれればなり。

「勿論さう無けりや成らん事！　それが女の道と謂ふもので、さう有るべきです、さう有るべき事です。今日<sup>こんにち</sup>のこの輕薄<sup>きはま</sup>極つた世の中に、とてもそんな心掛のある人間は、私は決して在るものではないと念つてをつた。で、もし在つたらば、どのくらゐ嬉かろうと、さう念つてをつたのです。私は実に嬉しい！　今夜のやうに感じた事は有りません。私はこの通泣いてゐる——涙が出るほど嬉しいのです。私は人事<sup>ひとごと</sup>とは思はん、人事とは思はん訳が有るので、別して深く感じたのです」

かく言ひて、貫一は忙<sup>いそが</sup>々<sup>はし</sup>々<sup>は</sup>鼻<sup>は</sup>涕<sup>なう</sup>打<sup>ち</sup>みつ。

「ふむ、それで富山はどうしました」

「来る度<sup>たび</sup>に何のかのと申しますのを、体<sup>てい</sup>好<sup>よ</sup>く辞<sup>こと</sup>るんで御座います

けれど、もう<sup>うるさ</sup>く来<sup>き</sup>ちや、一<sup>ひとつきり</sup>頻<sup>ひん</sup>なんぞは毎日<sup>まいにち</sup>揚<sup>あ</sup>詰<sup>づめ</sup>に為<sup>な</sup>れる

んで、私はふつつつ不<sup>い</sup>好<sup>や</sup>なんで御座います。それに、あの人があ

れで大の男自慢で、さうして独<sup>ひとり</sup>で利巧<sup>りこう</sup>ぶつて、可<sup>おつそろし</sup>恐<sup>おそ</sup>い意<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>がりで、

二<sup>ふた</sup>言<sup>こと</sup>目<sup>め</sup>には金々と、金の事さへ言<sup>い</sup>へば人<sup>ひと</sup>は難<sup>あ</sup>有<sup>り</sup>が<sup>た</sup>るものかと

思<sup>おも</sup>つて、俺<sup>おれ</sup>がかうと思<sup>おも</sup>や千円出<sup>で</sup>すとか、ここへ一万円積<sup>た</sup>んだらど

うするとか、始終そんな有<sup>あ</sup>余<sup>り</sup>るやうな事ばかり言<sup>い</sup>ふのが癖<sup>くせ</sup>だもん

ですから、衆<sup>みんな</sup>が『御威光』と云<sup>い</sup>ふ仇<sup>あだ</sup>名<sup>な</sup>を附<sup>つ</sup>けて了<sup>しま</sup>つて、何<sup>なん</sup>処<sup>どころ</sup>へ行<sup>い</sup>

つたつて氣障<sup>きざ</sup>がられてゐる事は、そりや太<sup>ひ</sup>甚<sup>ど</sup>いんで御座います」

「ああ、さうですか」

「そんな風なんですから、体好く辞つたくらゐぢや、なかなか感じは為ませんので、可いけもしない事を不相あひかはらず變執しつくと煩どく、何だか  
 だ言つてをりましたけれど、這こつち箇も剛情で思ふやうに行かないも  
 んですから、了局しまひには手を易かへて、内のお袋へ親談ぢかだんをして、内  
 々話は出来たんで御座んせう。どうもそんなやうな様子で、お袋  
 は全で氣違のやうに成つて、さあ、私を責めて責めて、もう箸はしの  
 上あげおろし下には言れますし、狭山と切れろ切れろの聒やかましく成りました  
 のも、それからなので、私は辛つらさは辛つらし、熟つくづくこんな家業は為る  
 者ぢやないと、何なんにも解らずに面白可おもしろをかし笑く暮してゐた夢も全く覺  
 めて、考へれば考へるほど、自分の身が余あんなりつまらなくて、もう  
 どうしたら可ふさいんだらう、と鬱ふさぎ切つてゐる矢先へ、今度は身請

と来たんで御座います」

「うむ、身請——けれども、貴方を別にどう為たと云ふ事も無く  
て、<sup>すぐ</sup>直に身請と云ふのですか」

「さうなので」

「変な奴な！ さう云ふ身請の為<sup>しかた</sup>方が、然し、有りますか」

「まあ御座いけませんです」

「さうでせう。それで、身請をして他<sup>ほか</sup>へ<sup>かこ</sup>囲つて置かうとでも云ふ  
のですか」

「はい、これまで色々な事を申しても、私が聴きませんもんで、  
未始終気楽に暮せるやうにして遣つたら、言分は無からうと云つ  
たやうな訳で、まあ身請と出て来たんで。何ですか、今の妻君は、



あれはどうだから、かう為るとか、ああ為るとか、好いやうな嬉<sup>うれ</sup>がらせを言つちやをりましたけれど」

眉<sup>まゆ</sup>を昂<sup>あ</sup>げたる貫一、なぞ彼の心の裏<sup>うち</sup>に震ふものあらざらんや。

「妻君に就いてどう云ふ話が有るのですか」

「何んですか知りませんが、あの人の言ふんでは、その妻君は、始終寐てゐるも同様の病人で、小供は無し、用には立たず、有つても無いも同然だから、その内に隠居でもさせて、私を内へ入れてやるからと、まあさう云つたやうな口<sup>くちぶり</sup>氣<sup>き</sup>なんで御座います」

「さうして、それは事実なのですか、妻君を隠居させるなどと云ふのは」

「随分ちやらつぽを言ふ人なんですから、なかなか信<sup>あて</sup>にはなり

は致しませんが、妻君の病身の事や、そんなこんなで余り内の面白くないのは、どうも全くさうらしいんで御座んす」

「ははあ」

彼は遽に何をや打案ずらん、夢むる如き目を放ちて、

「折合が悪いですか！……病身ですか！……隠居をさせるのですか！……ああ……さうですか！」

宮の悔、宮の恨、宮の歎、宮の悲、宮の苦、宮の愁、宮が心の疾、宮が身の不幸、噫、竟にこれ宮が一生の惨禍！彼の思は今將たこの憐むに堪へたる宮が薄命の影を追ひて移るなりき。

貫一はかの生ける宮よりも、この死なんと為る女の幾許幸にかつ愚ならざるかを思ひて、又躬の、先には己の愛する者を拯

ふ能はずして、今却<sup>かへ</sup>りて得知らぬ他人に恵みて余有る身の、幾<sup>いかば</sup>  
 許<sup>かりさち</sup>幸無くも又愚なるかを思ひて、謂ふばかり無く悲めるなり。

時に愛子は話を継ぎぬ。貫一は再び耳を傾けつ。

「そんな捫<sup>もんちやく</sup>懾<sup>しん</sup>最中に、狭山さんの方が騷擾<sup>さわぎ</sup>に成りましたんで、

私の事はまあどうでも、ここに三千円と云ふお金が無い日には、

訴へられて懲役に遣られると云ふんですから、私は吃驚<sup>びつくら</sup>して

つて、唯もう途方に昧<sup>く</sup>れて、これは一処に死ぬより外は無いと、

その時直<sup>すぐ</sup>にさう念つたんで御座います。けれども、又考へて、背

に腹は替へられないから、これは不如<sup>いつそ</sup>富山に訳を話して、それだ

けのお金をどうにでも借りるやうに為やうかとも思つて見まして、

狭山さんに話しましたところ、俺の身はどうでも、お前の了簡ぢ

や、富山の処へ行くのが可いか、死ぬのが可いか、とかう申すので御座いませう」

「うむ、大きに」

「私はあるな奴に自由に為れるのはさて置いて、これまでの縁を切るくらゐなら死んだ方が愈ましだと、初中終言つてをりますんですから、あんな奴に身を委まかせるの、不好いやは知れてゐます」

「うむ、さうとも」

「さうなんですけれど金ゆゑで両個ふたりが今死ぬのも余あんまり悔いから、三千円きつと出すか、出さないか、それは分りませんけれど、もし出したらば出さして、なあに私は那裏あつちへ行つたつて、直ちきに逃にげて来さへすりや、切れると云ふんぢやなし、少すこしの間不まい好やな夢を見

たと思へば、それでも死ぬよりは愈ましだらう、と私はさう申しますと、狭山さんは、それは詐取かたりだ……」

「それは詐取かたりだ！ さうとも」

あだかも我名の出でしままに、男はこれより替りて陳のべぬ。

「詐取かたりで御座いますとも！ 情婦をんなを種に詐取を致すよりは、費つかひ

消こみの方が罪は匱はるかに軽う御座います。そんな悪事を働いてまでも

生きてゐやうとは、私わたくしは決して思ひは致しません。又これに致し

まして、あれまで振り通した客に、今と成つて金ゆゑ体を委まかせ

るとは、如何いかなる事にも、余あんまり意氣地が無さ過ぎて、それぢや人

間の皮を被かぶつてゐる効かひが御座りませんです。私は金に窮つまつて心中

なんぞを為た、と人わらわに嗤わられましても、情婦をんなの体売つたお陰で、

やうやう那奴等あいつは助つてゐるのだ、と一生涯言れますのは不好いやで御座います。そんな了簡が出ます程なら、両個ふたりの命ぐらゐ助ける方は外に幾多いくらも御座いますので。

ここに生きてゐやうと云ふには、どうでもこの上の悪事を為なければ成りませんので、とても死ぬより外は無い！ 私は死ぬと覚悟を為したが、お前の了簡はどうか、と実は私が申しましたので「成程。そこで貴方が？」

「私は今更富山なんぞにどうしやうと申したのも、究竟つまり私ゆゑにそんな訳に成つた狭山さんが、どうにでも助けたいばかりなんで御座いますから、その人が死ぬと言ふのに、私一箇ひとり残つてゐたつて、為様が有りは致しません。貴方が死ぬなら、私も死ぬ——そ

れぢや一処にと約束を致して、ここへ参つたんで御座います」

「いや、善く解りました！」

貫一は宛然さながら我が宮の情急じようきゆうに、誠まこと壯さかんに、凜りんたるその一

念ことばの言を、かの当時に聴くらん想して、独ひとり自ら胸中の躍々とし

て痛快に堪たへざる者あるなり。

正にこれ、垠はてしも知らぬ失恋の沙漠さばくは、濛もう々たる眼前うるはしに、麗うるはき

一望のミレエジは清絶の光を放ちて、甚はなはだ饒ゆたかに、甚あきらだ明かに浮び

たりと謂はざらん哉や。

彼は幾ほとんどこの女の宮ならざるをも忘れて、その七年の憂憤を、

今夜の今にして始しばらくて少頃はじよも破除するの間いとまを得つ。信に得難まことかりし

この間いとまこそ、彼が宮を失ひし以来、唯ただこれに易かへて望みに望みた

りし者ならずと為<sup>せ</sup>んや。

嗚呼麗<sup>ああるはし</sup>きミレエジ！

貫一が久<sup>きゆうかつ</sup>渴<sup>かつ</sup>の心は激<sup>うごか</sup>く動<sup>うご</sup>されぬ。彼は声さへやや震<sup>ふる</sup>ひて、

「さう申しては失礼か知らんが、貴方の商売柄<sup>ひとり</sup>で、一箇<sup>ひと</sup>の男を熟<sup>じつ</sup>と守つて、さうしてその人の落目に成つたのも見棄<sup>す</sup>てず、一方に

は、身請の客を振つてからに、後<sup>これから</sup>来<sup>き</sup>花<sup>はな</sup>の咲<sup>さ</sup>かうといふ体を、男

の為には少しも惜<sup>おし</sup>まずに死なうとは、実に天<sup>あつぱれ</sup>晴<sup>は</sup>なもの！ 余り

見事な貴方のその心掛に感じ入つて、私は……涙<sup>なみだ</sup>が……出<sup>で</sup>ました。

貴方は、どうか生涯その心掛を忘れず<sup>すなは</sup>にゐて下さい！ その心

掛は、貴方の宝ですよ。又狭山さんの宝、則<sup>すなは</sup>ち貴下方夫婦の宝な

のです！



今後とも、貴方は狭山さんの為には何日でも死んで下さい。何日でも死ぬと云ふ覚悟は、始終きつと持つてゐて下さい。可う御座いますか。

千万人の中から唯一人見立てて、この人はと念つた以上は、勿論その人の為には命を捨てるくらゐの了簡が無けりや成らんのです。その覚悟が無いくらゐなら、始から念はん方が可いので、一旦念つたら骨が舍利しやりに成らうとも、決して志を変へんと云ふのでなければ、色でも、恋でも、何でもありません！ で、若し好いた、惚れたと云ふのは上辺ばかりで、その実は移氣な、水臭い者とも知らず、這箇こつちは一心に成つて思窮おもひつめてゐる者を、いつか寝返がへりを打れて、突放されるやうな目に遭つたと為たら、その棄て

られた者の心の中は、どんなだと思ひますか」

彼の声音こわねは益す震へり。

「さう云ふのが有ります！ 私は世間にはさう云ふの方が多いと考へる。そんな徒爾いたづらな色恋は、為た者の不仕合ふしあはせ、棄てた者も、棄てられた者も、互に好い事は無いのです。私は現にさう云ふを睹みてゐる！ 睹てゐるから今貴下方がかうして一処に死ぬまでも離れまいと云ふまでに思合つた、その満足はどれ程で、又そのお互の仕合は、実に謂ふに謂はれん程の者であらう、と私は思ふ。それに就けても、貴方のその美しい心掛、立派な心掛、どうかその宝は一生肌身はだみに附けて、どんな事が有らうとも、決して失はんやうに為て下さい！——可う御座いますか。さうして、貴下方は

お二人とも末長く、です、毎いづも今夜のやうなこの心を持つて、睦むつまじく暮して下さい、私はそれが見たいのです！

今は死ぬところでない、死ぬには及びません、三千円や四千円の事なら、私がどうしても為て上げます」

聞き訖きはりし兩ふたり個が胸の中は、諸もろとも共に潮うしほの如きものに襲はれぬ。

未まだ服さざりし毒にはかの俄に變じて、この薬と成れる不思議は、喜

ぶとよりは愕おどろかれ、愕くとよりは打うちまど惑はれ、惑ふとよりは怪あやしま

れて、鬼か、神か、人ならば、如何いかなる人かと、彼等は覚えず貫

一おもての面を見据ゑて、更にその目を窃ひそかに合せつ。

四あたり辺も震ふばかりに八やこゑ声とりの鶏は高く唱うたへり。

夜すがら兩ふたり個の運星蔽おほひし常闇とこやみの雲も晴れんとすらん、隱ほのぼ

約のと隙洩すきもあけぼのる曙の影は、玉の緒を長く座に入りて、光薄ともしびるる燈火  
もとの下に並べるままの茶碗ひとつの一箇に、小ちひさき蛾が有りて、落ちて浮べり。

# 新続金色夜叉

## 第一章

生れてより 神かみほとけ 仏を頼み 候さふらふこと 事としては一度も無御座候ござなくさふら へ  
 ども、此度このたびばかりはつくづく一心に祈念致し、 吾わがいのち 命を締め候さ へ  
 代ふらふかはり に、必ず此文は御目おんめに触れ候やうにと、それをば力に病

中ながら筆取りまゐらせ候。さいはひ幸に此の一念通じ候て、ともかくも

御披せ被下候はば、此身は直ぐ相果て候とも、つゆ憾にうらみ

は不存申候。元より御憎悪強き私には候へども、何な

卒是は前非を悔いて自害いたし候一箇の愍なる女の、御前様おんまへさま

を見懸けての遺言とも思召し、せめて一通り御判読被ごはんどくくださ

下候はば、未来までの御情と、何より嬉う嬉う存上げぞんじあ

まゐらせ候。

さて扱とや、先頃おんいきわかれに久々とも何とも、御生別あさゆふあきらとのみ朝夕に諦

め居り候御顔おんかほを拝し、飛立つばかりの御懷おんなつかしさやら、言ふ

に謂れぬ悲しさやらに、先立つものは涙にて、十年越し思ひに思

ひまゐらせ候事何一つも口には出ず、あれまでには様々の覚悟も

致し、また心こころぐるし 苦おんめき御目もじの恥をも忍び、女の身にてはやう

やうの思にて参さふらふじ候 効さふらふも無く、誠に一生の無念に存じまゐら

せ候。唯其折ただそのをりの形見には、涙ひまの隙に拝しまゐらせ候 御姿おんすがたの

み、今に目に附あけくれき候て旦暮忘れやらず、あらぬ人の顔までも御お

んまへさま

前様のやうに見え候て、此頃は心も空に泣暮し居りまゐらせ候。

ひさしおんめ

久う御目もじ致さず候 中さふらふうちに、別の人のやうに総すべて御変おんかはり

被なされ成候も、私わたくしには何とやら悲く、又殊ことに御顔やつれの羸、御血色の悪さ

ひとかた

も一方ならず被あらせられさふらふ為居候は、如何いかなる御疾おんわづらひに候や、御見

みあ

上げ申すも心細く存ぜられ候へば、折角御養生被あそばされ遊、何は措お

おんいと

きても御身は大切に御厭なされさふらふひ被成候やう、くれぐれも念あげじ上

候。それのみ心に懸さふらふあまりり候 余、悲き夢などをも見続け候へば、

ひとしほ おんあん  
一入御案じ申上まゐらせ候。

私事恥を恥とも思はぬ者との御さげすみかへりみを顧ず、先頃推して御お

許もとまで参し候胸の内は、なかなか御目もじの上の辞ことばにも尽し難がた

くと存候へば、まして廻らぬ筆には故わざと何も記し申さず候ま

ま、何卒々々宜く御汲分被下度候。さやうに候へば、其そ

節のせつの御腹立も、罪ある身には元より覚悟の前とは申しながら、

余あまりとや本意無き御別おんわかれに、いとど思は愈り候て、歸りて後は頭つ

痛み、胸裂るやうにて、夜の目も合はず、明る日よりは一

層心地悪く相成、物を見れば唯ただなみだ涙こぼれ、何事とも無きに胸む

塞ねふさがり、ふとすれば思迫おもひつめたる氣に相成候て、夜昼と無く劇はげし

く悩み候ほどに、四日目には最早起き居り候事も大儀に相成、午ひ



るすぎ

過より<sup>とこ</sup>辱に就き候まゝ、

今日まで

ぶらぶら いたしきふらふ  
々 致 候て、なつかし  
唯々懐

き

おんかた

御方の事のみ思

おもひつづ きふらふ

続け候ては、

みづからの<sup>はかな</sup>儂き儂き身の上

を

なげ

を慨き、胸は愈よ痛み、

目は見苦く腫起り候て、

みぐるし はれあが

今日は昨日<sup>きのふ</sup>

より瘦

やせおとろ

衰へ 申

まをしきふらふ  
候。

かやうに思

おもひつ

さふらふき

氣にも相成

あひなりきふらふうへ  
候 上に、

日毎に闇の

やみ

奥に引入られ候やうに段々心弱り候へば、

うたがひ

疑も無く信心の

まこと  
誠

あらは

顕れ候て、

此の辱に就き候が元にて、

とこ

はや永からぬ吾身とも存<sup>ぞ</sup>

んじきふらふ

候

まゝ、何卒

なにとぞ

これまでの思出には、たとひ命ある内こそ如<sup>い</sup>

何やうの御

おんうらみ

恨は受け候とも、今はの際には

きは

おんまへさま

おんひざ  
御膝

の上にて心安く息引取り

いきひきと

た

度くと存候へども、それは慚<sup>かな</sup>はぬ罪深

き身に候上は、もはや再び

なつかし

懐き懐き御顔も拝し難く、猶又前非の

御ゆるしも無くて、此儘相果て候事かと、諦め候より外無く存このまま

じながら、とてもとても諦めかね候苦しさの程は、此心の外このころ

に知るものも、喩ふるものも無御座候。是のみは御憎悪の中にたと

も少は不慙と思召被下度、かやうに認め居り候内にも、涙すこし ふびん おぼしめさだされたく

こぼれ候て致方無く、覚えず麁相いたし候て、かやうに紙を汚いたしかたな

し申候。御容し被下度候。おんゆる くだされたくさふらふ

さ候へば私事如何に自ら作りし罪の報とは申ながら、かくわたくしこといか

まで散々の責苦を受け、かくまで十分に懺悔致し、此上は唯死せめく

ぬるばかりの身の可哀を、つゆほども御前様には通じ候はで、こあはれ

れぎり空く相成候が、余に口惜く存候故、一生に一度のむなし

神仏にも縋り候て、此文には私一念を卷込め、御許に差出かみほとけ すが

おんもと さしいだ

しまゐらせ候。

返す返すも悔くやしき熱海の御おんわかれ別の後の思、又いつぞや田鶴たずみ見子

爵の邸内にて図ぐらぬ御見ごけんいたしきふらふこのかた致候而そのちとちゆ来の胸の内、其後途

中うにて御変おんかはり被成候荒尾なされさふらふあらをさま様に御目に懸り、しみじみ御おんめ

物ものがたりいたしきふらふこと語致候事せんだつてじゆうくどなど、先達而中冗さしあげまをしうも冗さしあげまをしうも差上

申さふらふ候。毎度の文にて細こまかに申上候へども、一通の御おんひらか披おんひらかせも

無これなき之やうに仰せられ候へば、何事も御存ごぞんじな無きかと、誠に御おんう

恨らめしう存上ぞんじあげさふらふ候。百度千度繰返ももたびちたびくりかへし候ても、是非に御耳をりきふらふに

入れまゐらせ度たくぞんじさふら存候へども、今此の切なく思乱れ居候をりきふらふ

折をりから、又仮初かりそめにも此上に味気あぢきな無き昔を偲たへがたび候事は堪難く

候故、ここには今の今心に浮うび候ままを書続けまゐらせ候。

なにとぞよそ

何卒余所ながらも承はり度存上候は、

長々御信も無

く居らせられ候御前様の是迄如何に御過し被遊候や、

さぞかし暴き憂世の波に一方ならぬ御艱難を遊し候事と、思

ふも可恐きやうに存上候を、

ようもようも御めでたう御

障無う居らせられ、悲き中にも私の喜は一つに御座候。

おんまへさま

御前様の数々御苦勞被遊候間に、私とても始終人知

らぬ憂思を重ね候て、此世には苦みに生れ参り候やうに、唯

だはかな

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

夢

此の苦艱くげんを脱のがれ候さふらふことかな 事愜ことかなはぬ身の悲しさは、如何いたしに致候さふらよろしはば宜  
 きやら、御推量被下くだされたくさふらふ度候さふらふ。申すも異な事に候へども、抑そもそも  
 始わたくしより我心わたくしには何とも思はぬ唯繼ただつぐに候へば、夫婦の愛情あだと申候  
 ものは、十年が間に唯の一度も起り申さず、却かへつて憎あだき仇あだのやう  
 なる思も致し、其傍そのそばに居り候も口惜くちをしく、倩つくづく疎うとみ果て候へば、  
 三四年前ぜんよりは別居も同じ有様に暮し居候始末にて、私事一旦の  
 身の流けがれやうやも漸きよく今は浄く相成ますます、益堅く心の操みさをを守り居りまゐらせ候。  
 先頃荒尾様より御おんしかり譴おんしかりも受け、さやうな心得は、始には御前様  
 に不実の上、今又唯繼に不貞なりと仰せられ候へども、其の始の  
 不実を唯今思知り候ほどの愚おろかなる私が、何とて後の不貞やら何や  
 ら弁わきまへ申すべきや。愚なる者なればこそ人にも勾かどはか引かどはかされ候て、

歸りたき空さへ見えぬ海山の果に泣倒れ居り候を、誰たれひとり一箇あはれも慙

みて救はんとは思召しくだされさふら被下候はずや。御前様にも其の愚なる

者を何とも思召しおぼしめ被下候はずや。愚なる者の致せし過も、あやまち

並々の人の過も、罪は同きものに御座候や、重きものに御座候や。

愚なる者の癖に人がましき事申上候やうにて、誠に御おんはづかし恥う

存ぞんじさふら候へども、何とも何とも心得難く存上候は、御おんま

前様へさま唯今ただいまの御身分に御座候。天地は倒に相成候とも、御前おんま

様へさまに限りてはと、今いまなほ猶私は疑ひ居り候ほど驚入まゐらせ候。

世に生業なりはひも数多く候に、優き優き御心根にもふさはしからぬ然さ

やうの道に御入りおんい被成候なされさふらふまでに、世間は鬼々おにおにしく御前様おんまへさま

を苦め申候か。田鶴見様方にて御姿おんすがたを拝し候さふらふのはじめ後始

て御おんうはさうけたま 承うけたまはり、私は幾日いくかも幾日も泣暮し申候。これには定

て深き仔細しさいも御座候はんと存候へども、玉と成り、瓦かはらと成るも人

の一生に候へば、何卒昔の御身に御立返りなにとぞ被遊おんたちかへ、私の焦れ

居りまゐらせ候やうに、多くの人にも御慕れおんしたは被遊あそばされ候御

出世の程をば、偏ひとへひとへに偏ねがいあげに願上ねがいあげまゐらせ候。世間には随分賢か

らぬ者の好き地位を得て、時めかし居り候も少からぬを見るにつ

け、何故御前様なにゆるおんまへさまには然やうの善さからぬ業わざを扱よりに扱よりりて、折角の

人に優れし御身を塵ちりあくた芥あその中に御捨て被遊あそばされさふらふ候や、残念に

残念に存上ぞんじあげまゐらせ候。

愚なる私の心得違こころえちがひさへ無御座候はば、始終しじゅう御側おんそばにも

居り候事とて、さやうの思立おもひたちも御座候節に、屹度御諫きつとおんいさ

め申候事も叶かなひ候ものを、返らぬ愚痴ながら私の浅はかより、みづからの一生を誤り候のみか、大事の御身までも世の廃すたり物に致させ候かと思ひまゐらせ候へば、何と申候私の罪の程かと、今更おんまをしわけ御申訳おんまをしわけの致しやうも無これなく之、唯おそろそら可恐しさに消えも入度いりたぞんじく存おんゆるまゐらせ候。御免し被下度、御免し被下度、御免し被下度候。

私は何故富山なにゆゑに縁付き申候や、其氣そのきには相成申候や、又何故御前様の御辞おんことばには従まをさずひ不申候や、唯今ただいまと相成候て考へ申候へば、覚くやしめて悔き夢の中のやうにて、全く一時の迷とも可まをすべく申、我身ながら訳解らず存じまゐらせ候。二つ有るものの善きを捨て、悪あしきを取り候て、好んで箇様かようの悲き身の上に相成候は、よくよく



私に定り候運と、おもひいだ思出し候ては諦め居り申候。あきら

其節御前様の御腹立一層強く、私をばおんはらだち一打に御手に懸け被ひとうち

だされさふら

下候はば、なまじひに今の苦艱は有之間敷、又さも無く候くげん

はば、いつそ御前様の手籠にてごめいづれの山奥へも御連れ被下候くだされさふら

はば、今頃は如何なる幸を得候事やらんなど、愚なる者はいつまさいはひ

でも愚に、始終愚なる事のみ考居り申候。かんがへを

嬉くも御赦おんゆるしを得、御心解けて、唯二人熱海に遊び、昔の浜

辺に昔の月を眺め、昔の哀き御物語を致し候はば、其の心の内はかなし

如何に御座候やらん思ふさへ胸轟むねとどろき、書く手も震ひ申候。今

も彼の熱海に人は参り候へども、そのやうなる楽たのしみを持ち候ものは

一人も有之まじく、其代そのかはりには又、私わたくしごと如き可憐あはれの跡を留

め候て、其の一夜を今だに歎き居り候ものも決して御座あるまじく候。

世をも身をも捨て居り候者にも、猶肌身放さず大事に致候宝

は御座候。それは御遺置おんのこしおきの三枚の御写真にて何見ても楽み候

はぬ目にも、是のみは絶えず眺め候て、少しは憂さを忘れ居りま

ゐらせ候。いつも御写真に向ひ候へば、何くれと当時の事憶出し

候中に、うつつとも無く十年前の心に返り候て、苦き胸も暫は涼

く相成申候。最も所好すきなるは御横顔の半身のに候へども、あれの

み色褪いろさめ、段々薄く相成候が、何より情無く存候へども、長から

ぬ私の宝に致し候間は仔細も有るまじく、亡なき後には棺の内に歟

めもらひ候やう、母へは其それを遺言に致候覚悟に御座候。

ある女世に比たぐひな無き錦を所持いたし候さふらふところ 処ところ、夏の熱き盛さかりと

て、差さ当あたり用無く思ひ候不覺より、人の望むままに貸与へ候後は、

いかに申せども返さず、其内に秋過ぎ、冬ふゆきた来り候て、一枚の曠は

着れぎさへ無き身貧に相成候ほどに、いよいよ先の錦の事を思ひに思

ひ候へども、今は何処いづこの人手に渡り候とも知れず、日頃それのみ

苦に病み、慨なげき暮し居り候折から、さる方にて計らず一人の美き

女に逢ひ候処、彼の錦をば華はなかに着飾り、先の持主とも知らず貧

き女の前にて散さん々ひけらかし候上に、恥まで与へ候を、彼かのをん

女なは其身あやまりめの過と諦め候て、泣く泣く無念を忍び申候事に御座候

が、其錦に深き思かの繋り候ほど、これ見よがしに着たる女こそ、

憎くも、悔くやしくも、恨うらめしくも、謂はうやう無き心の内と察せられ申候。

せんだつて おんもと  
先達而は御許にて御親類のやうに仰せられ候御婦人に御目に

掛りまゐらせ候。毎日のやうに御出で被成候て、御前様の御

世話 あそばされさふらふ おんかた よし 世話万事被遊候 御方の由に候へば、後にて御前様さぞさ

ぞ御大抵ならず御迷惑被遊候 御事と、山々御察し申上 おんさつ

候へども、一向さやうに御内合とも存ぜず、不躰に参上いた おんうちあひ

し候段は幾重にも、御詫申上まゐらせ候。 おんわびまをしあげ

尚数々申上度存候事は胸一杯にて、此胸の内には なほかずかず まをしあげたくぞんじさふらふこと

申上度事の外は何も無御座候へば、書くとも書くとも尽き まをしあげたきこと

申間敷、殊に拙き筆に候へば、よしなき事のみくだしく相 まをすまじく ことつたな

成候ていくらも、大切の事をば書洩し候が思残に御座候。 かきもち

惜き惜き此筆止めかね候へども、いつの限無く手に致し居り候事 とど

も叶<sup>かな</sup>ひ難<sup>がた</sup>く、折から四時の明<sup>あけ</sup>近<sup>ちか</sup>き油も尽き候て、手元暗く相成候ままはやはや恋<sup>こひ</sup>き御名<sup>おな</sup>を認め<sup>したた</sup>候て、これまでの御<sup>おん</sup>別<sup>わか</sup>れと致し  
まゐらせ候。

唯<sup>ただいま</sup>今の此の氣分苦く、何とも難<sup>たへ</sup>堪<sup>がた</sup>き様子にては、明日は今

日よりも病重き事と存<sup>ぞん</sup>候。明後日は猶重くも相<sup>あひ</sup>成<sup>なり</sup>可<sup>まをす</sup>申、さや

うには候へども、筆取る事相<sup>あひ</sup>叶<sup>かな</sup>ひ候間は、臨終までの胸の内御

許に通じまゐらせ度<sup>たくぞん</sup>存<sup>じさふら</sup>候へば、覺<sup>おぼ</sup>束<sup>つか</sup>無くも何なりとも相<sup>あひ</sup>

認<sup>た</sup>め<sup>た</sup>可<sup>まをす</sup>申<sup>べくさふら</sup>候。

私<sup>む</sup>事<sup>なし</sup>空く相成候とも、決して余<sup>よ</sup>の病にては無<sup>これ</sup>之<sup>なく</sup>、御前<sup>おんまへ</sup>様<sup>さま</sup>御<sup>おん</sup>

事<sup>と</sup>を思<sup>おも</sup>死<sup>ひ</sup>に死<sup>し</sup>候<sup>に</sup>もの<sup>さふら</sup>と、何卒<sup>なにとぞ</sup>々々御<sup>おん</sup>慇<sup>あは</sup>み被<sup>くだ</sup>下<sup>され</sup>、

其<sup>その</sup>段<sup>だん</sup>はゆめゆめ詐<sup>いつはり</sup>にては無<sup>ご</sup>御座<sup>ござ</sup>、みづから堅く信じ居候事に御

座候。

みようにち おんまへさまごたんじようび

明日は御前様御誕生日に当り申候へば、わざと陰膳かげぜんを供

へ候て、私事も共に御祝おんいはひ可申上、嬉うれしきやうにも悲かなきやう

にも存候。猶なほくれぐれも朝夕ちようせきの御自愛御大事に、幾いく久く御機嫌ごきげん好

う明日を御迎おんむかへ被遊あそばされ、ますます御繁栄に被あ居候くらふやう、

今は世の望も、身の願も、それのみに御座候。

まづはあらあらかしこ。

五月二十五日

おろかなる女より

こひし  
恋き恋き

生いき別わかの御方様おんかたさま

まゐる

第二章

隣に養へる薔薇ばらの香かの烈はげく薰くんじて、颯さと座に入る風の、この読よ  
 みつく  
 尽されし長き文ふみの上に落つると見れば、紙は冉せん々せんと舞延びて  
 貫一の身を縈めぐり、猶なほも跳をらんとするを、彼は徐しづかに敷据かゑて、その  
 膝ひざに慵ものうげなる面杖つらづゑ拄つきたり。憎き女の文なんど見るも穢けがしと、  
 前さきには皆焚棄やきすてたりし貫一の、如何いかにしてこたびばかりは終つひに打う  
 ちひら  
 拆ちきけん、彼はその手にせし始に、又は読去りし後に、自らそ

の故ゆゑを讓せめて、自ら知らざるを愧はづるなりき。

彼はやがて屈かがめし身を起ししが、又直ただちに重きに堪たへざらんや  
うの頭かしらを支へて、机に倚よれり。

緑濃こまやかに生おひしげ茂れる庭の木々の軽ほのか々なる燥いきれ氣と、近あたりき辺に有り

と有る花の薰かをりとを打雜うちまぜたる夏の初の大氣は、太はなはだ慢ゆるく動きて、

その間に旁午ぼうごする玄鳥つばくらの声朗ほがらかに、幾いくたび度か返しては遂つひに往きけ

る跡の垣穂かきほの、さらぬだに燃ゆるばかりなる満開ざくろの石榴ざくろに四時過

の西日おびただしの夥く輝けるを、彼は煩わづらはしと目を移して更に梧桐ごとうの涼すずしき広

葉を眺めたり。

文の主ぬしはかかれと祈るばかりに、命を捧げて神かみほとけ 仏をも驚か

ししと書けるにあらずや。貫一は又、自ら何の故ゆゑとも知らで、独ひと



りこれのみ披くべくもあらぬ者を披き見たるにあらずや。彼を絡  
 へる文は猶解けで、巖に浪の瀉ぐが如く懸れり。

そのままに専と思入るのみなりし貫一も、漸く悩く覚えて身動  
 ぐとともに、この文殻の埒無き様を見て、やや慌てたりげに左  
 肩より垂れたるを取りて二つに引裂きつ。さてその一片を  
 手繰らんと為るに、長きこと帯の如し。好き程に裂きては累ね、

累ぬれば、皆積みて一冊にも成りぬべし。

かかる間も彼は自と思に沈みて、その動す手も怠く、裂きては  
 一々読むかとも目を凝しつつ。やや有りて裂了りし後は、あだ  
 かも劇き力作に労れたらんやうに、弱々と身を支へて、長き頂  
 を垂れたり。

されど<sup>ひさし</sup>久きに勝<sup>た</sup>へずやありけん、卒<sup>にはか</sup>に起たんとして、かの文殼  
 の委<sup>お</sup>きたるを取上げ、庭の日陰に歩<sup>あゆみ</sup>出でて、一步に<sup>ひと</sup>一たび裂き、  
 二歩に二たび裂き、木間に入りては裂き、花壇を繞<sup>めぐ</sup>りては裂き、  
 留りては裂き、行きては裂き、裂きて裂きて寸<sup>すん</sup>々に作<sup>な</sup>しけるを、  
 又引振<sup>ひきねぢ</sup>りては歩み、歩みては引振<sup>ひきねぢ</sup>りしが、はや行くも苦<sup>くる</sup>く、後<sup>う</sup>  
 しろさま<sup>しろうさま</sup>とあ<sup>とあ</sup>もち<sup>もち</sup>様に唯有る冬青の樹に寄添へり。

折から縁に<sup>いできた</sup>出来る若き女は、結立<sup>ゆひたて</sup>の円<sup>まる</sup>髻涼<sup>わけ</sup>しげに、襷<sup>た</sup>  
 すきがけ<sup>すきがけ</sup>掛<sup>か</sup>の惜くも見ゆる真白<sup>ぬれて</sup>の濡手を弾きつつ、座敷を覗<sup>のぞ</sup>き、庭を  
 窺<sup>うかが</sup>ひ、人見付けたる会釈<sup>あひみ</sup>の笑をつと浮べて、

「旦那様<sup>だんな</sup>、お風呂が沸きましたが」

この姿好く、心<sup>こころ</sup>信<sup>まめ</sup>かなるお静こそ、僅<sup>わづか</sup>にも貫一がこの頃を

慰むる一の唯一の者なりけれ。

(二)の二

浴すれば、下立ちて垢を流し、出づるを待ちて浴衣を着せ、鏡を据るまで、お静は等閑ならず手一つに扱ひて、数ならぬ女業の効無くも、身に称はん程は貫一が為にと、明暮を唯それのみに委ぬるなり。されども、彼は別に奥の一間に己の助くべき狭山あるをも忘るべからず。そは命にも、換ふる人なり。又されども、彼と我との命に換ふる大恩をこの主にも負へるなり。如此く孰れ疎ならぬ主と夫とを同時に有てる忙しさは、盆と正月

との併あはせ来にけんやうなるべきをも、彼はなほ未いまだ覚めやらぬ夢の中うちにて、その夢心地には、如何いかなる事も難かたしと為るに足らずと思へるならん。寔まことに彼はさも思へらんやうに勇いさみ、喜び、誇り、樂める色あり。彼の面は為に謂いふばかり無く輝ける程に、常にも愈まして妖艷あでやかに見えぬ。

暫しばし浴後ゆあがりを涼みある貫一の側に、お静は習そよそよ々と団扇うちはの風を送りゐたりしが、縁柱えんばしらに靠もたれて、物をも言はず勞つかれたる彼の氣色を左瞻右視とみかうみて、

「貴方あなた、大変にお顔色がお悪いぢや御座いませんか」

貫一はこの言ことばに力をも得たらんやうに、萎なえ顔くづれたる身を始ゆすて揺りつ。

「さうかね」

「あら、さうかねぢや御座いませんよ、どうあそばしたのです」

「別にどうも為はせんけれど、何だかかう気が閉ぢて、惺然はつきりせ

んねえ」

「惺然はつきりあそばせよ。麦酒ビールでも召上りませんか、ねえ、さうなさ

いまし」

「麦酒かい、余り飲みたくもないね」

「貴方そんな事を有おつしや仰らずに、まあ召上つて御覧なさいまし。

折角わたくしひや私が冷して置きましたのですから」

「それは狭山君が帰つて来て飲むのだらう」

「何で御座いますつて」

「いや、常談ぢやない、さうなのだらう」

「狭山は、貴方、麦酒ビールなんぞをいただける今の身分ぢや御座いませんです」

「そんなに堅くせ為んでも可いさ、内の人ぢやないか。もつと氣樂に居てくれなくては困る」

お静は些ちよと涙なみだ含みみし目を拭ぬぐひて、

「この上の氣樂が有つて耐たまるものぢや御座いません」

「けれども有あるもの物だから、所好すきなら飲んでもらほう。お前さんも克いくのだらう」

「はあ、私もお相手を致しますから、一いっぱい盃召上りましょ。氷を取りに遣りまして——夏蜜柑なつみかんでも剥むきませう——林檎りんごも御座い

ますよ」

「お前さん飲まんか」

「私も戴きますとも」

「いや、お前さんひとり独で」

「貴方の前で私が独で戴くので御座いますか。さうして貴方は？」

「私は飲まん」

「ぢや見てゐらつしやるのですか。不いや好ですよ、馬鹿々々しい！

まあ何でも可いから、ともかくも一盃召上ると成さいましよ、

ね。ただいまぢき唯今直に持つて参りますから、其そこ処にゐらつしやいまし」

気輕に走り行きしが、程無く老婢ろうひと共に齎もたらせる品々を、見好げ

に献立して彼の前に陳ならぶれば、さすがに他の老婆子ろうばしが寂さびしき給仕に

義務的吃飯きつぱんを強しひらるるの比にもあらず、やや難捨すてがたき心地もして、コップを取とり挙げあぐれば、お静は慣れし手元に噴溢ふきこぼるるばかり酌して、

「さあ、呷ぐうとそれを召上れ」

貫一はその半なかばを尽して、先づ息いきへり。林檎を剥むきあるお静は、

手早く二片ふたひらばかり剥そぎて、

「はい、お肴さかなを」

「まあ、一盃上げやう」

「まあ、貴方——いいえ、可けませんよ。些ちつとお顔に出るまで二

三盃続けて召上れよ。さうすると幾らかお氣が霽はれますから」

「そんなに飲んだら倒れて了ふ」



「お倒れなすたつて宜よろいぢや御座いませんか。本当に今日は不い好やな御顔色でゐらつしやるから、それがかう消えて了ふやうに、奮発して召上りましよ」

彼は覚えうすわらず 薄わら笑ひして、

「薬だつてさうは利きかんさ」

「どうあそばしたので御座います。何処どこぞ御体がお悪いのなら、又無理に召上るのは可う御座いませんから」

「体は始終悪いのだから、今更驚きも為んが……ぢや、もう一盃飲のまうか」

「へい、お酌。ああ、余あんりお見事ぢや御座いませんか」

「見事でも可かんのかい」

「いいえ、お見事は結構なのですけれど、余り又——頂戴……あ  
あ恐入ります」

「いや、考へて見ると、人間と云ふものは不思議な者だ。今まで  
みずしらず  
不見不知の、実に何の縁も無いお前さん方が、かうして内に来て、  
狭山君はああして実体じつていの人だし、お前さんは優く世話をしてく  
れる、私は決して他人のやうな心持は為せんね。それは如何いかなる事  
情が有つてかう成つたにも為よ、那裏あそこで逢あはなければ、何処どこの誰  
だかお互に分らずに了つた者が、急に一処に成つて、貴方がどう  
だとか、私わたくしがかうだとか、……や、不思議だ！ どうか、まあ渝かは  
らず一生かうしてお附合つきあひを為たいと思ふ。けれども私は高利貸  
だ。世間から鬼じやか蛇じゃのやうに謂いはれて、この上も無く擯ひん斥せきされて

ある高利貸だ。お前さん方もその高利貸の世話に成つてゐられるのは、余り榮みえでも無く、さぞ心苦く思つてゐられるだらう、と私は察してゐる。のみならず、人の生血しほを搾つてまでも、非道な貨かねを殖こしらへるのが家業の高利貸が、縁も所因ゆかりも無い者に、設たとひ幾らでも、それほど大事の金をおいそれと出して、又体まで引取つて世話を為ると云ふには、何か可おそろし恐い下心でもあつて、それもやつぱり慾徳ずく渾成で恩を被きせるのだらうと、内心ぢやどんなにも無氣味に思つてゐられる事だらう、とそれも私は察してゐる。

さあ、コップを空あけて、返して下さい」

「召上りますの？」

「飲む」

酒氣は稍彼の面に上れり。

「お静さんはどう思ふね」

「私共は固より命の無いところを、貴方のお蔭ばかりで助つてを

りますので御座いますから、私共の体は貴方の物も同然、御用に立ちます事なら、どんなにでも遊してお使ひ下さいまし。狭山も

そんなに申してをります」

「忝ない。然し、私は天引三割の三月縛と云ふ躍利を貸して、

暴い稼を為てゐるのだから、何も人に恩などを被せて、それを種

に錢儲を為るやうな、廻り迂い事を為る必要は、まあ無いの

だ。だから、どうぞ決してそんな懸念は為て下さるな。又私の了

簡では、元々些の酔興で二人の世話を為るのだから、究竟そちら

の身さへ立つたら、それで私の念は届いたので、その念が届いたら、もう剩つり銭を貰もらはうとは思はんだ。と言つたらば、情無い事には、私の家業が家業だから、鬼が念仏でも言ふやうに、お前さん方は愈いよいよ怪く思ふかも知れん——いや、きつとさう思つてゐられるには違無い。残念なものだ！」

彼は長ちようう吁して、

「それも悪あく木の蔭に居るからだ！」

「貴方、決して私共けがそんな事を夢にだつて思ひは致しません。

けれども、そんなにな有おつしや仰いますなら、何か私共の致しました事

がお氣に障さはりましたので御座いませう。かう云ふ何なんも存じません

粗才者ぞんざいものの事で御座いますから」

「いいや、……」

「いいえ、私は始終言はれてをります狭山に済みませんですから、どうぞ行届きませんところは」

「いいや、さう云ふ意味で言つたのではない。今のは私の愚痴だから、さう気に懸けてくれては甚だ困る」  
はなは

「ついにそんな事を有<sup>おつしや</sup>仰つた事の無い貴方が、今日に限つて今のやうに有仰ると、日頃私共に御不足が<sup>あん</sup>お有なすつて」

「いや、悪かつた、私が悪かつた。なかなか不足どころか、お前さんが陰陽<sup>かげひなたな</sup>無く実に善く氣を着けて、親身のやうに世話してくれるのを、私は何より嬉しく思つてゐる。往日<sup>いつか</sup>話した通り、私は身寄も友達も無いと謂つて可いくらゐの独法師<sup>ひとりぼっち</sup>の体だから、氣

分が悪くても、誰一人薬を飲めと言つてくれる者は無し、何かに就けてそれは心細いのだ。さう云ふ私に、鬱いであるから酒でも飲めと、無理にも勧めてくれるその深切は、枯木に花が咲くやうな心持が、いえ、嘘でも何でも無い。さあ、嘘でない信に一献差すから、その積で受けてもらはう」

「はあ、是非戴かして下さいまし」

「ああ、もうこれには無い」

「無ければ嘘なので御座いませう」

「未だ半打の上有るから、あれを皆注いで了はう」

「可うございますね」

貫一が老婢を喚ぶ時、お静は逸早く起ち行けり。

(二) の三

わとう  
話頭は酒を更あらたむるとともに転じて、

「それはまあ考へて見れば、随分主人の面つらでも、友達ともだちの面でも、踏ふみ躪にじつて、取る事に於ては見界みさかひなしの高利貸が、如何いかに虫の

居所が善かつたからと云つて、人の難儀——には附込つまうとも——

——それを見かねる風ぢやないのが、何であんな格がらにも無い氣前を見せたのかと、これは不審を立てられるのが当あたりまへ然だ。

けれども、ねえ、いづれその訳が解る日も有らうし、又私といふ者が、どう云ふ人間であるかと云ふ事も、今に必ず解らうと思



ふ。それが解りさへしたら、この上人の十人や二十人、私の有金の有たけは、助けやうが、恵まうが、すこし少も怪む事は無いのだ。かう云ふと何か酷く偉がるやうで、ひど聞辛いか知らんけれど、ききづらこころやすだては心易立に、全く奥底の無いところをお話するのだ。

いやさう考込まれては困る。陰氣に成つて可かんから、話はもう罷にやめ為う。さうしてもつと飲み給へ、さあ」

「いいえ、どうぞお話をお聞せなすつて下さいまし」

さかな「肴に成るやうな話なら可いがね」

「始終狭山ともさう申してをるので御座いますけれど、旦那様は御病身と云ふ程でも無いやうにお身受申しますのに、いつもかうごげんき御元氣が無くて、むづかしお陰いお顔かほつき面ばかりなすつてゐらつしやるの

は、どう云ふものかしらんと、陰ながら御心配申してをるので御座いますか」

「これでお前さん方が来てくれて、内が賑かに成つただけ、私も旧から見ると余程元氣には成つたのだ」

「でもそれより御元氣がお有なさらなかつたら、まあどんなでせう」

「死んでゐるやうな者さ」

「どうあそばしたので御座いますね」

「やはり病氣さ」

「どう云ふ御病氣なので」

「鬱ぐふさのが病氣で困るよ」

「どう為てさうお鬱ぎあそばすので御座います」

貫一は自ら嘲りて苦しげに晒へり。  
あざけ

「究竟病氣の所為なのだね」  
つまり

「ですからどう云ふ御病氣なですよ」

「どうも鬱ぐのだ」

「解らないぢや御座いませんか！ 鬱ぐのが病氣だと有仰るか  
おつしや

ら、どう為てお鬱ぎ遊すのですと申せば、病氣で鬱ぐのだつて、  
あそば

それぢや何処まで行つたつて、同じ事ぢや御座いませんか」  
どこ

「うむ、さうだ」

「うむ、さうだぢやありません、緊りなさいましよ」  
しつか

「ああ、もう酔つて来た」

「あれ、未だお酔ひに成つては可けません。お横に成ると御寐おやすみに成るから、お起きなすつてゐらつしやいまし。さあ、貴方」

お静は寄りて、彼の肘杖ひぢづゑに横はれる背後うしろより扶起たすけおこせば、  
為せん無げに柱に倚りて、女の方を見返りつつ、

「ここを富山唯繼ただつぐに見せて遣りたい！」

「ああ、舍よして下さいまし！ 名を聞いても慄然ぞつとするのですか  
ら」

「名を聞いても慄然ぞつとする？ さう、大きにさうだ。けれど、又考へて見れば、あれに罪が有る訳でも無いのだから、さして憎むにも当らんのだ」

「ええ、些ほんの太好いけすかないばかりです！」

「それぢや余り差はんぢやないか」

「あんな奴は那箇だつて可いんでさ。第一活きてゐるのが間違つてゐる位のもんです。」

本当に世間には不<sup>い</sup>好<sup>や</sup>な奴ばかり多いのですけれど、貴方、どう云ふ者でせう。三千何百万とか、四千万とか、何でも太<sup>たい</sup>した人<sup>ひと</sup>数<sup>ず</sup>が居るのぢや御座いせんか、それならもう少し氣の利<sup>き</sup>いた、肌<sup>はだ</sup>合<sup>あひ</sup>の好<sup>う</sup>い、嬉<sup>うれ</sup>しい人に撞<sup>で</sup>見<sup>つく</sup>しさうなものだと思ひますのに、一向お目に懸りませんが、ねえ」

「さう、さう、さう！」

「さうして富山みたやうなあんな奴がまあ紛<sup>う</sup>々<sup>じやう</sup>然<sup>うじや</sup>と居て、番<sup>ばん</sup>狂<sup>は</sup>を為<sup>ある</sup>て行くのですから、それですから、一日だつて世の中が

無事な日と云つちや有りは致しません。どうしたらあんなにも氣障ざいに、太好いけすかなく、厭味いやみたらしく生れ付くのでせう」

「おうおう、富山唯繼散々だ」

「ああ。もうあんな奴の話をするのは馬鹿々々しいから、貴方、  
舎よしませうよ」

「それぢやかう云ふ話が有る」

「はあ」

「一体男と女とでは、だね、那箇どっちが情合が深い者だらうか」

「あら、何為なぜで御座います」

「まあ、何為なぜでも、お前さんはどう思ふ」

「それは、貴方、女の方がどんなに情が」

「深いと云ふのかね」

「はあ」

「信あてにならんね」

「へえ、信にならない証拠でも御座いますか」

「成程、お前さんは別かも知れんけれど」

「可よう御座いますよ！」

「いいえ、世間の女はさうでないやうだ。それと云ふが、女と云ふ者は、慮かんがへが浅いからして、どうしても氣が移り易やすい、これから心が動く——不実を不実とも思はんやうな了簡も出るのだ」

「それはもう女は浅あさはか摺すりな者に極きまつてゐますけれど、氣が移るの何のと云ふのは、やつぱり本当に惚ほれてゐないからです。心底か

ら惚れてゐたら、些<sup>ちつと</sup>も氣の移るところは無いぢや御座いませんか。善く女の一念と云ふ事を申しますけれど、思<sup>おもひつ</sup>窮めますと、男よりは女の方が余計夢中に成つて了ひますとも」

「大きにさう云ふ事は有る。然し、本当に惚れんのは、どうだらう、女が非<sup>わる</sup>いのか、それとも男の方が非<sup>わる</sup>いのか」

「大變難<sup>むづかし</sup>く成りましたのね。さうですね、それは那箇<sup>どつち</sup>かが非<sup>わる</sup>い事も有りませう。又女の性分にも由りますけれど、一概に女と云つたつて、一つは齡<sup>とし</sup>に在るので御座いますね」

「はあ、齡に在ると云ふと？」

「私<sup>わたくしども</sup>共<sup>しやうばい</sup>の商<sup>しやうばい</sup>買<sup>しやうばい</sup>の者は善くさう申しますが、女の惚れるに<sup>みぼれ</sup>は、見惚<sup>きぼれ</sup>に、氣惚<sup>きぼれ</sup>に、底惚<sup>そこぼれ</sup>と、かう三様<sup>みとほり</sup>有つて、見惚と云ふ



と、些ちよと見たところで惚お込んだ了いふので、これは十五六の赤襟あかえり盛に在る事で、唯奇麗事でありさへすれば可いのですから、全まるで酸いも甘いもあつた者ぢやないのです。それから、十七八から二十たちそこそこのところは、少し解つて来て、生意氣に成りますから、顔の好いのや、扮装なりおつの奇なのなんぞには余あんまり迷ひません。氣惚と云つて、様子が好いとか、氣合が嬉しいとか、何とか、そんなところに目を着けるので御座いますね。ですけれど、未だま未だやつぱり浮氣なので、この人も好いが、又あの人も万更でなかつたりなんぞして、究竟つまりお肚なかの中から惚れると云ふのぢやないのです。何でも二十三四からに成らなくては、心底から惚れると云ふ事は無いさうで。それからが本当の味が出るのだとか申しますが、そん

なものかも知れませんよ。この齡に成れば、曲りなりにも自分の  
了簡も据<sup>すわ</sup>り、世の中の事も解つてゐると云つたやうな勘定ですか  
ら、いくら洒落<sup>しやれつき</sup>氣の奴でも、さうさう上調<sup>うはちようし</sup>子に遣つちやゐら  
れるものぢやありません。其處<sup>そこ</sup>は何と無く深厚<sup>しんみり</sup>として来るのが  
人情ですわ。かうなれば、貴方、十人が九人までは滅多に氣が移  
るの、心が変わると云ふやうな事は有りは致しません。あの『赤  
い切掛<sup>きりか</sup>け島田の中<sup>うち</sup>は』と云ふ唄<sup>うた</sup>の文句の通、惚れた、好いたと云  
つても、若い内はどうしたつて心<sup>しん</sup>が一人前<sup>いちにんまへ</sup>に成つてゐないので  
すから、やつぱりそれだけで、為方の無いものです。と言つて、  
お婆さんに成つてから、やいのやいの言れた日には、殿方は御難  
ですわね」

お静は一笑してコップを挙げぬ。貫一は連に<sup>しきりうなづ</sup>領きて、

「誠に面白かつた。見惚<sup>みぼれ</sup>に気惚に底惚か。齡<sup>とし</sup>に在ると云ふのは、

これは大きにさうだ。齡に在る！ 確に在るやうだ！」

「大相感心なすつてゐらつしやるぢや御座いませんか」

「大きに感心した」

「ぢやきつと胸に中<sup>あた</sup>る事がお有<sup>あ</sup>なさるので御座いますね」

「ははははははは。何<sup>なぜ</sup>為」

「でも感心あそばし方<sup>ただ</sup>が凡で御座いませんもの」

「ははははははは。愈<sup>いよ</sup>よ面白い」

「あら、さうなので御座いますか」

「ははははははは。さうなのとはどうなの？」



惜くもなき命は有り候ものにて、はや其より七日に相成候さくらふ

へども、猶日毎に心地苦く相成候やうに覚え候のみにて、今以つなほひごと

て此世を去らず候へば、未練の程の御つもらせも然ぞかしと、口このよ

惜くも御恥く存上参らせ候。御前様には追々暑にちをし おんはづかし ぞんじあげまる おんまへさま おひおひめつさ

向ひ候へば、いつも夏まけにて御悩み被成候事とて、此頃なされさくらふこと

は如何に御暮し被遊候やと、一入御案じ申上参いか おんくら あそばされさくらふ ひとしほ おんあん まをしあげまる

らせ候。

わたくしこと

私事人々の手前も有之候故、儀ばかりに医者にも掛これありさくらふゆゑ しるし

り候へども、もとより薬などは飲みも致さず、皆打捨て申みなうちす まをしさくら

候。御存じの此疾は決して書物の中には載せて在るまじくふ このわづらひ

存候を、医者は訳無くヒステリイと申候。是もヒステリイと申候

外は無きかは不存申候へども、自分には広き世間に比たぐひな無き病の

外の病とも思居り候ものを、さやうに有触れたる名を附けられ候

は、身に取りて誠に誠に無念に御座候。

昼の中うちは頭つむり重おもく、胸閉ぢ、氣疲劇きづかれはげしく、何を致候も大儀たいぎ

にて、別わけて人に会ひ候うるさがく、誰たれにも一切口を利きき不申、

唯ただひとり引籠り居り候て、空むなしく時の経たち候さふら中に、此この命いのちの

絶えず些ちとづつ弱り候て、最期さいごに近く相成候が自から知れ候やうに

も覚おぼえ申候まをしさふらふ。

夜よに入り候ては又氣分變り、胸の内俄にはかに沍さえ々ええと相成あひなり、なかな

か眠ねり居り候空これは無なく之、かかる折に人は如何やうの事を考へ候も

のと思召被成候や、又其人私に候はば何と可これあるべくさふらふ有之候や、

今更申上候迄にも御座候はねば、何卒宜く御判じ被遊度、  
 夜一夜其事のみ思続け候て、毎夜寝もせず明しまるらせ候。

さりながら、何程思続け候とても、水を覓めて逾よ焰に燃かれ

候に等き苦艱の募り候のみにて、いつ此責を免るるともなく存

へ候は、孱弱き女の身には余に余に難忍き事に御座候。猶

々此のやうの苦き思を致候て、惜むに足らぬ命の早く形

付き不申るやうにも候はば、いつそ自害致候てなりと、潔く相果

て候が、に愈と存付き候へば、万一の場合には、然やうの事

にも可致と、覚悟極めまゐらせ候。

さまざまに諦め申候へども、此の一事は逆も思絶ち難く候へば、

私相果て候迄には是非々々一度、如何に致候ても推して御目

もじ相願ひ可まをすべく申と、此頃は唯其事ただそのことのみ一心に考かんがへ居り申まをしさをふらふ候。昔より信仰厚き人達は、現うつに神かみ仏ほとけの御姿おんすがたをもをが拝み候やうに申候へば、私とても此の一念の力ならば、決して慚かなはぬ願にも無御座と存ござなく ぞんじまゐ参らせ候。

(三) の二

さくじつ 昨日は見舞がてらに本宅おんははさまゐの御母様参られ候。是これは一つは唯継ただつぐ事こと近頃ふきげん不機嫌にて、とかく内を外に遊びあるき居り候さくらふところ処、両三日前の新聞に善からぬ噂うはさ出いで候より、心配あまりの余様子見に参られ候次第にて、其事に就き私こんこんへ懇々の意見にて、唯継ほうとうの放



蕩いたしきふらふ致候は、

畢ひつきよううち竟内のおもしろからぬ故と、

日頃の事一

々誰が告げ候にや、

可恥はづかしき迄に皆知れ候て、

此後は何分心を用

ゐくれ候やうにと

被まをされきふらふ申候。

私事其節一思わたくしことそのせつひとおもひに不法の

事

事を申掛け、

愛想あいそを尽され候やうに致し、

離縁の沙汰さたにも

相成あひなり

さふら

候はば、誠に此上無き幸と存付き候へども、

此このしうとめ姑まをしと申

候

さふらふひと

人は、評判の心掛善き御方にて、殊に私をば娘のやうに思

ひ、日頃ひごろの厚き情なさけは海山たとにも喩へ難きほどに候へば、

なかなか辞ことば

を返し候段にては無之、

心弱しとは思ひながら、涙こぼの零れ候ばか

りにて、

無よんどころなく抛ふつつか身の不束わをも詫まをしきふらふび申

候次第に御座候。

此このいのち命おんまへさま

御前様に捨て候ものに無御座候はば、

外には此人

の為に捨て

可まをすべくぞんじきふらふ申と存候。

此の御方を母とし、

御前様を夫と

致候て暮し候事も相叶かなひ候はば、私は土間に寐いね、蓆むしろを絡まとさひ候て

も、其そのたのしみ樂さは然さぞやと、常に及こひしばぬ事を恋こひく思居りまゐらせ候。

私事相果て候はば、他人にて真まことに悲みくれ候は、此世に此おんかの御

方たひとり一人に御座あるべく、第一さ然やうの人を欺なき、然やうの情なさけを

余所よそに致いたしき候私はは、如何いかなる罰を受け候事かと、悲く悲く存

候に、はや浅ましき死しにやう様は知れたる事に候へば、外に私の願の

障さはりとも相成あひなり不申まをさずやと、始終心に懸り居り申まをしき候。

思へば、人の申候ほど死ぬる事は可おそろし恐きものに無御座候。私

は今が今このまま此儘に息引取り候はば、何よりの仕合しあはせと存ぞんじまゐ参ら

せ候。唯ただあと後に遺のこり候親達の歎なげきを思ひ、又我身生れ効がひも無く此世

の縁薄く、かやうに今在る形ちぎも直に消えて、此筆このふで、此硯このすずり、

此指環、このあかり 此燈も此居室も、此夜も此夏も、此の蚊の声も、  
あたり 四囲の者は皆永く残り候に、私独り亡きものに相成候て、人には  
 草花の枯れたるほどにも思はれ候はぬ儂はかなさなどを考へ候へば、返  
 す返す情無く相成候て、心ならぬ未練も出いで申候。



# 青空文庫情報

底本：「金色夜叉」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年11月10日発行

1998（平成10）年1月15日第39刷

初出：「読売新聞」

1897（明治30）年1月1日～1902（明治35）年5月11日

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、「市《いち》ヶー谷《や》」「児《ちご》ヶー淵《ふち

《「竜《りゆう》ケ一鼻《はな》」は小振りに、「一ケ年分」は大振りに、つくっています。

2000年2月23日公開

2015年10月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 金色夜叉

尾崎紅葉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>